東京藝術大学
総合芸術アーカイブセンター
報告書[2011-2015]

FINAL REPORT:
COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER,
TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

東京藝術大学　総合芸術アーカイブセンター

総合芸術アーカイブセンター
プロジェクト最終報告書

2011.05–2016.03

目次 – Table of Contents

総合芸術アーカイブセンターについて 1

大学史文書データ研究プロジェクト 11

平成 23 年度[2011 年度] 13
現状調査と資料整理 13
寄贈資料の受入 14
資料展示 15
その他の活動 17

平成 24 年度[2012 年度] 18
教育資料編纂室と大学史史料室による共同研究（科学研究費補助金による） 21
調査・閲覧への対応における公開／非公開ルール 24
文書資料のデジタル化状況 25
環境整備 26
学内資料の受入と管理 27
寄贈資料の受入 28
アーカイブズカレッジ参加報告 29
研究・調査等 30
アーカイブアシスタント活動報告 32
別紙資料 1-1 大学史史料室・教育資料編纂室資料統合リスト[試作] 35
別紙資料 1-2 東京音楽学校時代のピアノ課題調査 41

平成 25-27 年度[2013-2015 年度] 42
期間全体の概要 42
大学アーカイブズ構築に向けた組織整備の研究 44
他大学アーカイブズ機関の訪問調査
研究会・学会等による他大学アーカイブズ機関との情報共有
内閣府大臣官房公文書管理課および国立公文書館総務課からの視察
大学史史料室における国立公文書館等の指定について再考 47
公文書類の取扱について総務課と共通認識の構築 47
スタッフのアーカイブズ研修等 48
美術学部教育資料編纂室の報告 48
音楽学部大学史史料室の報告 51
大学史史料室のアーカイブズ構築に関する実践報告 54
教育研究助手より　平成 25 年度より３年間の業務を終えるにあたって 58
アーカイブアシスタントより 62
寄贈資料整理に関する報告 66
大久保利恭氏旧蔵史料整理作業報告
上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告
まとめにかえて（結果と提言） 72

3D デジタルデータ研究プロジェクト 77
平成 23 年度[2011 年度] 79
3 次元計測によるデジタル化 79
3 次元計測 3D データ検証報告　松田権六作「草花鳥獣文小手箱」 80
その他の活動 84
平成 24 年度[2012 年度] 87
立体資料のデジタル化活動報告 87
３D 計測データを用いた３D カラープリンタ出力検証 91
美術学部資料調査 93
VR 研究開発 96
発表・映像制作・執筆活動等その他 97
3D ワークショップ参加報告(ドイツ) 98
平面資料のデジタル化活動報告 99
敦煌研究院・東京芸術大学シンポジウム 105
平成 25 年度-27 年度[2013-2015 年度] 106
活動報告 106
東京都庭園美術館:受託研究 107
東京富士美術館:受託研究 108
総括 109

音響・映像データ研究プロジェクト 111

平成 23 年度[2011 年度] 112
アーカイブに向けた現状調査 112
学内配信のための演奏会情報サイトの構築 113
学内・学外発信へ向けての知的財産権の整備 114
小泉資料室報告 118

平成 24 年度[2012 年度] 119
音響映像資料の調査 119
公演収録データのデジタルアーカイブ 121
24 年度までにデジタルデータを作成した公演一覧 123
デジタルデータ作成に伴う問題点と改善点 124
アーカイブデータにおける著作権と著作隣接権 125
著作権と著作隣接権処理に伴う問題点と改善点 130
配信のためのウェブサイト構築 130
アーカイブアシスタント活動報告 131
小泉文夫記念資料室活動報告 134
その他の活動 136

平成 25 年度-27 年度[2013-2015 年度] 137
アーカイブに向けた音響映像資料の現状調査 137
公演収録データのデジタルアーカイブ 138
オープンテープ等からデジタルデータ化した一覧
デジタルデータを保存した公演数一覧
オープンテープ等からデジタルデータ化した一覧
学外公開している公演数一覧
CD・DVD およびデジタルデータ等の提供
アーカイブデータの活用に関わる権利処理 141
著作権、著作隣接権および肖像権、レンタル譜における契約、権利処理手順のまとめ
ウェブサイト公開についての取り組み 143
ウェブサイトの利用者について、SNS の運用、学内上映会
研究発表、サミット参加、連携事例など 145
公演収録音源・映像の活用における問題点と今後の課題 146
アーカイブおよび配信等の活用にかかる諸費用についての問題
データ活用に伴う権利処理の問題
法整備とアーカイブについての問題
学内でのデータ共有
海外からのアクセスに対応
小泉文夫記念資料室活動報告 147

付録 1:アーカイブした公演等の一覧 150
付録 2: 東京藝術大学音楽学部におけ演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項 178

情報発信・システム研究プロジェクト 181

平成 23 年度[2011 年度] 182
知的財産活動報告 : 生貝直人 184
文化財関係調査活動報告 : 河内晋平 189

平成 24 年度[2012 年度] 192
活動概要 193
アーカイブアシスタント活動報告 196
芸術資料調査とデジタル化、油画技法・材料研究室資料調査
美術用語の整理 201
工芸用語整理研究、日本画用語事典第三版の RDF データ化
GEIDAI Music Archive サイトの構築 204
知的財産関連活動報告 : 生貝直人 209
調査報告: オープンデータとネットワークによる情報共有と活用 : 嘉村哲郎 215
オープンデータとは、Linked Open Data の解説、Liked Open Data 利用例

平成 25 年度[2013 年度] 237
文化財管理における美術品用語辞典の構築(基盤研究(C)) : 河内晋平 239
彫刻科の資料の発掘調査、講演記録リストの更新（映像、音声）とデジタル化 242
美術解剖学研究室所蔵の解剖図のデジタル化 243
彫刻科石膏取り映像記録・編集 244

平成 26 年度[2014 年度] 245
ウェブサイトリニューアル 247
コンテンツの作成と公開 248
美術解剖図、講義映像
卒業・修了作品集の「材質・技法」用語整理 : 嘉村哲郎 小林美貴 253
平成 26 年度の計画と実績 261

平成 27 年度[2015 年度] 262
報告:現代アートの作品情報の記述用語に関する研究―「材質・技法」用語集の作成― : 小林美貴 263
美術品 3D データの利用に関するガイドライン(案) : 生貝直人 267
1.本ガイドラインの目的と構成、2.関係する法的権利の性質
3.取り決められるべき事項の要素、4.関係者で交わされるべき書面の例
イベント情報システムの構築と運用 271
Music DB(東京藝術大学演奏会データベース)の構築と運用 272
工芸用語集システム 279
アーカイブシステムの導入とリプレース 279
2011 年バージョン、入札仕様書、2015 年バージョン、2016 年バージョン
活動報告―展示・イベント 289
吉本光蔵撮影 日露戦争写真 296
藝祭 100 年の歴史展の資料収集・編纂 297
「藝祭 100 年の歴史展」年表 313
付録:デジタルデータの目録 320

はじめに

総合芸術アーカイブセンターは、本学及び関連機関が所蔵する、歴史的に重要な芸術資料（美術・音楽・映像作品や文書史料等）を、デジタル技術をもって保存し、様々な形で活用していく方法を研究するために 2011 年に設立されました。本センターで扱う資料には、文化財を含む芸術品や、本学で行われた演奏会の録音・録画データなどがあり、現在は次の４つのプロジェクトに分かれて分野を超えた連携をとり研究を進めています。

（1） 大学史文書研究
（2） ３D デジタルデータ研究
（3） 音響・映像データ研究
（4） 情報発信・システム研究

また、本学の故小泉文夫教授が世界数十カ国の現地調査で収集した諸民族の楽器・書籍・楽譜・録音録画資料を閲覧できる小泉文夫記念資料室や、本学の歴史に関わる各種史料を所蔵する大学史史料室も、本センターの一部です。

目的・目標

東京藝術大学は、その前身である東京美術学校及び東京音楽学校の時代から１２０有余年にわたり、唯一の官立芸術系高等教育機関として、近代日本のみならず、アジアにおける芸術活動の枢要な拠点を担ってきた。その活動の軌跡は、ただに日本の近代芸術史にとってのみならず、海外との双方向的な交流という観点から見れば、世界の芸術の歴史にとっても決して軽視すべからぬ重要性を持っている。また、過去の軌跡だけでなく、本学が現在日常的に生み出しつつある教育研究の成果物は、現在においては社会による検証や評価を受け、やがて未来においては歴史的研究の対象となるべき貴重な文化資源であり、これらを適切に保存・管理し、現在の教育研究に役立てつつ、次世代へ継承することは、本学に課せられた重要な社会的使命である。

本学がこれまで生み出してきた教育研究の成果や、収集・蓄積してきた資料（芸術作品・図面・教材・文書・演奏記録・映像・写真・楽器・用具その他）等の文化資源は、学内の各部署においてそれぞれ保管されてきている。今回の事業が目指すのは、それら多様な文化資源の一元的・横断的な検索・調査を可能ならしめるデータベース・システムを構築し、さらに資料の様態に応じてデジタル化による利用・公開の促進を図ることである。そして、この目標を達成するための組織面・技術面を含めたシステム構築、及び公開・外部利用へ向けた知的財産活用戦略のあり方に関する研究が、本事業の主要な部分をなす。

本事業の遂行により､本学の教育研究に役立てるだけでなく､本学活動の成果を一般社会へと還元することで、我が国のみならず世界の学術・文化の向上に資することができると考えている。さらに、本学の活動に関する情報資源を広く社会と共有することで社会一般の検証・評価を受け、本学活動のさらなる改善に役立てることが可能となろう。

平成 25 年 4 月 東京藝術大学

総合芸術アーカイブセンターについて

本プロジェクトは、これまでの本学における取組を基盤として、５年計画の実施を掲げている。以下に計画の概要を示す。

（1）学外アーカイブ機関調査

国内外における文化資源のデジタルアーカイブに関する研究開発の現況を調査する。

（2）学外機関との連携協力体制の確立

類似の課題を追求する他機関（他大学、博物館、美術館、文化財研究所等）や、先進的技術の研究開発を進める一般企業、研究機関との連携協力体制を確立し、情報交換を行うとともに、共同研究を立案・実施する。さらに、アジアにおける先進的芸術情報ネットワークの構築へ向けた基盤作りを行う。

（3）学内資料基盤調査

アーカイブすべき学内資料の所在・点数・管理様態等を調査し、これらを情報検索やデータを活用できるようにするために、資料情報のデータ化ならびにデータベース化を行う。その際に適切なメタデータ(属性項目)を用いるために関連情報の調査、メタデータスキーマの策定についても検討する。

（4）デジタル化の手法に関する研究

画像・音響・映像等、データの様態に合わせたデジタル化手法、データ規格統一のあり方について検討する。

（5）知的財産活用戦略に関する研究

社会連携センターと協力しつつ、学内の知的財産の保存・管理・利用に関する規則を整備する。さらにアーカイブ・コンテンツの公開や利用にあたって必要な知的財産権の処理方法について検討し、さまざまな類型毎に一般的なガイドラインを策定する。

（6）東京藝術大学・総合芸術データベースの構築と公開

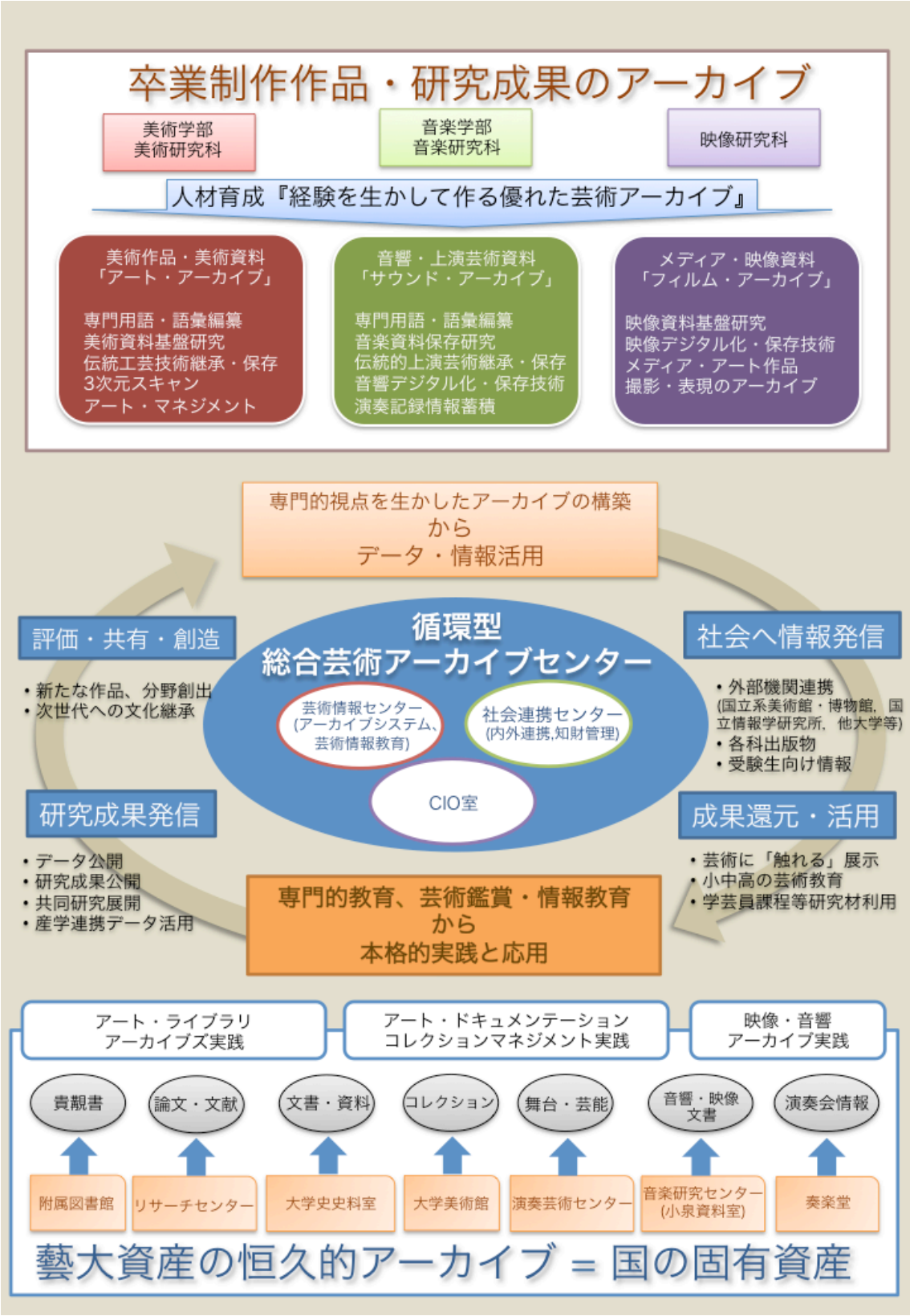
知的財産活用戦略に則って選定された文化資源のデジタル、データ化及びメタデータの適用を行い、芸術情報センターとの緊密な連携の下、それらにふさわしいデータベースの設計と公開のノウハウについて研究、実際の構築運用を行う。

（7）アーカイブ・コンテンツの教育資源としての活用研究

各部局との連携の下、アーカイブ・コンテンツを用いた、学内や一般社会に向けた教育プログラムの開発について検討する。

（8）「芸術アーキビスト」養成へ向けた教育プログラムの開発に関する研究

本学の擁するリソースを活用して、芸術に特化した専門的知識や技能とデジタル技術に関するスキルを併せ持つアーキビスト（＝「芸術アーキビスト」）の養成のための教育プログラムのあり方を検討する。



循環型情報活用を意識した総合芸術アーカイブ

1.大目標

『芸術・文化の促進』より多くの人々に芸術を触れてもらいたい。

2.どうすれば多くの人に触れてもらえるか?

情報技術を活用して芸術・文化情報を世界中に発信する

3.情報技術を活用するためには?

データとして活用出来るように整備する必要がある。

4.整備とは?

	デジタルアプローチ	アナログアプローチ
A	作品や資料自体のデータ化 (デジタル化手法、資料記述の研究)	作品・資料の把握 (どのようなものが存在し、データ化可能か)
B	付帯情報のデジタル化整備 (専門用語、人物情報等のデータ化)	作品・資料の理解 (背景文化、使用されている用語、人物等)
C	作品、資料公開と柔軟な検索可能な仕組の整備 (ウェブにおける次世代型情報発信)	メタデータの考察と構築 (芸術・文化領域の標準的存在となる藝大規格)

5.期待される成果例

A	• 立体作品の3Dデータ化と3Dプリンタによる複製品の出力 • 高精細画像、音響、映像データ • 各分野におけるデジタル化アプローチの確立
B	• 専門用語、歴史的背景の理解(シソーラスの構築) • 芸術、文化領域概念体系(オントロジの構築)
C	• ウェブにおけるデータ公開と二次的利用仕組の確立 • メタデータ公開による芸術・文化情報の横断的利用 • 次世代型情報発信の研究による様々な関連情報の検索と表示

6.社会還元・活用例

A	• オリジナル保護のため複製品立体物を用いた"触れる展示"。 • 複製品の小中学校貸出による芸術鑑賞・芸術情報教育、ミュージアムリテラシー教育利用。 • デジタルデータの二次利用、新たな分野と作品創出への素材・材料。
B	• 専門用語の一般向け理解による芸術・文化の理解促進。 • 学芸員資格課程の新領域カリキュラム作成のための研究材料。
C	• 公開メタデータの個人写真や動画への利用。 • 藝大資料のみならず、国内のミュージアム、イベント、ギャラリー等の関連情報横断的検索 (藝大資料を起点にした芸術鑑賞ツアー等の企画(芸術・文化観光への貢献))

7.達成するためには

制作と理論における専門性の高い研究教育・活用を目指した循環型リアリティ・アーカイブ

総合芸術アーカイブセンター目標・目的

『東京藝術大学・総合芸術アーカイブ教育プログラム』(案)

概要

【目的】
・アーカイブコンテンツの教育的資源活用(専門実技教育における教材としての利用。
・芸術アーキビスト、制作作品アーカイブ、プレゼンテーションスキルの習得を目指す。

【対象】
学部生・大学院生および一般

基礎科目

A.アート・ドキュメンテーション基礎演習
アーカイブ構築・運営の前提となる芸術資料（美術・音楽・映像）の分類・整理の基礎知識の習得（データベース、シソーラス、芸術情報検索・構造のあり方や可能性など。海外の先進的な例の学習や、実際に他機関を見学する）。

B.デジタルメディア実践論
芸術資料のデジタル化、プレゼンテーション、情報管理、発信（Web公開等）の基礎知識・実践を学ぶ。

C.デジタル情報公開と知的財産論
所蔵資料および制作作品のデジタル化とWeb公開に関わる倫理、著作権法等に関する基礎知識と具体的な処理方法について学ぶ。

応用科目

D.美術アーカイブ特殊研究(重点領域:美術)
平面・立体作品につき、高精細な画像化や３Ｄデータ採取等のデジタル技術処理と保存、公開に関する具体的な高度な技法を習得。

E.音楽アーカイブ特殊研究(重点領域:音楽)
音楽音響学・楽器学・録音技法等の基礎知識を踏まえ、サウンド・アーカイブとその公開の具体的な技法を習得。

F.映像アーカイブ特殊研究(重点領域:映像)
フィルムのデジタル化手法、デジタルデータの処理や公開に関する具体的な技法を習得。

教育プログラム(案)

平成 23 年度 プロジェクト体制

所属プロジェクト	職	氏名	現職
情報発信システム研究	副センター長	藤幡　正樹	大学院映像研究科教授（芸術情報センター長）
	教員	城　一裕	芸術情報センター助教
	芸術情報研究員	嘉村　哲郎	芸術情報研究員
	特別研究員	生貝　直人	
	教育研究助手	河内　晋平	
3D デジタルデータ研究	センター長	北郷　悟	理事（研究担当）
	副センター長	宮廻　正明	学長特命（社会連携担当）大学院美術研究科教授
	教員	横溝　廣子	大学美術館准教授
	特任助教	今井　紫緒	
	特別研究員	山田　修	美術研究科教育研究助手
	特別研究員	松村　公太	美術研究科教育研究助手
	教育研究助手	土屋　裕介	
大学史文書データ研究	副センター長	大角　欣矢	音楽研究センター長、 音楽学部教授
	教員	佐藤　道信	美術学部教授
	特任助教	橋本　久美子	音楽学部非常勤講師、学史編纂室学術研究員
	特別研究員	石田　桜子	学史編纂室
	特別研究員	伏木　香織	学史編纂室
	非常勤講師	吉田　千鶴子	美術学部非常勤講師、 教育資料編纂室
	非常勤講師	大西　純子	美術学部非常勤講師、 教育資料編纂室
映像・音響データ研究	教員	亀川　徹	音楽学部教授
	教員	岩崎　真	演奏芸術センター助教
	特任助教	山田　香	
	非常勤講師	尾高　暁子	音楽学部非常勤講師、 小泉文夫記念資料室学術研究員
	非常勤講師	松村　智郁子	音楽学部非常勤講師、 小泉文夫記念資料室学術研究員
	教育研究助手	佐野　隆	
	教育研究助手	佐竹　悦子	小泉文夫記念資料室
	教育研究助手	三枝　まり	音楽学部教育研究助手 音楽研究センター音響資料調査
	教育研究助手	彫谷　典子	音楽学部教育研究助手 音楽研究センター音響資料調査
事務局チームリーダー 事務局	事務職員	相澤 尚登	社会連携推進課長
	事務職員	佐藤　和也	社会連携推進課専門職員 （研究協力担当）
	事務職員	小林　丈則	会計課財務係長
	事務職員	清水　将次	総務課人事係長
	事務職員	大田原 章雄	附属図書館資料受入係長
	事務職員	久野 拓哉	大学美術館管理係長
	事務職員	樗木 佳織	社会連携推進課社会連携推進係

平成 23 年 5 月 1 日時点

平成 24 年度 プロジェクト体制

所属プロジェクト	職	氏名	現職
3D デジタルデータ研究	センター長	北郷　悟	理事（研究担当）、美術学部教授
3D デジタルデータ研究	副センター長	宮廻　正明	学長特命、社会連携センター長 大学院美術研究科教授
情報発信システム研究	副センター長	藤幡　正樹	芸術情報センター長 大学院映像研究科教授
大学史文書データ	副センター長	大角　欣矢	附属図書館長、音楽研究センター長 音楽学部教授
情報発信システム研究 プロジェクト	教員	藤幡　正樹	芸術情報センター長 大学院映像研究科教授
		松井　茂	芸術情報センター助教
	芸術情報研究員	嘉村　哲郎	芸術情報センター芸術情報研究員
	特別研究員	生貝　直人	
	教育研究助手	河内　晋平	
3D デジタルデータ研究 プロジェクト	教員	北郷　悟	理事（研究担当）、美術学部教授
		宮廻　正明	学長特命、社会連携センター長 大学院美術研究科教授
		横溝　廣子	大学美術館准教授
	特任助教	今井　紫緒	
	特別研究員	山田　修	美術研究科教育研究助手
		松村　公太	美術研究科教育研究助手
	教育研究助手	木本　諒	
音響・映像データ研究 プロジェクト	教員	亀川　徹	音楽学部教授
		植村　幸生	小泉文夫記念資料室 室長 音楽学部教授
		岩崎　真	演奏芸術センター助教
	特任助教	山田　香	
	非常勤講師	尾高　暁子	音楽学部非常勤講師 小泉文夫記念資料室学術研究員
		松村　智郁子	音楽学部非常勤講師 小泉文夫記念資料室学術研究員
	教育研究助手	佐野　隆	
		佐竹　悦子	小泉文夫記念資料室
		三枝　まり	音楽学部教育研究助手
		彫谷　典子	音楽学部教育研究助手
大学史文書データ研究 プロジェクト	教員	大角　欣矢	附属図書館長、音楽研究センター長 音楽学部教授
		佐藤　道信	美術学部教授
	特任助教	橋本　久美子	大学史史料室
	非常勤講師	大西　純子	美術学部非常勤講師
		坂口　英伸	美術学部非常勤講師
	特別研究員	吉田　千鶴子	大学史史料室
		石田　桜子	大学史史料室
		伏木　香織	大学史史料室
事務プロジェクトチーム	事務職員	相澤　尚登	社会連携課長
		佐藤　和也	社会連携課 研究協力係長
		小林　丈則	会計課 財務係長
		清水　将次	総務課 人事係長
		大田原　章雄	附属図書館 史料受入係長
		久野　拓哉	大学美術館 管理係長
	パートタイマー	樗木　佳織	社会連携課 国際交流係
		河北　奈緒子	社会連携課 国際交流係

平成 24 年 4 月 18 日時点

平成 25 年度 プロジェクト体制

プロジェクト	職	氏名	現職
情報発信システム研究	教員（常勤）	藤幡　正樹	芸術情報センター長 大学院映像研究科教授
		松井　茂	芸術情報センター助教
	芸術情報研究員	嘉村　哲郎	芸術情報センター芸術情報研究員
	特別研究員	生貝　直人	
	教育研究助手	河内　晋平	
3D デジタルデータ研究	教員（常勤）	北郷　悟	理事（研究担当）、美術学部教授
		宮廻　正明	学長特命、社会連携センター長 アートイノベーションセンター長 大学院美術研究科教授
		横溝　廣子	大学美術館准教授
	特別研究員	山田　修	美術研究科非常勤講師
		松村　公太	アートイノベーションセンター非常勤講師
		布山　浩二	
		宮田　将寛	
	教育研究助手	木本　諒	
音響・映像データ研究	教員（常勤）	亀川　徹	音楽学部教授
		植村　幸生	小泉文夫記念資料室 室長 音楽学部教授
		岩崎　真	演奏芸術センター助教
	特任助教	山田　香	（音響研究室)
	非常勤講師	尾高　暁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
		松村　智郁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
	特別研究員	佐野　隆	（音響研究室)
	教育研究助手	久保　仁志	（小泉文夫記念資料室）
	教育研究助手	小林　えりか	音楽学部教育研究助手 （音楽研究センター音楽資料調査）
		彫谷　典子	（音楽研究センター音楽資料調査）
大学史文書データ研究	教員（常勤）	大角　欣矢	附属図書館長、音楽研究センター長 音楽学部教授
		佐藤　道信	美術学部教授
	特任助教	橋本　久美子	（大学史史料室）
	非常勤講師	大西　純子	美術学部非常勤講師 （教育資料編纂室）
	非常勤講師	坂口　英伸	美術学部非常勤講師 （教育資料編纂室）
	特別研究員	吉田　千鶴子	（教育資料編纂室）
	教育研究助手	星野　厚子	（大学史史料室）
事務局チームリーダー 事務局	事務職員（常勤）	相澤 尚登	社会連携課長
		佐藤　和也	社会連携課 研究協力係長
		小林　丈則	会計課財務係長
		清水　将次	総務課人事係長
		大田原 章雄	附属図書館資料受入係長
		久野 拓哉	大学美術館管理係長
	（パートタイマー）	樗木　佳織	社会連携課 研究協力係
		小林 絵美子	社会連携課 研究協力係

平成 25 年 5 月 1 日時点

平成 26 年度 プロジェクト体制

プロジェクト	職	氏名	現職
情報発信システム研究	教員（常勤）	藤幡　正樹	芸術情報センター長 大学院映像研究科教授
		松井　茂	芸術情報センター助教
	芸術情報研究員	嘉村　哲郎	芸術情報センター芸術情報研究員
	特別研究員	生貝　直人	
	教育研究助手	石山星亜良	
3D デジタルデータ研究	教員（常勤）	北郷　悟	理事（研究担当）、美術学部教授
		宮廻　正明	学長特命、社会連携センター長 アートイノベーションセンター長 大学院美術研究科教授
		黒川　廣子	大学美術館准教授
	特任助教	木本　諒	
	特別研究員	山田　修	美術研究科非常勤講師
		松村　公太	アートイノベーションセンター非常勤講師
		布山　浩司	
	教育研究助手	宮田　将寛	
音響・映像データ研究	教員（常勤）	亀川　徹	音楽学部教授
		植村　幸生	小泉文夫記念資料室 室長 音楽学部教授
		岩崎　真	演奏芸術センター助教
	特任助教	山田　香	（音響研究室)
	非常勤講師	尾高　暁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
		松村　智郁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
	特別研究員	佐野　隆	（音響研究室)
	教育研究助手	久保　仁志	（小泉文夫記念資料室）
	教育研究助手	小林　えりか	音楽学部教育研究助手 （音楽研究センター音楽資料調査）
		樋口　晃子	（音楽研究センター音楽資料調査）
大学史文書データ研究	教員（常勤）	大角　欣矢	附属図書館長、音楽学部教授
		佐藤　道信	美術学部教授
	特任助教	橋本　久美子	（大学史史料室）
	非常勤講師	大西　純子	美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）
	非常勤講師	坂口　英伸	美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）
	特別研究員	吉田　千鶴子	（教育資料編纂室）
	教育研究助手	星野　厚子	（大学史史料室）
事務プロジェクトリーダー 事務局	事務職員（常勤）	相澤 尚登	社会連携課長
		佐藤　和也	社会連携課研究協力室長
		森　　友紀	社会連携課研究協力室研究協力係長
		小林　丈則	戦略企画課経営戦略係長
		清水　将次	総務課人事係長
		大田原 章雄	附属図書館情報サービス係長
		松本　佳男	大学美術館管理係長
	事務職員 パートタイマー	小林 絵美子	社会連携課研究協力室研究協力係
		夏目　幸子	社会連携課研究協力室研究協力係

平成 26 年 5 月 1 日時点

平成 27 年度 プロジェクト体制

プロジェクト	職	氏名	備　考
情報発信システム研究	教員（常勤）	藤幡　正樹	芸術情報センター長 大学院映像研究科教授
		大谷　智子	芸術情報センター助教
	芸術情報研究員	嘉村　哲郎	芸術情報センター芸術情報研究員
	特別研究員	生貝　直人	
	教育研究助手	石山星亜良	
3D デジタルデータ研究	教員（常勤）	北郷　悟	理事（研究担当）、美術学部教授
		宮廻　正明	学長特命、社会連携センター長 アートイノベーションセンター長 大学院美術研究科教授
		黒川　廣子	大学美術館准教授
	特任助教	木本　諒	
	特別研究員	山田　修	美術研究科非常勤講師
		布山　浩司	
	教育研究助手	井田　大介	
音響・映像データ研究	教員（常勤）	亀川　徹	音楽学部教授
		植村　幸生	小泉文夫記念資料室　室長 音楽学部教授
		岩崎　真	演奏芸術センター助教
	特任助教	山田　香	
	非常勤講師	尾高　暁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
		松村　智郁子	音楽学部非常勤講師 （小泉文夫記念資料室学術研究員）
	特別研究員	佐野　隆	
	教育研究助手	久保　仁志	
	教育研究助手	小林　えりか	音楽学部教育研究助手 （音楽研究センター音楽資料調査）
		樋口　晃子	音楽学部教育研究助手 （音楽研究センター音楽資料調査）
大学史文書データ研究	教員（常勤）	大角　欣矢	音楽学部教授
		佐藤　道信	美術学部教授
	特任助教	橋本　久美子	
	非常勤講師	大西　純子	美術学部非常勤講師 （教育資料編纂室）
	非常勤講師	坂口　英伸	美術学部非常勤講師 （教育資料編纂室）
	特別研究員	吉田　千鶴子	
	教育研究助手	星野　厚子	
	特任教授	中谷日出	
事務プロジェクトチームリーダー 事務局	事務職員（常勤）	小林　克夫	社会連携課長
		佐藤　和也	社会連携課研究協力室長
		森　　友紀	社会連携課研究協力室研究協力係長
		大田原 章雄	附属図書館情報サービス係長
		松本　佳男	大学美術館管理係長
	事務職員（年俸制）	稲垣　しの	社会連携課研究協力室研究協力係

平成 27 年 5 月 1 日時点

※各年度のアーカイブアシスタントはプロジェクト報告を参照。

大学史文書データ研究プロジェクト

2011.05–2016.03

平成 23 年度

1. 大学史史料室について

業務形態
美術学部の教育資料編纂室 および 音楽学部の大学史史料室の二室に分かれて業務を行っている。

大学史文書のアーカイブに向けた基盤整備
大学史文書データによる藝大史の“見える化”

（1） 通年の課題

（ア） 藝大史文書の意義と活用の重要性に基づくアーカイブ

（イ） 藝大史文書のアーカイブによる発信力強化、近代芸術文化研究の促進

（2） 2 室の開室と経緯

（ア） 美術学部

百年史編集を視野に入れ、昭和 36 (1961)年教育資料編纂室開室、現在に至る。

（イ） 音楽学部

昭和 56(1981)年、音楽研究センター内にて百年史編集を開始。平成 21(2009)年校舎改修を機に、同センターの大学史専用室、学史編纂室開室、平成 23 年 5 月、総合芸術アーカイブセンターに改組され、大学史史料室と改称。

2. 現状調査と資料整理

（1） 音楽側

史料室の所蔵資料は約 10,000 点。タイトル入力そのうち 1,302 件（Excel、6 月～12 月）。1 点の数え方は、文書綴 1 冊、演奏会資料 1,000 点を入れた 1 箱、アルバム 1 冊、写真 1 枚など様々である。したがって数え方次第では 15,000 点超となる。分量の目安：1 列に並べて約 100 メートル。
※以下は入力された史料の一例

図 2-1 平成 21 年開室当時の学史編纂室資料

棚番号/何段目等	学事年報　自明治三十八年度至大正四年度	原本
	大正五年四月甲種師範科入学願書	原本
	台湾留学生関係書 外国人生徒関係書類（朝鮮 清国留学生）	原本
	第弐号ノ壱　卒業生名簿　本科　東京音楽学校	コピー
	教員検定願綴昭和二十一年以降[実際は明治 44 年～昭和 24 年]	原本
	昭和五年　生徒に関する件	原本
	昭和十二年十一月　日独伊三国防共同盟作曲募集書類	原本
	昭和二十年度　公文書綴　教務課	原本
	昭和二十三年度入学試業成績	原本

“見える化”への留意点

見せるもの、見せないもの、鮮度、タイミングの検討

(2) 美術側

図 2-2 教育資料編纂室倉庫
教育資料編纂室倉庫の大村西崖資料。2 メートル幅の書類庫 4 本分に相当する。

図 2-3 教育資料編纂室
教育資料編纂室にて大村西崖資料の整理

3. 寄贈資料の受入

音楽側
平成 23 年 5 月～12 月に 9 名より受入（海軍軍楽隊関係、吹奏楽関係、日露海戦写真、明治期のドイツ留学日記、乗杉嘉壽東京音楽学校校長関係、東京音楽学校教師［木下保、水谷達夫、大井悌四郎関係］、戦後演奏会資料）

美術側
平成 23 年度は無し。

図 3-1 寄贈資料
寄贈資料。東京音楽学校演奏会 にも出演した海軍軍楽隊関係者の明治期ベルリン留学日記など。

4. 資料展示

(1). 9 月大学祭「藝祭 2011」の 3 日間、大学史史料室にて特別展。寄贈資料公開と東京音楽学校の依嘱作曲展～「東京音楽学校が作った“うた”」～明治 40 年から戦後にかけて東京音楽学校が内地・外地からの依頼に応えて行った作曲についての調査報告と資料展示。3 日間で約 250 名の来場者があった。

(2). 10～12 月 台東区旧東京音楽学校奏楽堂の特別展

図 4-1 展示会場
大学史史料室と来場者の様子

図 4-2 展示資料
東京音楽学校が外地から受けた作曲依頼件数

「ピアニスト小倉末子と東京音楽学校」展。【東京藝術大学音楽学部・神戸女学院大学音楽学部・台東区立旧東京音楽学校奏楽堂共催】大正・昭和の東京音楽学校教授で、日本最初の国際レベルのピアニスト小倉末子についての展示。神戸、東京、ドイツ、アメリカの足跡を追い、小倉の演奏曲目による演奏会も行った。

図 4-3 奏楽堂での展示 1
旧奏楽堂での展示。正面展示ケースの左半分が東京音楽学校初期資料。伊澤修二初代校長、校舎、初期ピアノ教則本等。

図 4-4 奏楽堂での展示 2
旧奏楽堂に貼られた特別展のポスターと通行人（撮影当日は休館日）

(3). 大学美術館での展示

美術館にて平成 24 年 4 月～6 月開催の藝大コレクション展における特集展示“～日本文化とともに～ 藝大の創成期と依嘱事業”（仮題）東京美術学校の依嘱製作約 460 件の中には、西郷隆盛銅像、楠公銅像など全国的に知られるものが少なくない。製作の木型、写真パネルなどにより藝大創成期を紹介。東京音楽学校の依嘱作曲は全国の校歌を中心に、各種団体歌、奉祝歌など約 800 件。明治 40 年から今日まで歌われている校歌もある。原資料および写真パネル展示、さらにモニター画と iPad によるデジタルコンテンツの紹介を行う。iPad では本学声楽科学生による復元演奏を原資料画像を見ながら視聴できるよう準備中。作曲依頼者（学校）の許諾、著作権および著作隣接権等の手続きを行っている。展示の基礎となる資料調査と収集は、 両学部の大学史史料に基づく共同研究による。

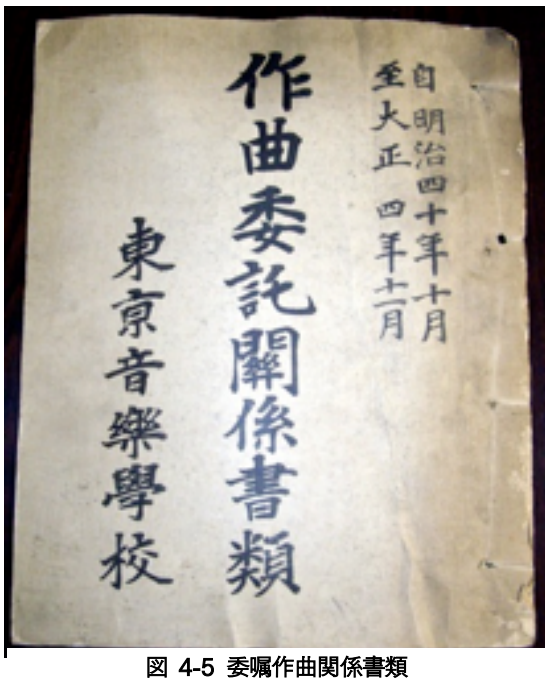


図 4-5 委嘱作曲関係書類

東京音楽学校最初の委嘱作曲書類（明治 40 年 10 月～）。最初の依頼は滋賀県立商業学校（現 滋賀県立八幡商業高校）校歌で、現在も歌われている。

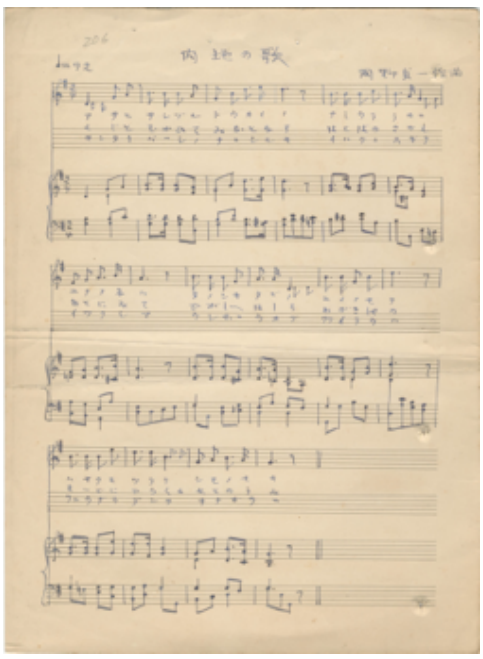


図 4-6 内地の歌

大正 11 年に朝鮮総督府から依嘱された「内地の歌」。作曲者の岡野貞一は当時の東京音楽学校助教授

図 4-7 東京美術学校の資料

東京美術学校の依嘱製作書類
（大正 4 年度～）

図 4-8 東京美術学校の佐竹侯爵銅像資料

5. その他の活動

名古屋大学大学文書資料室調査

名古屋大学は 50 年史刊行に先立ち大学史編集室を設け、数回の改組を経て現在に至る。平成 23 年 4 月施行の公文書管理法における「国立公文書館等」相当の指定を受けた。同資料室における法人文書の扱い、資料室利用規程、データ入力の実際等の情報収集。

図 5-1 ともに名古屋大学大学文書資料室の地下倉庫。配架され、中性紙保存箱等が使用されている

両学部の大学史史料に基づく共同研究

東京美術学校の依嘱製作と東京音楽学校の依嘱作曲にかんする調査と資料整理。現地調査、撮影、スキャニング。音楽・美術と近代日本の関わりに関する共同研究等。科学研究費（研究課題番号：22320034、基盤研究(B)「東京音楽学校・東京美術学校の受託作に見る近代日本の芸術教育」）の助成による。

調査研究および照会への対応

美術側：学内外約 20 件、音楽側：学内外約 30 件
（ともに他大学卒論・博論、国内外の研究者対応、TV、ラジオ、映画等）

藝大史の発信

藝大広報誌連載「上野の森の波瀾万丈」、展示、論文・研究発表等

他組織、総合芸術アーカイブ他プロジェクトとの連携、デジタルアーカイブの試み

コレクション展は、大学美術館、図書館、復元演奏には声楽科、録音には音楽環境創造科、著作権関係とデジタルコンテンツ作成には情報発信・システム、３D、音響・映像等、アーカイブプロジェクトの協力により行われる。

平成 24 年度の計画

（1） 所蔵資料の整理・入力の継続
⇒公開・非公開ルール、利用規則等の具体化
（2） 依嘱製作・作曲の調査継続と報告書作成
⇒大学史文書のデジタルアーカイブの可能性を研究
（3） 学内資料の教育資料編纂室倉庫への移動
⇒史料室利用規則、文書管理規則等の整備
（4） Web による大学史文書の紹介、受贈資料の報告
⇒藝大史史料の発信により、より多様な連携へ

平成 24 年度

東京藝術大学史（東京美術学校、音楽取調掛、東京音楽学校を含む）に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、デジタルアーカイブに向けた適切な公開活用のシステムに関する研究を行う。

プロジェクトメンバー

音楽学部教授　副センター長	大角　欣矢
美術学部教授	佐藤 道信
特任助教	橋本 久美子
美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）	大西 純子
美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）	坂口 英伸
特別研究員　　（教育資料編纂室）	吉田 千鶴子
特別研究員	石田 桜子
特別研究員	伏木 香織
アーカイブアシスタント（修士課程）	太田 郁

活動概要

(1). 東京藝術大学が保有する歴史的資料（法人文書を含む）のアーカイブに関する研究
(2). 大学史史料室が所蔵する文書資料の目録化
(3). 大学史文書および関連資料の収集、保管、データ化
(4). 学内外の各種調査研究・閲覧への対応
(5). 寄贈資料の受入
(6). デジタル化による保存と活用

大学史史料室は本学の歴史にかかわる資料を収集保管し、年史編纂および学内事業のサポートを行い、学内外（欧米・アジア各国を含む）の調査研究、論文作成、ドキュメンタリー映画・番組、展覧会、演奏会などへの協力を行っている。本学が日本で唯一の国立の美術・音楽の専門教育機関として創立され、日本近現代史の一角を担って歩んできた経緯により、大学史史料室は歴史的資料の公開活用はもとより、学外より近現代日本の芸術史・芸術教育史の研究拠点としての役割が求められている。貴重資料寄贈の申し出については組織内で個々に検討し対応している。

教育資料編纂室（美術）と大学史史料室（音楽）

本学の歴史資料に関する専門的業務は、美術学部の教育資料編纂室と音楽学部の大学史史料室の２室において行われている。通称は 2 室それぞれの名称であるが、大学史文書データ研究プロジェクト上は両室あわせて大学史史料室と称する。本報告中においてもプロジェクト組織としては大学史史料室を使用し、個別の業務については 2 室それぞれの名称を用いている。美術側は 51 年の歴史があり、音楽側は 3 年である。それぞれの開室の経緯は下記の通り。

美術学部	昭和 36(1961)年	美術学部の歴史に関する資料収集のため同学部内に教育資料編纂室開室。中央棟に移転後『東京美術学校の歴史』(桑原実監修/磯崎康彦・吉田千鶴子著 1977）刊行
	昭和 56(1981)年	赤レンガ 1 号館に移転し『東京芸術大学百年史』編集（～2003 年）
	平成 17(2005)年	旧芸術資料館 2 階に移転、現在に至る
音楽学部	昭和 56(1981)年	音楽学部 5 号館の音楽研究センター内にて『東京芸術大学百年史』編集（～2004 年）
	平成 21(2009)年	同センターの大学史専用室として音楽学部 2 号館に学史編纂室開室
	平成 23(2011)年	5 月総合芸術アーカイブセンターに改組され、大学史史料室と改称

連携の経緯：

(1). 平成 20 年～：大学史史料室設置に向け、学長裁量経費により学史プロジェクト会議＊開始。
＊発足メンバーは大角、佐藤、古田、吉田、橋本。21 年度に大西、23 年度に石田と伏木、24 年度に坂口が加わった。
(2). 平成 22～24 年度：科学研究費補助金による東京美術学校と東京音楽学校に関する共同研究(後述)。

平成 24 年度の活動

活動概要：法人文書管理における歴史的資料保存の視点からのアーカイブセンターの協力
歴史的価値から見た文書保存
平成 24 年度の重要な報告事項は、*大学史史料室が法人文書管理規則における国立公文書館等の指定を受けることを想定した準備* が下記①～③のように具体的に開始したことである。

① 従来事務局が一元的に行っていた法人文書の管理に対し、歴史的価値のある文書を保存するという観点より、アーカイブセンターが協力する方針が固まった。
② 文書類の保存年限等について、総務課で作成された廃棄対象文書に対するリスト上の検討を美術・音楽双方で研究を行った。廃棄／保存に対する基準は美術と音楽でほぼ一致した。
③ アーカイブセンターの協力は、保存年限に関する事項を中心に、24 年度内に「法人文書の管理に関する要項」にも反映された。

全体計画と目標７項目の進捗について
全体計画：大学史史料室のアーカイブズ機能強化に向けた整備
目標：
（1）所蔵資料の整理とデータ入力
（2）教育資料編纂室と大学史史料室の共同研究＝科学研究費補助金による
（3）教育資料編纂室と大学史史料室による統合リストの試作
（4）調査・閲覧への対応における公開／非公開ルール等
（5）文書資料のデジタル化
（6）紙焼き写真のデジタル化と一部公開
（7）所蔵資料の Web 公開（受贈資料の報告を含む）

所蔵資料の整理とデータ入力

a) 所蔵資料のデータ化
① 教育資料編纂室：
歴史的文書類の入力を終え、正木直彦東京美術学校長関係資料の整理を行った。後者は平成 25 年度継続予定である。

② 大学史史料室（音楽）：
歴史的文書類と寄贈資料を含む、所蔵資料全体の入力を進めた。
- 歴史的文書類
  - 藝大史関係文書資料の 6 割程度に相当する、史料件数 2242 点を入力（石田・伏木：平成 25 年 3 月 6 日現在）。
  - 史料室狭隘のため教育資料編纂室倉庫に別置される文書類については未整理、未入力。
- 寄贈資料：6 名の方々より受け入れた資料の簡易目録化に着手。
  - 伏木整理分：5 名から受け入れた楽譜､演奏会プログラム、書籍、同声会報等 267 件入力済。

- 石田整理分：1 名から受け入れた段ボール 2 箱分の膨大な戦後演奏会プログラム、チケット半券等、正確な点数は未だ不明。年月日記載のない資料も含まれ、内容や年代を推定・精査しながらの作業。史料件数 139 点入力済。

b) 目録公開の準備

大学史史料室（音楽）では、目録公開の前段階として、①所蔵する歴史的文書類、②寄贈資料のリスト（紙媒体）をファイリングし、**所蔵資料リストの閲覧に対応する体制を整えている。**

c) 目標の達成と課題について

平成 24 年度は、後述するように 4〜6 月に大学美術館にて展示を行い、特に音楽側はデジタル展示のためのモニター画面作成およびコンテンツ作成や iPad による試聴コーナーの資料作成に多くの時間を要したため、データ入力を進めることができたのは後半期に入ってからである。美術側のリスト化は年間を通じて着実に進んだ。

1. 教育資料編纂室と大学史史料室による共同研究（科学研究費補助金による）

（「東京音楽学校・東京美術学校の受託作に見る近代日本の芸術教育」研究課題番号 22320034、科学研究費補助金 基盤研究（B）、平成 22～24 年度、研究代表者：橋本久美子、研究分担者：大角欣矢・佐藤道信、連携研究者：古田亮・吉田千鶴子・大西純子）

a) 共同研究の公開展示の概要

東京美術学校の依嘱製作と東京音楽学校の依嘱作曲に関する研究の最終年度、大学美術館とアーカイブセンターの協力を得て、下記のような公開展示を行い、成功裡に終わった。概要は次の通り。

① 展示名：「藝大コレクション展―春の名品選特集陳列：藝大の創成期と依嘱事業」
② 期間： 2012 年 4 月 5 日（木）～6 月 24 日（日）［4 月 28 日(土)～6 月 24 日は高橋由一展同時開催］
③ 会場：本学大学美術館地下展示室の一部
④ 来場者数：高橋由一展と併せた全体で 80,233 名、コレクション展のみの入場者は 6,127 名。
⑤ 出展内容：写真、楽器、教材、依嘱製作・依嘱作曲関連文書、製作木型、復元演奏音源等
⑥ 展示方法：アーカイブセンター長による「ごあいさつ」、展示リーフレットＡ４両面１枚、展示リストを設置。美術と音楽でそれぞれまとめて配置（大学美術館担当：田中圭子学芸員）

写真 1 美術学部入口の立て看板
「春の名品選」の特集陳列としてアーカイブセンター企画による「藝大の創成期と依嘱事業」を出展

写真 2 展示風景１
展示入口の題字と「ごあいさつ」。美術側展示の写真パネルと文書資料など

写真 3 展示風景２
音楽側展示のモニター画面、国産第１号オルガン、唱歌掛図など

美術側：依嘱製作関係（写真パネル多数・大学史文書・製作木型・地図・出版物等）

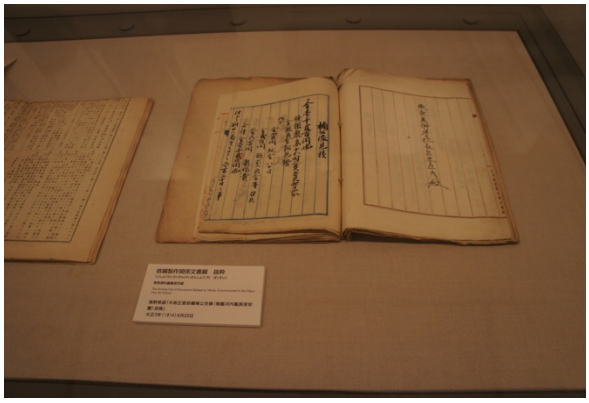


写真 4 楠公坐像見積
大正 3 年 6 月 23 日
（東京美術学校　依嘱製作関係文書綴より）

写真 5 観音立像木型（高村光雲）正面

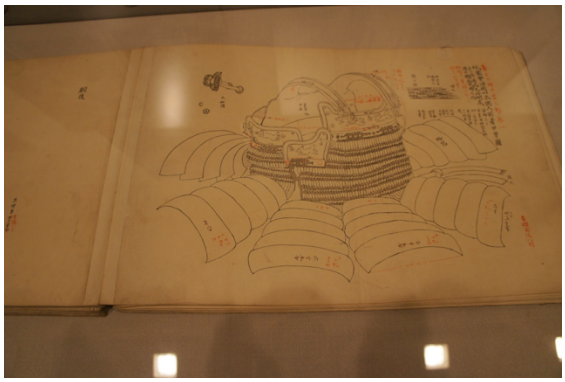


写真 6　楠公鋳造材料に関する資料

写真 7 展示風景 3

音楽側：依嘱作曲関係

- 写真パネル、文書綴原資料、文書原資料
- 楽器（音楽取調掛時代のオルガン［大学美術館所蔵］）
- 唱歌掛図、唱歌・ピアノ・ヴァイオリンの初期教材、唱歌教科書（以上附属図書館所蔵）
- モニター画面による“東京音楽学校依嘱作曲概要”紹介（特別研究員製作）【写真 3、8】
- iPad による楽譜原資料・歌詞・復元演奏の連動する展示（藝術情報センター嘉村哲郎：コンテンツ作成及びメンテナンス。復元演奏および録音は前述の科研費により伴奏編曲：山田香、ピアノ：奥千歌子講師、声楽科学生、録音：亀川徹教授の協力を得て千住キャンパスのスタジオにて 23 年度中に準備）

写真 8 台湾行進曲」を紹介するモニター画像

写真 9 iPad 試聴コーナー
原資料楽譜が画像で演奏と連動。台の右にヘッドホン。台の手前は楽譜と歌詞を掲載した冊子

写真 10 「自明治四十年十月至大正四年十一月
作曲委託関係書類　東京音楽学校」
作詞者には土井晩翠、作曲者には山田耕筰等の名前も

写真 11 試聴用 iPad３台を円柱の周りに配した

⑦　展示費用：総額約 140 万円（パネル製作、リーフレット印刷、展示台製作、iPad3 台、音源複製に伴う著作権使用料、科研費による演奏謝金等含む）

b)　意義

①　総合芸術アーカイブの視点による初の藝大史展

美術と音楽が共通のテーマを掲げ、美術館にて同時に成果発表を行ったのは本学として初であった。また　部分的ながらデジタルアーカイブの試みを盛り込んだ藝大史展は、総合芸術アーカイブを見越した企画であった。

②　美術館における音楽の展示

美術館で演奏を伴う展示を行うために施された工夫は、本学の教育研究成果の総合的な発信を考える上でも意義あるものとなった。その具体的な方法を記しておく。

- 展示会場内における iPad 設置：来場者の動線と展示レイアウトの調和を考慮して場所を決定。
- ヘッドホン：演奏音源が周囲に洩れないために使用。
- iPad 操作手順の説明、トラブル対策：美術館側は iPad 操作やモニター監視のため、通常より多くの会場係を配置した。iPad の操作手順を画面上と柱の張り紙で示し、来場者は各自で自由に選曲して聴く。結果的に、予想されたことだが幾度も iPad はフリーズした。そのたびに

美術館側は「故障中」の張り紙をし、コンテンツ作成者（嘉村）がトラブル解決にあたった。これは担当学芸員が事前に指摘したトラブルの可能性に対し、最良の策を練った結果であり、最小限のトラブルに最大限の対応で臨んだことができたと考えている。

- 画像のみによるモニター画面の製作
  東京音楽学校の依嘱作曲を紹介するモニター画面を製作し、会場でエンドレス再生を行った。美術館という環境ゆえ、無音で、楽譜・写真・文字情報のみにより構成して DVD に仕上げた。

③ 大学史文書に裏付けられた総合芸術アーカイブの可能性
近代日本の芸術教育の拠点であった本学の教育研究に関する調査を推進し、その成果発信にあたっては研究者はもとより、広く受け入れられる方法をさぐる必要がある。音楽側にとって美術館での展示は、準備作業も美術側に比べて大幅に多く、ハードルも高く、システム開発や情報発信の専門家の協力も不可欠であった。しかし*異なる専門分野の特殊性を生かした横断的な成果発信こそ総合芸術アーカイブの本領であり、その裏付けが大学史文書に求められること*を確認するイベントとなった。

c) 共同研究の成果の発信
美術側：吉田千鶴子著「稿本　依嘱製作史」
従来の研究の蓄積と科研費による現地調査の成果は上記ハードカバー製本限定 14 部にまとめられた。（画像編集協力：教育資料編纂室）。
機が熟せば公刊も視野に入れている。

音楽側：
① 依嘱作曲の関係資料のデジタルデータ化
研究期間を通じて上記史料のデジタルデータ化を終えた。並行して依嘱元や作曲された曲についての追跡調査を行った。従来より学外から照会や調査依頼の多かった依嘱作曲のデータが、研究者や依頼元の学校の周年事業などに対し、より良い状態で提供することが可能になる。
② 平成 25 年度中に復元演奏コンテンツを公開予定
大学美術館において紹介した復元演奏は時間および著作権等の関係で、全演奏の一部であった。平成 25 年度中には、依嘱作曲の復元演奏の音源のうち、著作権の消滅した曲の復元演奏コンテンツを公開予定である。

1.1. 教育資料編纂室と大学史史料室による統合リストの試作

旧制の東京美術学校と東京音楽学校の歴史資料の蓄積を行ってきた 2 室が、情報共有のテストケースとして、リストの共同作成と統合を行った。まず大学史史料室（音楽）が東京音楽学校関係 67 件を入力し、次に教育資料編纂室が入力した東京美術学校関係および大学初期の 64 件と照合して双方調整し、統合データリストを作成した。【別紙資料 1】

1.2. 調査・閲覧への対応における公開／非公開ルール

- 両室は本学史に関連する各種の調査研究に協力し、資料を閲覧に供している。
- アーカイブズの組織整備のため利用規則および公開基準等を整える作業に着手した。
- 他大学のアーカイブズ調査を行い、報告書をまとめた（「主要国立大学法人の非現用公文書のアーカイブズ状況に関する調査報告［平成 24 年 8 月 24 日現在］」）。

現在、本プロジェクトが整備すべきは、所蔵資料の公開／非公開の基準作りで、国立公文書館および主要大学アーカイブズ等における公開基準を参照しつつ各種の調査研究に対応している。

1.3. 文書資料のデジタル化状況

教育資料編纂室
写真貸出の折など必要に応じて行う他はデジタル化には未着手である。

大学史史料室
東京音楽学校の依嘱作曲に関する全資料のスキャニング完了（前述の科研費による作業：楽譜、歌詞、往復文書など）。音楽側でも体系的なデジタル化は進んでいないが、25 年度より傷みの激しい歴史的文書のデジタルデータ化に着手する予定である。

寄贈資料については寄贈者の意向に沿いながら、一部はプロジェクト期間中のデジタルデータ公開も視野に入れる。しかしながらデジタルデータの公開以上の急務は、むしろ寄贈資料の受入情報と簡略な内容紹介の公開である。寄贈者の多くは、資料が大学の管理の下に活用されることを望んでいる。しかしながら、その場合の活用とは、ウェブ上での一般国民に向けての無制限の「公開」ではない。デジタルデータでの公開となると、寄贈者の承諾を得た上で資料の一部あるいは一画像の紹介程度となろうか。寄贈者からは、本学が資料を所蔵していることは公開してほしいが、具体的な中身の閲覧は大学史史料室内限定で一定の条件下で可能とすること、事前に寄贈者の承諾を得て閲覧してほしいなど種々の意向が伝えられる。寄贈者の個別の意向を忠実に反映して「公開」すれば、現場が便利なサービス窓口と化し、対応に追われることは明らかである。

今後は公開のポリシーを整え、受入条件を提示して進めていくことも肝要となろう。

紙焼き写真のデジタル化と一部公開
24 年度は大学美術館での展示のために行ったデジタル化が全てである。紙焼き写真のうち、褪色や経年劣化の激しいもの、活用度の高いものについて、25 年度からデジタル化に着手したい。画像公開を求める声があるのは事実だが、年代・場所・被写物・被写人物が特定できない写真も多く、人物情報を求めることも必要だが、知財関係の処理も必要になろう。

所蔵資料の Web 公開（受贈資料の報告を含む）
・デジタルデータの公開：上記（５）の依嘱作曲資料については 25 年度中の公開を目指す。

上記以外の活動報告
環境整備に属するもの、学外発信に属するものなど多彩だが、いずれも大学史史料室のアーカイブ機能強化、本プロジェクトの“見える化”につながっている。

1.4. 環境整備

a) 大学史史料室（音楽）に手動式移動棚、除湿器の設置
最小規模の手動式移動棚ながら、史料の収蔵量の増加と同時に耐震性も増強され、史料のより安全な保管が可能となった。

b) 大学史関連写真パネルの掲示（展示パネルの活用。美術は新規、音楽は補充）

c) 大学史史料室 利用案内の英語版準備中（英訳原稿出来、25 年度前半に完成予定）

手動式移動棚・除湿器の設置工事～完了～配架後

写真 12 設置前の状態

写真 13

写真 14

写真 15

写真 16

写真 17

1.5.　学内資料の受入と管理

a)　音楽側は史料保存の倉庫が無いため、24 年 6 月より美術側倉庫の一部を借用している。

b)　史料保存のための環境について専門家に教えを請う（6 月）

①　紙類の保存に適する温湿度と史料室の環境について：稲葉正光教授［本学・文化財測定学］

②　写真額等モノ資料全般【写真 18】:

写真 18
破損した写真額を保存修復するか廃棄するかの判断は木材の種類にもよる（木島教授談）

c)　文書のカビ取りの概要と作業の実際を見学（1 月）（木島隆康教授［前出］）

カビに覆われた文書と写真同士が貼り付いたアルバムについて木島教授にご教示願った　（保存修復油画研究室にて）

カビ取り作業の実際：

①　資料サンプル：占領期の音楽側文書綴

②　カビと埃が表紙を中心に付着【写真 19】

③　カビ取りに使用したもの：ラテックススポンジ、粉消しゴム、刷毛、ミュージアムクリーナー

写真 19 カビに覆われた占領期の文書

写真 20

写真 21

【写真 20,21】ドライクリーニングの一方法：スポンジを細かく動かしながら丁寧にカビを絡め取る。粉消しゴムでさらに除去し、粉を刷毛ではらい、ミュージアムクリーナーで仕上げていく

写真の貼り付きの例：

①　アルバムの中で写真と写真が貼り付いた例（実作業は無し）

②　修復方法：水に浸してゼラチン質をふやかし、ゆっくり剥がし、ドラム乾燥等本学の史料室が保有する資料はきわめて多様である。これらに対応する保存修復には史料室スタッフによる対応以外に学内の保存修復の専門家に依頼し、協力体制を作る方法も良いのではないか、というのが木島教授と本プロジェクトの共通意見となった。

d)　楽器の受入
宮城道雄教授［生田流箏曲］考案の短琴、折り畳み箏：
音楽学部楽器係で長年保管されてきた本学邦楽科の歴史の重要な証言者だが、学内で行き場なく放棄される危機に瀕し、計 7 面を大学史史料室（音楽）が受け入れ保管（2 月）。

1.6.　寄贈資料の受入

（24 年度は音楽側のみ）
- 増山歌子氏
  信時潔・木下保関連ＣＤ，レコード、楽譜、プログラム、ポスター
- 窪田靜子氏
  山田耕筰自伝初版本
- 河野マリ子氏
  大井悌四郎氏所蔵資料
- シラパバンレン
  東京音楽学校時代のタイ人留学生プラシッド・シラパバンレンのご子息よりプラシッド氏の作品 CD、お茶の水女子大学博士課程の学生経由 7 月
- 瀧井敬子氏
  『幸田延の「滞欧日記」』（大学史史料室資料を使用した著書）（東京藝術大学出版会 2012 年 4 月）
- 坂口理子氏
  『フロイデ！　歓喜の歌でサヨナラを』（同上）（泰文堂 2012 年 12 月）

寄贈資料の整理・目録化
音楽側：
(1).　大久保利泰氏資料
(2).　増山歌子氏［木下保・信時潔関連］（年に数回、数点ずつ寄贈され、その都度追加入力）
(3).　菊地武篤氏［吉本光蔵等］
(4).　市川徹氏・・・以上、史料件数 267 点

データ・サンプリング
　統合リストの試作とは別に、今後の総合的なデータベース作成を想定し、両室のデータ統合の可能性を模索する試みとして、記載項目を設定し 16 件のデータ･サンプリングを行った。

見学の受入
音楽側 5 回
- 音楽学部音楽環境創造科 1 年生（藝大史入門の講義と見学 5 月）
- 名誉教授とブリッジウォーター州立大学（バージニア州。伊澤修二初代校長の留学先）の日本学研究者一行（5 月）
- 受験生向けの施設紹介（7 月）
- 受験生向けの施設紹介（9 月）
- 藝大アーツサミット（10 月）

1.7.　アーカイブズカレッジ参加報告

大学共同利用機関法人　人間文化研究機構　国文学研究資料館主催　アーカイブズカレッジ参加
①　　長期コース（平成 24 年 7～9 月　於：国文学研究資料館［立川市］）：坂口。修了論文題名後掲。
②　　短期コース（平成 24 年 11 月　　於：福井県文書館）：石田、橋本、伏木。 同上
③　　研修内容：現代のアーカイブズとアーキビスト

アーカイブセンター開設以来、教育資料編纂室と大学史史料室は大学アーカイブズについて認識の共有と連携に努めてきた。2 室に分かれたまま情報を共有することは必ずしも容易ではないが、アーカイブズ学研修への参加は、学外から客観的に本学のアーカイブズを考え、スタッフ間で問題意識を共有するうえですこぶる有効であった。プロジェクトの推進にあたり、アーカイブズ学を念頭に置いた判断が折々に必要になるであろう。

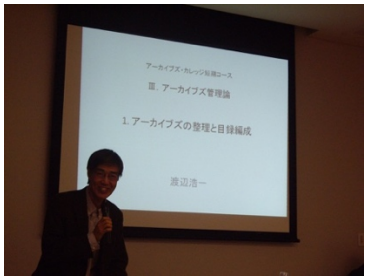


写真 22 福井県文書館短期コース アーカイブズ管理論アーカイブズの整理と目録編成

写真 23 貴重書庫

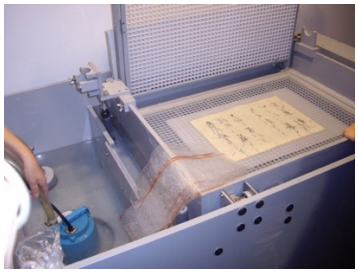


写真 24 リーフキャスティング見学（脆弱化した資料の漉き嵌め）

アーカイブズカレッジ修了論文
(1).　石田：「音楽とアーカイブズ－クラシック音楽を中心に－」（約 4,300 字）
(2).　坂口：「アーカイブズ展示論－東京芸術大学を事例として」（約 12,000 字）
(3).　橋本：「東京藝術大学総合芸術アーカイブにおける大学史史料とアーキビスト養成の課題」（約 20,000 字）
(4).　伏木：「音と芸能のアーカイブズ－音をめぐる資料の収集・保管の試みとその問題点」（約 16,500 字）

1.8. 研究・調査等

せんだいメディアテークと東北大学史料館（7 月）

東北大学史料館は「国立公文書館等」と「歴史史料等保有施設」の二つの指定を受けて運用されている。視察に際しては同館永田英明准教授に対応頂き、組織、運用などについてお話を伺い、別棟の書庫も見学した。震災の影響は特定歴史公文書の書庫にも出て、書棚にはファイルの落下防止のためロープを張り、天井の雨漏りの応急措置には青いシートが被せてあった。本学の文書管理における防災に対しても多くの検討材料を提供する視察となった。

写真 25

写真 26

写真 27

写真 28

写真 29

【写真 28】東北大学史料館入り口【同 29】,展示室【同 30,31】書庫は震災後の応急処置で紐を張り、【同 32】資料保存室の棚には雨漏り対策のブルーシートがかけられていた

東京音楽学校史、東京美術学校史に関する研究

（科学研究費補助金による）

(1). 吉田千鶴子：東京美術学校の依嘱製作の現地調査（依嘱製作に関する情報種集のため奈良国立博物館主催「正倉院学術シンポジウム『正倉院宝物の近代～壬申検査から 140 年』」参加　吉田、大西（平成 24 年 11 月 4 日～5 日　依嘱製作科研）

(2). 橋本久美子：昭和の東京音楽学校の依嘱作曲の背景調査（10 月 19～21 日　富山県砺波市）

科研調査のための国際学会参加

伏木香織

(1). 「アジア歴史地理情報学会」2012 年 12 月 1 日、2 日。東京音楽学校に団体歌の作曲を依頼した国語練習会の現状調査のため。日本統治時代の台湾の現地地名調査のため台湾中央研究院とコンタクトを取り個人 ID とパスワード取得。これにより当時の地名が判明し、調査先を特定することができた。

(2). 学会発表：Inter-Asia Popular Music Studies Conference Taipei 2012（台湾師範大学）
タイトル：Transfer, appreciation and absorbing Indonesian music in Japanese Popular/Fusion Music Scene: A Case Study from the Activities of "Terang Bulan"
内容：民族音楽学における World Music Program の日本への導入と自己化。1970 年代に本学にガムランが導入された経緯の紹介。台湾総督府（現・中華民国総督府）の写真撮影等。

学会発表

科研の成果報告として、明治美術学会例会にて（5 月 12 日　本学美術学部中央棟）

- 吉田千鶴子：「東京美術学校　依嘱製作史　概要」
- 橋本久美子：「東京音楽学校　依嘱作曲史　概要」

シンポジウム発表

- 吉田千鶴子：東京芸術大学創立 125 周年記念事業「漆芸　軌跡と未来」（10 月６日　画面作成:大西純子）

1.9. その他の活動

相談業務の記録化

今後の情報共有と効果的な運用のため「大学史史料室 相談業務記録票」の書式作成し、音楽側で試用中。当面は用紙記入で行い、将来的にはデータでの共有を可能にする予定である

教育資料編纂室	学外対応（問合せ・来室） 約 30 件	東大寺文化センター（展示用：調査と貸出）、NHK（放送用：閲覧と撮影）、智美術館のための資料調査と撮影、教育関係出版社への資料貸出、美術関係雑誌への掲載資料提供、早稲田大学会津八一美術館、東京大学院生、茨城大学教員、同院生、ピュージェットサウンド［アメリカ］大学教授、シカゴ大学准教授、同大院生、ボストン大学院生、京都市立芸術大学院生、畠山記念館学芸員、書道研究者、美術史研究者、本学院生、その他論文執筆資料の閲覧撮影等
	学内対応（問合せ） 約 80 件	大学美術館：同館展覧会、倉庫内の不明資料に関する照会、美術館への問合せへの協力、論文や解説執筆のための資料照会、資料提供など）年間 50 件余。 附属図書館および美術学部各科：大学の歴史に関する照会　年間 各 10 件 美術学部庶務係、総務課：外部からの問合せへの回答（資料調査および下調べを含む）20 件余。 杜の会（美術学部同窓会）：来室、電話、メール等
大学史史料室	学外対応（問合せ・来室） 約 40 件	照会者：朝日新聞フォトアーカイブ、毎日新聞社、NHK、キングレコード、他大学教員・学生、高等学校教員、個人（本学関係者、他校の同窓会関係者、研究者、愛好家）。 来室：学内外の学生の相談６名、資料閲覧 14 名、撮影３名（複数回の来室あり） 相談内容：自校の周年事業等の折に東京音楽学校作曲の校歌に関する照会、東京音楽学校関係の作曲家・教師・生徒、東京音楽学校の国語教育、学習記録や写真、〈第九〉が年末に演奏される理由等日本近現代の音楽界一般に関する質問、東京音楽学校時代に関連する論文執筆（卒・修・博論を含む）、史料寄贈の相談等
	学内対応（問合せ） 約 40 件	附属図書館、音楽学部庶務係、音楽学部教務係、附属高校、総務課、演奏企画室、演奏芸術センター、同窓会等より、東京音楽学校時代の生徒・教員に関する記録確認、その他各部署が外部から受けた質問（近現代の日本の軍歌・唱歌・流行歌・音楽界全般を含む）への回答など。

基礎資料の整備

アーカイブアシスタント活動報告参照

- 「東京藝術大学学報」デジタル化および閲覧用プリントアウト。
- 「東京音楽学校一覧」欠号分を国立国会図書館近代デジタルライブラリーより補充。

所蔵資料によるテーマ研究

アーカイブアシスタント活動報告参照

東京音楽学校時代のピアノ教育の研究の一環として、大学史史料室所蔵の教務関係文書より、各種試験におけるピアノ課題調査を行った。もともと科学研究費補助金（基盤研究（ｃ）「ピアニストの誕生を考える―明治末期から昭和初期の本邦洋琴家事情の解明」研究課題番号 22520164、研究代表者：津上智実）の枠で行われた調査だが、史料室史料の調査として継続・補完した。

1.10. アーカイブアシスタント活動報告

大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽学修士課程　太田 郁

活動内容

【大学史史料室所蔵史料の整理、補充】

(1). 「東京音楽学校一覧」の補充

「東京音楽学校一覧」は東京音楽学校時代明治 22 年～昭和 16 年に毎年発刊されていたもので、学校の規則、教職員氏名、生徒氏名、卒業生氏名、卒業演奏会のプログラムなどの内容を含む。大学史史料室には原本をコピー製本したものが所蔵されているが、不足ページ、冊があったため、これを補充し史料室にて閲覧することの出来る状態にした。補充には主に国立国会図書館近代デジタルライブラリー（http://kindai.ndl.go.jp/）を参照した。

(2). 「東京藝術大学　学報」の整理

「東京藝術大学　学報」は東京藝術大学ウェブサイトにて第 374 号（2001 年）～第 457 号（2009 年）は閲覧可能だが未だデジタル化されていないものが多いため、デジタル化を行った（ファイル形式：PDF）。また、ウェブサイトにて閲覧できるものを史料室にて紙媒体で保存するための印刷も行った。2013 年 3 月 18 日現在、第 246 号～第 457 号、及び号外第 1～16 号までを確認した。学報は学内より受け入れも行ったが、現段階で見つかっていない号、ページもある。

(3). 学内史料の受け入れ

音楽学部教務係、大学図書館、本部など、大学内より史料室へ今年度新たに史料を受け入れたのに伴い、移動と整理に関わった。

【所蔵史料の調査】

(1). 東京音楽学校時代のピアノ課題調査

史料室に所蔵されている教務文書より、東京音楽学校時代にピアノ専攻生（師範科、副科を除く）が履修したピアノ曲目や各種試験課題を抜粋し、データ化した。範囲は明治 23 年～昭和 24 年である。データは Excel にてまとめ、項目は、資料タイトル、履修の年度、曲目、科／学年、生徒氏名、受持教員氏名などである。その一部を史料として添える【別紙資料 2】。

まとめ

今年度は大学史史料室所蔵の史料を整理、補充する作業と、史料からデータを取る作業の二つを中心に行った。東京藝術大学学報については作業中であり、今後継続の予定である。現在ウェブ上で公開しているものと将来的に統合する可能性も考えられる。東京音楽学校時代のピアノ課題調査については、調査の過程で対象史料には演奏会プログラムも含まれることが分かった。東京音楽学校時代の演奏会一覧とそのプログラムは『東京芸術大学百年史』に既に掲載されているが、今回新たに明らかになった演奏会の記録もある。これらを『百年史』に補充することを含め、今後の活用方法を考えたい。

1.11. 活動成果

平成 24 年度に行った活動のすべてが本プロジェクトの目標に向かっていた。各項目に記した個々の成果は、以下の内容に集約することができよう。

(1). 歴史的資料となり得る法人文書のアーカイブ（試行）
法人文書のうち、歴史的資料としての価値を持つものをリスト上で検討した。保管満了時の大学史史料室への移管に向けて、現時点でどのような文書があり、どのような文書が歴史的資料として保存すべき価値を持つかを事前調査したものである。その成果が本学のアーカイブズを構築する基礎を提供することとなる。

(2). 史料の受入に関すること
史料の受入に際し、教育資料編纂室と大学史史料室のリスト作成のあり方の共有が始まった。

(3). 史料の整理保存に関すること
史料整理の方法は 2 室の規模や慣例等により異なるが、所蔵情報を共有する素地が整いつつあり、資料保存におけるカビ、破損、経年劣化への対応について認識を共有することができた。

(4). 史料の活用公開に関すること
所蔵資料の公開／非公開については暫定的に国立公文書館等に照らした対応を見据えながら個々の史料の内容・状態等により対応している。

(5). 大学史史料室の大学アーカイブズとしての機能強化
本プロジェクトは 24 年度に全体計画として “大学史史料室のアーカイブ機能強化に向けた整備”を掲げ、展示、史料受入、保存修復、資料の目録化などの多岐にわたる活動を行ったが、それらのあらゆる局面において、大学史史料室が大学アーカイブズとして機能することが求められることが再確認された。「東京藝術大学とは何か」について、資料をもって応え、証明することができるのは大学史文書である。東京音楽学校・東京美術学校時代の文書類が世間から重要視される現状に照らしても、本学の文書類の保存のあり方について検討を重ね、アーカイブズとしての基礎力を強化することが何より重要である。

(6). アーカイブズカレッジ
24 年度において本プロジェクトの現場メンバー（AA を除く）６名中４名が、アーカイブズ学の研修に参加できたことは、大学史史料室のありかたを客観的に見直し、プロジェクトの理念を共有するうえで有意義であった。研修の成果は今後も個々の事例に反映されることであろう。

1.12. 今後の課題と平成 25 年度の目標及び展望

活動成果に対応する課題と展望を下記に記す。

(1). 法人文書に対する歴史的価値の共有
国立公文書館等の指定を受けていない大学史史料室が、現状では評価選別を行うことはできない。しかしながら将来的に国立公文書館等の指定を受けることを想定する以上、その時に備えて保存基準等の研究を行うことは必要であろう。法人文書の管理は引き続き事務局で行われるが、アーカイブセンターが本学に適した保存基準、歴史的資料としての価値などを研究しておくことが本学のアーカイブズ構築の基礎となることは言を俟たないであろう。

(2). 史料所蔵のための場所の確保、リスト作成
喫緊の課題は受入場所の確保である。史料の配架もできず段ボール詰めでは、リスト作成もできず、公開基準作り以前の問題である。しかし美術と音楽は今後もリストの情報を共有していくことでアーカイブズの基礎力の強化を図る予定である。

(3). 寄贈資料および歴史的資料となり得る法人文書の受入可能な施設整備

資料の中には、カビ取りや修復の必要な文書が含まれている。今後はそれに対応するスタッフの養成とともに、修復費用、保存・作業環境を整える必要がある。自壊していく資料群を保存修復するには下記 5 項目が最低限の必要条件であろう。

(ア) アーカイブズ学ならびに本学史料に関する専門的知識を備えた人員の配置（教員）
(イ) スタッフのアーカイブズ研修奨励
(ウ) 本学内の保存修復分野との協力関係
(エ) 大学史史料室の事務的なサポート（事務）
(オ) スタッフの健康と史料の保存に適した施設整備

(4). 史料の活用公開に関すること

公開／非公開の基準作りは、史料室の活用現状と客観的な説明等に照らして整えていく予定である。寄贈資料については、寄贈者の意向もふまえ、リスト化、傷みの激しいものについてはデジタル化を行い、適切に公開していく予定である。

(5). 大学史史料室の大学アーカイブズとしての機能強化

美術と音楽それぞれの個性の光るアーカイブズを強力に発信するには、分野を超えた連携が威力を発揮するであろう。美術と音楽の異質性、親和性、時代性など、本学のアーカイブは大きな可能性を擁している。本学が構築すべきアーカイブズのあり方についてメンバーで研究していくことも今後に引き継がれる。

(6). プロジェクトメンバーによるアーカイブズ学研修とテーマ研究の推奨

24 年度に引き続き、メンバーはアーカイブズ学関係の研修等で世の趨勢を学び、本学のアーカイブズの理念を共有していくことが望ましい。メンバーが資料整理とデータ入力に埋没することなく、そこに研究テーマを見出し深化することができる機会を提供することも課題であろう。

(7). アーキビストの養成と継続雇用への組織作り

本プロジェクトにおける重要課題の一つが、アーカイブズ担当者の継続的な雇用である。数年単位でスタッフを入れ替えながら、長期的な展望を共有することには限界もある。今後はスタッフの育成を組織強化にいかに生かすかが課題となろう。また年限付での雇用においては、スタッフが年限内に次の職につながる状態に育成する必要がある。総合芸術アーカイブセンターが、大学の意思決定の記録を蓄積し、大学としての説明責任を果たすには、大局的な視野と同時にスタッフ一人一人の働き方と組織的な位置付けについても応えていくことが不可避の課題であることを付け加えたい。

(8). 藝大史史料への注目に応えること

事務局が管理している文書類のうち、歴史的資料として価値のあるものを大学が保存活用できる道を拓くことは本学の急務である。事務担当者だけでは歴史的価値に照らした評価選別や保存修復に対応しきれず、貴重な資料が失われる危険がある。本学の史料が近現代の芸術史、教育史、文化史、国際交流史等の各分野より注目される現状に鑑み、日本一研究のしやすい大学アーカイブズを想定した組織整備を強く要望する。大学史史料室の組織整備を推進し、史料を広く研究に供する条件を整えることができれば、本学が日本近現代に関する学際的な研究の推進に貢献し、本学を研究拠点とする多彩なプロジェクトが立ち上がっていくことは、ほぼ確実であろう。

【別紙資料 1】

大学史史料室・教育資料編纂室資料統合リスト［試作］（2012.12.12）

※「史料室」＝大学史史料室／「編纂室」＝教育資料編纂室 [] 内は史料整理時に補記

整理番号	史　料　名	保管場所	備　　考
20121212_001	資金関係［昭和 14 年～昭和 26 年　東京音楽学校、東京芸術大学］	史料室	背表紙付き綴込表紙で紐綴じ。背表紙破損。
20121212_002	昭和二十五年六月一日　身分證明台帳　東京芸術大学音楽学部庶務係	史料室	紐綴じ。
20121212_003	明治廿二年分　校規書類	史料室	和綴じ。背に「校規」の書込。
20121212_004	旧職員履歴書［東京音楽学校］	史料室	和綴じ。背に「旧職員履歴書」の書込。
20121212_005	旧職員履歴書［表紙に「高等師範学校附属音楽学校時代の職員」鉛筆で付記］	史料室	紐及びこより綴じ。
20121212_006	辞令簿（音楽）　自明一九、一　至昭五、六	史料室	製本済み簿冊。
20121212_007	辞令簿（音楽）　自明二七、九　至明四二、三	史料室	製本済み簿冊。
20121212_008	辞令簿（音楽）　自大四、一　至昭七、一二	史料室	製本済み簿冊。
20121212_009	辞令簿（音楽）　自昭八、一　至昭一四、一二	史料室	製本済み簿冊。
20121212_010	辞令簿（音楽）　自昭一五、一　至昭二〇、一二	史料室	製本済み簿冊。
20121212_011	辞令簿（音楽）　自昭二一、二　至昭二二、一二	史料室	製本済み簿冊。
20121212_012	辞令簿（音楽）　自昭二三、一　至二四、三	史料室	製本済み簿冊。
20121212_013	傭人任免関係原議綴（音楽）自昭一五、二 至昭二四、三	史料室	製本済み簿冊。
20121212_014	明治四十年四月起　命令簿　東京音楽学校	史料室	和綴じ。背に「命令簿」の書込。
20121212_015	昭和二年一月起　命令簿　東京音楽学校	史料室	和綴じ。背に「命令簿」の書込。
20121212_016	自昭和三年　至昭和六年　職員賞与辞令書綴　第四臨時教員養成所	史料室	和綴じ。表紙に「第壱種」印あり。
20121212_017	昭和三年（五月）ヨリ　昭和七年（二月）マデ　辞令簿　第四臨時教員養成所	史料室	和綴じ。表紙に「第壱種」印、背に「辞令ボ（臨教）」書込。
20121212_018	国有財産台帳　学校及図書館　■■会計所属　公用財産　東京音楽学校　［昭和 11 年～昭和 31 年］	史料室	バインダー。表紙欠落。移動書架内別置。
20121212_019	国有財産台帳　学校及図書館会計所属　公用財産　東京音楽学校　［大正 11 年～昭和 16 年末］	史料室	和綴じ。昭和 16 年末に新帳へ移すとの注記あり。移動書架内別置。
20121212_020	[各種建造物写真ならびに現状配置図（昭和 30 年頃）]	史料室	ホチキス止め。旧音楽学校の配置に近いが、3 号館ができている。しかし邦楽科が別建物。青焼き配置図あり。移動書架内別置。
20121212_021	物品寄付、控除、払下関係決議書［昭和 14 年度～昭和 23 年度］	史料室	背表紙付き綴込表紙で紐綴じ。背表紙破損。
20121212_022	昭和十一年度　国有財産関係書類　東京音楽学校	史料室	和綴じ。背表紙付き。
20121212_023	自昭和八年度至昭和十年度　国有財産関係書類　会計課	史料室	こより綴じ。
20121212_024	昭和十四　十五年度　国有財産関係　東京音楽学校会計課	史料室	こより綴じ。
20121212_025	昭和二十四年二月　政令第三十四号　学校施設の確保に関する政令関係　東京音楽学校	史料室	紐綴じ。
20121212_026	44.5.23.　売店大関フミ訴訟事件綴	史料室	バインダー。
20121212_027	パイプオルガンの現状報告書　昭和 59 年 10 月　松尾楽器商会より	史料室	史料名は報告書題名より。松尾楽器商会封筒入り。同封物：報告書 1、写真集 1 冊、図面 5 部。
20121212_028	営繕工事予算関係［昭和 23 年度］	史料室	綴込表紙で紐綴じ。
20121212_029	昭和十六年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた荷札付き）中の１点。和綴じ。
20121212_030	昭和十七年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた

			荷札付き）中の１点。和綴じ。
20121212_031	自昭和十八年度至同十九年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた荷札付き）中の１点。紐綴じ。
20121212_032	昭和二十年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた荷札付き）中の１点。和綴じ。
20121212_033	昭和二十一年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた荷札付き）中の１点。紐綴じ。
20121212_034	昭和二十二年度　予算決算関係　東京音楽学校会計課［表紙に「(特別会計より一般会計となる)」赤鉛筆で付記］	史料室	麻ひもでまとめられていた６点（20121212_029~034。「永年もの」と書かれた荷札付き）中の１点。こより綴じ。
20121212_035	昭和二十四年度　推算簿　東京音楽学校	史料室	製本済み簿冊。
20121212_036	昭和二十三年度　支出推算簿　東京音楽学校	史料室	製本済み簿冊。
20121212_037	自昭和二十二年度　至昭和　　年度　支出簿　東京音楽学校	史料室	製本済み簿冊。至の年度は空欄。
20121212_038	諸行事記録写真［課長会議、音楽学部新館竣工式など］	史料室	スクラップブックに写真貼付。
20121212_039	東京芸術大学音楽［ママ］附属高等学校空気調和新設工事工程写真　東京管工株式会社	史料室	スクラップブックに写真貼付。
20121212_040	音楽学部　No.2　［アルバム。奏楽堂、新 3 号館など写真多数］	史料室	
20121212_041	［写真アルバム　3 号館建築風景、旧校舎取り壊しなど］	史料室	青地に金色装飾のアルバム。移動書架内別置。
20121212_042	［写真ネガアルバム　昭和 33 年音楽学部落成、昭和 28 年音楽学部旧館、昭和 33 年赤羽寮被災現場など多数］	史料室	
20121212_043	［写真アルバム　音楽学部第６ホール､美術学部旧校舎？などのカラー写真］	史料室	ケース入。移動書架内別置。
20121212_044	東京芸術大学音楽学部第３. 第５ホール廻り　模様替工事 No.1　於：三洋建設（株）	史料室	スクラップブックに写真貼付。写真同士が固着しているページあり。
20121212_045	東京芸術大学音楽学部校舎新営工事　株式会社鴻池組［キャプション付写真アルバム］	史料室	移動書架内別置。
20121212_046	Sony Demonstration tape 1."Oedo Bugibvasgu" 2. Yasuo Ohki "Kaeranaihito: Manchester et Liverpool" 3. "Sakura Sakura variation"［オープンリールテープ］	史料室	移動書架内別置。
20121212_047	昭和 51 年正月　新年名刺交換用　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_048	昭和 53 年度卒業式　昭和 54 年度入学式　[オープンリールテープ空箱]	史料室	移動書架内別置。
20121212_049	春の海　宮城道雄　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_050	昭和 52 年度卒業式　昭和 53 年度入学式　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_051	昭和 47 年度卒業式　昭和 48 年 3 月 26 日（月）11 時～11 時半　音楽学部奏楽堂　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_052	昭和 48 年度入学式記録　昭和 48 年 4 月 10 日（火）11 時～　雨　奏楽堂　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_053	昭和 45 年度第 19 回卒業式記録　昭和 46 年 3 月 25 日（木）11 時～奏楽堂、昭和 46 年度第 20 回入学式記録　昭和 46 年 4 月 10 日（土）11 時～　奏楽堂　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_054	昭和 46 年度卒業式録音テープ　昭和 47 年 3 月 25 日（土）11 時　開式　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_055	昭和 47 年度入学式記録　昭和 47 年 4 月 10 日（月）11	史料室	移動書架内別置。

	時～11 時半　奏楽堂　[オープンリールテープ]		
20121212_056	昭和 48 年 5 月 9 日　故上野直昭先生を偲ぶ式（其ノ一）[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。箱裏書込：1.開会の辞　学長福井直俊、1.上野先生を偲ぶ辞　河野与一、前田泰次、平山郁夫、上野アキ、1.奏楽（其ノ二）
20121212_057	昭和 48 年 5 月 9 日　故上野直昭先生を偲ぶ式（其ノ二）[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。箱裏書込：1.開式、1.上野先生を偲ぶ辞（其ノ一）、1.奏楽　シューベルト：弦楽四重奏第 14 番ニ短調「死と少女」、演奏：第 1 ヴァイオリン　海野義雄、第 2 ヴァイオリン　日高毅、ビオラ　浅妻文樹、セロ　堀江泰、1.献花奏楽　モーツァルト：「アベ・ベルム・コルプス」
20121212_058	昭和 49 年度第 23 回卒業式　昭和 50 年 3 月 25 日、昭和 50 年度入学式　昭和 50 年 4 月 10 日、昭和 51 年度卒業式　昭和 52 年 3 月 25 日、昭和 52 年度入学式　昭和 52 年 4 月 9 日　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_059	昭和 48 年度東京芸大卒業式記録　昭和 49 年 3 月 25 日（月）午前 11 時～　奏楽堂（学部・別科）、第一ホール（大学院）、昭和 49 年度入学式記録　昭和 49 年 4 月 10 日（水）11 時～　奏楽堂　[オープンリールテープ]	史料室	移動書架内別置。
20121212_060	聯合軍総司令部ヨリノ指令［昭和 21 年］	史料室	紐綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。ウォールマスターによるドライクリーニング試行（2013.1.16）。
20121212_061	廃止例規書類［明治 26 年～昭和 24 年頃］	史料室	紐綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。ウォールマスターによるドライクリーニング試行（2013.1.16）。
20121212_062	[諸規則、規則案、報告案など　明治 26 年～]	史料室	紐綴じ。制服、徽章案などあり。カビがひどいため廊下キャビネに別置。
20121212_063	傭人履歴書綴　東京音楽学校会計課［昭和 20 年～23 年］	史料室	紐綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。
20121212_064	[旅行命令および海外関係、行幸啓、明治 37 年～昭和 7 年ごろ]	史料室	紐綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。
20121212_065	第三[学校衛生、生徒入学、外国人特別入学、卒業式ほか教務一般 明治 39 年～昭和 21 年ごろ]	史料室	紐綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。
20121212_066	明治二十三年　校規書類　東京音楽学校	史料室	和綴じ。カビがひどいため廊下キャビネに別置。ウォールマスターによるドライクリーニング試行（2013.1.16）。
20121212_067	明治廿一年　校規書類　明治廿一年　学務書類	史料室	和綴じ。校務書類と学務書類が合綴されている。
東京美術学校・美術学部関係			
整理番号	史　料　名	保管場所	備　　考
20121212_068	明治十年　東京上野公園地　実測図	編纂室	封筒入り。「昭和四十五年一月十二日　資料館より原図借用し引伸す　一部資料館に保管する」と封筒の表面に書き込みあり。封筒の裏面には「東京芸術大学」と新字で印字。
20121212_069	国有財産台帳 学校及図書館特別会計所属 工作物財産 [明治 43 年～昭和 34 年]	編纂室	美術学部の水道、下水、照明装置、銅像、寄宿舎の照明装置、水道、下水などの財産額。黒綴込表紙にて紐綴じ。
20121212_070	辞令簿(美術)　自明四四．一至昭二．一二	編纂室	扉に「明治四十四年一月廿五日焼失ニ付新調」の表記あり
20121212_071	東京美術学校敷地建物略図	編纂室	右上に「大正六年頃」という書き込みあり。複写コピーと思われる。 「尺度千二百分一」「敷地面積壱万六千五百五十四坪六合四勺」

			「建物総坪数四千六百七十五坪五合二勺五才」と右上に印字。
20121212_072	東京音楽学校(及帝国図書館)実測図	編纂室	右下に「大正拾壱年七月実測」。青焼き。
20121212_073	国有財産台帳 学校及図書館特別会計所属 建物財産 東京美術学校［大正 11 年～昭和 33 年度］	編纂室	事務所建、倉庫建、雑屋建、住居建、寄宿舎などの財産額。
20121212_074	昭和二年度　国有財産貸付使用台帳　東京美術学校	編纂室	「土地」と「建物」の所在地、数量、使用目的などに関する情報。
20121212_075	辞令簿(美術)自昭三．一至昭一六．一二.	編纂室	厚紙表紙にて製本。保存状態良好。
20121212_076	昭和六年　傭人履歴書　東京美術学校　会計掛	編纂室	表紙に青鉛筆にて「退職者」の書き込みあり。表紙に黄色の丸シールの貼り付けあり
20121212_077	自昭和十年度至　維持資金ニ関スル書類　東京美術学校［～昭和 24 年］	編纂室	預金利子明細表、歳入残余金調書、棄権届など。厚さ 7.5cm。
20121212_078	国有財産台帳 学校及図書館特別会計所属 土地財産 東京美術学校［昭和 13 年～昭和 33 年］	編纂室	美術学校と芸大が混在。土地の評価額？
20121212_079	辞令簿(美術)自昭一六．一至昭一七．一二	編纂室	「紀元二千六百年奉祝記念章拝展者」のリストあり。
20121212_080	辞令簿(美術)自昭一八．一至昭一九．四	編纂室	教職者の欠勤届、辞職届、履歴書など
20121212_081	任免関係原議綴(美術)自昭一九．三至昭二〇．一	編纂室	背表紙「至昭二四．一」の「二四」を 2 本の棒線にて「二〇」と訂正
20121212_082	任免関係原議綴(美術)自昭二一．一至昭二二．三	編纂室	履歴書、出張命令書、辞令、辞職願など
20121212_083	任免関係原議綴(美術)自昭二二．四至昭二三．三	編纂室	英文による「調査表」あり、GHQ に提出用か。「東京美術学校時報」あり。
20121212_084	昭和二十四年度　支出負担行為簿　新制大学	編纂室	製本済み簿冊。
20121212_085	昭和 24 年度　支出負担行為証認簿　甲　東京芸術大学美術学部	編纂室	製本済み簿冊。
20121212_086	昭和 24 年度　支出負担行為証認簿　乙　東京芸術大学美術学部	編纂室	製本済み簿冊。
20121212_087	美術学部敷地実測図 昭和三十年七月一日 実測図 1.2. 断面図 1.	編纂室	封筒の裏面には「東京藝術大學」と旧字で印字。業務用封筒
20121212_088	東京芸術大学配置図 1:600	編纂室	B4 紙。美術学部と音楽学部の建物一覧表と校舎の図面。
20121212_089	［美術学部校舎等写真アルバム］	編纂室	白黒の小写真が貼り交ぜられている。「美術学部本館」「建築科」「アトリエ」「彫刻科教室」「工芸計画部」「正木記念館及陳列館」「食堂」「大学本部」「芸術学科」「附属図書館」「塑造教室」「木炭画教室」「木工機械室」「官舎」「美術学研究室」「売店その他」「体育場」「便所」「車庫」「工芸立体教室」「第一守衛所」「第二守衛所」「金工教室」「金工教室内自動火災感知機及消火栓」
20121212_090	美術学部敷地建物略図 縮尺二百分之一	編纂室	封筒の表面には「縮尺二百分之一」を赤の二重線で消す。封筒の裏面には「東京藝術大學」と旧字で印字。業務封筒
20121212_091	東京藝術大学美術學部舊建物　配置図圖	編纂室	封筒の裏面には「東京藝術大學」と旧字で印字。業務用封筒
20121212_092	芸大美術学部構内敷地測量原図	編纂室	封筒の裏面には「東京藝術大學」と旧字で印字。業務用封筒
20121212_093	［美術学部校舎等写真アルバム］	編纂室	紺地に金の写真アルバム。美術学部のキャンパスの工事の写真　工事前の校舎、新築の校舎、校舎完成イメージ模型

大学関係			
整理番号	史　料　名	保管場所	備　　考
20121212_094	昭和二十三年九月 新制大学に関する概算書	編纂室	美術と音楽学部の歳入・歳出の明細書、附属施設の歳入・歳出の概算書
20121212_095	辞令簿(大学)自昭二四. 四 至昭二五. 一〇 1 の 1 人事係	編纂室	冊子タイトル部分に赤字で「永」とあり、永年保存用か。厚紙表紙にて製本。
20121212_096	自昭二四. 五 至昭二五. 一二 辞令簿(大学)	編纂室	厚紙表紙にて製本。最初のページは「文部事務官上野直昭」の辞令。
20121212_097	昭和二十四年五月　国立大学設置関係参考書類	編纂室	全国の大学一覧。保存状態悪し。紐右閉じ。
20121212_098	新制大学設置要項(附　定員関係　予算単価)［昭和 24 年頃］	編纂室	紐綴じ。表紙に「附　定員関係　予算単価」と青鉛筆による書き込み。
20121212_099	［美術学部および音楽学部の校舎ネガフィルム］	編纂室	
20121212_100	東京芸術大学・絵画科教室・研究室・新営工事［昭和 43 年 8 月～44 年 5 月］［アルバム］	編纂室	年代は書込より。取り壊し前の旧校舎と、新校舎の建設風景写真。
20121212_101	守衛関係［昭和 47～48 年頃］	編纂室	コクヨ大学ノート。起案用紙、守衛と大学側の懇談メモ、火災予防の通知書など。
20121212_102	美術学部旧本館玄関保存関係 写真集 管財係［昭和 47～48 年頃］	編纂室	取り壊し前の正木記念館。写真が互いに貼り付き、見開きが困難なページあり。
20121212_103	石神井寮関係写真綴(樹木手入等)会計課管財係［昭和 48 年頃］［アルバム］	編纂室	取り壊し前の旧石神井寮の写真か。
20121212_104	［石神井寮関連アルバム　昭和 50～51 年頃］	編纂室	「石神井寮　地鎮祭　50・5・2」「中間検査　50.98～9」「石神井寮　外構　　51.3」「石神井寮俊工式　51.1.17」などの写真。カラー写真。
20121212_105	［石神井寮ネガフィルム及び写真　昭和 56 年 3 月 31 日］	編纂室	年代は書込より。「文部省」と印字された封筒にネガフィルム・写真封入。
20121212_106	東京芸術大学非常勤講師等宿泊施設新営工事　竣工写真　施工　オリエンタル・コンクリート株式会社建築支店［昭和 54 年 3 月］［アルバム］	編纂室	年代は書込より。アルバムは白地に金文字。「芸大提出書類」と題された封筒も同封、中には工事費内訳明細書
20121212_107	旧奏楽堂保存に関する書類ファイル［昭和 55～56 年頃］［バインダー］	編纂室	奏楽堂移築保存問題や「救う会」に関するメモ。
20121212_108	バイオリン事件［昭和 56～57 年頃］	編纂室	封筒入り。ガダニーニ事件に関する新聞・週刊誌スクラップ
20121212_109	［ガダニーニ事件等関係新聞・雑誌記事スクラップ　昭和 56～57 年頃］	編纂室	封筒入り。ガダニーニ事件を中心に芸大不祥事に関する新聞・週刊誌スクラップ
20121212_110	附属図書館閲覧室その他各所模様替工事　施工　株式会社　鈴圭工務店［昭和 58 年 8 月 23 日～同年 10 月 20 日］［アルバム］	編纂室	年代は書込より。工事風景のカラー写真。
20121212_111	東京芸術大学美術学部校舎(金工棟)改修工事　施工　(株)鴻池組［アルバム］	編纂室	
20121212_112	東京芸術大学美術学部校舎(金工棟)改修工事　施工　(株)鴻池組［アルバム］	編纂室	同一タイトルのアルバム（20121212_111）とは異なり建物外部の写真もあり
20121212_113	東京芸術大学美術学部工芸科教室図書館側道路改修工事現場写真集　呉亜土木 K.K［アルバム］	編纂室	新校舎建設風景の白黒写真。
20121212_114	新校舎［アルバム］	編纂室	新校舎の建設風景の白黒写真。
20121212_115	東京芸術大学美術学部本館電気設備工事　豊国電気工業(株)会社［アルバム］	編纂室	電気設備工事の白黒写真。写真同士の粘着により見開き困難なページあり。
20121212_116	［石神井寮・東台寮写真］	編纂室	台紙 5 枚に写真計 33 枚貼付
20121212_117	［写真雑］	編纂室	Kodak の箱に小写真 10 枚、中写真 65 枚入
20121212_118	［大学会館、音楽学部校舎、美術学部デザイン科校舎写真］	編纂室	「東京芸術大学」封筒に更に 3 種の封筒(「大学会館写真」「音楽学部校舎(一般教養)写真」「(美)デザイン科校舎写真」)があり、それぞれに写真封入

20121212_119	［音楽学部校舎等ネガフィルム及び写真］	編纂室	「太陽堂」封筒に音楽学部校舎内などのネガフィルム・写真封入
20121212_120	本部庁舎［写真］	編纂室	「東京藝術大学美術学部」と裏面に印刷された業務封筒に写真封入
20121212_121	屋内体育館［ネガフィルム及び写真］	編纂室	「太陽堂」封筒にネガフィルム・写真封入
20121212_122	［樹木写真］	編纂室	樹木を写した写真 6 点がアルバム台紙に貼付けられている。どこかのアルバムから脱落したものと思われる
20121212_123	美術学部　No1［アルバム］	編纂室	外観黄色。美術学部の様子を撮影した写真。ネガ番号が振られている。倶楽部写真あり
20121212_124	美術本館新営 II　取壊建物［アルバム］	編纂室	美術学部校舎の工事の様子。旧校舎の取壊しの様子。カラー写真あり
20121212_125	東京芸術大学旧本部棟(元東京美術学校工芸科本館)写真集［アルバム］	編纂室	東京芸術大学旧本部棟(元東京美術学校工芸科本館)の内外観のカラー写真
20121212_126	東京芸術大学旧本部棟(元東京美術学校工芸科本館)写真集［アルバム］	編纂室	20121212_125 と同一内容。中身の写真は全く同じ。
20121212_127	航空写真旧校舎［写真］	編纂室	オレンジ色のビニール袋内に写真を封入。大型写真 11 枚、中型写真 8 枚、小型写真 3 枚の合計 22 枚。旧校舎の様子を撮影。

【別紙資料 1-2】 AA 報告書（太田）添付資料　東京音楽学校時代のピアノ課題調査
［　］内は『東京音楽学校一覧』の名簿等に基づく補記

入力日	資料タイトル	和暦	西暦	見出し（原表記）	曲目（原表記）	科/学年	生徒氏名	受持／担任教員氏名	備考
20121203	明治二十五年七月　学年大試験成績 生徒掛	M25	1892	選科洋琴定期試験問題	音階、嬰長調八音、三音、十音、六音反対等	選科	上原つる	木村作	
20121203	明治二十七年　学年試業成績	M26	1893	The Studies of the pupila in the year 1893/101 R.Dittrich	Bertini / III 25-48.	Piano III[専修部三年]	Miss Miura[三浦ミホ]	R. Dittrich	
20121203	明治二十七年　学年試業成績	M26	1893	The Studies of the pupila in the year 1893/114 R.Dittrich	1 Sonate by Mozart.	Piano Elective Class[選科生]	Miss Matsuno[松野フミ]	R. Dittrich	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	学年試験ピアノ問題	Fantasie….Haydn	本科2年[器楽部]	本居長世		
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	学年試験ピアノ問題	Etude15 Schule der Geläufigkeit….Czerny	本科1年	萩原英一		
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験ピアノ問題　受持　橋教授	Variationen v. Beethoven	本科2年	山田耕作	橋糸重	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験ピアノ問題　受持　橋教授	Sonatine v. Kuhlau	本科1年	小倉すゑ	橋糸重	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験ピアノ問題　受持　橋教授	Sonatina v. Clementi	豫科	貫名美名彦	橋糸重	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験問題　神戸	Weber – Sonata	[本科器楽部3年]	田中[ろく]	神戸[絢]	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験問題　神戸	Mozart – Sonata G dur , Czerny – Etudes 91”-12	[本科器楽部2年]	宇野[ヨシコ]	神戸[絢]	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験問題　神戸	Beethoven – Sechs Vatiationen , Czerny – Etudes 91”-24	[本科器楽部2年]	土屋[そう]	神戸[絢]	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験問題　神戸	Mozart – Sonata C dur , Czerny – Etudes de mé canisme 91”-12	[本科器楽部1年]	遠藤[ミサホ]	神戸[絢]	
20121203	明治四十年三月　各科学年試験成績	M40	1907	明治四十年三月学年試験問題　神戸	音階　及　Clementi – Sonatina F dur	[本科器楽部1年]	信時[潔]	神戸[絢]	
20121205	昭和十四年　卒業及学年試業成績　東京音楽学校	S14	1939	予科卒業試業成績　昭和十四年三月　ピアノ科　受持教員　永井	Beeth / Sonate C dur	予科	尹琦善	永井[進]	
20121128	大正三年　卒業学年試験成績	T3	1914	本科壱年[?]年試験問題　久野ひさ	ウェーバー　/ C dur ソナタ	本科壱年[?]年	井上[はる]	久野ひさ	見出しの一字が判読不能
20121128	自昭和五年三月　至昭和八年三月　選科　定期試験成績　東京音楽学校分教	S6	1931	昭和六年七月　定期試験成績表／選科一、二回試験成績表　ピアノ科　昭和6年7月3日	Kuhlau / Sonatina 3	選科第2回	櫛引静代	橘いとへ	
20121128	昭和二十四年四月　昭和二十五年九月　昭和二十二年九月　入学　試験成績	S25	1950	昭和二十五年九月補欠入学	Beethoven / Sonata 7	補欠入学			採点表よりピアノ曲のみ抜粋
20121205	昭和二十三年度　三ノ二　入学試業成績　東京音楽学校	S23	1948	入学試験採点表　本科　第一回　学科目ピアノ　昭和二十三年三月	Chopin / Scherzo, Bach	本科ピアノ受験者			教員の採点表メモより抜粋（作曲者名のみの場合も）。入学試験のため人名ではなく受験番号。
20121205	昭和二十三年度　三ノ二　入学試業成績　東京音楽学校	S23	1948	入学試験採点表　本科　第一回　学科目ピアノ　昭和二十三年三月	Brahms / Scherzo	本科ピアノ受験者			
20121205	昭和二十三年度　三ノ二　入学試業成績　東京音楽学校	S23	1948	入学試験採点表　本科　第一回　学科目ピアノ　昭和二十三年三月	Liszt / Paganini	本科ピアノ受験者			
20121205	昭和二十三年度　三ノ二　入学試業成績　東京音楽学校	S23	1948	入学試験採点表　本科　第一回　学科目ピアノ　昭和二十三年三月	Schumann / Fashings	本科ピアノ受験者			
20121205	学友会曲目	S12	1937	第95回学友会演奏会　昭和十二年二月六日（土）	ベートーヴェン／ソナタ　変ホ長調　作品三十一ノ三　アレルグロ	[本科器学部第二学年]	韓仁河		百年史に記載無し。
20121205	学友会曲目	S12	1937	第96回学友会演奏会　昭和十二年二月六日（土）	シューマン／「ダヴイッドヴンドラー」より　作品六	[本科器学部第二学年]	川口軽六		
20121205	学友会曲目	S12	1937	第97回学友会演奏会　昭和十二年二月六日（土）	リムスキーコルサコフ／協奏曲　嬰ハ短調　作品三十（伴奏；レオ　シロタ教師）	[本科器学部第三学年]	藪田増子		
20121205	学友会曲目	S12	1937	第98回学友会演奏会　昭和十二年二月六日（土）	バッハーブゾーニ／シャコンヌニ短調	[本科器学部第三学年]	渡邊千世		
20121205	学友会曲目	S12	1937	第97回　学友会演奏会　昭和十二年五月十五日（土）	ベートーヴェン／ソナタ　ホ短調　作品九十　第一楽章	[本科器学部第一学年]	大橋恒子		百年史に記載無し。
20121205	学友会曲目	S12	1937	第98回　学友会演奏会　昭和十二年五月十五日（土）	バッハーリスト／幻想曲及遁走曲　ト短調	[本科器学部第一学年]	今泉みち		
20121130	自昭和八年六月至昭和十年三月　選科定期試験成績　東京音楽学校分教場	S9	1934	ピアノ科研究生修了試験成績　昭和9年3月5日	Weber / Invitation to the Dance	ピアノ科研究生修了	河村和	高折宮次	
20130107	定期試験成績　昭和十三年十二月施行	S13	1938	選科定期試験成績表　学科目ピアノ	Beethoven / Sonate in G	選科第2次	藤岡秋子	萩原[英一]教授	
20130215	ピアノ履修曲調　昭和十二年度　第一学期	S12	1937	昭和十二年七月　ピアノ履修曲調	Richard Strauss / Burleske	研究科二学年	内藤喜久子	ワインガルテン教授	
20130218	ピアノ履修曲調　昭和十二年度　第一学期	S12	1937	昭和十二年七月　ピアノ履修曲調	Liszt / Konzert – Etude Des dur	本科二学年	塩崎佳子	宇佐美[ため]教授	
20130219	ピアノ履修曲調　昭和十二年度　第一学期	S12	1937	昭和十二年七月　ピアノ履修曲調	Bach / Wohltemperiertes Klavier XVII	予科	澤田茂子	小倉[末]先生	
20130215	ピアノ履修曲調　昭和十二年度　第三学期	S13	1938	昭和十三年三（二）月　ピアノ履修曲調	Beethoven / Sonata op. 53 C-dur	本科三学年	木村あき子	見田公子	
20130314	ピアノ履修曲調　昭和十三年度　第三	S14	1939	昭和十四年二月　ピアノ履修曲調	Chopin / Etüde E Dur	本科三学年	渡部澄子	高折[宮次]教授	
20130315	ピアノ履修曲調　昭和十三年度　第三学期	S14	1939	昭和十四年二月　ピアノ履修曲調	Brahms / Rhapsodie Op. 79 g moll	予科	原田敬	井口基成先生	

平成 25-27 年度

1. 大学史文書データ研究プロジェクトについて

1.1. 目的

総合芸術アーカイブセンターは、学内に分散する多様な文化資源を調査し、歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元する等、文化芸術情報の活用方法を研究する目的で設立された。
この目的に鑑み、大学史文書データ研究プロジェクトは、東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史※ に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う。※ 図画取調掛、東京美術学校、音楽取調掛、東京音楽学校を含む。

1.2. プロジェクトメンバー：(25-27 年度)

音楽学部教授　副センター長	大角　欣矢
美術学部教授	佐藤　道信
特任助教	橋本久美子
美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）	大西　純子
美術学部非常勤講師（教育資料編纂室）	坂口　英伸
特別研究員　（教育資料編纂室）	吉田千鶴子
教育研究助手	星野　厚子
アーカイブアシスタント（修士課程）	太田　　郁（平成 25 年度）※※
アーカイブアシスタント（修士課程）	吉田　学史（平成 26－27 年度）※※

※※ アーカイブアシスタントが交代した以外は３年間同じメンバーであった。

1.3. 教育資料編纂室（美術学部）と大学史史料室（音楽学部）について

総合芸術アーカイブセンター大学史史料室は、昭和 36 年に開室した美術学部教育資料編纂室と平成 21 年に開室した大学史史料室（開室時の名称は音楽学部学史編纂室）の２室により構成される。部屋の規模、資料収集の実績、活用のあり方等は異なるが、資料閲覧への対応や資料整理について、情報交換し共有に向けて検討を重ねている。

2. 活動報告

2.1. 期間全体（平成 23－27 年度）の概要

期間全体にわたり東京藝術大学アーカイブズの構築と発信にかかわる諸研究を行った。また公文書管理法への理解を深め、アーカイブズの学内組織や設備環境について研究するとともに、現場の諸問題を通して、本学の使命と現実的諸条件に見合うアーカイブズ構築について研究を行った。スタッフのアーカイブズ研修も継続的に行った。期間全体を通じて下記 7 項目が行われた。
（1） 東京藝術大学が保有する歴史的資料（法人文書を含む）のアーカイブ化に関する研究
（2） 大学史史料室が所蔵する資料のリスト化の研究
（3） 大学史文書および関連資料の収集、保管、データ及びメタデータの作成に関する研究
（4） 内外の各種調査研究・閲覧への対応の研究
（5） 寄贈資料の受入に関する研究
（6） デジタル化による保管と利用に関する研究
（7） アーキビストの育成に関する研究

大学史史料室は『東京芸術大学百年史』の編集資料を継承し、新たな資料を蓄積して次の大規模な年史編集に

備えるとともに、それらを広く教育研究等に利用している。
美術と音楽の両学部は平成 20 年より全学的なアーカイブズ構築に向けて検討を開始し、平成 21 年度と 22 年度は学長裁量経費により組織整備を検討し、他大学調査を行っていた。平成 23 年度のアーカイブセンター発足に伴い、本格的にアーカイブズに指標を定めて活動した。
下表は両学部による共同研究の流れをまとめたものである。

<table>
<tr><th colspan="2">21,22 年度</th><th colspan="4">23 年度</th><th>24 年度</th><th>25 年度</th><th>26 年度</th><th>27 年度</th><th>28 年度　29 年度</th></tr>
<tr><td>「百年史」後のアーカイブズ構築の歩み</td><td>学長裁量経費＝全学的アーカイブズ構築に向けた学史プロジェクト</td><td colspan="6">総合芸術アーカイブセンター</td><td>大学アーカイブズ再構築と芸術資源アーカイブの構築　創立 130 周年</td></tr>
<tr><td>重点項目</td><td>大学史史料の<u>公開活用</u>に向けた準備調査</td><td colspan="6">他大学のアーカイブズ調査、　保管資料のデータ公開に向けたアーカイブズ業務の実践　リスト作成、展示等
（収集・保管・利用）</td><td>アーカイブズ組織の定着、大学史史料の<u>公開活用</u>、戦略的普及</td></tr>
<tr><td>大学史文書の体系的整備</td><td>学内調査 / 他大学調査 / 歴史資料の認識共有</td><td colspan="6">▷美術・音楽両学部におけるアーカイブズ構築
▷演奏会情報・美術情報・情報システムとの協働による藝大アーカイブへの視点構築（センター内定例 MTG およびシンポジウムシポジウム等による）
参考：平成 23 年 4 月 1 日、公文書管理法施行。</td><td>アーカイブズ機能の整備、データの公開と利用促進、 150 年史編集の基盤整備</td></tr>
<tr><td rowspan="3">アーカイブズの構築にむけた研究と業務の実施</td><td rowspan="3">保管資料のリスト化に着手（「史料の公開と活用に向けた予備調査」（代表: 大角）</td><td rowspan="3">アーカイブズ業務の三本柱</td><td colspan="2">収集</td><td colspan="2">学内資料：学内倉庫の調査・文書収集</td><td>総務課法人文書の評価選別への協力</td><td>戦略的資料収集の策定</td></tr>
<tr><td colspan="2">→保管→利用</td><td colspan="2">寄贈資料：整理</td><td>寄贈依頼への対応・資料整理</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="4">▷資料のリスト化推進、データの共有化を検討
▷写真のデジタル化を順次行う
▷資料保護と利用のための再整理</td><td>デジタル計画策定
コンテンツ作成</td></tr>
<tr><td colspan="3"></td><td>依嘱製作・依嘱作曲の科研による共同展示・学会発表</td><td>▷対応業務の急増：<u>資料調査、相談、見学調査</u>（研究・番組・演奏会・展覧会・新聞記事・戦没者関係、修学旅行）
▷定期的な小規模展示</td><td>リストの公開開始、建物写真等の画像公開</td></tr>
<tr><td>組織整備／人材育成</td><td>▶プロジェクト内の勉強会
▶他大学の視察</td><td colspan="6">▶アーカイブズ機関の視察(公費私費併せて 15 機関)。
▶アーカイブズ研修受講（のべ 9 名)。
▶研修成果：▷<u>日本アーカイブズ学会登録アーキビスト</u>(1 名)、
▷<u>日本アーカイブ協会資格認定準デジタルアーキビスト</u>(1 名)。
▶全国大学史資料協議会への参加・全国大学史展への出展。
▶関東地区国立大学文書館情報交換会(大角提言・東大と東工大にて)</td><td>資料収集保存の保全、利用促進、人材育成プログラムを再構築</td></tr>
</table>

2.2.　平成 25－27 年度の活動報告：

大学史史料室を大学アーカイブズとして機能するために必要な研究として、制度に関する研究、他大学のアーカイブズ機関の研究、他大学との連携および情報交換を行った。その一方で、公文書管理法は 5 年見直しの時期を迎え、内閣府の公文書管理課および国立公文書館総務課の各担当者が大学史史料室を訪れ、現状視察を行うとともに、国立公文書館等の指定および歴史資料等保有施設の指定を受けるための条件等について話を伺う機会も持つことができた。

2.2.1. 大学アーカイブズ構築に向けた組織整備の研究

2.2.1.1. 他大学アーカイブズ機関の訪問調査

25－27 年度の 3 年間に、公費私費あわせて 15 機関を訪問する機会を持った。その一例を報告する。平成 25 年 7 月には、すでに国立公文書館等の指定を受けた大阪大学と神戸大学、26 年 3 月には歴史資料等保有施設の指定を受けて運用する金沢大学を訪問した。下表は 3 大学のアーカイブズ施設の概要である。

平成 26 年 3 月現在

施設	指定の種類と時期	設置年	書庫面積等	組織	場所	補足・備考
大阪大学アーカイブズ	国立公文書館等および歴史資料等保有施設：平成 24（2012）年 10 月	平成 18 年 7 月文書館設置準備室を設置	特定歴史公文書用 345 ㎡、歴史資料用 119 ㎡	独立部署。 ◎アーカイブズ:室長 1(1)、専任教員 1(2)、兼任教員 12 ◎総務課文書管理室:室長 1(3)、室長代行 1(4)、室長補佐 1(5)、事務補佐員 2(6)	箕面キャンパス管理棟	(1)教授併任、(2)准教授、(3)総務課長併任、(4)再雇用非常勤、(5)常勤、(6)非常勤
神戸大学附属図書館大学文書史料室	国立公文書館等：平成 23（2011）年 3 月 30 日付	平成 22 年 4 月設置	102 ㎡。閲覧室展示ホール事務室作業室計 243 ㎡	図書館附属。 室長 1 名(1)、室長補佐 1 名(2)、事務補佐員 2 名(3)・整理補助数名	神戸大学百年記念館	(1)図書館長兼任・教授 (2)専任・特命専門員 (3)非常勤 30h/w
金沢大学文書館	歴史資料等保有施設：平成元年（1989）4 月 1 日	金沢城内から移転の際博物館機能を持つ施設として平成元年（1989）4 月 1 日設置	事務室等 136 ㎡、収蔵 303 ㎡、展示 301 ㎡、計 740 ㎡	独立部署。 室長 1 名(1)、事務補佐員 3 名(2)	角野キャンパス。図書館と同じ建物	(1)兼任教授、(2)非常勤週 5 日、作業補助数名

(1) 大阪大学アーカイブズ

・視察者：副センター長　大角欣矢
　　事務局総務課課長補佐　野村智行
　　附属図書館情報サービス係長　大田原章雄
　　附属図書館資料受入係長　西山朋代
　　大学史史料室　橋本久美子
・視察日：平成 25 年 7 月 1 日

平成 19（2007）年 10 月に統合した大阪外国語大学の管理棟を使用して平成 24（2012）年 10 月箕面キャンパスに設置され、「国立公文書館等」と「歴史資料等保有施設」双方の指定を受けた。特定歴史公文書の広大な専用書庫の書架はまだほとんど空の状態で移管に備える。

(2) 神戸大学附属図書館大学文書史料室

・視察者および視察日は大阪大学アーカイブズに同じ

神戸大学は百年史編集終了と公文書管理法の時期が重なり、国立公文書館等の指定へと動いた。百年記念館の一角に大学文書史料室はある。平成 22 年に設置され、同 23 年 3 月 30 日付で「国立公文書館等」の指定を受けた。初年度に指定を受けた 7 大学のうち図書館に所属する施設は神戸大学のみで、「国立公文書館等」の指定のみである。図書館所属であることの利点は、図書館の目録検索システムの転用、図書館のシステム管理者を再雇用して史料室のシステム開発が行える点などがある。史料室が大学の組織として認識されにくい弱点はあるが、全体としては図書館所属の恩恵に浴している状況とのことである。同史料室の特定歴史公文書専用書庫は大阪大学とは対照的にすでに満杯である。全壁面に天井まで書架を設置し、高所作業には梯子を使用する。

(3) 金沢大学資料館

・視察者：副センター長　大角欣矢
　　大学史史料室　橋本久美子
・視察日：平成 26 年 3 月 19 日
・利用日：平成 26 年 3 月 19 日、20 日（橋本のみ）

旧制第四高等学校および金沢医科大学など前身校からの公文書を引き継ぐ同資料館は、平成元年に図書館と資料館を同一建物内に組み込んで建築された。資料館は独立部署として専用の書庫と作業室を有し、「歴史資料等保有施設」の指定を受けた。しかし専用の閲覧室や温湿度管理のできる書庫を備えることが難しく、「国立公文書館等」の指定を受ける目処は立っていない。

同館は室長 1 名、スタッフ 3 名で構成される。うち 1 名が文書担当、1 名が物資料担当、1 名が大学事務職の再雇用者で、全員が週 5 日勤務のパートタイマー（事務補佐員）である。文書担当者 1 名が大学全体の文書を担当する。展示は“物”担当者 1 名にアルバイトがついて行っている。

※所感：「歴史資料等保有施設」の指定を受けることで独自の規則によって運用を可能にし、公文書管理法施行前の平成 23 年 3 月までに移管された学内文書をアーカイブズとして構築し活用も整備されている点は、本学が参照すべき事例であろう。

※利用してみて：訪問調査に合わせ、事前に明治時代の第四高等学校時代の資料をウェブ上で検索し、利用規則に従って閲覧申請を行った。利用規則では 1 週間以上前までに事前申請する。1 日に資料 10 点以内を閲覧できる。申請後、調査目的の内容が含まれる資料リストが届く。それをあらためて申請し、館長決裁印のある書類を受け取った。閲覧当日、資料には事前審査と下見が行われた証しに、該当箇所に短冊が挟まれていて閲覧の助けとなった。ただ、実際には館員がチェックした箇所以外にも調査目的の内容が見つかり、リスト以外にも資料が存在する可能性を考えた。閲覧者自身が探し、選び出しやすい方法も探りたい。

※金沢大学資料館が実践した資料整理と目録編成の方法：
金沢大学資料館より平成 26 年 3 月現在で作成した「非現用法人文書データベースの利用について」という資料を入手した。同資料館で複数大学の例を参考にしぼり込んだと聞く。「利用について」は非現用文書目録の凡例、資料番号の付し方、前身校を含む学校分類表、部局番号表、そして 2011 年度移管分のリストである。
リストの項目は、資料名/資料分類/学校名/部局名等/受入方法/移管元/移管日/室/書架/箱番号/旧番号/媒体/資料番号/移管年度/学校分類/部局番号/通し番号/利用可能な複製物[あり/なしが記される]/利用制限[現実にはほとんどが“要審査”である]/作成部局等/年代/備考[形状や状態など]/非開示情報/最終閲覧日/展示履歴、となっている。

(4) 金沢大学医学部記念館資料室

・視察者：大学史史料室　橋本久美子
・視察日：平成 26 年 3 月 20 日

全学を対象とする「金沢大学資料館」とは別に、医学部の資料室も調査したので報告する。

金沢大学で資料館以外に歴史資料等保有施設の指定を受けている機関が、図書館、医学部記念館資料室である。文久 2 年（1862）の加賀藩の種痘所に発祥する医学部の記念館は、同窓生の寄附により建設され、同窓会や講演会場ともなる。その一室が資料室で、人体模型、標本、医療器具、講義ノート、文書等が立体的に展示構成され、金沢大学医学部の歴史のみならず、日本の医学史の展示場となっている。第四高等学校が大学に昇格する以前から医科「大学」であった医学部は、組織的にも第四高等学校と統合と分離を繰り返した。案内してくださった総務課長（山本氏）によれば、医学部同窓生は近代日本医学史と医学部の歴史を重ね合わせた独自の資料展示を保持することを望み、資料館に統合されることを歓迎していないとのことであった。

※所感：医学史料独自の世界を構成している展示に接すれば、同資料室が資料館に移管せずに独立を保っている現状も理解でき、このことは旧制 2 校が合併した本学にも参考になるところである。2 学部がそれぞれ個性ある資料群を形成している現状を尊重し、利用規則や公開基準等についてはルールを共有しつつ、独自性を保持することが好ましい。時代やテーマを共有する横断的企画展示もあり得よう。

※医学部記念館資料室の課題：
魅力ある医学部記念館資料室だが、利用や公開性においては課題もある。
当室は総務課の管理下にあり、普段は閉室し、見学申請により総務課担当者が解錠し案内してくれる。大部の展示目録も作成されているが、リスト公開や検索等には対応しない。
展示した当時は資料の背景となる文化や医療史に詳しい人々が携わったが、アーカイブの機能は果たさず、展示ケースにおさめた原状で何年も経過している。同窓会などあるときは現状のまま見学させているとのことであった。
展示室とは別に、近くの小部屋 2 室に、“いつの時代の""何か“不明な物資料が保管される。

2.2.1.2. 研究会・学会等による他大学アーカイブズ機関との情報共有

大学アーカイブズについて最も多くの機関より情報収集することができた研究会は全国大学史資料協議会であったが、日本アーカイブズ学会が扱うアーカイブズ関連機関における諸問題やさまざまなアーカイブの具体例は、本学も参考とするところが多い。平成 27 年度には大角副センター長の呼びかけにより、関東地区国立大学文書館情報交換会を開くこととなり、平成 26 年 4 月に国立公文書館等の指定を受け東京大学と 27 年に同指定を受けた東京工業大学を会場に開催し、各大学の現状報告と会場校の施設見学を行った。参加校は、お茶の水女子大学、学芸大学、筑波大学、東京外国語大学、東京工業大学、東京大学、本学、それに大阪大学、京都大学が加わり、計 9 大学であった。

2.2.1.3. 内閣府大臣官房公文書管理課および国立公文書館総務課による視察

平成 26 年 12 月 20 日、学習院大学にて、日本アーカイブズ学会その他の主催により「公文書管理法５年見直しについての合同研究集会」が開かれ、大角副センター長も参加した。その席上、国立大学法人が保有する法人文書の取扱いについて話題になり、内閣府大臣官房公文書管理課の希望により本学の施設視察が行われ、国立公文書館等の指定のための必要条件、法人文書のインターネット公開、目録作成のあり方等に関する情報交換を行った。

- 日時：平成２７年２月２０日（金）１５：００～１７：００
- 場所：音楽学部内大学史史料室（２－１－１）及び美術学部教育資料編纂室（見学）
- 視察者：内閣府大臣官房公文書管理課　公文書管理専門職　下重直樹氏
  同　国立公文書館等指定専門官　青池健一氏　ほか１名
  国立公文書館　総務課企画法規係長　寺澤正直氏　ほか１名
- 本学対応： 大角、大西、坂口、橋本、星野、野村智行大学事務局総務課課長補佐

※所感：国立公文書館等の指定の必要条件のうち、利用規則の整備と資料目録の作成については、準備可能な段階にあることを確認したが、その一方で適正な保存環境を保つ専用書庫を用意することが現状では絶望的であり、指定はまだ射程圏内にないと考えざるを得ない。しかしながら旧制校時代の公文書類が法人文書として登録されずに大学史史料室で利用される現状があることから、まずは早急に歴史資料等保有施設の指定を受けることで、法と現実のずれを是正する必要がある。歴史資料等保有施設の指定においても温湿度管理のできる設備が求められるが、国立公文書館等の指定に比べれば緩やかであり、学内の理解と協力を頂ければ現状建物内の工夫により要件を満たすことも可能ではないかと考えられる。

2.2.2. 大学史史料室における国立公文書館等の指定について再考

大学史史料室は、音楽取調掛時代文書、東京音楽学校、東京美術学校以来の文書を蓄積している。国立大学法人のアーカイブズである大学史史料室は、内閣府による「国立公文書館等の指定」を視野に入れるも、現状は指定を受ける条件を満たしておらず、「歴史的資料等保有施設」の指定も受けていないため、利用規則による運用が行われず、学内での機能・位置付けも明確化されていない。したがって利用度が高くても組織図に見えず、発信力も弱い。

この現状を打開するための研究を種々行い、一定の見通しを得ることはできた。情報収集の方法は、大学総務課との情報共有、アーカイブズ研修、他大学の調査などである。

アーカイブズとしての運用に向けてリスト作成や保存環境の研究等鋭意行っており、スタッフも研修を重ねて対応できる力を備えている。残る決定的な問題は施設面である。一定の見通しが立った時点で、歴史的資料等保有施設の指定を受けることは現在の運用を継続するため最低でも必要であろう。平成 26 年（2014）は新制大学が発足した昭和 24 年（1949）から 65 年目に当たり、東京音楽学校と東京美術学校時代の文書はほぼ全面公開が可能な時期を迎えた。

旧制校時代の、教務係等における永年保存文書以外のおもな文書類が大学史史料室に事実上移管されている。喫緊の課題は、内閣府の指定は指定として、学内で法人文書の保存について共通認識を構築し、藝大 150 年史に備えて安定的にアーカイブズを構築することである。

国立公文書館等の指定を受けずに新制大学以降の文書類を事務局で現用文書として保存する場合でも、150 年史編集を視野に入れれば、資料を散逸させないためのルール作りが早急に必要である。

2.2.3. 公文書類の取扱について総務課と共通認識の構築

平成 24 年度より法人文書の保存について総務課と打合せを行った結果、総務課が管理する法人文書の保存期限満了したものについて、アーカイブセンターが総務課の評価選別に協力することとなった。

25 年 7 月、まずリスト上で検討し、総務課倉庫にて総務課立ち会いのもと、アーカイブセンターのメンバーが文書の現物確認を総務課立ち会いのもと行った。しかし管理簿に記載される文書ファイルの現物確認は難航し、特定率も低かった。

学内に国立公文書館等の指定を受けた施設を持たない限り、文書を事務倉庫ですべて現用文書として保管することになる。しかし公文書館等の指定を度外視しても、現在の保存環境では、傷み、カビ、ホコリ、湿度変化による劣化を防ぐことができないのみならず、アーカイブズ構築が進まず、150 年史編集が困難になることは明らかである。早急に改善策に着手せねばならない。

付：「法人文書管理におけるアーカイブセンターとの連携について（案）」11/13 総務課総務係作成

こうした現状をふまえ、11 月総務課総務係が「法人文書管理におけるアーカイブセンターとの連携について（案）」として 3 項目をまとめ、解決策を提示した。その概要を示す。

1. 文書確認の定例化について（データ上の選別は行うが現物確認をほとんど行っていない現状打開のため、現物確認を課・係ごとに定例化する）、
2. 文書の確認方法・範囲について（データと現物の照合を困難にしているのは文書数の多さと管理場所の不整備によるところが大きいので、満了／延長など範囲を特定して同タイトルを確定することで確認数を減らしていく）、
3. アーカイブセンターに移動する文書の保管場所・方法について（アーカイブセンターが延長と判断した文書を原課が管理し続けるため、行方不明になりがちで保存環境も整わず移管を行う際にも煩雑となるため、一時保管場所の設置を検討する。ただし地下倉庫ゆえ環境は悪くアーカイブセンターが利用するさい不便）

総務係はさらに翌 26 年度にアーカイブセンターと連携する作業スケジュールの予定も提言した。
それによれば、6 月頃：前年度の法人文書ファイル管理簿から保存期間満了文書をリストアップ（総務課総務係）、7－8 月頃：期間満了文書リストの評価選別（総務課総務係）9－10 月頃：アーカイブセンターが保存期間満了文書の評価選別※、翌年 2－4 月頃：各担当者が法人文書ファイル管理簿に新規登録、翌年夏頃：内閣府に文書管理の報告（総務課総務係）。
※ アーカイブセンターによる評価選別の協力は、26 年度に実際に行われた。

2.2.4. スタッフのアーカイブズ研修等

研修参加

- 平成 25 年度と 26 年度、国立公文書館主催「アーカイブズ研修Ⅰ」(9 月 2 日～6 日）に 4 名参加。公文書の保存、評価と選別など文書プロジェクト内で共有するのに必要な内容であった。
- 平成 27 年度、日本アーカイブ協会主催、準デジタルアーキビスト資格認定講座受講（1 名)。データの収集と利用に伴い発生する著作権問題等を取り上げる。デジタルデータを扱うことが日常化した今日、デジタルアーキビストの基礎知識はアーカイブズ一般の基本であると認識した。

展示見学

1. 企画展示「近代日本の幕開けと私立法律学校」の見学。平成 26 年 1 月 24 日～2 月 28 日。明治大学博物館にて専修・中央・日大・明治の 4 大学共催による。神田地域、文明開化、法律学校、法典論争というテーマを共有し、4 大学のアーカイブズを活用した試みは、本学の両学部の横断的展示のヒントとなる。スタッフ 2 名とアーカイブアシスタント 1 名が見学した。
2. 第２回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」に出展および見学。平成 27 年７月３日（金）～８月２日（日)。明治大学博物館。 大学史史料室からも、宣戦の詔勅、青少年に賜はりたる勅語、大正時代の演奏会プログラム、戦後文化祭の写真を出展。
3. 東京外国語大学文書館の展示室（全国大学史資料協議会研究会）立教学院展示館の常設展見学会。(平成 27 年 9 月 18 日、出版文化社第 5 回学園アーカイブセミナー）

2.3. 美術学部教育資料編纂室の報告

2013 年度報告

東京藝術大学美術学部教育資料編纂室

はじめに

美術学部教育資料編纂室は､資料データのインプットの多くをアーカイブプロジェクト設置以前に終えている。プロジェクト実施以後、平成 21―23 年科学研究費補助金「大村西崖の研究」、平成 22-24 年科学研究費補助金「東京音楽学校・東京美術学校の受託作品に見る近代日本の芸術教育」等を含めて更なる資料整理が進んでいるが、多くの個人資料が含まれ、分類の統一を図ることが難しかったため、従来の整理法では将来の公開等には適さないインプット方法のものも多い。そのため資料の整理方法の見直し、統一したフォーマットについて検討中である。現在、資料の閲覧は、主として遺族、研究者、美術館博物館関係者（学術目的で使用予定の出版社・放送局を含む)、学内関係者などに対応しているが、将来一般に公開するためには、著作権、所蔵権、肖像権などの問題を解決し、その上で確固とした公開規則の制定が必須である。
また、総合芸術アーカイブセンター大学史文書データ研究プロジェクト大学史史料室（音楽学部）との資料検索システムをできるだけ統一したものにし、両学部の統一フォーマットおよび公開に関しての認識の共有、および規則などを制定する必要、すなわち双方の擦り合わせが必要であるが、音楽学部側とのフォーマットやシステムの統一は未完であり、規則の制定などは未着手である。

2013 年度業務内容に関する報告

（Ⅰ）所蔵資料の整理とデータ入力

1【正木直彦年譜・著作目録】
作成中（前年度から継続） 近い将来正木直彦に関する展覧会の開催（本学大学美術館主催)、または資料目録の公表（編纂室主体）をする予定（時期については未定）

2【2013 年度 新収資料（寄贈）データ入力済】 486 点
〇芸術学科卒業・修了論文要旨（芸術学科より。但し非公開資料とする）
107 点

○大村西崖資料補遺　（遺族）　343 点
○武谷富蔵資料　（遺族）　34 点
○関根則男資料　（関係者）　1 点
○明治 39 年度卒業写真その他の寄贈（明治 39 年度西洋画科卒高島七郎）卒業写真
1 点（データのみ）

3【保管資料の再整理および新たなインプット】　158 件※
○東京美術学校モデル関係資料　39 件
○諸新聞切り抜き（明治 24 年 1-12 月）　1 件

4【スキャン】
○『東京芸術大学百年史』使用写真（口絵）　54 件
○『明治二十九年九月　入学生在学証明』（焼け残り文書）　24 件

5【PDF 化】
○『明治二十九年九月　入学生在学証明』（焼け残り文書）　32 件
○『東京芸術大学百年史』（東京美術学校編　第一巻）全巻　1 件
○『東京美術学校校友会月報』　7 件
※　点と件の違いは、分類方法の違いによる。

（II）問合せ、資料閲覧、情報提供等

1	問合せ	出版社・放送局等（2）　遺族（4）　大学・美術館博物館（8） 学内（6）　一般（2）
2	資料閲覧	研究者/遺族・関係者（7）　大学・美術館博物館（1）　学内（5）
3	資料撮影	研究者（1）　大学・美術館博物館（1）
3	掲載許可願	出版社（1）
4	転載許可願	出版社（4）　大学・美術館博物館（3）
5	資料貸出	東大寺に大村西崖資料貸出（2013 年 2 月～10 月）10 月 24 日返却
6	成果の寄贈	図録、雑誌、論文抜刷等　(4) 雑誌『歴史読本』（正木肖像）、図録『横手貞美　未完の青春』（東京美術学校卒業生に関する問合せ）、図録『狩野派と橋本雅邦――そして、近代日本』（資料閲覧）、図録、『東洋学の歩いた道』（正木肖像・学習院より）、図録『奈良時代の東大寺』

【問合せ例】
① 戦前の留学生高義東（朝鮮）、許幸之（中国）に関する調査のため研究者が来室。資料提供、情報交換を行う。同じく留学生李叔同に関する問合せ（文書）あり。資料提供。
② 東京美術学校日本画科明治 30 年卒業の藤巻直治の遺族より問合せ。
資料および情報を提供。
③ 明治 39 年西洋画科卒業の高島七郎の遺族より問合せ。資料及び情報提供（遺族より明治 39 年卒業写真のデータ提供あり）。

【資料閲覧・掲載許可・転載許可願例】（転載許可願については主として『東京芸術大学百年史』からの転載）
① 学習院大学　資料の閲覧、カタログに転載、展示用パネル作成のために更に転載

（III）その他
【寄贈物品資料】
もと美術学部芸術学科使用の映写機　3 台

（Ⅳ）2013 年度　個人の主要業績

1　吉田千鶴子

- 「岡倉天心と文化財保護」『博物館研究』530　日本博物館協会　2013 年
- 「覚三が天心になるまで」『生誕 150 年記念　岡倉天心　近代美術の師』（別冊太陽　209）　平凡社　2013 年 7 月　118—127 頁
- 「我対留日中国美術生資料的整理与研究」「大村西崖と中国（劉暁路訳）」『11＆ZD115 項目　第一階段国際学術論証会検討文集』所収　天津大学王学仲芸術研究所　2013 年 11 月
- 「斎藤佳三と林風眠」『近代中国美術の胎動』　勉誠出版　2013 年　（斎藤佳三は東京美術学校図案科卒業生・教員）
- 「上野の杜の波瀾万丈　第 16 回　作品展示施設の昔」『藝大通信』27 所収　東京藝術大学　2013 年 9 月
- 「上野の杜の波瀾万丈　第 17 回　サールナートの壁画」『藝大通信』28 所収　東京藝術大学　2014 年 3 月刊行決定　（東京美術学校日本画科卒業生野生司香雪のこと）

2　大西純子

- 「早崎梗吉　中国古美術の紹介者」『生誕 150 年記念　岡倉天心　近代美術の師』（別冊太陽　209）　平凡社　2013 年 7 月　26—27 頁
- 「六角紫水『大連行』——鉄道車両塗装に関わる資料——」『MUSEUM』647
  東京国立博物館　平成 25 年（2013）12 月　25—41 頁
- 公益法人文化財保護・芸術研究助成財団助成金により課題「中国彫刻史形成期における早崎梗吉の活動に関する調査研究」のアメリカ調査実施

3　坂口英伸

- 科研（挑戦的萌芽研究）「震災タイムカプセルの研究」（2013-2015 年度）
- 共同記者発表：高野山金剛峯寺所蔵『関東震災殃死者名簿』（東京美術学校製作）に関して　2014 年 3 月 6 日　於高野山金剛峯寺
- 口頭発表「『関東震災殃死者名簿』の一万年保存計画」第 25 回文化資源学会研究会
  2014 年 3 月 15 日　於東京大学

2015 年 12 月 21 日教育資料編纂室作成

大学史文書データプロジェクト報告書

1. プロジェクト期間
2014（平成 26）年度の 1 年間

2. プロジェクト概要
東京藝術大学美術学部教育資料編纂室が所蔵する法人文書およびそれに東京藝術大学（その前身の東京美術学校も含む）に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、それに関係する研究と運用を行う。

3. メンバー（3 名）
大西純子（非常勤講師）、坂口英伸（非常勤講師）、吉田千鶴子（特別研究員）の計 3 名

4. 2014（平成 26）年度の概要
教育資料編纂室に残る資料のうち、使用頻度の高い資料（『東京美術学校一覧』）および画像（『東京芸術大学百年史』に使用の写真）のデジタル化（スキャナーを使用したスキャン化）を実施した。前者は資料の劣化と破損を防止することが目的であり、後者は外部からの画像提供の依頼に迅速に対応することが目的である。また、寄贈された資料の整理と目録化も行った。

5. スキャン（3 件、約 774 枚）
・『東京美術学校規則』（第 1 巻、11 枚）
・『東京美術学校一覧』（第 2-12 巻、463 枚）
・『東京芸術大学百年史』に使用の写真（第 1 巻に使用分約 300 枚）

6. 資料の閲覧・撮影（10 件）
畠山記念館、盛岡市先人記念館、東京工業大学、文化庁、中国美術学院、University of Puget Sound、茨城大学五浦美術研究所、広島県立美術館、国立彰化高級中学図書館、筑波大学

7. 資料の掲載・転載（3 件）
盛岡市先人記念館、都城市美術館、東京家政大学博物館

8. 資料の提供（2 件）
藤巻直治資料、平凡社

9. 資料の寄贈の受け入れ・移管（4 件）
芸大石神井寮資料（石神井寮の閉鎖につき、段ボール 3 箱）、岡田捷五郎資料（整理の上で建築科へ移管）、中村勝馬資料（段ボール 9 箱）、石川浩洋・寿衛彦資料

10. 目録作成（1 件）
・中村勝馬資料（次年度へ継続）

11. 問い合わせ（8 件）
美郷町教育委員会、東京美術学校卒業生遺族、東京藝術大学旧職員、日本画研究室、岡山県立美術館、大学院生（東大院博士課程）、日本郵船歴史博物館、長崎新聞、かわうそ商会（NHK 番組制作会社）

12. 所属員の成果報告（2 件）
・吉田千鶴子「東京美術学校の台湾人留学生」（口頭発表）
・坂口英伸「東京美術学校と関東大震災」（論文）『東京藝術大学美術学部紀要』52 号、2014 年、33－50 頁

13. その他
公文書管理研修への参加（12 月）
写真のスキャン作業の際には、別置・保管作業も同時に行った。写真をスキャンするという単純作業ではない。写真はアルバムに強力に貼り付いてあり、写真を傷つけないようにアルバムから丁寧に写真をはがし、スキャン後は写真をフォルダに挟んで保管。アルバムには貼り付けずに、フォルダに挟んで別置・保管した。

2015 年 12 月 21 日教育資料編纂室作成

大学史文書データプロジェクト報告書

1.プロジェクト期間
2015（平成 27）年度の 1 年間

2.プロジェクト概要
東京藝術大学美術学部教育資料編纂室が所蔵する法人文書およびそれに東京藝術大学（その前身の東京美術学校も含む）に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、それに関係する研究と運用を行う。

3.メンバー（合計 3 名）
大西純子（非常勤講師）、坂口英伸（非常勤講師）、吉田千鶴子（特別研究員）の計 3 名

4.2015（平成 27）年度の概要
昨年度に引き続き、デジタル化（スキャナーを使用したスキャン化）を優先的に行った。
所蔵資料のうち、使用頻度の高い資料（『東京美術学校一覧』）および画像（『東京芸術大学百年史』に使用の写真）を中心に、本年度は『東京美術学校校友会月報』を追加した。この他にも、東京美術学校の火災（明治 44 年）の際に焼失を免れた文書も存在し、これらの文書のデジタル化も急ぐ必要がある。また、引っ越しに伴う資料の移動と再整理、寄贈された資料の整理と目録化も行った。

5. スキャン（3 件、902 枚）
・『東京美術学校一覧』（第 13-20 巻・第 48 巻、524 枚）
・『東京芸術大学百年史』に使用の写真（第 2 巻に使用の約 300 枚）
・『東京美術学校校友会月報』（第 17 巻第 1-9 号、78 枚）

6. 資料の閲覧・撮影（1 件）
広島県立美術館

7. 資料の掲載・転載（2 件）
松本市美術館、アルバータ大学（カナダ）

8. 資料の提供（4 件）
大学美術館、平凡社、岩波書店、テレビ朝日（「じゅん散歩」）

9. 資料の寄贈の受け入れ・移管（3 件）
・順天堂大学より創設者佐藤氏の銅像 3 体の画像、上野直昭資料、村井養作氏関連資料

10. 目録作成（2 件）
・中村勝馬資料（昨年度より継続）、上野直昭資料（作成予定）

11. 問い合わせ（15）
総務課（×2）、大学美術館（×3）、東京藝大旧職員（×3）、無言館、九州大学、伊豆市資料館、クリスティーズ・

ジャパン、大学院生（京都工芸繊維大学修士課程）、新潮社、堺市美術協会

12. 調査研究（1 件）

・元東京美術学校校長および東京藝術大学初代校長の上野直昭に関する資料調査
・フェノロサ／岡倉覚三供述日本美術史講義筆記ノートの書き起こし

13. 所属員の成果報告（1 件）

・大西純子「早崎梗吉の活動について―ボストン美術館蔵岡倉覚三蒐集中国彫刻コレクションを中心として」（論文）『MUSEUM　東京国立博物館研究誌』656 号、2015 年 6 月、7－44 頁

14. その他（5 件）

・フェノロサ／岡倉覚三供述日本美術史講義筆記ノートの書き起こし
・故村井養作氏関連資料の調査
・野生司香雪作のインド・サルナートムラガンダー寺院壁画修理に関する斡旋
・引っ越し（旧芸術資料館→大学会館）およびそれに伴う資料の再整理
・資料整理用キャビネットの購入

2.4. 音楽学部大学史史料室の報告

大学史史料室（音楽）平成 25～27 年度プロジェクト報告

文書プロジェクト全体については既述のため、音楽側に関する内容のみ

１．25－27 年度の概要

大学史史料室を年史編集からアーカイブズ構築に転換することに主眼を置き、アーカイブズ機関としての整備に向けた準備調査を行うとともに、保管する資料の目録作成を進めた。

1．大局的視点に基づく歴史的資料と法人文書の全学的なアーカイブズ構築のための体制整備
2．全学的なアーカイブズ構築に必要な学内の機関連携
3．全学的なアーカイブズ構築の視点に基づく大学史史料室 2 室の日常業務

他大学のアーカイブズ機関調査を行って学外情報をプロジェクト内で共有することもできた。しかし平成 26 年末頃より、内閣府で国立公文書館等の指定を行う担当者等と情報交換した結果、現状組織では指定を受けることができないことが明確になった。最大の理由は大学史史料室が 5 年限定のプロジェクト組織であり、先の見通しが不明確な点にあった。申請は保留だが、アーカイブズ機能の強化を図る。

２．資料のリスト作成

平成 28 年度 2 月現在、リストに入力された点数は、

所蔵資料　4375 点
寄贈資料　6651 点
総数　　11026 点である。

この数字は平成 23 年以降に着手したデータ入力分を含み、現在、大学史史料室が保管する資料点数で 95 パーセント以上が入力済と考えている。残る資料についても、順次入力を進め、一度入力されたデータについても資料の再整理とともに更新を図っていく。

点数は Excel データに基づくが、数え方は写真 1 枚を 1 点とする場合も、写真を 100 程度枚貼ったアルバム 1 冊を 1 点とする場合もあり、基本的には物資料としての形状やまとまりに従って数えている。今後再整理によって、現在 1 点としている資料が別個のものと判明すれば分離する可能性もあり、逆に複数とされた資料をまとめて 1 点と数える可能性もある。

今後はリストの公開範囲を定め、公開準備に入る。公開に際しては、当面は個々の資料名ではなく「〇〇氏関係資料」と表示ししてキーワードを加える等の方法も考えられる。しかしこの方法では全ての調査依頼に対してスタッフが必ず準備調査にあたる必要が生じるため、調査者側で希望資料を特定できるスタイルのほうが望ましいと考えている。

３．寄贈資料について

・成果物の寄贈：
25－27 年度に、大学史史料室を利用した成果物として、60（個人と機関）より 78 点の刊行物（図書、CD、DVD）、論文、番組 DVD 等が寄贈された。閲覧等による資料の利用以外に、調査研究の相談対応や助言に対するものを含む。利用者側が「利用した」と認識して寄贈するこれらの成果物が次の研究者の資料となり、史料室の利用から少しずつだが研究の好循環が生まれている。
・25－27 年度の寄贈資料全体では、101 個人より 5791 点。（←入力作業件数に基づく）
・内訳：平成 25 年：21 個人より 301 点。16 機関より定期刊行物等　30 点。
平成 26 年：24 個人から 305 点。25 機関より定期刊行物等 42 点。
平成 27 年：23 個人から 505 点。22 機関より定期刊行物等 34 点。

・27 年度には上野直昭東京藝術大学初代学長（美学・美術史）とひさ夫人（東京音楽学校卒ヴァイオリニスト、上野学園大学名誉教授）の資料が寄贈された。国分寺市内の遺宅に調査に通って選別・梱包し、段ボール箱計 36 箱相当を収集した。その約半分にあたるひさ夫人関係資料を当室が受け入れた。
受け入れ後、年度内に資料の種類や構成が把握できるよう整理を計画し、下記のような方針とした。

①出版物（図書、楽譜）についてはなるべく著者・作曲者・タイトル等だけでも入力する。②手稿譜や曲名の特定しがたい楽譜等については、その概要と今後の手掛かりになる情報を残す。③写真については可能ならばそれぞれ特定できる情報を残し、それ以外は枚数を数える。④演奏会プログラムは、大学史史料室が保存するプログラムの欠落を埋める資料もあると推測されるが、現段階で個々の入力を行うのは時間的に現実的ではないため点数を数える。⑤手紙類の整理や解明には相当期間を要すると推測されるため、現段階では最低限、葉書や封書など種類ごとに点数を数えることとし、宛名や差出人の整理は次の段階に送る。

①〜⑤の方針に従い、星野教育研究助手がデータ入力シートを作成し、吉田アーカイブアシスタントとともに資料の種類ごとの分類等を行い、実際に入力もして作業環境を整えた。年度末近く、プロジェクト経費により大学院生 3 名が、計 102 時間でデータ入力を行い、資料点数を数える等の作業にあたった。項目やその結果、資料の、助手、アーカイブアシスタントが図書、楽譜等 1158 件を入力し、書簡や演奏会プログラム等は個々の入力はせず分類し点数を数えることにとどめた。入力件数を含め、4835 点を数える。作業の流れと結果は「2.5.1.」および「2.5.3.1.」に詳しい。手紙類には上野直昭および家族との連名のものが含まれることから、今後、直昭関係の手紙類を受け容れた教育資料編纂室とデータを共有していく見込みである。

4．紙資料のデジタル化

資料保存と利用のためデジタル化を行った。

・明治時代文書「自明治卅三年至昭和九年　學事年報」全 1 綴
・占領期の文書綴「聯合軍最高司令官総司令部ヨリノ指令」全 1 綴
・大学学報　279 号分（Web 上の PDF 版とデジタル版あわせて 350 号分を整理）
・学内外展示のための写真デジタル化：50 点
・データのみ寄贈される写真等の保存のためのデジタル化：300 点

学内外における利用目的のためのデジタル化の需要は増加すると見込まれる。
来年度以降はアーカイブズ構築のため、短期・中期計画に沿ってデジタル化を進める。

5．対応業務について

▶学内外対応件数（来訪・電話・メール、郵便等による）

平成 25 年度 67 件
平成 26 年度 97 件
平成 27 年度 104 件　例：卒業生家族の在籍等、マスコミ：戦没学生 3 名の調査

※27 年度の場合、常時６〜８件の照会・相談に並行して対応している。

▶相談の例：

▷戦没者関係の調査（戦後 70 年にあたる平成 27 年はご遺族とマスコミの依頼を受け対応）

ケース①出陣学徒で戦病死した生徒について。新聞数紙が取り上げ、作品は音楽学部オープンキャンパスでも演奏された。在学中に学んだ足跡など調査。
この人物については、ドキュメンタリー映画を専攻する他大学学生が、テーマとして映画制作したいと遺族を通じて依頼があり、作曲されたオペラ断片の原作や影響を受けた環境などについて新たな調査が始まっている。

ケース②出陣学徒で訓練中に殉職した生徒について。調査の結果、師事した教師が判明したことで、遺族と知り合いの研究者が作品の解明にも乗り出した。
作品演奏会が作曲者の郷里で行われた。

ケース③繰り上げ卒業生で南洋を移動中に戦死した生徒について。すでに生徒の郷里の放送局などが取り上げていたが、遺族よりあらためて母校での足跡を知りたいと依頼。在学中の調査を行った。遺族から提供された情報には、学友（戦没学徒）についての手掛かりが含まれていた。

▷卒業生調査（子孫、研究者、マスコミ関係による依頼。16 件すべて判明）
ケース①京都帝大の工学部工業化学科教授・喜多源逸と結婚した前田襄について。
ケース②大正時代にヴァイオリンを専攻し、卒業から 2 年後に留学先のベルリンで自死した先祖について東京音楽学校で学んだ確証を得て青春期を知り、慰霊顕彰したい（ご遺族から留学中の写真提供）
ケース③東京美術学校を卒業した留学生でオペラにも出演した女性について、東京音楽学校での様子を知りたい（その後、当室で情報収集した結果、別の学校で学んで可能性が大きいことを依頼者に伝えた。その後も相談は続き、対応継続中。伝記的研究に基づく出版物を準備中）
▷長期の対応（完了した事例と継続中の事例）
ケース①7 年越しの事例。始まりは昭和 15 年の幻の東京五輪と万博の音楽の資料照会であった。その後質問は当時の演奏会に写る人物の特定、ポスター制作者などに拡大し、夫馬信一著『幻の東京五輪・万博一九四〇』（2016）刊行。
ケース②「戦死した父親は東京音楽学校出身」と聞いたまま 70 年を経過し、ようやく調査に乗り出したが、依頼された名前が東京音楽学校関係に見つけることができず、依頼者の話を聞き直すと、受験前の学歴や演奏会出演の話などから私立学校の可能性も考えられ、東京音楽大学と国立音楽大学に照会したが確認できず、再び詳しい書類をたどり始めている事例。

6．HP 上の資料公開

大学史史料室の資料のデジタル公開としては、情報システムプロジェクト（嘉村情報芸術研究員）の協力により、総合芸術アーカイブセンターの HP より公開された成果物を記す。

（1）「東京音楽学校が作った歌」http://archive.geidai.ac.jp/597（平成 26 年 1 月公開）
百年史編集時における調査から科研調査に展開し、楽譜原資料や復元音源の録音などから新たにコンテンツ化された労作である。公開に際しては、それぞれ著作権関係をクリアし、作詞者の著作権者連絡先不明により最後まで難航した 1 曲については、文化庁著作権課にも度々相談したが、最終的には遺族 8 名の承諾を得ることができ、7 曲の公開に至った。

（2）大学史史料室「青い箱」写真 http://archive.geidai.ac.jp/3395（平成 27 年 2 月公開）
公開された写真のほとんどが昭和 52 年（1977）の創立 90 周年記念誌「音楽学部の歩み」に掲載されているが、それ以外の写真も含まれ、資料群の形成由来は判然としない。昭和 52 年の基準では肖像権、プライバシー権等もほとんど問題にされなかったと考えられるが、有名演奏家、常勤教員、当時の学生も写っていることから、HP に掲載しつつ著作権関係の研究課題ともなっている。

（3）吉本光蔵撮影日露戦争写真 http://archive.geidai.ac.jp/4241（平成 27 年 10 月公開）
明治時代に活躍した海軍軍人・吉本（1863 年 11 月 16 日[文久 3 年 10 月 6 日]～1907 年[明治 40]6 月 11 日）は東京音楽学校でクラリネットの名手として客演したことがあり、戦争では第二艦隊旗艦「出雲」に乗り組み従軍した。資料は吉本の親族からの寄贈で、写真 46 枚中には銀化により不鮮明な画像もあるが、稀少な資料である。

7．資料の掲載・転載（21 件）

▷博物館明治村におけるパネル展示に音楽取調掛の雇い外国人メーソンの写真。
▷全国大学史展の学生たちの戦後コーナーに、第一回芸術祭の野外演奏写真。
▷デジタル教科書に音楽取調掛および東京音楽学校の校舎の写真掲載
▷専修大学の創立者顕彰企画展のパネル展示に伊澤修二と目賀田種太郎写真
▷音楽学部オープンキャンパス（平成 27 年 7 月）における鼎談（宮田学長・澤学部長・大中恩登壇）のスライドに東京音楽学校時代の卒業写真等を提供・作成
▷その他：藝大定期演奏会および上野学園大学定期演奏会等への人物、楽譜、演奏会写真のデータ提供、研究書、同好会誌、論文への人物写真・楽譜画像の掲載等

８．イベント及び学会等における大学史史料の発信

（1）音楽学部のイベント：ホームカミングデイ講演（平成 27 年 1 月）に文書と写真資料を投影

（2）学会発表・シンポジウム：東洋音楽学会シンポジウム（25 年 11 月）、洋楽文化史研究会シンポジウム（26 年 1 月）、アート・ドキュメンテーション学会シンポジウム（26 年 6 月）、東洋音楽学会研究発表（「乗杉嘉壽東京音楽学校長時代への敗戦後の視座の転換－－－『聯合軍總司令部ヨリノ指令』「小宮豊隆小宮豊隆資料を手掛かりに」（27 年 11 月）、海道東征シンポジウム（27 年 11 月）のスライドに文書資料と写真投影。

（3）論文「乗杉嘉壽東京音楽学校長の青年期における社会教育的教育観の形成」（『東京藝術大学音楽学部紀要』40 集、平成 27 年 3 月、91-106 頁）

（4）企画展示にて原資料およびデジタル複製資料の展示

▷平成 26 年と 27 年の文化祭（「藝祭」）期間に、大学史史料室内で資料展を行った。
▷平成 26 年は寄贈資料を紹介する趣旨で、近年とみに増えた寄贈資料を公開した。
▷平成 27 年は寄贈資料の初公開を行ったほか、戦後 70 年に鑑み、東京音楽学校と戦争に関連する資料に光を当て、戦没学徒のご遺族から提供された資料も公開した。

展示物約 200 点を、学内資料と寄贈資料が約半々で構成した。以下は展示リストの一部である。

「明治十八年卒業登録簿（文書綴）」
「音楽取調掛全科卒業生（写真）」
「オルフォイス演奏記念（寄贈・演奏会写真集）」
「宣戦の詔勅（巻物）」
「東京音楽学校学生歌（寄贈・楽譜）」
「通信教育のテキスト『ピアノ奏法』（寄贈）」
「岡田二郎　海軍委託生第 30 期生（寄贈・写真）」
「片山正見氏の作曲法受講の記録（寄贈・ノート）」
「田中ひさ氏写譜　ヴィエニャフスキ《スケルツォ・タランテラ》(寄贈)」
「田中ひさ氏　音響学講義ノート（寄贈）」
「山田耕筰『若き日の狂詩曲』直筆原稿（寄贈）」
「昭和十八年九月　山本元帥讃仰　演奏旅行 収支計算書　東京音楽学校（文書綴）」
「日露海戦写真（軍楽隊ノ整列）（寄贈）」
「精勤賞（寄贈・文箱）」
「討清軍歌（寄贈・手稿譜）」
「歌劇ボカチオ　恋はやさしい野辺の花よ！（寄贈・楽譜）」
「昭和十八年十月－十九年三月時間表(文書綴)」
「鎮魂歌 正宏君の英魂に捧ぐ 鬼頭恭一（借用・手稿譜複製・原本は靖國神社所蔵）」
「戦死届『復学願書』（文書綴）」
「「白狐」第二幕　村野弘二作曲　岡倉天心原作オペラ（借用・手稿譜）」
「Music Note（借用・作曲のスケッチ）」
「聯合軍最高司令官総司令部ヨリノ指令(文書綴)」

（5）見学者受け入れによる藝大史の普及と資料紹介

▷修学旅行：①奈良県立高校の音楽科、②長野県伊那市立高遠小学校 6 年生、
▷宮崎県高等学校長会（←校歌の作曲が東京音楽学校教員。5 名×2 回）、
▷本学受験生のための施設見学：音楽学部楽理科、大学院音楽研究科音楽文化学専攻
アーカイブズ関係者の見学：①東海大学、②専修大学

2.5. 大学史史料室のアーカイブズ構築に関する実践報告

2.5.1. 教育研究助手より

平成 25 年度より３年間の業務を終えるにあたって
―大学史史料の存在意義と問題点、今後の展望―

大学史史料室（音楽）教育研究助手　星野厚子

はじめに

報告者は、総合芸術アーカイブセンター（以下、アーカイブセンターとする）発足後の３年目、すなわち、平成 25 年４月から３年間、大学史史料室（以下、当室とする）において、教育研究助手をつとめた。
業務は、目録作成（史料のデータ入力）、歴史的史料のデジタル化（文書・写真等のスキャン）を中心に行った。この２点を述べれば報告は完了してしまうが、業務に携わる中で、当室所蔵の史料群がいかに貴重なものであるか、そして、目録作成とデジタル化が、アーカイブ（とくに文書系アーカイブ）にとっていかに大切な業務であるかを報告者自身が痛感したため、具体的な事例を交えながら報告することとした。なお本文では、当室所蔵の学内文書を所蔵史料、学外から当室に寄贈された史料を寄贈史料と呼ぶこととする。

１．業務内容

１年目の主な業務は、前任者から引き継いだ所蔵史料の目録作成と、寄贈史料の目録作成を行った。1 年目で、所蔵史料の目録作成はほぼ完了した。

２年目は、寄贈史料の目録作成を中心に行ったほか、写真を中心に、デジタル化作業を行った。催しでは、大学祭（「藝祭」）での史料展示、音楽取調掛発足 135 年記念のホームカミングデイにおける史料展示にかかわった。

３年目は、２年目に引き続き寄贈史料の目録作成、デジタル化作業を中心に行い、所蔵史料の点検も順次行った。また、大学祭での史料展示にかかわった。

２．目録作成とデジタル化

（１）所蔵史料と寄贈史料

報告者は、平成 25 年４月から平成 28 年２月末日までに、所蔵史料 2201 点、寄贈史料 1483 点のデータ入力を行った。寄贈史料の内訳は、101 名からの寄贈史料 1138 点（このうち、当室の史料を利用した成果物の寄贈は、60 名から 78 点）、63 機関からの寄贈刊行物 345 点である。

所蔵史料は、明治時代からこんにちまでに東京音楽学校および本学にかかわる文書綴、写真類などが大半を占める。保存状態は、おおむね良好な史料が多いが、作成から 100 年以上経過している史料など、表紙や背表紙に劣化や損傷のあるものも少なくない。

寄贈史料は、①東京音楽学校や本学にかかわった人物に関する史料、②当室の史料を利用して執筆された刊行物類、③大学等諸機関の刊行物類、の３つに大別される。①は、教職員、卒業生、本学関係者からの寄贈で、史料の種類は、在学当時使用していた楽譜や書籍、講義録、卒業アルバム、演奏会パンフレット、賞状、録音映像資料など、多岐にわたる。②は、当室利用者が執筆した著作物、すなわち、書籍、論文、新聞記事などである。③は、全国大学史資料協議会や、各大学から届く報告書やニュースレターなどである。その他に、音楽研究者・音楽愛好家からの演奏会プログラムや書籍類もある。

（２）目録作成

目録の作成には、所蔵史料、寄贈史料ともに、エクセルを使用した。
所蔵史料は、１点ずつ箱や封筒に封入して保管している。目録作成は報告者の着任以前から進められており、着任後は、入力方法などをそのまま引き継いで作成した。設定項目は、【配架場所】、【史料名】、【備考】である。
寄贈史料は、史料を寄贈者ごとに整理して中性紙箱などに収納する方法を採用しているため、「〇〇氏寄贈史料」などとタイトルをつけ、データも寄贈者ごとにシートを分け、史料の種類に特化した項目を設定している。項目は、【史料名（和文）】、【史料名（欧文）】、【数量】、【分類】、【種類】、【保存状態】、【著者】、【作曲者】、【備考】、【受入日】、【スタッフ用備考】である。【分類】と【種類】は似通っているが、【分類】は、エクセルの機能で［演奏会資料］、［楽譜］など、10 個の入力規則を設定して選択式にし、表記の揺れが少ないようにした。【種類】に

は、「合唱譜」、「演奏会プログラム」など、史料のより具体的な内容を入力している。一般的には、史料への書込みなどは歓迎されないが、寄贈史料では、使用形跡が重要な手がかりとなりうるという特徴を備えているため、署名や書き込みの有無、保存状態を細かく書き留めるようにしている。必然的に備考欄の情報も増える。

現在の史料総数は、所蔵史料 4375 点、寄贈史料 6651 点である。作成した目録は、当室備え付けのパソコンで検索できるようになっている。

（3）デジタル化

報告者が、歴史的史料のデジタル化作業に本格的に着手したのは２年目以降で、これまでに一時的な使用目的のものを含めると約 363 点のデジタル化を行った。

所蔵史料・寄贈史料ともに、経年劣化は避けられない。すでに述べたとおり、作成から 100 年以上経過している史料もあり、かつ、その史料の多くが唯一無二であるためである。このような史料は閲覧希望も多く、原本保存のためにもデジタル化しておく必要がある。写真によっては銀化が進んでいるものもあり、デジタル化は急務であることは言うまでもない。

３．史料展示

報告者は、平成 26 年度、27 年度の２回、大学祭「藝祭」（９月初旬）に合わせて開催された史料展示にスタッフとしてかかわった。

とくに平成 26 年度では、「寄贈史料展」として、当室に寄贈された史料を中心に展示した。音楽教育研究者、本学教職員、学生、史料寄贈者が主な来場者であった。普段は書架等に収納された史料が、展示ケース内や掲示物として所狭しと並んだ展示は、充実したものとなった。執務室を展示場所としたことも、当室の現状を知っていただく上でよい機会であったと思う。また、特筆したいのは、来場者同士、とくに、史料寄贈者同士が顔を合わせることによって、時空を超えた同窓会のようなものが展開されたことである。史料寄贈者は、本学関係者のご遺族が多く、ご自身の親世代が演奏で共演していたことや、同じ時期に本学にかかわっていたことなどを懐かしそうに語っていたことは、印象的な出来事であった。

４．問題点と今後の展望

（1）アウトプット

この３年間で、目録作成というインプットは相当数行えたと自負している。しかし、アウトプット、すなわち公開とその後の利活用のための情報提供がまだ不十分であることが現状である。

ここには、歴史的史料や、個人史料を扱う上での大きな問題がある。史料の性質上、目録作成を完了した直後に公開できることはまずない。歴史的史料には、個人成績や書簡など、個人情報にかかわる史料も多く含まれている。そのため、保存期間や著作権等に鑑み、内容を検証する二次的作業が欠かせない。寄贈史料では、寄贈者の承諾があってからの公開が望ましい。

デジタル化作業については、アーカイブセンターのホームページから、その成果の一部が公開されている。デジタル化した史料の公開は、二次使用のコンセンサスを徹底し、今後も一層力を入れたい業務である。

（2）年史の編纂を見据えて

本学の草創期からの歴史は、『東京芸術大学百年史』（以下、『百年史』とする）11 冊（音楽学校・音楽学部 6 分冊、美術学校・美術学部 4 分冊、大学篇 1 冊）によって、明治 20（1887）年以降の 100 年間の事跡が、平成 15 年までにまとめられた。当室に寄贈される諸大学の大学史編纂書籍類でも、これだけの大部は例をみない。

『百年史』刊行後の現在、150 年史、200 年史を見据えた史料の蓄積を常に念頭に置いている。具体的には、とくに学内行事にかかわる学内で作成される事務文書、学内刊行物の収集である。本学は、通常の校務のほかに、演奏会などの催事が数多く行われていることが特徴である。本学の演奏会を調べるための有効な文献にもなっている『百年史』に鑑み、演奏企画室を通じて、本学がかかわった演奏会のパンフレットを定期的に収集・蓄積している。また、学内演奏会や卒業試験、各科で行われる小規模の演奏会など、実技の教習課程がより具体的に見えてくる史料の収集を、可能な限り行っている。しかし、日々様々な催しが行われているため、全てを網羅できていないのが現状である。今後は、学内刊行物は当室に必ず 1 部提供していただける仕組みを作りたい。

（3）学内における大学史史料の重要性の認識

当室は、『百年史』編纂の後継組織として認識されているほか、当室を知る方法は、利用案内とアーカイブセンターのホームページである。学内における大学史史料、そして大学史史料室の業務は、年々周知されてきているように思う。それは、本学学生からの文書類の閲覧申し込みの増加、本学事務からの問合せの増加からもわかる。しかし、学外の利用者数に比べると、学内者の利活用は少ない。繰り返しになるが、当室の所蔵史料は、東京音

楽学校・本学事務がかかわる文書類と写真が大半を占めている。すでに『近代日本における音楽専門教育の成立と展開』[1]でその大部分は整理・紹介されているが、その内容は、入退学書類、名簿、試験問題、試験成績、授業時間表などである。寄贈史料では、楽譜や講義録、卒業アルバム、演奏会パンフレットなどである。これらの史料は、当時の大学のカリキュラムや指導方法を知る一次史料であり、本学の成り立ちを伝える一級史料といえる。一見、大学の歴史を知ることと、本学の主体である実技の教習は乖離しているように考えられがちであるが、「芸は人なり」という言葉があるとおり、本学卒業生の演奏傾向や研究分野には、本学の教育課程が大きく寄与していることは言うまでもない。このことから、大学史史料から読み解く教育機関としての本学研究、本学が輩出した演奏家・研究家の研究、入学者数が減少傾向といわれている昨今、原点回帰に基づく本学の将来性の検討において、とくに有効な史料群となりうるであろう。

むすびにかえて

本学はどのような歴史を経て現在に至っているのか、それを知ることができるのは大学史史料である。偶然訪れた音楽学部の学生が、当室入口に掲示してあった地図に目を留め、現在の敷地配分とは異なることに驚いていた。３年前の報告者もそうであったが、自身のかよった大学の歴史について無知であることを、当室に来て痛感したのである。

大学史史料は、実技の習得や演奏技術の向上に直接的にはかかわりのないものかもしれない。しかし、こんにちの音楽教育の礎を築き上げた東京音楽学校の教育方針は、とくに、日本人が西洋音楽を学ぶという普遍的な本学の状況に、必ず光を照らすものであると確信している。そのために、まずは学内における大学史史料の重要性の周知、そして史料の利活用に向けた環境整備が必須であることを痛感している。

業務を通じて、橋本久美子特任助教には、さまざまなご教示をいただいた。史料的なことはもとより、問い合わせに対する真摯な対応や、史料寄贈者への礼節を重んじる姿勢は、報告者にとって大変印象深く刻まれている。

[1] 平成 17－19 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究成果報告書、研究代表者：大角欣矢、東京：東京芸術大学音楽学部楽理科、2008 年 3 月。

2.5.2.　アーカイブアシスタントより　平成 25 年度

2013 年度 AA 報告書

アーカイブアシスタント　太田 郁
（大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 2 年）

作業概要
1、所蔵資料の目録作成・データ化、整理
・藝大学報デジタル化
・演奏会情報の入力（大学史文書プロジェクト内）
・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力
・演奏会パンフレット類の整理
・学内文書類の目録作成

2、寄贈資料の目録作成・データ化、整理
・大久保氏寄贈資料の整理（移動）
・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜の目録を作成中

3、その他
・明治大学博物館展示「近代日本の幕開けと私立法律学校―神田学生街と法典論争」見学

詳細
1、所蔵資料の目録作成・データ化、整理
・藝大学報デジタル化（スキャニング）。昨年度から引き続きの作業。今年度は本部庶務課より資料をお借りして PDF 化作業に入った。学報は 1951（昭和 26）年より発行されており、確認できた最終号は 2009 年 5 月の第 457 号である。号外 16 号、その他 3 号もある。第 374 号以降は藝大ホームページで閲覧可能である。これまでに 341 冊分の確認をした。
・演奏会情報の入力。2007～2013 年度に行われた演奏会パンフレット、チラシ等から、演奏会に関する情報をまとめた。星野教育研究助手から作業を引き継いだ。
その後、音響・映像プロジェクトでも音源公開の為に同様の情報入力をしていることがわかり、合同で作成することになった。音響・映像プロジェクトでの音源公開に必要な著作権・著作隣接権の問題から、作曲者・出演者等についても全て反映させた。今年度は 2012～2013 年度の演奏会情報と、「M コレクション」（過去に行われた藝大の演奏会の音源）の演奏会情報をまとめた。2012 年度は 111 件、2013 年度は 68 件の確認が出来た。
・史料室内に保管されていた未整理の演奏会パンフレット類をファイリングした。そのほとんどは 2007～2013 年度のものである。百年史以前のパンフレットについては、史料室では演奏会種別（藝大オペラ、オーケストラ定期など）毎にファイリングしていたが、近年の演奏会は企画の種類が増え、種別で分類することは難しいので、日付順にファイリングした。
・美術学部教育資料編纂室倉庫に保管してある音楽学部の資料について、その目録を作成した。

2、寄贈資料の目録作成・データ化、整理
・大久保氏寄贈資料について、保管環境を整えるための整理に関わった。
・瀧井敬子氏寄贈資料の整理。藝大の定期演奏会を中心とした演奏会パンフレットと、雑誌『音楽芸術』付録の楽譜が寄贈されており、後者の目録を作成中である。藝大図書館にもいくつか所蔵があるシリーズなので、図書館の所蔵の有無についても確認している。現段階で 103 件確認済みである。

3、その他
・明治大学博物館で行われている企画展示「近代日本の幕開けと私立法律学校―神田学生街と法典論争」を見学した。大学史文書の活用・展示方法についての調査見学を目標にしていた。
この会は、複数の大学の大学史資料課が共同主催したもので、手紙、写真、地図など各大学が所蔵している文書類の展示によって、創立者たちの理念などが垣間みられた。

作業に関して
・演奏会パンフレット情報入力については、大学史文書担当箇所の入力作業は星野教育研究助手と共同で行ったので、どこまでの情報を取っていくべきか、史料室で今後活用できる状態にするために必要な情報は何か、といった疑問点について相談しながら入力できる点で、複数人だと作業しやすいと感じた。
・史料室内には百年史以後〜2011 年頃までのパンフレットは揃っていない。この間に定期演奏会以外にも演奏会シリーズ、プロジェクトや単発の演奏会も増えているようで、今後パンフレット類が集まったときには演奏企画室等に確認しながら、入力・分類について再度考える必要があると思われる。

アーカイブアシスタントより　平成 26 年度

2014 年度 AA 作業記録

アーカイブアシスタント　吉田 学史
（大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 2 年）

作業概要
1. 資料の目録作成、整理
・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力
・演奏藝術センター寄贈資料のうち、演奏会プログラムの目録作成
・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜等の目録作成
2. 寄贈資料展に関する作業
3. 明治 29 年演奏会の楽曲に関する調査
4. その他

詳細
1. 資料の目録作成、整理
・大学史文書、音響・映像プロジェクト合同、演奏会情報の入力
昨年度に引き続き、音響・映像プロジェクトと合同でここ数年の演奏会情報をまとめた。今年度、報告者は 2011 年度、2013 年度、2014 年度（2015 年 1 月まで）の演奏会情報に関わっており、そのうち 2011 年度の演奏会情報 43 件、2014 年度の年間演奏会概要（計 100 件）と詳細情報 57 件を入力した。なお 2011 年度の情報に関しては、大学史史料室に演奏会パンフレットが完全には揃っていないため、簡潔な情報しか記載されていないチラシから情報を補ったものも含まれている。また、情報記載方法の見直しやそれに伴う修正作業も行った。

・演奏藝術センター寄贈資料のうち、演奏会プログラムの目録作成
演奏藝術センターから寄贈された資料には大量の演奏会チラシ・パンフレットなどが含まれており、今年度はその目録を作成した。これらの演奏会資料はそれぞれ 1 部しかないものから 124 部あるものまで部数がまちまちであった。全てを合計すると 76 種類の演奏会資料があり、その総部数は 1392 部であった。これらの資料は今後各種 2 部ずつを選び出し、残りは処分される予定である。

・瀧井敬子氏寄贈資料のうち、雑誌『音楽芸術』付録楽譜等の目録作成
瀧井敬子氏寄贈資料のうち雑誌『音楽芸術』付録楽譜として分類された資料の目録作成を昨年度に引き続いて行い、完成させた。報告者は『音楽芸術』付録楽譜 26 件とその他資料 5 件、合計 31 件入力した。

2. 寄贈資料展に関する作業
藝祭期間中（2014 年 9 月 5〜7 日）に大学史史料室で行われた寄贈資料展に際して展示の準備から後日の片付けまでの作業を行った （7 月 16 日〜9 月 10 日）。作業は会場設営、資料の配置・展示、展示品リスト作成など多岐にわたった。報告者は部屋の計測、展示資料の額装や掲示、展示品リスト作りや寄贈された成果物に寄贈者名を記した紙片の挟み込みなど様々な作業を行った。
また、展示期間中には AA とは別にスタッフとして勤務し、来場者応対、来場者数カウント、写真撮影などを行った。

3. 明治 29 年演奏会の楽曲に関する調査

2015 年 1 月 10 日に開催された東京藝術大学音楽学部ホームカミングデイ第 1 回にて行われた「明治廿九年第一回同聲會演奏會一部再現演奏会」のための調査を行った。主要な作業はまず、再現演奏する曲目を特定するために、当時のプログラムや批評文による断片的な情報から当時演奏された曲目の特定を行った。報告者は芸大図書館所蔵資料や Web 上の資料などから、S.Webbe やハイドンなどの楽曲特定を試みた。また、著作権等の問題を確認するために、筆名で書かれた批評文の著者や、当時の楽曲の編曲者 2 名の生没年調査も行った。

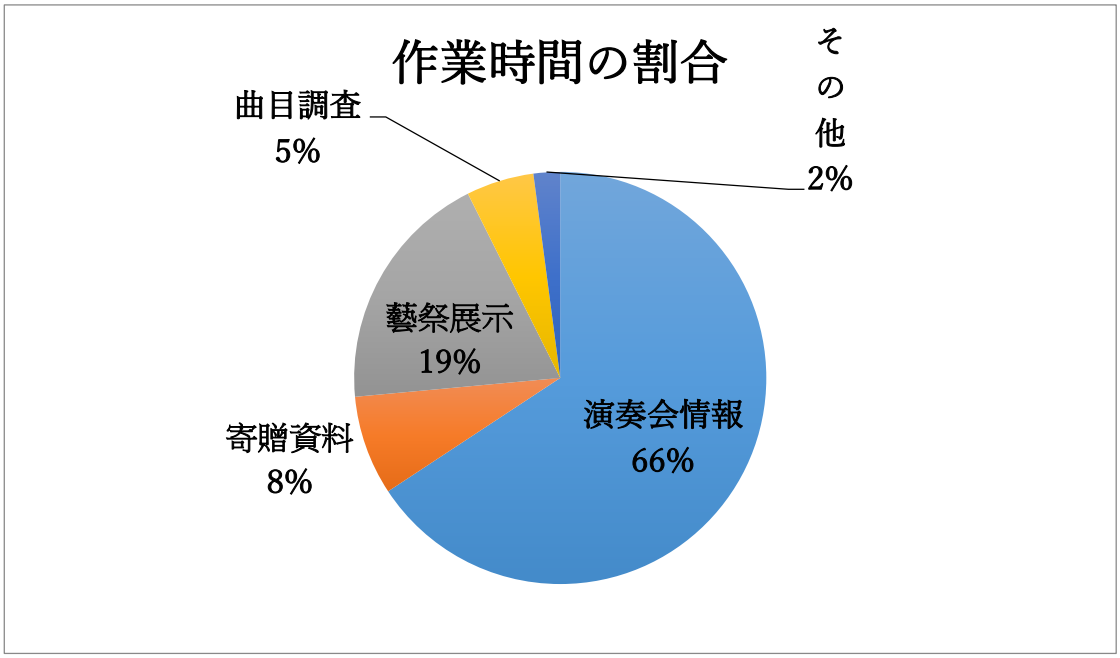
4. その他

以下の作業も行った。

・来訪者の探している資料の下調べ
・寄贈資料リストのチェック・見直し
・寄贈資料の保存状態の点検・入力

参考：大まかな作業時間とその割合（※出勤表を参考に再構成）

作業	時間（単位：時間）
演奏会情報関係	157.75
寄贈資料関係	18.75
藝祭展示関係	45.75
演奏会曲目調査	12.75
その他	5
合計	240



アーカイブアシスタントより　平成 27 年度

2016/02/17

2015 年度 AA 作業記録

アーカイブアシスタント　吉田 学史
（大学院音楽研究科音楽文化学専攻修士課程 3 年）

作業概要
1. 資料展示に関する作業
2. 上野ひさ関連資料の調査と整理
3. 大井悌四郎関連資料のリスト作成
4. 歴史的資料・写真のデジタル化
5. 演奏藝術センター寄贈資料の演奏会プログラム整理
6. 東京音楽学校時代のピアノ課題データの補足
7. その他

詳細
1. 資料展示に関する作業
2015 年 9 月 2〜4, 6 日に大学史史料室で行われた資料展示に際して会場の準備から当日のスタッフ、後日の片付けまでの作業を行った（2015/08/07-09/30）。作業は多岐にわたるが、その中で報告者は準備として展示ケースの運搬・設置、展示資料の選定（木下保所蔵楽譜、吉本光蔵による日露戦争写真など）、資料の複製（スキャン）・額装・掲示などの作業を行った。展示期間中はスタッフとして勤務し、展示案内、会場監視（来場者数カウント）、展示資料の整備点検、展示資料のデータ入力（リスト作り）などを行い、展示期間終了後には資料の収納、展示ケースの撤去などを行った。

2. 上野ひさ関連資料の調査と整理
東京音楽学校出身の上野（田中）ひさに関する資料の受け入れのための作業を行った。まず、上野邸を訪れ音楽関連資料と思われるものを段ボール箱に詰め、史料室にて大まかな分類（書籍、楽譜、手紙など）を行った。その後、資料をリスト化して整理した。報告者はこれらの作業を部分的に担当した。また、受け入れられた段ボール箱は数十箱に及び、これらの資料のうち一部は資料展示の際に公開された。

3. 大井悌四郎関連資料のリスト作成
史料室に寄贈された大井悌四郎関連資料のリスト作成作業を行った。未入力であった楽譜や書籍などの寄贈資料のうち、段ボール 3 箱分の資料をリスト化した。これらの資料には書き込みがされているものや新聞記事を貼付けてあるものも多く、今後の活用が期待される。

4. 歴史的資料・写真のデジタル化
史料室所蔵の「連合国総司令部ヨリノ指令」ファイル一綴りと、昭和初期の東京音楽学校に関する写真アルバム 2 冊＋数枚の関連写真（卒業生所蔵）のデジタル化を行った。

5. 演奏藝術センター寄贈資料の演奏会プログラム整理
昨年度に引き続き、演奏藝術センターから寄贈された資料を整理した。昨年度作成の目録（詳細は昨年度の作業記録参照）によると寄贈された大量の演奏会チラシやパンフレットなどはそのほとんどが大学史史料室に所蔵していない資料であったため、これらの資料をそれぞれ 2 部ずつ年代順にファイリングした。

6. 東京音楽学校時代のピアノ課題データの補足
以前より Excel データの形にまとめられていた東京音楽学校時代のピアノ課題のリストの修正に着手し、作曲家名や作品名が特定できるものに関しては欧文表記でリストに加え、リストから抜け落ちていたピアノ課題の補足入力も行った。しかし、楽曲情報の不足や現在とは異なる人名表記のために特定できなかったものも少なくない。

7. その他

以下の作業も行った。

・寄贈資料（自筆譜資料など）の点検
・教育資料編纂室の引っ越しに伴う資料移動関連作業（資料の箱詰めなど）
・演奏会関係資料の整理
・第 6 ホール関係資料運搬
・明治大学博物館（第２回全国大学史展「学生たちの戦前・戦中・戦後」）見学

2.5.3. 寄贈資料整理の記録

2.5.3.1. (1)大久保利恭氏旧蔵史料整理作業報告

大久保利恭氏旧蔵史料整理作業報告

2013 年 10 月 31 日　石田桜子

2011 年 11 月に大久保利恭（としひろ）氏より演奏会プログラムを中心とする史料群が大学史史料室に寄贈された。在職中より石田が整理作業にあたっていたが、2013 年 10 月、その残務を業務委託によって完了した。

委託期間は 2013 年 10 月 7 日～31 日、そのうち大学史史料室における作業日は 7 日、21 日、24 日、28 日の 4 日間である。

【史料の構成】

史料群は演奏会プログラム、ちらしとチケット半券及びその他の付帯物によって構成される。受入時にすでに寄贈者によって大まかに、演奏会プログラム（以下「プログラム」）と、「チラシ」「入場券」と書いた袋とに仕分けられていた（以下「『チラシ』」袋）、「『入場券』袋」）。主な数量は以下のとおり。

プログラム　214 点
ちらし　　118 点
（うちプログラムに付帯 23、「チラシ」袋にあったもの 95。この 95 点のうち相当するプログラムがあるもの 45、ちらしのみのもの 50）
チケット半券 150 点
（未使用チケットを含む。うちプログラムに付帯 112、「入場券」袋にあったもの 38。この 38 点のうち相当するプログラムがあるもの 24、相当するちらしがあるもの 2、チケットのみのもの 10）
チケット袋　14 点　（「チラシ」袋と「入場券」袋にあったもの。うち相当するプログラムがあるもの 13 点）

公演時の告知、新聞切り抜きなど、その他の付帯物はすべてプログラムに挟み込まれていた。

史料の大半が 1950 年代から 1960 年代にかけての演奏会プログラム、ちらし、チケットであり、内容はクラシックのみならず、ジャズ、タンゴ、ポピュラーなどそのジャンルは多岐にわたる。コルトー、カラヤン、ハイフェッツ等外来音楽家が中心で初来日公演も多く、洋楽史上貴重な史料群と言えるだろう。特徴的なのは、1956 年 4 月のヒンデミットとウィーン・フィル、1959 年 5 月のストラヴィンスキー特別演奏会（チケット半券のみ）、1953 年 10 月のジャック・ティボー慈善演奏会（チケットのみ。その年の 9 月にティボーは飛行機事故で死去しているため、開催されなかったと考えられる）など。

【整理方法：史料本体】

プログラムを中核とし、次いでちらし、チケット及びチケット袋の順で段階的に整理した。

まず、プログラムに公演年月日を記載した整理用の付箋を立て、年月日順に配列し、メタデータを作成した。ツアープログラムの場合は、その初日を採用した。この際、年代が記載されていないプログラムに関しては年代同定のための調査を行った。なお、便宜上、1961 年までは 1 年ごとにファスナー付の透明袋に収納。今後は中性紙保存箱に収納予定。

続いてちらし、チケット及びチケット袋も同様に整理し、それと並行して、プログラムとのマッチング作業をプログラムのメタデータを元に行った。その結果、相当するプログラムがあるものはメタデータに出所を記録した上でプログラムの付帯物とし、それ以外のものは独立した史料として扱った。

付帯物扱いのちらし、チケット等はプログラムに挟み込み、それ以外のものは整理用付箋とともにクリアファイル、クリアブックに収めた。

【整理方法：メタデータ】

Excel を使用し、プログラムは「pg」、ちらしは「flier」、チケットは「ticket」（それぞれ相当するプログラムがないもの）シートに分け、年代順にリスト化した。仮の整理番号として、公演年月日を数字 8 桁にしたものを付記し、同日に複数史料があるばあいは a,b…とアルファベットを加えた。これは、通し番号にくらべて配列・検索の便宜性を向上し、今後の修正・変更を容易にするためである。

今回は受入リストを兼ねた第一次リストであるため、項目は公演年月日、演奏会名、付帯物を中心とし、演奏者名は最低限に、演奏曲目も注記程度にとどめた。

・ 公演年月日

ツアープログラムの場合、配列の関係上「月」欄には初日の月のみ入力し、その後の月は「日」欄に［］に入れて追記した。同定調査によって判明した年月日も［］に入れ、その典拠を備考に記載したが、調査を行ってもなお不明確な場合はさらに「?」を追記した。

・ 演奏会名

原則的に表紙および中扉より転記。

・ 演奏者名

日本人演奏家および日本の演奏団体は日本語、外来演奏家および演奏団体は原語もしくは英語で表記。区切りはすべて「、」に統一。

【今後の課題】

現在、暫定的にビニール製のファスナー付袋やクリアファイルなどに史料を収めているが、大きさがまちまちであるため、袋に入らない物は別置したり、ちらしなどの中には折りたたんだまま収納せざるを得ないものもある。史料の保存を考えると、将来的にはできればデジタル化した上で、1 点ずつ中性紙の袋に入れ、整理番号を貼付するのが適当と考えられる。

また、受入時にすでに湿気等で互いに張り付いていた史料もあり、この剥離作業も専門家の手で行われることが望ましい。

さらに、時間的制約もあり、年代同定調査が不完全な部分もある。本格的なデータベース作成の際には、追加調査が期待される。

2.5.3.2. （2）上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 i

上野ひさ氏資料の整理・目録作成を終えて

作成日：2016 年 1 月 26 日
作成者：仲辻真帆

◇担当作業について

2015 年 11 月より 2016 年 2 月まで、上野ひさ氏（本稿ではこれ以降敬称を省略する）の資料に対し、以下の 4 つの作業を担当した。作業時間は 50 時間であった。

①楽譜・書籍の目録作成
資料名（著者）や出版に関する情報のほか、保存状態、署名と書き込みの有無などを調査し、その結果をデータ入力した。
→ 書き込みの内容については、一部のみ備考に記した。

②演奏会プログラムの整理、状態確認
演奏会プログラムを年代ごとに並べ替え、資料点数をかぞえた。
→ 一部の資料に関しては、明治・大正・昭和といった大分類のみならず、年月日の順に並べた。

③書簡の整理、状態確認
書簡を封書と葉書に大別し、それぞれの資料点数を集計した。
→ 封書が 405 点、葉書が 329 点あったが、上野ひさ宛・直昭宛でないものも多数含まれている。京城時代のものもあった。

④写真の整理、状態確認
写真 995 点を整理・分類した。台紙に貼りつけられた現像写真 32 点、その他の現像写真 826 点、フィルム 114 点、写真葉書（絵葉書含む）19 点、封筒（写真が入っていたと考えられるもの）4 点をかぞえた。

◇作業時の疑問点／今後に向けて

・同一資料が複数見受けられたが、今回はそれぞれ 1 点としてかぞえている。

・音楽関係以外の資料も含まれていた。次の段階でそれらを除外するか。

・楽譜や書籍の目録作成において、分類の方法や記載の仕方が曖昧になっているものもあり、今後検討が必要である。
→ たとえば、〈無伴奏ヴァイオリン曲〉と〈ピアノ伴奏つきヴァイオリン曲〉が同じ扱いになっていたり、〈今回の分類に当てはまらない楽器編成の楽譜〉と〈手稿資料（ノートなども含む）〉がいずれも「その他」となっているのが現状。「資料名」も、〈表紙から得た情報〉、〈標題紙から得た情報〉などが混在しており、「曲名　作曲者編曲者」「曲名　編成」など様々な提示の仕方となっているため、次回は基準や方法を定める必要がある。

・楽譜、書籍、演奏会プログラムには、上野ひさのサイン、別の人（演奏者など）のサインのほか、覚書等の書き込みが記されたものもある。現時点では、上野ひさ自身による書き込みとそうでないものを区別していない。（もし区別するなら筆跡の問題も出てくるだろう。）書き込みの中には年代、場所のほかに重要な記述もあったため、それらを丁寧に検証すべきかもしれない。

・演奏会プログラムについては、今回、東京音楽学校関連のものを区別して資料点数を計上したが、そこには〈東京音楽学校で行われたが主催者が同校でない演奏会〉〈奏楽堂で開催されていないが東京音楽学校の主催による

演奏会〉なども含まれている。実際のところ、一般の演奏会プログラムとして大別されている資料のなかにも、まだ東京音楽学校関連の資料が少なからずまぎれているようである。

・「演奏会プログラム」の中には、演奏会の半券などもあり、今回はそれらも 1 点として計上している。同一演奏会のチラシ、プログラム、半券があったとしても、現在はばらばらの状態である。また、演奏会プログラムのうち、開催年代不明のものも多数あったが、著名な音楽家の来日公演や楽団の定期演奏会など、追跡調査をすれば年代を特定できるものも多いと思われる。

・書簡は上野ひさ宛、直昭宛、その他の人宛のものが混在している。ひさ宛の書簡、あるいは差出人や内容などから絞り込めば、資料点数以上のことがわかると思われる。書簡や写真は年代や場所ごとに改めて整理・分類すべきか。

◇上野ひさ資料の歴史的意味、研究利用の可能性について

・楽譜や洋書も多くあり、中には「Hisa Uyeno Berlin 1926」「Hisa Uyeno 1928 Tokyo」などのように、サイン、年代、場所が書き込まれた資料もある。
写真は、撮影した日時や場所が特定できるものもある。書簡の消印や内容も、ヨーロッパや京城にいた時期などを正確に把握する一助となる。
→　これらの資料は上野ひさ・直昭の経歴を詳細に裏付ける資料となり得る。

・大正期の東京音楽学校およびその在校生に関する研究はまだ十分に行われておらず、その実態解明のために本資料は大いに活用できる。音楽学校時代の上野ひさを伝える資料としては、ノートや写真があった。使用時期は不明だが、書込みのあるヴァイオリン楽譜なども見受けられた。

・演奏会プログラムは大正期のものが多く、当時の楽壇を知る手がかりとなる。また、「当時の声」という点では、音楽関係者と上野ひさとの書簡のやりとりも興味深い。特に書簡や写真は、現代の東京藝術大学に学ぶ学生に、100 年前の卒業生を生身のものとして実感させる。

・個人的には、自分の研究でも核としている「手稿資料」に興味をもった。
上野ひさの場合、京城第一公立高等女学校時代のノートや音楽学校時代のノートは、当時の授業内容などを伝える貴重な資料であり、学生時代を物語る興味深い資料である。

（2）上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 ii

Hisa Uyeno Database and Documents
Thomas Cressy トマス　クレッシ
27/01/2017
（作業時間数―40 時間）

- 担当した作業： I mainly had the task of entering (into a database) the titles, publishing details, condition and whether there was any handwritten notes of the books and music scores held by Hisa Uyeno/Tanaka, as well as some concert programmes and notebooks from her time at the Tokyo Music School.

- 作業上の疑問： I wonder if every person entered the details of the scores/books in the same style, will the final database be consistent when searching for results based on keywords?

- 課題： It would be to make the final database consistent in terms of entry style. Also if there was more time, collections of several different composer`s works and the works displayed in the programme notes could also be entered into the database to help with searches? For example if I search “Bach” into the database, not results from the programme notes or collections of the works of different composers.

- 上野ひさ資料についてコメント： I am very pleased and happy to have worked on creating this database for the documents relating to Hisa Uyeno. I think these are of great value for several reasons. Firstly, they provide an insight into the books and scores held by a violin student while at the Tokyo Music School (those signed “Hisa Tanaka” are especially useful in this regard), especially because of the high amount of piano scores included. The documents from the notebooks and class materials from the Tokyo Music School also provide more details on exactly what was taught in these classes, also the Japanese texts of Western music that was arranged to be sung in Japanese. Secondly, certain scores are signed with dates and have markings that show the music had been played – this not only has value in terms of performance practice studies, but it has helped me identify which pieces of Bach she performed in concert at the Tokyo Music School, which has been unclear until now. It also shows exactly what kind of scores the students at the school were playing and which shops they were buying it from, which is all of great value historically and in terms of the reception and musical culture surrounding Western music during this time in Japan. I will certainly be citing sources from this in my research and it has been extremely useful and productive for me to be involved in this project. There are several documents I have not seen yet that were entered into the database by others, so I look forward to searching the full database for more documents that can help with my research.

- 所感： I am very pleased to have worked on this and I am very encouraged that these kind of documents are being held at Geidai. I hope to be involved in future projects of the Archive Centre, as it was very interesting and useful for my research.

（2）上野ひさ氏関連資料（吉川道子氏寄贈）の整理報告 iii

上野ひさ氏資料業務報告

2016 年 1 月 26 日　太田 郁

●担当した作業内容
国内外の出版譜、図書等の情報入力

●作業時間
12 時間

●作業時の問題
手稿ノート等、特に複数あって外見が似ており資料名を取りづらいものについては、大きさや色、状態など外見上の特徴についても明記する必要があった。
楽譜と文章のどちらも含む雑誌などはどの分類にすべきか迷ってしまった。
表記方法に多少ばらつきが出てしまっている。

●今後に向けて
備考欄とは別に出版年・出版社の項目があると入力の際にデータの取りそびれがないと思われる。
シリーズで所蔵しているもの（教則本、雑誌など）について、どの程度揃っているのか調査すると活用しやすいと思われる。

●上野ひさ資料について
・本資料が藝大にあることの意義
楽譜や手稿ノートは、東京音楽学校の学生が現場でどのような教育が受けていたか明らかにする一端となる。手稿ノートには音楽理論や和声課題などが書かれてあり、当時の器楽科の学習内容を知る事ができる。また、大学史史料室内には上野氏以外の学生の資料も数多くあるため､個人間あるいは年代間で比較することも可能だろう。今後藝大が所蔵することで、東京音楽学校周辺を研究対象とする研究者にとっては資料へのアクセスが容易になる。また、学校史や近代日本の音楽史に関連する資料群の拠点としての役割を果たすことができる。

・本資料の活用
報告者は近代日本の音楽史、特に日本人作曲家を研究対象としているが、上野ひさ資料からは、同時代の演奏家が作曲家とどのような繋がりを持っていたのか探るきっかけを得られそうである。例えば資料には山田耕筰や信時潔ら日本人作曲家の楽譜も含まれており、その作品の演奏機会がどの程度あったのか知る上での情報の一つとなりうる。

・研究対象としての可能性
楽譜・図書を含む出版物からは、国内外の出版事情の一端を窺い知ることができる。また音楽理論書など音楽学関係の所蔵からは、その後の上野氏個人の教育活動への影響を調査できるだろう。演奏会資料からは､『東京芸術大学百年史　演奏会篇』を併用した演奏レパートリー等の研究も可能になると考える。

3. まとめにかえて（結果と提言）

１）目的の達成について

本報告の冒頭（2 頁「1.1.」）にアーカイブセンターの設立目的、大学史文書データ研究プロジェクトの目的を記した。これらの理念と目的に照らして振り返る。

> 総合芸術アーカイブセンターは、①学内に分散する多様な文化資源を調査し、②歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元する等、③文化芸術情報の活用方法を研究する目的で設立された。

センターはまず、①学内に分散する多様な文化資源を調査　した。
学内にアーカイブすべき文化資源がどのぐらい、どのように保管・保存・放置されているのか調査しリストアップした。大学史史料室でも美術と音楽の室内に保存しない文書類が、事務倉庫等にどのような状態で存在するのか調査した。

次に②歴史的に重要な美術・音楽・映像作品や文書史料等をデジタル技術により保存・公開し、教育に還元するため、文書関係の一部ではあるが、デジタル化し、公開し、シンポジウムや授業等に活用した。文書プロジェクトだが、古い楽譜資料から復元演奏し（復元演奏と録音は科研費による）、録音音源と楽譜原資料が連動するコンテンツとして公開した。コンテンツ作成は文書プロジェクトが提供した素材により情報システムプロジェクト（嘉村情報芸術研究員）が行った。

このように①と②の遂行により③文化芸術情報の活用方法を研究する目的は一応の達成を見たと言えよう。

大学史文書プロジェクトはアーカイブセンターのサブプロジェクトとして具体的な実践内容をこう記した。

> この目的に鑑み、大学史文書データ研究プロジェクトは、④東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進し、⑤デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う。

「百年史」編集を終えて以降の大学史史料室は、年史編集からアーカイブズ構築に舵を切り、学部ごとに関連資料の収集と整理を行っていたが、アーカイブセンターの理念と目的を両学部が共有することにより、
④東京藝術大学が保有する法人文書および東京藝術大学の歴史に関連する資料の体系的な収集・整理・保管を推進することができた。

センター発足当時は、資料原物の保存と利用がまだ主流であり、デジタルアーカイブはどちらかといえば後回しで、必要な場合に限りデジタル化していたが、⑤デジタルアーカイブ化による適切な公開活用に関する研究と運用を行う目的で、公開活用を見据えた自主的なデジタル化に着手することが出来た。センターとしてＨＰに公開したコンテンツは 3 点で、そのうち「東京音楽学校が作った“うた”」と「日露戦争写真」については著作権関係の研究と手続きの実践も行った。残る「青い箱」は多様な写真を含んでおり、公開した上で研究中である。

このように④と⑤の目的に対しても、機関内に一定の実践を終えることができた。

２）アーカイブセンターの意義

■アーカイブセンターのプロジェクトによって成し得た事、試み得た事は決して小さくなかった。

美術学部教育資料編纂室はそれまでに長い歴史を刻み、開室まもない音楽学部大学史史料室も「アーカイブズ構築」をキーワードに挑戦を始めていた。全国の大学が周年事業を機に年史編纂からアーカイブズへの道を模索し、とくに国立大学が公文書管理法に照らした法人文書の収集・保管・利用を考えねばならなくなったタイミングもあり、総合芸術アーカイブセンターの発足は、時宜に適ったプロジェクトであった。

藝大文書のアーカイブは、学内のアーカイブ関連部署と連携することで、全学的にのこし・伝えるべき有形・無形の財産を視野に入れ、文書保存の評価選別も行うことができるのである。

アーカイブをキーワードにすると、時代や専門分野を越え、文化の伝承というひとつの大きな価値観と流れのなかに、文書、音楽作品、美術作品、演奏、作曲、美術制作などが共存するイメージを描くことが可能になる。巨視的な視野から各専門の精緻なアーカイブを実践することは本学にとってきわめて必要であろう。

■文書プロジェクトにおけるアーカイブセンター・プロジェクトの意義と成果

①専門ごと・分野ごとの壁を越える視点を構築させたこと。

これまで別々の分野と認識して活動していた文書、３D、音響映像がデジタル情報を発信するために情報システムの研究とつながった。文書と音響映像の協働が、文字情報のデータ化のためにも演奏情報の蓄積のためにも相互に裨益し補完することがわかった。同様のことが美術側の文書と３D にも言えるであろう。

②アーカイブズ構築という方向性が明確化したことで、両学部の資料が大学アーカイブズとして機能していく将来像が示されたこと。

③文書や写真のデジタル化を促進したこと。

時代の趨勢でもあったが、この 5 年間でデジタル化の波は目覚ましいものがあり、そうした情報を定例ミーティングにより共有することで、辛うじて時代の流れを知ることができた。

④アーカイブズ研修の受講。現場のスキルアップと世間のアーカイブ事情に関する知識更新のため、研修を複数回受講できたのはありがたいことであった。

３）検証されたこと

■スタッフの成長。アーカイブアシスタント（学生がアーカイブ実践に関わること）の意義。

アーカイブセンター発足時、音楽側の史料室は開室から間が無く、目録作成も始まったばかりであった。すでに一通り目録作成を終えていた美術側とはまったく状況が異なっていた。そこから 5 年間でリストが作られ、デジタル化もそれなりに進んだのは、特別研究員 2 名（石田桜子、伏木香織、23－24 年度）と後任の教育研究助手（星野厚子、25－27 年度）の着実な仕事の成果である。アーカイブアシスタントも時間なりによく計画的に仕事を進め、壊れた資料やタイトルのない資料でもリストを作成し、デジタル化もこなした。

星野教育研究助手が史料室の現状をどのように受けとめ、どのように業務に携わり、どのように育ったか、また大学院生のアシスタントが史料室の仕事にどのように関わり、そこから何を学び取ったかは、「2.5. 文書資料のアーカイブズ構築に関する実践報告」から読み取られる通りである。

史料室はその日その日の対応に追われるが、そうした動きにあまり左右されず、助手が着々と目録を作成したことが一定の蓄積につながった。藝大史に関わる質問は基本的に橋本が受けるが、同助手も調査手順を少しずつ覚え、3 年目には準備調査の一部を任せることができるまでになった。助手は、どのような用向きでも厭わず引き受け、自ら学ぶ姿勢を貫いた。他大学のアーカイブズ関連展示に助手とアシスタントも出向き、史料室の展示にその経験を生かした。

25－27 年度に勤務したアシスタント 2 名はアーカイブズ学を体系的に学んだわけではなく、“法”と“倫理”の理解はまだ不充分であろう。しかし寄贈資料の入力と文書や写真のデジタル化を通じて、資料の背景やその文化的価値への理解を深め、アナログ資料の情報を、利用しやすく記録することを実践から習得した。史料室での展示や資料提供などを見聞し、その重要性については認識できたと考える。

アーカイブアシスタント採用の意義は、「資料を理解し」「情報を適切に記録し」「適切に利用する」ことを実践的に学べることにあったように思う。物としての資料を大切にし、それに関わった人物に敬意をはらい、資料の価値を伝える必要は、本学の大学史文書や寄贈資料を前にすれば、感覚的に理解ができてしまうからである。その意味で、アーカイブズ学はアーキビストの専有物などではなく、資料を使用して論文などを書く、あるいは創作や演奏活動の成果を世に問う可能性のある全ての学生に身近なものであることを、アシスタントの成長を見ながら気付かされた次第である。

４）緒に就いたこと

■発信。

成果が見えにくい中で、音楽側では、復元音源および写真のデジタルデータをホームページから発信することができた。音源作成の過程では山田香特任助教の協力により伴奏付が行われ、亀川教授の録音と編集を経て、発信は嘉村芸術情報研究員の尽力によって実現した。公開と発信をさらに強化せねばならない。

５）着手すること

■コンテンツの作成と発信。

5 年間で目録は充実し、発信する材料は揃ってきたので、これからはコンテンツ作成と恒常的な発信が課題である。報告者は平成 28 年 2 月にデジタルアーカイブの一日講座を受講し、３D やドローンを含む撮影から発信にいたるデジタル作業の色々な場面でアーキビストに必要とされる技術･知識を学んだ。文書プロジェクトでは、原資料の収集や保護など、アナログ作業の割合が圧倒的に大きいが、デジタルによる発信が主流となり、デジタル媒体による資料収集も珍しくない。こうした課題が見えてきたのもアーカイブセンターにおける情報共有と大小の挑戦を経たおかげである。

６）残された難題

■アーカイブズとしての組織確立。

歴史資料等保有施設の指定を受けることは当初より目的としていたが、実現しなかった。工夫の余地があったのか検証も必要であろうが、施設や組織が指定条件を満たさないため、未だに目処が立っていない。

■経過と成果のアピール。

全学的に視野を広げ、掘り起こそうとしたことは意義があったと考えられるが、そのような伝統のなかった本学で行うには、今一つ戦略的でなかったことが悔やまれる。芸術に属する多分野それぞれの専門性と独創性を本領とする本学では、分野を越えた連携による全学的な取り組みは必ずしも得意ではない。それゆえ全学に呼びかけ、全科、全研究室、全教員室を調査する方針は画期的であったと言える。しかしながら、それを浸透させ、必要をアピールし、着実かつ大胆に成果につなげていくことが充分にできなかったのではなかろうか。共感されやすいテーマに絞り込み、全学的に成果を共有することができれば、学内へのアピール力は増したかもしれない。

７）今後の現場スタッフに必要とされること

■コンテンツを史料室においても作成すること。

アーカイブセンターでは情報プロジェクトにコンテンツ作成も発信も依存したが、今後は史料室スタッフ自身がデジタルアーカイブに習熟し、史料室でもコンテンツを作成することが求められよう。

■著作権等に精通すること。

収集から保存、発信（利用）の局面において適切に対応するため、著作権に精通することは今後ますます必要となる。

■デジタルアーカイブのスキルアップに努めること。

アーキビストの育成か採用か、いずれにしても現場の人材が学ぶ機会を増やし、さらに、学んだ人材の活躍場所を創出することである。

８）大学史史料室業務の需要、効率化、採算性に関する課題

■物の手入れやデジタル化には人手が必要だが、それが足りないのは大学史史料室の現場で、対応・相談業務が増加しているためである。要は学内外に利用者が増えているのである。増えていると言っても、学内の事務職員のニーズは、学外からの問い合わせへの回答か、各部署で史実や人物に関する情報が必要になった場合の駆け込み寺である。相談業務にはデジタル化による簡素化は難しく、効率化を図りにくい。

いずれにせよ史料室側では、問い合わせ、閲覧、研究、取材のための準備調査が日常的に行われている。研究相談や資料寄贈の相談などは来訪、メール、電話で受けるのが、それだけでは済まず、「直接会ってお話を」「お時間をいただきたい」依頼がほとんどである。長い眼で見れば、その方々からもたらされる情報は史料室にとっても有益であり、提供した内容と対応にかけた時間は、結果として成果物の寄贈件数に現れてくる。ただ、閲覧者のためにはスタッフ側が請け負う準備調査の時間を減らし、調査者自身が検索しやすいリスト公開を目指すのが望ましい。原則として電子コピーのサービスは行わず、撮影を許可しているが、来訪困難な方に対しては調査を代行し資料を複写して郵送することもある。こうした対応時間数に制限はなく、利用料金も送料も無料である。大学としても誇るべき社会貢献であると考えるが、こうした依頼が事務局や図書館を通して行われると対応は全く変わる。たとえば放送目的の画像など、大学史史料室で直接対応すると、幾通りかの提案を行い、適切なものを提供するが、事務局を通すと、多くは依頼側か事務局側が特定した、「百年史」既載の画像から選ばれ、1 点につき 3240 円である。大学史史料室が調査やデジタル化を行っても料金徴収のシステムは同じである。対応のあり方を検討することも課題である。

９）今後の大学史史料室におけるアーカイブズ構築とデジタルアーカイブ

文書 P が行った研究は、藝大文書がかかえる著作権、法人文書あるいは歴史的資料を扱う施設としての整備、公開／非公開の法的根拠、資料の歴史的文化的意義など、多岐にわたる。5 年間で出せた成果としては、情報プロジェクトや音響映像 P のおかげで HP にあげられたコンテンツ、助手やアシスタントの成果である資料リスト、連携（音楽と美術、4 プロジェクトなど）から魅力あるアーカイブが生まれるという確信、アーカイブズ学の学びと実践、であろうか。まだ発信力に乏しいが、アーカイブズの根幹となる要素が揃ってきた。アーカイブセンターが掲げた理念に充分応えたとは言い難いが、課題が明確化したことは、次につながる成果であろう。

アーカイブセンターの発足当初、定例ミーティングで「藝大がアーカイブすべきモノ」をリストアップしたが、多様なモノをアーカイブするには、「専門や部署の違いを乗り越えた共有・連携」という難題に直面することとなった。歴史的に見ればこの難題は、美術学校と音楽学校の合併から成立した本学の本質的な課題である。さらに元をただせば美術学部も音楽学部も、相異なる技術や専門分野を一つの学校や学部として包摂しているため、様々な形状と質の壁をかかえていて、これが顕在化したとも言える。壁の固さと高さを確認し実感もしたが、組織を縦横に俯瞰し、検証し、大学の来し方そのものを明らかにして伝承するのがアーカイブである。アーカイブセンターの 5 年間はその事を再確認させ、藝大の原型を再認識させた。28 年度はアーカイブ業務を各学部に引き受けていただけるならば、学部としてもアーカイブを考え、構築を推進する体制を敷いていただけるよう切にお願いする。

藝大の法人文書保存と利用における急務は、大学史史料室としての規則を早急に定め、運用の根拠を客観的に説明可能な状態とすること、音楽学部と美術学部は現在なおアーカイブズの三本柱「収集・保管・利用」を別々に行っている。しかしアーカイブズ構築が音楽と美術の共有の目的となり、両室に一定の方向付けがなされたことは事実である。

大学史史料室の利用は、学内者より学外者が多い。東京大学、京都大学、九州大学などの文書館でも同様の傾向と聞く。この現状に対して、学内の関心の薄さを指摘する声や、学内利用を増やす努力をすべしとの意見もあるが、むしろそこから本学のアーカイブズの本質的な必要と意義を読み取ることができるのではなかろうか。すなわち、学外者の利用が多いのはそれだけ広く国民に利用されている証拠なのである。彼らが本学の大学史史料室を利用とする理由は、本学が日本で唯一の官立美術学校・音楽学校を継承する藝術大学だからであり、真っ先に調査すべき機関だからなのである。その重責に応えるアーカイブ構築こそが、本学の負う大任であり、日本の誇りとなる財産である。

１０）課題と提言

5 年間で見えてきたことの多くは、成果より困難と課題である。そこからより着実な成果に向けて立ち上がるまでである。文書で言えば、アーカイブズへの歩みを止めず、デジタル化の促進がさらに必要である。これもアーカイブセンターの試行錯誤の中で得た確信である。

■アーカイブズの意義を事あるごとにアピールし、学部内に存在を浸透させ、アーカイブズが教職員・学生の誇りとなるまでところまで変えていく。要は「あったほうが良いもの」「あるべきもの」から「無いと困るもの」に転換させることである。

■大学アーカイブズ（大学史史料室）規程、利用規程、資料収集規程を早急に制定し施行する。
これにより、現場の業務にも一定の基準や尺度が設けられるからである。

■大学アーカイブズ（大学史史料室）を大学の組織として可視化する。

■大学史文書を、たとえば重要文化財の指定なども視野に入れ、大学史文書の価値を客観的に評価していただく。

■体系的にデジタル化を進め、デジタルデータの公開を進める。

■大学史史料室への依頼件数の増加は今後も見込まれる。これに対応し続けるには、史料室全体の人員配置を充実させるとともに、アーカイブズの将来を見据えた人材育成を行う。

■藝大アーカイブズ及び藝大のアーカイブについて学内で共有されるよう、有志會”ないし“連絡会”から再出発し、幅広く意見やアイデアを結集する。

１１）５年プロジェクトの先に

教育資料編纂室と大学史史料室は 5 年間、アーカイブセンターのサブプロジェクトとして活動を行った。両室の本務は大学の歴史の絶え間ない蓄積によって“大学史の礎”ないし“大学の経営戦略基盤”を成すところにある。プロジェクト経費により収納環境が改善され、機材購入、資料整理、資料の移動が推進され、アーカイブズ構築に必要な基盤が美術側と音楽側に同時にもたらされたこと自体、画期的な実績である。プロジェクト発足とともに音楽側で本格的に着手した目録作成が大幅な進展を見たのは、第一に配架スペースの確保を初めとする環境改善であり、第二に資料整理と入力要員を担当する人員配置のおかげである。平成 21 年度に全学的アーカイブズを目指して始まった学史プロジェクトは、アーカイブセンターの 5 年間によって目に見える形でアーカイブズ構築を行うことができた。そのことはアーカイブズ構築の基本が設備環境と人的措置にあることを立証する結果ともなった。大学史史料室の研究利用が今後も促進されるかどうかは、この基本を継続することができるかどうかにかかっていると言えよう。

プロジェクト期間を通じてメンバーおよび事務局には折々に適切なご指導ご助力いただいた。メンバー一人一人の誠意ある任務遂行に感謝し、期間中に学内外からいただいた数多のご支援に心から御礼申し上げる。

（20160306）

※本報告のうち、「2.3.」は美術学部教育資料編纂室からの報告、「2.5.」は担当者各人の記名報告である。
それ以外の箇所はそれぞれ記録やデータに基づき、担当者の協力を得ながら橋本が作成した。

3D デジタルデータ
研究プロジェクト

2011.05–2016.03

平成 23 年度

1. ３次元計測によるデジタル化

大学美術館収蔵品：松田権六作「草花鳥獣文小手箱」３次元計測
３次元計測からデータ保存・データ解析と３次元計測データから映像化

図 1-1 3 次元計測カラーデータ(左)と 3 次元計測データ(蓋)

図 1-2 蓋絵(鹿)３次元計測で取得した凹凸

図 1-3 上蓋裏　獅子実物画像

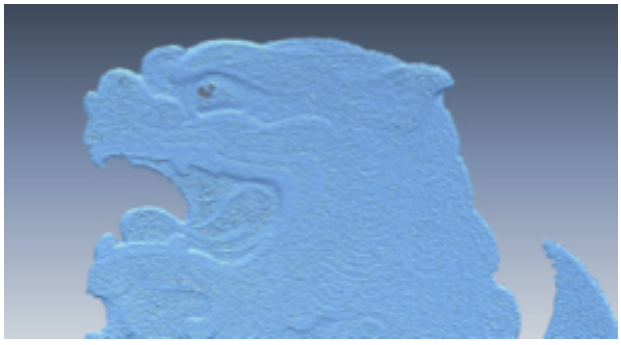


図 1-4 獅子部分　３次元計測データ

大学美術館収蔵品：橋本平八作「花園に遊ぶ天女」３次元計測
高精細３次元計測にて３D データ取得し、次世代型のアーカイブを目的とした研究を行った

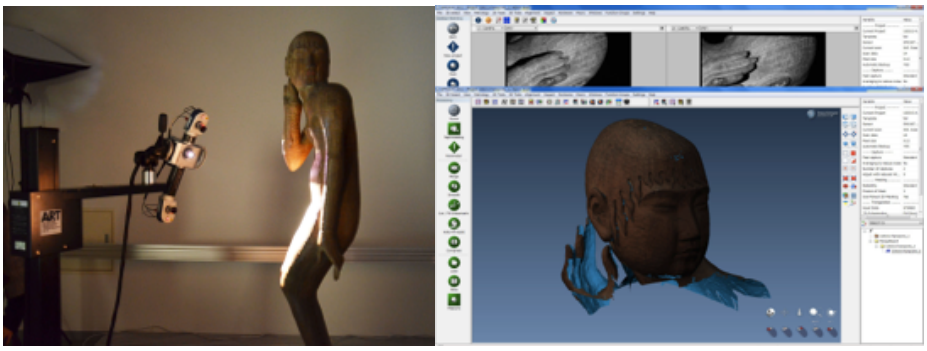


図 1-5 3 次元計測風景と 3D データ画面

2. 3 次元計測検証報告 松田権六作「草花鳥獣文小手箱」

松田権六作「草花鳥獣文小手箱」再撮影

2011 年 7 月 5 日に、一回目の撮影を行ったが、90 ㎜レンズでより精細なデータを取得するため、同年 9 月 20 日に再度撮影を行った。今回の撮影では、前回時間の都合上撮影できなかった上蓋裏面の獅子と、上蓋全体に描かれている動物達を中心に撮影を行った。今回は現状出来る中で最もグレードの高い撮影方法で行ったため、データ量・ポリゴン数ともに前回よりも大幅にアップすることになった。また、前回の反省を踏まえ、撮影時のライティングの設置方法や光沢や金粉のある作品の撮影方法など、多くの点で改善することができた。今回の撮影は 90 ㎜レンズで小手箱に描かれている動物達を中心に撮影したため、90 ㎜レンズで小手箱すべてのスキャンを行ったわけではないが、おおよその部分の撮影をすることができた。また一度に撮影できる容量には限りがあり、撮影形態やデータの保存方法にもよるが今回の撮影の場合、およそ 10~15 ショットを一つのプロジェクトとして保存しており、合計で 7 つのプロジェクトに分けて保存することになった。

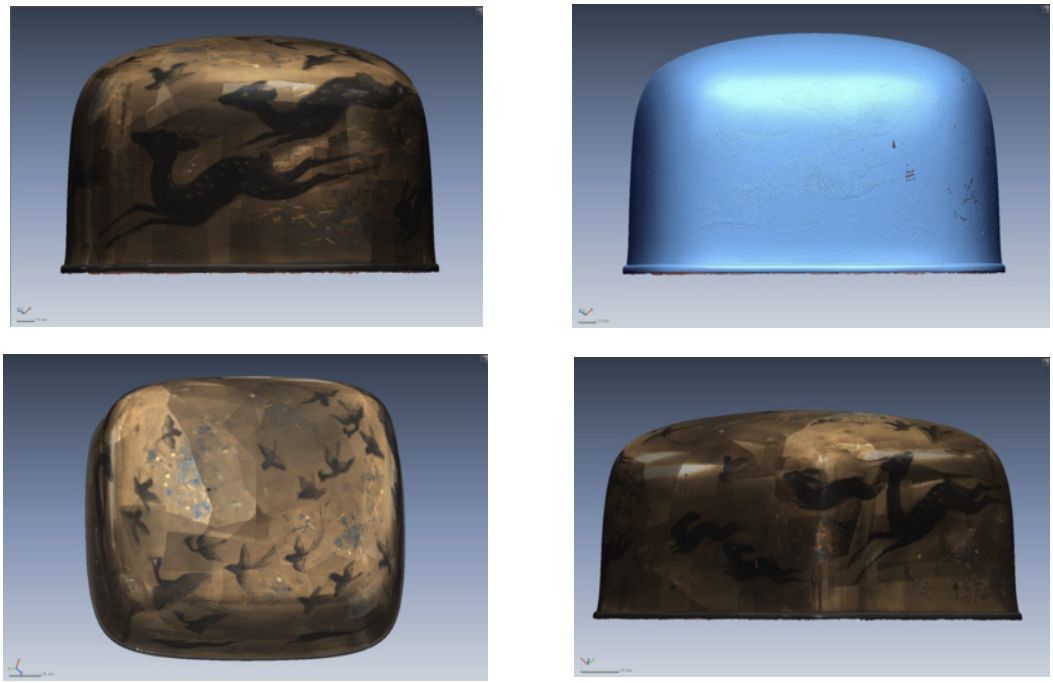


図 2-1 上蓋全体図

撮影レンズは 90 ㎜レンズを使用、前回 225 ㎜レンズで撮影したデータに今回撮影したものを部分的に合成している。主に動物達の部分が 90 ㎜レンズで撮影したもの。

上蓋裏・獅子の撮影

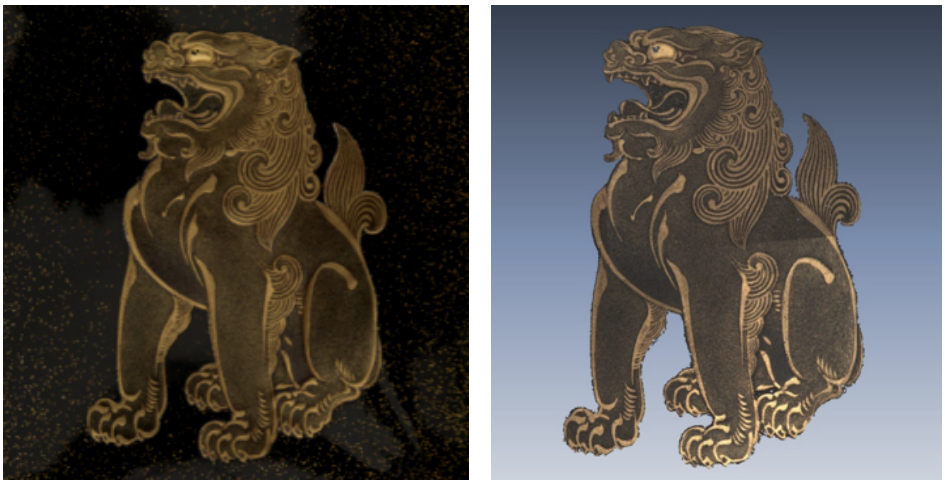


図 2-2 上蓋裏・獅子　実物画像(左)と蓋裏・獅子　スキャンデータ画像(右)

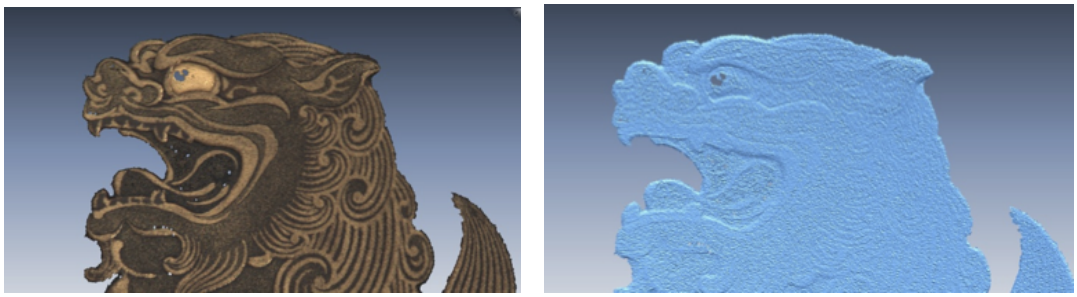


図 2-3 上蓋裏・獅子 テクスチャー(左)と上蓋裏・獅子 3D データ(右)

上蓋裏面の獅子の撮影では、獅子の部分に関しては色・形ともに精細なデータを撮影することができたが、獅子以外の黒い漆の部分に関しては、やはり撮影をすることができなかった。光沢のあるものや金などの光を反射するものに関しては、スキャナーのプロジェクター部分から出る光を、対象に当てる角度を変えることで撮影出来ることがわかったが､黒などの光を吸収してしまう性質のものの撮影方法については今後の課題として残った。テクスチャーを外した画像を見ると、表面が少しざらついたもののように見える。これは、小さな起伏など、より細かいデータを取得するように設定したものが、金粉などの光が反射するものを形の起伏と捉えてしまったためである。そのため実際の作品とは異なったものを再現してしまっている。

また、色味の再現性については、モニターなどの個体差により変動があるため一概には言えないが、今回のスキャン画像で見比べてみると、スキャンデータの方が実物よりも色味が薄く鮮やかさに欠ける印象がある。これは撮影時のホワイトバランスの設定をよりシビアに行うことで改善されると思われるが、前述のとおり、色彩に関してはモニターによって個体差が出てしまうため、完全に一致させることは難しいだろう。加えて今回の撮影では、色の再現性よりも漆をけがいた跡などの 3D データの取得を優先した撮影方法を行ったため、作品の色を完全に再現するという点では上記のような結果となった。しかし、一枚一枚のデータの色のつながりは前回よりも自然になっているため、ライティングの配置に関しては成功していると言える。

上蓋表面の撮影

前回の 90 ㎜レンズでの撮影では、表面の動物達はほとんどスキャンすることができなかったが、前回の反省を踏まえ撮影方法を改善したことで、表面の動物達はほぼ撮影することができた。前回撮影したものと今回撮影したものを同一部分で比較してみると、前回撮影したスキャン画像の右側にあたる部分が今回撮影された部分と一致するわけだが、前回は上蓋に描かれている動物のほとんどが撮影できていなかったのに対して、今回は黒く描かれた動物の部分もはっきりとスキャンできているのがわかる。小手箱表面の質感も前回のものに比べ実物に近い状態で撮影することができた。また詳細画像を見てみると、漆をひっかいた跡の強弱などの細かなデータも撮影できている。

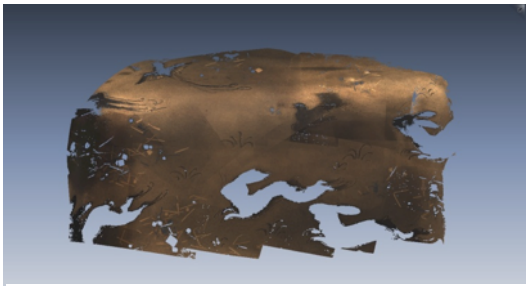


図 2-4 前回撮影の 90 ㎜レンズスキャン画像

図 2-5 90 ㎜レンズ　テクスチャーあり詳細画像

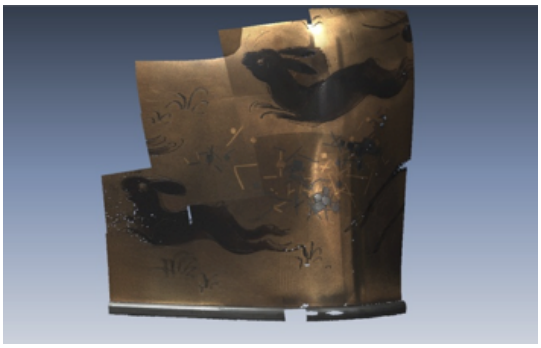


図 2-6 今回撮影された 90 ㎜レンズスキャン画像

図 2-7 90 ㎜レンズ　3D データ　詳細画像

Rapidform・スムージングツールの検証

スキャンしたデータの表面のざらつきを軽減するために、Rapidform のスムージングツールを使い、その変化を検証してみる。3D データの画像を見てみると、スムージング加工を施したことで表面のざらつきが軽減され、滑らかになったのがわかる。ただ、表面を滑らかになるように加工したことで全体的に形が甘くなり、テクスチャーを付けた状態のものを見てみると、少しぼやけたような表現になっている。

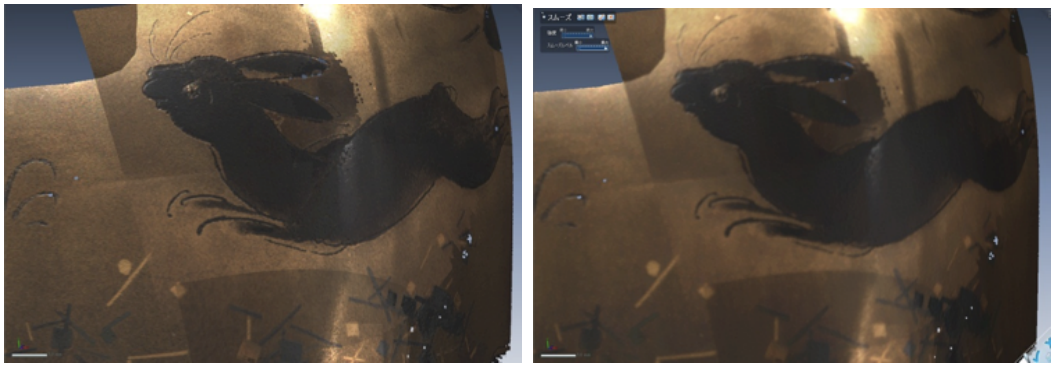


図 2-8 テクスチャー有り(左)とスムージング加工後(右)

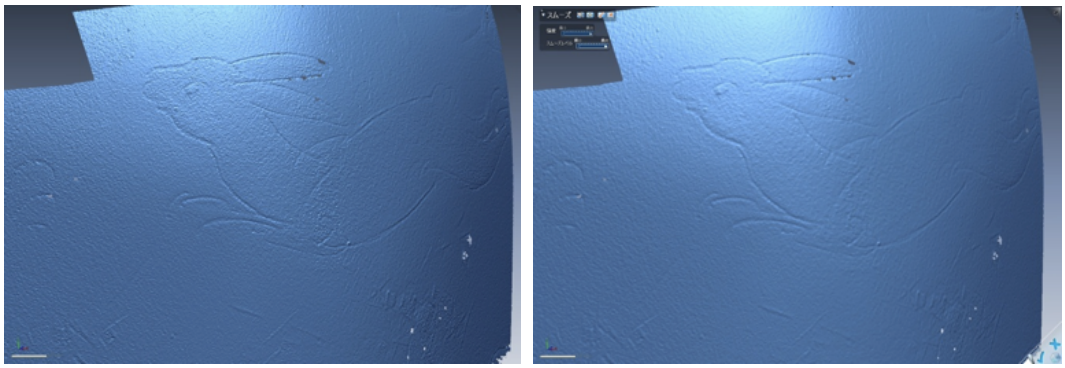


図 2-9 スムージング加工前の 3D データ(左)と加工後(右)

撮影に使用した機材

- 非接触三次元計測機　Breuckmann　smartSCAN-duo
- データ修正ソフト　Rapidform xos
- フラッシュライト　elichrom　D-Lite 2 it
- デジタル一眼レフカメラ　Nikon　D7000

	今回の撮影（90 ㎜レンズ）	前回の撮影（225 ㎜レンズ）
総ショット数	69 枚（上蓋部分・62 枚、蓋裏側の獅子・7 枚）	54 枚（上蓋部分・42 枚、下側受け部分 12 枚）
1 ショットあたりのデータ量[ABS]	ABS は Breuckmann の生データのため 90 ㎜・225 ㎜レンズともに、1 ショットあたりおよそ 21.9MB	
撮影したデータの総データ量[ABS]	1.51GB（上蓋部分・1.35GB、蓋裏側の獅子・153MB）	1.18GB（上蓋部分・922MB、下側受け部分・263MB）
データ合成後のデータ量[STL]（Rapidform で作業）	上蓋部分・2.51GB、蓋裏側の獅子・223MB	上蓋部分・346MB、下側受け部分・85.6MB

3.　その他の活動

卒業修了制作　画像データ・テキストデータの調査

画像・テキストデータが学内に保管されていないことが判明し、印刷業者への仕様書と画像著作権の見直しと改正を行った
(1).　卒業修了作品展図録印刷仕様書　作成
(2).　図録写真著作権譲渡契約書　作成（美術教務使用書類）
野崎印刷紙業株式会社より過去 2008 年から 2010 年の４年分のイラストレーター／インデザインによるデータは現在返却済み

立体造形の修復・復元への応用

茨城県指定文化財 木造虚空蔵菩薩坐像の補作箇所を３D 化して切削し修復に活用。
東京国立博物館 木造菩薩立像の金飾りを３D 化して銅版で削り出し

CG による質感表現の研究

東大寺 執金剛神立像の天平彩色の表面質感を CG で再現中。

既存資料からの３D モデル化の研究

正倉院 伎楽面「崑崙」コンター図より３D モデル化

図図 3-1 伎楽面コンター図

デジタルデータの取得と教育資料としての活用

- 東京藝術大学美術館 乾漆月光菩薩半跏像のレーザー計測
- 東京国立博物館 乾漆日光菩薩半跏像のレーザー計測
- 願成就院 木造毘沙門天立像のレーザー計測

模刻・修復に関する映像記録**（これまでの技術の映像をアーカイブしたもの）**
フル HD による映像撮影、編集（芸大アーツ in 丸の内で上映）

美術学部各科資料目録・収蔵品調査(平成 23 年度モデル学科：彫刻科実施)

- 彫刻科彫刻論授業より映像記録映像データ収集からリスト作成
  (現在彫刻科教官室内にあるものは調査済み)
- 講演会、卒業修了制作講評会、その他　映像・音声記録データ収集
- 彫刻科収蔵品調査からリスト作成まで（計２５作品）

美術学部各学科講義記録のデジタルアーカイブ化 承諾願作成

講義・講演映像データの将来的学内発信の為に講演者を対象に平成２４年度から実施予定・検討

国内調査

- 九州国立博物館にてＸ線 CT スキャナー､非接触光学式３次元スキャナーインクジェット３次元プリンタ、超高精細非接触スキャナー等機器の視察
- 3D データの共有のありかたと知的財産関連の調査（情報・システム研究プロジェクト　生貝研究員）
- 九州国立博物館は国立施設にて３D デジタルを用いた研究を実施している中では、高度な技術とその蓄積があり今後は国立機関同士の連携を取り、共同研究を行う方向に話を進めている。

特許技術サンプル作製のための大学美術館収蔵品撮影

撮影作品：上村松園作「序の舞」、「阿弥陀八大菩薩像」
EPIC Pro（ギガパン社製　デジタル一眼レフカメラ専用パノラマ撮影モーターマウント）および PTGui（パノラマ合成ソフト）等を使用して撮影と合成を試みた。

図 3-2 撮影作業風景

他機関との連携協力体制の確立

(アジアにおける芸術情報ネットワークの拠点形成へ向けた基盤整備)
　敦煌研究院および陝西省歴史博物館では、芸大の特許技術を用いた壁画模写についてプレゼンを行い、芸大と中国政府の間で協定を結び連携研究を行なっていくことで合意を得た(下図)。

図 3-3 敦煌研究院での討論会

図 3-4 敦煌研究院による莫高窟内での模写現場

アーカイブ・コンテンツの教育的資源としての活用に関する研究

写真は現在制作中の高句麗壁画模写。当研究室で開発した特許技法を活用した。

図 3-5 特許を用いた模写の制作現場

平成２４年度計画案

(1). 美術学部内各学科資料目録、所蔵品調査と今後調査に向けての基盤固め
　（各学科教員室等に保管されている情報のリサーチ）
(2). 卒業修了制作冊子画像、テキストデータ構築作業
　（学生アルバイト雇用による作業実施希望）
(3). 博士課程論文の保管状況の調査とデータ化の検討
(4). 美術館収蔵品３次元計測からデータ保存作業
　（月に１作品目標　年１２作品データ化）
(5). ２３年度実施彫刻科石膏取り授業撮影編集作業と学内発信の検討
(6). 外部機関との共同研究
(7). 国内調査

平成 24 年度

プロジェクトメンバー

センター長 大学理事・副学長 美術学部教授	北郷 悟
副センター長 社会連携センター長 大学院美術研究科教授	宮廻 正明
大学美術館准教授(美術館資料)	横溝 廣子
特任助教	今井 紫緒
特別研究員 大学院美術研究科非常勤講師	松村 公太
特別研究員 大学院美術研究科非常勤講師	山田 修
教育研究助手	木本 諒
アーカイブアシスタント	大石 雪野

プロジェクト活動内容

高精細デジタルを活用した彫刻作品、平面作品のデジタル研究。
保存修復日本画科では高精細デジタル画像技術と質感を伴った高品質な複製制作を行っている。また、大学美術館収蔵品の３D 計測を行いデジタル保存、データ解析を行う。その他、美術学部内の映像記録等の資料収集からデジタル変換作業。これらデータ化の研究を行ったものを将来的に配信、公開を目指す。

平成 24 年度の活動内容

1. 立体資料のデジタル化活動報告

橋本平八「花園に遊ぶ天女」３D 計測データのデータ処理作業

報告:特任助教 今井紫緒

- 3D 計測実行日：平成２４年２月１３日～１５日の３日間
- 作業メンバー：今井紫緒、土屋裕介、大石雪野
- 撮影ショット数：１１のプロジェクトに分け対象物の計測し総ショット数は１５８ショット
- データ量：2.51GB　3D 計測データ(データ形式：BRE)
- データ処理、解析作業：使用ソフト　RapidformXOS, optoCAT,
- データ処理については 25 年度も継続

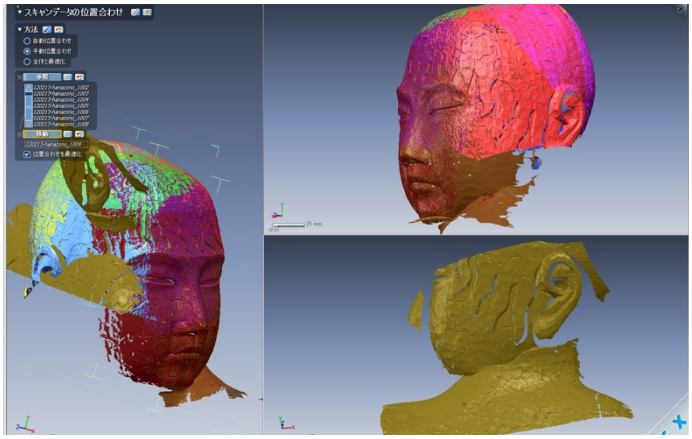


図 1-1 3D 計測データ処理

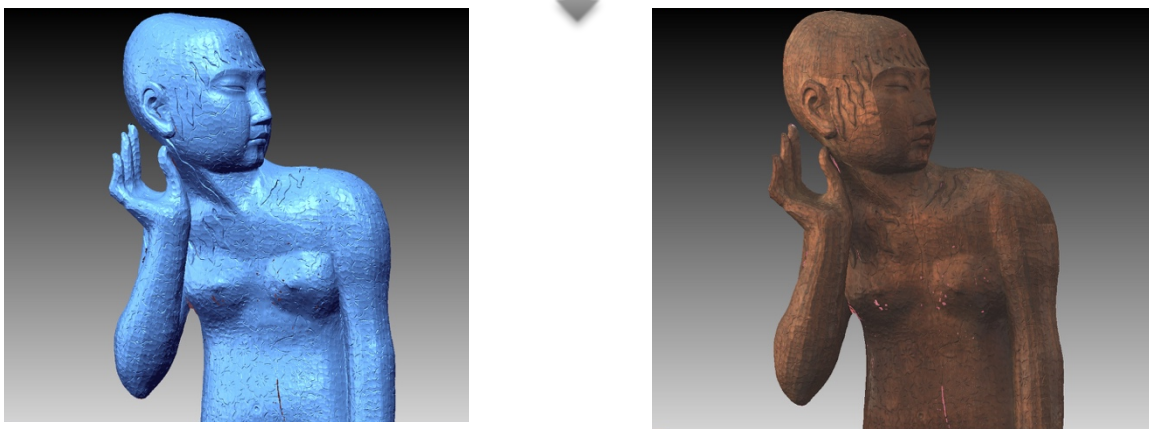


図 1-2 3D 形状完成(左)とテクスチャー有(右)

橋本平八作「花園に遊ぶ天女」作品情報

橋本平八：1897 年（明治 30 年）～1935 年（昭和 10 年）
三重県都度会郡四郷村大字朝熊屋敷（現•伊勢市朝熊町）で生まれる。
橋本平八は日本の近、現代の彫刻において、作品における思想や制作にあたっての姿勢など多大な影響を与えた人物である。本作品の「花園に遊ぶ天女」は 1930 年（昭和 5 年）に制作された彫刻作品である。
第 17 回院展発表時には像の背後に「老樹」（老木）がついていたが、橋本平八自身の言葉によれば「完成后月余りにて破壊す。後日一部を修理して今日の形を保つものにて、」とあり、完成発表後に自身の手によって取り去って修正を加えていたことを示す記録が残っている。

図 1-3「花園に遊ぶ天女」3D データ表面の花の彫刻の様子(左)と「花園に遊ぶ天女（老樹）」発表当時の写真(右)

現在の「花園に遊ぶ天女」は背後の「老樹」は取り去られており、身体の表面には無数の花が図柄として線刻されている。本作品は橋本平八の作品の中でも彫刻に対する特異な思想が強く現れている作品となっている。それは像本体だけで、周囲の状況を鑑賞者に想像させる花を表面に彫り込むことで、天女の周囲に咲く花々を連想させるということからも、彫刻芸術においての精神的な表現に重要な意味を見いだしていたといえるであろう。（図 1-2, 図 1-3 の出典元は「橋本平八と北園克衛展カタログ」および橋本平八〈著〉「純粋彫刻論」）

25 年度以降の課題

橋本平八が制作した本作品を三次元計測し、３D データ化することの意義としては近、現代の彫刻作品の時代背景等についての研究を深める手掛かりとなりうるのではないだろうか。その中では橋本平八が当時使用していた道具や、像の制作工程、さらには前述の作者自身による修正箇所の調査研究をとおして、将来的には様々な美術研究分野の要請に応じた、修復や、再現模造などのシミュレーションも可能となるよう 3D データのさらなる活用に期待できると考える。また、メタデータに関しても所蔵元である、東京藝術大学大学美術館との連携をはかり、デジタル技術とアーカイブといった現代における「美術と情報」という点においても研究を進めて行きたい。

東京国立博物館　荻原碌山「女」展示　３D 研究スライド映像製作

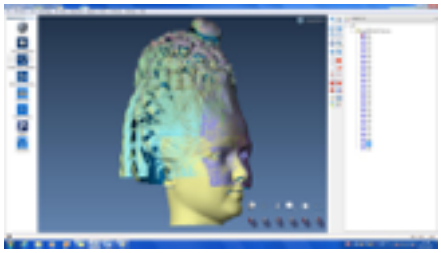
報告: 特任助教 今井紫緒
荻原碌山「女」３D デジタル研究についてスライド映像 5 分 49 秒
展示期間：平成 24 年 5 月 15 日～8 月 5 日
映像モニター50 インチ使用

図 1-4 東京国立博物館「女」展示風景(左)とスライド展示風景(右)

荻原碌山の彫刻作品「女」では、３D データの活用事例のひとつとして、「触れることのできる文化財」というかたちで計測データから 3D 出力して樹脂に置き換えたものを制作し、さらにその樹脂からブロンズに鋳造置換した。作られたブロンズの「女」は直接触れる事が可能な文化財となり、本研究における教育分野での活用の事例とすることが出来た。上記の図では、「女」の三次元計測データをもとに樹脂出力からブロンズ像へと置き換わるという過程をスライド映像としてまとめたものであるが、現代における、デジタル技術と、ブロンズ鋳造という古典技法の融合によりはじめて可能となったプロジェクトであり、文化財を広く一般世間に広める機会を創出することが出来たのは新たな美術研究分野としての可能性を示せたのではないだろうか。

彫刻科所蔵女性胸像石膏の３D 計測・データ処理

報告:アーカイブアシスタント 大石雪野
作業者：大石雪野　指導者：今井紫緒
計測対象物：彫刻科所蔵 女性胸像石膏
3D 計測機材:smartSCA 使用レンズ：225mm.90mm2 種レンズ合成
作業日数：5 日間
総ショット数：189 ショット



計測作品について

本件で計測した作品は、彫刻科内に収蔵されていた石膏像であるが、詳細は不明である。由来としてはおそらくは、工部美術学校時代に教材として輸入されたものである可能性が高いが、像の完成度はきわめて高く、量産を目的とした石膏像としては形態が細かく写されていることからも型が作られた時代が古いことを示していると言える。今後はどのような経緯で本校に納められたものなのかも含めて調査が必要であろう。

25 年度以降の課題

現在は撮影データの組み付け作業も完了している。石膏像特有の型の分割の合わせ目の線までも確認できるが、このようにスキャナーの精度によって像の特徴を細かく計測でき、なおかつ、上の図のように画面上で観察することでより形を把握しやすくなり、このように表面の状態を確認しやすく出来るのもデジタルデータ化するメリットのひとつでもある。

ロマネスク様式石像 3D 計測

報告:教育研究助手 木本諒

計測内容

計測対象物：彫刻科北郷研究室所蔵 ロマネスク様式石像
3D 計測機材：smartSCAN　使用レンズサイズ：225mm.90mm
作業日数：20 日間
総ショット数：400 ショット

図 1-5 部分写真とロマネスク様式の聖母子石像全身写真

計測結果

本件では石像の表面に無数に穴などの凹凸があり、計測時のスキャナーの角度を繊細に操作する必要があった。今後の研究課題ともいえる計測作業となったが、極めて小さい穴や多孔質素材のものを計測する場合、それらの凹凸が影となってしまい表面データが欠損してしまう部分ができてしまうのが問題となる。さらに、古い像や、文化財として触れることが許されない対象物の表面の埃、その他付着物等が計測を阻害する事態も考えられる。実際本件では、表面のくぼみに蜘蛛の巣のようなものが張られておりその部分だけ計測できないという事態が起きた。前述のような環境下においてどのように対応すべきかを検証する機会を得たといえる。これらの計測データを元に復元制作や、手仕事による補足など、３D プリンターでの出力後の可能性等についても今後は実例を用いて、実証実験を行ってみたい。本件は現在も作業継続中であり、今後これらの問題の解決に向けて取り組むこととする。(別紙にてスキャニング作業記録を保存)

2.　3D 計測データを用いた 3D カラープリンタ出力検証報告

報告:特任助教 今井紫緒
検証対象物：松村研究員修了作品 バーミヤン・フォラディ石窟壁画断片模写
データ処理製作３D ソフト：RapidformXOS
使用３D 造型機：Z プリンター
データ形式：PLY（テクスチャー有り）
①　　３D スキャナーによりデータ取得

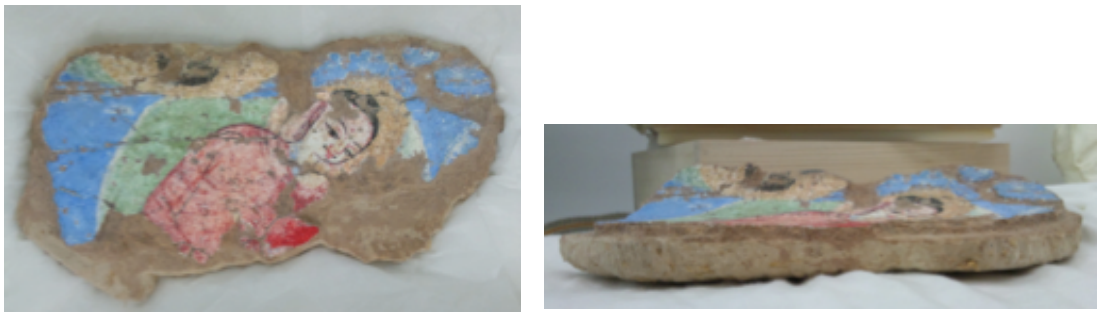


図 2-1 松村研究員修了作品：バーミヤン・フォラディ石窟断片模写

②　３D カラープリンタによって造形品の出力

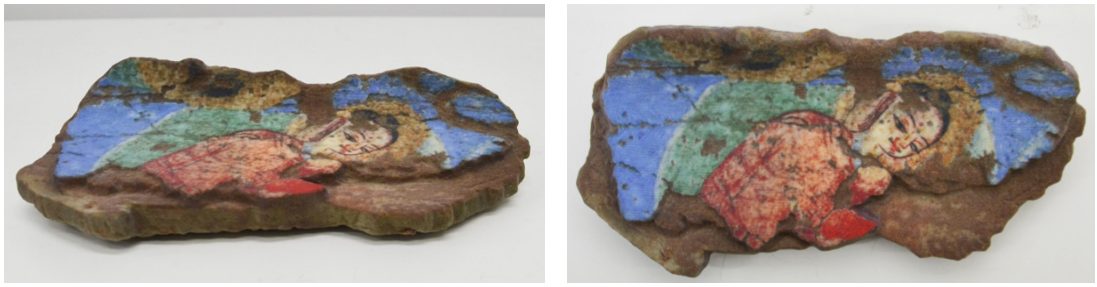


図 2-2　３D 計測データから３D カラープリント造形物

図 2-3　３D カラープリント造形物背面(左)と 3D プリント造形物　テクスチャー無し(右)

検証結果

上記の図は現行の 3D プリント出力による色の再現性と品質の比較例として行ったものである。テクスチャー（色情報）を画像データで取得したものと壁面の凹凸を３D スキャナーで計測、取得したものとを合わせた、デジタル技術を用いた応用研究としての可能性を検証した。色彩の出力に関しての再現性はまだまだ今後の技術躍進に期待したい。素材そのものが有する色の情報までの再現性はこれからの課題と言える。例えば金属は素材の密度や、様々な環境や、条件により光沢、質感が出るのであり、出力機からプリントされていく過程で物質が再現されていなければならない。その技術的課題は金属のみならず、常につきまとう問題である。その一方で、出力した凹凸の造形物に手彩色や、手仕事による後加工を施すといった制作手順をさらに追求するとともに、デジタル技術と手仕事のバランスを保ちつつ対象物のアーカイブを行っていくことで、修復、保存、再現、実験、といった技術の継承を次世代の美術教育の現場内において確実に行うことが出来るのではないだろうか。

これらのデジタル技術の普及が意味するものは、個人単位による技術的なばらつきが押さえられるというメリットがある一方、技術者各々にデジタル技術に関する識字（リテラシー）を求めていかなければ、アーカイブとしても美術を扱う現場においても、混乱を招く原因にもなりかねない。そのため、早期にこれらの考え方そのものをまとめ、教育現場への自然なかたちでの還元をめざすべきであると考える。

その他計測活動

報告: 特別研究員、大学院美術研究科保存修復彫刻非常勤講師 山田 修
24 年度も彫刻文化財の計測を可能な限り行った。これらのデータは主に研究や模刻に用いられる。
(1). 茨城県東福寺 地蔵菩薩半跏像
(2). 茨城県真壁町田山口地区 虚空蔵菩薩坐像（県指定文化財）
(3). 薬師寺東京別院 薬師如来坐像
(4). 薬師寺 破損如来坐像
(5). 薬師寺 薬師三尊脇侍（国宝）
(6). 静岡県宝台院 阿弥陀如来立像（重要文化財）
(7). 東京国立博物館 伎楽面「呉公」（重要文化財）
(8). 興正寺山門 子持ち龍
(9). 東大寺戒壇堂 四天王立像（国宝）
(10). 中性院 弥勒菩薩立像（重要文化財）
(11). 奈良国立博物館 獅子像（文殊菩薩台座）
(12). 京都府禅林寺永観堂 阿弥陀如来立像（見返り阿弥陀）（重要文化財）

3. 美術学部資料調査

美術学部彫刻科教材資料調査、講演記録リストの更新とデジタル化作業
報告：教育研究助手　木本諒

(1). 彫刻科
彫刻棟内における調査では、昨年に引き続き、彫刻科内において催された講演会や彫刻論の映像と音声の記録をデジタイズしつつ、その保存状態の把握に勤めた。音声記録のテープに関してはメディアの劣化が懸念されたため、音楽学部の音響施設との協力のもとに作業を進めている。音声記録テープのデジタル化の際のフォーマットは下記の通りである。

- フォーマット：WAV（非圧縮）
- サンプリング周波数：44.1kHz
- ビットレート：16-bit

その他にも美術研究科彫刻専攻の博士課程の論文発表の模様を記録した映像も出てきており、今後の大学教育における大学院の研究内容を検討していく判断材料となりうるのではと考えている。音楽学部での博士発表演奏映像のアーカイブと合わせて共有出来る仕様について検討していく。今後、彫刻科を一つの事例として美術研究科内で進めて行けるのが理想的である。

彫刻科石膏取り映像記録・編集

報告:アーカイブアシスタント 大石雪野
学部 1 年生を対象に毎年行なわれている石膏取り技術講習授業の様子の映像記録と編集を行った。専門的な知識と技術を持つ講師の方を招いての授業である為に、実験的に多数のカメラを使用し、どのような記録方法が制作現場の記録において有効であるかの検討も同時に行なった。ビデオカメラは天井、地上固定カメラ 1 台、地上手持ちカメラ 2 台、小型カメラを使用しての接近映像やカメラマンが立ち入れない箇所への撮影を行なう為に計 5 台のカメラを使用しての記録を行った。
専門的な技術の記録となる為に、事前に彫刻科の教授、講師、助手との打ち合わせを行い、講師の先生の動き方や進め方についての確認を行なった。

スケジュール

第 1 回事前打ち合せ（記録内容確認（絵コンテなどのシナリオチェック、石膏取り作業についての講習））
↓
第 2 回事前打ち合せ（撮影現場での打ち合せ）
↓
撮影
↓
編集内容確認（彫刻科教授・講師・助手と映像編集者）
記録された全映像を彫刻科教授、講師、助手とともにチェックし、必要な映像の選定、テキストの有無や内容の確認、編集映像の確認（動画活用者の確認、アーカイブ用の保存方法の検討）
↓
編集作業（納品データ形式の確認）
↓
完了

映像編集環境

- 使用ソフトウェア　Adobe Premiere Pro CS5,CS6
- 映像のサイズ　1280×720
- レンダリング形式　.mpg(MPEG ムービー)　*現状での仮の書き出し
- ファイルサイズ　3.31GB
- フレームレート　29.97
- チャプター数　24(本編 23＋道具紹介 1)
- 完成映像時間　本編/44 分 41 秒　道具紹介/20 分 22 秒

今回はカメラマンの 1 人に実際の石膏取り作業について経験のある河内(情報発信・システム研究プロジェクト)が入ったことで、要所でのカメラアングルなどの指示が行えた。そうでない場合は一度カメラを担当する者が記録する対象の作業を経験しておくことが望ましい。ただ今後、美術学部の他科でも同様のアーカイブ作業を行う際に、動画記録を行なうカメラマンが美術学部各科の様々な制作技術を体験する事は現実的ではないため、必要最低限の映像記録における指針を示し、各科研究室内での作業（担当研究室の助手などがカメラの使い方を覚えて記録する）が行なえるようになる事が望ましい。

実際に記録した映像資料を学生や卒業生に活用してもらいその都度フィードバックを受けながらアーカイブについて改良を加えて行く事が必要となる。

表 彫刻科音声テープ資料調査結果

管理番号	テープ名	長さ	テープ表記日付
①	続．彫刻論_6/16／矢内原伊作先生（ジャコメッティについて）	90	1982/6/16
①-2	彫刻論_6 月 16 日（水）1982／矢内原伊作先生（ジャコメッティについて）	90	1982/6/16
②	美術学部特別講演会_アンソニー・カロ氏を迎えて／1995.6.27_中央棟第一講義室	120	1995/6/27
③	彫刻論_吾妻兼治郎先生／平成 7 年 5 月 17 日 PM1:00～	120	1995/5/17
④	彫刻論・小清水漸_85'.10.9	120	1985/10/9
⑤	フィリップ・キング氏講演／1987 年 10 月 3 日 PM1:00～_第四講義室	120	1987/10/3
⑥	モニク・フォー女史講演会_1995.10.20	60	1995/10/20
⑥-2	モニク・フォー女史講演会_1995.10.20	120	1995/10/20
⑦	1991.6.12_彫刻論／飯田善國先生	120	1991/6/12
⑧	No.2_篠田守男氏／カッセル・ドクメンタ／'82.9/9	90	1982/9/9
⑧-2	No.1_篠田守男氏／現代美術／'82.9/9	90	1982/9/9
⑨	彫刻論_10.24_伊藤公象_於資料室	120	10.24（年表記なし）
⑩	彫刻論・菅原二郎_1985.6.26	120	1985/6/26
⑪	速水史朗先生彫刻論_Ⅱ／1983 年 10 月 22 日（土）	90	1983/10/22
⑪-2	速水史朗先生彫刻論_Ⅰ／1983 年 10 月 22 日（土）	90	1983/10/22
⑫	彫刻論_1984.10.17_堀口泰造_於資料室	120	1984/10/17
⑬	宮脇愛子先生_公開彫刻論「うつろい」／2・6・27_大集会室（大学会館）にて	120	1990.6.27？
⑭・⑮	彫刻論・川下成海先生（'84.7.4_於資料室）	120	1984/7/4
⑯	彫刻論_1984.10.31_鈴木実_於資料室	120	1984/10/31
⑰	1_彫刻論_中瀬康志	120	表記なし
⑱	彫刻論_中瀬康志_2	120	表記なし
⑲	彫刻論_荒木高子先生_1984.6.20_於資料室	120	1984/6/20
⑳	彫刻論_伊藤茂之先生_昭和 60 年 6 月 19 日	120	1985/6/19
㉑	空間の変容_トーク 1_'97.11.20／野口氏．森．棚田．小谷	120	1997/11/20
㉑-2	空間の変容_トーク 2_'97.11.27	120	1997/11/27
㉒	原武典先生特別講義_1995.12.13	150	1995/12/13
㉒-2	原武典先生特別講義_1995.12.13	120	1995/12/13
㉓	1995.10.25_彫刻論_多和圭三先生	120	1995/10/25
㉔	保田春彦先生_彫刻論_H7.10.11	90	1995/10/11

教育資源の発掘という観点での調査では、彫刻科初代教官の高村光雲による「木寄法」と呼ばれる木彫の伝統技法の制作過程を模型にした、当時使用されていたとみられる木彫教材を調査した。まだ模型に関するメタデータ等は作成できておらず、詳細は不明であるが、現状の写真撮影とリスト化のみを行った。デジタル技術を用いての今後の活用方法を模索できればと考えている。例（デジタル複製し、教材として活用できるように教育現場へ還元等）

彫刻科所蔵品リスト　高村光雲木寄法模型

作品	作者・制作者	題名	制作年	素材、メディア	サイズ	保管場所、部屋番号	保管状態	数量・員数	アーカイブへの協力
	高村光雲	木彫仏像木寄法標本　座像の部1	大正時代	木		彫刻棟資料室	良	1	有り
写真	権利	備考							
	彫刻科木彫研究室	木寄せ技法の標本、工程模型　教材用（4個のうちの一つ）							
作品	作者・制作者	題名	制作年	素材、メディア	サイズ	保管場所、部屋番号	保管状態	数量・員数	アーカイブへの協力
	高村光雲	木彫仏像木寄法標本　座像の部2	大正時代	木		彫刻棟資料室	良	1	有り
写真	権利	備考							
	彫刻科木彫研究室	木寄せ技法の標本、工程模型　教材用（欠損有り、前部手首）							

図 3-1 高村光雲木寄法模型所蔵リスト（一例）

(2). 美術解剖学研究室

美術解剖学研究室所蔵の大正時代から使用されていた解剖図の掛図のリスト作成と写真記録。解剖学研究室における教材資料の調査を実施した。美術解剖学研究室の「解剖掛図」に関しては、大正時代に油画科の久米桂一郎教授とその門下生によるものとされており、掛図は大学院生への資料として現在にいたるまで使用されている。保存状態を考える上においても、すぐにでもスキャニング等を行いうことが望ましい。これに関しては、さらに制作者および、制作従事者（門下生）への権利等も今後において考慮が必要になるため、今後はそういった権利関係にも触れながら調査を進めていく必要がある。

4. VR 開発研究

報告: 特別研究員、大学院美術研究科保存修復彫刻非常勤講師 山田 修

３D に関する VR、Web コンテンツの開発手法の研究を行う。開発ソフトウェア「Unity」において、スタンドアローンコンテンツ、Web コンテンツ、iPad、iPhone 等携帯端末上での３D コンテンツについて主に表示上の技術調査やインタフェースのプログラム開発を行った。

３D データの質感をともなった表示手法

彫刻文化財の表面にみられる顔料、金箔、漆等の質感を可能な限りマッピング技術により再現する。東大寺法華堂執金剛神立像の彩色の再現をテーマに研究を進めている。

ハンディタイプのスキャナによるモデリング技術の検討

新たにハードウェアモデリング技術について検討を行った。ハードウェアは「脱三脚」をテーマに近年市場を伸ばしているハンディタイプのものを中心にテスト及び実践的な活用を行い、その可能性について研究を行った。

(1). Artec 社ハンディスキャナ MH

計測対象に対して数十センチ離れた位置でなでるように操作する。そのため三脚の設置が困難な場所から、従来データの取得しにくい部分の計測が可能になる。今年度は東大寺戒壇堂四天王像（以下、戒壇堂像）、中性院弥勒菩薩立像（以下、中性院像）等の計測を行った。ただしこれらの計測は従来の三脚固定型スキャナであるｺﾆｶﾐﾉﾙﾀ社製 VIVID9i で計測しきれない部分の補足的な作業である。その配置状況から従来

の三脚だと計測しにくい部分も容易に計測可能であるが、精度については固定型には及ばず、特に深度で精度が大きく変わるため、信頼性は高いとは言い難い。しかしデータの処理の方法次第では非常に有効な手段となり、今後の活用が期待される。

(2). Microsoft 社製 Kinect
本来テレビゲーム機のコントローラであるために玩具の域は出ないが、使用方法によっては非常に高い有効性を持つ。また類似性能を持つものとしてはスイス MESA 社　スイスレンジャーSR4000 があるが、SR4000 が百万円程度に対して、Kinect が二万円弱であり、そのコストパフォーマンスは極めて高い。操作方法や利点、欠点は Artec 社と同様であり、精度の点では落ちるが、金箔、黒といった光学的に計測が苦手とする表面に対しても、一定以上の結果は生み出す。
実際に薬師寺薬師三尊像脇侍の計測において使用したところ、鋳造の黒色に対して VIVID9i では計測できなかった部分もデータを取得することができた。比較的小さな 1 m以下の像ではデータの形状の再現性は乏しいが２ｍを超えるような像に対しては、計測が厳しい条件下であれば許容範囲であるともいえる。

(3). FUJIFILM 3D 計測システム採用　空間計測ソフトウェア「撮測 3D」
ステレオカメラから写真測量の原理で３D データ生成する機能を持つソフトウェアである。彫刻文化財において可能な限り試行錯誤して使用したが、十分な結果は生み出せず、現段階では実用的ではないと判断しざろう得ない。

5. 発表・映像制作・執筆活動等その他

発表 (特別研究員 山田 修)

(1). 「彫刻文化財の修復への三次元データの実践的な利活用における作業効率と受容性」、文化財保存修復学会第 34 回大会研究発表要旨集、P054、日本大学文理学部百周年記念館、2012 年
(2). 「彫刻文化財への三次元計測の活用について」第８回　3 次元計測フォーラム、講演、川崎市産業振興会館、2012 年 6 月 6 日
(3). 「仏像を支える科学技術」朝日・JTB 交流文化塾、朝日カルチャーセンター（愛知県名古屋市）、2012 年 6 月 2 日

映像制作(特別研究員 山田 修)

(1). 「もの・わざ・こころ」研究報告発表展 2012　陳列館
３D プロジェクタを利用した 100 インチ立体視映像。昨年度は CG による立体視映像だったが、今回はほぼ実写映像。立体視における撮影、編集、送出方法の研究を行った。
(2). 「高知県雪蹊寺毘沙門天立像」博士発表展（解説映像）　大学美術館
博士発表展の展示における博士後期課程中村志野の研究の解説映像を制作。毘沙門天立像の造形、構造を解説する映像の制作を行った。
(3). 「東大寺法華堂 執金剛神立像 ３D 及び彩色復元における総合的研究」（受託研究）
テクスチャマッピングの手法の研究と本物に肉薄した質感をマッピングにより再現する。今年度完成予定。

執筆活動(特別研究員 山田 修)

(1). 「彫刻文化財における３D データの活用「アナログ」と「デジタル」の調和」『アーカイブのつくりかた　構築と活用入門』共著、NPO 知的資源イニシアティブ編、勉誠出版、2012 年
(2). 「３D データから考察する「定朝」、「慶派」、「快慶」の特徴」、『３D デジタルデータをもとにした快慶的特徴基準の作成 －快慶とその周辺への形状伝播－』平成 21～23 年度 科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書、2012 年
(3). 「東京藝大大学院文化財保存学が進める３D 計測事業について」『籔内佐斗司 やまとぢから』、青幻舎、2013 年

その他

(1). 「茨城大学六角堂　宝珠復元研究」（受託研究）(特別研究員 山田 修)
2011 年の津波により消失した六角堂の宝珠の破片を３D 計測し、形を復元。六角堂再建の一助を担う。展示用の現状及び復元模型を３D データより切削機を用いて制作。

6. 3D ワークショップ参加報告(ドイツ)

報告：特任助教 今井紫緒

光沢対象物の計測について

これまで、本研究にて光沢物のデータ取得は昨年計測を行なった松田権六作「草花鳥獣小手箱」にて成果が出ており、Breuckmann 社でも本件研究成果と今後の可能性について認識してもらっており評価を受けた。技術的な面でレクチャーを受けたが、我々の行なったデータと比較してみると本研究でのデータの方が精度的にもデータ内容としても計測技術を得ているのではないかと実感できた。

前にもある「草花鳥獣小手箱」は金箔の質感を超えた金属鏡面的な光沢を放っており、３D スキャナーが最も不得意とする素材である。光源が光沢物に反射することによりデータの取得ができないのである。この特性を考えわざと焦点を対象物から外して取ることでデータ取得が可能になった。しかし３D データと同時に取得できるカラーデータについては、光沢物の反射を免れないことにより各ショットで得たカラー画像はそれぞれまばらなカラー情報となってしまい、合成した際に上手くデータ同士が繋がらないことは避けられなかった。しかし、メーカーとの話の中で次期バージョンでは更に強化されたカラーモジュールが導入される予定とされている。

カラーモジュールの強化によって期待できること

高精細な３D スキャナーのカメラによって取得できるテクスチャーデータはポリゴン精度に依存しており、現在までの活用としてはポリゴンをパラメーターにて FULL の設定にして精度良くデータ計測する為に、作業時間、効率が非常に悪かった。それが、ローポリゴンに対しても高画質なテクスチャを貼れる事になれば、現地での作業時間の短縮、また、データ量が少なく画像としては高精度な３DViewer が閲覧可能となると予測できる。テクスチャーデータを後から貼付ける事ができるようになるということは、smartSCAN で取得した画像データではなく、他機材で取得したデータを活用できるようになる。これによってメリットは smartSCAN で取得している画像画質より、現在の一眼レフカメラで取得している画像画質の方が断然良い画質であり、それを３D データに貼付けられることができるのならば、スキャナーで取得しているテクスチャーデータではなく、一眼レフでの画像を使った方がより、高い効果が期待できるといえる。
更には、カラーデータのグラデーション合成が可能である事によって１体のデータがより完成度のあるデータとなり、さらなる躍進につながるのではないだろうか。
このように当研究において、カラーデータの必要性について有意義な意見交換が取り交わせたのは機器を扱っていく上においても貴重な機会を得たといえる。

パラメーターの設定について

BRE データ　スキャナー計測後、Rapidform でのデータ処理方法について
これまで smartSCAN でデータ取得し、そのデータを Rapidform に再度インポートしてデータを一枚ずつ処理を行なっていた。その理由として、スキャンしたデータはノイズや状態の良くないポリゴンが含まれており、optocat ソフト内でそのまま不要データのある状態で合成すると、形が鈍くなるなど、データ精度が悪い箇所を処理せずに合成してしまうとデータ同士の間に段差ができてしまう。そのことにより、optocat 内での作業で終わらせるのではなく、Rapidform で不要データの処理を行ない最終形状としていた。しかし、Rapidform に持っていったデータは一枚一枚の座標は optocat で位置合わせした座標軸情報の状態を保っていないので、不要データの処理などを行うことはできるが、再度位置合わせをする必要があり、その作業には膨大な作業時間と、データ容量が必要である。今回、Breuckmann 社のプログラマーの方により作業効率の良いデータの使用方法をレクチャーして頂き、上記の Rapidform での位置合わせ作業が不要になるデータの書き出しの方法を知る事ができた。

その他、データ処理作業を optocat のみで作業できるよう活用方法のレクチャーを受けた。

7. 平面資料のデジタル化活動報告

報告:特別研究員、大学院美術研究科保存修復日本画　非常勤講師　松村公太

デジタル化活動

(1). 東京藝術大学大学美術館収蔵作品の高精細デジタル撮影及び合成
(2). 個人蔵軸装仏画や花鳥画の高精細デジタル撮影及び合成
(3). 保存修復日本画研究室修理作品の高精細デジタル撮影及び合成
(4). 平等院ミュージアム鳳翔館収蔵作品の再現模写の高精細デジタル撮影及び合成
(5). 御後絵復元模写完成作品の高精細デジタル撮影及び合成
(6). 高句麗壁画屏風（戯作画）高精細デジタル撮影及び合成
(7). 学内で開催された展覧会、シンポジウムの記録撮影

教育・研究活動

各国の壁画調査及び質感の再現に関する研究（宮廻科研 B との関連事業）
(1). 保存修復日本画研究室学生を対象とした撮影及び合成出力等 PC 関係の指導
(2). 高句麗壁画特許技法の精度向上の為の研究
(3). 保存日本画研究室編日本画用語辞典のアプリ化への検討
(4). 金属材料を用いた絵画・版画の撮影及び複製技法の研究
(5). 特殊な環境下における軸装作品の撮影手法に関する研究
(6). デジタル機器展示会、JVCKENWOOD 研究所等の視察
(7). 平等院鳳翔館内鳳凰堂板壁絵　デジタル再現研究
新たな機材として画像レタッチソフト【Adobe Creative Suite 6 Design Standard】及び RAW 画像現像ソフト【Phase ONE Capture One 6.4 Pro】を購入した。
以下、主要な活動についての概要を報告する。

東京藝術大学大学美術館収蔵作品の高精細デジタル撮影及び合成

概要

(1). 撮影日：2012 年 4 月 9 日

(2). 撮影作品：
「十六羅漢図」「小野雪見御幸絵巻」「山水図（伝夏珪）」「黒谷上人伝絵断簡」「粟鶉図（伝雪村）」「物語絵断簡」「弘法大師絵伝断簡」

(3). 撮影目的：修士課程・古典模写の参考資料作成のため

(4). 撮影機材：デジタル一眼レフカメラ（NikonD7000）、
マクロレンズ（micro nikkor　60mm2.8 f ）自由雲台（KTS 社製）、三脚（Manfrotto 055CXPRO3 3-Section Carbon Fiber TRIPOD）、錘カメラキャリブレーションソフト（x-rite 社製　ColorChecker Passport）、合成ソフト（Photoshop CS5）

成果

保存修復日本画研究室の学生が行う古典模写の対象作品を閲覧し、高精細デジタル撮影を行った。全体写真をベースとしながらマクロ撮影による部分写真をパソコン上で合成し、細部まで鮮明に確認できる資料を作成した。また、学生が主体的に資料を作成できるよう、撮影から合成、色調整、出力までの一連の作業を指導した。

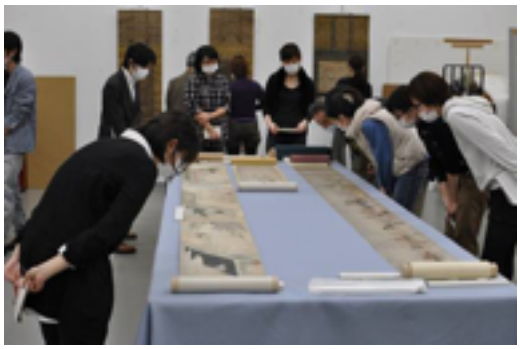


図 7-1 調査の様子

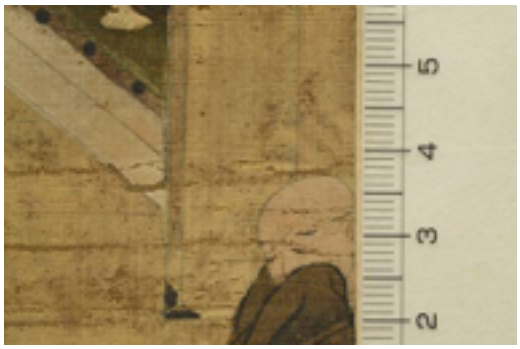


図 7-2 黒谷上人伝絵断簡部分

図 7-3 編目の調査

琉球王朝第 18 代尚育王御後絵　復元模写」撮影

概要

(1). 撮影日：2012 年 5 月 17 日
(2). 撮影作品：「琉球王朝第 18 代尚育王御後絵　復元模写」
(3). 撮影目的：受託研究作品の完成時記録のため
(4). 撮影機材：撮影機材：デジタル一眼レフカメラ（NikonD800e）、マクロレンズ（micro nikkor　60mm2.8 ｆ）自由雲台（KTS 社製）、三脚（Manfrotto 055CXPRO3 3-Section Carbon Fiber TRIPOD）、錘カメラキャリブレーションソフト（x-rite 社製　ColorChecker Passport）合成ソフト（Photoshop CS5）

成果

平成 22 年度～23 年度に受託研究として学内（保存修復日本画）で制作された、「琉球王朝第 18 代尚育王御後絵　復元模写」の全体及び部分撮影を行った。本作は東京芸大で制作後、外部の表装業者に輸送し掛軸装に仕立てられるため、パネルに張り込んだ平滑な状態で記録撮影を行った。また、完成前の作業途中段階においても随時記録撮影を行なっており、復元模写工程を伝える資料として今後の作品展示に活用される。本学ではこうした受託研究によっても多くの作品が制作されているが、完成した作品は依頼者に納品され学内には残らない。制作工程を含め貴重な資料としてアーカイブを進める必要がある。

図 7-4 共同制作風景

図 7-6 部分

図 7-5 御後絵復元模写 全体図

高句麗壁画屏風　戯作画　高精細分割撮影

(1). 撮影日：2012 年 11 月
(2). 撮影作品：朱雀 2 面　玄武 1 面　青龍 1 面　白虎 1 面
(3). 撮影目的：劣化が著しい高句麗壁画の戯作画（複製画）の次期制作の為の研究を目的とした撮影を行った。
(4). 撮影機材：デジタル一眼レフカメラ（NikonD800e）、マクロレンズ（micro nikkor　60mm2.8 f）、自由雲台（KTS 社製）、雲台（KEYENCE マイクロスコープ用雲台）、カメラキャリブレーションソフト（x-rite 社製　ColorChecker Passport）、合成ソフト（Photoshop CS6）

成果

撮影を松村、合成を平尾杏奈（本学卒業生）が担当した。本作は高句麗古墳壁画を屏風の装丁に仕立てたもので、屈曲した状態で撮影を行った後、解体し各面が独立した状態でより詳細な記録撮影を行った。素材の質感を再現した本学特許技法による複製画は今後も量産が見込まれるため、作業効率を高め技術者を育成するためにもこうした作業工程と完成後の記録画像が重要な資料となる。

図 7-7 制作風景

図 7-8 高句麗古墳壁画戯作画 全体図

芳泉文化財団　研究発表展（「美しさの新機軸」）展覧会場撮影

(1). 撮影日：2012 年 10 月 31 日、11 月 1 日
(2). 会場：本学陳列館及び正木記念館

概要

公益財団法人芳泉文化財団の依頼により、文化財保存をテーマとした芳泉文化財団研究発表展覧会会場の撮影を行った。会場内風景や宮田学長らが参加したレセプションのスナップなどを撮影した。本展覧会は芳泉文化財団の助成を受けた若手研究者（東京藝術大学在学生、卒業生が主）が研究成果を発表する場であり、今回が第一回となる。展覧会は隔年開催の予定で、静止画の映像資料をアーカイブすることで広く社会に発信するソースを得た。作品だけでなく展覧会全体の撮影を行うことで仮設壁面の設置状況や照明、配線、解説パネルの配置などが記録として残り、次回開催でも設営を円滑に行えることが期待できる。

図 7-9 正木記念館会場外観

図 7-10 展示会場の様子

InterBEE　視察調査

(1). 視察日：2012 年 11 月
(2). 会場：幕張メッセ
(3). 参加者：松村公太、平尾杏奈
(4). 視察目的：国内外の最新のデジタル機器の見本市で、今後のアーカイブ事業に活かせるような技術や製品の視察を行った。今回は３D 撮影技術や４K８K の高精細大画面映像に関連するものが多く、次世代の機材発展の方向性を垣間見た。

図 7-11 会場内の様子

平等院鳳翔館内鳳凰堂板壁絵　デジタル再現研究

(1). 開始時期：2012 年 12 月
(2). 参加者：荒井経、松村公太、狩俣公介、平諭一郎、平尾杏奈、綿引はるな
(3). 依頼者：平等院

概要

現在平等院鳳翔館に展示されている板絵複製を刷新する事業であり、保存修復日本画研究室が受託研究として行う（2014 年 3 月納品予定）。平等院の依頼により、人の手による復元模写ではなくデジタル上で半永久的に利用できる資料を作成する。本年度前期後半に平等院にて行った平等院鳳翔館内鳳凰堂板壁絵下図（掛軸）の撮影を通し、今後の研究方針を検討した。

現在平等院本堂に展示されている昭和期の板絵模写は外気にさらされ劣化が進んでいる。この模写が制作された当初の写真は残っておらず、完成 10 年後に飛鳥園が撮影した資料があるが、下地のヤニが上がってきている等それ自体すでに多少劣化が進んだ状態の写真である。また、蓮弁の配色などに誤りが見られるため、本研究では図像の資料としてこの写真を用いながら、最新の学術的考察、科学分析結果を反映させデジタル再現を行う。作成するデジタル資料は原寸大等倍印刷に耐える高精細なものが望ましく、フィルム写真を元にデジタル彩色を施して出力し、手彩色を加えて鮮明な画像に戻してからデータとして取り込み、合成して完成する予定である。

図 7-12 平等鳳翔堂館内

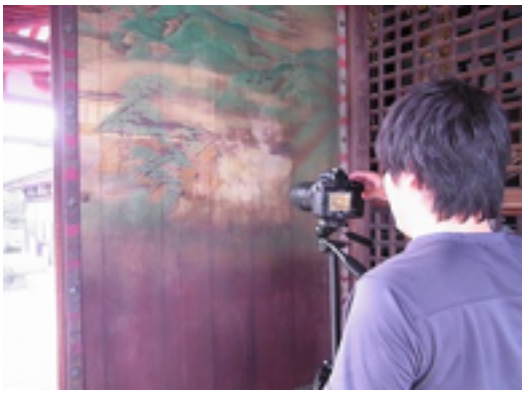


図 7-13 平等院鳳凰堂本堂板絵模写の撮影

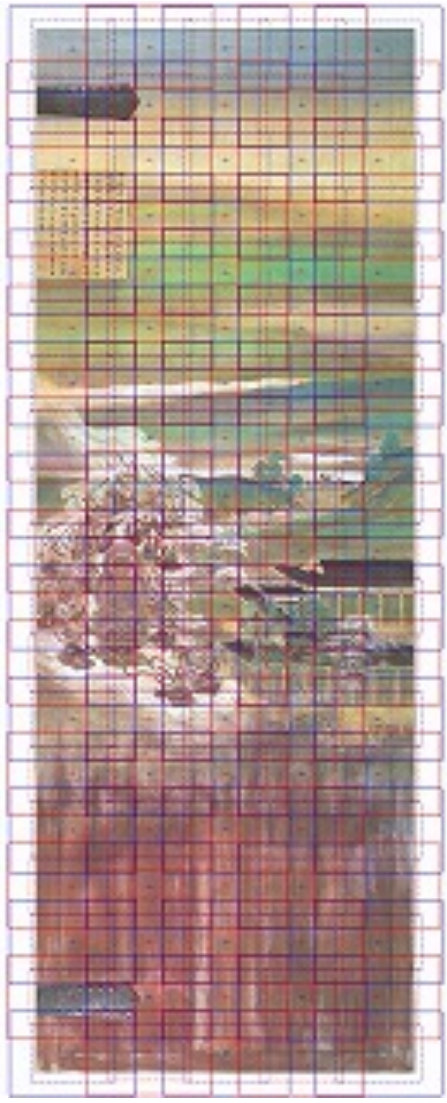


図 7-14 分割撮影のための下準備スケール

JVCKENWOOD 研究所　視察

(1). 視察日：2012 年 12 月
(2). 参加者：宮廻正明、荒井経、今井紫緒、松村公太、平諭一郎、平尾杏奈
(3). 視察目的：JVCKENWOOD はカーナビ、高精細ビデオカメラ、音響機材などの分野で実績を上げている企業であり、本学（保存日本画研究室）と NDA 契約を結び、共同開発を進めるべく相互理解の為の視察を行った。

敦煌研究院・東京芸術大学シンポジウム　分科会発表

(1).　開催日時：2013 年 2 月 27 日
(2).　場所：赤レンガ 2 号館 3 階
概要

中国・敦煌研究院より院長、副院長、研究所長ら 5 名が来日し、本学にてシンポジウムを行った（シンポジウム「敦煌研究院と東京藝術大学　交流のこれから」）。それに伴う個別の分科会で保存修復日本画研究室が模写や複製制作に活用しているデジタル技術についての研究発表を行った。敦煌研究院でも模写制作にプロジェクタによる図像投影などデジタル機材を導入してはいるものの、画像の合成技術などは未だ発展途上の段階にあるといえる。一方、書籍や古文書に関してはデジタル上でのアーカイブが進んでいる。本学が研究を進めているより発展的なデジタル技術の応用に関しては共同研究を通して理解を求めていきたい。

総括

24 年度は特に後継の育成を目指し、学生や卒業生へのアーカイブ技術の指導を重点的に行った。保存修復日本画研究室の学生に対しては美術館での作品分割撮影および合成の手法の講義を継続しているが、その成果により近年学生や卒業生の撮影・画像処理技術が飛躍的に向上している。模写のための資料や受託研究に利用する資料を学生が自ら作成できるようになり、こうした画像資料が研究室に年々蓄積されている。また、本年度は通常の平面作品撮影に加え、屏風や大画面の掛軸など特殊な形状、特殊な環境下における撮影手法についても検討する機会があった。今後、文化財や様々な素材形状の作品のアーカイブに対応できるよう今後も撮影機材や手法、照明等に関する研究を進めたい。

25 年度は学内に新設されるアートイノベーションセンターとの連携により、外部企業や専門家を交えた研究領域の発展、拡大が見込まれる。壁画や油彩画などの複製制作も予定されているため、平面作品アーカイブにおける３D スキャナの具体的な活用方法などについても考えていきたい。

平成 25-27 年度

1. 活動報告

総合芸術アーカイブセンターでは、デジタル技術も用いながらも美術情報のアーカイブをどのようにすべきかを念頭に実践してきた。それは、そのまま残された紙媒体や、映像記録、音声等それらが学内にバラバラに存在している状態では、美術教育、芸術教育においては後世に残すべき情報が限られてしまうとの理念によるものである。たとえば彫刻科の中で保管されている「高村光雲の木寄法標本」というものが残されているが、かつては、教材として使用されていた木彫の技法習得用の模型であり、使用方法も含めた関連情報が失われてしまうとただのモノ（歴史的な）として保管されていくだけとなるのである。この場合、３D スキャナを用いて形状データを保管し、さらに教育現場への還元を行うといったところまでが重要なこととなる。芸術教育のアーカイブの一例として、今後行うべきケースといえる。

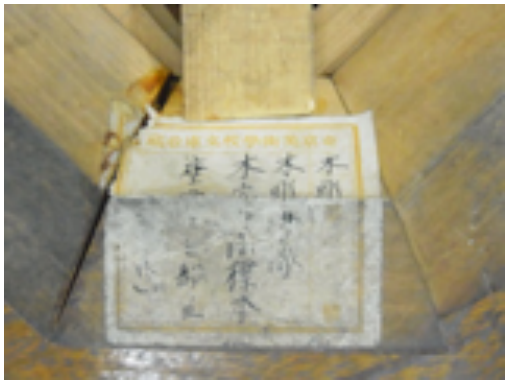


図 1-1 木寄法標本裏面

図 1-2 木寄法標本坐像

また、文化庁文化財部美術学芸課より依頼を受け重要文化財としての指定根拠とする為の調査に関する協力を行った。下図は帝釈天とされる青銅の像のデータ画像であるが、一部表面に刻印されている銘文を、高精細３D スキャナを用いて一度形状データにすることで、表面の色を取り去り、純粋に形状のみを観察できることから、文字の判読作業が可能となった。

図 1-3 色彩有り

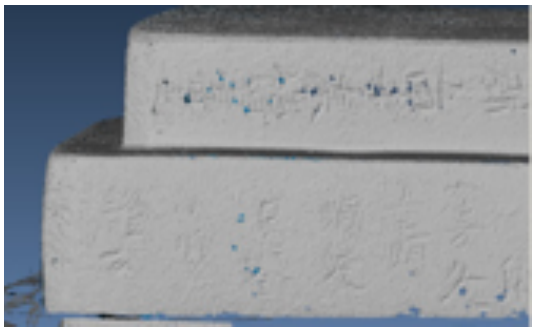


図 1-4 色彩無し

このように、文化財としての像そのものの保管、管理も重要であるが、その由来や、観察などから得られる情報も付随させることで、アーカイブコンテンツとして後世に残すことができ、また、それを活用して芸術情報の利活用につながるのである。

東京都庭園美術館

東京都庭園美術館からの受託研究では、こちらの「香水塔」のアーカイブコンテンツ化を行った、本件では、一度修復がなされていたものを美術館のリニューアルにあわせてより良い状態を保つべく修復がなされたのだが、その際に３D 計測も行いたいとのことから、本体の形状の高精細データと、本学研究員による、技法調査、文献資料、素材分析までを行った、その概要は下記のとおりである。

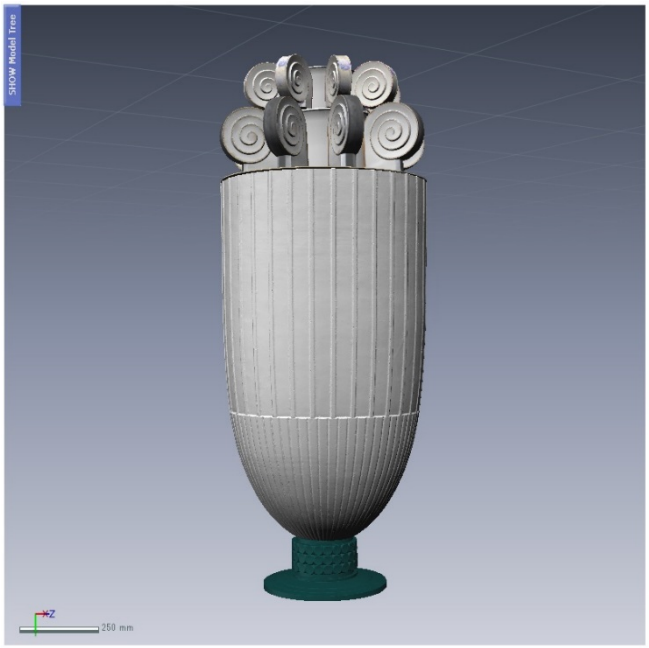


図 1-5「東京都庭園美術館蔵の香水塔３D データ」

研究題目

フランス･セーブル製（アンリ･ラパンのデザイン）の香水塔 3D データ計測とアーカイブコンテンツ化

研究目的及び内容の概要

○ 研究目的

庭園美術館所蔵の香水塔の３D データ化の過程を通して、陶磁器としての技法、香水塔の由来についてなどの文書情報も含めたアーカイブを作成するとともに当時の技法を解明する。

○ 研究内容

庭園美術館所蔵　アンリ･ラパンがデザインした、セーブル製の香水塔を 3D データ化し、技法や、香水塔をめぐる歴史的経緯等の文書情報も含めたアーカイブの作成保管、さらに、3DCG 映像の作成、3D データ上で設置されている建物の内部も含めた香水塔の当時の姿の再現を試みる。

高精細 3D スキャナを用いて対象の表面データを作成、その後 3D データの組上げ作業を通して、データ上で精度のある色彩情報も含めた再現を行う。最終的には 3D データを用いての再現性の高い CG 映像コンテンツの作成と展示空間での公開を行う。

本件では、実物の香水塔の 1/4 サイズの縮尺模型も制作した。データを活用することでより身近に鑑賞したり、資料として保管することも可能となり、実際の活用についてもさまざまな試みを行った。

東京富士美術館

また、２０１４年から行ってきた東京富士美術館からの受託研究では、「タヴォラ・ドーリア」と呼ばれる絵画の立体化を行うというものである。もとの絵画はレオナルド・ダ・ヴィンチが下絵を描いた「アンギアーリの戦い」（１４４０年のフィレンツェ共和国とミラノ公国の戦争）がモチーフとされる壁画であり、現存している資料も少ない。その関連作品のひとつである本作品の立体作品を制作した。その概要は下記のとおりである。

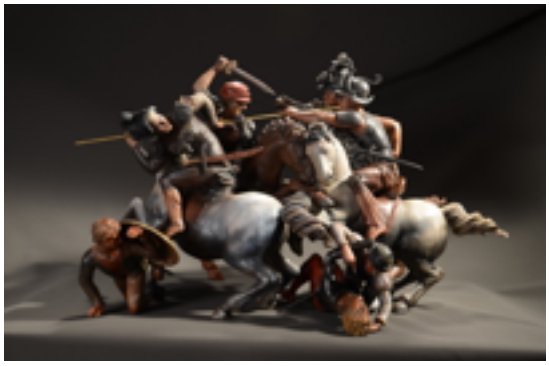


図 1-6 「アンギアーリの戦い模型再現」

図 1-7 「タヴォラ・ドーリア」

研究題目

レオナルド･ダ･ヴィンチと「アンギアーリの戦い」展に合わせての三次元モデルの制作

研究目的及び内容の概要

○ 研究目的

レオナルド･ダ･ヴィンチの作とされる「アンギアーリの戦い」の部分的に残された絵画から、構図、構成の把握と創作の秘密解明の為に三次元モデル（立体化）を制作する。

○ 研究内容

レオナルド･ダ･ヴィンチ作とされる「アンギアーリの戦い」の一部分（タヴォラ･ドーラ）をメインイメージとして、さらに、後世におけるその模写などから、レオナルド･ダ･ヴィンチが構想していた絵画空間の解明を行い、描きかけの絵画から、模型制作を通して創作の秘密に迫る。

制作サイズは高さおよそ 50 ㎝程度で、実制作に際しては主に粘土を用いて検討を重ね、最終的に高品質な硬質樹脂に置き換え、二次元から三次元空間へと置き換わる際の構成も含めた精緻な彫刻としての再現を試みるというものである。

また、本件の場合、完成したモデルと CG 再現なども行い、今後の研究資料となるようにアーカイブコンテンツ化も行った。実際に想定されていた空間構成をより具体的に把握することが可能となるため、各人物、馬、装備類がどのようになっているか今後の資料として活用されることが期待される。また、最終年次ということもあり、これまでのアーカイブ事業の様々なケースから 3D データの利用に関するガイドラインも進めている。

2. 総括

これまでの東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター３Ｄ（美術情報）の取り組みとしては、日々生み出されていく美術情報をどのようにして後の世に伝えるべきかを模索する試みだったといえる。そのいくつかでは今後も続けていくべきとされる事例も見られ、その得るところは大きなものがあった。また、継続していく場合、大学の教育現場に根ざした活動を視野にいれていくべきである。たとえば各科に残されている伝統的な技法や、その講義碌、講演会、発行物、作品カタログなどなど、日々膨大に生み出されていく情報において重要なことはなにかということであるが、それらは各学部、各研究室単位で協議して行うことからはじめられなければならない。なぜなら、それらの情報を活用していくのは外部の研究者も含めて、芸術を学ぶ学生、教育に携わる者達である。一度きりの芸術資源ではなく、再生と利活用していくべき芸術資源として、デジタル技術と人材を用いて教育の中に還元していかなければならないのである。それは、残された文化財や、モノがアーカイブを通して、次の時代の人々へ接続されていかなければ、これまでの歴史と同様に失われ続けてしまうのである。
異なる情報と情報が関係を持っていくことにより、新たな知が創造されていくように、デジタルアーカイブは恒久的な機能として維持されていくべきものと考えている。

総合芸術アーカイブセンター3D(美術情報)のこれまでのアーカイブコンテンツ項目

ヴィンチェンツォ・ラグーザ「日本婦人像」の研究(2007 年)
東京国立博物館との碌山の「女」についての共同研究(2012 年)
橋本平八「花園に遊ぶ天女」の 3D 計測研究 (2012 年)
西洋美術館との連携事業「彫刻技法アーカイブ（彫刻の魅力を探る）」(2012 年 10 月)
彫刻科「石膏取り技法アーカイブ」(2013 年 1 月)
東京藝術大学美術館蔵平櫛田中作「鏡獅子」の 3D 研究(2014 年 8 月)
東京国立博物館と国立科学博物館とのタルボザウルス頭部骨格化石調査と研究(2014 年 9 月)
文化庁「重要文化財の指定根拠の為の協力」の銘文調査のための３D 計測(2015 年 2 月)
東京都庭園美術館「香水塔」３D 計測及びアーカイブコンテンツ化に関する研究(2015 年 3 月)
東京大学とのロボット共同研究における外装デザインと３D データによる外装作成(2015 年 5 月)
東京富士美術館「アンギアーリの戦い」立体化受託研究(2015 年 12 月)
碌山「女」縮尺ブロンズ像の頒布計画(2015 年)

音響・映像データ
研究プロジェクト

2011.05–2016.03

平成 23 年度

1. アーカイブに向けた現状調査

過去の音響・映像資料、また各科の貴重音源の現状と資料数の把握

(1) 学内にあるオリジナル録音を主体とする音響資料の把握
（5 月の時点で確認：録音された公演数：4796 公演、録画された公演数：2743 公演）

(2) 各研究室の平成 23 年度所蔵分資料情報を追加(870 点)。総計 12,659 点。

(3) 貴重資料保管庫への移管・移動資料の整理、点検、データベースへの反映（音響研究室より移管：CD1230 点、DVD399 点、BD52 点）

(4) 音楽研究センター貴重資料保管庫の所蔵調査
(U-matic,VHS,S-VHS,DVcam,MiniDV,DAT,Open Tape,DVD,Hi8,8mm,Beta,カセットテープ,HDcam,MD は終了。Betacam も今年度中に行う予定。

(5) 東京藝術大学サウンド・アーカイヴ・データベースとのリレーションを図るためのデータの整理および補正。
分類の見直しとそれに伴う修正作業。具体的には、同じ公演の版違いを A、複製を a としてラベル用の番号を新たに付与した。在籍者ふりがな調査については、平成 23 年度全員分のデータを調査（平成 20,21 年度に調査を実施しなかったため、平成 20 年度の大学院 1 年などのデータが未調査）

(6) 今年度、新たにリサーチ・センター、作曲教員室、打楽器レッスン室を調査対象にした。
現時点での所蔵資料数は、リサーチ・センター121 点、作曲教員室 45 点、打楽器レッスン室 136 点（平成 23 年 12 月 20 日現在、調査継続中）。

(7) 演奏芸術センターの所蔵資料調査。
平成 22 年度はデータ提出がなかったため、未収集。（平成 11～21 年度までの合計：516 件／793 点）。データベースへの反映は保留。

(8) 音楽学部教務係で特別講座、公開講座、学内演奏会などのプログラム、平成 16 年度以降の作曲科修了作品についての資料収集。

(9) 各研究室の HDD に保存されている映像・音響資料の調査方法について、今後検討する必要あり。
（現在、古楽教員室、楽理教員室、音楽環境創造科教員室など HD に保存している研究室が増加中）

公演情報の一元化に向けた実態調査

公演を企画する演奏藝術センター、公演情報を発信する演奏企画室、公演を収録する音楽研究センター音響研究室、公演の記録を管理する音楽研究センター閲覧室と、各部署が独自に情報を管理していた。現在、平成 23 年度の公演パンフレットの PDF ファイルを印刷業者から収集し、それに加えて収録 DVD および CD の盤面やブックレットの Word ファイル等の情報を、アーカイブセンターのホームページの各公演ページに集約し、学内の各部署で活用するためにダウンロードできるようにした。これにより公演情報の一元化が可能となり、情報の共有化が進んでいる。

2. 学内配信のための演奏会情報サイトの構築

(1) 音響・映像データの制作、演奏会情報の集約

平成 23 年度の公演（年間 64 公演予定：内 49 公演終了）を学内利用に限って映像配信、音源配信、公演パンフレットの PDF ファイル、収録 DVD および CD ブックレットの情報等を、現在アーカイブセンターのホームページで一部試験的に公開中。

映像 DVD 等は音響研究室が当日の公演を収録しマスター盤の制作を行っている。その際に使用する映像編集ソフト Edius のデータを共有し、アーカイブセンターでストリーミング用のデータ制作を行っている。映像ストリーミング用データとして、QuickTime ファイルと MPEG-4 ファイルを制作し、本プロジェクトがアーカイブセンターのサーバに保存している。

図 2-1 演奏会パンフレットの公開

(2) 収録映像テスト配信の実施

情報プロジェクトからの提案により、QuickTime ストリーミングと Vimeo による映像配信のテストを行った。その結果、現段階では試聴者のコンピュータの仕様に左右されずに配信できる Vimeo を選択し、現在テスト配信を行っている

図 2-2 演奏会情報詳細ページ

(3) Vimeo と類似サービス(Youtube 等)との相違点

・ データ保存容量の無制限

類似サービスは一定の保存領域までの利用制限であるが、VimeoPlus では使用領域が無制限になる。但し、有償版においても、1 週間 5GB までのデータ投稿制限があることから、4 つのアカウントを用いることで効率の良いデータ管理を行う。

・ セキュリティ制限

類似サービスでは、動画サイトに投稿された動画アドレスを別のサイトに貼り付けて閲覧可能であるが、Vimeo 有償版ではあらかじめ決められたサイト上以外では再生できない仕組みを備えていることから、意図しない動画データの拡散等を最低限に抑えることができる。

以上の理由により VimeoPlus(有償版)を利用。アカウントを 4 つ取得し運用中。

図 2-3 映像ストリーミング配信ページ(学内専用)

3. 学内・学外発信へ向けての知的財産権の整備

(1) 利用承諾書の作成と収集

著作隣接権の許諾と収録データ収集の範囲として、年間数多く行われる公演の中から、音響研究室が公式に収録に関わっている公演に絞った。なぜなら、その公演には藝大の録音・録画スタッフ数名が携わり映像作品として完成版 DVD 等の制作を行っているからである。その他の公演は、各科や個人によって記録用として簡易に収録されているが、全ての公演が定期的に収録されている訳ではない。

公式な完成された映像データがとれる公演について今後の活用が期待されるため、この範囲の著作権・著作隣接権の大学が利用する場合の無償許諾を、承諾書にて得ている。

【収集範囲】
定期演奏会、演奏芸術センター企画公演、メサイア公演、モーニングコンサート、博士学位審査会、
その他・音響・映像プロジェクトが定めた公演

【許諾内容】
全ての公演：学内配信用（個人の複製、外部研究施設などからの複製、学内配信等）
一部の公演：学外配信用（学外配信、放送権も含む）現在学内で収集される承諾書は、以下の書式が存在する。

- アーカイブセンター発行の学内配信用・学外配信用
- 演奏藝術センター発行（演奏藝術センター企画公演）
- リサーチセンター発行（博士学位審査会）

今後、各部署に学内で統一された書式使用の提案とその場合の問題点などの検討を行う予定。学内公開・複製・学外発信における著作隣接権について学内内規の策定

(2) 「著作隣接権における取扱規則(案)」を作成

平成 24 年度 4 月からの施行へ向けて学内で意見交換中。施行されると、学内に関して承諾書無しで学内関係者が利用できる。ただし、学外の出演者も多いため、施行後も学外者に対する承諾書は必要。

(3) 問い合わせ窓口の設定と学内周知

- アーカイブセンター問い合わせ専用のメールアドレスの取得。
- Web ページに問い合わせフォームの設置。
- 社会連携推進課、演奏企画室にも問い合わせ窓口の協力を依頼。
- プロジェクト紹介チラシ(200 部)、著作隣接権承諾書の説明チラシ(800 部)を作成。10 月より関係者を中心に配布中。

図 3-1 プロジェクト紹介チラシ

2011 年 10 月 17 日発行

東京藝術大学
総合芸術アーカイブセンター
音響・映像データ研究プロジェクト

承諾書へのご協力をお願い致します

藝大は「著作隣接権」を尊重します！

知的財産権に関わる権利関係をクリアにして、その作品、収録映像などを本学学生・教職員がより有効に利用するだけでなく、世界へ向けて藝大が担うべき芸術の発信、発展、教育、研究のため、より幅広く貢献できるようアーカイブセンターが取り組み始めました。
たしかに今までは一部の公演でしか行われていなかった承諾書収集ですが、今後は著作隣接権を実演家の皆さんの当然の権利として尊重し、大学がその使用許諾をお願いするものです。どうぞご理解とご協力を、よろしくお願い致します。

承諾書が集まるとできること！

■ 公演 CD・DVD の複製（ダビング）
■ 大学案内などの広報活動に使用
教育・研究目的のために！

しかし！
全員分の承諾書が必要

承諾書が全員分揃った
公演しか複製できません

複製希望者
☞音楽研究センター閲覧室
（音楽学部 2 号館・1 階）

著作隣接権の譲渡では
ありません

承諾書を提出し、公演後撤回したい場合は、承諾書を破棄することができます

破棄された場合、その時点でその公演は学内試聴のみに限られます

まずはアクセス！

総合芸術アーカイブセンター
http://archive.geidai.ac.jp
[学内専用]

音響・映像データ研究プロジェクトをクリック！
5 月の公演から順次テスト配信中！

承諾書に関するお問い合わせ
E-mail：info-nr@ml.geidai.ac.jp（アーカイブセンター[音響・映像]：山田香）
Tel：050-5525-2008（社会連携推進課：佐藤和也）
Tel：050-5525-2313（演奏企画室：小林和則）

図 3-2 著作隣接権の承諾書チラシ

(4) パブリックドメインデータの学外発信の検討

- 1960 年以前の公演で著作隣接権が切れた資料は、全 18 公演（WAV データ化済）あり
- 音研センターのホームページですでに学内公開中。ただしトラック番号微調整、音質補正などはされていない。
- 人格権についての学内での意見交換がまだ十分ではないため、学外配信は現在行っていない。学内へは一部の公演に関して配信を行っている。
- 音響補正が必要と認められる程、劣化の著しい音源があるかどうかを調査中。

(5) その他活動内容

- 小泉資料室との連携。業務委託費用、DAT のデジタルデータ化と台帳入力作業のアルバイト費用の協力。「アジア楽器図鑑」への参考映像として邦楽定期演奏会の収録音源・映像の学外公開を検討中。
- リサーチセンターとの連携。博士学位審査会の収録音源・映像の学外公開を検討中。
- 3D プロジェクトからの委託で美術館のオープンリールのデジタルデータ化。今年度中に 30 本の予定。データはアーカイブセンターと共有、公開については今後検討。
- 音楽研究センターとの連携。承諾書の確認状況を連絡し、それにより個人複製の許可を出している。
- 国内調査：「第 2 回 日本文化デジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム（11 月 19 日/立命館大学）」に佐野（教育研究助手）が出席。

4. 小泉資料室報告

(1) DAT データ化作業

複製対象を、既公開の DB「所蔵音響資料(オープンテープ)」原資料 1662 本の複製、1684 本に限定。
当初の対象：

1) 既存公開の DB「所蔵音響資料(オープンテープ)」原資料 1662 本の複製、1684 本。
2) 小泉教授録音のカセット 520 本の複製、約 500 本。
3) 小泉教授市販カセット 140 本中 136 本の複製、約 130 本

（備考）当室には下記３種の複製 DAT テープがあるが、１日４時間×５日／１週間として、2)は 39 年、3)は 13 年を複製に要す。複製は現実味がないと判断した。

アルバイトを雇いあげて、ハードへの複製と台帳入力作業を実施した。進捗状況は以下のとおり。平成 24 年 2 月 19 日時点で、デジタルファイルに変換済み DAT テープ録音時間は、363 時間 6 分 21 秒。残るアルバイトの作業時間は 88 時間（変換予定録音時間 176 時間)、今年度変換録音時間（推定）539 時間（作業予定総時間の 41％)。
(備考)録音総時間数は 1296 時間。これをパソコン２台で同時に複製するため、必要作業時間は 648 時間。平成 23 年度は、この約 3 分の 1 にあたる 250 時間を対象として予算申請。

(2) 「アジア楽器図鑑」関連

- ４月に日本語版暫定版を公開。http://koizumi2.ms.geidai.ac.jp/asia/jp/area.html
- 追加収録分の能楽、長唄、邦楽囃子、義太夫節、雅楽、インドネシア、沖縄につき、演奏者の助言を得つつ編集続行。
- 「アジアの楽器図鑑」作成にともなう業務委託。委託先と業務内容
  - 井上さゆり（大阪外国語大学世界言語センター講師）
    a.ミャンマー語のカナ、アルファベット表記決定と、これに基づく固有名詞の標記変換
    b. 地域関連情報の提供　例）挨拶や風習、小学校内の教授内容など。
  - 櫻井陽(所属なし、インドネシア立芸術高等学院スラカルタ校の履修者)
    a.ジャワ語のカナ、アルファベット表記決定と、これに基づく固有名詞の標記変換
    b.地域関連情報の提供
    c. ジャワ・ガムラン楽器 3 点の演奏録画
    （備考）この他に、モンゴル語でも同様の委託作業費を計上したが適任者が見つからず、12 月 19 日時点では予算 30,000 円は未消化。
  - 英語編翻訳作業続行。
- 「雑資料」（＊書籍を除く諸文書資料が対象）
  DB の既往分類項目を見直すため、約 3000 項目中 3 分の 2 につきチェック完了。

(3) その他

2011 年 11 月 26 日（月）シンポジウム「研究者資料のアーカイブズ-知の遺産 その継承に向けて」（東京大学大学院情報学環主催）で植村室長が下記タイトルで発表。パネルディスカッションにも参加。
「世界音楽のアーカイビングをめざして：小泉文夫記念資料室の概況と展望」

平成 24 年度

プロジェクトメンバー

音楽学部 教授	亀川 徹	
音楽学部 教授	植村 幸生	小泉文夫記念資料室 室長
演奏藝術センター 助教	岩崎 真	
特任助教	山田 香	
非常勤講師	尾高 暁子	小泉文夫記念資料室 学術研究員
非常勤講師	松村 智郁子	小泉文夫記念資料室 学術研究員
特別研究員	佐野 隆	
教育研究助手	佐竹 悦子	小泉文夫記念資料室
教育研究助手	三枝 まり	音楽研究センター 音響資料調査
教育研究助手	彫谷 典子	音楽研究センター 音響資料調査
アーカイブアシスタント	渡邊 愛	博士課程
アーカイブアシスタント	前村 晴奈	修士課程

プロジェクト活動内容

東京藝術大学における演奏会・講演などを記録し、編集作業などを経て、保存（アーカイブ）する。一連のプロセスを円滑にすすめる事。またアーカイブしたデータについては、学内での利用にとどまらず、学外への発信等も視野に入れた取り組みを行う。

(1) アーカイブの対象
東京藝術大学における演奏活動を記録した様々なメディアとデジタル化されたデータ。またその内容に関する文字情報。

(2) アーカイブ後の活用
アーカイブしたデータを学内公開し、権利関係を整備した上で学外公開の検討を行う。また他のプロジェクトとの連携も密に図り、さらなる芸術研究のための活用方法を検討する。

1. 音響映像資料の調査

- 過去の音響・映像資料、また各科の貴重音源の現状把握、資料数の把握を行った。
- 教育研究助手の三枝と彫谷が音響映像資料調査を担当した。

調査内容

(1) 各研究室の平成 24 年度所蔵分資料情報を追加(2,010 点)。総計 14,794(昨年度 12,784)点。
(2) 各研究室における対象資料の所蔵調査。
(3) 音楽研究センター貴重資料保管庫の所蔵調査(オープンテープとオープンテープをデジタル化した CD)。
(4) 東京藝術大学サウンド・アーカイヴ・データベースとのリレーションを図るためのデータの整理および補正(91 件)。
(5) ラベルの見直しとそれに伴う修正作業。具体的には、2 枚組以上のものを 1/2,2/2 のようにラベル用の番号を新たに付与した。
(6) 今年度新たに調査した資料に関して、演奏会名に加えて、現物に記された表記も記録にとり、データベースに反映させた。
(7) 在籍者ふりがな調査については、平成 24 年度の全員分のデータを調査、またこれまで未調査だった平成 20 年度と平成 21 年度についても調査を実施した。
(8) 演奏藝術センターの所蔵資料調査を行った(平成 11 年度～平成 24 年度までの合計：555 件／835 点)。デ

ータベースへの反映は保留。
(9)　卒業試験公開演奏会人名入力に関して、平成 16 年度まで遡及入力。
(10)　学内演奏会のプログラムについて、1974(昭和 49)年～2011(平成 23)年まで教務係に照会。1997(平成 9)年～2011(平成 23)年のみ収集。
(11)　木曜コンサートで映像・音響資料のあるものに関して、プログラムの収集。
(ア)　演奏企画室で平成 7 年～平成 23 年のプログラムの収集、データベースに反映。
(イ)　旧奏楽堂で平成 22 年のプログラムの収集、データベースに反映。
(12)　常磐津(清元、長唄は一部のみ)の人名入力に関して、芸名と本名の重複の整備。
(13)　音響資料調査マニュアル改訂。

資料媒体詳細（2013 年 2 月 18 日現在）

映像資料媒体	資料数
V-11, V-12	39
U-Matic	637
Beta	38
VHS, S-VHS	1,015
8mm, Hi8	258
Betacam (Digital Betacam)	912
HDCAM	2
DVCAM (miniDV)	972
DVD-R VIDEO	1,011
BD-R VIDEO	119
合計	5,003

音響資料媒体	資料数
オープンテープ	2,830
カセットテープ	1,480
DAT	1,207
CD	3,694
MD	84
合計	9,295

音響映像データ	資料数
DVD-R data(音響)	265
DVD-R data（映像）	119
BD-R data（映像）	97
HDD(映像)	15
合計	496

* 各表の媒体の並び順は発売順

2. 公演収録データのデジタルアーカイブ

アーカイブする公演のデジタルデータの作成

藝大で行われる主な公演は奏楽堂で行われるため、奏楽堂ハイビジョンシステムでの収録、及び編集・原盤制作までを音響研究室が行う。その高画質・高音質な収録データを利用し、必要な著作権表示を付加してデジタルデータを作成している。

アーカイブする公演の範囲

定期演奏会／演奏藝術センター企画公演／藝大主催公演／モーニングコンサート／博士学位審査会／その他

アーカイブするデータの種類

音源データ

WAV 形式 (.wav)	サンプリング周波数	44.1kHz
	量子化ビット数	16 bits
	チャンネル数	2.0ch (ステレオ)

・ 音響研究室が製作している原盤が CD-DA のため、それに合わせた形式でアーカイブしている。
・ WAV データは原盤制作と共に音響研究室が作成。

映像データ

・ アーカイブとしての保存用の MOV 形式と配信用の MP4 形式と以下の 2 種類のデータを作成。

MOV 形式 (.mov)		ファイルフォーマット	Quick Time ムービー
	ビデオ	ビデオフォーマット	H.264
		フレームサイズ	1920×1080 HD
		アスペクト比	16:9
		フレームレート	29.97fps
		ビットレート	12000kbps
		エンコーディングモード	複数回実行
	オーディオ	オーディオフォーマット	リニア PCM（非圧縮）
		サンプリングレート	44.1kHz
		量子化ビット数	16bits
		チャンネル	2.0ch (ステレオ)

・ 公演全体を 1 ファイルとして、1 曲毎(楽章別)を 1 ファイルとしてそれぞれ作成。

MP4 形式 (.mp4)		ファイルフォーマット	MPEG-4
	ビデオ	ビデオフォーマット	H.264
		イメージサイズ	1920×1080 HD
		アスペクト比	16:9
		フレームレート	29.97fps
		データレート	12000kbps
		エンコーディングモード	複数回実行
	オーディオ	オーディオフォーマット	AAC-LC（ミュージック）
		データレート	320kbps
		サンプルレート	44.1kHz
		エンコーディングモード	最高品質
		チャンネル	2.0ch (ステレオ)

- 年度初めは Vimeo へのアップロードが MP4 形式しか対応していなかったため、配信用として MP4 形式でデータを製作した。現在は MOV 形式も対応しているようなので、次年度に確認し、対応を検討する予定である。
- 1 曲毎(楽章別)を 1 ファイルとして作成。

公演パンフレットデータ

PDF 形式 (.pdf)	透明テキスト付きファイル

- 演奏企画室の協力を得て印刷業者から最終稿データを受け取り、アーカイブしている。

3. 24 年度までにデジタルデータを作成した公演一覧

（2013 年 3 月 25 日現在）

表 3-1 2010 年度以前

内容	WAV	MOV		MP4		PDF	備考
		全曲	抜粋	全曲	抜粋		
定期演奏会など	2	1		1		48	
モーニングコンサート						91	
博士学位審査会	30		29	13	29	28	
計（公演数）	32	1	29	14	29	167	

表 3-2 2011 年度

	公演数	WAV	MOV		MP4		PDF	備考
			全曲	抜粋	全曲	抜粋		
定期演奏会など	59	0	40		22		30	
モーニングコンサート	13	8					8	
博士学位審査会	6	7	1	6	5	6	7	音源提出者(作曲)1 名有
計（公演数）	78	15	41	6	27	6	38	

表 3-3 2012 年度

	公演数	WAV	MOV	MP4	PDF	備考
定期演奏会など	51	0	8	8	27	
モーニングコンサート	13	10				
博士学位審査会	4	0	0	0	0	
計（公演数）	68	10	8	8	27	

表 3-4 その他のデータ化

	公演数	WAV	MOV	MP4	MPEG	備考
美術館オープンテープ (美術 P より委託)	28	26				内 2 本は取込不可
美術館カセットテープ (美術 P より委託)	78	19				内 4 本は取込不可／作業が年度途中で打切りのため美術館が継続中
彫刻論カセットテープ (情報 P より委託)	27	0				
Art Talk Café -対談シリーズ (GTS 企画)	3	0	0	0	1	
D-コンサート (リサーチセンター企画)	3	1	0	0	0	
計（公演数）	139	56	0	0	1	

4. デジタルデータ作成に伴う問題点と改善点

音源データについて

(1) 音楽研究センターからの視聴や複製の要望が主に映像であること、また映像編集に長時間かかるため映像データの作成が先行し、音源の原盤制作と音源データのアーカイブ共に作業が遅れているのが現状である。
(2) 音響研究室でも作業員不足のため、今後音源データ制作について作業手順の見直し、機材と人員の増加を行い、円滑化を図りたい。

映像データについて

(1) 一公演（約 2 時間）につき、映像ファイルのデータ書き出しに約 2 日程度かかるため、音響研究室との共有パソコンを長期間占有してしまうことが大きな問題である。また作業員不足によりデータ化があまり進められない。そのため原盤制作の遅延に繋がってしまう。今後、作業手順の見直し、パソコンと人員の増加を行い、円滑化を図りたい。
(2) 作業員の増加とその確保に伴い、映像編集のための教育プログラムが今後必要になると考える。
(3) いくつか過去のテープからデータを作成したが、再生時に映像にノイズが入ることがあり、テープ自体の劣化の問題と再生機の問題がある。再生機にはすでに製造中止になっている機材も出てきているため、可能な限りテープ類のデジタル化（バックアップ）を進めないと過去の貴重音源・映像などを失う可能性も少なくないと考える。
(4) 取り込みの時点で映像が解像度の低いまま編集していたデータがあったため、アーカイブで作成したデータも劣化した映像となってしまった例がある。音響研究室が編集に携われない場合、各科研究室の助手や専門外の人が編集に携わるのは（劣化に気付かない、劣化の理由が分からない等）限界がある。今後もビデオ形式など著しく変化していくので、大学としてアーカイブしていく公演については、映像編集を音響研究室や映像専門家が行えるよう予算的にも整えていく必要があると考える。

公演パンフレットについて

(1) 今後データがもっと学内で幅広く活用できるよう検討したい。
(2) 解説者への著作権の利用許諾が、現在では徹底されていない。執筆依頼時に口頭でも許諾をとってもらうよう学内に周知する必要がある。

公演文字情報管理データベースについて

(1) 公演における文字情報を FileMaker Pro、Excel を用いデータベースを設計。
(2) 原盤の CD、DVD、Blu-ray の盤面印刷、ブックレットやジャケットの作成、ウェブサイトのページ作成、権利確認表等に利用している。

5. アーカイブデータにおける著作権と著作隣接権

音楽家のための権利入門「自分の演奏をブログにアップしよう！～著作権と著作隣接権」の企画

(1) 特別講師：福井健策先生
(2) 日時：2012 年 5 月 17 日（木）18:30-20:00
(3) 場所：音楽学部 5-109 講義室
(4) 内容：著作権・著作隣接権の基礎／藝大の「著作隣接権等の取扱要項」について／学内での具体的な手続きについて／質疑応答
(5) 音楽・美術学部に関わらず、学生・教員・職員で、35 名が出席。

公演収録メディアの複製に対する著作権処理

公演の原盤を複製して出演者などに配布する際に、著作権処理(主に著作権保護期間内の楽曲)を行わないと著作権侵害となることが、日本音楽著作権協会(JASRAC)のホームページに記載されている。また、教育機関に対して「学校その他の教育機関が卒業生に配布することを目的として収録する録音・録画物に関する運用基準」があり、複製に際して著作権処理が必要であることを周知している。

(1) 「複製」自体に演奏研究のための複製は私的複製に入る等という枠組みが無い。
(2) 「学校その他の教育機関における複製（著作権法 35 条)」については、枚数制限がおおよそ 50 枚程度と考えられていること、そして本学における種々の演奏活動が同条の想定する「授業の課程による使用」に該当するかが必ずしも定かではないことから、現状での適用には限界がある。また「卒業記念等として生徒たちに配布する録音物・録画物は明らかに授業に該当しない」と JASRAC のホームページに明記されている。
(3) 「私的複製」を大学が機関として行うことは認められていないので大学内の「私的複製」としても扱うことはできない。
(4) 出演者の記録としての複製持ち帰りや、ハードディスクにバックアップのためのデータを蓄積することでさえ、著作権使用料が発生する可能性があることが分かった。
(5) JASRAC の「卒業記念用録音・録画物に関する運用基準」の＜適応条件＞-(2)に「製作事業者は、本運用基準制定以前に製作・頒布した本件録音・録画物に係る利用許諾申請の有無を確認し、報告するものとする。なお、判明した未申請分については、一括して利用許諾手続きを行う場合に限り、遡って本運用基準を適用する。」と書いてある。藝大の公演の特質上、高額の指値がある楽曲もあるため、慎重に進める必要がある。

以上のことより、今年度から試験的に複製の要請があった順に申請を行った。

申請内容詳細

(1) 複製希望があったものの中から、著作権保護期間内の楽曲を含むものに関して、音楽学部会計課を通じて JASRAC に申請を行った。（基本申請内容：DVD49 枚まで、CD50 枚まで）
(2) 5 公演、全 9 件（CD：5 件、DVD：4 件）を行い、7 件が著作権処理でき、JASRAC の許諾番号を付与した上で複製を行った。（DVD の内、2 件は申請保留）
(3) JASRAC が管理している楽曲では、藝大が申請を行う場合「教育機関・非営利のための複製」が適用され、通常の金額より減額された金額となっている。
(4) JASRAC 管理楽曲の複製使用料の計算方法

◆原則として教育機関・非営利を適用された場合
【録音】 1 曲につき 200 円×曲数(5 分毎に 1 曲として換算)
【録画】 ①基本使用料 0 円
②複製使用料 1 分 100 円×楽曲の分数

(5) JASRAC 管理外の外国曲については JASRAC も窓口になっているだけのため、教育機関であっても減額の対象外となり、指値については海外の著作権者および著作権管理団体との直接交渉が必要。
(6) 特に映像の申請に関して、外国曲の複製料（映像とのシンクロ）が著作権者の指値となり高額になってしまうことが判明し、現在の対応として申請を保留・断念したものがあった。

映像の複製使用料が高額になることが判明した公演および楽曲

ケース①			
公演名		創造の杜'12～作曲家 ヴォルフガング・リーム	
公演日		2012 年 6 月 1 日	
申請対象楽曲	作曲者	ヴォルフガング・リーム（ドイツ：Wolfgang Rihm, 1952-生存中）	
	楽曲名	・ヴァイオリンと管弦楽のための《第３の音楽》（日本初演） ・モノオペラ《猟区》（日本初演）	
著作権管理団体		GEMA（ドイツ）	
日本での権利窓口		ショット・ミュージック株式会社	
映像複製使用料 (指値×演奏時間数)	指値	1 分につき 6,500 円	概算　546,000 円
	時間	84 分	
備考		映像複製使用料が高額のため未申請	

ケース②			
公演名		藝大定期 室内楽 第 38 回 第 1 日	
公演日		2012 年 2 月 4 日	
申請対象楽曲	作曲者	エリック・イウェーゼン（米：Eric Ewazen, 1954-生存中）	
	楽曲名	コルチェスター・ファンタジー	
著作権管理団体		作曲家本人	
日本での権利窓口		なし	
映像複製使用料 (指値×演奏時間数)	指値	要確認	概算　？円
	時間	18 分	
備考		指値が未確認のため保留	

ケース③			
公演名		藝大定期 室内楽 第 38 回 第 2 日	
公演日		2012 年 2 月 5 日	
申請対象楽曲	作曲者	アルフレード・シュニトケ（ロシア：Alfred Garyevich Schnittke、1934-1998）	
	楽曲名	弦楽四重奏曲 第３番	
著作権管理団体		GEMA（ドイツ）	
日本での権利窓口		ショット・ミュージック株式会社	
映像複製使用料 (指値×演奏時間数)	指値	1 分につき 10,000 円程度	概算　200,000 円
	時間	20 分	
備考		映像複製使用料が高額のため未申請 2049 年に著作権消滅	

インタラクティブ配信(=ウェブ配信)に伴う複製使用料について

(1) JASRAC が包括契約していないストリーミングサービス(例えば本学が配信に利用している Vimeo など)を利用して映像を配信する場合、配信料に加えて映像複製使用料が発生する。そのため、使用料が高額になる楽曲については、現時点では学外配信を行わない。
(2) J-RAPP(登録制)サービスを使用し、JASRAC への申請をウェブ上で行う。音楽学部会計課、社会連携課を通じてログイン ID 取得済み。次年度申請を行う。

民間放送局の映像を含む公演

(1) 24 年度は民間放送局の映像が流れる公演が 2 件あった。
(2) 放送局の映像は映像の著作権が放送局にあるため、複製に際して放送局への利用許諾の確認が必要。
(3) 放送局の映像の著作権処理は困難なため、現在の対応として音響研究室に編集版原盤を製作依頼。複製などの対応はその編集版を使用する。
(4) 今後、放送局から借りる際に複製の件も利用許諾がとれるよう企画部署との連携も必要と考える。

「著作隣接権等の取扱い要項」施行

(1) 24 年度 4 月より「著作隣接権等の取扱い要項」が施行され、昨年度全員から承諾書を集めていたが、その作業が大幅になくなり業務が軽減された。
(2) 「著作隣接権等の取扱い要項」の対象と範囲：学生の在籍期間、常勤教員・職員の在職期間
(3) 著作権者（作曲科の学生など)、卒業生、非常勤講師（招聘教授含む)、役員、学外エキストラ等は取扱い要項の対象外のため別途承諾書が必要。
(4) 藝大フィルハーモニアのメンバーは年間の公演数が多いため、新規契約時に一括許諾をとる。(公演毎に契約するエキストラは、通常の承諾書による許諾をとる。)
(5) 24 年度より承諾書の提出が公演毎ではなくなったため、学生や教員に対しては学外利用の承諾書を収集する際や複製、下手袖収録での注意などの際に改めて周知する必要があると考える。
(6) 著作隣接権の承諾書において「配信や出演者以外への複製は禁止」「公演のある一部分は配信・複製禁止」という条件付き承諾書を提出する出演者が数名いた。その部分を含めない映像編集版原盤を音響研究室に依頼。また今後、1 公演ずつ許諾状況と活用の範囲を管理する必要があると考える。

CD, DVD, Blu-ray ディスクに記載する藝大ロゴの製作

市販されている CD や DVD 等のロゴは登録商標であるため、大学は機関として使用できないことが判明した。収録ディスクの藝大用ロゴを制作した。

図 5-1 収録ディスクの藝大用ロゴ

権利関係チラシ作成

(1) 「奏楽堂下手袖収録に関する権利処理について」を作成。奏楽堂の下手袖収録の利用者を中心に配布。
(2) 公演資料・利用マニュアル（冊子)」を作成。5 月 17 日に行われた特別講義の際に配布。次年度は学内に広く周知するために更新予定。

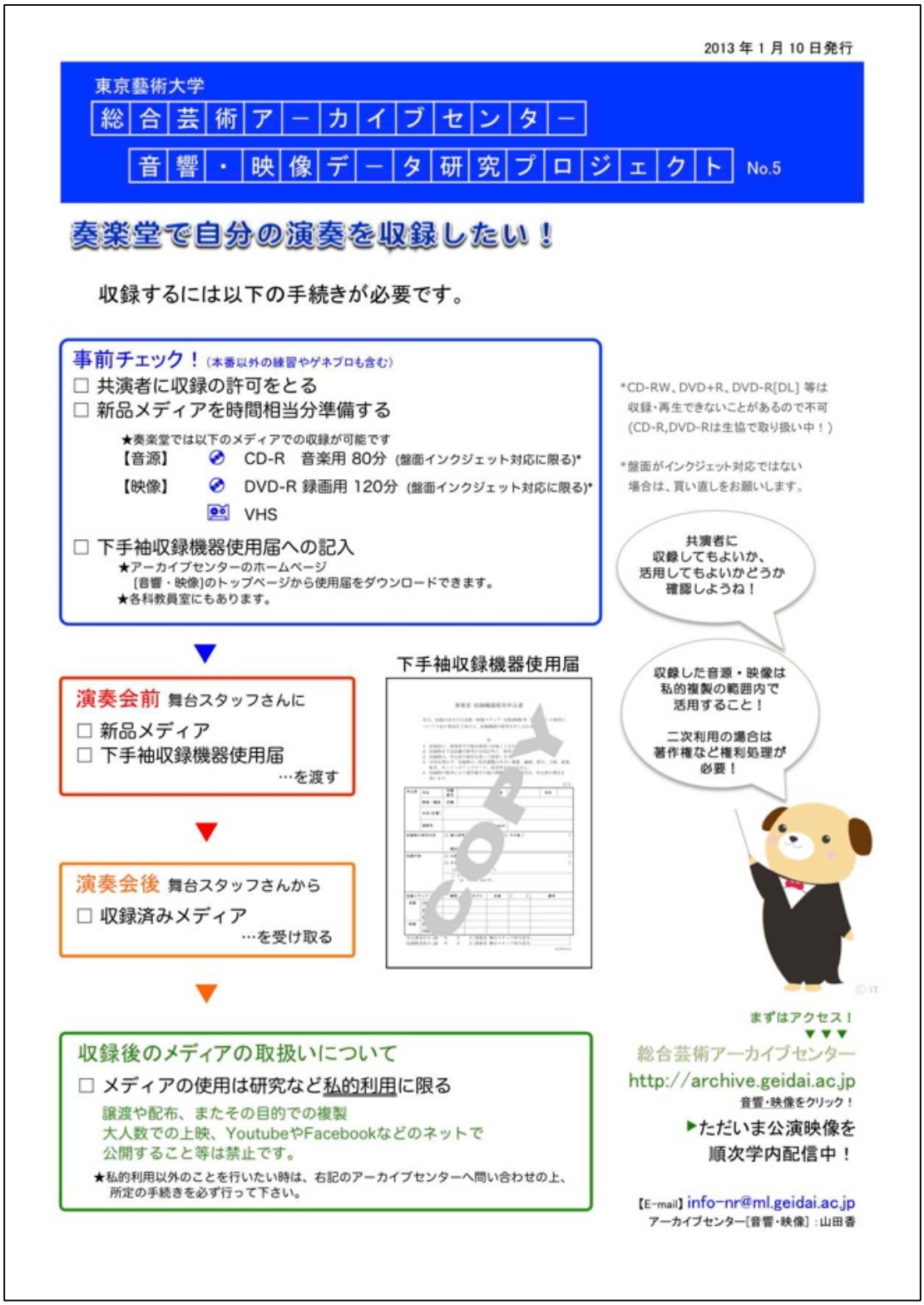


図 5-2 下手袖収録に関するチラシ

図 5-3 公演利用マニュアル

6. 著作権と著作隣接権処理に伴う問題点と改善点

権利関係の啓蒙活動について

(5.「音楽家のための権利入門」参照(2012 年 5 月 17 日))

(1) 対象が学生向けであったにも関わらず学生の参加は少なく、教員や事務職員の参加がほとんどだった。
(2) 1 時間半では時間が少なかった。だが、権利関係の話は受講生の理解度によっても内容が決まってくるので、学内の勉強会や授業などで取り上げるようにして下地を作る必要があると考える。

公演収録メディアの複製について

藝大では、演奏家が公演後すぐ CD や DVD で確認して、次の演奏研究に活かすというプロセスを大事にしている人が多い。しかし、現在の法律と世界の管理事務所の状況では著作権侵害と捉えられてしまうおそれがあることが判明した。このようなプロセスが著作権侵害とされ合法的に行われなかった場合、高額の請求が複製者または申請者に課される可能性もあり、これを続けた場合、公演自体の選曲において少なからず影響があり、むしろ著作権侵害による複製がもっと進むのではないかと懸念する。音楽大学での公演収録原盤から複製し持ち帰るという行為は一般的な教育機関での複製とは異なる性質を、持っていると考える。また出演者ではなくても作曲科や楽理科の学生をはじめ、教員の音楽研究のために必要な複製は、決して「著作権侵害を目的としている訳では無く、演奏技術の発展、創造性の教育のため、また作曲家研究、アートマネージメントなどの学術研究のために用いられる」ということ、そのような研究に役立てるための複製の必要性を、藝大が世界へ向けて訴えていく必要があると考える。

7. 配信のためのウェブサイト構築

学内テスト配信

(1) 適正な権利処理を行いパブリックドメインの楽曲を中心に学内へ配信中。
(2) サイト構築には WordPress を使用。
(3) 映像データの配信にはストリーミングサービス Vimeo を使用し、サイトに埋め込む形式でプレイヤーとして利用。

学外テスト配信

(1) 本学公演の学外配信用ウェブサイトを新設。
「GEIDAI Music Archive（藝大ミュージックアーカイブ)」[http://arcmusic.geidai.ac.jp]
(2) 現在は博士学位審査会の収録映像に限定して配信。パブリックドメインの楽曲で演奏者の著作隣接権の利用許諾が確認できた公演 10 件を配信中。
(3) 著作権保護期間内の楽曲は日本音楽著作権協会(JASRAC)へ申請中。
(4) 申請に際し「GEIDAI Music Archive サービス概要書」を作成した。
(5) 情報プロジェクトと連携して、データ形式とデータ管理方法についての研究、また配信システムを構築している。

8. アーカイブアシスタント活動報告

報告: 大学院音楽研究科音楽文化学専攻音楽音響創造分野博士課程 渡邊 愛

主な活動内容

(1) 公演収録データのデジタルアーカイブの一連の作業修得
- (ア) 奏楽堂収録見学
- (イ) モーニングコンサートの音源編集. 原盤制作. デジタルデータのアーカイブ
- (ウ) 定期公演の原盤の盤面印刷. ブックレット作成等の実施
- (エ) 公演情報のデータ入力
- (オ) 著作権、著作隣接権の調査および許諾確認
- (カ) サイト構築（学内配信を中心に）

(2) 学外配信への取り組み
- (ア) 2008 年度～2011 年度の博士学位審査会 34 件を対象
- (イ) 公演情報のデータベース（FileMaker）への入力
- (ウ) 著作権、著作隣接権の調査および許諾確認（リサーチセンターとの連携）
- (エ) 「GEIDAI Music Archive」でのサイト構築（情報発信・システム研究プロジェクトとの連携）

(3) 著作権および著作隣接権に関する事項
- (ア) 現在、著作権に関してはパブリックドメイン（PD）の作品のみ配信している。
- (イ) さらに著作隣接権に関しては全ての演奏者から許諾を受けた公演のみ配信している。
- (ウ) 下表のとおり、内国曲や外国曲あるいは不明曲であること・著作隣接権が配信レベルに至っていないことが理由で、配信できない項目が多い。
- (エ) 楽曲のなかには、明らかに死後 50 年以上経っているが権利の所在がわからないため PD とは認められないというケースがある。この問題を解決するべく、文化庁の裁定制度の申請などの試みを情報発信・システム研究プロジェクトの生貝特別研究員を中心に進めていく予定である（生貝研究員の項を参照）。
- (オ) 著作隣接権に関して、2008 年～2010 年度の公演を全曲配信するためには全曲分の許諾の再確認を要する。今後はすべてのデータに対して将来的に全曲をアーカイブすることを前提に、規約の整備等の方策を講じていきたい。

表 8-1 博士学位審査会の学外配信状況一覧

		著作権				著作隣接権			配信
年度	公演番号	PD	内国曲	外国曲	作者不明又は要調査*1	承諾書の範囲*2		承諾書収集状況*3	配信可能*4
2008	1	✓				抜粋		△	○
	2			✓		抜粋		○	
	3	✓				抜粋		△	
	4			✓		抜粋		△	
	5			✓		抜粋		○	
	6			✓		抜粋		×	
	7				✓	抜粋		△	
	8			✓		抜粋		△	
	9	✓				抜粋		×	
	10	✓				抜粋		×	
2009	11			✓		抜粋		○	
	12	✓				抜粋		○	○
	13	✓				抜粋		△	
	14		✓			抜粋		×	
	15				✓	抜粋		○	
	16				✓	抜粋		△	
	17	✓				抜粋		○	○
	18		✓			抜粋		○	
	19	✓				抜粋		○	○
	20		✓			抜粋		○	
	21	✓				抜粋		○	○
	22			✓		抜粋		○	
2010	23	✓				抜粋		○	○
	24	✓				抜粋		○	○
	25	✓				抜粋		○	○
	26			✓		抜粋		○	
	27				✓ (本人要問合せ)	抜粋		×	
	28				✓	抜粋		×	
2011	29	✓					全曲	○	○
	30			✓			全曲	×	
	31				✓		全曲	○	
	32	✓					全曲	○	○
	33			✓			全曲	×	
	34			✓			全曲	○	
件数	**34**	**14**	**3**	**11**	**6**	**28**	**6**	**19**	**10**

*1　権利関係未確定または不明との JASRAC からの返答があった楽曲。

*2　2008～2010 年度まではリサーチセンターが報告書に添付する DVD で使用する抜粋部分のみ著作隣接権に関わる許諾を取っており、全曲配信には対応しない。2011 年度からは全曲に対応する許諾書を採用している。

*3　○＝全員から許諾を受けた項目　△＝一部の奏者から許諾を受けた項目　×＝全員が許諾書未提出の項目

*4　配信に至った項目。2008 年度 1 件・2009 年度 4 件・2010 年度 3 件の計 8 件が抜粋配信に、2011 年度 2 件が全曲配信に至った。

(4)　その他
　(ア)　月 1 回の知的財産会議への出席および議事録作成
　(イ)　特別講義「音楽家のための権利入門」(2012 年 5 月 17 日・福井健策先生) スタッフとして参加
　(ウ)　月 2〜4 回の情報発信・システム研究プロジェクト会議への出席（各プロジェクトとの情報共有等）

所感と課題

(1)　一つの公演に対して処理すべき項目が多く（情報入力・データ変換・ウェブサイト構築作業・CD および DVD のブックレット作成や盤面印刷など)、稼働時間内でこなすのが難しかった。
(2)　音源および映像における最適な配信方法を情報プロジェクトと相談しながら進めていったが、いくつかの問題が残っている。音質の維持・ダウンロードのリスク回避・ウェブサイト構築の簡略化・操作性など、諸々の条件をカバーできる方法を模索中である。
(3)　公演パンフレットの表記が統一されていない。例えば作曲者名を原語通りに書くかカタカナで書く、演奏家の姓と名の間は半角か全角か等、パンフレットによってバラつきがある。パンフレットの表記は論文のように共通の決まりがないため、今後記載方法の基準を設けることも視野に入れたい。また、将来サイトをグローバル対応にする場合の英語表記についても検討の余地があると考える。
(4)　学外配信への取り組みが始まったが、全曲配信できない理由には著作権・著作隣接権の問題が多くあることが分かった。

9. 小泉文夫記念資料室活動報告

(1) DAT データ化作業（平成 24 年度より継続）
アーカイブセンター予算でアルバイト 1 名を雇い上げ、既公開の DB「所蔵音響資料（オープンテープ）」原資料 1662 本の複製 DAT を外付け HDD に複製し、台帳入力作業を実施した。進捗状況は以下のとおり。デジタルファイルに変換済み DAT テープは 1496 本（1680 本のうち）。うち今年度分は 1093 本。

(2) 外付け HDD への視聴用 wave ファイル作成 合計 DAT137 本

(3) デジタル Photo ファイル
デジタル化し CD に保存したフォトファイル（8677 点、CD に保存）を、外付け HDD に移行。また Web 公開用のサイズダウン画像作成とデータ 1 次入力完了。未デジタル化分のデータ 1 次入力進行中（デジタル化不要データ 30 を含む 3313 ファイル分済み）デジタル化済みのネガとプリントについて、撮影年月日、撮影地、被写体などの基本情報をわかる限り入力。

(4) アーカイブアシスタント養成
アーカイブセンターの活動の一環としてアーカイブアシスタント 1 名を受入れ、上記 1 の DAT データ化作業や雑資料（後述）の整理と基礎情報入力、楽器所蔵点検ほか諸作業を分担した。

(5) 「アジア楽器図鑑」関連
(ア) 邦楽定期動画（「舌出三番叟」「風流船踊」「月の巻」）を同サイトで公開。本学公演動画のネット公開では初の事例となる。公開に先立ち著作隣接権処理のため、小島直文邦楽科准教授ならびにアーカイブセンター音響・映像プロジェクトの協力を得て、全出演者のべ 74 名の承諾書を取得した。
(イ) 昨年度追加収録分の能楽、長唄、邦楽囃子、義太夫三味線を同サイトで公開。
(ウ) モンゴル関連全頁公開。これにあたり下記(6)の通り専門家の協力監修を依頼した。
(エ) 大鼓（能楽）の指皮製作収録と公開。
(オ) 雅楽の追加収録実施。
(カ) 「アジアの楽器図鑑」作成にともなう業務委託。委託先と業務内容。
上村明（東京外国語大学 外国語学部 東アジア課程 外国語学部研究員）
a. モンゴル語のカナ、アルファベット表記決定と、これに基づく固有名詞の表記変換。
b. 地域関連情報、写真資料等の提供
c. 記載事項の監修
(キ) 英語編翻訳作業続行。

(6) 「雑資料」（＊書籍を除く諸文書資料が対象）
国内外の地図とパンフレット類の整理と書誌事項入力。

(7) 植村幸生室長を代表とする下記科研の遂行
「大学と地域の連携による江戸伝統音楽・芸能の継承支援：新たなインリーチを求めて」
(ア) 課題番号 24320036、継続期間：平成 24-26 年度
(イ) 組織：[共同研究者]薩摩雅登（大学美術館教授）、佐竹悦子（小泉資料室教育研究助手）尾高暁子(同学術研究員)、松村智郁子(同学術研究員)、連携研究者：塚原康子（音楽学部教授）
(ウ) 目的：大学内のアーカイブが地域の専門家の知と技を取込み、学内での研究蓄積をベースとして地域住民に還元する拠点として機能する方法をさぐる。ことに本研究では、本学が位置する東京下町の楽器産業に着目し、江戸後期から昭和に至る芸能活動との関連も加味しながら、技の伝承の推移と実態を浮き彫りにする。その成果を地域の児童生徒や本学学生の教育や伝統再興への模索の一助としたい。
① 楽器製作関連の調査実施：台東区の太鼓業者（南部屋五郎右衛門）と三味線製作業者（菊岡三絃店）、滋賀の楽器用糸生産業者（丸三ハシモト株式会社）。
② 大鼓の指皮製作過程の撮影と「アジアの楽器図鑑」での公開
③ 「江戸東京音楽芸能データベース（仮称）」の構想検討

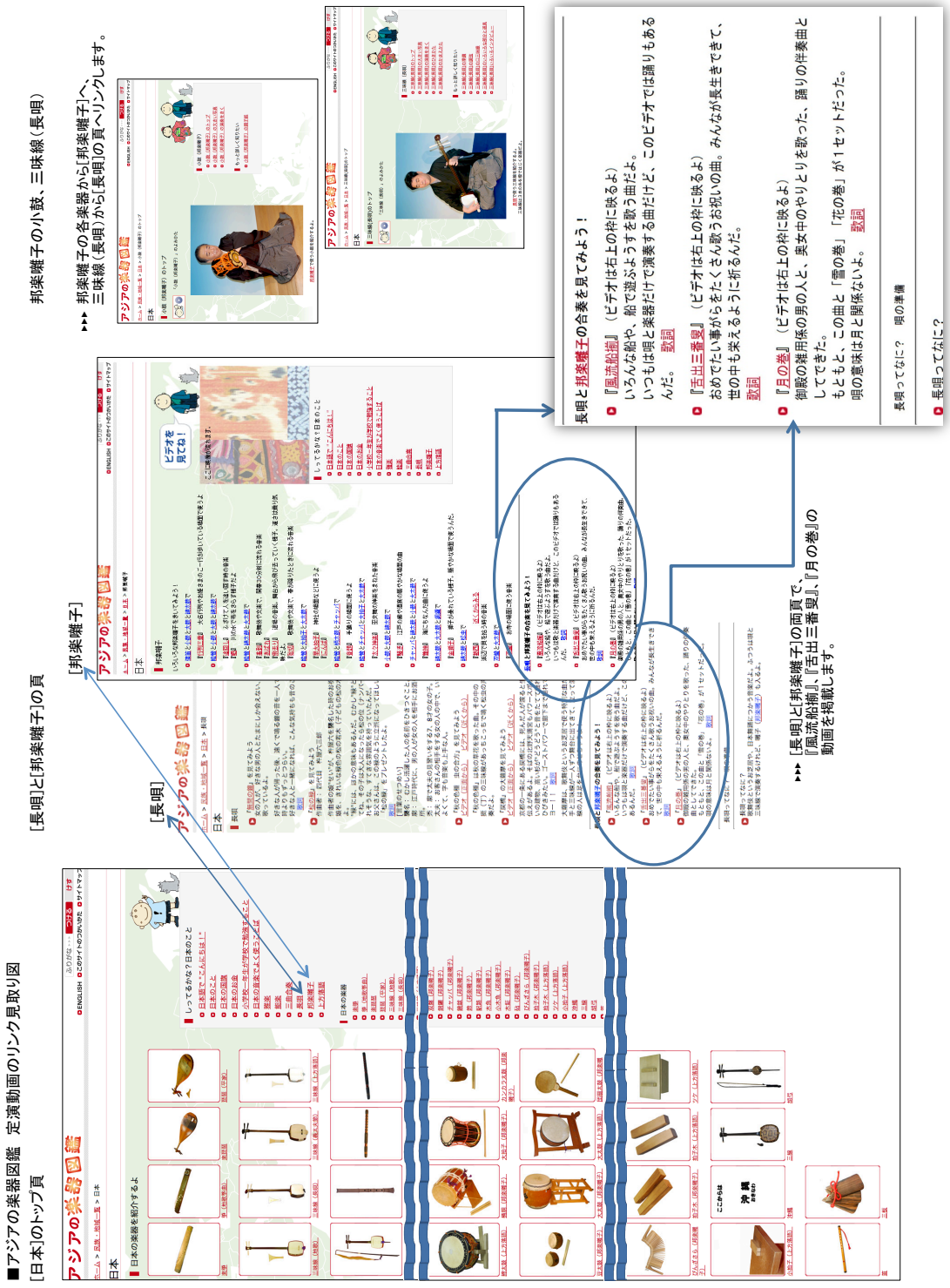


図 9-1 アジア楽器図鑑 Web サイト

10. その他の活動

(1) アーカイブアシスタントとして、前村晴奈、渡邊愛(情報プロジェクトと兼任)2 名を受け入れ。奏楽堂収録見学、音源編集（モーニングコンサート等)、サイト構築（博士学位審査会等)、配信業務、著作隣接権承諾書確認など、音響・映像プロジェクトの要となるデータの公演収録から配信までを補助。

(2) 小泉資料室との連携。業務委託費用、DAT のデジタルデータ化と台帳入力作業のアルバイト費用の協力。「アジア楽器図鑑」への参考映像として邦楽定期演奏会から 3 曲（「舌出三番叟」「風流船踊」「月の巻」）の収録映像の学外配信用映像データを提供。（8.9. 小泉文夫記念資料室の項を参照。）

(3) リサーチセンターとの連携。博士学位審査会の収録音源・映像の一部学外配信中。
(8.8. アーカイブアシスタントの項を参照)

(4) GTS 観光アートプロジェクトとの連携。「GTS Art Talk Café: vol.1〜3」の映像・写真データをアーカイブ。それに伴う各出演者の著作権及び著作権隣接権の承諾書の提供。

(5) オープンリール等音声テープ類のデジタルデータ化を、戸部百合亜（学生アルバイト）に依頼。

(ア) 藝大大学美術館資料のデジタル化（3D 研究プロジェクトからの委託)】

① オープンリール：30 本中 28 本を完了。（内 2 本は専門業者へ外注の必要がある。）

② カセットテープ:80 本中 19 本完了。予算の関係で 9 月末に未完了のまま打ち切りとなった。その後、美術館が継続中。

③ データはアーカイブセンターと共有、公開についてはアーカイブセンターで行う。

(イ) 彫刻科の授業「彫刻論」（情報プロジェクトからの委託）

① カセットテープ：27 本の依頼があった。作業は開始しているが未完了。次年度継続。

(6) 音楽研究センターとの連携。著作権と著作隣接権の権利確認を行い、公演資料の個人複製の可否を伝える。

(7) せんだいメディアテークと東北大学史料館へ視察。（山田、佐野）

平成 25-27 年度

1. 報告概要

平成 23～24 年度の総合芸術アーカイブセンターの報告書を踏まえた上で、平成 25～27 年度の研究成果、またデータを活用するにあたって直面した問題を報告する。

プロジェクトメンバー（2013～2015(平成 25～27)年度）

	2013 年度	2014 年度	2015 年度	備考
音楽学部 教授	亀川 徹			
音楽学部 教授	植村 幸生			小泉文夫記念資料室 室長
演奏藝術センター 助教	岩崎 真			
特任助教	山田 香			
特別研究員	佐野 隆			
学術研究員	尾高 暁子			小泉文夫記念資料室
学術研究員	松村 智郁子			小泉文夫記念資料室
教育研究助手	小林 えりか			音楽研究センター 音響資料調査
教育研究助手	彫谷 典子	樋口 晃子		音楽研究センター 音響資料調査
教育研究助手	久保 仁志			小泉文夫記念資料室
アーカイブアシスタント	渡邊 愛			
アーカイブアシスタント	鈴木 勝貴		齋藤 峻	
アーカイブアシスタント	井澤 友香理		鈴木 悠宇	小泉文夫記念資料室
アーカイブアシスタント	木岡 文明			小泉文夫記念資料室

2. アーカイブに向けた音響映像資料の現状調査

各研究室の所蔵分資料数を調査。総計 15,366(昨年度 15,168)点。その内、平成 23～27 年度に調査した所蔵分資料情報は 4,424 点。

所蔵資料媒体詳細

映像資料媒体	資料数 (前年度総数)
V-11, V-12	39(39)
U-Matic	637(637)
Beta	38(38)
VHS、S-VHS	1,012(1,006)
8mm,Hi8	257(257)
BetaCAM (D-Betacam)	908(908)
HDCAM	2(2)
DVCAM（miniDV）	991(973)
DVD-R VIDEO	1,207(1,151)
BD-R VIDEO	171(171)
合計	5,262(5,182)

音響資料媒体	資料数 (前年度総数)
オープンテープ	2,785(2,785)
カセットテープ	1,495(1,494)
DAT	1,218(1,214)
CD-R	4,012(3,901)
MD	99(96)
合計	9,609(9,490)

音響映像データ	資料数 (前年度総数)
DVD data(音響)	265(265)
DVD-R data(映像)	118(118)
BD data(映像)	97(97)
HDD(映像)	15(15)
合計	495(495)

（2016 年 1 月 12 日現在）

3. 公演収録データのデジタルアーカイブ

3.1. データの種類

毎年、年度始めにデータ形式の見直しを行った。収録機材の変更に伴い、より高音質・高画質なデータで保存するよう努めた。変更のあった項目のみ数値を記載する。

データ	形式	詳細		年度				
				2011	2012	2013	2014	2015
音源	WAV (.wav)	サンプリング周波数		44.1kHz			96kHz	
		量子化ビット数		16 bits			24bits	
		チャンネル数		2.0ch (ステレオ)*			→	
映像	MOV (.mov)		ファイルフォーマット	Quick Time ムービー			→	
		ビデオ	ビデオフォーマット	H.264			→	
			フレームサイズ	1920×1080 HD			→	
			アスペクト比	16:9			→	
			フレームレート	29.97fps(NTSC)			59.94fps	
			ビットレート	12000kbps			20000kbps	
			エンコーディングモード	複数回実行			→	
		オーディオ	オーディオフォーマット	リニア PCM（非圧縮）			→	
			サンプリングレート	44.1kHz			48kHz	
			量子化ビット数	16bits			24bits	
			チャンネル	2.0ch (ステレオ)			→	

*サラウンド収録の場合は、5.1ch(サラウンド)の Pro Tools データを保存。

3.2. デジタルデータを保存した公演数一覧

以下の期間の公演をアーカイブの研究の対象として、デジタルデータを保存した。

(1) 1955～1963 年度の著作隣接権が満了した定期演奏会など
(2) 2008 年以降の博士学位審査会
(3) 2011～2015 年度の定期演奏会など

また、上記の他に他研究室より提供を受けたデジタルデータも保存した。そのため、研究対象とした公演件数より実際には多くのデータ件数となった。公演内容については付録 1「アーカイブした公演等の一覧」を、データの活用件数については項目 3.4.「学外公開している公演数一覧」を参照のこと。

年度	アーカイブの対象とした公演数	実際にアーカイブした公演数	WAV	MOV	PDF	備考
1955	1	1	1		1	・オープンテープからすでにデジタル化された WAV データを利用し、ノイズ除去などを施したデータを保存。 ・この期間、映像は収録されていない。 ・公演パンフレットの PDF データは文書データ研究プロジェクトと共同により現物からスキャニングを行った。
1956	0	0	0		0	
1957	0	0	0		0	
1958	3	3	3		2	
1959	9	9	8		9	
1960	9	9	7		9	
1961	7	7	2		7	
1962	10	10	5		10	
1963	10	10	0		10	
小計①	49	49	26	0	48	
2003	0	8	0	0	8	・2003 年度分からの公演パンフレットのデータは、デジタル化された PDF ファイルとして提供を受けた。
2005	0	22	0	0	22	
2005	0	22	0	0	22	
2006	0	20	0	0	20	
2007	0	19	0	0	19	
2008	10	29	10	10	19	
2009	12	32	12	13	20	
2010	7	27	7	8	20	
小計②	29	179	29	31	150	
2011	75	65	35	47	35	・2011～2015 年度は本プロジェクトの活動期間に当たる。
2012	69	65	23	49	29	
2013	63	62	33	48	21	
2014	78	78	28	62	23	
2015	79	65	14	50	25	
小計③	364	335	133	256	133	
合計	442	563	188	287	331	

（2016 年 2 月 29 日現在）

3.3. オープンテープ等からデジタルデータ化した一覧

本センターの他のプロジェクトからの委託業務により、オープンテープやカセットテープのデジタルデータ化を行い、そのデータを保存した。これらのデータは必ずしも学外公開が目的とはされていないため、学内視聴に限定されているものもある。

内容	件数	WAV	備考
美術館資料オープンテープ (3D より委託)	28	26	内 2 本は取込不可
美術館資料カセットテープ (3D より委託)	78	19	内 4 本は取込不可／作業が年度途中で打ち切りのため美術館が継続中
授業「彫刻論」カセットテープ (情報より委託)	29	29	
計	135	74	

（2016 年 2 月 20 日現在）

3.4. 学外公開している公演数一覧

本プロジェクトの研究目的であるアーカイブしたデータを活用する方法の一つとして、公演収録映像・音源のウェブ配信を行った。2011 年度より学内視聴をはじめ様々な検証を行い、2014 年度より権利処理できた楽曲の学外公開を開始した。保存された全てのデータを学外公開することは、権利関係の諸問題がありできなかった。その詳細は項目 7「公演収録音源・映像の活用における問題点と今後の課題」を参照のこと。

年度	アーカイブした公演数	映像もしくは音源の学外公開	公演文字情報	備考
1955	1	0	1	
1956	0	0	0	
1957	0	0	0	
1958	3	0	2	
1959	9	0	4	
1960	9	0	5	
1961	7	0	1	
1962	10	0	2	
1963	10	0	0	
小計①	49	0	15	
2003	8	0	0	
2004	22	0	0	
2005	22	0	0	
2006	20	0	0	
2007	19	0	0	
2008	29	0	0	
2009	32	0	0	
2010	27	0	0	
小計②	179	0	0	
2011	65	0	71	著作隣接権の承諾書(学内利用)を全公演にて収集開始
2012	65	0	65	著作隣接権の取扱要項の制定(学内利用)
2013	62	0	60	
2014	78	27	72	著作隣接権の取扱要項改定(学外利用)
2015	65	15	67	
小計③	335	42	335	
合計	563	42	350	

（2016 年 2 月 29 日現在）

3.5. CD・DVD およびデジタルデータ等の提供

ウェブ配信以外の活用として、以下の目的で CD や DVD 等のメディアに複製業務を行った。

(1) 学生のコンクール・オーディションなどへの提出
(2) 出演者自身の研究のための記録用
(3) 公演主催研究室で保管する記録用
(4) 公演主催研究室の助成金申請などの渉外用
(5) 附属高等学校における卒業生に配布するための記念 DVD
(6) 放送局、ウェブ運営会社(e ぶらあぼ、音楽の友社)、公演協力団体、楽曲提供者など学外への提供

ただし、複製にかかる権利処理費用の問題により、全て要望に対してデータが複製された訳ではない。

4. アーカイブデータの活用に関わる権利処理

4.1. 著作権

日本音楽著作権協会(JASRAC)の検索システム J-WID を利用し、活用するデータに含まれる楽曲の著作権状況を調査。2014 年度より JASRAC の「教育機関によるインタラクティブ配信」の許諾番号を取得し、年会費を支払うことによって、JASRAC 管理楽曲も配信することができるようになった。また、J-WID に記載されていない楽曲で、著作権管理状況が不明な場合は活用を控えるようにした。

4.2. 著作隣接権および肖像権など

4.2.1. 著作隣接権等の承諾書について

学外の演奏者に対して配布していた著作隣接権等の承諾書は、年度毎にその内容を見直した。そのため、年度によって承諾内容が異なっている場合がある。

4.2.2. 「東京藝術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」の改正

2012 年 2 月に制定された著作隣接権等の取扱要項は、2014 年 3 月に改正された。主な改正内容は第 4 条(利用許諾)で、それまで学内利用までの許諾範囲だったものを、学外利用までを含める内容とした。改正後の全文については付録 2「東京藝術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」を参照すること。

著作隣接権等の取扱要項の改正内容

2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
改正前		改正後	
(利用許諾) 第 4 条 著作隣接権者は、その演奏作品について、学部等に対し次の各号に掲げる利用を将来にわたって無償で許諾するものとする。 (1) 演奏作品の記録に必要な録音・録画 (2) 演奏作品の保存に必要な CD-ROM 等デジタルメディアやサーバへの複製 (3) 構成員、構成員であった者、共同事業者、その他学外研究者等のうち正規の手続を経て学部等に依頼を行った者への、無償での配布・ストリーミング配信 (4) 本学ホームページや印刷物等における広報利用 (5) その他学部等において必要とする利用		(利用許諾) 第 4 条 著作隣接権者は、その演奏作品について、学部等に対し次の各号に掲げる利用を将来にわたって無償で許諾するものとする。 (1) 演奏作品の記録に必要な録音・録画及びその編集 (2) 演奏作品の保存に必要な CD-ROM などのメディアやサーバへの複製 (3) メディアの配布・販売・貸与、インターネット等を通じた配信その他の提供 (4) ホームページや印刷物等における広報利用 (5) 上記各号に定める行為の第三者に対する再許諾 (6) その他学部等において必要とする利用	

4.3. レンタル譜における契約

レンタル譜を利用した公演の収録映像・音源のデータを活用する際、ウェブ配信、複製など、二次利用を禁止、あるいはそれらを制限する契約内容となっていることが多い。たとえ楽曲がパブリックドメインであったとしても、新たに契約項目追加の申請や利用料が発生する。それらは高額になる可能性がある。

4.4. 権利処理手順のまとめ

図 4-1 の通り、公演の 1 つ 1 つの楽曲について権利状況を確認して、全て処理できた楽曲を配信・複製した。活用しているデータについては、その権利状況をデータベースに記録した。データベース構築は情報システム研究プロジェクトと共同で研究を行った。

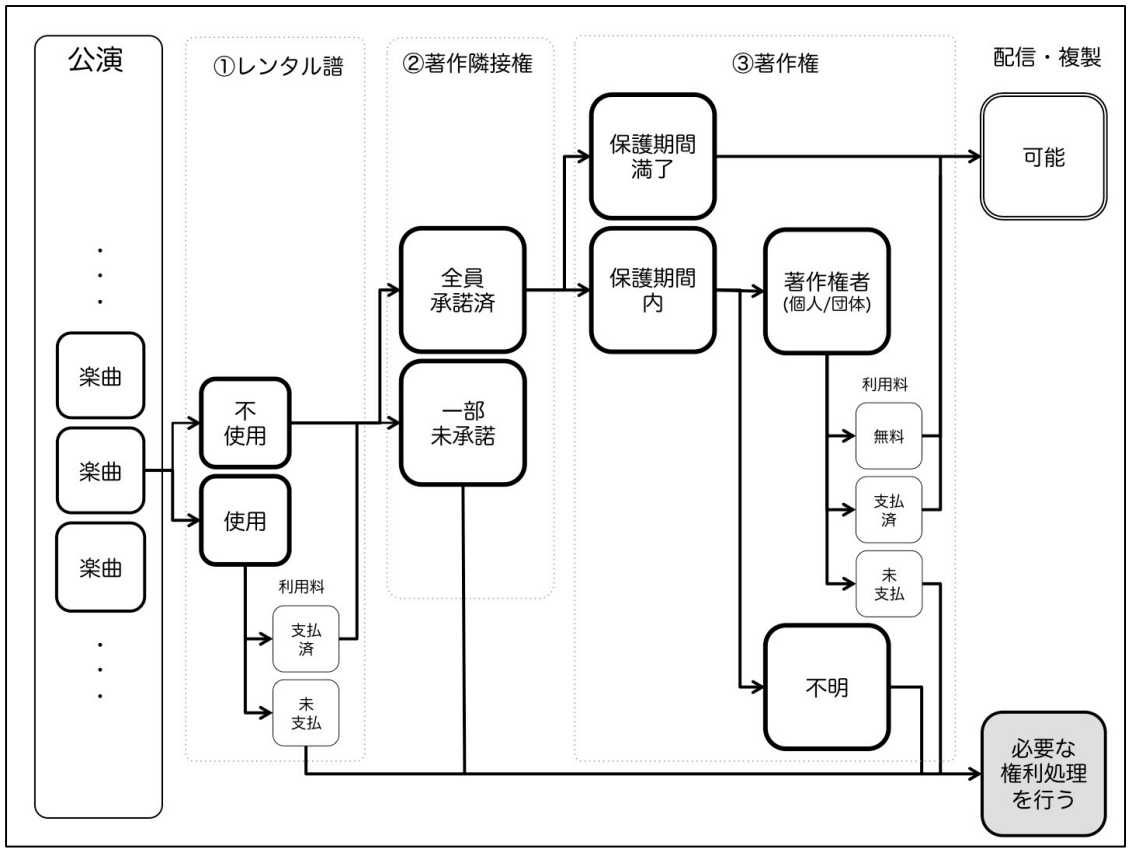


図 4-1 アーカイブデータの権利状況確認の手順

5. ウェブサイト公開についての取り組み

ウェブサイト「藝大ミュージックアーカイブ」(http://arcmusic.geidai.ac.jp)における学外配信に伴い、データを広く研究に役立てられるよう 2014 年度より広報活動を行った。

5.1. ウェブサイトの利用者について

2014 年 10 月より公演収録映像の学外公開を行った。図 5-1 のように Google Analytics の分析によりセッションをアクセス数として参照した。公演収録映像のサンプルビデオを上映、チラシ配布等の結果、アクセス数が伸びた月が見られる。

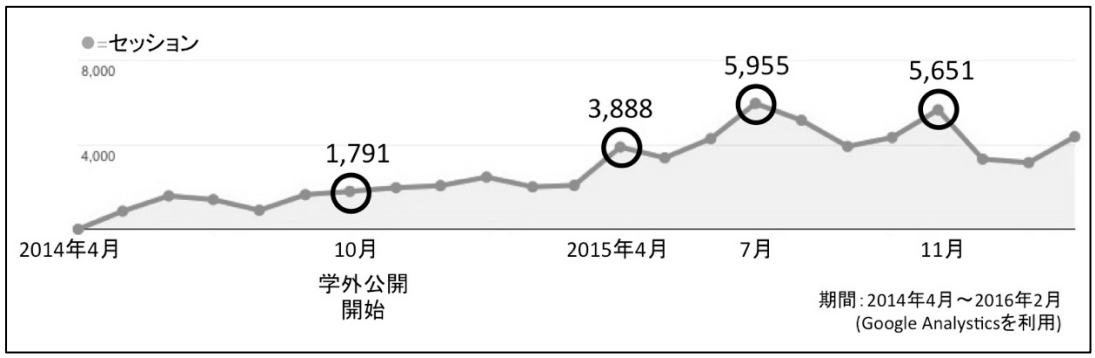


図 5-1 ウェブサイト「藝大ミュージックアーカイブ」の月毎のセッション数の推移

また、同期間のセッション数 66,183 の内、ユーザー層の内訳を分析すると図 5-2 のようになっている。約 90%は日本国内からのアクセスによるもので、その他、アメリカ、ドイツ、オーストリア、中国、フランス、ロシア、イギリス、韓国からのアクセスによる。本ウェブサイトは、海外の言語に対応していない。そのため、海外からのアクセスについては、海外へ留学する日本人の学生をはじめ、海外で活躍する日本人の卒業生などによって、このウェブサイトが利用されているのではないかと推測する。また、本学が「スーパーグローバル大学創生事業」に採択されたことにより、海外の提携大学との交流が増えている。このことから今後海外からのアクセスも増加する可能性が考えられる。

国	セッション	セッション（%）
1. Japan	60,199	90.96%
2. United States	1,612	2.44%
3. (not set)	964	1.46%
4. Germany	635	0.96%
5. Austria	326	0.49%
6. China	325	0.49%
7. France	294	0.44%
8. Russia	226	0.34%
9. United Kingdom	169	0.26%
10. South Korea	164	0.25%

図 5-2 ユーザー層別のセッション内訳(Google Analytics を利用)

5.2. SNS の運用

2014 年 10 月より Twitter アカウント取得し、運用を始めた。ウェブサイト「藝大ミュージックアーカイブ」の更新情報、アーカイブ関連情報、著作権などの関連情報、本学の公演情報などを発信した。現在、1281 人のフォロワーが登録されている。その内訳は、本学学生・教員をはじめ、受験生、他大学、新聞社、出版社、コンサートホール関係、オーケストラ団体、音楽情報提供ウェブサイト、音楽愛好家など多岐にわたる。リツイートされる傾向としては、本学学生や教員によるもので、本人が出演している公演の場合が多い。

2015 年 7 月より Facebook ページを開設。88 人のフォロワーが登録されている。フォロワーは本学学生、卒業生、音楽愛好家などが多く、記事はウェブサイトの更新情報に限定していることもあり、シェアされる傾向は低い。

5.3. 学内上映会

2014 年度に 1 回、2015 年度に 3 回の上映会を行った。学外公開中の公演収録映像を抜粋で上映、ウェブサイト紹介チラシの配布、操作方法のレクチャーなどを行った。その際に行ったアンケートの結果によれば、このウェブサイトを初めて知ったという人が多く、今後に期待される声が多かった。

(1) 公演「第 1 回 ホームカミングデイ」
日時：2015 年 1 月 10 日(土)10:30～18:00
場所：本学第 6 ホールホワイエ、奏楽堂ホワイエ
内容：iPad を利用した実演、チラシ配布

(2) 2015 年度 入学式後
日時：2015 年 4 月 6 日(月)12:00-18:00
場所：本学第 1 ホール前、キャッスル食堂
内容：公演収録映像(抜粋)を TV モニタで上映、チラシ配布

(3) 2015 年度 オープンキャンパス（※写真 1,2 を参照）
日時：2015 年 7 月 27 日(月)、28 日(火)10:00-17:00
場所：本学教務課前、4 号館 101 号室(録音室)
内容：公演収録映像(抜粋)を TV モニタで上映、チラシ配布

(4) 2015 年度 藝術祭 （※写真 3 を参照）
日時：2015 年 9 月 4 日(金)、5 日(土)、6 日(日)10:00-18:00
場所：キャッスル食堂
内容：公演収録映像(抜粋)を TV モニタで上映、チラシ配布

写真 1 教務課前での上映

写真 2 録音室での上映

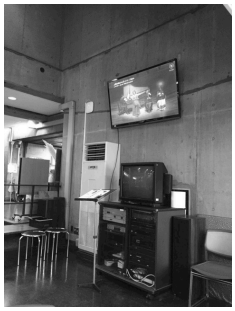


写真 3 キャッスル食堂での上映

6. 研究発表、サミット参加、連携事例など

(1) 第 104 回人文科学とコンピューター研究会発表会での研究報告
日時：2014 年 10 月 18 日(土)10:00～17:40
場所：関西大学千里山キャンパス 第三学舎 D501 教室
主催：情報処理学会人文科学とコンピューター研究会
共催：関西大学ポピュラー音楽アーカイブ・ミュージアム(プロジェクト)
発表題：東京藝術大学における演奏会記録のアーカイブとその利活用について
―GEIDAI Music Archive の サイト構築までの取り組み―
発表者：山田 香

(2) アーカイブサミット 2015 への参加
日時：2015 年 1 月 26 日(月)10:30～20:30
場所：千代田区立日比谷図書文化館
主催：アーカイブサミット組織委員会
後援：千代田区
共催：千代田区立日比谷図書文化館
参加：ミーティング(MT)-2「アーカイブ組織：お金の問題」
参加者：山田 香

(3) ワークショップの開催
日時：2015 年 7 月 16 日(木)10:00-15:00
主催：本学 音楽創造研究センター(アントレプレヌール支援企画)
講義名：第 3 回ワークショップ：ポートフォリオ用～音源・映像素材作成支援
講師：山田 香

(4) シンポジウム「藝術を記録すること、伝えること」での研究報告
日時：2015 年 9 月 5 日(土)12:20-16:30
場所：本学 美術学部 絵画棟 1 階 大石膏室
主催・企画：本学 総合芸術アーカイブセンター
発表題：音響・映像データ研究プロジェクト報告 - GEIDAI Music Archive のサイト構築までの取り組み -
発表者：山田 香

7. 公演収録音源・映像の活用における問題点と今後の課題

7.1. アーカイブおよび配信等の活用にかかる諸費用についての問題

将来性も踏まえた高音質・高画質が要求される現代において、ハイビジョン映像などの大容量データを学内サーバにアーカイブし続けることに限界がある。また、ウェブサイト「藝大ミュージックアーカイブ」では、音源・映像のストリーミング配信をするために、外部サービスを利用している。そのため、年会費が必要となっている。これは永続的に払い続けないとアップロードしたものは見られなくなる。自前で安定した配信を提供するためには、ストリーミング配信用のシステム構築が必要となり、これには多額の費用がかかるため現実的ではない。

増え続けるデータをアーカイブするサーバの維持や増築費用、また、配信を維持するための費用をどのように捻出するかが今後の課題である。

7.2. データ活用に伴う権利処理の問題

データの活用には様々な権利処理が必要で、その多くには、研究等を目的とした非営利・限定的な利用に対応した料金が存在せず、以下のような場合において、原則通り商用利用と同額を払わなければならないことも多い。それらの費用をどのように捻出するかが今後の課題である。

①著作権法とは独立した「契約」による制約がある（レンタル譜等）
②外国楽曲の映像を伴う利用についてシンクロ料が発生する

そのほか、孤児作品、過去の実演家への利用許諾など、権利処理が困難なケースも存在する。今後、著作権保護期間が死後 70 年に延長されることにより、権利状況の把握は複雑になり、さらに困難になると予想される。これらのことに精通しているアーキビストの育成、およびデータの管理、データを活用するための権利処理を含む組織作りが必要である。

7.3. 法整備とアーカイブについての問題

最近の本学の公演収録の原盤は、デジタルデータを制作している。このデータをサーバへ蓄積することを、現著作権法では「複製」と捉えており、大容量データを蓄積することを禁じている。また「複製」と捉えられることにより、著作権保護期間内の楽曲には使用料が発生する場合がある。この状況は本センターが目指す「データをアーカイブする」という目的とは異なっていると考える。その上、本学では CD や DVD の原盤制作を廃止したため、原盤となるデジタルデータの保存は必須である。また現段階ではそのデータを共有する際にウェブを利用するほかに方法がない。

アーカイブセンターは図書館とは独立した組織のため、著作権法 31 条 1 項 2 号に基づいて図書館等で行う資料の「保存のための複製」に当てはめることはできなかった。また、著作権法 35 条「学校その他の教育機関における複製」としても、本学の場合必ずしも「授業」に当てはまらないことも多かった。

本学は音楽や演奏を研究する芸術大学であり、音源・映像データは主に学生や教員によって繰り返し再生されること自体が、研究そのものに深く関わっている。それらが実現できるよう音楽活動という分野の独自性に配慮したデータの保存および共有に関するアーカイブ関連法を、国が整備してくれることに期待する。

7.4. 学内でのデータ共有

データ入力やその内容など、他部署間での共有と連携が早急に求められている。アーカイブ情報を共有できるような学内システムを構築することが望ましい。

7.5. 海外からのアクセスに対応

ウェブサイト「藝大ミュージックアーカイブ」には、邦楽作品や邦人現代作曲家の作品も多く含んでいる。海外の言語に対応することにより、本サイトは日本の音楽を世界へ発信するという役目も担うことになる。

8. 小泉文夫記念資料室活動報告

＜平成 27 年度報告＞
[アーカイブセンター委託業務、および同センターから経費援助を得た業務]

8.1. AA(アーカイブ・アシスタント）2 名の養成

1)作業内容：下記 2「試聴用 wave ファイル作成と録音ファイルのデータ化」を担当させた。
2)成果：AA の学生達は、音楽アーカイブの実作業に触れ、資料保全や公開を前提としたデジタル化、データ化の意義、課題を学んだ。また音声編集ソフトを用いた具体的な編集技能も習得できた。

8.2. 試聴用 wave ファイル作成と録音ファイルのデータ化

作業の前提

当室では、故小泉教授の貴重な調査録音を含むオープンリール原録音を DAT1684 本に複製し、これに基づくデータベースを、2001 年より当室 HP で公開中である（http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/opentape.html）。しかし記録媒体の転換が早急の課題となったため、AC の援助を得て、2013 年度までに、DAT から HDD への録音ファイル複製を完了した。目下、これらの複製からさらに試聴用 wave ファイルを作製し、新規 DB の公開を前提としたデータ化を進めている。今後は、小泉教授自身の調査録音を積極的にインターネットで公開し、その他の録音についても、室内での利用に供する予定である。

今年度の作業

試聴用 wave ファイル、DAT391 本分（＝3962 ファイル）作製。これらを外付け HDD に保存し、基本情報を台帳に入力した。これを以て、DAT1203 本分の作業が完了した。

8.3. 「アジアの楽器図鑑」関連

作業の前提

「アジアの楽器図鑑」は、日本を含むアジア十数か国の楽器や音楽を紹介する、児童向け学習サイトである。当室＝音楽アーカイブに蓄積した諸研究領域の業績を一般に還元し、日本やアジアの隣人の音楽に児童が親しみを覚えるきっかけ作りをめざして、2002 年より編集公開にあたってきた。初版公開から十余年を経た現在、ネット環境は様変わりをみせる。当サイトもこの機をとらえて下記のとおり公開方法を改め、より幅広い層に利用を促したいと考える。

動画配信方法の変更

(1) 全動画の原ファイルを学外ストリーミングサイト YouTube へアップロード。暫時、非公開モードとする。
(2) 藝大サーバ上の「アジアの楽器図鑑」の公開準備が整い、YouTube 上の原動画ファイルへリンク埋め込みが完了した部分から、YouTube 上で随時公開する。
(3) 上記変更 1)2)に伴い、YouTube 上で公開した原動画は検索でヒットした場合閲覧可能。これを想定し、動画に演奏者、著作権、録音内容に関する補足情報を付与。
(4) リニューアル後は、PC のみならず、スマートフォンやタブレットなどでも動画閲覧が可能。
※上記の変換作業を総合芸術 AC 経費により学外業者に委託した。
(5) 動画配信方法の変更をふまえ、新条件にもとづく許諾申請を、演奏者・情報提供者に依頼開始。
(6) 1)沖縄編の編集継続、2)「楽器づくり」頁の新規編集、3)「お芝居や踊りで使う楽器」頁の新規編集。
※当該作業の静止画ファイルを、総合芸術 AC 経費で雇い挙げたアルバイトが作製した。

8.4.　演奏会「〈民族音楽〉との邂逅 —— 小泉文夫のメッセージ 」企画実施

日程：2015 年 7 月 5 日（日）13:00 開場 14:00 開演、場所：東京藝術大学奏楽堂　入場者数：1100 人。
概要：「民族音楽」研究家として活躍した小泉教授の業績と思想を、三十三回忌を記念し、改めて振り返った。教授は、戦後日本の音楽文化に「民族音楽」という風穴を開け、日本音楽の再発見と西洋音楽の相対化を日本人に促した。また、世界３５か国以上でフィールドワークを行い、その成果や魅力を、放送や書籍をつうじて一般の音楽愛好家にも、わかりやすく紹介した。今回は、教授と関係の深い内外の音楽家が集い、残された動画や画像の紹介も交えて教授の足跡をたどった。

※右記 URL と図 8-1 参照。　http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/exhibit2014n3.html

8.5.　藝大フレンズ賛助金助成事業の実施（上記事業 8.4 の一部として）

タイトル：〈民族音楽〉との邂逅 —— 小泉文夫のメッセージ 」企画実施
概要：上記 4 に準じる。

8.6.　「江戸東京音楽芸能 DB（データベース）」公開開始

本 DB は、浅草と上野を対象地域として、江戸・明治から現代にわたる伝統音楽や芸能、およびその従事者に関する情報を地図上に提示する。現時点では楽器店情報のみ掲載し、今後、逐次追加を予定する。
http://www.geidai.ac.jp/labs/koizumi/edotokyodb/　[図 8-2 参照]

8.7. 当室 HP 管理

全データを、将来にわたり恒久的に保管、メンテナンスするべく、東京藝術大学サーバ上の当室 HP 内ディレクトリに移設した。

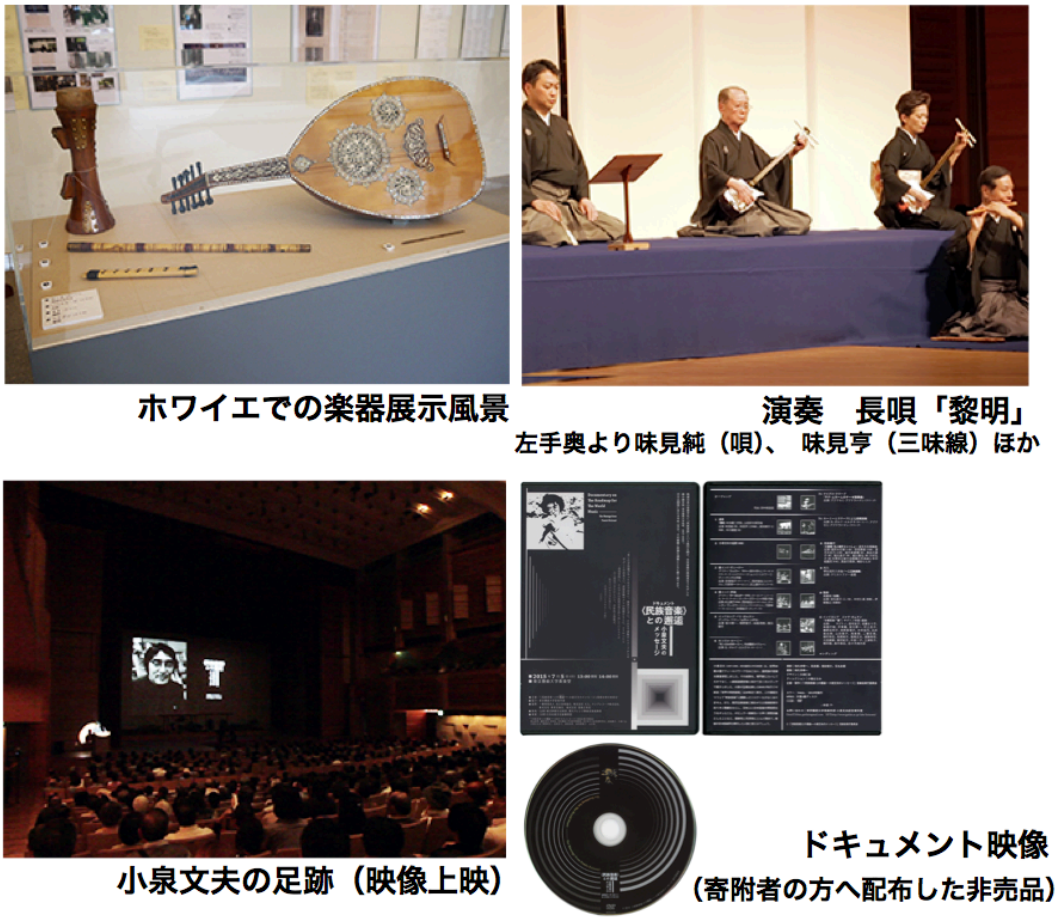


図 8-1 8.4 〈民族音楽〉との邂逅 —— 小泉文夫のメッセージ　関連写真

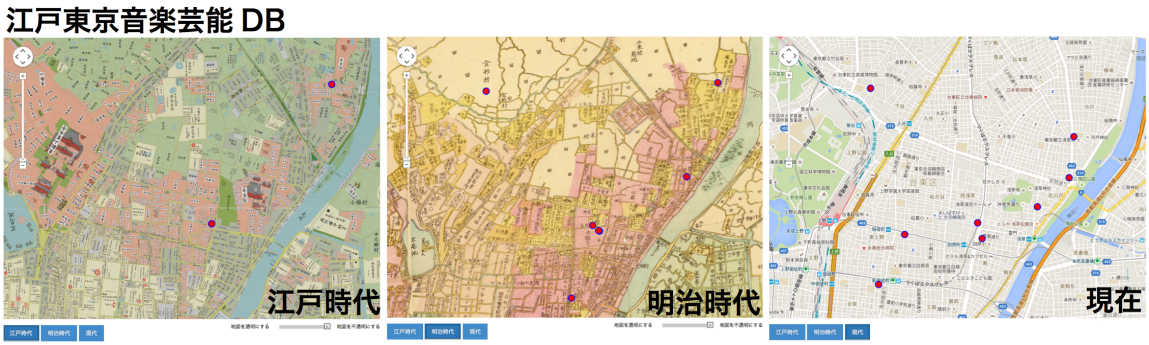


図 8-2 8.6「江戸東京音楽芸能データベース」の提示画面

APPENDIX:01
音響・映像データ研究プロジェクト

付録 1:アーカイブした公演等の一覧

2016 年 2 月 29 日現在

アーカイブセンターの活動期間である 2011～2015(平成 23～27)年度中に公演収録音源および映像をアーカイブ、そのデータを学外公開した公演の一覧である。博士学位審査会の内、公演を行わない学科の提出音源なども含まれる。

- アーカイブした公演の日時、公演名、場所、保存したデータ（音源：WAV ファイル、映像：MOV ファイル、公演パンフレット：PDF ファイル)、学外公開した内容（文字情報、収録音源もしくは映像のいずれか）を記した。
- ［保存データ］の欄には、デジタルデータの有無を記した。
  公演の全体を保存した場合は「○」、公演の一部を保存した場合は「一部」、デジタルデータ無し・未デジタルデータ化の場合は空欄、公演自体が未収録の場合は斜線となっている。
- 公演パンフレットで複数公演が同時掲載されている場合、［PDF］の欄に「月日(の公演と)共通」となっている。2 公演同時掲載の場合は、この一覧では 2 ファイルとして計上している。
- [学外公開]の欄には、学外公開内容について記した。
- [文字]の欄には、公演の文字情報について公開した場合は「○」、未公開の場合は空欄、公開の予定が無い場合は「無」となっている。
- ［配信］の欄には、収録音源もしくは映像のいずれかの公開内容を記した。
  公演の全曲を公開した場合は「○」、公演の一部を公開した場合は「一部」、未公開の場合は空欄、公開の予定が無い場合は「無」となっている。

1955 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1955 年 12 月 1 日（木）18:30	東京藝術大学音楽学部演奏会　荘厳ミサ	日比谷公会堂	○	無	○	○	

（1956～1957 年度は現存している原盤が無い。）

1958 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1958 年 12 月 3 日(水)	東京芸術大学吹奏楽研究部第 15 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
2	1958 年 12 月 11 日（木）18:30	東京芸術大学音楽学部第 114 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
3	1959 年 2 月 4 日(水)	故今村征男助教授追悼式		○	無	無	無	無

1959 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1959 年 6 月 4 日(木)18:30	東京芸術大学音楽学部第 115 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○		
2	1959 年 10 月 1 日（木）18:00	第 5 回 芸大オペラ研究発表(1)魔笛	日本青年館	○	無	○ 10/2, 3 共通	○	
3	1959 年 10 月 2 日（金）18:00	第 5 回 芸大オペラ研究発表(2)魔笛	日本青年館	○	無	○ 10/1, 2	○	

						共通		
4	1959 年 10 月 3 日（土）18:00	第 5 回 芸大オペラ 研究発表(3)魔笛	日本青年館	○	無	○ 10/1,2 共通	○	
5	1959 年 11 月 18 日(土)13:00	音楽教育創始 80 周年記念演奏会 邦楽	日比谷公会堂	○	無	○	無	無
6	1959 年 11 月 18 日(土)	音楽教育創始 80 周年記念演奏会 オケ・声楽		○	無	○	無	無
7	1959 年 12 月 3 日（木）18:30	東京芸術大学吹奏楽研究部 第 17 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
8	1959 年 12 月 20 日(日)18:00	第 9 回 メサイア(1)［外部主催］	日比谷公会堂	○	無	○ 12/21 共通		
9	1959 年 12 月 21 日(月)18:00	第 9 回 メサイア(2)［外部主催］	横浜音楽県立堂	無	無	○ 12/20 共通		

1960 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1960 年 6 月 3 日(金)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 116 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
2	1960 年 6 月 7 日(火)18:30	東京芸術大学音楽学部 第七回定期演奏会（邦楽）	日比谷公会堂	○	無	○	○	
3	1960 年 6 月 16 日（木）18:30	東京芸術大学吹奏楽研究部 第 18 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
4	1960 年 10 月 5 日（水）18:00	第 6 回 芸大オペラ 研究発表(1)フィガロの結婚	日本青年館	○	無	○ 10/6, 7 共通	○	
5	1960 年 10 月 6 日（木）18:00	第 6 回 芸大オペラ 研究発表(2)フィガロの結婚	日本青年館	○	無	○ 10/5, 7 共通		
6	1960 年 10 月 7 日（金）18:00	第 6 回 芸大オペラ 研究発表(3)フィガロの結婚	日本青年館	○	無	○ 10/5, 6 共通		
7	1960 年 11 月 21 日（月）18:30	東京芸術大学音楽学部 第 117 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
8	1960 年 12 月 20 日(火)18:30	第 10 回 メサイア(1)［外部主催］	日比谷公会堂		無	○ 12/21 共通		
9	1960 年 12 月 21 日(水)18:30	第 10 回 メサイア(2)［外部主催］	横浜県立音楽堂	無	無	○ 12/20 共通		

APPENDIX:01
音響・映像データ研究プロジェクト

1961 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1961 年 6 月 5 日 (月)18:00	東京芸術大学音楽学部 第八回定期演奏会（邦楽）	日比谷公会堂		無	○		
2	1961 年 6 月 8 日 (木)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 118 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○	○	
3	1961 年 6 月 19 日（月） 18:30	東京芸術大学吹奏楽研究部 第 20 回定期演奏会	日比谷公会堂	○	無	○		
4	1961 年 7 月 4 日（水） 18:00	第 7 回 芸大オペラ 研究発表 (1)コシ・ファン・トゥッテ	都市センターホール		無	○ 7/5,6 共通		
5	1961 年 7 月 5 日（水） 18:00	第 7 回 芸大オペラ 研究発表 (2)コシ・ファン・トゥッテ	都市センターホール		無	○ 7/4,6 共通		
6	1961 年 7 月 6 日（木） 18:00	第 7 回 芸大オペラ 研究発表 (3)コシ・ファン・トゥッテ	都市センターホール		無	○ 7/4,5 共通		
7	1961 年 12 月 5 日（火） 18:30	東京芸術大学吹奏楽研究部 第 21 回定期演奏会	東京文化会館		無	○		

1962 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1962 年 6 月 4 日（月） 18:30	東京芸術大学音楽学部 第 120 回オーケストラ定期	東京文化会館		無	○		
2	1962 年 6 月 11 日（月） 18:00	東京芸術大学音楽学部 第九回定期演奏会（邦楽）	東京文化会館		無	○		
3	1962 年 6 月 29 日（金） 18:30	東京芸術大学音楽学部 第 22 回吹奏楽定期演奏会	東京文化会館	○	無	○	○	
4	1962 年 10 月 4 日（木） 18:00	第 8 回 芸大オペラ(1) ウィンザーの陽気な女房たち	都市センターホール	○	無	○ 10/5 共通		
5	1962 年 10 月 5 日（金） 13:00	第 8 回 芸大オペラ(2) ウィンザーの陽気な女房たち	都市センターホール	○	無	○ 10/4 共通		
6	1962 年 10 月 5 日（金） 18:00	第 8 回 芸大オペラ(3) ウィンザーの陽気な女房たち	都市センターホール	○	無	○ 10/4 共通		
7	1962 年 11 月 28 日（水） 18:30	東京芸術大学音楽学部 第 121 回オーケストラ定期	東京文化会館	○	無	○	○	
8	1962 年 12 月 3 日（月） 18:30	東京芸術大学音楽学部 第 23 回吹奏楽定期演奏会	東京文化会館		無	○		
9	1962 年 12 月 19 日（水） 18:30	第 12 回 メサイア(1)［外部主催］	東京文化会館		無	○ 12/20 共通		
10	1962 年 12 月 20 日（木） 18:30	第 12 回 メサイア(2)［外部主催］	横浜県立音楽堂		無	○ 12/19 共通		

1963 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	1963 年 6 月 14 日（金）18:00	東京芸術大学音楽学部 第十回定期演奏会（邦楽）	東京文化会館		無	○		
2	1963 年 6 月 21 日（金）18:30	東京芸術大学音楽学部 第 122 回オーケストラ定期	東京文化会館		無	○		
3	1963 年 7 月 4 日（木）18:30	東京芸術大学音楽学部 第 24 回吹奏楽定期演奏会	東京文化会館		無	○		
4	1963 年 10 月 8 日（火）18:00	第 9 回 芸大オペラ(1) ラ・ボエーム	都市センターホール		無	○ 10/9, 10 共通		
5	1963 年 10 月 9 日（水）18:00	第 9 回 芸大オペラ(2) ラ・ボエーム	都市センターホール		無	○ 10/8, 10 共通		
6	1963 年 10 月 10 日（木）18:00	第 9 回 芸大オペラ(3) ラ・ボエーム	都市センターホール		無	○ 10/8, 9 共通		
7	1963 年 11 月 15 日（金）18:30	東京芸術大学音楽学部 第 123 回オーケストラ定期	東京文化会館		無	○		
8	1963 年 12 月 4 日（水）18:30	東京芸術大学音楽学部 第 25 回吹奏楽定期演奏会	東京文化会館		無	○		
9	1963 年 12 月 18 日（水）18:30	第 13 回 メサイア(1)［外部主催］	日比谷公会堂		無	○ 12/19 共通		
10	1963 年 12 月 19 日（木）18:30	第 13 回 メサイア(2)［外部主催］	東京文化会館 大ホール		無	○ 12/18 共通		

（1964～2002 年度はメディアによる原盤が保存されている。未デジタルデータ化。）

2003 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2003 年 4 月 25 日(金)18:30	同声会新人演奏会 第 1 部 弦楽器・管楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/26 共通		
2	2003 年 4 月 26 日(土)14:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・オルガン・ピアノ	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/25 共通		
3	2003 年 4 月 26 日(土)18:30	同声会新人演奏会 第 3 部 弦楽器・管楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/25 共通		
4	2003 年 11 月 21 日(金)18:30	藝大定期第 306 回 藝フィル・合唱定期	東京藝術大学奏楽堂			○		
5	2003 年 12 月 1 日(月)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 69 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
6	2003 年 12 月 2 日(火)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第六十七回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		

7	2004 年 2 月 12 日 (木)18:30	室内楽　第 30 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/13 共通		
8	2004 年 2 月 13 日 (金)18:30	室内楽　第 30 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/12 共通		

2004 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2004 年 4 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
2	2004 年 4 月 22 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
3	2004 年 4 月 23 日 (金)18:30	同声会新人演奏会 第 1 部 管楽器・弦楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/24 共通		
4	2004 年 4 月 24 日 (土)14:00	同声会新人演奏会 第 2 部 打楽器・弦楽器・ピアノ他	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/23 共通		
5	2004 年 4 月 24 日 (土)18:30	同声会新人演奏会 第 3 部 邦楽・管楽器・弦楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/23 共通		
6	2004 年 5 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
7	2004 年 5 月 20 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2004 年 6 月 1 日 (火)18:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第六十八回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
9	2004 年 6 月 3 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2004 年 6 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2004 年 6 月 18 日 (金)18:30	藝大定期 第 308 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂			○		
12	2004 年 7 月 1 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2004 年 7 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2004 年 7 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
15	2004 年 9 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2004 年 11 月 8 日 (月)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 70 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
17	2004 年 11 月 19 日 (金)19:00	藝大定期 第 311 回 藝フィル・合唱定期	東京藝術大学奏楽堂			○		
18	2004 年 11 月 25 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
19	2004 年 11 月 30 日 (火)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第六十九回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		

20	2005 年 2 月 9 日 (水)18:30	室内楽　第 31 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/10 共通		
21	2005 年 2 月 10 日 (木)18:30	室内楽　第 31 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/ 共通		
22	2005 年 2 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		

2005 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2005 年 4 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
2	2005 年 4 月 21 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
3	2005 年 4 月 22 日 (金)18:30	同声会新人演奏会 第 1 部 弦楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/23 共通		
4	2005 年 4 月 23 日 (土)14:00	同声会新人演奏会 第 2 部 打楽器・弦楽器・ピアノ	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/22 共通		
5	2005 年 4 月 23 日 (土)18:30	同声会新人演奏会 第 3 部 邦楽・管楽器・オルガン	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/22 共通		
6	2005 年 5 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
7	2005 年 5 月 19 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2005 年 5 月 26 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2005 年 5 月 31 日 (火)18:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
10	2005 年 6 月 2 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2005 年 6 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
12	2005 年 6 月 17 日 (金)18:30	藝大定期 第 313 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂			○		
13	2005 年 6 月 30 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2005 年 7 月 7 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
15	2005 年 7 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2005 年 9 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
17	2005 年 9 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
18	2005 年 11 月 30(水)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 71 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		

19	2005 年 12 月 6 日 (火)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十一回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
20	2006 年 2 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
21	2006 年 2 月 9 日 (木)18:30	室内楽　第 32 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/10 共通		
22	2006 年 2 月 10 日 (金)18:30	室内楽　第 32 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/9 共 通		

2006 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2006 年 4 月 23 日 (日)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 ピアノ・チェンバロ・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/23 共通		
2	2006 年 4 月 23 日 (日)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 声楽・管打楽器・邦楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/23 共通		
3	2006 年 5 月 11 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
4	2006 年 5 月 18 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
5	2006 年 5 月 25 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
6	2006 年 5 月 30 日 (火)18:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十二回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
7	2006 年 6 月 1 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2006 年 6 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2006 年 6 月 29 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2006 年 7 月 6 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2006 年 7 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
12	2006 年 9 月 7 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2006 年 9 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2006 年 11 月 28 日 (火)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 72 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
15	2006 年 11 月 30 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2006 年 12 月 5 日 (火)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十三回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
17	2007 年 2 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
18	2007 年 2 月 8 日 (木)18:30	室内楽　第 33 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/9		

						共通		
19	2007 年 2 月 9 日 (金)18:30	室内楽　第 33 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/8 共通		
20	2007 年 2 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		

2007 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2007 年 4 月 21 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 ピアノ・オルガン・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/21 共通		
2	2007 年 4 月 21 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 声楽・管打楽器・邦楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/21 共通		
3	2007 年 5 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
4	2007 年 5 月 17 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
5	2007 年 5 月 24 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
6	2007 年 5 月 29 日 (火)17:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十四回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
7	2007 年 5 月 31 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2007 年 6 月 21 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2007 年 6 月 28 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2007 年 7 月 5 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2007 年 7 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
12	2007 年 9 月 6(木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2007 年 11 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2007 年 11 月 28 日 (水)19:00	東京芸術大学音楽学部 第 73 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
15	2007 年 11 月 29 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2008 年 2 月 7 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
17	2008 年 2 月 7 日(木)	室内楽　第 34 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/8 共通		
18	2008 年 2 月 8 日(金)	室内楽　第 34 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/7 共通		
19	2008 年 2 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		

APPENDIX:01
音響・映像データ研究プロジェクト

2008 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2008 年 4 月 19 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 鍵盤(ピアノ他)・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/19 共通		
2	2008 年 4 月 19 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 声楽・管打楽器・邦楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/19 共通		
3	2008 年 5 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
4	2008 年 5 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
5	2008 年 5 月 22 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
6	2008 年 5 月 29 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
7	2008 年 6 月 5 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2008 年 6 月 26 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2008 年 7 月 3 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2008 年 7 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2008 年 7 月 17 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
12	2008 年 9 月 4 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2008 年 11 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2008 年 11 月 20 日(木)	王 真紀 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	
15	2008 年 11 月 26 日 (水)19:00	東京芸術大学音楽学部 第 74 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
16	2008 年 12 月 2 日 (火)17:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十五回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
17	2008 年 12 月 15 日(月)	橋本 美香 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	
18	2009 年 1 月 29 日(木)	樋口 里実 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 4 ホール	○	○		○	
19	2009 年 2 月 5 日(木)	田口 智子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 3 ホール	○	○		○	
20	2009 年 2 月 7 日 (土)15:00	室内楽 第 35 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/8 共通		
21	2009 年 2 月 8 日 (日)15:00	室内楽 第 35 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/7 共通		
22	2009 年 2 月 10 日(火)	福富 祥子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	

23	2009 年 2 月 10 日(火)	後藤 友香理 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
24	2009 年 2 月 10 日(火)	上杉 清仁 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
25	2009 年 2 月 12 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
26	2009 年 2 月 12 日(木)	森吉 京子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
27	2009 年 2 月 12 日(木)	坂上 賀奈子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
28	2009 年 2 月 19 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
29	2009 年 2 月 20 日(金)	古川 はるな 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	

2009 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2009 年 4 月 18 日(土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 鍵盤(ピアノ他)・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/18 共通		
2	2009 年 4 月 18 日(土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 声楽・管打楽器・邦楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/18 共通		
3	2009 年 4 月 30 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
4	2009 年 5 月 14 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
5	2009 年 5 月 21 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
6	2009 年 5 月 28 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
7	2009 年 6 月 4 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2009 年 6 月 11 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2009 年 6 月 18 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2009 年 6 月 25 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2009 年 7 月 7 日(火)	鈴木 准 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	
12	2009 年 7 月 9 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2009 年 7 月 9 日(木)	高橋 ちはる 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
14	2009 年 7 月 16 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
15	2009 年 10 月 29 日(木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2009 年 11 月 2 日(月)	佐藤 康子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 3 ホール	○	○		○	

17	2009 年 11 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
18	2009 年 11 月 25 日 (水)18:30	東京芸術大学音楽学部 第 75 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
19	2009 年 12 月 1 日 (火)17:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十六回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		一部	○		
20	2010 年 1 月 28 日(木)	飯島 香織 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 3 ホール	○	○		○	
21	2010 年 1 月 29 日(金)	鏑木 陽子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
22	2010 年 2 月 4 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
23	2010 年 2 月 6 日 (土)15:00	室内楽　第 36 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/7 共通		
24	2010 年 2 月 7 日 (日)15:00	室内楽　第 36 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/6 共通		
25	2010 年 2 月 8 日(月)	石井 千鶴 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
26	2010 年 2 月 8 日(月)	江田 雅子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
27	2010 年 2 月 9 日(火)	菅野 将典（雅紀） 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
28	2010 年 2 月 9 日(火)	長岡 聡季 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
29	2010 年 2 月 10 日(水)	佐藤 容子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
30	2010 年 2 月 10 日(水)	松本 和子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
31	2010 年 2 月 18 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 14 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
32	2010 年 2 月 18 日(木)	松井 亜希 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	

2010 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2010 年 4 月 15 日 (金)18:30	藝大定期 第 338 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂			○		
2	2010 年 4 月 17 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 鍵盤(ピアノ他)・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/17 共通		
3	2010 年 4 月 17 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・管打楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂			○ 4/17 共通		
4	2010 年 5 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
5	2010 年 5 月 20 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
6	2010 年 5 月 27 日	モーニング・コンサート	東京藝術大学奏楽堂		無	○		

	(木)11:00	第 3 回						
7	2010 年 6 月 3 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
8	2010 年 6 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
9	2010 年 6 月 24 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
10	2010 年 7 月 1 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
11	2010 年 7 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
12	2010 年 7 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
13	2010 年 11 月 11 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
14	2010 年 11 月 23 日 (火)14:00	東京芸術大学音楽学部 第 76 回吹奏楽定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂			○		
15	2010 年 11 月 25 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
16	2010 年 12 月 1 日 (水)17:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十七回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○	○		
17	2011 年 2 月 5 日 (土)15:00	室内楽　第 37 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/6 共通		
18	2011 年 2 月 6 日 (日)15:00	室内楽　第 37 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/5 共通		
19	2011 年 2 月 7 日(月)	佐々木 崇 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
20	2011 年 2 月 8 日(火)	東浦 亜希子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
21	2011 年 2 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
22	2011 年 2 月 14 日(月)	藤井 雄介 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	
23	2011 年 2 月 14 日(月)	鈴村 真貴子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
24	2011 年 2 月 15 日(火)	金子 祐木 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 4 ホール	○	○		○	
25	2011 年 2 月 15 日(火)	角田 剛士 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 1 ホール	○	○		○	
26	2011 年 2 月 17 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○		
27		郭 元 博士課程(作曲)音源提出		○	○			

2011 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2011 年 4 月 5 日 (金)11:00	平成 23 年度 東京藝術大学 入学式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
2	2011 年 5 月 7 日	元禄 その時、世界は？	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	

	(土)15:00	第 1 回						
3	2011 年 5 月 11 日(水)19:00	ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○ 5/14 共通	○	
4	2011 年 5 月 12 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○	○	
5	2011 年 5 月 14 日(土) 14:00	ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○ 5/11 共通	○	
6	2011 年 5 月 15 日(日) 15:00	元禄 その時、世界は？ 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
7	2011 年 5 月 19 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○	○	
8	2011 年 5 月 26 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○	○	
9	2011 年 5 月 27 日(金) 19:00	藝大定期 第 345 回 第 44 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
10	2011 年 6 月 2 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		無	○	○	
11	2011 年 6 月 10 (金) 19:00	藝大定期 第 346 回 藝フィル定期	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
12	2011 年 6 月 12 日(日) 15:00	上野の森オルガンシリーズ 16 J.アラン生誕 100 年記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
13	2011 年 6 月 18 日(土) 15:00	第 9 回 学長と語ろう こんさ～と	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
14	2011 年 6 月 23 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無	○	○	
15	2011 年 6 月 30 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無	○	○	
16	2011 年 7 月 3 日(日) 15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 17 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
17	2011 年 7 月 7 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無	○	○	
18	2011 年 7 月 9 日(土) 15:00	リスト音楽院•東京藝術大学コラボレーションコンサート	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
19	2011 年 7 月 14 日(木) 19:00	管打楽器シリーズ 2011 D.ヨナス&W.フックス	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
20	2011 年 7 月 14 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無	○	○	
21	2011 年 7 月 31 日(日) 15:00	尾高 惇忠 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
22	2011 年 8 月 27 日(土) 14:30	藝大とあそぼう in TAITO 子供のうたの 130 年・戦前編	台東区生涯学習センター アトリウム		○		○	
23	2011 年 8 月 28 日(日) 14:30	藝大とあそぼう in TAITO 子供のうたの 130 年・戦後編	台東区生涯学習センター アトリウム		○		○	
24	2011 年 10 月 1 日(土)	藝大定期オペラ 第 57 回(1)	東京藝術大学奏楽堂				○	

	14:00	コジ・ファン・トゥッテ						
25	2011 年 10 月 2 日(日) 14:00	藝大定期オペラ 第 57 回(2) コジ・ファン・トゥッテ	東京藝術大学奏楽堂				○	
26	2011 年 10 月 7 日(金) 18:30	藝大定期 第 344 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
27	2011 年 10 月 8 日(土) 15:00	元禄 その時、世界は？ 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
28	2011 年 10 月 15 日 (土)15:00	元禄 その時、世界は？ 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
29	2011 年 10 月 16 日 (日)15:00	多 美智子 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
30	2011 年 10 月 21 日 (金)19:00	藝大定期 第 347 回 藝フィル定期	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
31	2011 年 10 月 29 日(土) 14:30/15:00	東京藝術大学附属音楽高校 第 23 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
32	2011 年 10 月 30 日 (日)15:00	元禄 その時、世界は？ 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂			○	○	
33	2011 年 11 月 3 日 (木)15:00	ピアニスト小倉末子と東京 音楽学校展記念　第 1 回	台東区立旧東京音楽 学校奏楽堂		○		○	
34	2011 年 11 月 5 日 (土)15:00	ハイドンシリーズ 2011 第 1 日 室内オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 11/12 共通	○	
35	2011 年 11 月 6 日 (日)15:00	うたシリーズ 2011 イタリア歌曲の楽しみ	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
36	2011 年 11 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
37	2011 年 11 月 11 日 (金)19:00	藝大定期第 348 回 第 45 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
38	2011 年 11 月 12 日 (土)15:00	ハイドンシリーズ 2011 第 2 日 室内楽演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 11/5 共通	○	
39	2011 年 11 月 18 日 (金)19:00	藝大定期第 349 回 藝フィル・合唱定期	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
40	2011 年 11 月 19 日 (土)15:00	第 10 回 学長と語ろうこんさ～と	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
41	2011 年 11 月 20 日 (日)14:10	障がいとあーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
42	2011 年 11 月 23 日 (水)14:00	藝大定期 吹奏楽 第 77 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
43	2011 年 11 月 23 日 (水)15:00	ピアニスト小倉末子と東京 音楽学校展記念　第 2 回	台東区立旧東京音楽 学校奏楽堂		○		○	
44	2011 年 11 月 24 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
45	2011 年 11 月 30 日 (水)17:30	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十八回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
46	2011 年 12 月 4 日(日) 14:30/18:30	LEXUS Concert in 東京藝 大 2011［外部主催］	東京藝術大学奏楽堂				無	無
47	2011 年 12 月 8 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
48	2011 年 12 月 18 日 (日)15:00	創造の杜 2011 藝大現代音楽の夕べ	東京藝術大学奏楽堂	○		○	○	

49	2011 年 12 月 21 日 (水)18:30	第 61 回 メサイア［外部主催］	東京文化会館 大ホール	○	無		○	
50	2012 年 1 月 7 日 (土)14:00	同声会新人演奏会 第 1 回 古楽・ピアノ・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂	○		○ 1/8 共通	○	
51	2012 年 1 月 8 日 (日)14:00	同声会新人演奏会 第 2 回 邦楽・管打楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂	○		○ 1/7 共通	○	
52	2012 年 2 月 4 日 (土)14:00	室内楽 第 38 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 2/5 共通	○	
53	2012 年 2 月 5 日 (日)14:00	室内楽 第 38 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂			○ 2/4 共通	○	
54	2012 年 2 月 6 日(月)	山本 美樹子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
55	2012 年 2 月 7 日(火)	佐藤 淳一 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
56	2012 年 2 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂				○	
57	2012 年 2 月 9 日(木)	河合 佐季子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
58	2012 年 2 月 10 日(金)	中嶋 克彦 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
59	2012 年 2 月 11 日 (土)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 18 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂				○	
60	2012 年 2 月 16 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂				○	
61	2012 年 2 月 17 日 (金)19:00	フェリックス・アーヨの 「四季」	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
62	2012 年 2 月 20 日(月)	澤江 衣里 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
63	2012 年 2 月 21 日(火)	小泉 詠子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
64	2012 年 2 月 22 日 (水)18:00	邦楽絵巻 「悟空・韓国めぐり」	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
65	2012 年 3 月 16 日 (金)19:00	北川 暁子 退任記念コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
66	2012 年 3 月 17 日 (土)15:00	守山 光三 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
67	2012 年 3 月 18 日 (日)15:00	安藤 政輝 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
68	2012 年 3 月 19 日 (月)18:30	伊原 直子 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
69	2012 年 3 月 20 日 (火)15:00	杉木 峯夫 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
70	2012 年 3 月 21 日 (水)16:00	ルチアーナ・ギッツォーニ 最終講義および記念演奏会	東京藝術大学音楽学部第 2 ホール				○	
71	2012 年 3 月 22 日 (木)18:30	三浦 正義 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂				○	
72	2012 年 3 月 26 日	平成 23 年度 東京藝術大学	東京藝術大学奏楽堂	無			無	無

	(月)11:00	卒業式						
73	2012 年 3 月 27 日 (火)18:30	日中青少年交流演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
74	2012 年 3 月 31 日 (土)15:00	第 6 回 奏楽堂企画 学内公募最優秀企画	東京藝術大学奏楽堂				○	
75		澁谷 由香 博士課程(作曲)音源提出		○				

2012 年度

No	日時	公演名	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2012 年 4 月 5 日 (木)11:00	平成 24 年度 東京藝術大学 入学式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
2	2012 年 4 月 14 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 オルガン・ピアノ・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂				○	
3	2012 年 4 月 14 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・管打楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
4	2012 年 4 月 20 日 (金)18:30	藝大定期 第 350 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
5	2012 年 4 月 26 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
6	2012 年 5 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
7	2012 年 5 月 17 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
8	2012 年 5 月 19 日 (土)15:00	幕末 その時、世界は？ 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
9	2012 年 5 月 24 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
10	2012 年 5 月 24 日 (木)19:00	藝大定期 第 351 回 第 46 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
11	2012 年 5 月 26 日 (土)15:00	幕末 その時、世界は？ 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
12	2012 年 5 月 27 日 (日)15:00	オルガンシリーズ 2012 神秘の J.S.バッハ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
13	2012 年 6 月 1 日 (金)19:00	創造の杜 2012 ヴォルフガング・リーム	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
14	2012 年 6 月 2 日 (土)15:00	ライプツィヒ弦楽四重奏団 を迎えて　第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 6/8 共通	○	
15	2012 年 6 月 7 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
16	2012 年 6 月 8 日 (金)19:00	ライプツィヒ弦楽四重奏団 を迎えて　第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 6/2 共通	○	
17	2012 年 6 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
18	2012 年 6 月 16 日 (土)15:00	第 11 回 学長と語ろう　こんさ～と	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
19	2012 年 6 月 21 日	藝大定期 第 352 回	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	

	(木)19:00	藝フィル定期・特別演奏会						
20	2012 年 6 月 30 日 (土)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 19 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
21	2012 年 7 月 1 日 (日)14:00	藝大とあそぼう 2012 プレ・コンサート	台東区生涯学習センター アトリウム		○	○	○	
22	2012 年 7 月 5 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
23	2012 年 7 月 7 日 (土)15:00	藝大とあそぼう 2012 コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
24	2012 年 7 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
25	2012 年 7 月 18 日 (水)19:00	管打楽器シリーズ 2012 金管アンサンブルの夕べ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
26	2012 年 7 月 21 日 (土)15:00	幕末 その時、世界は？番外編 ジャズ in 藝大 2012	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
27	2012 年 7 月 26 日 (木)19:00	芸術大学交流演奏会 2012 ベルリン芸術大学とともに	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
28	2012 年 9 月 12 日 (水)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
29	2012 年 9 月 14 日 (金)18:00	GTS アートカフェ Vol.1	美術学部中央棟 1 階 第 1 講義室		○		無	無
30	2012 年 9 月 29 日 (土)14:00	第 58 回 藝大オペラ定期(1) ドン・ジョヴァンニ	東京藝術大学奏楽堂				○	
31	2012 年 9 月 30 日 (日)14:00	第 58 回 藝大オペラ定期(2) ドン・ジョヴァンニ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
32	2012 年 10 月 11 日 (木)19:00	藝大 21　和楽の美 邦楽絵巻　悟空と九尾の狐	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
33	2012 年 10 月 13 日 (土)15:00	幕末 その時、世界は？ 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
34	2012 年 10 月 19 日 (金)19:00	藝大定期 第 353 回 藝フィル定期(シベリウス)	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
35	2012 年 10 月 20 日 (土)15:00	幕末 その時、世界は？ 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
36	2012 年 10 月 28 日 (日)16:00	能「隅田川」・教会オペラ 《カーリュー・リヴァー》	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
37	2012 年 11 月 1 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
38	2012 年 11 月 3 日 (土)14:30	東京藝術大学附属音楽高校 第 24 回　定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
39	2012 年 11 月 10 日 (土)15:00	第 12 回 学長と語ろう　こんさーと	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
40	2012 年 11 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
41	2012 年 11 月 16 日 (金)19:00	D コンサート 第 3 回	カワイ表参道コンサートサロン パウゼ	○				
42	2012 年 11 月 23 日 (金)15:00	藝大定期第 354 回 藝フィル・合唱定期	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
43	2012 年 11 月 24 日 (土)15:00	藝大定期 吹奏楽 第 78 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
44	2012 年 11 月 25 日	ハイドンシリーズ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	

	(日)15:00	第 1 日 室内楽演奏会				11/30 共通		
45	2012 年 11 月 28 日 (水)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第七十九回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
46	2012 年 11 月 30 日 (金)19:00	ハイドンシリーズ 第 2 日 室内オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 11/25 共通	○	
47	2012 年 12 月 1 日 (土)14:00	障がいとアーツ 第 1 日 ワークショップ 1	東京藝術大学 第 1 ホール		○	○ 12/2 共通	○	
48	2012 年 12 月 1 日 (土)15:00	障がいとアーツ 第 1 日 ミニ・コンサート他	東京藝術大学奏楽堂 ホワイエ		○	○ 12/2 共通	○	
49	2012 年 12 月 2 日 (日)12:30	障がいとアーツ 第 2 日 ワークショップ 2	東京藝術大学奏楽堂 ホワイエ			○ 12/1 共通	○	
50	2012 年 12 月 2 日 (日)14:15	障がいとアーツ 第 2 日 プレ・コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 12/1 共通	○	
51	2012 年 12 月 2 日 (日)15:00	障がいとアーツ 第 2 日 コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 12/1 共通	○	
52	2012 年 12 月 8 日 (土)13:30	LEXUS Concert in 東京藝大 2012［外部主催］	東京藝術大学奏楽堂				無	無
53	2012 年 12 月 13 日 (木)19:00	藝大定期 第 355 回 第 47 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
54	2012 年 12 月 21 日 (金)18:30	第 62 回 メサイア［外部主催］	東京文化会館 大ホール	○	無		○	
55	2013 年 2 月 2 日 (土)14:00	室内楽　第 39 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
56	2013 年 2 月 3 日 (日)14:00	室内楽　第 39 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
57	2013 年 2 月 6 日 (水)18:30	渡邉 麻子 博士学位審演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
58	2013 年 2 月 7 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
59	2013 年 2 月 10 日 (日)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 20 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
60	2013 年 2 月 12 日 (火)18:30	岩下 晶子 博士学位審演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
61	2013 年 2 月 19 日 (火)18:30	相田 麻純 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
62	2013 年 2 月 20 日 (水)18:00	萩岡 未貴 博士学位審演奏会	東京藝術大学 第 2 ホール	○	○		○	
63	2013 年 2 月 21 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
64	2013 年 3 月 16 日 (土)15:00	牧 真弓（吾妻 節穂） 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
65	2013 年 3 月 17 日	稲川 榮一	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

	(日)15:00	退任記念演奏会						
66	2013 年 3 月 19 日 (火)18:30	直野 資 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
67	2013 年 3 月 20 日 (水)15:00	成田 英明 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
68	2013 年 3 月 25 日 (月)11:00	平成 24 年度 東京藝術大学 卒業式	東京藝術大学奏楽堂				無	無
69	2013 年 3 月 30 日 (土)15:00	第 7 回 奏楽堂企画 学内公募最優秀企画	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

2013 年度

No	日時	公演名(副題)	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2013 年 4 月 4 日 (木)11:00	平成 25 年度 東京藝術大学 入学式	東京藝術大学奏楽堂	無			無	無
2	2013 年 4 月 13 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 古楽・ピアノ	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
3	2013 年 4 月 13 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・管打楽器	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
4	2013 年 4 月 19 日 (金)18:30	藝大定期 第 356 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
5	2013 年 4 月 25 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
6	2013 年 5 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
7	2013 年 5 月 16 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
8	2013 年 5 月 18 日 (土)15:00	消える昭和 その時、世界は？ 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
9	2013 年 5 月 23 日 (木)19:00	藝大定期 第 357 回 第 48 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
10	2013 年 5 月 23 日(木) 11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
11	2013 年 5 月 30 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
12	2013 年 6 月 7 日 (金)19:00	創造の杜 2013 藝大 現代音楽の夕べ	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
13	2013 年 6 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
14	2013 年 6 月 16 日 (日)15:00	消える昭和 その時、世界は？ 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
15	2013 年 6 月 21 日 (金)19:00	藝大定期 第 358 回 藝フィル定期	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
16	2013 年 6 月 22 日 (土)15:00	第 13 回 学長と語ろう こんさーと	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
17	2013 年 6 月 27 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
18	2013 年 6 月 29 日 (土)15:00	藝大チェンバーオーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

		第 22 回 定期演奏会						
19	2013 年 7 月 2 日 (火)11:00	東京藝大シンフォニーオケ プロムナード・コンサート 5	東京藝術大学奏楽堂	無	○	○	○	
20	2013 年 7 月 4 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
21	2013 年 7 月 6 日 (土)10:30	藝大とあそぼう 2013 ワークショップ	東京藝術大学音楽学部第 2 ホール		○		○	
22	2013 年 7 月 6 日 (土)15:00	藝大とあそぼう 2013 コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
23	2013 年 7 月 7 日 (日)15:00	ピアノシリーズ Vol.1 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 7/8 共通	○	
24	2013 年 7 月 8 日 (月)19:00	ピアノシリーズ Vol.1 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 7/7 共通	○	
25	2013 年 7 月 11 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
26	2013 年 7 月 12 日 (金)19:00	弦楽シリーズ 2013 P.コムローシュを迎えて	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
27	2013 年 7 月 17 日 (水)19:00	管打楽器シリーズ 2013 V.フックスを迎えて	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
28	2013 年 7 月 27 日 (土)15:00	ジャズ in 藝大 2013	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
29	2013 年 9 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
30	2013 年 10 月 5 日 (土)14:00	第 59 回 藝大オペラ定期(1) 秘密の結婚	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
31	2013 年 10 月 6 日 (日)14:00	第 59 回 藝大オペラ定期(2) 秘密の結婚	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
32	2013 年 10 月 9 日 (水)18:30	和楽の美 邦楽絵巻「弁財天縁起」	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
33	2013 年 10 月 12 日 (土)15:00	消える昭和 その時、世界は？ 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
34	2013 年 10 月 19 日 (土)14:30	東京藝術大学附属音楽高校 第 25 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
35	2013 年 10 月 20 日 (日)15:00	オルガン・シリーズ 2013 異国の J.S.バッハイタリア編	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
36	2013 年 10 月 25 日 (金)19:00	藝大定期 第 359 回 藝フィル定期+うた S 2013	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
37	2013 年 10 月 26 日 (土)15:00	消える昭和 その時、世界は？ 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
38	2013 年 10 月 27 日 (日)15:00	東京藝術大学・ジュネーヴ音楽大学交流演奏会(東京公演)	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	
39	2013 年 11 月 2 日 (土)15:00	第 14 回 学長と語ろう こんさーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
40	2013 年 11 月 13 日(水)	高橋 さやか 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
41	2013 年 11 月 16 日	藝大定期第 360 回	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	

	(土)18:30	藝フィル・合唱定期						
42	2013 年 11 月 21 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
43	2013 年 11 月 23 日 (土)14:00	藝大定期 吹奏楽(TGWO) 第 79 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
44	2013 年 11 月 27 日 (水)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第八十回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
45	2013 年 11 月 28 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
46	2013 年 11 月 28 日 (木)19:00	藝大定期 第 361 回 第 49 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
47	2013 年 11 月 30 日 (土)13:00	障がいとアーツ 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 12/1 共通	○	
48	2013 年 12 月 1 日 (日)12:00	障がいとアーツ 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 11/30 共通	○	
49	2013 年 12 月 15 日(日) 11:30/15:30	LEXUS Concert in 東京藝大 2013［外部主催］	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
50	2013 年 12 月 20 日 (金)18:30	第 63 回 メサイア［外部主催］	東京文化会館 大ホール	○	無		○	
51	2014 年 2 月 1 日 (土)14:00	室内楽 第 40 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
52	2014 年 2 月 2 日 (日)14:00	室内楽 第 40 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
53	2014 年 2 月 5 日(水)	朴 瑛実 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
54	2014 年 2 月 6 日(木)	臼木 愛 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
55	2014 年 2 月 11 日 (火)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 22 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
56	2014 年 2 月 18 日(火)	長瀬 賢弘 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
57	2014 年 2 月 19 日(水)	谷地畝 晶子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
58	2014 年 2 月 20 日(木)	廣瀬 麻名 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
59	2014 年 2 月 20 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
60	2014 年 2 月 21 日(金)	川崎 翔子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
61	2014 年 3 月 20 日 (木)19:00	多田羅迪夫 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
62	2014 年 3 月 25 日 (火)11:00	平成 25 年度 東京藝術大学 卒業式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
63	2014 年 3 月 28 日 (金)19:00	第 8 回 奏楽堂企画学内公募 最優秀企画	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

2014 年度

No	日時	公演名(副題)	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2014 年 4 月 4 日(金) 11:00	平成 26 年度 東京藝術大学 入学式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
2	2014 年 4 月 12 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 オルガン・ピアノ・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
3	2014 年 4 月 12 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・管打楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
4	2014 年 4 月 18 日 (金)18:30	藝大定期 第 362 回 藝フィル定期(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
5	2014 年 4 月 22 日(火)	第 6 ホール竣工記念 式典	東京藝術大学 第 6 ホール		○		無	無
6	2014 年 4 月 25 日 (金)19:00	創造の杜 2014 作曲家尹伊桑 第 1 日 オーケストラの夕べ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
7	2014 年 4 月 26 日 (土)16:00	創造の杜 2014 作曲家尹伊桑第 2 日 室内楽曲の夕べ (6H①)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	
8	2014 年 4 月 27 日 (日)15:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 古楽科(6H②)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	○
9	2014 年 4 月 28 日 (月)19:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 ピアノ科・弦楽科(6H③)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	○
10	2014 年 4 月 29 日 (火)15:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 邦楽科(6H④)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	○
11	2014 年 4 月 30 日 (水)19:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 管打楽科(6H⑤)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	一部
12	2014 年 5 月 1 日 (木)19:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 声楽科(6H⑥)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	
13	2014 年 5 月 1 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
14	2014 年 5 月 2 日 (金)19:00	第 6 ホール竣工記念演奏会 指揮科(6H⑦)	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	一部
15	2014 年 5 月 15 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
16	2014 年 5 月 18 日 (日)15:00	シェイクスピア ～人とその時代　第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	○
17	2014 年 5 月 22 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
18	2014 年 5 月 25 日 (日)15:00	ピアノシリーズ Vol.2 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 6/1 共通	○	○
19	2014 年 5 月 29 日 (木)19:00	藝大定期第 363 回 第 50 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
20	2014 年 5 月 29 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
21	2014 年 6 月 1 日 (日)15:00	ピアノシリーズ Vol.2 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 5/25 共通	○	○
22	2014 年 6 月 7 日 (土)15:00	シェイクスピア ～人とその時代　第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	

23	2014 年 6 月 13 日 (金)19:00	藝大定期第 364 回 藝大フィル	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
24	2014 年 6 月 14 日 (土)15:00	第 15 回 学長と語ろうこんさーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
25	2014 年 6 月 19 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
26	2014 年 6 月 21 日 (土)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 23 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
27	2014 年 6 月 26 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	○
28	2014 年 7 月 1 日 (火)11:00	東京藝大シンフォニーオケ プロムナード・コンサート 7	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
29	2014 年 7 月 3 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
30	2014 年 7 月 3 日 (木)19:00	東京藝大ウィンドオーケストラ 学内演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
31	2014 年 7 月 5 日 (土)15:00	藝大とあそぼう 2014	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
32	2014 年 7 月 10 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
33	2014 年 7 月 11 日 (金)19:00	管打楽器シリーズ 2014 日独名手の響演	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
34	2014 年 7 月 12 日 (土)15:00	弦楽シリーズ 2014 R.シュトラウスの弦の響き	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
35	2014 年 7 月 24 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
36	2014 年 7 月 26 日 (土)15:00	ジャズ in 藝大 2014	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
37	2014 年 9 月 10 日 (水)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
38	2014 年 10 月 4 日 (土)14:00	第 60 回 藝大オペラ定期(1) コシ・ファン・トゥッテ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
39	2014 年 10 月 5 日 (日)14:00	第 60 回 藝大オペラ定期(2) コシ・ファン・トゥッテ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
40	2014 年 10 月 8 日 (水)18:30	和楽の美 邦楽絵巻「義経記」	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
41	2014 年 10 月 12 日 (日)15:00	オルガンシリーズ 2014 異国の J.S.Bach フランス編	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
42	2014 年 10 月 13 日 (月)15:00	ピアノシリーズ Vol.2 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 10/19 共通	○	○
43	2014 年 10 月 19 日 (日)15:00	ピアノシリーズ Vol.2 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 10/13 共通	○	○
44	2014 年 10 月 24 日 (金)19:00	藝大定期第 365 回 藝大フィル(R.シュトラウス)	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
45	2014 年 10 月 25 日 (土)15:00	第 16 回 学長と語ろうこんさーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
46	2014 年 10 月 26 日 (日)14:00	ヘンリク・ヴィーゼ氏を迎えて	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	一部

47	2014 年 11 月 1 日 (土)15:00	シェイクスピア ～人とその時代　第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	一部
48	2014 年 11 月 7 日 (金)19:00	うた・シリーズ 2014 R.シュトラウス歌曲とオペラ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	一部
49	2014 年 11 月 8 日 (土)15:00	東京藝術大学附属音楽高校 第 26 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
50	2014 年 11 月 8 日 (土)14:00	東京藝術大学附属音楽高校 記念式典(創立 60 周年)	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
51	2014 年 11 月 9 日(日) 14:20/15:00	東京藝術大学附属音楽高校 同窓会演奏会(創立 60 周年)	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	一部
52	2014 年 11 月 13 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	○
53	2014 年 11 月 15 日 (土)19:00	藝大定期第 366 回 第 51 回　学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	○
54	2014 年 11 月 22 日 (土)15:00	藝大定期第 367 回 藝大フィル・合唱	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
55	2014 年 11 月 23 日 (日)14:00	藝大定期 吹奏楽(TGWO) 第 80 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
56	2014 年 11 月 27 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
57	2014 年 11 月 30 日 (日)15:00	シェイクスピア ～人とその時代　第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
58	2014 年 12 月 3 日 (水)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第八十一回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
59	2014 年 12 月 6 日(土) 12:30/14:00/16:15	障がいとアーツ 2014 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 12/7 共通	○	
60	2014 年 12 月 7 日(日) 12:30/14:00/15:00	障がいとアーツ 2014 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 12/6 共通	○	
61	2014 年 12 月 14 日(日)	LEXUS Concert in 東京藝大 2014［外部主催］	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
62	2014 年 12 月 26 日 (金)18:30	第 64 回 メサイア［外部主催］	東京文化会館 大ホール	○	無		○	
63	2015 年 1 月 10 日 (土)11:00	ホームカミングデイ 第 1 回 翔く藝大生、他	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○ 1/10 共通		○	
64	2015 年 1 月 10 日 (土)14:00	ホームカミングデイ 第 1 回 第一回同聲會一部再現演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
65	2015 年 1 月 25 日 (日)14:00	勝見 巴 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール	○	○		○	
66	2015 年 1 月 31 日 (土)12:30	上野「文化の杜」新構想 シンポジウム	東京藝術大学 第 6 ホール		○		無	無
67	2015 年 1 月 31 日 (土)14:00	室内楽 第 41 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
68	2015 年 2 月 1 日 (日)14:00	室内楽 第 41 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
69	2015 年 2 月 11 日 (水)15:00	藝大チェンバーオーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部

		第 24 回 定期演奏会						
70	2015 年 2 月 16 日(月)	秋場 敬浩 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
71	2015 年 2 月 18 日(水)	西国領 君嘉 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
72	2015 年 2 月 18 日(水)	金持 亜実 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
73	2015 年 2 月 19 日(木) 19:00	喜多 宏丞 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
74	2015 年 2 月 19 日(木)	村元 彩夏 博士学位審査演奏会	東京藝術大学奏楽堂	○	○		○	
75	2015 年 2 月 19 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
76	2015 年 3 月 25 日 (水)19:00	永島 義男 最終講義	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	○
77	2015 年 3 月 25 日 (水)11:00	平成 26 年度 東京藝術大学 卒業式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
78	2015 年 3 月 27 日 (金)19:00	第 9 回 奏楽堂企画学内公募 最優秀企画	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

2015 年度

No	日時	公演名(副題)	場所	保存データ			学外公開	
				WAV	MOV	PDF	文字	配信
1	2015 年 4 月 6 日 (月)11:00	平成 27 年度 東京藝術大学 入学式	東京藝術大学奏楽堂	無	○		無	無
2	2015 年 4 月 11 日 (土)13:00	同声会新人演奏会 第 1 部 オルガン・ピアノ・弦楽器	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
3	2015 年 4 月 11 日 (土)18:00	同声会新人演奏会 第 2 部 邦楽・管打楽器・声楽	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
4	2015 年 4 月 17 日 (金)18:30	藝大定期 第 368 回 藝大フィル(新卒業生紹介)	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
5	2015 年 4 月 24 日 (金)19:00	創造の杜 2015 藝大現代音楽の夕べ	東京藝術大学奏楽堂	○	○	○	○	一部
6	2015 年 4 月 30 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
7	2015 年 5 月 9 日 (土)15:00	ゲーテ〜人とその時代 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
8	2015 年 5 月 14 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
9	2015 年 5 月 21 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
10	2015 年 5 月 22 日 (金)19:00	管打楽器シリーズ 2015 オラフ・オットを迎えて	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
11	2015 年 5 月 24 日 (日)15:00	ピアノ・シリーズ 2015 ブラームス室内楽 第 1 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 6/7 共通	○	○
12	2015 年 5 月 28 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
13	2015 年 5 月 28 日 (木)19:00	藝大定期 第 369 回 第 52 回 学生オーケストラ	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
14	2015 年 5 月 29 日 (金)19:00	色舞奏 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	

15	2015 年 5 月 30 日 (土)15:00	色舞奏 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
16	2015 年 5 月 31 日 (日)15:00	色舞奏 第 3 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	○
17	2015 年 6 月 6 日 (土)15:00	ゲーテ～人とその時代 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
18	2015 年 6 月 7 日 (日)15:00	ピアノ・シリーズ 2015 ブラームス室内楽 第 2 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 5/24 共通	○	○
19	2015 年 6 月 13 日 (土)15:00	藝大定期第 370 回 藝大フィル	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
20	2015 年 6 月 18 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 5 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	一部
21	2015 年 6 月 20 日 (土)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 25 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	○
22	2015 年 6 月 25 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 6 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
23	2015 年 6 月 27 日 (土)15:00	第 17 回 学長と語ろうこんさーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	一部
24	2015 年 7 月 2 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 7 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
25	2015 年 7 月 2 日 (木)19:00	東京藝大ウィンドオーケストラ 学内演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
26	2015 年 7 月 4 日 (土)15:00	藝大とあそぼう 2015 邦楽のお作法	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
27	2015 年 7 月 7 日 (火)11:00	学生オーケストラ プロムナードコンサート 9	東京藝術大学奏楽堂		無		○	
28	2015 年 7 月 7 日 (火)19:00	シモン・ゴールドベルク メモリアル・コンサート	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
29	2015 年 7 月 9 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 8 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
30	2015 年 7 月 9 日 (木)19:00	ヴェンツェル・フックスを迎えて	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	一部
31	2015 年 7 月 23 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 9 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
32	2015 年 7 月 25 日 (土)15:00	ジャズ in 藝大 2015	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
33	2015 年 7 月 27 日(月)	オープン・キャンパス 戦後 70 年	東京藝術大学奏楽堂	○	○		無	無
34	2015 年 7 月 28 日(火)	オープン・キャンパス 早期教育 Vn	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
35	2015 年 9 月 9 日 (水)11:00	モーニング・コンサート 第 10 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
36	2015 年 9 月 11 日 (金)18:30	和楽の美 邦楽絵巻「ヒミコ」	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
37	2015 年 10 月 3 日 (土)14:00	第 61 回 藝大オペラ定期(1) フィガロの結婚	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 10/4 共通	○	
38	2015 年 10 月 4 日 (日)14:00	第 61 回 藝大オペラ定期(2) フィガロの結婚	東京藝術大学奏楽堂		○	○ 10/3 共通	○	

39	2015 年 10 月 10 日 (土)15:00	第 18 回 学長と語ろうこんさーと	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
40	2015 年 10 月 17 日 (土)15:00	管打楽器シリーズ 2015 名手で聴くバロック音楽	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	○
41	2015 年 10 月 24 日 (土)14:30	東京藝術大学附属音楽高校 第 27 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	一部
42	2015 年 10 月 25 日 (日)15:00	ゲーテ～人とその時代 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
43	2015 年 10 月 30 日 (金)19:00	藝大定期第 371 回 藝大フィル	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
44	2015 年 10 月 31 日 (土)15:00	弦楽シリーズ 2015 フランスの名手たち	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
45	2015 年 11 月 7 日 (土)15:00	うたシリーズ 2015 山田耕筰没後 50 年	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
46	2015 年 11 月 8 日 (日)15:00	ピアノ・シリーズ 2015 ブラームス室内楽 第 3 回	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
47	2015 年 11 月 12 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 11 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
48	2015 年 11 月 14 日(土)	ゲーテ～人とその時代 第 4 回 第 53 回藝大シンフォニーオケ	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
49	2015 年 11 月 17 日 (火)19:00	東京藝術大学 & 延世大学 校音楽学部 交流演奏会 (1)	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
50	2015 年 11 月 18 日 (水)19:00	東京藝術大学 & 延世大学 校音楽学部 交流演奏会 (2)	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	
51	2015 年 11 月 21 日 (土)15:00	藝大定期第 373 回 藝大フィル・合唱	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
52	2015 年 11 月 22 日 (日)11:00	パスカル・モラゲスを迎えて	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
53	2015 年 11 月 23 日 (月)14:00	藝大定期 吹奏楽(TGWO) 第 81 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
54	2015 年 11 月 26 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 12 回	東京藝術大学奏楽堂	○	無		○	
55	2015 年 11 月 28 日 (土)11:00	信時潔 没後 50 周年記念 シンポジウム	東京藝術大学音楽学 部第 6 ホール		○		○	
56	2015 年 11 月 28 日 (土)15:00	信時潔 没後 50 周年記念 演奏会「海道東征」	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
57	2015 年 11 月 28 日 (土)18:00	東京藝術大学 & 韓国芸術 綜合学校 交流演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール		○		○	
58	2015 年 11 月 29 日 (日)15:00	ピアノ・シリーズ 2015 ブラームス室内楽 第 4 回	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
59	2015 年 12 月 1 日 (火)11:00	TGSO の指導＆トークセッ ション［非公開］	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
60	2015 年 12 月 2 日 (水)18:00	東京藝術大学音楽学部 邦楽第八十二回定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
61	2015 年 12 月 5 日 (土)12:00	障がいとアーツ 2015 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂		○	○	○	
62	2015 年 12 月 6 日 (日)12:15	障がいとアーツ 2015 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂		○		○	
63	2015 年 12 月 13 日(日)	LEXUS Concert in 東京藝 大 2015［外部主催］	東京藝術大学奏楽堂		○		無	無
64	2015 年 12 月 24 日 (木)18:30	第 65 回 メサイア［外部主催］	東京文化会館 大ホール		無		○	

65	2016 年 1 月 22 日 (金)19:00	フィリップ・ミュレールを迎えて	東京藝術大学奏楽堂			○	○	
66	2016 年 2 月 4 日 (木)16:00	船木 麻代 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール					
67	2016 年 2 月 6 日 (土)14:00	室内楽 第 42 回 第 1 日	東京藝術大学奏楽堂				○	
68	2016 年 2 月 7 日 (日)14:00	室内楽 第 42 回 第 2 日	東京藝術大学奏楽堂				○	
69	2016 年 2 月 9 日 (火)18:30	福田 恭子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール					
70	2016 年 2 月 11 日 (木)15:00	藝大チェンバーオーケストラ 第 26 回 定期演奏会	東京藝術大学奏楽堂				○	
71	2016 年 2 月 14 日 (日)14:00	東京藝術大学・海上自衛隊東京音楽隊 合同演奏会	東京藝術大学奏楽堂				○	
72	2016 年 2 月 14 日 (日)15:00	増田 桃香 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール					
73	2016 年 2 月 15 日 (月)18:00	安倍 真結 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール					
74	2016 年 2 月 18 日 (木)11:00	モーニング・コンサート 第 13 回	東京藝術大学奏楽堂		無		○	
75	2016 年 2 月 21 日 (日)15:00	オルガン・シリーズ 2015 マックス・レーガー	東京藝術大学奏楽堂				○	
76	2016 年 2 月 21 日 (日)15:00	立川 清子 博士学位審査演奏会	東京藝術大学 第 6 ホール					
77	2016 年 3 月 19 日 (土)15:00	寺谷千枝子 退任記念演奏会	東京藝術大学奏楽堂				○	
78	2016 年 3 月 25 日 (金)11:00	平成 27 年度 東京藝術大学 卒業式	東京藝術大学奏楽堂	無			無	無
79	2016 年 3 月 31 日 (木)19:00	第 10 回 奏楽堂企画学内公募 最優秀企画	東京藝術大学奏楽堂				○	

付録 2:取扱要項

○東京藝術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項

（平成24年２月28日 制　　定）

改正　平成25年10月24日　　平成26年３月12日

（目的）

第１条　この要項は、東京藝術大学音楽学部及び東京藝術大学演奏藝術センター（以下「学部等」という。）において、研究・教育目的で行われる演奏活動と、その記録・保存・公開に関わる著作隣接権等の取扱について基本的な事項を定め、もって学術活動の成果の社会的活用を図るとともに、我が国における音楽藝術の振興に資することを目的とする。

（定義）

第２条　この要項において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

（１）「演奏作品」とは、構成員が学部等の主催する公演会（練習・ワークショップその他の企画事業を含む。）において演奏（歌唱その他の実演を含む。）を行った作品をいう。

（２）「構成員」とは、学部等に所属している全ての者（職員、学生等の身分及び特任、客員等の呼称は問わない。）をいう。

（３）「著作隣接権等」とは、著作権法（昭和45年５月６日法律第48号）第89条第１項に規定する実演家の著作隣接権その他記録・保存・公開に関わる肖像権等の権利を含む。

（著作隣接権等の帰属）

第３条　演奏作品の著作隣接権等は、別途合意のない限り、学部等との関係ではその演奏を行った構成員個人（以下「著作隣接権者」という。）に帰属する。

（利用許諾）

第４条　著作隣接権者は、その演奏作品について、学部等に対し次の各号に掲げる利用を将来にわたって無償で許諾するものとする。

（１）演奏作品の記録に必要な録音・録画及びその編集

（２）演奏作品の保存に必要なCD-ROM等のメディアやサーバへの複製

（３）メディアの配布・販売・貸与、インターネット等を通じた配信その他の提供

（４）ホームページや印刷物等における広報利用

（５）上記各号に定める行為の第三者に対する再許諾

（６）その他学部等において必要とする利用

（楽曲著作権等の取扱）

第５条　演奏に用いられる楽曲に著作権が存在する場合又は楽譜の貸与契約が必要な場合には、当該演奏活動の責任者たる構成員が適切な契約処理を行う。構成員は、その実演が第三者の著作権その他の権利を侵害しないよう、十全の配慮を行うものとする。

（音楽事務所等との関係）

第６条　構成員が、音楽事務所・レコード会社等との間で著作隣接権等の取扱を含む契約等を個別に行っている場合には、その旨を学部等に報告するとともに、この要項を含む本学諸規則及び関係法令に基づき必要な処理を行うものとする。

（退職・卒業後の取扱）

第７条　構成員が退職、卒業、修了又は退学した場合においても、在職又は在籍中に行われた演奏に関する著作隣接権等の取扱については、この要項の定めるところにより行うものとする。

（事務）

第８条　この要項に関わる事務は、学部等事務部が行う。

（例外の取扱）

第９条　記録保存された演奏作品について、第４条第３号、第４号又は第５号を適用することが適当でないと著作隣接権者が判断した場合、その旨を音楽学部長に申出ることができる。

２　前項の申出があった場合、音楽学部長は著作隣接権者と協議のうえ、別に取扱うことができる。

（その他）

第１０条　この要項に定めるもののほか、演奏作品の取扱に関し必要な事項は、音楽学部長が別に定める。

附 則

この要項は、平成24年４月１日から施行する。

附 則

この要項は、平成25年10月24日から施行し、平成25年7月18日から適用する。

附　則

この要項は、平成26年４月１日から施行する。

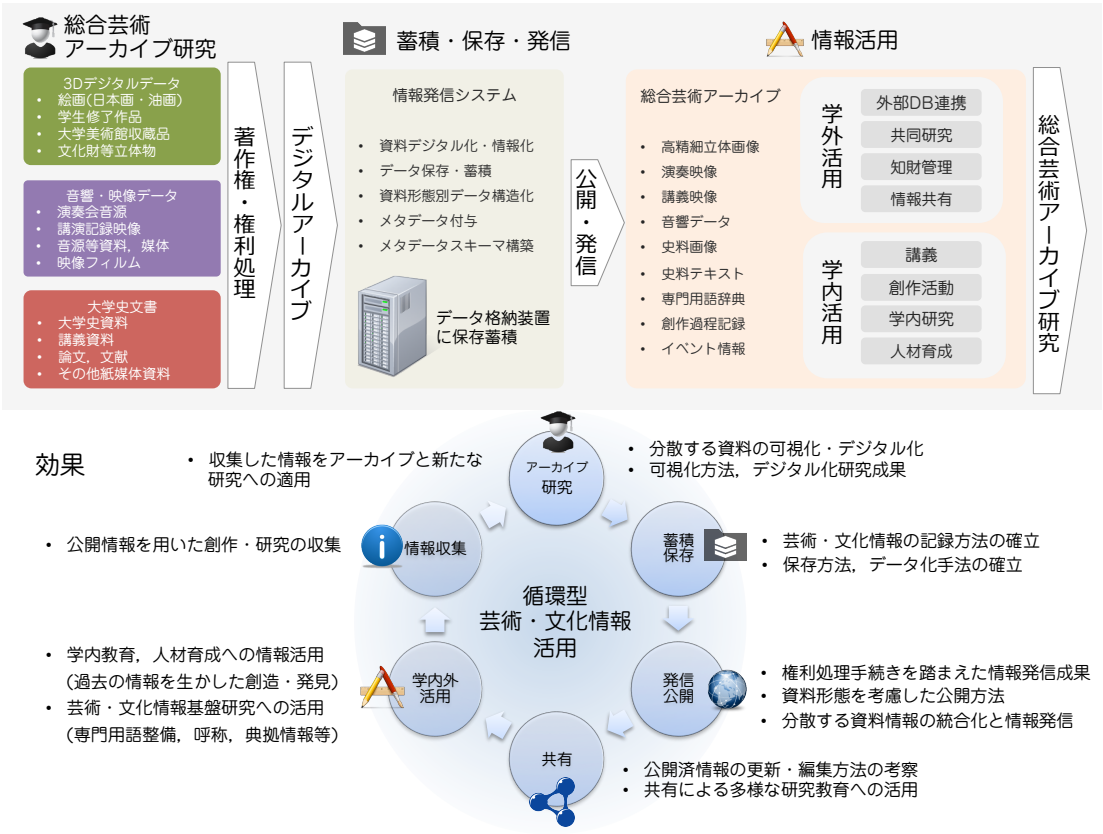
情報発信・システム
研究プロジェクト

2011.05–2016.03

平成 23 年度

1. 情報発信・システム研究プロジェクト

平成 23 年度は、総合芸術アーカイブプロジェクトに係る資料内容の調査と翌年度以降にすすめるデータ化、データベース化のための資料情報基盤に関する調査を実施した。また，総合芸術アーカイブプロジェクトを通して本学の資料を収集・蓄積していくために必要な権利処理フレームワークのプロトタイプを作成し、実験的に試みた。



芸術情報の統合および情報発信

権利処理フレームワークの設計

(1). 利用承諾書作成
音響・映像プロジェクトにおける演奏会情報の収集・蓄積のために、個別権利処理事項を記載した利用承諾書を作成した。これにより学内で実施される定期演奏会等の記録がアーカイブできる体制を整備した。(詳細は音響・映像データ研究プロジェクト報告を参照)。

(2). 教職員、学生の著作権帰属と利用に関わる内規の策定
音楽学部における教職員・学生の演奏会記録等情報をアーカイブするために内規として権利処理する仕組みを構築した。

(3). 美術学部修了制作カタログの権利移行
従来はカタログ作成業者側にあった卒業・修了制作作品情報の権利を本学が保持できるように働きかけ、これを実現した。平成 21 年度以降のカタログデータ及び画像については、アーカイブセンターで収集・保持している。

芸術に関する国内外のメタデータ調査

主に文書系、美術資料系、音響系を中心に調査を実施した。調査方法はウェブをメインとし、その他には学会等での情報収集を行った。現在、標準化と称するメタデータ規格は無数にあり、資料形態によっては標準として機能していない規格も多数存在する。

(1). 文書系メタデータ
文書系メタデータは国際標準記録史料記述一般原則：ISAD (G) (General International Standard Archival Description) 並びに電子化利用のための EAD(Encoded Archival Description)が広く普及・利用されており、大学史文書など記録資料(アーカイブズ)として扱われる情報については当該メタデータの利用を検討している。

(2). 美術資料系
標準化されたメタデータ規格が存在するも、その多くは西欧諸国の博物館資料に関するものであり、アジア系特有の資料や現代アート、デザイン、メディアアート等をアーカイブするためには、博物館資料のメタデータとは異なる性質を持つメタデータを作成する必要がある。また、美術資料のアーカイブは多くの分野に跨ることから、本学が有する資料の性質に合わせて作業を進めて行く必要がある。その際は該当分野の専門家や実際に作品を作る学生らとの協力体制も視野に入れる。

(3). 音響・映像系
オーケストラ等、西洋音楽の情報については、標準化されたメタデータ規格を適用する事が可能である。一方、本学独自の情報項目(演奏会情報やパンフレット情報)などは別途策定する必要があることから、イベント情報等と合わせて検討していく。

資料情報を統合化・活用基盤構築の検討

情報の統合化・活用の基盤に、次世代のウェブで用いられる情報流通基盤技術を利用した情報の統合化および公開方法の検討を行った。その結果、異なる種類の情報をウェブで扱える共通のデータ形式で扱い、データを共有させることで異なる種類の情報を統合・検索が可能である事がわかった。以下の 2 点の情報については、既存の情報を次世代のウェブ標準に合わせたデータを作成し、公開することの了承を得た。

(1). 日本画研究室(宮廻先生) 日本画用語辞典
(2). 小泉資料室(植村先生) 所蔵楽器目録

音響・映像データ公開に伴う技術的手法の検討と適用

音響・映像プロジェクトにおける音響、映像データの変換形式および公開方法の技術的検証と公開のための方法を提案した。詳細は「音響・映像データ研究」を参照されたい。

学外機関との研究協力体制の構築

東京国立博物館と総合芸術アーカイブセンターで科研(C)「文化財管理における美術品用語事典の作成」に応募した。また、本プロジェクトにおける情報統合のための参考情報には、東京国立博物館の収蔵品管理データベース項目の情報を提供頂いた。

講義内容の映像化試み

本学彫刻科ならびに映像研究科との共同研究として、2012 年 1 月 5 日より取手校地において石膏取りの記録映像化を実施した。記録された映像はアーカイブし、本学の教育及び社会的に価値のある資料としての利用を検討

2. 知的財産活動報告

報告:特別研究員 生貝直人

2.1. 総論

本稿では、総合芸術アーカイブセンターにおける知的財産関連の本年度の取組と、次年度以降の展望についての報告を行う。芸術活動の発展と普及にあたり、著作権をはじめとする知的財産権の適切な保護と利用促進の双方に配慮を行うことは不可欠である。特にデジタル・ネットワーク形式での利用が想定されるアーカイブ事業においては、従来主として本学学内および少数の関係者に限定されていた芸術作品の利用と異なり、本学関係者や学外第三者を含む関係者の保有する各種知的財産に関わる綿密な取扱が求められる。しかし一方で、過度に厳格かつ形式的なルール構築を行うことは、円滑な芸術活動の妨げともなりかねない。各芸術分野のこれまでの権利処理の慣行を最大限に尊重しつつも、デジタル化に必要な権利処理のルールと手続を定めていく必要がある。
以上の問題意識に基づき、今後 5 年間のセンターにおける知的財産関連の活動計画を大きく以下の 3 つのフェーズに分け、初年度にあたる本年は(1)を中心に、部分的に(2)に関わる活動を進めてきたところである。

(1) 本学における知的財産をめぐる現状の実務的取扱と慣行の調査、および関連する法制度・判例の調査研究
(2) 適切な知的財産処理を行うための学内規則や契約文書の整備
(3) ワークフローの策定と人的資源の調整

知的財産処理の性質上単独で作業を行う領域は限られており、本年度の活動も関係する各プロジェクト、および社会連携センターとの連携協力に基づいて進められてきたものである。以下では、2. アーカイブセンター内における音響・映像データ研究プロジェクト、3. 大学史文書データ研究プロジェクト、4. 3D データ研究プロジェクト、それぞれとの協力の下に進めてきた調査と検討作業の状況を記述した後に、最後に今後のアーカイブセンターの活動において必要な知的財産関連の取組全般の方向性について述べる（5）。

2.2. 音響・映像データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、主に奏楽堂において開催される各種演奏会の記録映像アーカイブに関わる権利処理である。

第一に、演奏会で使用する音楽楽曲の「著作権」処理の問題である。従来から演奏会における楽曲の利用においては、一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）に申請を行った上で所定の利用料の支払を行っており、さらに JASRAC に登録を行っていない本学関係者（学生を含む）等が著作権を保有する楽曲については、個別の利用許諾を得るなどの対応を行っており、今後もその取組を続けることになる。ただしアーカイブの構築・運用にあたっては、学内に限った記録の保存・複製であっても、相当する複製物の作成等に伴う追加的利用料の支払が必要になる可能性があり、さらに学外への配信を行うにあたってはストリーミング等利用形態に応じた利用料の支払が当然に必要になる。このようなアーカイブの構築によって必要となる追加的著作権処理のあり方については、著作権法 35 条に規定される教育目的での権利制限規定の範囲との兼ね合い（35 条の権利制限規定が対象としているのはあくまで「授業の過程での複製」であり、アーカイブセンターの活動全般がそれに含まれるわけではない）、そして利用料等費用面での手当のあり方を含め、引き続き検討を進めていく必要がある。

第二に、演奏者が有する実現家の権利、すなわち「著作者隣接権」の処理の問題である。演奏会において用いられる楽曲には、創作者の死後 50 年以上を経て著作権の消滅したクラシック作品が多いものの、そのような楽曲を演奏した場合であっても、演奏家の著作者隣接権は演奏後 50 年間保護されており、演奏作品の利用を行う際には原則として演奏者の許諾が必要となる。この点、本年度よりデジタルアーカイブ化を前提とした演奏者からの許諾書を得る取組を進めているところである。しかし特にオーケストラの場合、演奏者の数が数十名に上ることも少なくないため、演奏会ごとにかかるその作業コストは決して小さいものではない。そのため同プロジェクトでは現在、本学顧問弁護士との協議の下、2012 年度からは学生を含めた本学関係者については、その著作隣接権を本学に対して無償での利用を許諾するという学内規則（「東京芸術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」）を設けることにより、一括の権利処理を行うための規則制定作業を進めているとこ

ろである。ただし同規則が実現したとしても、規則制定時の本学関係者への説明と理解促進のあり方に十分な配慮をする必要があるため、年度末から年度明けにかけて、学内向けの説明会を実施する予定である。

以上、音響・映像データ研究プロジェクトにおける権利処理問題の主たる点に関わる取組を挙げたが、今後はさらに(1)録音者や背景動画像、楽譜等の提供者をはじめとする楽曲著作権者・演奏者以外の権利処理、(2)本学付属音楽学校生を含む未成年からの権利許諾取得のあり方、(3)将来的な有料配信における権利処理や関係者の収益配分、(4)関係者が所属する音楽事務所等との専属実演家契約等第三者を含めた調整等の課題につき、詳細な検討を進める必要がある。

2.3. 大学史文書データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、音楽学部側の史料室が保有する膨大な歴史的資料の公開に関わる権利処理である。以下の 2 点は主として所蔵資料の公開・閲覧のケースを念頭に置いているが、基本的な課題はアーカイブの構築についても同様である。

第一に、所蔵資料の著作権の問題である。大学史史料室に所蔵される資料には、本学が著作権を有している、あるいは第三者の著作物であったとしても著作権者の死後 50 年を経るなどして著作権の処理が不要であるものも多いが、それ以外の資料の利用が問題となる。従来から学内および学外の利用希望者については、書面での申請により閲覧・複写を認めており、前者の閲覧については著作権法上の問題は存在しないものの、後者の複写を適法に行いうるかが問題となる。この点、大学史史料室は著作権法 31 条および同法施行令 1 条の 3 に規定される「図書館等」にあたるものとして、利用者の求めに応じて当該著作物の一部分の複写を適法に行うことができると考えられるが、その範囲を超える複写の申請への対応については、著作権の存否の確認を含め慎重に対応する必要がある。さらに本学の性質上、文書資料以外の映像や音楽等の「一部分」の範囲を確定しがたい資料も多く所蔵されており、それらの取扱については別途関係機関の取組等を参考に、資料提供の指針を定める必要があると考えられる。

第二に、所蔵資料に含まれるプライバシー情報に関わる問題である。大学史史料室に保存される資料は刊行された書籍等に限られず、大学運営に関わる資料、そして卒業生の成績等をはじめとする機微な情報が含まれている。特に本学の卒業生の中には音楽史において重要な役割を果たした者も多く、それらの情報は研究上の資料価値を有しており、実際に本学から提供された情報を元に、当該音楽家の来歴を記述した論文や書籍等を刊行しているケースも存在する。この点、生存する個人に関する情報の取扱については「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」の規定および本学個人情報保護関連規則の規定を遵守し、本人の許諾を得ない第三者への提供は行わないことが原則となる。さらに死亡した卒業生に関する情報であっても、遺族への配慮等の観点からその開示は原則として行うべきではない。問題は、死後十分な期間を経た著名な卒業生に関わる学術的価値の高い情報を、どの時期から、どのような方法で公開するべきかという点である。この点わが国では 2011 年の公文書館理法の施行に伴い、同法 2 条 2 項 3 号における「国立公文書館等」に指定された国立大学資料館を中心として、歴史的資料の公開ガイドラインの制定が進められているところである（犯罪・病歴等を含む機微な個人情報については取得・作成後 110 年を経てからの公開等）。現時点において本学に同様の規則は存在しておらず、今後同種のガイドラインを参考とした検討と制定が進められる必要がある。

以上、大学史文書データ研究プロジェクトにおける権利処理の主たる点についての課題を挙げたが、今後は(1)特に学外者の閲覧・複写にあたっての実費・手数料のあり方、(2)複写およびデジタル形式での学外公開にあたって個別に権利処理が必要となる場合の手続のあり方等の課題につき、詳細な検討を進める必要がある。特に後者については、大学史史料室が保有する、あるいはその活動上利用を必要とする第三者の著作物については、公開後長期間を経ているなどの理由により著作権者の所在の確認が困難である、いわゆる孤児作品（orphan works）の問題に直面することが多く、著作権法 67 条に規定される裁定制度の活用を含めた利用円滑化の施策を考慮する必要がある。この点はすでに大学史史料室が 2012 年に本学美術館において開催予定の資料展覧会に伴う学校校歌著作物の利用において顕在化しており、来年度にかけ具体的な対応のあり方についての検討を行う予定である。

2.4. 3D データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、美術作品の 3D 化に伴って必要となる原著作物の権利処理、および 3D 化された美術作品のデータそのものの取扱である。

3D 対象となる美術作品の多くは著作権がすでに消滅している、あるいは本学・関係者が著作権を保有しているなどの理由により権利処理の必要が生じないが、第三者が著作権を保有している場合にはそのデータや再現物を公開・利用するにあたり、元となる作品の著作権者の許諾を受けることが必要となる。特に大量の美術作品の 3D 化を行う場合には、個別の許諾取得と併せて社団法人日本美術家連盟（JAA）等の著作権集中管理組織からの許諾を得る必要が生じる可能性があるが、美術分野における著作権の集中管理は前述の音楽分野における JASRAC 程にその組織率が高くないのが現状であり、権利者不明の場合には裁定制度の活用等の方法を検討する必要がある。

3D 化された美術作品のデータそのものは、著作権の保護の対象とならない事実情報の範囲に含まれる可能性が高い。しかしそのデータの作成にあたっては通常多くのコストを必要とするため、本学としても第三者の利用にあたって対価を求める必要が生じる場合があること、および外部の美術館・博物館等から許諾を得て 3D 化を行う場合には当該所蔵元が何らかのデータの利用制限を求める可能性が高い。実際に九州国立博物館でのヒアリング調査によれば、同館が作成した 3D データについては所蔵元の意向や第三者による無断利用への懸念から、データの外部公開を原則として行っていないということである。しかし公的な研究教育機関である本学の性質上、その活動成果としてのデータ・アーカイブはできる限り社会一般への公開と還元を進めることが望ましいと考えられるところ、その取扱および学外を含めた共有のあり方について、今後本学として一定のガイドライン等を設ける必要が生じると考えられる。

以上、3D データ研究プロジェクトにおける権利処理の主たる点についての課題を挙げたが、今後は(1)海外を含めた外部の美術・博物館と共同での 3D 化事業にあたっての協定事項のあり方、および(2)特に当該 3D データを元とした美術作品の複製物を有償販売する場合における収益配分のあり方等の課題につき、詳細な検討を進める必要がある。

2.5. その他関係する事項について

最後に、上記各論全てに関連する今後の取組のあり方について記述する。

第一に、教職員・学生を含む本学関係者の権利のあり方についてである。すでに音楽映像分野における本学関係者の有する著作隣接権の取扱について、新規に学内規則を設けることの検討を進めていることについて述べたが、本学関係者の作曲した楽曲著作権等の取扱については未検討である他、美術学部をはじめとする美術分野の本学関係者の有する権利の取扱については今後の課題である。この点、すでに大学院映像研究科においては映画作品という著作物の性質上、著作権法 29 条においてもその著作権は映画製作者に帰属することを定めていること、そして映画製作においては本学からの一定程度多額の出資を必要とすることなどから、既にその著作権が本学に帰属する旨の学内規則を有しており、その実際の運用状況等について今後同研究科関係者へのヒアリングを行っていく予定である。さらにアーカイブセンターの活動と直接関連する事項は少ないものの、既に 2007 年の「東京芸術大学役職員等の発明等に係る知的財産権の取扱規則」においては、本学関係者が職務上作成した特許等の工業所有権、さらにプログラムおよびデータベースの著作物等については原則として本学が権利を有する旨を定めている。しかし当該規則は文部科学省の要請に基づき一般の理工系大学での運用を念頭に置いた規定となっており、芸術系大学の活動実態に即した内容となっているかは今後検討の余地が存在する。社会連携センターとの協力の下、既に存在する各種学内規則とアーカイブセンターの活動の適合性について精査・改訂の検討を進めていく必要がある。

第二に、講義映像のアーカイブについてである。これは部分的に上記(1)にも関連するが、著作権法 15 条では被雇用者が職務上作成した著作物の権利が雇用者に帰属することを定めており、本学教職員が日常の業務において作成した業務文書等の著作権は原則として本学に帰属することになる。しかし大学教員が行った講義の映像や資料について、当該規定が適用されるかはいまだ学説上も定かではなく、近年国内の各大学がイーラーニングによる講義映像のオンライン配信を進めるにあたっては、実務上は教員から大学側が個別に承諾を受けることが多い模様である。さらに学外からゲスト講師を招いて行う講義の記録・配信にあ

たっては、当然に当該ゲスト講師から承諾を得る必要が生じる。この点、すでに美術学部や芸術情報センターで実施する講義においては、講義映像利用についてゲスト講師からの承諾書を受ける取組を進めており、今後承諾書形式の統一や、講師依頼時の配信可否確認等の手続の確立と周知を進めていく必要がある。

第三に、本学の芸術活動において第三者企業等との受託ないし委託契約関係が存在している場合の取扱である。美術・音楽いずれの分野においても、その作品制作や演奏会の開催にあたっては外部企業等からの委託によって行われることがあり、また援助金の受領にあたっても成果物の取扱を含んだ契約関係が結ばれていることが多く、その中には成果物の知的財産権を相手側企業が保有するよう求めているものも存在すると考えられる。第三者企業等との契約内容の詳細については原則として個別の交渉に委ねられるべきであるが、最低限当該成果物の本学内におけるアーカイブを許容する条件となるよう契約内容を精査していくべきである。さらに本学が第三者に対して業務委託を行う場合についても、同様の課題は存在する。美術学部においては、例年卒業制作の冊子制作およびそれに必要な作品の写真撮影を外部プロダクションに委託しているところ、当該写真の過去のデジタルデータが本学に存在しておらず、デジタル形式での公開の支障になっているという問題が生じている。さらに卒業制作冊子の制作に限らず、学外者に対して写真撮影の委託を行う場合においては、当該撮影者と本学の間で著作権譲渡（著作者人格権の不行使を含む）契約を結んでおかなければ、将来の写真データの利活用に支障を及ぼす恐れがある。実際に東京国立博物館でのヒアリング調査においても、写真の権利処理の問題により外部公開を行うことのできない所蔵品記録写真が相当数存在するということである。この点、既に美術学部卒業冊子については本学美術教務との協議の下、上記データの受渡しおよび写真著作権の帰属について委託書類の調整を行ったところであるが、これら以外の外部委託契約の締結にあたっても、競争入札時の委託条件記述等を含め、アーカイブ事業と整合性のあるものとするよう精査していく必要がある。

第四に、アーカイブセンターの権利処理によって得られた知見の公開と体系化である。わが国において、芸術系大学における権利処理の実務についての研究はもとより、芸術分野全般が有する知的財産に関わる問題群についても、法学分野における研究の蓄積はきわめて限られているのが現状であり、本プロジェクトの成果が芸術法制度分野における学術研究の促進に資するところは大きい。権利処理作業の進捗を学術論文等の形で公開することにより、外部の学界・実務関係者からのフィードバックも期待できるところである。さらに刊行された体系的なマニュアルも数少なく、中長期的には各種芸術関係機関・大学等の実務に資する教科書等の制作も視野に入れるべきであると考えられる。

第五に、知的財産の社会への還元と収益化に向けた取組である。本項ではアーカイブにあたって必要な知的財産の適切な処理を行う、いわば「法務」的な側面に焦点を当てたが、今後外部公開可能な知的財産が集積していく中で、それらを社会に発信し、有償・無償での利用許諾を進めるための、いわば「マーケティング」的側面についての検討を進める必要があると考えられる。この点国内の主要大学においては、我が国の知的財産戦略推進戦略等の方針に従い、特許等の工業所有権を中心とした知的財産の権利処理と、産業界へのライセンシングと実用化を担う TLO（Technology Licensing Organization）の設立と運用が進められているが、現状において各大学が組織している TLO はあくまで理工系大学の事情を前提としたものであり、本学をはじめとする芸術系大学の実情にどの程度適合的であるかは定かではない。社会連携センターとの協力の下、関係大学の取組を参照しつつ、本学の有する知的財産をより効率的に社会に発信するための組織機能のありかたについて検討を進める必要がある。

第六に、知的財産に関する知識の普及・啓発についてである。アーカイブセンターの活動において知的財産の処理を進めていったとしても、その法的・実務的背景について関係者との認識共有が十分に行われていなければ、円滑な運用を期待することはできない。著作権処理をはじめとする知的財産の知識は、本学学生が芸術家として活動していく上でも、あるいは社会人として活動していく上でも今後ますます重要性を増していくものである。アーカイブセンターの取組に対する周知理解の促進と併せ、教職員・学生を対象とした知的財産関連セミナー等を実施していく必要性は高いものと考えられる。

2.6. 2011 年度知的財産関連研究業績（2011 年 5 月就任以降）

著書

[1] （単著）生貝直人『情報社会と共同規制: インターネット政策の国際比較制度研究』勁草書房、2011 年 10 月刊行（第 27 回電気通信普及財団テレコム社会科学賞奨励賞受賞）

[2] （共著）増田雅史、生貝直人『デジタルコンテンツ法制: 過去・現在・未来の課題』朝日新聞出版、2012 年 3 月刊行

[3] （分担執筆）生貝直人「第 7 章　オープンガバメントと著作権—欧米の取組と日本への示唆」西田亮介・塚越健司編『「統治」を創造する: 新しい公共/オープンガバメント/リーク社会』pp.255-281、春秋社、2011 年 12 月刊行

論文

[4] 生貝直人「情報社会における公私の共同規制についての基礎的考察 —背景、構造要件、リスク、政府関与—」KDDI 総研 R&A2011 年 8 月号、pp.1-21、2011 年 8 月

[5] （査読有）生貝直人「EU 視聴覚メディアサービスの英国における共同規制を通じた国内法化」情報ネットワーク・ローレビューVol.10、pp.1-19、2011 年 7 月

学会報告・講演等

[6] （招待講演）生貝直人「クリエイティブ・コモンズ—保護と利用の両立を図る柔軟な著作権枠組—」富山大学芸術文化学部知的財産講演会、富山大学、2012 年 2 月

[7] （招待講演）生貝直人「諸外国におけるアーカイブ政策とその制度的課題—孤児作品、集中権利管理、公共貸与権制度—」P+ARCHIVE レクチャー＆ワークショップ 2011　実践アート・アーカイビング「アーカイブの公開と法」、アーツ千代田、2012 年 2 月

[8] （シンポジウム登壇）西田亮介、生貝直人他「「統治」を創造する —新しい公共、オープンガバメント、リーク社会」（財）尾崎行雄記念財団「咢堂塾 21」特別シンポジウム、憲政記念館、2012 年 1 月

[9] （研究会報告）生貝直人「インターネットと共同規制」ドイツ憲法判例研究会メディア部会研究会、専修大学、2011 年 12 月

[10] （研究会報告）生貝直人「著作権侵害の媒介者責任に関わる規制手法の選択論」情報通信政策研究会議、国際大学 GLOCOM、2011 年 12 月

[11] （研究会報告）生貝直人「プロバイダ責任制限法制と自主規制の重層性」情報ネットワーク法学会著作権研究会、情報セキュリティ大学院大学、2011 年 9 月

[12] （学会報告）生貝直人「プロバイダ責任制限法制と公私の共同規制 —著作権、プライバシー、表現の自由の相克—」情報通信学会第 28 回学会大会、専修大学、2011 年 7 月

[13] （特別講義）生貝直人「Google Books 問題にみるアーカイブ政策の課題と展望」東京大学情報学環教育部「実践情報社会論 I」、東京大学、2011 年 7 月

[14] （招待講演）生貝直人「学術情報と著作権の新たな動き クリエイティブ・コモンズとサイエンス・コモンズ」神奈川県資料室研究会、神奈川県立川崎図書館、2011 年 6 月

[15] （特別講義）生貝直人「デジタル時代の「創造性」をめぐるルール」京都精華大学「芸術研究科表現領域特講 3」、京都精華大学、2011 年 6 月

[16] （研究会報告）生貝直人「インターネット規制のコントロール・ポイント—著作権・プライバシー・表現規制—」情報通信学会 ICT 将来政策研究会、慶應義塾大学、2011 年 5 月

3. 文化財関係調査活動報告

報告:教育研究助手 河内晋平

総合芸術アーカイブセンター活動初年度となる本年度は、美術分野の文化財に関するメタデータの調査を実施した。具体的には東京国立博物館の協力のもとに博物館資料として管理されている 11 万件に及ぶ文化財情報についての調査を実施した。また、本学内での美術学部における実技授業の記録とその活用法について美術学部彫刻科の授業の一部を映像記録し編集作業を進めた。本報告では、各調査活動の詳細と今後の課題について報告する。

(1). 文化財管理に関するデータベース調査（2011 年 5 月～2011 年 10 月）

東京国立博物館の協力のもと文化財データベース（ProtoDB）を基にした古美術品を中心とする博物館資料情報の調査を実施した。東京国立博物館が所蔵する日本・東洋美術を中心とする 23 分野の文化財管理の際に使用している項目について、展示や保存作業などの業務と関連した情報管理について調査を進めた。博物館資料に関しては標準化されたメタデータ規格が存在しているが、東京国立博物館特有の記述方法も存在している。例えば所蔵する文化財は列品と呼ばれており、管理の際には列品名や列品番号という項目名で管理されている。また制作年代の記述についても年代世紀と時代の表記が存在しており、その定義は館内で規定されたルールによって使用されている。列品名称や法量についても 1 つの列品に複数の記述が登録されていることもあり、展示などの業務に合わせたて使用されている。しかし、このような状況は多くの文化財管理施設でも見られることであり、本学大学美術館においても同じような状況は存在している。そのため次年度以降の課題として、より多くの文化財管理施設における管理項目や使用方法について調査を実施し、文化財管理における情報を付与する際の必要となる項目やその状況について情報を収集する事が必要になる。
また、本年度は日本・東洋の古美術を中心とする文化財情報について調査を進めたが、本学には近代の美術品や現代アート作品、デザイン、映像作品、メディアアート等の文化財が存在する。それらをアーカイブするためには、博物館資料のメタデータとは異なる性質を持つメタデータを設計し作成する必要がある。

2011 年度東京国立博物館文化財情報調査分野
日本美術 絵画、書跡、彫刻、建築、金工、刀剣、陶磁、漆工、染織、考古、民族、法隆寺宝物、歴史資料、和書
東洋美術 絵画、書跡、彫刻、金工、陶磁、漆工、染織、考古、民族

(2). 文化財管理における美術品用語事典の作成（科研費申請中）

1 における調査結果からも明らかなように、文化財の法量や名称の呼び名等は各管理施設や研究員、時代によって様々である。その為にデータベース等を活用して各館の情報を共有しようとした際に相互でのデータ共有が困難になる事態が生じている。そこで、本研究では文化財の情報を付与する際の指標となる事典を作成する事を目標とし、博物館資料や本学の美術館所蔵資料の調査とその情報収集を行う。本年度の東京国立博物館を中心とした日本・東洋の美術文化財の基礎調査を基に今後の課題について検討を進める。本研究は 2012 年度の科学技術研究費基盤研究 C に「文化財管理における美術品用語事典の作成」研究として応募している。

(3). 彫刻科石膏取り授業映像アーカイブ（2011 年 11 月～2011 年 1 月）

本学美術学部彫刻科１年次における石膏取り課題授業の映像アーカイブを実施した。石膏取りを専門とする職人の講師（井野先生）を招いての授業が本年度で最終となる為に、職人技術のアーカイブに合わせて今後の授業の参考となる資料制作、学内での技術記録映像の活用を念頭においたアーカイブ作業を行った。記録を行うにあたり、彫刻科教授・講師とともに技術記録の必要な要点を整理し記録方法の検討を行った。今回の映像記録では、授業の記録と講師の技術の記録を行うために、４つの視点からの映像撮影を行った。作業を真上から撮影するための天井設置カメラ、手元固定カメラ、手元カメラ、全体状況を記録するための固定カメラを用いた。また使用する道具の説明も必要不可欠なために別撮影による記録を実施した。編集作業においては全体の授業の流れと技術の状況が把握できるように進めた。記録した映像の利用においては、基礎知識をもった彫刻科の教員・生徒が映像を利用する場合と基礎知識を持たない他学科の教員や学生が利用する場合などでいくつかの使用方法が考えられる。また、編集後の映像資料を閲覧する際の方法についても検討が必要となる。そのため、今後実際に活用を促しながら利用状況のヒヤリングを行い、記録手法や編集方法、利用のための発信方法についてより検討を行う必要がある。

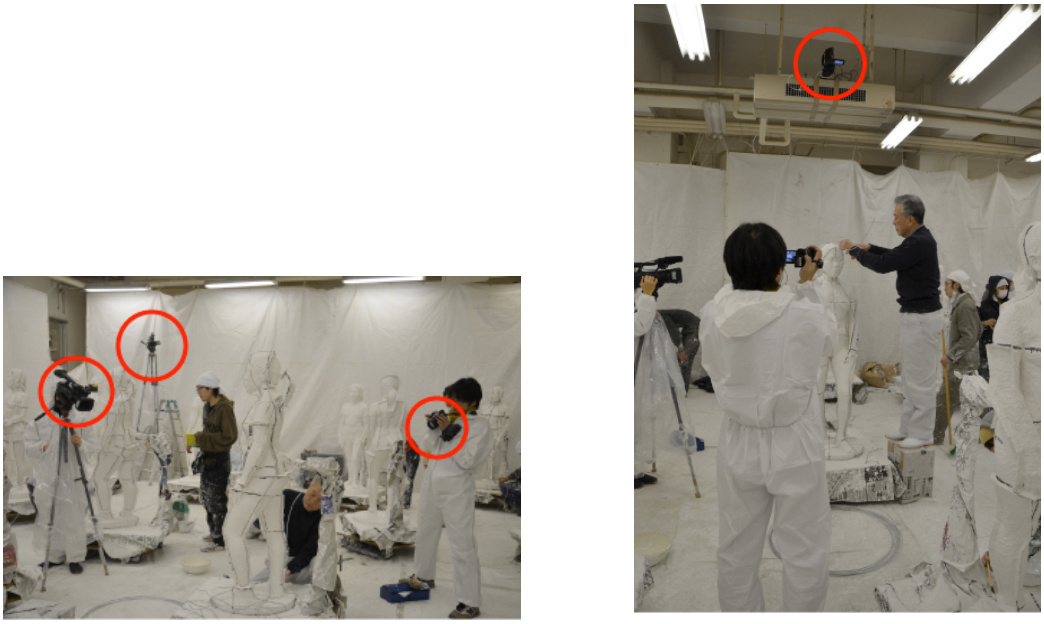
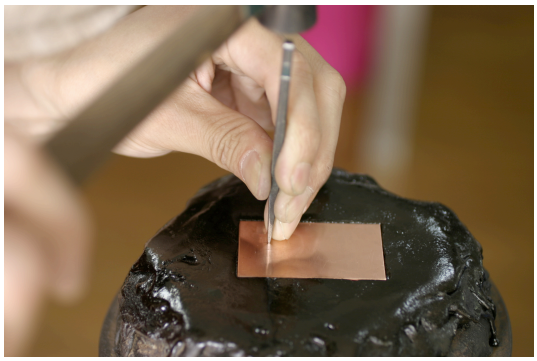


図 3-1 石膏取りの撮影

(4). 東京国立博物館工芸技術記録調査（鹿島一谷氏の彫金技術記録）
（調査期間：2011 年４月～2011 年３月）

本学図書館にて所蔵していた鹿島一谷氏の技術記録フィルムの調査と東京国立博物館に所蔵されている同氏の工芸技術記録の内容について調査し、無形文化財である技術の記録と本学におけるその活用方法について検討を行った。鹿島一谷氏の布目象眼という技術の記録は本学美術学部工芸科の彫金学科や芸術学科の金工分野などにおいて、非常に重要な記録であり授業内でも活用されるべき資料である。しかし、これら資料の収集と公開方法が整理されていないために利用されていないというのが現状である。同じような技術記録の資料はその他にも多く存在している。そのためには、次年度以降に れぞれの関連した記録の収集と保存、その利用方法の調査について進める事が必要である。



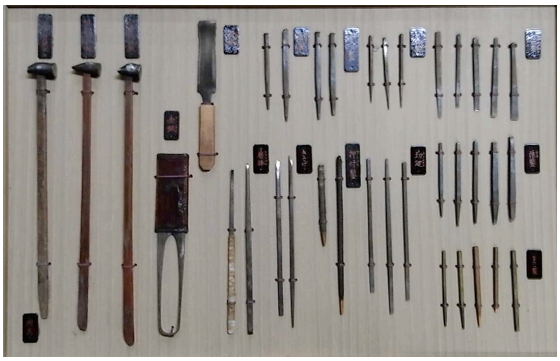


図 3-2 技術記録資料

(5). 東京藝術大学附属図書館所蔵フィルムテレシネ作業に関する調査（2011 年 10 月～）

東京藝術大学附属図書館が所蔵する 82 点のフィルム映像について、その保存と活用を行うためにテレシネスキームの構築と必要予算、今後の活用方法に付いて検討を行った。フィルムの権利関係、コンテンツの内容確認作業を行い、フィルムコンテンツの重要性と他機関に置ける所蔵の有無、今後の活用方法について検討を行った。次年度の計画として数本のフィルムについて実験的にテレシネを行い、学内で参照可能なアーカイブ作業のための計画の作成を実施した。

平成 24 年度

1. 情報発信・システム研究プロジェクト

東京藝術大学が蓄積してきた芸術に関するあらゆる情報を整理し、デジタルアーカイブとして統合的に情報を利用できるシステムを構築することを目的とする。アーカイブしたデータは、本学での教育や研究、創作活動に活用できるよう情報基盤を整備するとともに、学内外に情報を発信し、広く社会で共有するためのシステムの研究を進めている。本プロジェクトの活動内容は、芸術情報を利用するための情報基盤の構築とデジタルデータの活用と知的財産を含む権利処理を研究テーマに掲げる。

プロジェクトメンバー

副センター長 芸術情報センター長 映像研究科教授	藤幡 正樹
芸術情報センター助教	松井 茂
芸術情報センター芸術情報研究員	嘉村 哲郎
教育研究助手	河内 晋平
特別研究員	生貝 直人
アーカイブアシスタント 大学院美術研究科 博士後期課程 芸術学科	太田 智己
アーカイブアシスタント 大学院美術研究科 博士後期課程 絵画科油画専攻	菅　亮平

平成 24 年度の活動計画

1. 芸術資料の調査
   総合芸術アーカイブセンターの各プロジェクトが行った学内調査・収集に係る資料情報の整理を行う。調査の範囲は、美術学部を中心に、収集・調査対象の関連資料には、音楽学部や映像研究科や附属図書館、大学美術館等の附属組織まで本学全体に至る。

2. デジタルアーカイブの基盤研究
   各プロジェクトが作成したデジタルデータや資料情報を統合的に扱える情報基盤を構築する。メタデータ設計やデータ蓄積の方法、アーカイブのための権利処理手続きを研究する。

3. デジタルアーカイブの活用研究
   総合芸術アーカイブセンターの成果として得られた情報は、学内に限定した利用から段階的に学外への情報発信・利用を進める。情報の公開・権利処理に基づいたデータの利用の仕組みを設けることで、学内外の他の組織・機関との情報連携による新たな研究・教育活動を促進・実施する。

2. 平成 24 年度の活動内容

情報システム基盤整備

(1). コラボレートデータ入力システムの検証
複数人で資料情報を入力可能なシステム(Wiki)を試験的に導入してテストした.

mono project 映像資料整理のため、Semantic Media Wiki をセットアップし、動作検証を行った。本システムは、Wiki をベースにしていることから、内容を記述する際には Wiki 特有の記法が必要であることから、コンピュータに不慣れな場合には情報を追記していくことが難しい。そこで、Semnatic Media Wiki には Web フォームのように入力項目を限定してデータを入力できる方法があることから、本手法の採用を検討した。しかし、入力したデータを再利用しようとした場合(エクスポート等)に、Semantic Media Wiki 特有のデータが追記されることが分かったため、不要な情報が追記される場合の対処方法等を考察した上で、25 年度に映像データの公開や情報追記に関して検討を進めていく。

(2). 統合情報データベースサーバの検証、シソーラスや用語辞典、デジタル化された資料に関するデータを蓄積していくためのデータベースサーバの構築と動作検証を行う。
　各データを Linked Data として扱うための RDF データベースのセットアップを行った。RDF データベースには、Ontotext 社の OWLIM を利用している(http://www.ontotext.com/owlim)。現在、学内の仮想サーバに導入しているが、メンテナンス等運用を考えた場合に、ハードウェアが不要な Cloud 版の利用を含めた今後のデータ管理について検討が必要である。

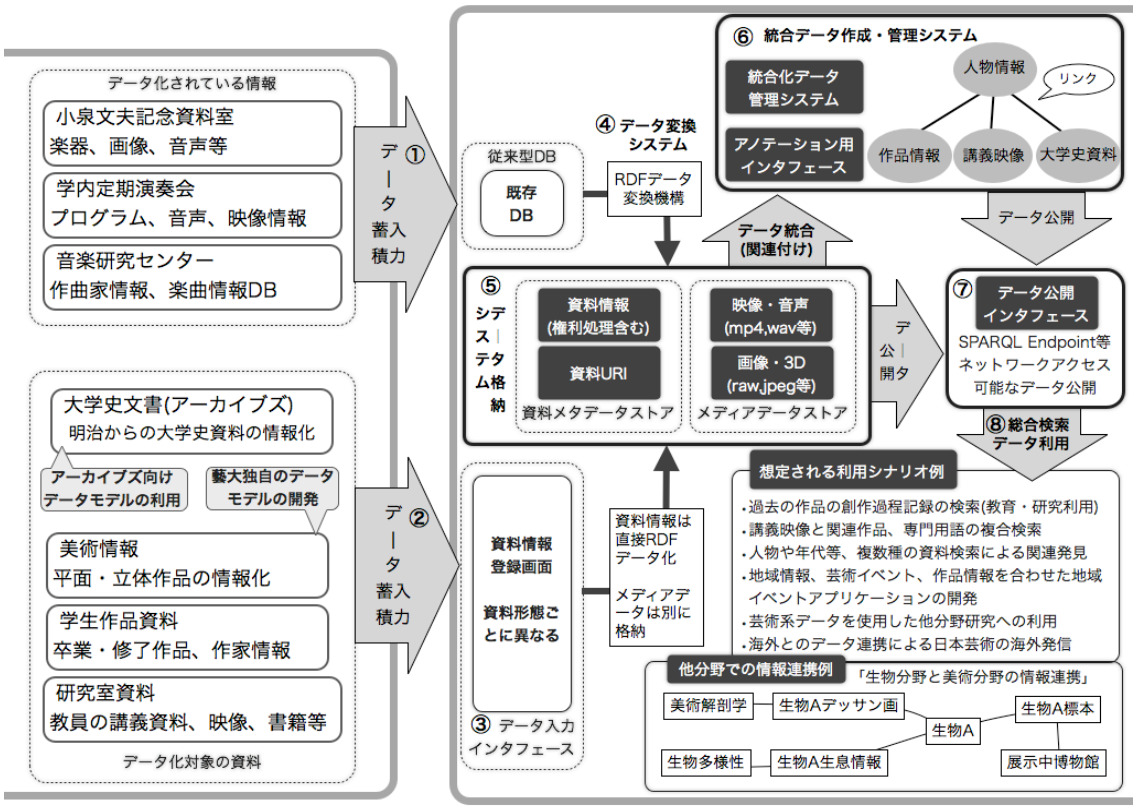
(3). データ変換プロセス
既存のデータ及びデータベースから統合情報データベースに変換するためのプロセスを確立させる。(データ作成時の資料属性項目の検討を含む)
本計画事項は 25 年度に持ち越す。

(4). 映像・音響アーカイブのためのツール及び活用の検討、24 年度前半は映像のメタ情報とデータを組み合わせ、保存や発信方法を検討し、必要な情報システム基盤を年度後半で整備する．また、音声のみのデータの取り扱いも同列に進める。

24 年度は、映像データの発信・公開を実施した。音声データ及びメタデータに関する事項は 25 年度以降に持ち越しである。報告内容の詳細は「GEIDAI MUSIC ARCHIVE サイトの構築」を参照。

総合芸術アーカイブシステム全体構想図

将来、統合システム構築のために外注するためのシステム図を作成する。情報の作成・統合・利用・発信と、作成から運用までを考慮したシステムを検討している。



本内容は研究課題応募に際し、作成したものであり総合芸術アーカイブシステムの構想図案である。
総合芸術アーカイブシステムは、大別して 2 つのカテゴリ、8 つのプロセスに分けられる。A では総合芸術アーカイブセンターを中心とした芸術系、人文系研究者による資料情報の整理・データのモデル化を進め、B では情報系の研究者を中心に情報システム化の研究を行う。各プロセスの内容は次の通りである。

① 既存の DB 上のデータを Linked Data 形式で扱うためのデータモデルの設計と検討を行う。

② 東京藝術大学内で収集・調査した芸術資料のデータ化、デジタル化を行うとともに、各資料形態に沿ったデータモデルの開発を行う。大学史文書においては、アーカイブズの分野を参考に進め、芸術資料については音響、映像、平面を中心に最終的には立体的な資料を含めた、本学で扱う芸術系の資料が総合的に扱えるモデルを検討する。

③ ①と連動した仕組みの部分であり、既存 DB からの Linked Data 形式のデータ変換を行う。

④ データ入力インタフェースの研究・開発では、収集した資料を Linked Data 形式で扱うためのデータ入力・登録のシステムである。実際にデータ入力する芸術系・人文系研究者を対象にしたメタデータやタグ付け等の情報を管理できる仕組みの研究を行う。

⑤ データ格納システムの開発。各資料情報を Linked Data 形式で格納するデータストアである。本システムでは、資料情報(メタデータや内容)と付随するメディアデータの管理を行う。管理には、②や④と組み合わせて権利処理に関する情報を付与し、データの利用範囲や権利処理に関するコントロール機能の情報システム化を試みる。

⑥　統合データ作成・管理システムの研究・開発。本システムは、⑤で管理される資料情報に関連性があった場合には、各資料情報の内容を関連づけることで情報を芋づる式に検索することや直接データを引用することを可能にする。このとき、⑤に格納された資料自体に関連情報を記述した場合、元の資料情報と統合化のため追加された情報との管理が複雑になると予想されることから、個別の資料 URI とは別に、統合データ用 URI と管理システムを設けることでデータの管理を棲み分けする。本プロセスでは、統合化データの作成およびその方法について研究し、システムへの実装を行う。

⑦　データ公開インタフェースでは、①〜⑥で作成されていたデータを公開するためのシステムの開発を行う。Linked Data 形式のデータ公開には SPARQL Endpoint 等を用いたシステムが考えられるが、その他の方法を用いたネットワーク上でのデータ利用方法の検討も行う。

⑧　データ利用においては、総合的な検索が可能なシステムのほか、ネットワーク上に公開したデータを用いた芸術教育・研究の計画、並びにサンプルアプリケーションの開発を行う。

資料アーカイブ

他の３つのプロジェクトは、原資料のドキュメンテーション及びデジタル化が中心であるのに対し、本プロジェクトでは学内での原資料の発掘を実施する。
芸術資料調査・収集とデジタル化(芸術情報基盤の構築)を参照。

資料情報基盤整備

資料データへの検索タグ付や資料情報を整理するためのシソーラス作成等の作業のスキーム検討していく。今後は、他のプロジェクトもそのスキームに沿って、資料情報の基盤整備を進めて行く。

本年度は、1.美術用語整理研究（基盤研究 C:河内晋平)、2.日本画用語辞典、3.演奏会メタデータの検討、4.東京芸術大学美術学部卒業・終了制作作品カタログデータ整理を行った。1、2、3 は各報告頁を参照。

3. 芸術資料調査とデジタル化(アーカイブアシスタント活動報告)

報告: 教育研究助手 河内晋平、アーカイブアシスタント 太田智己

昨年度に引き続き、美術学部内の資料の調査・収集を中心に作業を進めた。各研究室を尋ねながら本プロジェクトの説明と研究室が持つ資料の調査を行い、授業や講義の記録音声テープや動画記録資料、科学技術研究費などをはじめとする研究成果資料、芸大美術館や保存修復科での活動の記録資料などについて保管状況や記録メディアの種類と量などの情報を得た。今年度はそれらの資料をどのようにアーカイブしていくのかを検討し、作業が着手出来る所から実際のデジタイズ作業や整理作業を進める。各芸術分野や研究室のこれまでの活動と慣行を最大限に活かしつつ、アーカイブ作業による資料の保存と活用が行なわれるためのルールと手続を定めていく必要がある。以下、本年度の活動で調査・作業した内容について報告する。

3.1. mono project

本プロジェクトは、mono project の記録映像資料のデジタル化作業とその活用方法について調査・作業したものである。

(1). 資料の調査（記録メディア種類、内容、保存状態など）

(2). デジタイズ作業（保存状態や保存メディアを確認し、作業手順やコーデックの確認）Monoproject CD-R および CD-RW 資料内の動画データの変換詳細は次の通り

番号	作業内容
18	エクセルデータなのでそのまま
19	動画データはないので、そのまま。
20	interview フォルダ内の画面 320×240 サイズのデータを MPEG2 形式に変換
21	butsu フォルダと interview1+2 フォルダ内の画面 320×240 サイズのデータを MPEG2 に同画面サイズに変換
22	動画ファイルは無かったのでそのまま。
28	gijido、kotebako、natsume、suzuri いずれのフォルダ内の画面 320×240 サイズのデータを MPEG2 に同画面サイズに変換。
29	data 内フォルダにある movies 内の画面 320×240 サイズのデータを MPEG2 に同画面サイズに変換
30	movies フォルダ内の butsu フォルダと intervie フォルダの中の動画データを MPEG2 画面 320×240 サイズに変換
31	ファルダ内の動画データを MPEG2 に同画面サイズに変換。※half サイズのものは除外
	番号 32,33,34,35,36,76,77,78,79 はファルダ内の動画データを MPEG2 に同画面サイズに変換。※half サイズのものは除外
80	gijido、kotebako、natsume、suzuri フォルダ内の動画データを MPEG2 に同画面サイズに変換

(3). 公開に向けた情報整備

映像資料に関して、動画視聴サイトの選定（youtube、vimeo、wiki 等）と試作し、動画とともに保存されていたテキスト資料、展覧会情報など付加資料を整理した。

動画テープ名	分野	作家名	関連人物	作品名	動画時間	動画説明（200字）	キーワード	権利、保有者	参考文献
mono project tape1	漆工	松田権六（1896-1986）／増村紀一郎（1941-）／増村益城（1910-1996）	1／横溝廣子／藤幡正樹	増村益城《行程手板》（美術学部工芸科）／松田権六《草花鳥獣文小手箱》（大学美術館）／松田権六《鶴蒔絵硯箱》（大学美術館）／松田権六《鶴鵜文大盃》（大学美術館）／《国会議事堂御便殿行程見本》（大学美術館）		漆芸家・増村紀一郎のインタビュー映像。東京芸術大学と国立情報学研究所による共同研究「ものプロジェクト」（2001～2003年）に際して撮影された。前半部では、増村が《行程手板》を手に取りながら、漆工の基本的な工程と技法を概説する。後半部では、松田権六の実作品を前に、増村がそれらの技法、美術史的背景を解説する。増村は松田と直接の交流があり、松田の人物像、制作姿勢について、増村が回想、口述する場面も含まれる。	日本／近代／現代／美術史／工芸／漆工／美術教育／技術記録／オーラルヒストリー／東京美術学校／東京芸術大学／ものプロジェクト	大学美術館	・東京国立近代美術館ほか『人間国宝松田権六の世界』展図録、2006 年 ・東京芸術大学大学美術館『退任記念：増村紀一郎漆芸展：漆の美と技』図録、2008年 ・松田権六『図案日誌』、総合工房、1977年 ・松田権六『うるしの話』、岩波文庫、2001年 ・mono project関係パンフ

図 3-1 付加情報を追加した映像資料情報

24 年度は、作業を進める中で、動画内に残されていた職人の方の情報を探しているというご遺族から連絡をいただく機会を得た。その職人の方の生前の資料は今回調査した動画に収められていたインタビューの内容が中心になっており、非常に貴重な資料のアーカイブが実施出来ている事が確認された。今後、同様に多くの方に活用をして頂く為に、コンテンツの紹介（公開）をより進めていく必要性を感じている。次年度以降は、これらの活用に向けた研究・作業を進める予定である。

3.2. 美術学部資料調査報告

(美術学部工芸科陶芸専攻、島田文雄教授の研究資料整理及び保存修復科作業カルテのアーカイブに関する調査)

今回の調査では、美術学部工芸科陶芸専攻島田文雄教授の研究「日本、中国、韓国の陶芸分野に於ける製作技法の変遷に関する比較研究-伝統技法と現代技法を中心に-」（(財）平和中島財団研究助成・芸術研究振興財団助成）の資料調査・整理作業を行なった。画像データが保存された CD-R,DVD-R の状態確認やデータの移動作業、４冊のファイルにまとめられている調査記録紙資料のスキャン作業を行なった。

窯道具

分類	窯道具		
	JAPANESE	KOREA	CHINESE
読み方	さや、こう ・えんごろ ・まるさや ・とこえ	Gabbu, Gabbaru, Dogabbu, Newagabbu, Kab bal ・Togabbu（えんごろ） ・Zunkun Gapparu（まるさや） ・Newagappu（とこえ）	Xia bo
名称	さや、匣 ・エンゴロ ・丸匣鉢 ・床エ	匣、匣鉢、匣、耐火匣 ・土匣（えんごろ） ・耐火熬（とこえ）	①②匣鉢 ③M 字形さや ④⑤さや
使用時期			②1200 年くらい。宋時代。 ③唐～北宋時代。 ④唐時代。
記録場所			②南宋官窯遺址。蛇窯。 ③衛花芯窯址（かかしん）。上林湖越窯遺址。 ④⑤上林湖。
出土/保管場所	匣、登り窯の引き出し色味。		①土は「とも土」のよう（細かい）。釉が内、外共にかかっている。内は釉をぬったような跡がある。薄い緑・水色。 ③窯；全長 40m。燃料；竹、松。

図 3-2 調査記録資料の原本と内容

芸大保存修復科の作業カルテのアーカイブについても調査依頼を受け、保存状態や記録メディアについての聞き取り調査を行なった。今年度は実際のアーカイブ作業についての計画を作成していく予定である。

4. 油画技法・材料研究室資料調査(アーカイブアシスタント活動報告)

報告:アーカイブアシスタント 菅亮平

4.1. 活動概要

情報発信・システム研究プロジェクトにおける美術学部各学科内資料調査として、美術学部 油画技法・材料研究室の資料の発掘、整理及びそのデジタル化

4.2. 活動の経緯

アーカイブセンターの情報発信・システム研究プロジェクトの中で、今年度はその第一段階としての「ドキュメンテーション(資料化)」と「デジタル化」を重視した取り組みのなかで、自分のタスクを探すことから始めた。本学が抱える既存資料や潜在している原資料の全体を網羅的に発掘することは難しいため、局所的にアーカイブのためのモデルを作っていく指針が打ち出された。所属する油画技法・材料研究室は、絵画科のなかでも絵画を支える物質面での基礎研究を含め、創作にまつわる素材や技法を体系的に研究並びに指導する役割をもっており、研究内容の記録化と資料化については意識が高い性格を持っている。また第一研究室教授の佐藤一郎先生は1977年(～79 年:非常勤講師)以降現在に至るまで教員を勤めており、25 年度で 36 年に及ぶ教員生活を終え退官を迎えることになっている。本研究室では、佐藤教授の退任展におけるその業績報告のために様々な資料をデジタル化並びにアーカイブしていくことが 24 年度初頭から重要なタスクとなっていた。また 2000 年前後以降の研究室の関連データ一切の整理及び管理状況が問題になっており、デジタルデータの基本的な取り扱い方の面での意識改革が話題に上がってきている状況でもあった。

6 月 20 日付けで美術学部の各研究室に「美術学部学科内資料調査について調査研究のお願い」が配布される前後に、所属研究室に総合芸術アーカイブセンターの目的や指針について紹介し、教育を目的とした資料の活用とアーカイブ化を視野に入れた上で協力を仰ぎ、佐藤教授の快諾を得た。また美術学部の絵画系の中で、研究室単位の資料のアーカイブ化のモデルケースになることを目的とした。

7 月から後期までの間、古い 4×5 フィルム、35mm フィルムの整理とデジタル化が進められる一方で、映像及び音声資料の発掘と整理を主に行ってきた。また 25 年度の出版に向けて絵画技法とその素材全般を体系的に紹介する技法書の編纂が進められており、そのため様々な絵画技法や素材に関しての資料が作成されてもいた。

それらの状況を総括した上で、発掘した映像資料と音声資料のコンテンツに焦点を当て、発掘したテープ、VHS、ミニ DV などの資料を整理していく作業を今年度終盤から行っていった。また 2005 年から 2007 年の CREST(戦略的創造推進事業)の「デジタルメディアを基盤とした 21 世紀の芸術創造」プロジェクトの一環で行われた絵画実習や素描演習の映像資料(デジタル化済み)も見つかり、これらの中にも今後活用しうるコンテンツが確認されている。

4.3. 主な画像・映像・音声資料内訳及び整理状況

1. ネガフィルム及びポジフィルム資料(2013 年 1 月 8 日現在、計 462 枚)
   佐藤一郎教授の過去作品の複写画像、油画研究室の授業風景やイベント記録、「絵画技術入門―テンペラ絵具と油絵具による混合技法(1988 年 美術出版社)」の編纂のための実習資料の画像など
   補足: Epson GT-X970 を用いて実寸サイズで 1200～2400dpi の高解像度でデジタル化、及び補正作業
   →リスト、内訳は別紙参照(技材フィルムリスト)

2. アナログメディアでの映像及び音声資料(2013 年 3 月 14 日現在、計 145 本)
   ミニ DV／６５本、テープ／４８本、VHS／30 本（内ラベル無し四本)、Beta／２本
   佐藤一郎教授による「絵画技法史材料論」の 2006 年度と 2012 年度の通年講義記録、坂本一道氏(前油画技法・材料第二研究室教授)による 2000 年度の「絵画技法史材料論」の通年講義記録(全 9 本)、森田恒之氏による博物学的観点からの絵画材料論の講義記録(全 6 本)を始め、集中講義、工場見学、シンポジウム、ギャラリートーク、テレビ出演の録画、講義録、授業に使ったと思われる教材、作家へのインタビューなど。
   →リスト、詳細は別紙参照(技材映像リスト)

3. CREST での実験映像及び実習記録ならびにシンポジウム記録動画(計 215 本)
   CREST「デジタルメディアを基盤とした 21 世紀の芸術創造」プロジェクトにおける、各種実験映像、また東京大学と東京工業大学のプロジェクト参加者を対象とした各種絵画実習の記録映像、また同プロジェクトに関連した講義、講演、シンポジウムの記録動画など。
   →リスト、詳細は別紙参照(CREST 映像リスト)

4.4. まとめと今後の課題

発掘した映像資料及び音声資料のうちデジタル化されていないものに優先順位を付け、順次デジタル化の作業を進める。映像コンテンツには、油画科の一年次の学生必修の「絵画技法史材料論」の通年の授業記録も含まれ、絵画の基礎知識を、絵画材料学、絵画技法史の側面から考察される一連のレクチャーは、教育的な資料価値が高いと考えられる。またキャンバス作りや絵画の下地実習の記録などは、アーカイブ化されれば絵画の創作に携わる人間にとっての活用性は高い。

また、同分野における第一人者である坂本一道氏や森田恒之氏の講義記録なども残っており、それらを総括すれば絵画創作に必要とされる様々な技能や基礎的な概念の習得の一助となりうる資料として紹介できると考えられる。これらの映像コンテンツをどのように編集し、どのような形でアーカイブ化されることが望ましいのか、またその意義をどのように共有していくのかについて、など。今後具体的な展望のもと作業を進めていくことを検討すべきなのではないかと考えている。

4.5. 画像・映像・音声資料内訳及び詳細

主な映像及び音声原資料

1. 2009 年
   「佐藤一郎 芸術学科対象講義」講義記録動画　ミニ DV3 本
2. 2006 年「技材論」絵画技法材料論授業記録動画(地塗り実習を含む)　ミニ DV16 本　注：一部デジタル化
3. 2007 年「フナオカ集中講義」講義記録動画　ミニ DV10 本　注：1992 年 「キャンバス工場見学記録(音声)」
4. 2003 年「Art Walking」テレビ出演記録動画　ビデオテープ 4 本　注：その他テレビ出演テープ多数
5. 2003 年「アフガニスタン視察記録」プロジェクト記録動画　ミニ DV9 本
6. 2001 年「坂本一道退官展」展示風景及びレセプション記録動画　ミニ DV5 本
7. 2001 年「技法材料集中講義」坂本一道・歌田真介・佐藤一郎三者による講義記録　ミニ DV2 本
8. 2000 年「材料と表現」 絵画技法材料論授業記動画(下地実習を含む) ミニ DV9 本
9. 1991 年「レオナルド・パッセリ氏 -ルネッサンス絵画とその修復法-」講演動画　カセットテープ 2 本
10. 1983 年「森田恒之先生集中講義」音声記録動画　カセットテープ 6 本
11. 1980/1981 年「修復家インタビュー」調査記録　カセットテープ 6 本
12. 1980 年「伊藤幸寿先生集中講義」講義記録音声　カセットテープ 5 本
13. 1977 年「寺田春弋特別講義 –油絵のアクチュアール-」学部生対象講義音声記録　カセットテープ 4 本

主なデジタル映像資料(CREST における絵画実習記録映像より)

14. 2005 年「CREST 第 2 回油絵実習及び講評会」佐藤一郎による実習参加者の静物画講評風景動画
15. 2005 年「デッサン教室」佐藤一郎と実習参加者の人物クロッキー制作風景動画
16. 2007 年「アート例会」技法材料研究室での佐藤一郎・藤幡正樹らによる絵画勉強会・素材研究会(動画)
17. 2006 年「岡崎乾二郎ワークショップ」同氏によるワークショップ並びに講義風景動画
18. 2005 年「山形恭子 ART 例会」同氏と藤幡正樹による勉強会風景
19. 2003-2006 年「CREST お絵描きロボット」ロボットによる描画実験風景動画多数
20. 2006 年「描画チャット実験」子供によるタブレット端末への描画実験風景動画
21. 2005 年「科学と芸術の融合点を探る」藤幡正樹らによるシンポジウム風景動画

主なポジフィルム及びネガフィルム(デジタル化作業済み)

22. 1987-1988 年「新技法シリーズ 絵画技術入門」のための図版画像
23. 1988 年「新技法シリーズ 絵画技術入門」のための掲載作品画像多数
24. 佐藤一郎作品撮影画像多数
25. 油画技法・材料研究室 OB/OG の作品画像多数
26. 油画科各種イベントの記録画像

5. 美術用語の整理

5.1. 工芸用語整理研究（基盤研究 C）

報告:河内 晋平

同研究の目的は、日本の文化財について使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成する事である。現在、文化財管理における資料名称や品質形状等の用語については、各文化施設の学芸員や研究者により様々な表記・使用方法が存在している。そのため、複数施設間で情報共有する際は、互いに使用する用語の確認が必要な現状にあり、1 つの資料情報を共有するだけでも非常に多くの時間を要している。このように、文化財管理における美術品にどの用語を適用するか、俯瞰的に参照出来る典拠情報の存在は非常に重要な基盤になる。また、各施設で運用が広まっている文化財管理データベースの開発や改良の際にも情報共有の基となる用語の典拠情報があることは非常に有益である。

24 年度は用語の収集と整理の作業を行なった。分野としては金工・ガラス・絵画・書跡・考古資料・歴史資料・建造物である。2013 年 3 月時点では約 7,600 語の収集と整理作業を完了している。収集の際には用語、技法、分野、員数、素材というカテゴリを設けている。用語の収集元としては、東京藝術大学大学美術館収蔵品目録、東京国立博物館・奈良国立博物館の収蔵品目録やデータベース、文化庁監修国宝・重要文化財大全等を使用した。

	A	B	C	D	E	F
117	漆工	品質形状	黒漆	くろうるし	x	
118	漆工	品質形状	黒漆塗	くろうるしぬり	x	
119	漆工	品質形状	黒塗	くろぬり	x	
120	漆工	品質形状	蒔絵	まきえ	metal powder sprinkoed lacquer decoration	
121	漆工	品質形状	朱漆	しゅうるし	x	
122	漆工	品質形状	朱塗	しゅぬり	x	
123	漆工	品質形状	赤漆塗	あかうるしぬり	x	
124	漆工	品質形状	堆黒	ついこく	x	
125	漆工	品質形状	堆朱	ついしゅ	red lacquer carving	
126	漆工	品質形状	平塵	へいじん	gold-dust lacquer decoration	
127	漆工	品質形状	平文	ひょうもん	imbedding of sheet-metal cutout	
128	漆工	品質形状	螺鈿	らでん	mother-of-pearl inlay	
129	漆工	品質形状	螺鈿平塵飾		x	
130	漆工	品質形状	＝漆	きゅうしつ	x	
131	漆工	品質形状	角赤	すみあか	red-cornered box	
132	漆工	品質形状	鎌倉彫	かまくらぼり	Kamakura carving	

図 5-1 24 年度に整理した用語一例

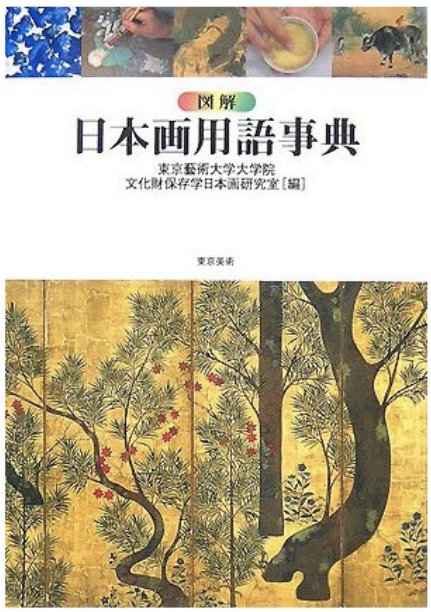
25 年度は収集した用語の整理作業を引き続き進めながら、新たに追加されていく用語にも対応したシステム構築を検討する。その際に、どのように活用すべきかについて研究者や学芸員、大学職員などの要望を吸い上げながら検討を行う予定である。システム構築に関しては、研究分担者の村田良二氏と連携研究者の嘉村とともに進めている。

5.2. 日本画用語辞典第 3 版の RDF データ化

報告: 芸術情報研究員 嘉村哲郎

日本画用語辞典について

本用語は、東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室が出版する書籍をもとに、用語をデータ化し、デジタルデータとして扱う事でネットワークやモバイル端末でのアプリケーションとしての利用・検討すすめているものである。本辞典は、日本画に関する用語が 700 語程収録されており、それぞれの用語は大きく分けて画風、流派、素材、道具、表現技法、装潢、文化財修理、烈、保存科学、その他に分類されている。本プロジェクトでは、これらの用語をコンピュータ・ネットワーク上で扱えるようにすることで、用語を使用したアプリケーションの開発や資料管理システムから用語を参照することで表記揺れや用語の解説など、資料整理や情報公開の際の基盤情報として提供できると考えている。具体的には、ネットワーク上で用語を扱うに当たり、近年活発に利用が進められている情報共有のためのフレームワークである RDF(Resource Description Framework)を用いて用語をデジタル化し、ネットワーク上で扱うことを実験的に進めている。



データ化(RDF)

本用語は、書籍媒体を元にしている。東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室では、書籍の出版に当たり、解説などのテキストを Word 文書ファイルが管理していることから、用語を整理しやすいように Word 文書から Excel 上にすべて移行する作業を行った。この際、用語が記載されているカテゴリおよびサブカテゴリが判別できるようにした。具体的には、用語、ひらがな読み、ローマ字読み、解説文と特定の用語が他の用語に関連がある場合は関連語の表記、特定の用語と他の用語に対の関係が存在する場合は対を記載した。

用語(日本語)	用語(読み)	用語(ローマ字)	解説	関連1	2	3	4	対	ジャンル
壁画	へきが	hekiga	壁面にじかに描かれた絵画のこと。墳墓や建築物などの壁面装飾として発展し、天井や柱に描かれたものも含む。墳墓に描かれる場合は石にじかに描かれるものや漆喰*などで下地処理をして描かれるものもある。7世紀後半から8世紀前半にかけて制作されたと推定されるキトラ古墳壁画や高松塚古墳壁画は輻湊な筆遣いで四神や人物を表し、当時の美意識を伝える貴重な遺品である。また法隆寺金堂壁画のように土壁*に白土*を施して描かれたものや寺院などの板壁に描かれたものも伝存する。	障屏画	障壁画	板絵	岩石		画風
障壁画	しょうへきが	shohekiga	襖や衝立障子などの障子紙*と壁に貼り付けられた壁貼付け絵の総称。壁にじかに描かれたものは壁画*といって区別する。日本建築の室内装飾として独自の発展を遂げ、特に桃山時代の築城にともない豪華絢爛な障壁画が制作された。寺院建築などにも適用され大画面の絵画を空間的に配することに成功し、日本美術の重要な一分野を築いた	障屏画					画風

画風 | 流派 | 素材 | 道具 | 表現技法 | 装こう | 文化財修理 | 烈 | 保存科学 | その他 | +

これらをもとに、データモデル案を作成した。用語の関係性を定義する語彙には、シソーラス等の作成に適した SKOS(Simple Knowledge Organization System: http://www.w3.org/2009/08/skos-reference/skos.html)を用い、各概念の上位・下位および用語間の関連を持たせる構造にした。最上位の概念を日本画用語とし、各用語が属するカテゴリは skos:hasTopConcept とした。その下位層に属する用語の上下の識別にはそれぞれ skos:broader と skos:narrower を用い、関連語には skok:related とした。また、本辞典には、対義語の概念の定義があるが、SKOS の語彙ではこれを表現できないことから、独自の語彙 gd:antonym を定義した。

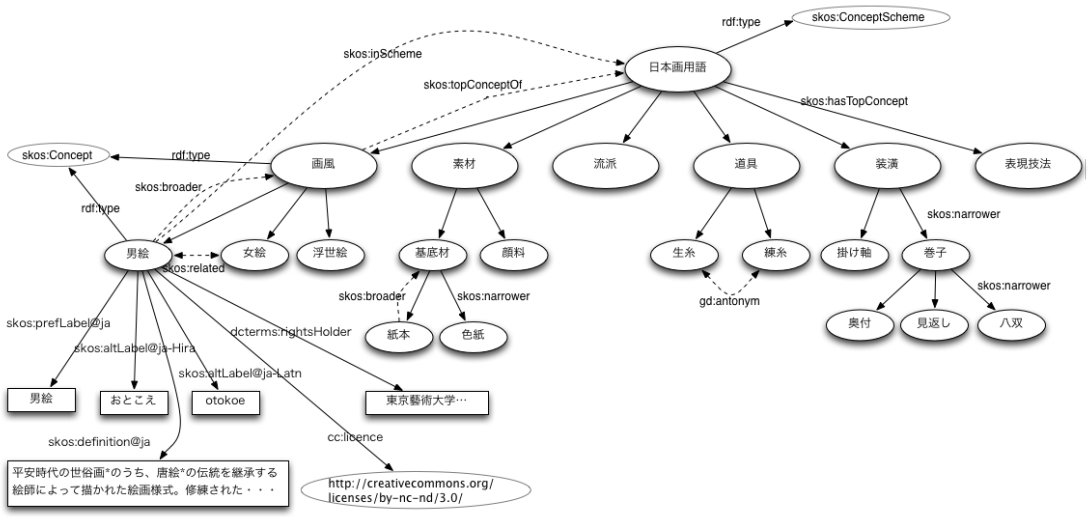


図 5-2 日本画用語データモデル（案）

	RDF 語彙	値の型
データタイプ	rdf:type	データタイプを定義するリソース(URI)
識別子	dcterms:identifier	数字
用語（日本語）	skos:prefLabel@ja	文字列(リテラル)
用語（ひらがな）	skos:prefLabel @ja-Hira	文字列(リテラル)
用語（ローマ字）	skos:prefLabel @ja-Latn	文字列(リテラル)
解説文（日本語）	skos:definition@ja	文字列(リテラル)
上位カテゴリ	skos:broader	各用語のリソース(URI)
下位カテゴリ	skos:narrower	各用語のリソース(URI)
関連語	skos:related	各用語のリソース(URI)
対義語	gd:antonym	各用語のリソース(URI)
著作権	dcterms:rightsHolder	権利保持者を識別するリソース(URI)
用語利用範囲	dcterms:license	クリエイティブコモンズライセンス (URI)
用語のバージョン	gd:version	文字列(リテラル)
リファレンス(原本)	dcterms:reference	国立国会図書館の書誌情報への URI
画像	foaf:image	画像の URI

25 年度以降の課題

日本画用語の RDF データ化は試験的に行っているもので、現在のところ不完全な要素が含まれる。具体的には、用語の解説文中に用語辞典に含まれる用語が登場するが、これらの扱い方について検討中する必要がある。画像については現在のところ存在しない。しかし、原著には素材の扱い方法等、手順を画像と解説付きで紹介している項目が複数あることから、これらの取り扱い方法について検討していく必要がある。また、本用語辞典には別冊として英語版が存在する。英語版については、将来的にデータ化を進めて行くことを検討しているが、文字データの所在や英語版作者との調整が必要であることから時間を要している。25 年度以降は、実際に RDF データをシステムに実装し、ネットワーク上での用語辞典の利用をめざす。

6. GEIDAI Music Archive サイトの構築

報告: 芸術情報研究員 嘉村哲郎

本サイトは、音響・映像データ研究プロジェクトが進めている演奏会に関する映像や音響データを公開していくためのサイトである。24 年度は、実験的に博士審査会に限り、映像の公開を開始した。本稿では、演奏会サイトに関する構造について報告する。なお、演奏会データ公開に関する映像の撮影・編集等については音響・映像データ研究プロジェクトを参照されたい。

6.1. 演奏会情報の Web サイト開発

藝大ミュージックアーカイブ(GEIDAI Music Archive): http://arcmusic.geidai.ac.jp の特徴は、データ形式の扱い、付帯情報の入力、映像データの公開に対し、それぞれを扱う場合に、担当者がコンピュータに慣れていなくても共通の内容・形式で情報を容易に公開できるしくみを検討し、開発を行った。サイトの開発に際し、情報発信・システム研究プロジェクトによる基盤構築・開発、サービスの選定を行い、映像データの登録や情報編集については音響・映像データプロジェクトが行った。

システム環境は次の通りである

① システム OS: FreeBSD9.1
② 開発言語: PHP
③ Web サーバ: Nginx 1.2
④ CMS: Wordpress3(カスタムテーマ、カスタムポスト利用)
⑤ データベースエンジン:MySQL(Wordpress および演奏会データ)
⑥ 公開用映像ストレージ: Vimeo

6.2. 外部ストレージサービスの利用

映像データの公開にあたり、動画データを設置するためのストレージに外部のデータストレージサービスを利用している。公開用の映像データを学外のサービス(Vimeo)に保存することにより、重複してデータを持つ必要がないことから、学内のストレージ利用率を削減できるという利点がある。また、公開用の映像は Vimeo のサイトから直接読み出すことで、本学のネットワーク回線を圧迫することなく、利用者に対して快適な視聴を提供できる点も特徴としている。

これまでに、演奏会映像に関するメタデータは、FileMaker および EXCEL シート上で管理してきている。近い将来、統合的な検索ができるようにメタデータの統合を検討していることから、博士審査演奏会の映像公開については、従来通りに総合的な情報は EXCEL シート上で管理し、公開可能な情報は基本的な情報のみを利用して公開している。その際、公開した内容を後から取り出して再利用ができるように、情報を項目単位で取り出せるように構築した。基本的な情報とは、曲目単位に分割されている映像データのうち、タイトルを Vimeo 上で管理し、名前、演奏会概要の項目は CMS 上で管理している。

アップロードされた映像データは、Vimeo サイト上で曲単位に管理される。さらにチャンネルと呼ばれる機能を用い、演奏者単位にプレイリストを作成している。

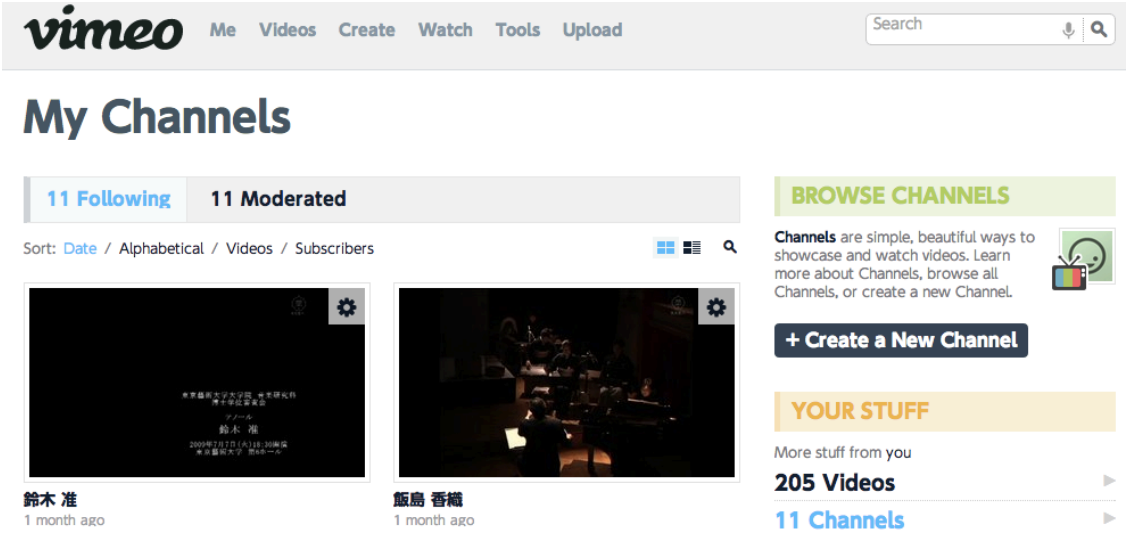


図 6-1 vimeo 上にアップロードされたデータ

Vimeo の管理画面では、映像データの並び替えや削除が容易にできるようになっている。本サービスを利用する以前は、映像データの情報を逐次テキストデータに変更を加えていたことから、マウスのドラッグで追加や順番の調整をできることは作業者の負担が大幅に削減されることになった。下図はあるチャンネルの動画設定画面。

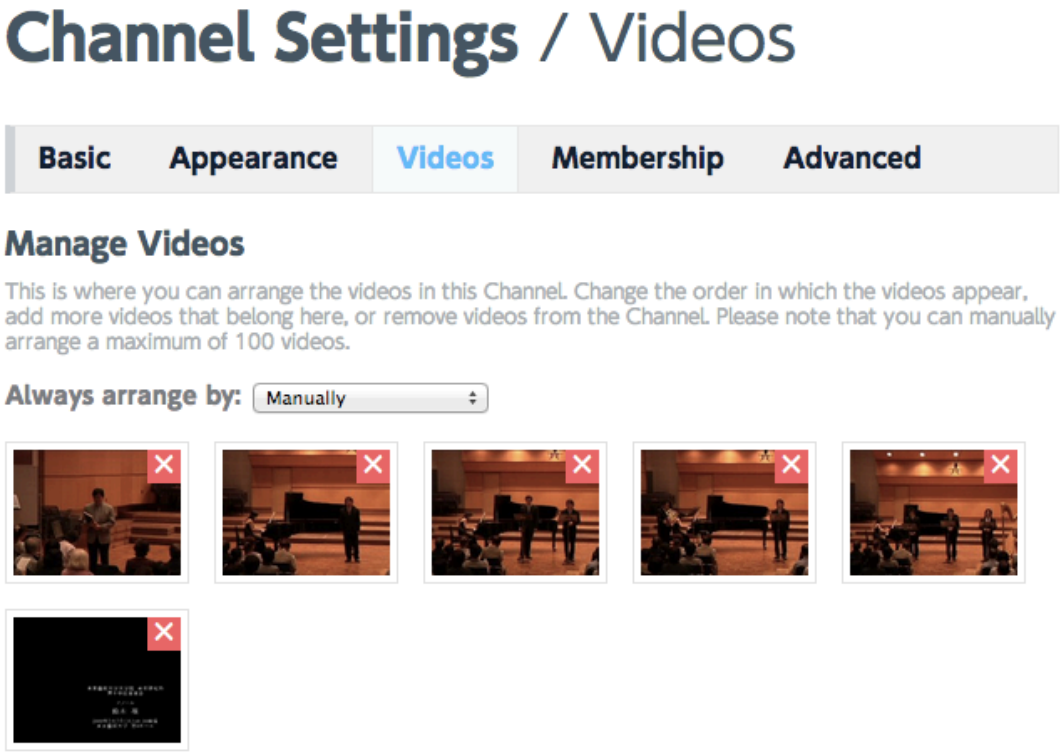


図 6-2 vimeo の管理画面

Vimeo 上に登録したデータは、映像データのアドレスやサムネイル画像、タイトル、キャプション等を API 経由で利用する事ができる。公開用のサイトでは、Vimeo から抽出したデータと、CMS 上で管理するための 2 種類の情報を使用してサイトが構成されている。下記はあるデータの情報を API 経由で読み出し、XML 形式で表示させた例である。API は、XML のほかに PHP、JSON に対応している(参考: https://developer.vimeo.com/apis)。

```
<id>53400209</id>
<title>佐藤 淳一 [1/4]</title>
<description>ルチアーノ・ベリオ Luciano Berio&lt;br /> 《シュマン IVb》Chemins IVb per sassofono soprano e 11 archi (1975/2000)</description>
<url>http://vimeo.com/53400209</url>
<upload_date>2012-11-13 02:50:07</upload_date>
<thumbnail_small>http://b.vimeocdn.com/ts/368/811/368811861_100.jpg</thumbnail_small>
<thumbnail_medium>http://b.vimeocdn.com/ts/368/811/368811861_200.jpg</thumbnail_medium>
<thumbnail_large>http://b.vimeocdn.com/ts/368/811/368811861_640.jpg</thumbnail_large>
```

6.3. CMS を利用した情報公開

演奏会映像の公開には、情報を入力する複数の担当者が容易に Web で情報発信できるように、Contents Management System(CMS)を利用している。CMS には Wordpress を用い、博士学位審査演奏会の基本的な情報項目を入力フォーム形式で情報を登録する。下図はデータ登録画面である。最上段には投稿記事のタイトルとして演奏者の名前を入力する。博士学位審査演奏会では最低限必要な項目に「名前」、「専攻(研究領域)」を設定している。

図 6-3 wordpress を利用したデータ登録画面

審査演奏会概要では、現在のところ EXCEL 上にあるテキストデータをそのまま貼り付けて対応している。EXCEL 上のデータは、WORD の差し込み印刷機能を利用して CD ジャケットに利用する等の用途があることから、24 年度中に各項目をデータベース化することは見送りにした。

「Vimeo」チャンネルとは、曲が複数曲ある場合に入力される。あらかじめ Vimeo の管理画面でチャンネルを作成しておくことが前提になる。「Vimoe ダイジェスト映像」は、チャンネルで公開する映像が Full-HD(1080p)画質であるのに対し、ダイジェスト版はいくつかの映像の抜粋を 1 つのデータにした簡易版である。権利処理関係上チャンネルで公開出来ないデータについては、権利に支障のない部分を抜粋したダイジェスト版で公開される。チャンネルまたはダイジェスト版で公開するか否かは「学外への公開設定」ボタンより、3 種類のタイプから選択することができる。記事が投稿されると、博士学位審査演奏会のメニュー配下に個別にページが自動生成される。このときに利用している名前と専攻は、記事作成時に入力した情報をデータベースより参照している。

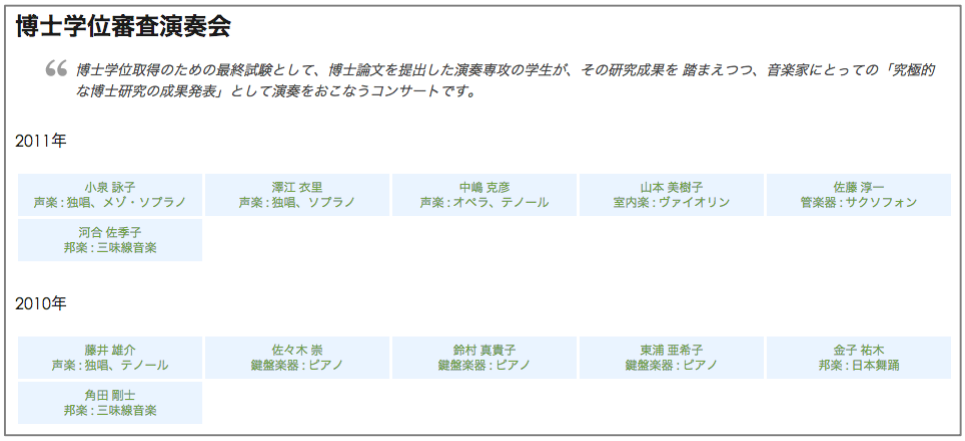


図 6-4 博士学位審査会ページ

図 6-5 博士学位審査演奏会の公開ページ

図 6-5 は、各記事の個別ページである。各ページ内構成は、映像再生ウィンドウ、プレイリスト、演奏会概要、曲目一覧からなる。現在のところ、プレイリストは Advanced API を用いて Vimeo 側で編集したチャンネルの情報を元に生成し、画面上に表示させている。Vimeo では、ストレージ上に蓄積したデータを読み出す場合に、指定したドメイン以外での再生を許可しない、プライベート設定が利用できる。この機能は、動画を外部のブログに貼り付けて公開した場合にでも、プライベート設定により映像を視聴できないというものである。

6.4. 演奏会メタデータの検討

24 年度は、実験的に博士学位審査演奏会に限定して Web での公開を行った。今後は学内の定期演奏会等も公開を進めていることから、さらにコンテンツを拡充できるものと考えている。一方で、演奏会情報を総合的に管理できる情報システムの整備及びメタデータの設計が急務となる。メタデータについては、英国 BBC 放送やロンドン大学などで利用が進められている Music Ontology (http://musicontology.com/)をベースに利用し、これらの語彙で補完できない物については他の語彙ならびに独自語彙を組み合わせて利用する事を検討している。本プロジェクトでは、Music Ontology が日本での適用(西洋音楽、邦楽)が可能か検証を試みると共に、日本語化を進めている。Music Ontology のクラス一覧は下記の通り。

表 6-1 Music Ontology クラス一覧(日本語訳案)

クラス名			27	MusicalExpression	音楽表現物
1	Activity	活動期間	28	MusicalItem	ひとつの音楽表現
2	AnalogSignal	アナログシグナル	29	MusicalManifestation	音楽著作物
3	Arrangement	編曲	30	MusicalWork	音楽作品
4	AudioFile	オーディオファイル	31	Orchestration	管弦楽法
5	CD	CD	32	Performance	演奏
6	Composition	作品	33	PublishedLibretto	出版台本
7	CorporateBody	組織	34	PublishedLyrics	出版歌詞
8	DAT	DAT	35	PublishedScore	出版楽譜
9	DCC	DigitalCompact Cassette	36	Record	出版録音
10	DVDA	DVD オーディオ	37	Recording	録音
11	Digital Signal	デジタルシグナル	38	RecordingSession	録音セッション
12	ED2K	E-Donkey P2P 共有	39	Release	出版物
13	Festival	音楽祭	40	ReleaseEvent	出版イベント
14	Genre	ジャンル	41	ReleaseStatus	出版の状態
15	Instrument	楽器	42	SACD	SACD
16	Instrumentation	楽器法	43	Score	楽譜
17	Label	レーベル	44	Show	ショー
18	Libretto	台本	45	Signal	シグナル
19	Lyrics	歌詞	46	SignalGroup	シグナルグループ
20	MD	MD	47	SoloMusicArtist	独奏者
21	MagneticTape	アナログテープ	48	Sound	音響
22	Medium	媒体	49	Stream	ストリーム
23	Membership	会員	50	Torrent	Bittorrent P2P 共有
24	Movement	楽章	51	Track	トラック
25	MusicArtist	アーティスト	52	Transcription	編曲
26	MusicGroup	グループ	53	Vinyl	レコード

6.5. 25 年度以降の課題

今後は、博士学位審査演奏会以外の演奏会映像の整理・公開を進めて行くことから、本学に関係する演奏会に関する情報を一元的に管理できるデータベースが必要である。今後、演奏会関連のアーカイブ活動を進めて行くためには、藝大における演奏会メタデータの整備が急務であるとともに、これらの情報を蓄積して行くための情報システムの構築も同時に検討して行く必要がある

7. 知的財産関連活動報告

報告: 特別研究員 生貝直人

7.1. はじめに

本稿では、総合芸術アーカイブセンターにおける知的財産関連の本年度の取組と、次年度以降の展望についての報告を行う。芸術活動の発展と普及にあたり、著作権をはじめとする知的財産権の適切な保護と利用促進の双方に配慮を行うことは不可欠である。特にデジタル・ネットワーク形式での利用が想定されるアーカイブ事業においては、本学関係者や学外第三者を含む関係者の保有する各種知的財産に関わる正確な取扱が求められる。しかし一方で、過度に厳格かつ形式的なルール構築を行うことは、円滑な芸術活動の妨げともなりかねない。各芸術分野のこれまでの権利処理の慣行を最大限に尊重しつつも、デジタルアーカイブの構築に必要な権利処理のルールと手続を定めていく必要がある。以上の問題意識に基づき、5 年間のセンターにおける知的財産関連の活動計画を大きく以下の 3 つのフェーズに分け、2 年目にあたる本年は①および②にあたる活動を行うと共に、平行してアーカイブと関連の深い法制度についての調査・研究を進めてきたところである。

① 本学における知的財産をめぐる現状の実務的取扱と慣行の把握、および関連する法制度・判例の調査研究
② 適切な知的財産処理を行うための学内規則や契約文書の整備
③ ワークフローの策定と人的資源の調整

知的財産処理の性質上、単独で作業を行う領域は限られており、本年度の活動もアーカイブセンターの各プロジェクト、ならびび社会連携センターをはじめとする学内関係部局との連携協力に基づいて進められてきたものである。以下では、アーカイブセンター内における（2）音響・映像データ研究プロジェクト、（3）3D データプロジェクト、（4）大学史資料プロジェクト、それぞれとの協力の下に進めてきた調査と検討作業の状況を記述した後に、（5）今後のアーカイブセンターの活動において必要な知的財産関連の取組全般の方向性について述べ、最後に（6）諸外国におけるデジタルアーカイブ促進政策についての調査・研究の概略を記述する。

7.2. 音響・映像データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、主に奏楽堂において開催される各種演奏会、ならびに博士学位審査会等の記録映像アーカイブに関わる権利処理である。

第一に、演奏者が保有する実演家の権利、すなわち「著作隣接権」の取扱である。著作権が消滅した作品を演奏するにあたっても、演奏家の著作隣接権は実演から 50 年間保護されており（著作権法 101 条）、演奏作品のアーカイブ利用を行うには原則として演奏者の許諾が必要となる。本学では昨年度から、デジタルアーカイブ化を前提とした演奏者からの書面での許諾取得を進めてきたが、特にオーケストラ等の場合演奏者は数 10 人以上に及ぶことも多く、それらから逐一許諾を得るコストは小さいものではなかった。そこで本学では、2011 年度に行った検討の結果として「東京芸術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」を策定し、2012 年度から施行・運用している。本要項では、音楽学部に所属する全ての教職員・学生の有する著作隣接権および肖像権については、演奏者本人がその権利を保有しつつも、本学がデジタルアーカイブのための一定の利用を行うことができることを定めている。さらに本要項は、部分的には職務著作（著作権法 15 条）の規定が該当しうる教職員に加え、学生をも対象として、著作隣接権・肖像権という権利利益に関わる規定を置いていることから、2012 年度からは入学時において、本人および親権者から本要項の規定について書面での同意を受ける手続を開始している。このような芸術系大学の特徴を反映した知的財産権の取扱を学内規則として定める例は未だ国内に例が少なく、今後我が国において芸術系大学のデジタルアーカイブ構築が進展していく上での、ひとつのモデルとなることが期待される。

第二に、演奏の対象となる楽曲の著作権の取扱である。本学において演奏会等に用いられる楽曲には、創作者の死後 50 年を経て著作権の消滅したクラシック作品が多いものの、著作権が存在する近代曲を演奏する機会は決して少なくない。従来から演奏会における楽曲の利用においては、一般社団法人日本音楽著作権協会（JASRAC）に申請を行った上で所定の利用料の支払を行っており、さらに JASRAC に登録を行っていない本学関係者（学生を含む）等が著作権を保有す

る楽曲については、個別の利用許諾を得るなどの対応を行っており、今後もその取組を続けることになる。ただしアーカイブの構築・運用にあたっては、著作権法の定める「私的使用のための複製（30 条）」や「学校その他の教育機関における複製等（35 条）」等の権利制限規定に該当しない限り、学内に限った記録の保存・複製であっても、相当する複製物の作成等に伴う追加的利用料の支払が必要になる可能性があり、さらに学外への配信を行うにあたってはストリーミング等利用形態に応じた利用料の支払が当然に必要になる。この点については既に「音響・映像データ研究プロジェクト」の項において述べたように、昨年度より JASRAC や関係権利者に対する、アーカイブ化に必要な著作権利用の申請と許諾の取得を進めているところである。

7.3. 3D データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、美術作品の 3D 化に伴って必要となる原著作物の権利処理、および 3D 化された美術作品のデータそのものの取扱である。

① 3D 対象となる美術作品の多くは、著作権がすでに消滅している、あるいは本学・関係者が著作権を保有しているなどの理由により権利処理の必要が生じないが、第三者が著作権を保有している場合にはそのデータや再現物を公開・利用するにあたり、元となる作品の著作権者の許諾を受けることが必要となる。特に大量の美術作品の 3D データ化を行う場合には、個別の許諾取得と併せて社団法人日本美術家連盟（JAA）等の著作権集中管理組織からの許諾を得る必要が生じる可能性があるが、美術分野における著作権の集中管理は先述の音楽分野程にその組織率が高くなく、許諾の取得を行い難いのが現状であり、権利者不明の場合には著作権法67条に規定される裁定制度の活用等を検討する必要がある。

② 3D 化された美術作品のデータそのものは、著作権の保護の対象とならない事実情報の範囲に含まれる可能性が高い。しかしそのデータの作成にあたっては通常多くのコストを必要とするため、本学としても第三者の利用にあたって対価を求める必要が生じる場合があること、および外部の美術館・博物館等から許諾を得て 3D 化を行う場合には当該所蔵元が何らかのデータの利用制限を求める可能性があり、外部へのデータ提供の際には契約によって利用範囲を定めるなどの手段を検討する必要がある。しかし公的な研究教育機関である本学の性質上、その活動成果としてのデータ・アーカイブはできる限り社会一般への公開と還元を進めることが望ましいと考えられるところ、その取扱および学外を含めた共有のあり方について、今後本学として一定のガイドライン等を設ける必要が生じると考えられる。この点関係の深い動きとして、我が国においてここ数年来、3D デジタルデザインそのものを意匠法による保護の対象とする議論がなされている。そのような状況を考慮しつつ、3D データの適切な取り扱いについて、実務的な側面と合わせ、政策提言などをも視野に入れた検討を進めていく必要があると考えられる。

7.4. 大学史文書データ研究プロジェクト

同プロジェクトにおいて中心的な課題となったのは、大学史史料室が保有する膨大な歴史的資料の公開に関わる権利処理である。以下の 2 点は主として所蔵資料の公開・閲覧のケースを念頭に置いているが、基本的な課題はアーカイブの構築についても同様である。

第一に、所蔵資料の著作権の問題である。大学史史料室に所蔵される資料には、本学が著作権を有している、あるいは第三者の著作物であったとしても著作権者の死後 50 年を経るなどして著作権の処理が不要であるものも多いが、それ以外の資料の利用が問題となる。従来から学内および学外の利用希望者については、書面での申請により閲覧・複写を認めており、前者の閲覧については著作権法上の問題は存在しないものの、後者の複写を適法に行いうるかが問題となる。この点、大学史史料室は著作権法 31 条および同法施行令 1 条の 3 に規定される「図書館等」にあたるものとして、利用者の求めに応じて当該著作物の一部分の複写を適法に行うことができると考えられるが、その範囲を超える複写の申請への対応については、著作権の存否の確認を含め慎重に対応する必要がある。さらに本学の性質上、文書資料以外の映像や音楽等の「一部分」の範囲を確定しがたい資料も多く所蔵されており、それらの取扱については別途関係機関の取組等を参考に、資料提供の指針を定める必要があると考えられる。

第二に、所蔵資料に含まれるプライバシー情報に関わる問題である。大学史史料室に保存される資料は刊行された書籍等に限られず、大学運営に関わる資料、そして卒業生の成績等をはじめとする機微な情報が含まれている。特に本学の卒業生の中には我が国の音楽史において重要な役割を果たした者も多く、関係する資料は研究上の資料価値を有する。この点、生存する個人に関する情報の取扱については「独立行政法人等の保有する個人情報の保護に関する法律」の規定および本学個人情報保護関連規則の規定を遵守し、本人の許諾を得ない第三者への提供は行わないことが原則となる。さらに死亡した卒業生に関する情報であっても、遺族への配慮等の観点からその開示は原則として行うべきではない。問題は、死後十分な期間を経た著名な卒業生に関わる学術的価値の高い情報を、どの時期から、どのような方法で公開するべきかという点である。この点、わが国では 2011 年の公文書館理法の施行に伴い、同法 2 条 2 項 3 号における「国立公文書館等」に指定された国立大学資料館を中心として、歴史的資料の公開ガイドラインの制定が進められているところである（犯罪・病歴等を含む機微な個人情報については取得・作成後 110 年を経てからの公開等）。現時点において本学に同様の規則は存在しておらず、今後同種のガイドラインを参考とした検討が進められる必要がある。

7.5. その他関係する事項について

ここでは、上記各分野のプロジェクト複数に関連する、あるいは本学における知的財産処理全般に関連する事項について述べる。

第一に、教職員・学生を含む本学関係者の権利のあり方についてである。先述の通り、既に音楽分野における本学関係者の有する著作隣接権や肖像権の取扱については、2012 年度より「東京芸術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」を定め、包括的な対応を行っている。ただし本学関係者の作曲した楽曲著作権等の取扱については未検討である他、美術学部をはじめとする美術分野の本学関係者の有する権利の取扱については今後の課題である。この点、すでに大学院映像研究科においては映画作品という著作物の性質上、著作権法 29 条においてもその著作権は映画製作者に帰属することを定めていること、そして映画製作においては本学からの一定程度多額の出資を必要とすることなどから、既にその著作権が本学に帰属する旨の承諾を得る手続が行われており、今後教職員については職務著作への該当性の範囲を検討しつつも、学生を含めた著作権の利用許諾契約、ならびに権利の譲渡のあり方について検討を行っていく必要がある。さらにアーカイブセンターの活動と直接関連する事項は少ないものの、既に 2007 年の「東京芸術大学役職員等の発明等に係る知的財産権の取扱規則」においては、本学関係者が職務上作成した特許等の工業所有権、さらにプログラムおよびデータベースの著作物等については原則として本学が権利を有する旨を定めている。しかし当該規則は主に理工系大学・学部での運用を念頭に置いた規定となっており、芸術系大学の活動実態に即した内容となっているかは今後検討の余地が存在する。社会連携センターとの協力の下、既に存在する各種学内規則とアーカイブセンターの活動の適合性について精査・改訂の検討を進めていく必要がある。

第二に、アーカイブ化にあたって必要となる著作権等の許諾を行おうとした際に、当該権利者の連絡先が不明であるなどの理由によって適切な許諾を得ることのできない、いわゆる孤児著作物（orphan works）の問題である。既に述べたように、本学におけるアーカイブ事業の対象は既に著作権が消滅している、あるいは本学・関係者が権利を保有している作品が多いものの、現に権利が存続していると考えられ、そして孤児著作物に該当すると考えられるものも少なくない。事実音響・映像データプロジェクトが進める博士学位審査会の映像公開にあたっても、作詞者が不明であるなどの理由により、公開を断念しているものが存在する。さらにオーケストラ作品等多くの演奏者が関わる作品については、特に過去の成果物の利用を行おうとした際、卒業生や外部演奏者等全員の連絡先を把握し、必要な許諾を得ることが実質的に困難であるものも多く存在する。次年度以降、利用・公開の必要性の高いものから順次、著作権法 67 条に定められる裁定制度に基づいた利用申請を進めていく予定である（孤児著作物の問題と諸外国の取組については、「6：諸外国のデジタルアーカイブ促進政策についての調査研究」も参照）。

第三に、講義映像のアーカイブについてである。これはすでに触れたように、著作権法 15 条では被雇用者が職務上作成した著作物の権利が雇用者に帰属することを定めており、本学教職員が日常の業務におい

て作成した業務文書等の著作権は原則として本学に帰属することになる。しかし大学教員が行った講義の映像や資料について、当該規定が適用されるかはいまだ学説上も定かではなく、近年国内の各大学がイーラーニングによる講義映像のオンライン配信を進めるにあたっては、実務上は教員から大学側が個別に承諾を受けることが多い模様である。さらに学外から講師を招いて行う講義の記録・配信にあたっては、当然に当該ゲスト講師から承諾を得る必要が生じる。この点、すでに美術学部や芸術情報センターで実施する講義においては、講義映像利用についてゲスト講師からの承諾書を受ける取組を進めており、今後承諾書形式の統一や、講師依頼時の配信可否確認等の手続の確立と周知を進めていく必要がある。

第四に、本学の芸術活動において第三者企業等との受託ないし委託契約関係が存在している場合の取扱である。美術・音楽いずれの分野においても、その作品制作や演奏会の開催にあたっては外部企業等からの委託や援助金を受けて行われることがあり、そこで結ばれる契約書等においては成果物に生じる知的財産の帰属について明示的に定められていないものも存在しており、あるいは相手先企業に帰属することを定めているものも存在すると考えられる。本年度においても、複数の外部企業支援事業等において著作権の帰属についての契約の調整を行ったところである。第三者企業等との契約内容の詳細については原則として個別の交渉に委ねられるべきであるが、最低限当該成果物の本学におけるアーカイブを許容する条件となるよう契約内容を精査していくべきであろう。さらに本学が第三者に対して業務委託を行う場合についても、同様の課題は存在する。美術学部においては、例年卒業制作の冊子制作およびそれに必要な作品の写真撮影を外部企業に委託しているところ、当該企業および撮影者本人と本学の間で著作権譲渡（著作者人格権の不行使を含む）契約を結んでおかなければ、将来の写真データの利活用に支障を及ぼす恐れがある。この点、既に美術学部卒業冊子については本学美術教務等関係部局との協議の下、写真著作権の譲渡ならびにデータの受渡についての契約書・覚書の締結を行ったところである。今後はこれら以外の外部委託契約の締結にあたっても、競争入札時の仕様書への記述等を含め、本学の行うアーカイブ事業と整合性のあるものとするよう精査していく必要がある。

第五に、アーカイブセンターの権利処理によって得られた知見の公開と体系化である。わが国において、芸術系大学における権利処理の実務についての研究はもとより、芸術分野全般が有する知的財産に関わる問題群についても、法学分野における研究の蓄積はきわめて限られているのが現状であり、本プロジェクトの成果が芸術法制度分野における学術研究の促進に資するところは大きい。権利処理作業の進捗を学術論文等の形で公開することにより、外部の学界・実務関係者からのフィードバックも期待できるところである。さらに刊行された体系的なマニュアルも数少なく、中長期的には各種芸術関係機関・大学等の実務に資する教科書等の制作も視野に入れるべきであると考えられる。

第六に、知的財産の社会への還元と収益化に向けた取組である。本稿ではアーカイブにあたって必要な知的財産の適切な処理を行う、いわば「法務」的な側面に焦点を当てたが、今後外部公開可能な知的財産が集積していく中で、それらを社会に発信し、有償・無償での利用許諾を進めるための、いわば「マーケティング」的側面についての検討を進める必要があると考えられる。この点国内の主要大学においては、我が国の知的財産戦略推進戦略等の方針に従い、特許等の工業所有権を中心とした知的財産の権利処理と、産業界へのライセンシングと実用化を担う TLO（Technology Licensing Organization）の設立と運用が進められているが、現状において各大学が組織している TLO はあくまで理工系大学の事情を前提としたものであり、本学をはじめとする芸術系大学の実情にどの程度適合的であるかは定かではない。社会連携センターとの協力の下、関係大学の取組を参照しつつ、本学の有する知的財産をより効率的に社会に発信するための組織機能のあり方について検討を進める必要がある。

第七に、知的財産に関する知識の普及・啓発についてである。アーカイブセンターの活動において知的財産の処理を進めたとしても、その法的・実務的背景について関係者との認識共有が十分に行われていなければ、円滑な運用を期待することはできない。著作権処理をはじめとする知的財産の知識は、本学学生が芸術家として活動していく上でも、あるいは社会人として活動していく上でも今後ますます重要性を増していくものである。この点「音響・映像データ研究プロジェクト」の項において触れたように、本年度は福井

健策弁護士を招き「東京芸術大学音楽学部における演奏活動に関わる著作隣接権等の取扱要項」の周知説明と合わせた講演会を行った他、特別研究員の生貝自身も本学の俯瞰講義などにおいて著作権制度についての講義を担当するなどの取組を行ってきた。今後もアーカイブセンターの取組に対する周知理解の促進と併せ、教職員・学生を対象とした知的財産関連セミナー等を実施していく必要性は高いものと考えられる。

7.6. 諸外国のデジタルアーカイブ促進政策についての調査研究

ここまで本報告書では、本学のアーカイブ事業に関わる知的財産処理の論点と、実際の取組について記述してきたが、ここでは平行して進めてきたアーカイブ事業と関係性の深い、諸外国の法政策についての調査研究の概略を紹介する。

現在諸外国においても、美術館・博物館や図書館、そして本学のような研究教育機関を含めた文化施設が保有する文化資源のデジタルアーカイブに対する関心は急速に高まっている。その中でも特に EU では、2008 年から欧州全域の文化施設が保有する文化資源デジタルアーカイブのポータルサイトである「Europeana（http://europeana.eu）」を開設し、関連するアーカイブ促進の施策を急速に押し進めている。Europeana には既に 2000 以上の文化施設が参加し、2012 年時点で 2100 万件以上のデジタル化された文化資源が公開されており、2015 年間には 5000 万件の公開を行っていくものとされている。

EU における文化資源デジタルアーカイブの拡大においても、著作権をはじめとする知的財産の取扱が課題となったことは言う間でもないが、その中でも最重要の課題とされたのが、既に本学における取組の紹介においても触れた、権利者の所在が不明であるなどの理由により適切な許諾の取得が行い得ない、いわゆる孤児著作物（orphan works）の問題である。EU では孤児著作物問題の現状についての大規模な調査を進めており、大英図書館では保有する著作権残存書籍のうち約 43%が、英国のミュージアムの保有する写真のうち 90%以上が、映画分野では EU で製作された全作品中 20%以上が孤児著作物であるとされる。孤児著作物は権利者が単独である場合に加え、多くの権利者が関わる作品の場合や、著作権が多数の親族に相続された場合等には、それらのうち 1 人でも許諾を取得することができない限り、適法な利用は不可能となる。アーカイブの公開のみではなく、劣化の著しい美術作品等についても権利者の許諾なしには適法に複製保存を行うことができないことから、孤児著作物の問題は EU をはじめ世界各国における文化資源政策において最も重要な課題として取り扱われてきた。

このような中、EU では 2012 年 10 月に「孤児著作物指令（Directive on certain permitted uses of orphan works、2012/28/EC）」を採択し、EU 全域の孤児著作物の利用促進を図る大規模な制度改革を行った。同指令の下では、EU 加盟国における公的な文化施設（美術館・博物館・図書館・研究教育機関等）は、権利者不明の（写真作品を除く）孤児著作物について、(1)現在構築が進められる EU 孤児著作物データベースの確認等所定の権利者探索の努力を行い、(2)その記録を当局に提出することによって、(3)事前の供託金の提出なしに、(4)当該孤児著作物のデジタル化・インターネット公開を、(5)期間の定めなく行うことができると定められる。一度孤児著作物と認められた著作物は、権利者が名乗り出るなどによって事後的に判明しない限り、EU 全域において同様に取り扱われるとされ、加盟国は 2014 年 10 月までの国内法化を義務付けられる。

さらに英国では 2012 年、文化施設等の利用主体の限定を行わない、より包括的な孤児著作物利用促進法案が提出されている。英国においては従来我が国の裁定制度のような包括的な孤児著作物利用規程を有していなかったが、同法案では担当大臣（文化・メディア・スポーツ大臣）に対して、所定の権利者探索手続を行っても権利者を発見できなかった孤児著作物についての利用許諾を行う権限を与える他、担当大臣は「当該分野を適切に代表する集中権利管理団体」に対して、当該権限を付与することができるという、我が国で言うところの裁定手続を民営化することを可能とする、いわゆる「拡張集中権利管理制度（Extended Collective License、ECL）」を導入する条項を含んでいる。ECL は既に北欧諸国において運用がなされており、裁定処理の迅速化や集中権利管理団体への加盟率向上をはじめとした一定の成果を挙げていることが指摘されている。

一方米国においても、現在まで孤児著作物を包括的に利用可能とする制度は存在しておらず、特に 1989

年にベルヌ条約に加盟するまで著作権保護の登録制度を採用していたこと、そして広範なフェアユース（公正利用）条項が存在することなどから比較的孤児著作物の弊害は少なく抑えられてきたが、近年の大規模デジタルアーカイブの進展や、著作権保護期間の延長が行われるなどの中で、その必要性が広く論じられはじめている。2008 年には包括的な孤児著作物法案（H.R. 5889）が提出され、現在も関係者への意見照会等を含めた検討が進められており、適切な権利者の探索努力を行った上で孤児著作物を利用した場合には、事後の権利侵害の責任を大幅に免除するなどの利用促進策が提案されている。

我が国においては、先述の通り著作権法 67 条に定められる裁定制度が存在しており、同様の制度を有している国はカナダ等をはじめ未だ少なく、国際的な観点からも相対的に孤児著作物の問題に配慮した著作権制度を有していると言うことができる。しかし同制度における裁定件数は、2000 年度から 2010 年度の 10 年間においても 53 件と少なく、2009 年の法改正により裁定申請中の利用を認めるなどの措置がなされているものの、手続にかかる人的コストや期間、そして補償金の供託などが必要であることなどから、文化施設における大規模なデジタルアーカイブ構築への対応には限界が存在すると考えられる。EU や米国における法改正と運用の状況を注視しつつ、我が国においても文化資源のデジタルアーカイブ拡大に向けた、一層の施策を考慮することが望ましいと言うことができるだろう。

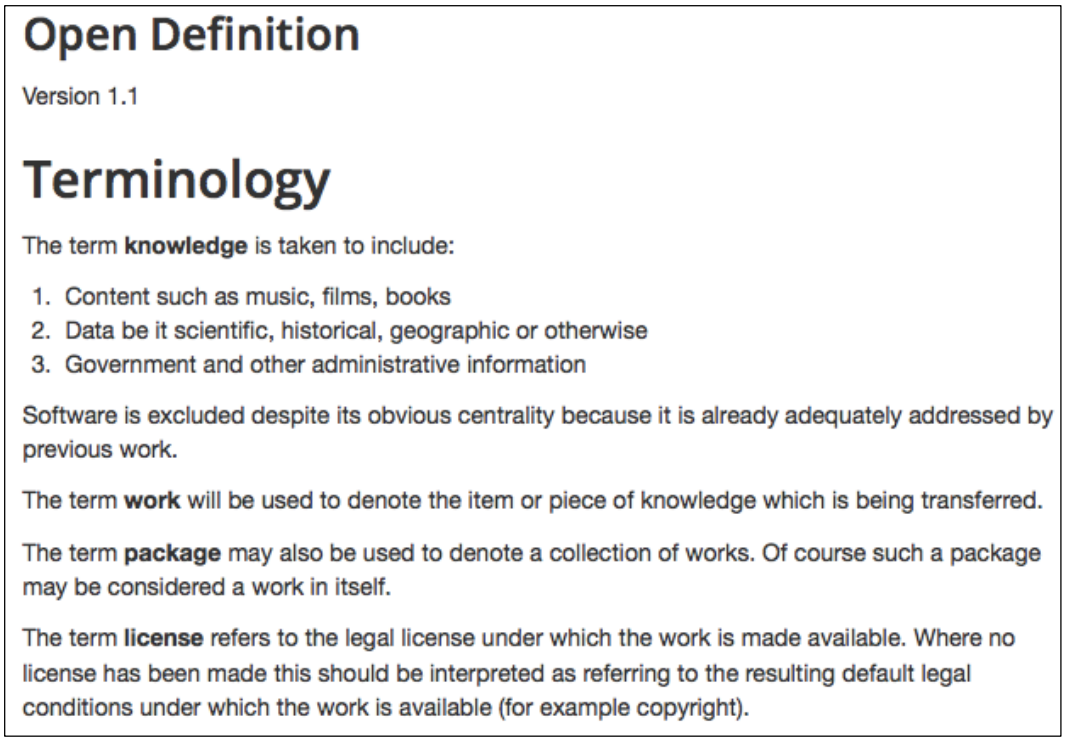
8. 調査報告: オープンデータとインターネットよる情報共有と活用

報告: 芸術情報研究員 嘉村哲郎

8.1. オープンデータ(Open Data)とは

この 1、2 年の間 Web 上では大規模なデータ利用やオープンデータというキーワードを頻繁に目にするようになった。オープンデータ(Open Data)とは、2009 年に TED カンファレンス内で行われた発表時に Web の発明者であるティム・バーナーズ=リー氏による呼びかけが発端とされている。プレゼンテーション内では、「Raw Data Now」と呼ばれ、今すぐに政府が保有する公共情報や研究機関・研究者が持つ科学研究のデータを自由に（オープンに）使えるよう Web に公開しようという呼びかけである(http://goo.gl/xNQkp)。この翌日、イギリス政府は公共に関するデータ例を Web に公開し、後にオープンガバメントと呼ばれる専用 Web サイトの開設に至る。

オープンデータの定義には、Open Data Definition(http://opendefinition.org/)による定義の解釈が行われおり、要約すると、オープンデータとは、インターネット上に公開されたデータを誰もが制約なく自由に利用でき、かつ再配布できる状態にあるデータのことをいう。これらの定義に則って公開されたデータは、「非営利目的での利用に限る」や「教育利用目的に限定」などの制約がないことを意味する。そして、オープンデータとして扱われるべき情報には、公的機関が扱う公共情報、科学データなどの学術情報、映画や音楽・書籍など文化情報の 3 つが大きな枠として掲げられている。



Open Definition

Version 1.1

Terminology

The term **knowledge** is taken to include:

1. Content such as music, films, books
2. Data be it scientific, historical, geographic or otherwise
3. Government and other administrative information

Software is excluded despite its obvious centrality because it is already adequately addressed by previous work.

The term **work** will be used to denote the item or piece of knowledge which is being transferred.

The term **package** may also be used to denote a collection of works. Of course such a package may be considered a work in itself.

The term **license** refers to the legal license under which the work is made available. Where no license has been made this should be interpreted as referring to the resulting default legal conditions under which the work is available (for example copyright).

図 8-1 Open Definition による用語の定義

欧州においては、2003 年に「公共セクターの情報の利活用に関する指令」が制定(EU 指令 2003/98/EC)されており、この中の項目には“EU 加盟国は、公的機関が保有する情報の再利用が可能な場合には、商業・非商業の目的を問わずこれらの情報が再利用可能であることを確保しなければならない”という内容を定めている。つまり公的機関が保有する情報は公開を原則とし、その場合には情報の再利用ができること。さらにはその情報を利用する際は商業・非商業の目的を問わないこととしている。2012 年現在、2003 年の EU 指令の改訂作業が進められており、改訂版では、公共機関に加え、図書館や博物館等の文化施設に対する適用対象が拡大してい

る。また、これらの情報は公開に際し、限界コストでの提供を原則にするなど，EU 内での取り組み水準を合わせる案が示されている（参考: NTT Data「電子行政オープンデータ戦略」の決定と今後の課題 http://e-public.nttdata.co.jp/topics_detail2_prev/id=711）。

これに習い、米国では 2009 年 1 月、公共情報に関するデータを広く公開している。3 つの軸となる透明性には、「政府は国民に対する責任を果たすために、情報をオープンにし、提供しなければならない」、第二に、国民参加に「政府は、知見を広く国民に求め国民の対話を行い、利害関係者グループ外の人々に政策立案過程への参加を促さなければならない」。第三に、官民協働として「組織の枠を超えて政府間および官民連携し、イノベーションを促進しなければならない」と定め、民間で情報を共有・再利用することで行政の透明性向上、経済活性化、公共サービスの向上を目的とした政策を展開している。公開している公共データは教育・観光・ビジネス・健康など 47 種以上に渡る。このほか、政府レベルでオープンデータに取り組む国は世界で 41 ヶ国に渡り、フランスでは地方自治体レベルでの取り組みも見られ、オープンデータ化の動きは年々増えつつある状況にある (http://www.data.gov/opendatasites)。

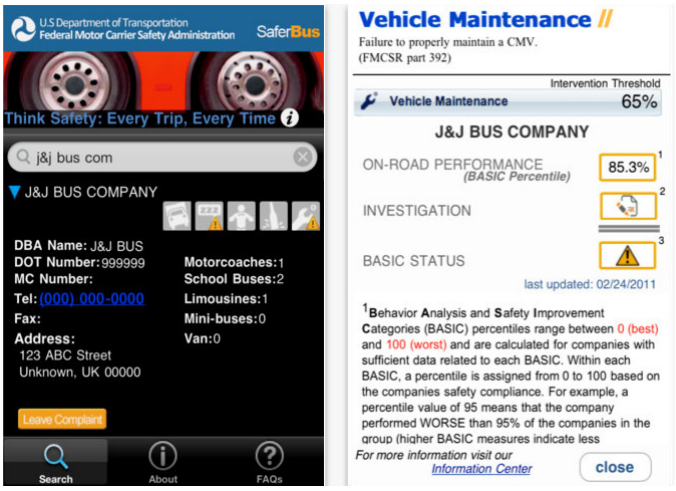


図 8-2 公共データを利用したバスアプリケーション

図 8-3 オープンデータに取り組む各国(日本は含まれていない)

一方で、日本では 2011 年の自治体レベルでの活動を中心に、2012 年に政府レベルでの動きが見られるようになってきた。福井県の鯖江市では、2011 年に市の公共情報をオープンデータにするという活動や、横浜市の芸術文化振興財団が保有する芸術・文化情報をオープンデータ(正確にはリンクト・オープン・データ)で公開するなど、活発な活動が行われ、2012 年には総務省や経済産業省にて政府が保有する公的情報の再利用性が検討され、経済産業省では統計情報のデータを再利用出来るようにした日本初のオープンガバントサイト、「OpenData METI」(http://datameti.go.jp/)を 2013 年 3 月に開設している。

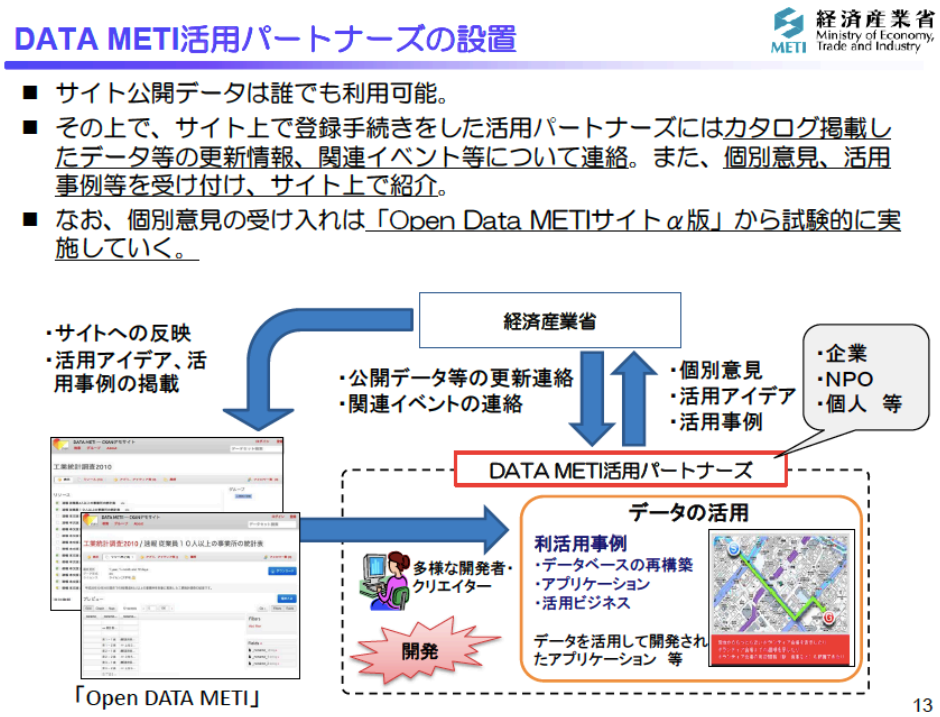


図 8-4 Open Data METI

8.2. Linked Data と Linked Open Data の概念

Linked Data または Linked Open Data(以下 Linked Data とする)とはインターネット上で情報を共有・再利用するために考えられた、情報流通の仕組みである。元々はセマンティック Web の世界でオントロジーを利用した共通の概念で情報を共有することをめざしていたが、オントロジーは構築までに多大な労力を要することから情報を発信・普及させるまでに時間を要するという懸念があった。一方の Linked Data では、オントロジーの構築については別で議論し、まずは実体として存在するデータをインターネット上で共有し、広く利用を進めていく点に特徴がある。この点においては、オープンデータと合致する部分であるが、Linked Data ではデータを公開するにあたっては、次のような原則を定めている。

(1). あらゆる事物に URI を付与すること

人物情報や本の書誌情報など、情報として参照できるものすべてに識別子(URI)をつけること。これにより、特定の人物に関する情報を知りたい場合は、付与した識別子を参照することで情報を得られるという仕組みである。

(2). 誰でも事物の内容が確認できるように、URI は HTTP 経由で参照できること

HTTP、すなわちインターネット経由で識別子にアクセスできる事を意味する。これにより、あらゆる事柄に対して付与した URI は、ネットワーク経由でアクセスできることから、必要な情報はインターネットと URI を識別することで参照することができる。

(3). URI を参照した際は情報が閲覧できるとともに、データは Web 標準の技術で利用できること

インターネット経由で参照した情報は、データそのものを引用することや、データを独自のソフトウェアに組み込む等、Web 標準の技術を使用して利用できることを前提とする。とりわけ、Linked Data でデータを公開するときには、RDF(Resource Description Framework)と呼ばれるデータモデルを用いてデータを構造化する。

(4). 情報には、より多くの事物を発見できるように、他の情報への URI リンクを含めること

例えば、人物情報と芸術作品の情報が異なる URI で存在していたとする。人物情報が記載されている情報には、名前や生年月日など、人物の基本となる情報が記載される。一方の作品情報には、作品のタイトルや素材などの情報が記載される。このとき、芸術家としての人物情報と作品情報には関係があることから、それぞれの情報に対して URI のリンクを記述する。これにより、人物情報の関連に作品情報がリンクとして記述される。

このように、1 つの情報に対して、関連のある情報が他にあった場合、その統一資源識別子(URI)を情報に追記することで、人物情報の中に作品に関する情報の項目を記述しなくて済むことになる。

上述した原則でつくられるあらゆる事物に関するデータは、世界中で一意の情報を同定できるしくみである統一資源識別子(Uniform Resource Identifier :URI)が付けられ、データに含まれる情報が別のデータと関連がある場合には、そのリンク(Hyper Link)を記述することでデータ項目を相互に参照できるようになる。そして、これらのデータは Web の標準であるハイパーテキスト転送プロトコル(Hypertext Transfer Protocol: HTTP)により、世界中に分散する Web サーバにある情報を相互に利用できることを特徴とする。

Linked Data の形式でつくられるデータと、従来のインターネットで公開される情報との大きな相違点は次のように言える。従来の公開方法には、HTML や PDF 等での情報発信が一般的であり、PDF や HTML データ内に記述された特定の情報をデータとして利用したい場合には、PDF や HTML からデータを抜き出すために二次加工をする必要があった。例えば、右図は文化施設でのイベント情報を HTML 形式で公開しているが、これらの会期情報や会場、イベント名を収集してイベント情報データベースのようなものを開発したいと考えたとき、現在公開されている方法では手作業で必要な項目をコピーし、何らかの形で情報を加工してデータ化する必要がある。機械的に HTML の内容を解析してデータ部分のみ抽出する方法も考えられるが、HTML を解析するためにサイト内のどこの HTML タグに必要な情報が記述されているのか、人手による確認が伴い、結局のところ情報の収集と整理に膨大な労力と時間を必要とする。つまり、現在一般的な情報公開の方法は、一方的に情報を公開・発信している状態であり、情報を広く広めたい、または共有したい場合には非常に効率が低い仕組みといえる。

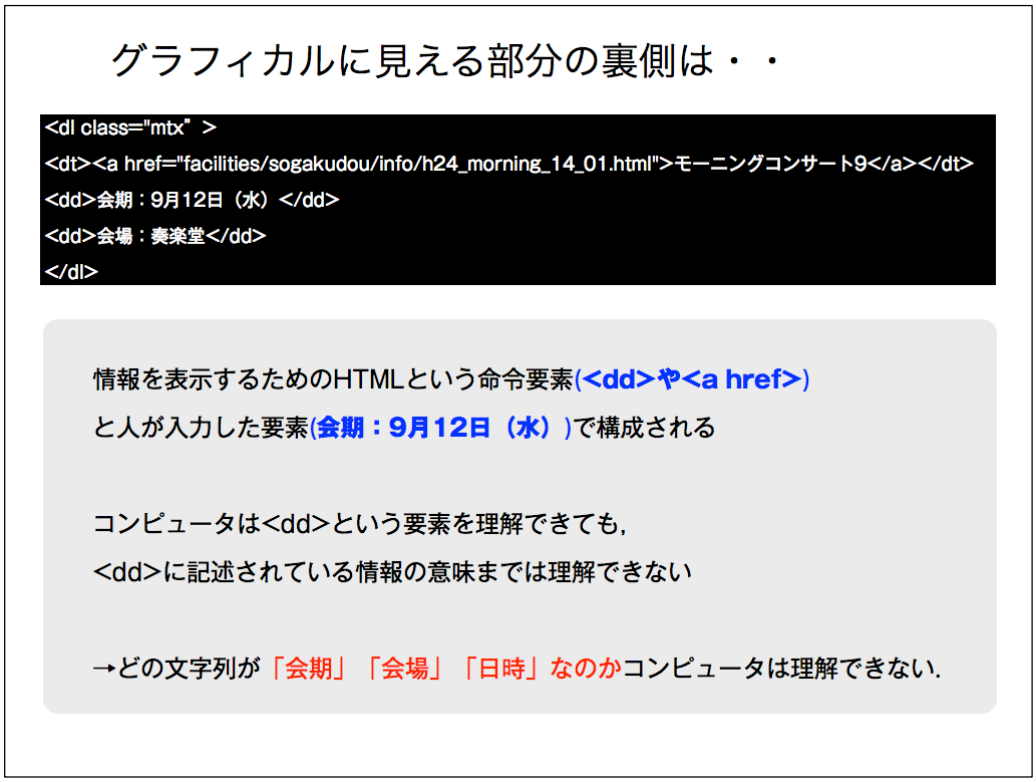
図 8-5 HTML で公開される情報

これに対し、Linked Data 形式で作られたデータは、情報の識別に URI を用い、その URI 内に格納される情報は標準化されたデータ形式、RDF で構造化されていることから、コンピュータが処理できる情報である。インターネット上に公開される RDF データは、専用の検索機能を利用することでデータに格納された項目をデータベース操作の感覚で必要なデータを抽出することや、データそのものを直接利用できる点が大きな特徴といえる。つまり、RDF データには、項目にどのような情報が格納されているのか、コンピュータが理解できることから HTML や PDF のようにデータを抽出するための加工処理の手間が不要になる。

しかしながら、RDF 形式のデータを作るためには、データの構造化やデータの変換作業は専門的な知識が伴い、人的リソースも必要になるため、現在のところ従来の仕組みを利用した情報公開と新しい仕組みを利用した際に係るコスト費はほぼ変わらないものと考えられる。しかしながら、同程度のコストを要しても、独自のデータベースを構築して公開するより、情報を再利用可能な標準形式でデータを蓄積・公開することは、将来的にそのデータを再利用あるいは情報の統合や関連づけなどを行う計画があるならば、長期的に見て利点があるものと考える。このように、Linked Data は RDF 形式でデータを作成・公開し、情報に相互参照と再利用性を持たせた柔軟な情報流通の仕組みと言える。また、Linked Data として作られたデータを公開する際は、そのデータが再利用しやすいように利用に関する制限なく使えることが理想とさ

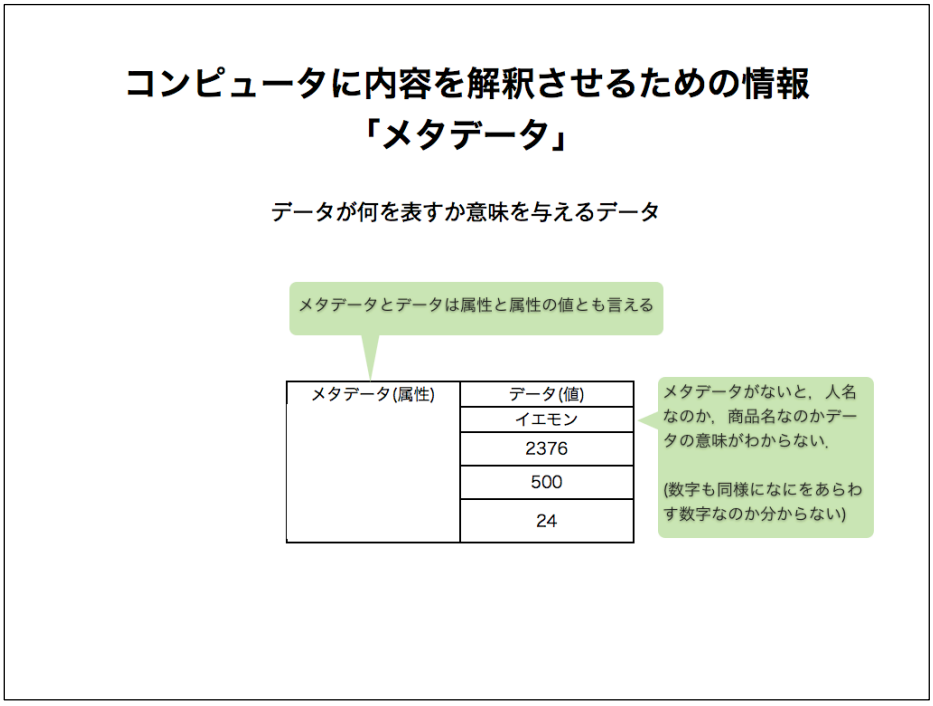
れている。つまり、オープンデータの定義を Linked Data に適用したもの、すなわち Linked Open Data である。Linked Data と Linked Open Data はしばしば同義と捉えられる場合があるが、Linked Data には RDF 形式のデータではあるが、利用に際して何らかの制限が設けられていると考えて良い。一方の Linked Open Data は商用・非商用問わず自由に利用できるデータとして公開される。

8.3. Linked Data と Linked Open Data の詳説

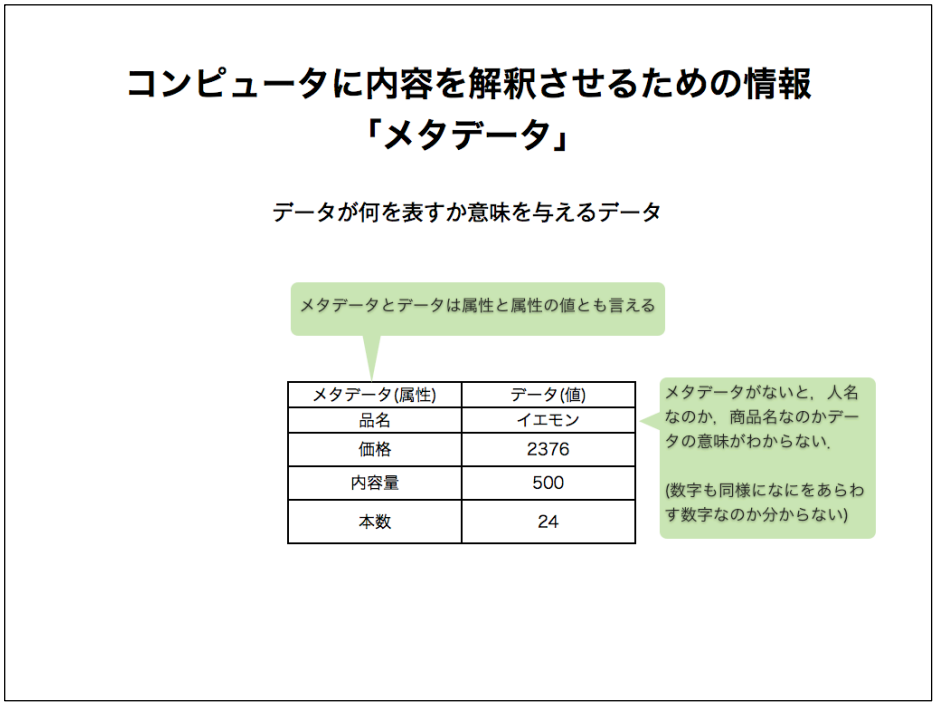


現在公開されている Web 上の情報は、人間が見ればどのような情報が記載されているのかを理解することができる。例えば、図中の「12 月 16 日」や「大学美術館」という文字列は、日本語が分かる者がみれば日付を表していることや施設名というその文字列の意味を理解することができる。しかし、コンピュータに日付や施設情

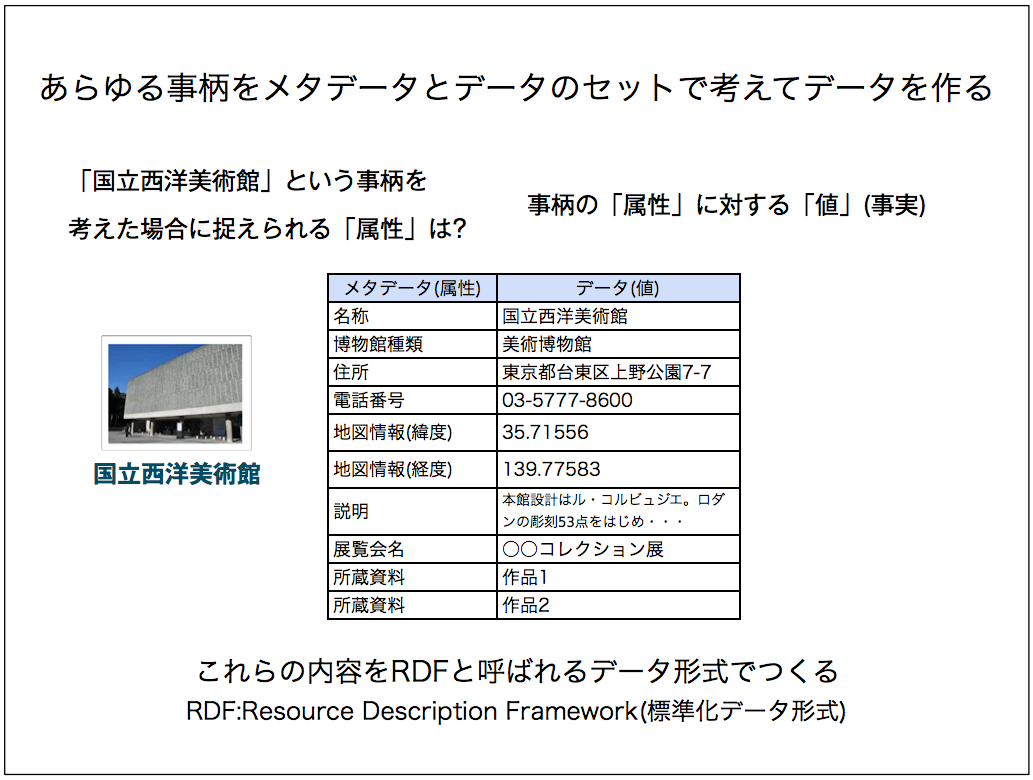
報の文字列を理解させようとした場合、コンピュータはどの文字列が日付か施設名であるか判断することができない。コンピュータが画面に表示する文字列を理解するためには、文字列に対して意味情報を与える必要がある。



コンピュータに情報の内容を理解させるためには、その情報がどのような意味を表すか、メタデータを付与する必要がある。メタデータとはデータに付けられるデータ或いは、属性情報とも呼ばれる。上図中の表にのデータ値には、イエモン、2376、500、24 の文字列があるが、この内容では数値が何を意味しているのか理解することは難しい。そこで、このデータに対して属性情報すなわちメタデータを与えると下図になる。



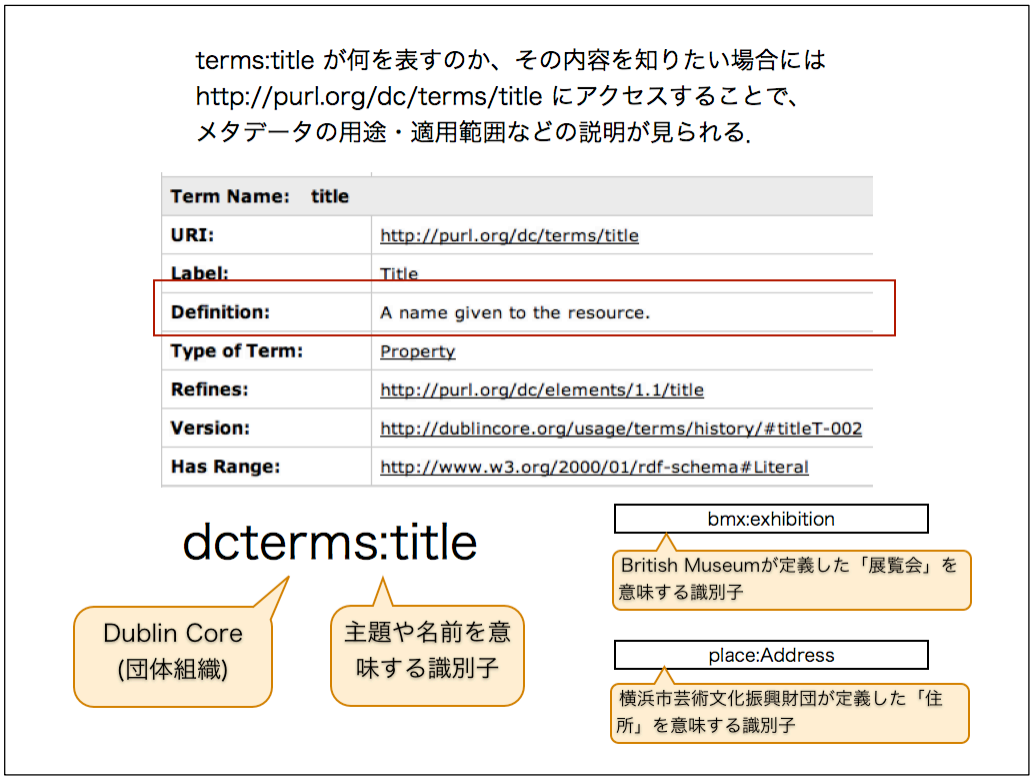
メタデータを付与したことにより、データの意味が分かるようになった。Linked Data では、情報を公開する場合には、メタデータとデータをセットで記述することで、コンピュータにデータの意味を解釈させるしくみである。Linked Data の原則に従い、RDF 形式で作られるデータにはあらゆる事物に対してメタデータを与える。例えば、文化施設を 1 つの事物と捉えた場合のメタデータとデータは下記のように考える事ができる。



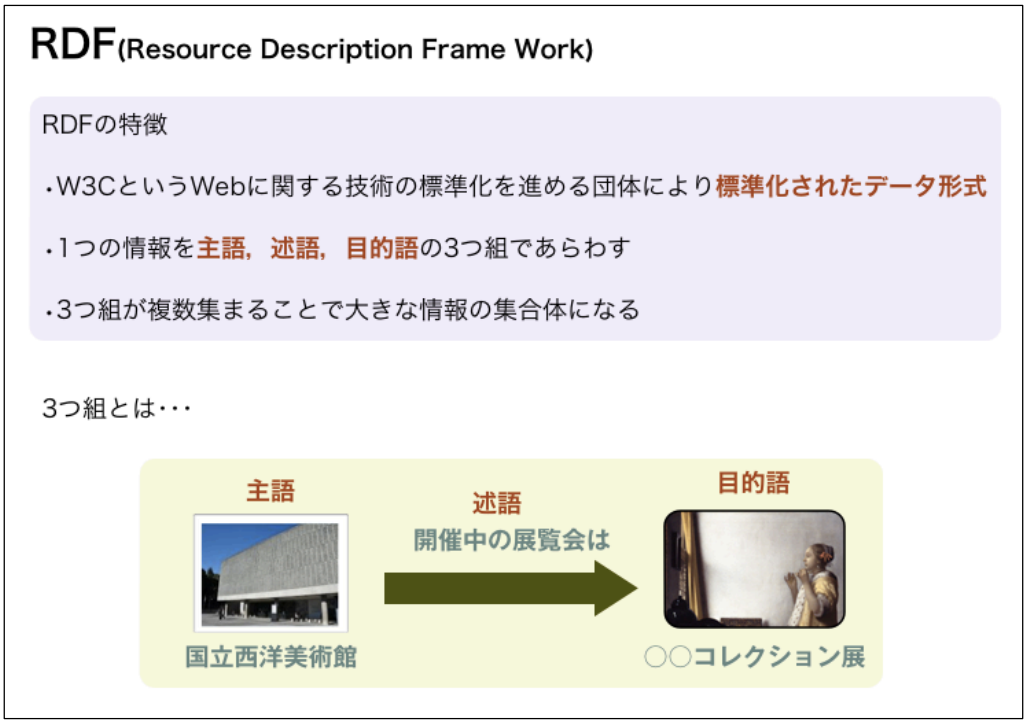
このとき、メタデータにはコンピュータが理解できる形式で記述する必要がある。その際、Web 上に既存のメタデータがある場合にはそれを用いることが望ましいとされている。図中のメタデータのうち「展覧会名」「住所」「名称」をコンピュータが理解できるメタデータに置換すると次のようにマッピングすることができる。

メタデータ(属性)	データ(値)
bmx:exhibition	○○コレクション展
place:Address	東京都台東区上野公園 7-7
dcterms:title	国立西洋美術館

メタデータのうち、名称を示す dcterms:title は Dublin Core Metadata Initiative が定義するメタデータ要素の 1 つであり、このメタデータを使用した場合は、値にタイトルを示す文字列を記述することを定義している要素である。「dcterms」は接頭子と呼ばれ、そのメタデータの典拠元のアドレス(http://purl.org/dc/terms/)を表している。つまり、dcterms:title を正式に定義する場合は http://purl.org/dc/terms/title と記述する。その他の bmx:exhibition、place:Address は下図の通りである。



Linked Data では、メタデータ含めた情報を RDF と呼ばれる標準化されたデータ形式で扱う必要がある。RDF の大きな特徴の 1 つには、情報を主語・述語・目的語の 3 つ組で表現する。

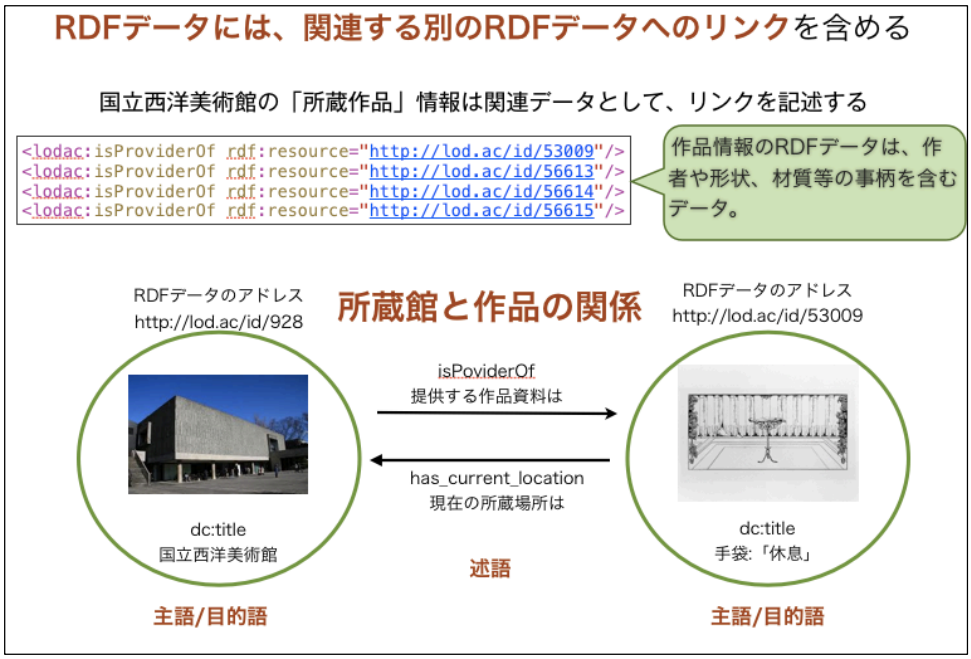


例えば、「国立西洋美術館」という事物で開催されている展覧会を RDF で表現した場合は次のようになる。主語に「国立西洋美術館」述語に展覧会を表すメタデータ、目的語には展覧会のメタデータに対する「○○コレクション展」の文字列または、「○○コレクション展」という事物に関する情報を集約した RDF データのリンク

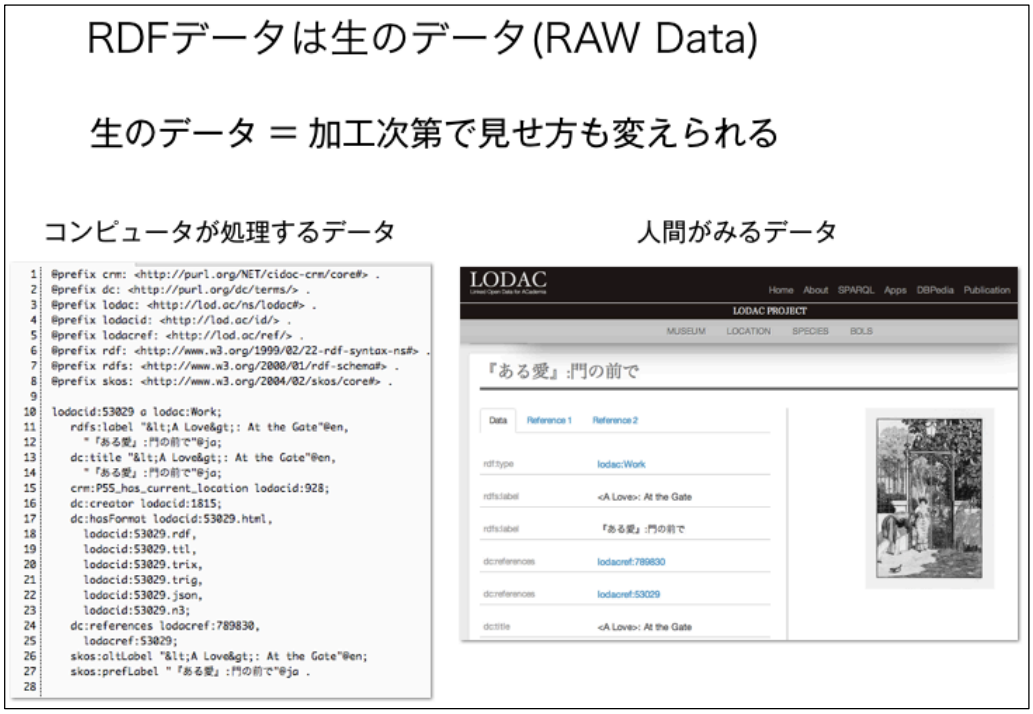
になる。Linked Data の基本原則にはあらゆる事物に URI を付与することとある。このあらゆる事物というのは、現実世界または仮想世界に存在するすべての対象が識別できるように識別子(URI)を付けることである。URI は、インターネット経由で参照できる必要があることから、一般的にはデータを公開するサイトのドメインと任意の文字列で設定される。下記は識別子(http://lod.ac/ref/928)が設定された国立西洋美術館に関する内容が記述された RDF データ例である。

```
<rdf:Description rdf:about="http://lod.ac/ref/928">
    <rda2:affiliation xml:lang="ja">近代美術館</rda2:affiliation>
    <lodac:area xml:lang="ja">13関東</lodac:area>
    <lodac:broadCategory xml:lang="ja">展覧会・美術館・博物館・画廊</lodac:broadCategory>
    <lodac:categorySymbol>t</lodac:categorySymbol>
    <lodac:currentLocationName xml:lang="ja">東京</lodac:currentLocationName>
    <lodac:era xml:lang="ja">きんげんだい</lodac:era>
    <lodac:estimatedStartYear>1959</lodac:estimatedStartYear>
    <lodac:middleCategory xml:lang="ja">美術館</lodac:middleCategory>
    <lodac:narrowCategory xml:lang="ja">近代美術館</lodac:narrowCategory>
    <lodac:symbol>QDGX22</lodac:symbol>
    <lodac:type xml:lang="ja">芸術・美術全般</lodac:type>
    <crm:P133_is_separated_from xml:lang="ja">現代</crm:P133_is_separated_from>
    <dc:created>1959.6</dc:created>
    <dc:description xml:lang="ja">1959年、フランス政府管理下にあった松方幸次郎の滞欧収集作品、松方コレクションが
日本政府に寄贈返還され、これを収容展示するために設立。本館設計はル・コルビュジエ。ロダンの彫刻53点をはじめクールベ、モ
ネ、ルノワール、ゴーギャンを中心にした19世紀フランス絵画の逸品と創設後の購入、寄贈による所蔵作品の増加でルネサンス以降今
世紀中葉に至る西欧絵画の歴史を通観できる態勢を強化。</dc:description>
    <dc:identifier>jart:6krsy001</dc:identifier>
    <dc:source rdf:resource="http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/jart/mokuji/index.html"/>
    <dc:title xml:lang="en">The National Museum of Western Art</dc:title>
    <dc:title xml:lang="ja-hrkt">こくりつせいようびじゅつかん</dc:title>
    <dc:title xml:lang="ja">国立西洋美術館</dc:title>
    <rdfs:seeAlso rdf:resource="http://www.nmwa.go.jp/index-j.html"/>
    <skos:altLabel xml:lang="en">The National Museum of Western Art</skos:altLabel>
    <skos:prefLabel xml:lang="ja">国立西洋美術館</skos:prefLabel>
  </rdf:Description>
```

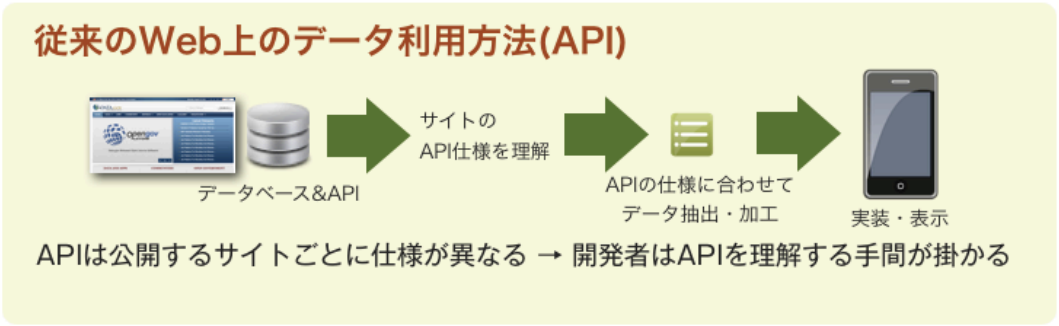
このように、Linked Data では 1 つの事物に対して 1 つの識別子を与えて RDF データを作成する。複数の RDF データ(複数の事物)に関係性がある場合には、RDF データ中にそれぞれのデータが関係することを示すリンクを記述する。例えば、美術館は絵画等の作品を所蔵資料として持つ。このとき美術館と作品の関係を考えることができる。つまり、美術館は美術館の情報が記述された RDF データ、作品は作品情報が記述された RDF データがあり、美術館の RDF データには作品情報を直接記述するのではなく、作品資料について記述された RDF データをリンクとして記述する。これにより美術館は美術館に関する情報、作品は作品に関する情報を切り分けて管理することができる。



RDF データに関連する別の RDF データへのリンクが記述されている場合、主語・述語・目的語の構図は主体とする RDF データによってその配置が変化する。上図の例では、「国立西洋美術館に所蔵される作品」とした場合は、主語が国立西洋美術館の RDF データ、目的語が作品の RDF データになる。一方で、「作品が所蔵されている館」とした場合は、主語が作品で目的語が美術館の RDF データとなる。このように Linked Data で作られる情報には、複数情報との関連をリンクとして記述することで、インターネット経由で関連情報の検索や特定のデータ項目を抽出すること等ができる。RDF データ自体は、コンピュータが読み込める生のデータであることから、RDF データをそのまま人間が見るには難しい。しかしながら、RDF は生のデータであることから、システムの設定次第で人間が理解しやすいように視覚的に表示させることができる。



RDF データでつくられた様々な情報は、ネットワーク上に公開され、オープンデータについてはインターネット経由でアクセスできるようにする。ネットワーク上に公開された RDF データは、直接識別子にアクセスすることでその情報を取得することができるが、RDF データを操作するための標準化技術 SPARQL と SPAQL Endpoint を用いることで、開発したプログラムや検索システムなどから直接データを操作することができる。従来、Web 上に公開された大規模なデータを利用する場合は、サイト側が用意する API を用いてデータ抽出・加工する必要があった。API は、データを公開するサイトが仕様を決めていることから、複数サイトの API を利用する場合には、それぞれの仕様を理解する必要があり、利用者にとっては非常に手間を要している。一方、Linked Data では、標準化された技術を用いてデータを操作できることから、SPAQRL Endpoint で RDF データを公開しているサイトであれば、SPARQL の仕組みを一度理解するのみで良い。また、SPARQL には RDF データの問い合わせの際に問い合わせ結果のデータを加工して出力することやリンク先の RDF データの項目を抽出することができる。従来はデータを加工する場合は API で抽出したデータをプログラム処理する必要があったが、SPARQL を利用することでこれらの処理を省くことができる。



このように、Linked Data または Linked Open Data では、情報を 1 つのデータ単位で扱い、関連する情報は関連情報のリンクを記述することで関係性を定義できる。また、インターネットの技術を用いて情報を特定できる統一資源識別を使用することから、ネットワーク上に公開された自由に操作できるデータベースの様なイメージで利用できる。

8.4. Liked Open Data 利用例
欧州の文化・芸術情報の LOD

8.4.1. 英国 BBC 放送 (http://www.bbc.co.uk/)

BBC 放送では、早くから Linked Open Data のしくみを利用した Web サイトを構築し、番組やイベントスケジュール、アーティストなどあらゆる事物の情報を RDF データ公開している。音楽や動物など自然をテーマにしたコンテンツのページには、それに対する説明を Biography として掲載している。この説明文は、BBC 自らが作文してページに掲載しているのではなく、WikiPedia のデータを LOD 化した DBpedia から必要な項目のみを直接引用している。これにより、BBC は WikiPedia に解説があるあらゆる事物に関するコンテンツを組織の Web ページで利用することが可能になった。実際、アーティスト略歴欄には Wikipedia からの引用である注釈が記載されると共に、Wikipedia 上へのリンクも掲載されている。さらに、アーティストの関連情報である「Linkes & Information」では、アーティストの情報をまとめている MusicBrianz が提供する LOD を利用している。BBC 放送は、公開された LOD を利用するだけでなく、ニュースやスポーツなど、組織内で作られる情報を RDF データで公開している。下図はニュースサイトのある記事の RDF データを解析したものである。このように、BBC 放送では扱う情報の規模が巨大であることから、インターネット上に存在する情報を再利用することで組織内の情報を効率よく整理し、自らも Linked Data として情報発信することで、自らの情報も活用している例といえる。

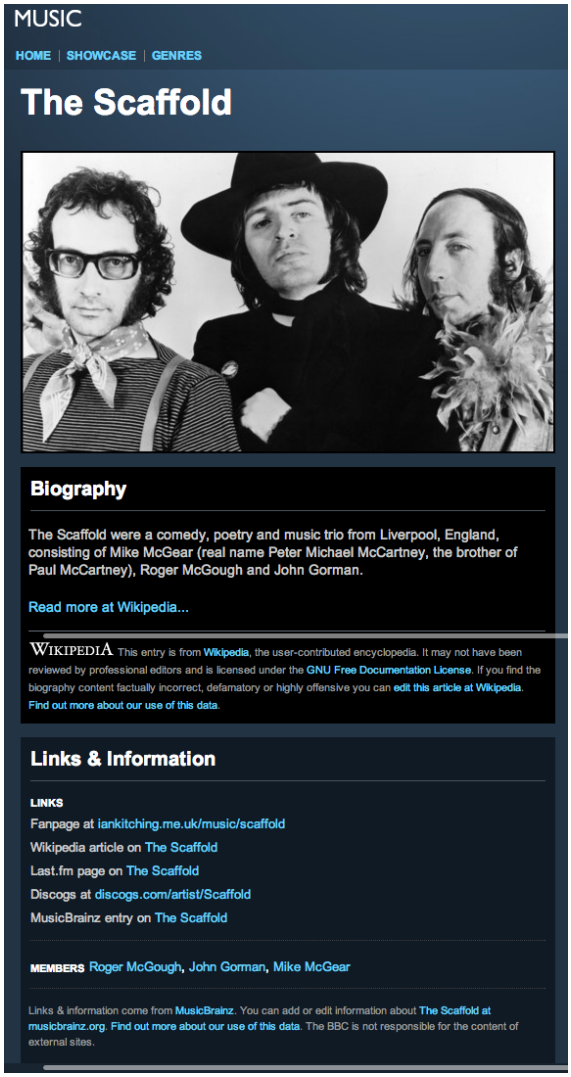


図 8-6 BBC のアーティスト情報ページ

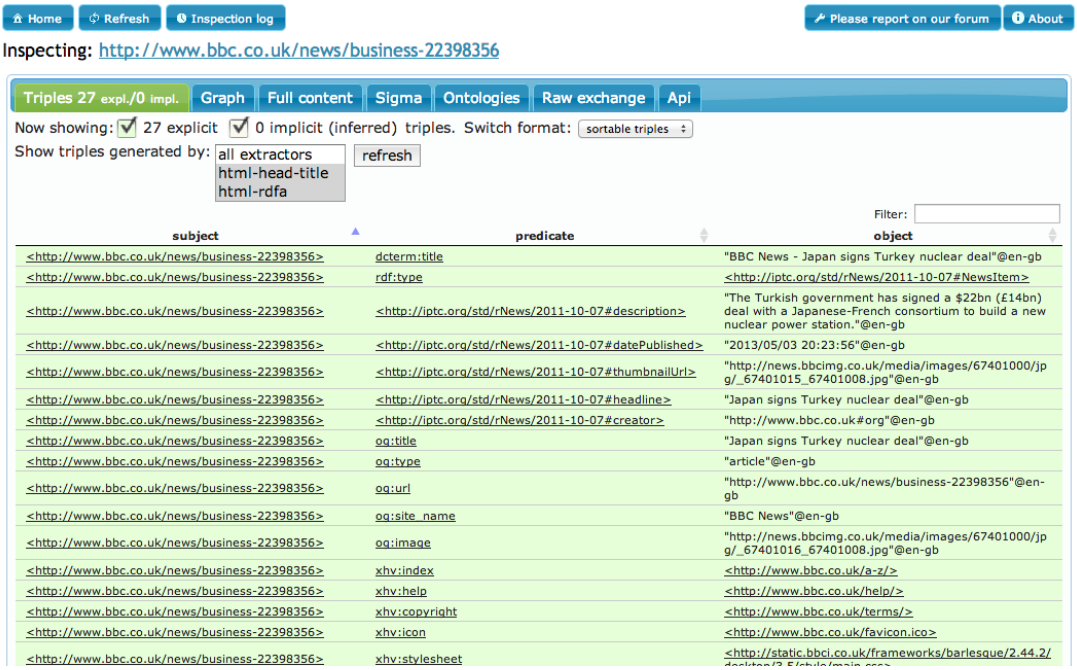


図 8-7 ニュース記事の RDF データ

8.4.2. 大英博物館

ヨーロッパでは芸術・文化情報に関連する LOD の取組みが活発化している。英国の大英博物館では、英国内の博物館と情報系の研究者との博物館情報に関する情報発信・活用について研究を進めており、現在は大英博物館が保有するコレクション情報を Linked Data で公開している。情報の公開には、SPARQL Endpoint を用いており、利用者は大英博物館が使用するメタデータスキーマに応じて必要な情報をインターネット経由で使用することができる(British Museum Semantic Web Collection Online: http://collection.britishmuseum.org/Sparql)。コレクション情報の利用を定めるライセンスには、オープンライセンスで利用することができるが、このライセンス形態は大英博物館が独自に定義する British Museum Open Data License を用いており、一般的なオープンの定義であるパブリックドメインでない点に注意が必要である。このライセンスの適用範囲は、collection.britishmuseum.org 配下の情報のみに適用され、大英博物館本体の Web サイトやそこに掲載されている画像データなどは含まれないとしている。つまり、自由に利用可能な情報は、SPARQL Endpoint から取得できるコレクションのメタデータに限定されている。さらに、メタデータであっても情報使う際の免責事項を定めている点も特徴的である。

大英博物館のコレクションデータは、元々のコレクションデータベースから RDF 形式のデータを作成する際に、博物館資料に特化した資料メタデータ CIDOC CRM を用いている。CIDOC CRM は、国際博物館会議(ICOM)のドキュメンテーション委員会(CIDOC)により策定された博物館資料記述のための国際標準規格(ISO 21127:2006)である。大英博物館では、このメタデータスキーマをベースに独自のメタデータ項目を拡張した BM Extention を作成し、資料情報に適用している。CIDOC CRM は概念モデルであり、元々が複雑かつ難解な構造であることから、本モデルを拡張し、コレクション情報をマッピングした大英博物館のスキーマモデルはより複雑な構造を持つ (British Museum CRM schema: http://annotate.oldman.me.uk/semantic/embed.html)。

8.4.3. Europeana

EU 圏においては、博物館や図書館ならびに文書館の資料情報を大規模なデジタルデータでインターネット上に公開し、情報活用を推進するプロジェクト Europeana が進められている。

Europeana では、2011 年 9 月にメタデータの著作権制限にクリエイティブコモンズ・ライセンス CC0 を適用する協定内容を発表し、翌年の 2012 年には 2000 万件を超えるコンテンツのメタデータを Linked Open Data で公開した。将来的には画像や音声、映像等公開するすべての資料情報に対して CC0 を適用することを目指している(http://pro.europeana.eu/linked-open-data)ただし、画像や映像等メディアデータへ CC0 の適用には情報源である EU 各国内のそれぞれの施設等の同意が必要であることから、当面は時間を要すると見られる。現在のところ、自由に利用可能な情報は大英博物館同様に、メタデータについてはオープンな利用が可能である。おもな利用形態には、LOD としての利用のほか、独自の API の提供(但し登録制 http://pro.europeana.eu/web/api/registration)やデータセットをそのまま公開するなど、利用者が用途や開発環境によって複数選択できるしくみを用意している。データ利用に関する規約や免責事項にいてもその利用に関する留意事項を独自に定めている(http://pro.europeana.eu/datasets)。

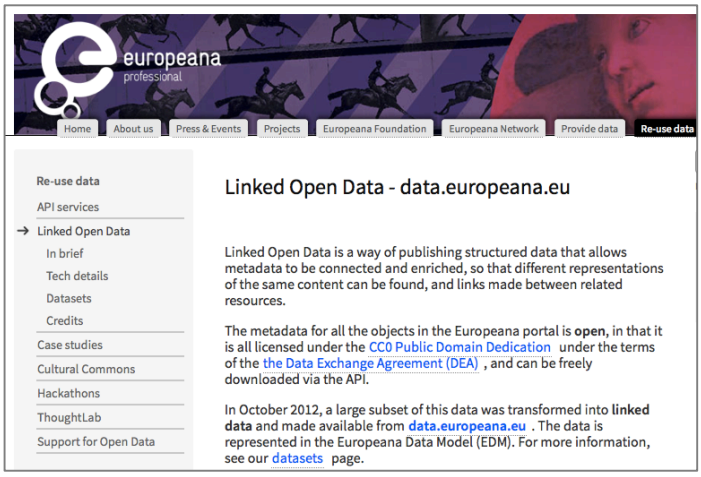


図 8-8　europeana と Linked Open Data

Europeana では EU 各国の文化施設から提供を受けた資料情報を統合的に扱うために、共通のデータモデル(Europeana Data Model: EDM)を作成し、それぞれの資料情報のマッピングを行っている。EDM では図書館、文書館、博物館の資料情報を扱う事から、それぞれの分野に特化したデータモデルを参考に作られており、とりわけ文書資料には OAI ORE(Open Archives Initiative Object Reuse & Exchange: http://www.openarchives.org/ore/)、図書情報には Dublin Core(http://dublincore.org/)および SKOS(http://www.w3.org/2004/02/skos/)、博物館情報には CIDOC CRM を参考にしている。例えば、モナ・リザの資料情報のうち、資料の所在場所と画像情報について記したメタデータは下記の様に表現される。(Europeana Data Model より抜粋 http://pro.europeana.eu/edm-documentation)。EDM では、資料情報をネットワーク上で様々な資料情報と関連づけて利用する事を想定していることから、CIDOC CRM 同様に複雑なデータ構造を持つモデルになっている。これらのモデルを資料情報と共に扱うためには、文化施設等の学芸員だけでは対応は困難であることから、情報系の研究者とともに資料情報の研究を進めて行くスタイルが定着しつつある。例えば、フィンランドではアアルト大学の情報工学の研究室によるシステム開発と博物館の学芸員による資料情報の提供、並びにそれらをの情報を整理する中間役の研究員が連携し、博物館等の芸術・文化情報の活用を進めている。

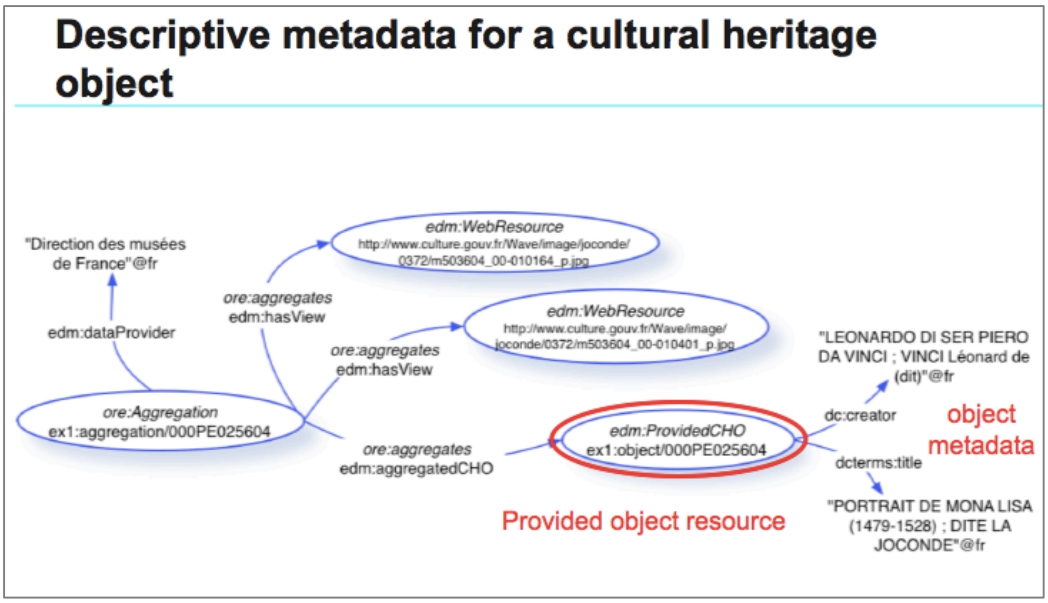


図 8-9 EDM とメタデータ適用

Europeana プロジェクトに参加する一方で、個別の組織内での情報連携・活用に関する研究も進められている。アムステルダム国立博物館は約 70,000 点の資料情報を Linked Data の形式で収蔵品情報を公開している。アムステルダム国立博物館の取り組みで注目すべき点は、資料情報に付与される用語や作家の典拠情報に米国 Getty 財団が作成する ULAN や[1]AAT(Getty Vocabularies-The Union List of Artist Names)を用いると共に、不足する情報については、Getty Vocabularies を拡張した独自の用語や典拠情報の整備を進めている[2]AATNed(Nederlandstalig Art & Architecture Thesaurus:)。さらに、資料に関連するその他の情報には WikiPedia の情報を LOD 化した DBPedia、地理情報に GeoNames を関連づけている点が特徴と言える。データモデルには、Europeana との連携を前提にしていることから、あらかじめ EDM に対応するように作られている。

[1] http://www.getty.edu/research/tools/vocabularies/
[2] http://www.aat-ned.nl/

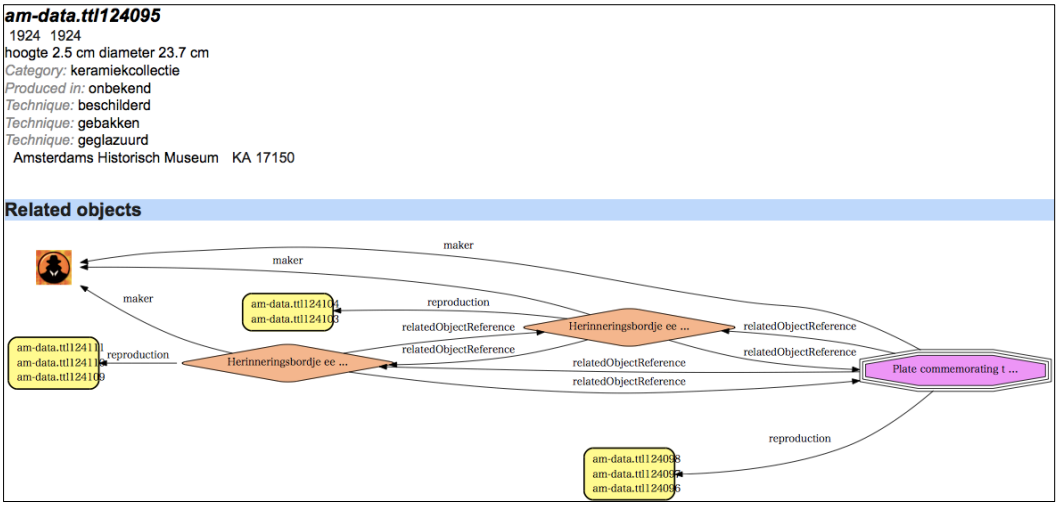


図 8-10 アムステルダム国立博物館のデータ例

8.4.4. その他国際的な動き

この数年の間、Europeana を中心に欧州では文化・芸術情報を LOD で公開する試みが活発に行われ、これらの情報を利用したコンテンツ開発や教育、研究、観光産業への利用が進められている。 一方では、デジタルデータを Web で公開する場合に、それらを扱うための利用範囲に関する議論も進められている。2011 年 6 月には、サンフランシスコで行われた図書館、文書館、博物館の LOD を考える国際会議、[3]International Linked Open Data in Libraries Archives and Museums Summit で 1 つの方針が示されている。博物館等の芸術・文化資料を Web で公開する際のメタデータ記述に際し“a 4-star classification-scheme for linked open cultural metadata”としてクリエイティブ・コモンズおよびオープンデータコモンズのライセンスに沿ったデータ利用に関する表示を適用することを推奨している。具体的には公開する資料のメタデータにに CC0,CC-BY,CC-BY-SA を表記することとしている。博物館等の資料情報にクリエイティブコモンズ・ライセンスの表記を用いた事例では、米国のウォルターズ美術館が約 1 万点のメタデータおよび画像データに対して CC-BY-NC-SA を適用した[4]例がある。

このように、欧米では芸術・文化情報のオープン化や LOD 化に関する取り組みが非常に活発化しており、世界規模のレベルで図書館・博物館・文書館等が情報をオープンに扱い、それらを連携させることによる新たな可能性の発見や資料情報の活用の研究を進めている。これは、組織の内部で資料情報を管理し、業務に使用する資料管理データベースの一部を Web で見せるという従来のスタンドアロン型の情報公開ではなく、情報を見せると共にデータ化された資料情報は誰でも利用することができ、利用者が自由にデータの見せ方を変えることや、データそのものを利用したコンテンツ、システムを開発できるという、新しい情報流通と活用が広がりつつある。

国内の事例では、2010 年より開始した横浜 LOD プロジェクト[27]があげられる。本プロジェクトは地域情報資源のオープンデータを目指しており、横浜市芸術文化振興財団や横浜観光コンベンションビューローが持つ芸術や観光情報を LOD による公開を始めている。さらに、国内の芸術・文化情報基盤整備の一環として、東京藝術大学総合芸術アーカイブセンターでは、文化財保存学日本画研究室編日本画用語辞典[28]を元にした用語の LOD を進めている。主に文字情報として公開される情報にはクリエイティブコモンズ・ライセンスの CC-BY-NC-ND

[3] http://lod-lam.net/summit/2011/06/06/proposed-a-4-star-classification-scheme-for-linked-open-cultural-metadata/
[4] http://thewalters.org/news/releases/pressdetail.aspx?e_id=298

が付与される。このライセンスはクレジット表示、非営利目的、改変禁止で、先述した LOD 方針よりも制限が厳しいものになるが、この制限を適用した RDF データを公開することで、その需要を図るねらいがある。このように、国内外を含めて少しずつではあるが、芸術・文化情報を LOD として公開する動きが高まりつつある。

8.4.5. 日本国内の事例

日本国内での芸術・文化情報に関する Web を活用した情報公開には、公益財団法人横浜市芸術文化振興財団のプロジェクトによるヨコハマ・アート・LOD プロジェクトがある。本プロジェクトでは「横浜市内の芸術・文化情報を LOD 化し、広くその利活用を推進」を目的に掲げ、財団に属する横浜美術館等の文化施設が所蔵する作品や作家情報、イベント情報を RDF データ化し、LOD で公開している (http://fp.yafjp.org/yokohama_art_lod)。公開された LOD データを基に、国立情報学研究所の研究グループが地図とアートスポット、アートスポットで開催されているイベント情報のアプリケーションを開発した例がある。

図 8-11 ヨコハマアートスポット

図 8-12 イベント情報と施設所蔵品リスト画面

このアプリケーションでは、文化施設情報 RDF、イベント情報 RDF、収蔵品情報 RDF、スポットの Q&A 情報 RDF をそれぞれヨコハマ・アート・LOD、国立情報学研究所 LODAC、NTT レゾナントと異なる情報源から利用している点に特徴がある。それぞれの情報はすべて LOD で公開されていることから、情報を収集する方法に SPARQL を使用している。

福井県鯖江市では、自治体レベルのオープンデータを進めており、オープンデータの取り組みに関しては国内でも先進的な取り組みを行っている。株式会社 ATR Creative は、鯖江市が公開した公共情報データを地図上に表示し、観光コース案内や市内のランドマーク情報をスマートフォンで閲覧できる地図アプリを公開している。このアプリケーションには、鯖江市が公開する情報ほか、他の機関が公開する地理情報 LOD を SPARQL 経由で利用している。

図 8-13 観光アプリ「さばえ街なかぶらり」

そのほか、2012 年度は自治体の公共情報や観光情報などをオープンデータにすることで、データ活用のアイディアを競うイベントや、地域の活性化に向けた情報公開に関する活動が日本国各地で行われている。

図 8-14 オープンデータ関連イベント

8.5. 東京藝術大学における Linked Data の可能性

これまで述べてきたように、Linked Data は情報ネットワークを介して異なる分野・種類の情報を共有・再利用するためのこれからの仕組みとして確立しつつある。総合芸術アーカイブセンターでは、これまでに東京藝術大学が積み上げてきた美術、音楽、映像、文書等に関連する芸術情報をアーカイブすることで、教育や研究、創作活動への活用を掲げていることから、多様な分野・種類の情報を取り扱う。また、これらをデジタルデータにすることで、大学のみならずより多くの人々に情報共有することで、社会への還元も視野に入れている。

本プロジェクトによるこれまでの学内調査の結果、発見・収集した芸術資料は、美術や音楽など各分野の教育・研究に利用できる資料として、非常に価値の高いものであることは明らかである。そして、これらの資料を特定の分野ではなく、東京藝術大学というより広義な概念で捉えた場合には、資料単位では見えてこなかった分野や領域を超越した資料間の関連性があることがわかってきた。例えば、大学業務としての記録文書を主体に捉えた場合に、大学史文書を通して音楽・美術の人物情報、人物相関に関係が見られることや、ある美術資料は、医学の分野と関連がみられる等。芸術情報を総合的に扱い、それらに何らかの付加価値を追加することで、資料単体では得られなかった新たな価値を得られる可能性がある。本プロジェクトでは、東京藝術大学が持つ芸術資料を整理することで、芸術という分野の情報基盤を構築することが最大の目標であると考えている。具体的には、芸大出身者の芸術家典拠情報や、音楽・美術に関する専門的なシソーラスの整備が考えられる。芸術家情報においては、在学時の活動から卒業制作、卒業後の活動記録情報などをデータとして扱い、その人物が生涯どのような活動をしたのか、関連する情報をさまざまにリンクされることで作家の典拠データがつくられることになる。海外に渡航し、現地で活動した芸術家についてはすでに海外で情報がまとめられている場合があるが、展覧会や作品情報は一般的な既知の情報に過ぎず、作家が学生時代に過ごした当時の情報は東京藝術大学のみが持つ貴重な情報である。

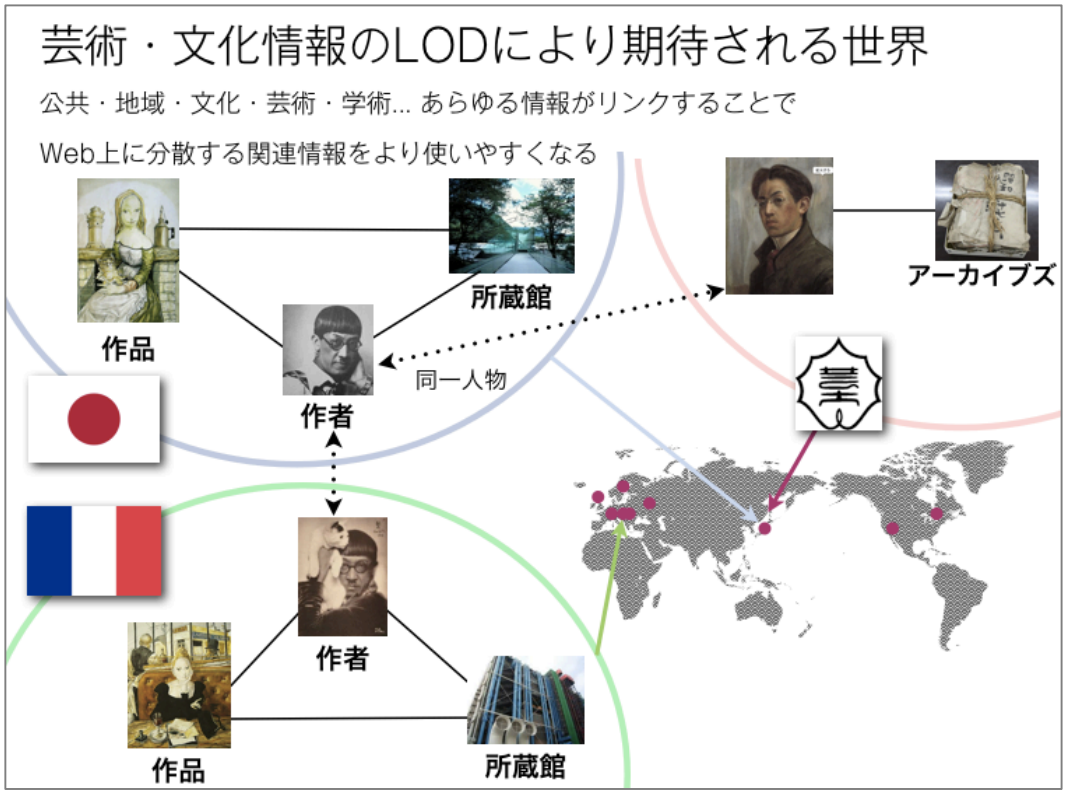


図 8-15 芸術資料と LOD の可能性

例えば、藤田嗣治の作品情報はフランス(Europeana 上)や日本の美術館に所蔵されているが、実際にそれらの所蔵リストや作品、藤田自身に関する情報をまとめてみられるような仕組みは、それぞれのデータがインターネットを通してリンクすることで藤田嗣治という大きな概念が形成されることになる。インターネット上でリンクしたデータは、SPARQL と呼ばれる検索技術を使うことで一様に情報を抽出することできる。作品自体の情報から、作家の情報、それらに関連する情報を共通のデータ形式で公開することは、芸術という分野おいて新たなる価値を創造できるものと予想できる。

さらに、美術・音楽に関するシソーラスの構築では、日本の博物館や美術館における作品情報のキャプションを見れば、その用語の使い方は各館の学芸員や作家自身に委ねられる状態で、共通してことばを参照できる情報基盤が内状況である。東京藝術大学では、伝統芸術分野から近現代の芸術分野までと分野を網羅していると言っても過言ではない、これらの分野で使われている専門用語を整理し、誰もが自由に情報を参照できるようにすることは、その分野において大変に意義のあることと考えられる。また、同じ用語でも他の分野・領域では意味や使われ方が異なるような場合も、それぞれの分野の用語を整理することで明らかにできることである。このように整理されたシソーラスがネットワークを通して利用できることは、インターネット上に公開された作品情報がこれらの用語を参照することで、作品の技法や素材などが共通化される。基盤となる情報が共通化されたのであれば、情報探したいまたは利用したい場合には、共通語をもって統一的に検索することができるのである。

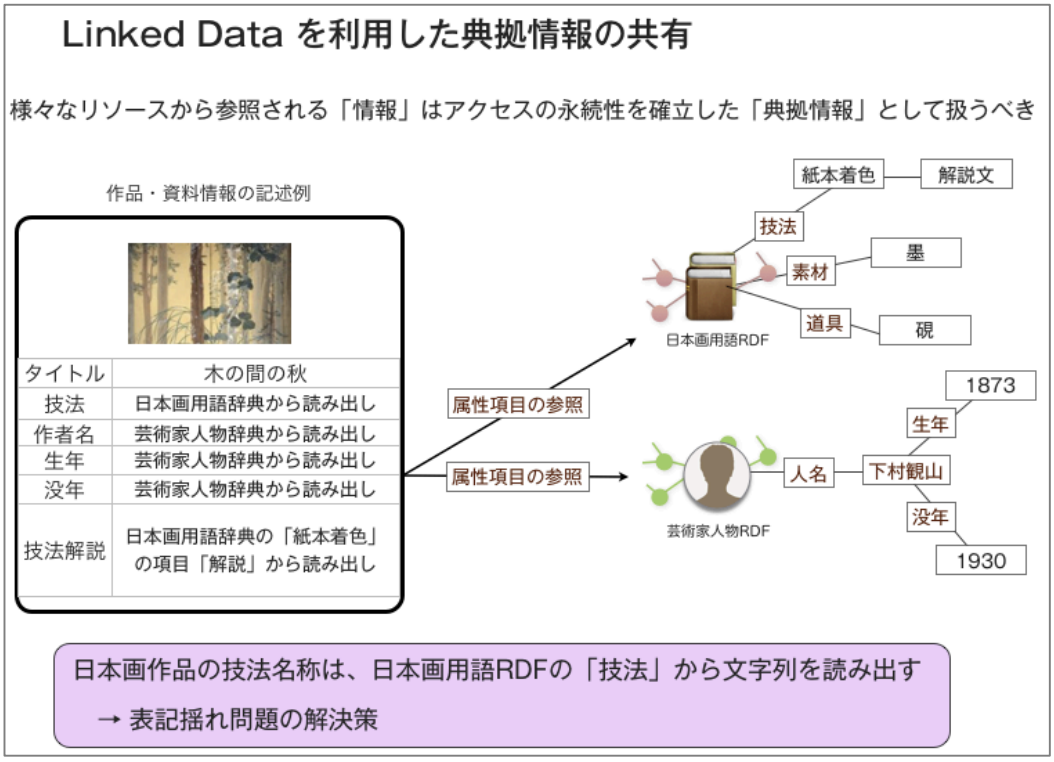


図 8-16　用語 RDF データの活用案

Linked Data の仕組みは、情報の共有と再利用性、情報の統合を大きな特徴にしている。これから構築されるシソーラスや人物情報など、様々な用途が考えられる基盤となる情報には、本仕組みを用いた構築を進め、すでに Linked Data で公開されている情報を利用する場合は、利用したい情報の RDF データにリンクすることで情報を統合することができる。この仕組みは、芸術家の名寄せや用語の整理、異なる出所の情報を統合して扱いたい場合に非常に効果的な方法である。

総合芸術アーカイブセンターでは、様々な芸術分野、多様な資料を対象にしている。情報発信・システム研究プロジェクトでは、各々が 1 つの資料情報として存在し、価値を維持すると共に、他の資料と関連づけて扱うことで新たな発見と活用可能性の研究を進めていく。

平成 25 年度

平成 24 年度に続き、美術学部内の資料の調査・収集作業を進めつつ、昨年度までに収集した資料のデジタル化作業を行った。収集した資料類は、各研究室の授業や講義の記録音声テープ、動画記録資料、科学技術研究費などをはじめとする研究成果資料、藝大美術館や保存修復科活動の記録資料などが記録された記録媒体(メディア)種類と量を精査してデジタル化作業を進めた。

1. プロジェクトメンバー

現職	氏名	職
芸術情報センター センター長，映像研究科 教授	藤幡 正樹	副センター長
芸術情報センター 助教	松井 茂	
芸術情報センター 芸術情報研究員	嘉村 哲郎	
総合芸術アーカイブセンター 特別研究員	生貝 直人	特別研究員
総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手	河内 晋平	教育研究助手
大学院美術研究科 後期博士課程 絵画専攻(壁画)	大江 晃世	アーカイブアシスタント
大学院美術研究科　後期博士課程美術専攻(中世ドイツ)	沖　澄弘	アーカイブアシスタント
プロジェクト協力者		
大学院美術研究科 後期博士課程 文化財保存学専攻	田口 智子	
大学院美術研究科 後期博士課程 芸術学専攻	小山 晋平	
東京文化財研究所	小林 美貴	

※平成 25 年 6 月時点

2. 活動概要 —資料の状態調査と目録作成、デジタル化

（1） 芸術情報センター
- (ア) 芸術情報センター授業風景記録 MiniDV 46 本（データ取込未完)
- (イ) 芸術情報センター学外講師講義録 65 本(一部データ視聴化)
- (ウ) 芸術情報センター講義記録音声　13 本(一部データ視聴化)
- (エ) CREST「mono project」映像データ取り込み 78 本(視聴可)

（2） 美術学部 油画科技法・材料研究室の資料調査と目録化
- (ア) ネガフィルム及びポジフィルム資料 462 枚(調査のみ。データの取込未完)
- (イ) 映像及び音声テープ(計 145 本 データ取込未完)
- (ウ) CREST「デジタルメディアを基盤とした 21 世紀の芸術創造」プロジェクトにおける実験映像及び実習記録ならびにシンポジウム記録動画(計 215 本)

（3） 美術学部
- (ア) 油画科 講義記録映像(複数媒体)目録化 639 本（データ取り込み未完)
- (イ) 芸術学科 美術解剖学掛図、高精細撮影データ: 45 点
  掛図に関する情報の調査とデジタル化計画を行った。45 点のうち 2 点を高精細な撮影手法を自前で行うために東京国立博物館で撮影実験を行った。
- (ウ) 工芸科(陶芸)島田先生研究調査資料: 紙媒体約 1500 点のデジタル化
- (エ) 彫刻科 彫刻論 矢内原先生によるジャコメッティ講義記録のデジタル化
  (紙媒体 86 ページ、音声テープ)

（4） 音楽学部 90 周年記念誌「音楽学部の歩み」デジタル化

3. 活動報告

3.1. mono project

本報告は mono project の記録映像資料のデジタル化作業とその活用方法について調査・作業したものである。

① 資料の調査（記録メディア種類、内容、保存状態など）
② デジタル化作業（保存状態や保存メディアを確認し、作業手順やコーデックの確認）
③ 公開に向けた情報整備
映像資料に関しては、動画視聴サイトの選定と試作を行った（youtube、vimeo、wiki など）。また、動画とともに保存されていたテキスト資料、展覧会情報など付加資料の整理。

time code	スピーカー	内容	画面	重要度
01:00:09:23	I	えっと、今日は東京美術学校から東京芸術大学に伝わる漆の、いろんな、あの、技法のデータの説明を増村先生にしていただこうと思いますが、はじめ、まあ、とりあえずは塗りの下地から塗りのところの説明をお願いします。		A
01:00:30:13	増村	はい、いまこちらにテイタがあの2本ありますけれども、こちらのえー、テイタは、えー、ここに刻苧彫といって、一応木と木を継ぎ合わせてた部分をこの木と同じように補強して、この塗り、最終的な塗りのところで、木を接着した部分のあとが残らないような仕事がわかるためのテイタです。 こちらの方は、同じ下地の、あ、こちらのテイタとこちらのテイタの違いというのは、下地の方法が違います。こちらの方のテイタは地の粉、この地の粉というのは、炭焼き竈の、竈ありますよね。炭焼きのその竈を壊して作った粉です。	増村先生テイタを前に説明	A
01:01:43:10	I	はい、ああ、そうなんですか。	テイタアップ	
01:01:44:05	増村	まあ、一種のシャモット、素焼きの粉なんです。それで、その地の粉は漆にも使いますし、もう一つは、まあ、脱線しますけれども彫金の松脂の、彫金するときに松脂使いますよね。その松脂の中に混ぜる地の粉と同じものです。	増村先生アップ	A
01:02:07:25	I	ああ、そうですか。		
01:02:08:05	増村	ええ、同じように炭焼き竈の土を粉にしたもので、荒い地の粉、切粉地は細かい地の粉、それから最後錆というふうになって、これは砥の粉です。この3種類の目の粗さの違う、何というんでしょ、地の粉をだんだんと目を細かくしていって、最終的な漆塗りの肌を整えるための工程がここに説明されているんですけれども、最初は溝を掘る、掘るというかあの、継ぎ目がありますからこの木とこの木が違うわけですけども、まあ一応掘る。と、掘ったところに麻布をこれ全部、溝のところに張ってあるわけですね。	テイタアップ	
01:03:09:20	I	ああ、そうですか、はい。		

付加資料の例(インタビュー映像の文字興し)

大学美術館などに保存されていた動画資料を中心としたアーカイブ作業を次年度以降は活用に向けて作業を進める。今年度は作業を進める中で、動画内に残されていた職人の方の情報を探しているというご遺族から連絡をいただく機会を得た。その職人の方の生前の資料は今回調査した動画に収められていたインタビューの内容が中心になっており、非常に貴重な資料のアーカイブが実施出来ている事が確認された。今後、同様に多くの方に活用をして頂く為に、コンテンツの紹介（公開）をより進めていく必要性を感じている。

3.2. 美術学部工芸科陶芸専攻 研究資料整理及び保存修復科作業カルテの調査

本調査では、美術学部工芸科陶芸専攻島田文雄教授の研究「日本、中国、韓国の陶芸分野に於ける製作技法の変遷に関する比較研究-伝統技法と現代技法を中心に-」（(財）平和中島財団研究助成・芸術研究振興財団助成）の資料調査・整理作業を行なった。画像データが保存された CD-R,DVD-R の状態確認やデータの移動作業、４冊のファイルにまとめられている調査記録紙資料のスキャン作業を行なった。東京藝術大学保存修復科の作業カルテのアーカイブについても調査依頼を受け、保存状態や記録メディアについての聞き取り調査を行なった。2014 年度は実際のアーカイブ作業についての計画を作成していく予定である。

CD-R に記録されていた研究地調査資料

3.3.　美術用語整理研究（科基盤研究(C)：河内晋平）

文化財管理における美術品用語辞典の構築

本研究は平成 23～25 年科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究(C)「文化財管理における美術品用語辞典の作成」の研究経過報告である。東京芸術大学大学美術館の蔵品目録・データベースからの用語情報を中心とし、東京国立博物館・奈良国立博物館・文化庁による文化財情報をもとにした用語収集の状況と、それらの情報をどのように公開していくのかについて紹介する。

1.　研究背景・目的

本研究の目的は、日本の文化財ついて使用されている用語を収集・体系化し、それら用語に関する典拠情報を作成する事である。現在文化財管理における資料名称や品質形状等の用語については、各施設の学芸員や研究者により様々な表記・使用方法が存在している。そのため、複数施設間で情報共有する際は、互いに使用する用語の確認が必要であり、1 つの資料情報を共有するだけでも多くの時間を要している。このように文化財管理において、ある文化財や美術品にどのような用語を適用するか俯瞰的に参照出来ることは非常に重要な基盤となる。また、各施設で運用が広まっている文化財管理データベースの開発や改良の際にも情報共有の基となる用語の典拠情報があることは非常に有益である

2.　用語事典の構築

2.1.　用語の収集方法と整理作業について

用語の収集に関しては、金工と絵画・書跡分野を対象としているが、他の分野にも本研究で対象とする用語が使用されることがあるため、収集分野としては金工・ガラス・絵画・書跡・歴史資料・建造物を用語収集の範囲とした。2013 年 8 月時点では約 8,000 語の収集を完了している。現在は収集した用語について 200 字以内の解説をつける事を想定した整理作業を行っている。

2.2.　用語の収集と整理方法

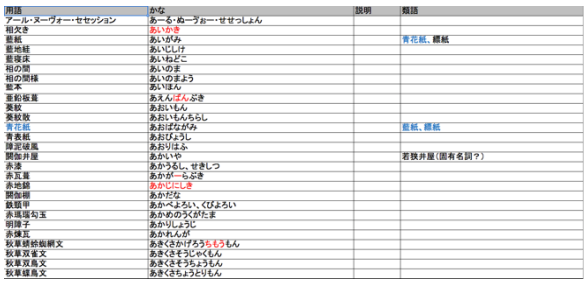
本研究の対象分野のうち、用語整理のために使用している主な典拠情報は次に示すとおり。

1. 東京藝術大学芸術資料館蔵書目録(金工Ⅰ・Ⅱ、絵画・書跡)
2. 東京藝術大学大学美術館データベース
3. 東京国立博物館図版目録(金工・刀装、絵画・日本書跡篇(和様Ⅰ))
4. 東京国立博物館データベース(protoDB)
5. 奈良国立博物館蔵品図録目録(金工、絵画篇)
6. 奈良国立博物館データベース
7. 文化庁監修国宝・重要文化財大全
8. 文化庁国指定文化財等データベース

これらの情報源のうち、各機関から出版されている図録等の目録から手作業で用語を収集し、その後各データベース（作品情報・解説）からも同様の収集作業を行った。収集した用語は、あいうえお順に「用語」、「技法」、「分野」、「員数」、「素材」というカテゴリーを設けて図 3 のようにエクセル表に入力している。基本的に作品名称等の単語はそのまま収集し、明らかに固有名詞だと判断できる単語などは収集対象から外している。

285　金工―557
獅子香合*
後藤程乗（1603～1673）
江戸時代
四分一　鍛造　片切彫　毛彫　鍍金
獅子は赤銅　打出　金・銀色絵
高3.6　径7.3
金象嵌銘「程乗」花押
付属仕覆　棗
大正 2 年 8 月30日買入
286　金工―970
華盛器
真鍮　鋳造
径29.3　高6.8
刻銘「呉」
大正11年 9 月28日買入

図 1. 東京藝術大学芸術資料館蔵書目録(金工Ⅰ・Ⅱ)



用語	かな	説明	類語
アール・ヌーヴォー・セセッション	あーる・ぬーヴぉー・せせっしょん		
相欠き	あいかき		
藍紙	あいがみ		青花紙、縹紙
藍地硅	あいじしけ		
藍寝床	あいねどこ		
相の間	あいのま		
相の間様	あいのまよう		
藍本	あいほん		
蒼鉛板葺	あえんばんぶき		
葵紋	あおいもん		
葵紋散	あおいもんちらし		
青花紙	あおばながみ		藍紙、縹紙
青表紙	あおびょうし		
障泥破風	あおりはふ		
開伽井屋	あかいや		若狭井屋（固有名詞？）
赤漆	あかうるし、せきしつ		
赤瓦葺	あかがーらぶき		
赤地錦	あかじにしき		
開伽棚	あかだな		
鉄頭甲	あかべよろい、くびよろい		
赤瑪瑙勾玉	あかめのうくがたま		
明障子	あかりしょうじ		
赤煉瓦	あかれんが		
秋草蜻蛉蜘蛛文	あきくさかげろうちもうもん		
秋草双雀文	あきくさそうじゃくもん		
秋草双鳥文	あきくさそうちょうもん		
秋草蝶鳥文	あきくさちょうとりもん		

図 2. 作業時入力の excel シート

図 3. 用語整理の検討図

3. 用語データの公開と利用

本研究で整理してきた用語は、その成果の 1 つとしてデータで公開することで、広く活用することも目的としている。これまでに整理してきた用語データは、エクセル表に用語の解説文及び用語間の関係を記述していることから、これを汎用的なデータ形式に変換し、インターネット経由で利用することを想定し、 (1).Wiki、(2)CKAN、(3).SPARQL Endpoint の 3 種類の公開方法を検討している。

3.1. Semantic Media Wiki の利用

Semantic Media Wiki(http://semantic-mediawiki.org/)を利用したインターネット上への情報の公開と編集を可能にする試みである。Wiki を利用する場合の利点には、情報に修正が必要な場合は、Web ブラウザを用いて容易に編集可能な点がある。これにより、解説文の訂正や、用語に関する他の情報、例えば画像、映像、書籍等が追加できる。また、Semantic Media Wiki のデータの編集方法には、Wiki 特有の記法のほか、一般的な Web フォームを利用して情報を編集できることから、高度なコンピュータリテラシーが必要なく扱える特徴がある。Wiki は誰もが自由に情報を編集できることから、用語に対して意図しない編集が加えられる可能性もある。不特定多数による編集を避けたい場合は、必要に応じて登録済のユーザにのみ編集権限を与えることもできる。同種の Wiki をもちいた大規模の情報公開の例には東日本大震災で影響を受けた文化施設の情報共有サイト saveMLAK(http://savemlak.jp/)がある。

3.2. CKAN の利用

CKAN(http://ckan.org/)とは、近年活発に活動がなされているオープンデータの活動の成果を公開するデータポータルとして英国をはじめとする各国で活用が進められている。

CKAN では、データの形式は問わず、広く共有したいデータをアップロードすることで、開発者等データ利用者が公開されたデータを検索し、データを直接ダウンロードすることや、API を通して利用できるデータカタログポータルサイトである。現在公開されているデータは、行政関連のデータが主であるが、米国のカタログサイト のように、今後は研究データ等の学術データも自由に利用できるオープンデータとしての公開が進むと考えられる。したがって、本研究で構築する用語についても、広く情報を共有する目的があることから、CKAN を用いた CSV 形式でのデータの公開を考えている。

3.3. SPAQRL Endpoint の利用

SPARQL Endpoint は、RDF 形式のデータを操作する API である。インターネット経由で RDF データ内の各項目に対して直接リクエストをするなどの操作できるため、用語のような典拠となるデータをインターネット経由で引用して利用することができる。

インターネット経由で特定の用語の ID を引用して、情報を記述することは、従来のリレーショナルデータベースで使われてきた複数テーブル間の ID 管理の部分がインターネット上のアドレスに置換されるイメージである。これにより、ネットワーク経由で一元的に管理された識別子(IRI)を指定して用語の文字列を読み出すことから、これまでに博物館等の分野で課題とされてきた用語の表記揺れを解決できる手法と考えている。

このように、用語を SPARQL で公開するためには、データを RDF 形式にする必要がある。RDF 化の際に利用するメタデータは、用語の関係性の記述に適した SKOS を用いるが、SKOS で表現が難しいデータ項目があった場合は、一般的に広く認知されているメタデータ(例えば DCMI 等)もあわせて使用していくことを検討している。

3.4. 用語データの管理

本研究で構築された用語は、3 種類の形式で公開する予定である。そのため、内容に変更があった場合の整合性について現時点での案を示す。3 種類の公開方法のうち、編集が容易なしくみは Wiki であることから、基本を Wiki 上のデータとし、内容に変更があった場合は定期的に CSV への書き出しを行った後、CKAN と SPARQL への反映を行う。このとき、CKAN からダウンロードして利用しているユーザがあった場合は、CSV データを再ダウンロードしてもらう必要がある。SPARQL 経由で利用している場合には、値を直接引用していることから、更新の時点で内容が自動的に変更される。SPARQL を用いることは、利用者にとって内容更新等の運用負荷を削減できるが、場合によっては自動的に内容が変更されては困ることも考えられるため、SPARQL の利用が適当であるかはデータを使用する側がコンテンツにより利用を使い分ける必要がある。

4. 課題と今後の展開

用語の収集に時間を要する作業の一つが、「読み仮名」に関する情報が用語の中に多数存在している事である。例えば濁点について複数の読み仮名が存在しているため、可能な限り展覧会図録などを参照し、翻訳テキストなどから情報を収集している。建築などの分野では時代や場所の名前がついている「～的」という表現があるので、それらを用語としてどのように定義づけるかについては、今後用語の整理対象となる分野を増やす中で検討する必要がある。今後は収集した用語の整理作業を引き続き進めながら、新たに追加すべき用語と用語に関する解説の入力作業を引き続き行っていく。その上でそれらの情報に対応したシステム構築行う。その際に、どのように用語事典を活用すべきかについて研究者や学芸員、大学職員などの要望を吸い上げながら構築を行う予定である。システム構築に関しては、既存の情報管理システムを使用しながら、より汎用性が高いものの考察を進めて行く。

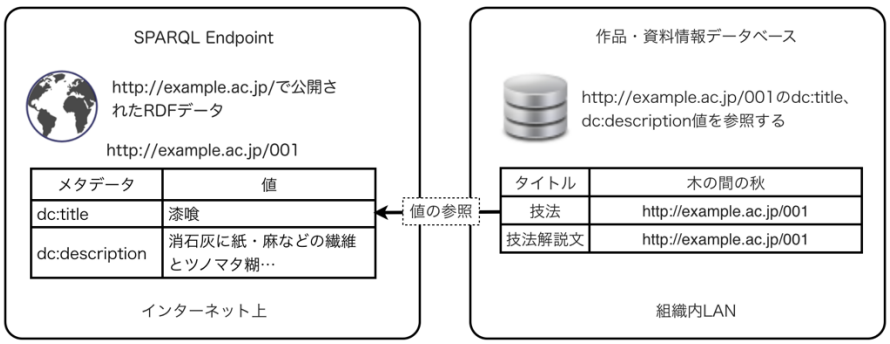


図 4. 用語 RDF データの利用イメージ

3.4.　彫刻科の資料の発掘調査、講演記録リストの更新（映像、音声）とデジタル化

美術学部彫刻科・彫刻棟内における調査では、昨年に引き続き、彫刻科内で催された講演会や彫刻論の映像と音声の記録をデジタル化しつつ、その保存状態の把握に勤めた。音声記録のテープに関してはメディアの劣化が懸念されたため、音楽学部の音響施設との協力のもとに作業を進めている。
音声記録テープをデジタル化した際のフォーマットは次の通り。

フォーマット：WAV（非圧縮）
サンプリング周波数：44.1kHz
ビットレート：16-bit

その他にも美術研究科彫刻専攻の博士課程の論文発表の模様を記録した映像も出てきており、今後の大学教育における大学院の研究内容を検討していく判断材料となりうるのではと考えている。音楽学部での博士発表演奏映像のアーカイブと合わせて共有出来る仕様について検討していく。今後、彫刻科を一つの事例として美術研究科内で進めて行けるのが理想的である。

教育資源の発掘という観点での調査では、彫刻科初代教官の高村光雲による「木寄法」と呼ばれる木彫の伝統技法の制作過程を模型にした、当時使用されていたとみられる木彫教材を調査した。まだ模型に関するメタデータ等は作成できておらず、詳細は不明であるが、現状の写真撮影とリスト化のみを行った。デジタル技術を用いての今後の活用方法を模索できればと考えている。例えば、デジタル複製して教材として活用できるようにコンテンツ化して教育現場へ還元するなどが考えられる。

管理番号	テープ名	テープ長さ	テープ表記日付
①	続．彫刻論_6/16／矢内原伊作先生（ジャコメッティについて）	90	6/16/82
①-2	彫刻論_6月16日（水）1982／矢内原伊作先生（ジャコメッティについて）	90	6/16/82
②	美術学部特別講演会_アンソニー・カロ氏を迎えて／1995.6.27_中央棟第一講義室	120	6/27/95
③	彫刻論_吾妻兼治郎先生／平成7年5月17日PM1:00～	120	5/17/95
④	彫刻論・小清水漸_85'.10.9	120	10/9/85
⑤	フィリップ・キング氏講演／1987年10月3日PM1:00～_第四講義室	120	10/3/87
⑥	モニク・フォー女史講演会_1995.10.20	60	10/20/95
⑥-2	モニク・フォー女史講演会_1995.10.20	120	10/20/95
⑦	1991.6.12_彫刻論／飯田善國先生	120	6/12/91
⑧	No.2_篠田守男氏／カッセル・ドクメンタ／'82.9/9	90	9/9/82
⑧-2	No.1_篠田守男氏／現代美術／'82.9/9	90	9/9/82
⑨	彫刻論_10.24_伊藤公象_於資料室	120	10.24（年表記なし）
⑩	彫刻論・菅原二郎_1985.6.26	120	6/26/85
⑪	速水史朗先生彫刻論_II／1983年10月22日（土）	90	10/22/83
⑪-2	速水史朗先生彫刻論_I／1983年10月22日（土）	90	10/22/83
⑫	彫刻論_1984.10.17_堀口泰造_於資料室	120	10/17/84
⑬	宮脇愛子先生_公開彫刻論「うつろい」／2・6・27_大集会室（大学会館）にて	120	1990.6.27？
⑭・⑮	彫刻論・川下成海先生（'84.7.4_於資料室）	120	7/4/84
⑯	彫刻論_1984.10.31_鈴木実_於資料室	120	10/31/84
⑰	1_彫刻論_中瀬康志	120	表記なし
⑱	彫刻論_中瀬康志_2	120	表記なし
⑲	彫刻論_荒木高子先生_1984.6.20_於資料室	120	6/20/84
⑳	彫刻論_伊藤茂之先生_昭和60年6月19日	120	6/19/85
㉑	空間の変容_トーク1_'97.11.20／野口氏．森．棚田．小谷	120	11/20/97
㉑-2	空間の変容_トーク2_'97.11.27	120	11/27/97
㉒	原武典先生特別講義_1995.12.13	150	12/13/95
㉒-2	原武典先生特別講義_1995.12.13	120	12/13/95
㉓	1995.10.25_彫刻論_多和圭三先生	120	10/25/95

音声テープ資料のリスト

3.5.　美術解剖学研究室所蔵の解剖図

美術学部美術解剖学研究室の「解剖掛図」に関しては、大正時代に油画科の久米桂一郎教授とその門下生によるものとされており、掛図は大学院生の教育研究資料として現在に至るまで使用されている。保存状態を考える上においても、すぐにでもデジタル化することが望ましい。平成 25 年度は 45 枚の図の保存状態を確認し、デジタル化の方法を検討した。結果、サイズが大きいためにスキャナでの取り込みは困難であることと経年劣化による紙の状態が悪いことから、つり下げでの撮影等ができないことがわかった。結果、設置台を作成してデジタルカメラ撮影を行う方法を採用した。当該年度は当センターで撮影を行う前の試験として、東京国立博物館協力の下で状態が良い 2 枚をデジタル撮影した。

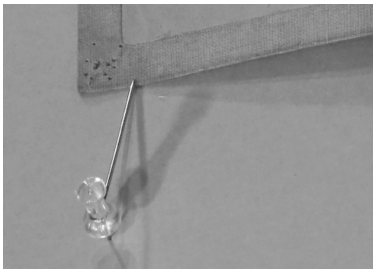
運搬後の開梱

撮影用セットの組み立て

使用したランプ

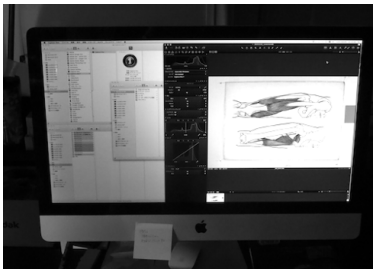
光源の調整

自作の虫ピン



ハネを防ぐために虫ピンを使用して固定する

撮影



撮影後の確認

3.6.　彫刻科石膏取り映像記録・編集

美術学部彫刻科の 1 年生を対象に毎年行なわれている石膏取り技術講習授業の様子の映像記録と編集を行った。専門的な知識と技術を持つ講師の方を招いての授業である為に、実験的に多数のカメラを使用し、どのような記録方法が制作現場の記録において有効であるかの検討も同時に行なった。ビデオカメラは天井、地上固定カメラ 1 台、地上手持ちカメラ 2 台、小型カメラを使用しての接近映像やカメラマンが立ち入れない箇所への撮影を行なう為に計 5 台のカメラを使用しての記録を行った。井野先生による作業中の説明の音声は専用のレシーバーを用いて記録し、同時にビデオカメラ内蔵のマイクを使用して作業時の音も記録した。専門的な技術の記録となる為に、事前に彫刻科の教授、講師、助手との打ち合わせを行い、講師の先生の動き方や進め方についての確認を行なった。

① 「スケジュール」
撮影スケジュールは全１０日間とし、授業の進行状況に合わせる。
② 第 1 回事前打ち合せ
記録内容確認（絵コンテなどのシナリオチェック、石膏取り作業についての講習）
③ 第 2 回事前打ち合せ（撮影現場での打ち合せ）
④ 撮影
⑤ 編集内容確認（彫刻科教授・講師・助手と映像編集者）
記録された全映像を彫刻科教授、講師、助手とともにチェックし、必要な映像の選定、テキストの有無や内容の確認、編集映像の確認（動画活用者の確認、保存方法の検討）
⑥ 編集作業（納品データ形式の確認）
⑦ 完了

映像編集環境

使用ソフトウェア	Adobe Premiere Pro CS5,CS6
映像のサイズ	1280×720
レンダリング形式	.mpg(MPEG ムービー)　仮の書き出し
ファイルサイズ	3.31GB
フレームレート	29.97
チャプター数	24(本編 23＋道具紹介 1)
完成映像時間	本編/44 分 41 秒　道具紹介/20 分 22 秒

スタッフ

撮影スタッフ:河内晋平（総合芸術アーカイブセンター）、越田乃梨子（カメラマン）、土屋（総合芸術アーカイブセンター）、彫刻科。

今回はカメラマンの 1 人に実際の石膏取り作業について経験のある河内が入ったことで、要所でのカメラアングルなどの指示が行えた。そうでない場合は一度カメラを担当する者が記録する対象の作業を経験しておくことが望ましい。ただ今後、美術学部の他科でも同様のアーカイブ作業を行う際に、動画記録を行なうカメラマンが美術学部各科の様々な制作技術を体験する事は現実的ではないため、必要最低限の映像記録における指針を示し、各科研究室内での作業（担当研究室の助手などがカメラの使い方を覚えて記録する）が行なえるようになる事が望ましい。また、今回のケースでは、技術記録を目的としているものの、授業中の撮影となる為に、手元等の映像が記録しづらい場面があった。そのために別場所等で必要カットを撮影できる環境があるとより内容のある記録となるであろう。今後、実際に記録した映像資料を学生や卒業生に活用してもらい、その都度フィードバックを受けながらアーカイブについて改良を加えて行く事が必要となる。

平成 26 年度

平成 26 年度は前年度から進めてきた学内の資料調査の結果を元に資料のデジタル化と目録の作成、WEB 公開を進めた。とくに WEB サイトをリニューアルしたことに伴い、成果物を広く発信する点を重視し、デジタル化と目録化が完了したデータからすぐにコンテンツが公開・利用できるようにコンテンツの投稿・公開の仕組みを工夫した。サイト上のコンテンツは大部分が学内 LAN に限定したアクセスの講義映像である点は課題となった。広く利用されるコンテンツにするためには、仕掛けが必要である。例えば、音声と楽譜の画像を組み合わせた復元音源や映像に字幕や解説テキストの編集を加えた彫刻科石膏取りのなど、視聴者に直感的に内容が把握できるコンテンツに仕上げることが求められる。しかしながら、映像や音声編集、シナリオ作成等の検討を行ったが、非常に多くの時間・コストが必要になることから、必要最低限の映像編集(トリミングや場面カット、補正等)のみに至った。

1. プロジェクトメンバー

現職	氏名	職
芸術情報センター センター長，映像研究科 教授	藤幡 正樹	副センター長
芸術情報センター 助教	松井 茂	
芸術情報センター 芸術情報研究員	嘉村 哲郎	
総合芸術アーカイブセンター 特別研究員	生貝 直人	特別研究員
総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手	石山 星亜良	教育研究助手
大学院美術研究科 後期博士課程 絵画専攻(壁画)	大江 晃世	アーカイブアシスタント
プロジェクト協力者		
大学院音楽研究科 修士課程 音楽学専攻	太田 郁	
大学院美術研究科 後期博士課程 文化財保存学専攻	田口 智子	
大学院美術研究科 後期博士課程 芸術学専攻	小山 晋平	
東京文化財研究所	小林 美貴	

※平成 26 年 6 月時点

2. 活動概要

（1）情報活用基盤
- (ア) ウェブサイトのリニューアル
- (イ) コンテンツの作成と公開
- (ウ) 工芸用語事典データ入力・公開システムの構築
- (エ) 演奏会情報管理データベース「Music DB」の構築
- (オ) メタデータ検索システム試験版構築
- (カ) 卒業・修了作品集の「材質・技法」用語整理

（2）展示・イベント等
- (ア) 2014 年 6 月 4 日　アート・ドキュメンテーション学会年次大会
- (イ) 2014 年 9 月 10 日　講義映像アーカイブ&選書展
- (ウ) 2014 年 11 月 25 日　慶応義塾大学 DMC 研究センターシンポジウム(講演)
- (エ) 2015 年 1 月 26 日　アーカイブサミット 2015(講演)

（3）資料のデジタル化と公開

情報源	コンテンツ名	データ件数	公開済映像・音声声	公開済画像
彫刻科	彫刻論	166	4	
	石膏取り	24	24	626
芸術情報センター	芸術情報特論	135	79	
	情報プロデュース論	14	14	
	電子音楽概論	2	2	
	芸術情報概論	7	7	
	デジタルサウンド演習	22	22	
	サウンドデザイン演習	13	13	
	スタジオサウンド演習	14	14	
	サウンドプロジェクト	18	18	
	AMC 展示	1		
	もうひとつの都市ソラリス展	9	4	
	インクジェットプロジェクト	2	2	
	mono project	93	52	
解剖学研究室	美術解剖図	57		57
油画科	講義映像	171	5	
大学史史料室	ブルーボックス写真群	83		83
合計		831	260	766

3. 活動報告

3.1. ウェブサイトリニューアル

これまで暫定的に公開していたウェブサイトは、使用していたサーバが物理的な障害が発生したため、サーバの移動を行った。この機会に合わせてこれまでに蓄積したデータをインターネットで公開するためにウェブサイトの更新を行った。サイトには著明な CMS(Contents Management System)、WORDPRESS を用いている。記事の投稿には映像データやプロジェクトのカテゴリー単位で入力すべき内容を提示する入力フォームを用意することでページ作成者の負担軽減を計っている。次の図は「mono project」の映像データの公開画面である。テンプレートメニューの「mono project」を選択することで mono project に特化した映像公開ページ設定され、カテゴリーの映像を選択すると映像公開に必要な選択肢「学内限定公開」などが表示される。WORDPRESS のカスタムフィールドおよびリピーター、カスタムポストテンプレート機能を実装して実現している(図右)。

リニューアルしたトップページ

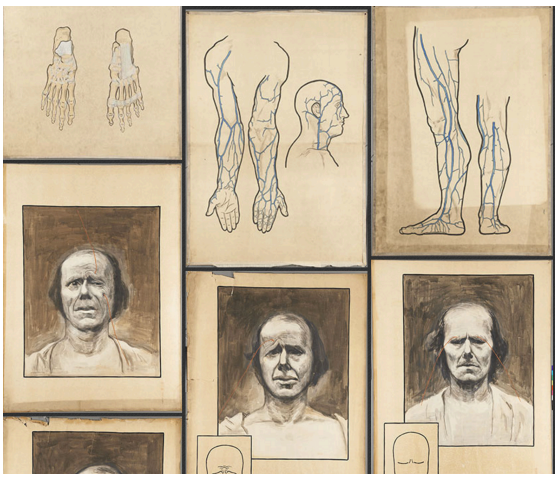
記事の投稿画面例

3.2.　コンテンツの作成と公開

2014 年は、前年度に収集した資料や調査内容に基づきデジタル化と目録の作成を行った。

（1）美術解剖図

美術解剖学研究室が所蔵する 45 枚の掛け図は、前年の東京国立博物館でのテスト撮影を経て、東京藝術大学写真センターで学内での撮影を行った。撮影はテスト時と同様にデジタルカメラによる撮影である。撮影後は RAW データと高解像度 JPG データ、WEB 公開用 JPG データを作成し、各画像にメタデータを付与した後にギャラリー機能を実装して公開した。

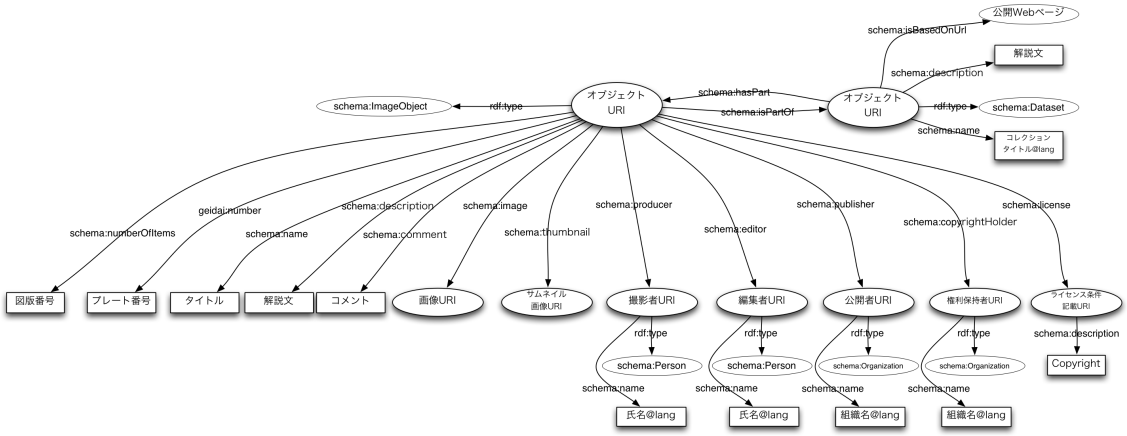


http://archive.geidai.ac.jp/3573　　http://archive.geidai.ac.jp/media/img/anatomic/

Web 公開に際し、画像やメタデータの利用条件は次のとおりである。

画像データ:「私的」および「教育・研究目的」に限り利用可
メタデータ: クリエイティブ・コモンズ・ライセンス・ゼロ(CC0)

さらに、メタデータについては試験的に利用している RDF データベースを使用し、RDF で公開した。データ形式は XML/RDF、Turtle、JSON/LD である。SPARQL Endpoint から利用する場合は次の URI から利用可。
http://archive.geidai.ac.jp/sparql/



（2） 講義映像

芸術情報センターをはじめとする過去の講義映像をアナログテープからデジタル化し、WEB 公開を行った。この際、講義のタイトルや講師名などの基本情報がのこされていなかったため、過去のシラバスを取り寄せて目録を作成した。映像テープのデジタル化は記録時間の分だけ時間を要するが、目録作成のための情報を調査する手間も同等以上に要した。

http://archive.geidai.ac.jp/840

http://archive.geidai.ac.jp/1494

美術学部油画科では大量のアナログテープが保管されており、これらのデジタル化をすすめ。約 600 本に及ぶため、当時つけられたラベルを頼りに目録を作成し、とくに注目すべき講義映像のみをデジタル化した。なお、これらのテープを民間に委託した場合は次のような見積金額になった。

御見積金額　2,015,000 円

メディア名	内容	単価	本数（本）	金額
8mmビデオ	映像	3,000	74	222,000
DVD	映像	3,000	18	54,000
Hi8	映像	3,000	9	27,000
miniDV	映像	3,000	461	1,383,000
VHS	映像	3,000	29	87,000
video8	映像	3,000	3	9,000
オープンリール	映像	12,500	8	100,000
ブローニーフィルム	映像	5,500	1	5,500
ベータマックス	映像	3,000	4	12,000
カセットテープ	音	3,500	30	105,000
レコーディングテープ	音	3,500	3	10,500
合計				2,015,000

（3） その他に公開したコンテンツ

（ア） 音楽学部のあゆみ —東京芸術大学創立 90 周年年誌を PDF データで公開

（イ） 東京藝術大学 大学史史料室に保管されていた「青い箱」に入っていた写真。

（ウ） 復元音源アーカイブズ
東京音楽学校が外部から依嘱をうけて作曲した数百曲にのぼる“うた”の中から、「時代背景などから現在は歌われていない作品」の音源を復元し、依嘱作曲関係資料（本学総合芸術アーカイブセンター大学史史料室所蔵）の楽譜画像とともに、視聴可。

（エ） 彫刻科 石膏取り技術講習授業
美術学部彫刻科の 1 年生を対象に行われている石膏取り技術講習授業の記録映像。
粘土の彫塑から型を取り、石膏像ができるまでの行程の解説。

（オ） 彫刻論　彫刻科の講義音声

（カ） 油画技法材料研究室
素材と表現などの実習映像、講義映像、坂本一道退官展映像等 31 の映像を公開した。

（キ） 芸術情報センター
2003 年から 2013 までの芸術情報特論や電子音楽概論など。

3.3. 講義映像アーカイブ&選書展

- 会期：2014 年 9 月 10 日（水）～10 月 7 日（火）
- 場所：東京藝術大学附属図書館 2 階入口 PC 区画、美術資料閲覧机
- 主催：総合芸術アーカイブセンター 情報発信・システム研究プロジェクト
- 協力：東京藝術大学美術学部 絵画科油画研究室、附属図書館
- 企画概要 ：
  総合芸術アーカイブセンター 情報発信・システム研究プロジェクトでは、美術学部絵画科・油画研究室が保有する映像資料(約 630 本) のうち、著名な講師 5 名の講義映像をデジタル化した。これらを学内ネットワークで視聴可能にすると共に、インターネット上の関連情報と本学附属図書館が所蔵する講師に関する書籍を構成して紹介する「講義映像アーカイブ＆選書展」を行う。デジタルアーカイブへの期待と需要が高まる今日、デジタルリソースに従来からの図書館機能であるレファレンスサービスを関連付けることで、インターネット時代における本学附属図書館の可能性を探る。本企画は油画研究室をはじめとして、彫刻科や芸術情報センターなど他学科・組織の講義映像アーカイブのシリーズ化を想定している。

附属図書館での展示風景

3.4.　2014 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会

シンポジウム「芸術アーカイブと上野の杜連携」および研究発表会・総会

主 催：アート・ドキュメンテーション学会（JADS）
共 催：東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター
後 援：記録管理学会／情報処理学会 CH 研究会／情報知識学会／日本アーカイブズ学会／日本デジタル・ヒューマニティーズ学会／日本ミュージアム・マネージメント学会　（50 音順、依頼中も含みます）
日 時：2014 年 6 月 7 日（土）-8 日（日）
参加費（資料代含む）会員　￥1,000 非会員　￥1,500
※懇親会　6 月 7 日（土）シンポジウム等終了後　音楽学部食堂「キャッスル」
会費：4000 円

概要

さまざまな分野の芸術領域におけるアーカイブについては、近年その重要性が強く認識されるようになっています。アーカイブは単に過去の活動の記録にとどまらず、新たな表現を生み出し、また社会に対して文化活動の意義を訴求するための大きな資産となるものです。同時にアーカイブは単独で成り立つ組織ではなく、同じ分野の他機関やミュージアム、ライブラリー等の類縁機関との連携によって、よりその存在意義が深まります。

今回、学校、博物館、美術団体、音楽ホールなどが集中し、日本の近代以降における諸分野の芸術の揺籃の地とも言える上野で、アート・ドキュメンテーション学会と東京藝術大学総合芸術アーカイブセンターとの共催により、さまざまな芸術分野のアーカイブ、そしてミュージアム、ライブラリーの取り組みを共有し、特に「地域における連携」という視点から今後の研究や事業の展開を図るきっかけとしようとするものです。

●大会プログラム

【第 1 日目】　2014 年 6 月 7 日（土）
会場：東京藝術大学音楽学部 5 号館 5-109 教室
12：30　受付開始
13：00 ～ 17：00　■シンポジウム「芸術アーカイブと上野の杜連携」■
［主催者挨拶］13:00-13:10
［基調講演］13:10-13:40
「東京藝術大学と上野の杜連携― 総合芸術アーカイブセンターのリソースを中心に」
北郷 悟（総合芸術アーカイブセンター センター長・東京藝術大学美術学部 彫刻科 教授・東京藝術大学理事）
［報告 1］13:40-14:00「3D デジタルデータ研究プロジェクト」
木本 諒（総合芸術アーカイブセンター 特任助教・彫刻家）
［報告 2］14:00-14:20「音響・映像データ研究プロジェクト」
山田 香（総合芸術アーカイブセンター 特任助教・作曲家）
［報告 3］14:20-14:40「大学史文書データ研究プロジェクト
橋本 久美子（総合芸術アーカイブセンター 特任助教・大学史史料室 音楽学）
［休憩］14:40-15:00
［報告 4］15:00-15:30「ミュージアムアーカイブズとデータベース」
村田良二（東京国立博物館 情報管理室長）
［報告 5］15:30-16:00「東京文化会館音楽資料室の「これまで」と「これから」」
後藤尋繁（東京文化会館 音楽資料室 司書）
［討 論］16:00-16:50
［クロージング］
17:00-17:40 ■第 8 回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・推進賞授賞式■
終了後　■懇親会■　東京藝術大学音楽学部食堂「キャッスル」

【第 2 日目】　2014 年 6 月 8 日（日）
研究発表会／学会総会　会場：東京藝術大学音楽学部 5 号館 5-301 教室

9:00　受付開始
9:30-12:00　■公募研究発表会■
　[プログラム]
○「データの再利用性を考慮した演奏会情報管理システムの構築」
嘉村哲郎（東京藝術大学 芸術情報センター、総合芸術アーカイブセンター）　佐野隆(
東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター) 山田香（東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター ）

○「Linked Open Data の技術を利用した『技法・材料』用語整理の試み―東京藝術大学
卒業・修了制作作品集を中心に」
小林美貴（東京文化財研究所、東京藝術大学 芸術情報センターRA）　嘉村哲郎(東京藝
術大学 芸術情報センター、総合芸術アーカイブセンター）

○「明治期における博物館への寄贈者について」
三輪紫都香（東京大学東洋文化研究所）　田良島哲（東京国立博物館）

○「博覧会資料とアート・ドキュメンテーション」
若月憲夫（株式会社乃村工藝社 営業開発本部）　石川敦子（株式会社乃村工藝社　経
営企画部）

○「被災文化財レスキュー活動の記録情報群に基づく活動再現への試み」
阿児雄之（東京工業大学博物館）奥本素子（総合研究大学院大学）加藤幸治（東北学院大学）

12:00-13:15　〈昼食〉
13:15-　■アート・ドキュメンテーション学会 総会■
14:45 頃　閉会

3.5.　卒業・修了作品集の「材質・技法」用語整理

Linked Open Data の技術を利用した『材質・技法』用語整理の試み
―東京藝術大学卒業・修了制作作品集を中心に

嘉村哲郎[1,2]　小林美貴[3]
[1]東京藝術大学 芸術情報センター、[2]総合芸術アーカイブセンター、[3]東京文化財研究所

概要：本研究の目的は、Linked Open Data の技術を利用し、作品の属性情報である「材質・技法」と用語の典拠情報にゆるやかな関係を与えて構造化することで、作者が作品の情報を記述する際に参照できる辞書ツールを開発することである。東京藝術大学総合芸術アーカイブセンターでは、冊子体の卒業・修了制作作品集のデータ化を進めている。作品集の情報を整理・データ化するにあたり、「材質・技法」には多様な表記が見られ、用語の適正や典拠が不明瞭であり、記述の形式が一貫していないことがわかった。本研究では、まず作品集の「材質・技法」の用語について、美術館・博物館の収蔵品情報と照合して実際の使用状況を調査し、Web サイトおよび文献から典拠情報を取得して整理を行う。本稿では、2013 年 10 月に開始した用語の整理方法について述べる。

1.　はじめに―芸術分野のシソーラス
1.1.　背景

今日の美術館や博物館における作品情報の記述は、使用する「用語」と「記述の形式」の 2 種類の要素で表現が異なる。次の例は《悲母観音》狩野芳崖（1828-1888）の展覧会カタログに掲載された作品の「材質・技法」の情報であるが、同一の作品でありながら、記述の内容や詳細度が執筆する館や展覧会により異なることがわかる(表 1)。

展覧会カタログや出品目録の制作では展覧会ごとに用語の統一が行なわれる一方で、収蔵品データベースの作品情報は物品管理台帳や蔵品目録の記述を典拠で扱い[1][2]、機械的な用語の統一は控える傾向にある。

1.2.　米国の事例

2010 年に米国では図書館系の組織が中心となり、ミュージアムの情報を相互交換可能にするプロジェクト“OCLC Museum DATA Exchange”[3]の報告を提出した。OCLC のプロジェクトには、ハーバード大学美術館、プリンストン大学美術館、イェール大学アートギャラリーを含む 9 館の美術館が参加し、それぞれの館が保有する美術資料のメタデータフォーマットの共有を図った。メタデータフォーマットには、CDWA Lite が用いられ、作品情報では「表示用」の情報と「索引用」の情報を区別し、索引用にはシソーラス・典拠ファイルによる統制語の記述が推奨される。これらの区別は「一般的には機械的な統制を好まない、という人文科学系学術分野に特有の事情に配慮したもの」[4] と解される。世界的に見て、CDWA Lite は積極的に利用されている規格ではないが、米国の Getty 財団を始めとした機関によるシソーラスや典拠データの開発を進める結果となった。その後、Getty 財団はこれまでに独自の XML 形式で構築していた美術、建築の歴史、様式、技術等に関するシソーラス AAT(The Art & Architecture Thesaurus)を RDF データおよび SPARQL Endpoint で公開し、Linked Open Data(LOD)によるデータの公開（openly accessible）と共有（shareable）を開始した(2014 年 2 月 20 日)[5]。米国の事例から、各館が作品情報を統制語で記述することは困難だが、記述に関する「シソーラス」と「典拠情報」のデータを蓄積・公開し、複数の分野とデータ共有を促進する傾向が見られる。

1.3.　シソーラスの必要性

シソーラスは、同義語、異表記、上位・下位語の階層的な関係を定義している辞書やリストである。一般的には、データベースの情報検索機能の一つとして検索漏れを防ぎ、検索の効率を高める機能を持つ。
また、シソーラスは、博物館や美術館の情報連携や異

表 1 「用語」と「記述の形式」の例

書名	会場	会期	作品名	材質・技法
狩野芳崖：近代日本画の先駆者：没後一〇〇年記念特別展覧会	京都国立博物館	1989年2月-	悲母観音	絹本著色
資料は繋ぐ：名作と下絵・連作：芸大コレクション展	東京藝術大学大学美術館	2005年4月-	悲母観音	絹本着彩
揺らぐ近代：日本画と洋画のはざまに	東京国立近代美術館	2006年11月-	悲母観音	膠彩、金／絹布　額
狩野芳崖：悲母観音への軌跡：東京藝術大学所蔵品を中心に	東京藝術大学大学美術館	2008年8月-	悲母観音	絹本着色　額装

なる分野・領域間のデータ共有を促す働きがあるが、本質的な機能としてシソーラス構造自体がある一つの概念体系を提示[6][7]するとされる。現在、情報を検索する場面において、関連語から広汎な検索を行なう「連想検索」や、検索語を予測して表示させる「サジェスト機能」など、利用者が「受動的に検索」[8]できる機能が用意されている。しかし、本研究が目的とするデータの記述を支援する機能は不十分であり、検索システムあるいは専門領域における語彙の全体像を示すことが望まれる。

1.4. シソーラスの利用事例

国内の美術分野においては、標準化されたシソーラスや類語辞書は確立されていない。特定の分野・領域の学術、芸術系学会により用語の編纂や定義が進められているが、これらが美術館や博物館の標準として利用された例は見られない。例えば、材料や技法に特化した検索項目を用意している収蔵品データベースは事例が少なく、これらの用語を抽出したい場合には、全文検索を用いることで「材質・技法」項目を含む記述を表示することができる。例えば、文化遺産オンライン[9]では全文検索機能の他に連想検索の機能を提供することで、検索の効率を高めている。

海外では、前述の Getty 財団の AAT や海外の美術館が Web サイトで公開する用語集が、西洋美術や美術全般の用語、シソーラスを調べる上で利用される。AAT は 25 万語におよぶ美術・建築・デザイン分野のシソーラスであり、上位・下位語の概念体系を階層構造で示している。とりわけ、スコープ・ノート(Note/Scope Note)には一意に定められた概念が記され、情報源（Sources and Contributors）には文献を中心とした用語の典拠が示され、辞書としての役割を果たしている点は特筆に値する。AAT は既にいくつかの美術館や博物館等の文化施設で利用され、AAT を独自に拡張して利用する館も見られる。

国内の他分野に見られるシソーラスでは、冊子体やデジタル版で販売される類語辞書や専門用語辞書等を除くと、「日本語版 WordNet」（独立行政法人情報通信研究機構）「JST 科学技術用語シソーラス」（JST 科学技術振興機構）等が挙げられる。後者は国内の大規模なシソーラスであり、科学技術振興機構（JST）では、「科学技術文献データベース JDream II」および「J-GLOBAL」[10]における統制語索引として実装されている。JST ではこれらをさらに発展させ、既存のシソーラスおよび同義語、異表記の横断辞書を体系的に整備して全体像を可視化した JST シソーラス map[8]を作成しており、シソーラスに関する概念体系を示す好例の一つである。

近年、書籍のデジタル化とともに用語や単語を自動解析し、機械処理的に用語間の概念関係を構築する研究が多く進められている。一方で、同義語・異表記、上位・下位語の蓄積を人手が伴う作業で行うことは、信頼あるシソーラスを構築する上で重要な役割を果たしている。とりわけ、美術や伝統技術の分野における用語は、収録されている辞書や事典類が数少なく活字化されていない場合もある。

現代美術家がインスタレーション等の一過性の展示で作品情報を記載する時、古美術作品の技法・素材が修復過程の科学的分析によって明らかにされた時には、新しい技法や素材の用語を記述することが求められる。このような場面では、用語と定義するキーワード（索引語）を登録でき、それらの情報システムがネットワークを通じて誰でも参照できる仕組みが望まれる。

2. 東京藝術大学『卒業・修了制作作品集』の用語調査

東京藝術大学総合芸術アーカイブセンターでは、冊子体の卒業・修了制作作品集のデータ化を進めている。作品集の情報を整理・データ化するにあたり、「材質・技法」には多様な表記が見られ、用語の適正や典拠が不明瞭であり、記述の形式が一貫していないことがわかった。本研究では、作品集の「材質・技法」の用語について、美術館・博物館の収蔵品情報と照合して実際の使用状況を調査し、Web サイトおよび文献から典拠情報を取得して整理することで、学生や美術館・博物館が作品や資料情報を記述する際に参照できる辞書ツールの構築を目的とする。ツールの作成にあたっては、①実際に使用されている用語を収録すること、②用語のシソーラスを構築すること、③用語の典拠を示すこと、④最終的に成果物をオープンソースにすることを条件とした。

2.1. 「材質・技法」用語（伝統技法から現代の素材）

対象とする用語は、東京藝術大学の『卒業・修了制作作品集』（平成 18 年度～平成 24 年度） に記載される作品情報のうち「材質・技法」の記述から抽出した。本カタログは、東京藝術大学美術学部および大学院修士課程の卒業・修了制作の作品集であり、作品の図版と文字情報（日本語・英語）を掲載する。これら

表 2 名詞句 A2J の分解処理（一部）

A2J	A1J
YKKのファスナー	YKK/ファスナー
椅子や靴などの日用品。	椅子/靴/など/日用品
角川文庫1000冊	角川文庫/冊
編み込んだ麻紐	編み込む[編み込んだ]/麻紐
織った麻紐	織る[織った]/麻紐
ガムアラビックに分散させた顔料	ガムアラビック/分散/顔料
ケシ油に分散させた顔料	ケシ油/分散/顔料

表 3　記述の形式

No.	構文	記号・助詞	種別	例	件数
1	N1、N2、N3	、	記号	油彩、クレヨン、キャンバス	1809
2	N1、N2 N3	改行	記号	真鍮 石膏埋没型	115
3	N1にN2、N3	に	格助詞	樟に彩色	106
4	N1(N2)	( ) [丸括弧]	記号	映像(アニメーション)	70
5	N1/N2	/(全角、半角)	記号	綿、羊毛、染料/綴織	62
6	N1・N2・N3	・(全角)	記号	水性ペン・油彩・グラファイト	40
7	N1,N2,N3	,(全角、半角)	記号	FRP, 顔料	35
8	N1 N2 N3	[スペース]	記号	布粘着テープ　スクリーンプリント	35
9	N1、N2、N3など	など	副助詞	鉄、紙、革、羽根など	24
10	N1、N2、N3等	等	副助詞	木材、紙、スタイロフォーム等	11
11	N1とN2	と	格助詞	楽しい色と雰囲気	11
12	N1.N2.N3.	.(全角、半角)	記号	紙. アクリル. 粘土	3
13	N1：N2	：	記号	映像デザイン:100 インチ × 3	3
14	N1、N2、N3他	他	名詞	DVDプレイヤー、プロジェクタ他	3
15	N1、N2、N3ほか	ほか	副助詞	合板、石膏、金属ほか	2
16	N1…N2	…　[リーダー]	記号	模型…紙	2
17	N1「N2」	「 」[鍵括弧]	記号	ミクスドメディア「サイズ可変」	1
18	N1[N2]	[] [[]括弧]	記号	本[小説]	1
19	N1_N2。	_[アンダーバー]	記号	全体_木材。	1
20	N1とかN2	とか	格助詞	スポンジとかいろいろ	1
21	N1をN2	を	格助詞	映像をプロジェクション	1
22	N1によるN2	による	格助詞+ 動詞	6台のスライドプロジェクタ によるインスタレーション	1

の作品のうち、大学や民間での買上げとなる優秀作品以外は展覧会の終了後に学生本人が持ち帰ることから、作品集が卒業・修了制作作品の大半を記録する唯一の情報源となる。

本作品集の特徴には、「わが国の美術の伝統・精神を継承」と絵画科日本画のカリキュラム・ポリシーに見られるように、伝統技法・材料に関する用語、絵画科油画では「絵画を中心軸にとり、映像、造形、インスタレーション、そして、それらを横断する表現の創作研究を行う」と掲げるように「油彩」以外の「インスタレーション」や「映像」の用語が記載される。さらに、彫刻科や工芸科（彫刻・彫金・鍛金・鋳金・漆芸・陶芸・染織）も同様に伝統的な技法・材料から先端の素材を示す語彙が用いられていることが特徴である。

2.2.　用語の整理

『卒業・修了制作作品集』（平成 18 年度～平成 24 年度）の卒業・修了制作 3565 点（論文含む）の文字情報は各年を EXCEL シート上で管理している。整理の準備に、すべての用語を網羅する必要があることから 7 年分を 1 つのリストに統合した。卒業・修了制作作品の情報は作品単位で入力されており、作者である学生の学籍番号を用いて ID 管理の方法を検討したが、学籍番号の未入力箇所が多く見られたことから、学籍番号を使用した ID を付与する作業は保留にした。作品情報のうち「材質・技法」が空欄である場合は管理都合上「-」と記入した。「材質・技法」の記述（日本語・英語）については、①用語を形式別に抽出、②用語を検証、③用語の典拠を示すという 3 段階で作業を進めた。

2.2.1.　用語の抽出

用語とは「材質・技法」の項目に記された単語レベルの語、「記述」とは一連の「用語」の並記を指し、記述全体で作品の材質・技法に関する情報を提示する。まず、機械的な分解処理ができるように「材質・技法」の記述を「形式」別に分類したところ（表 2）、記号・助詞の区切り文字を使用した 22 種類の形式に分けられ、記述を形式別に単語レベルまで分解した。

次に、シソーラスの一般的規格[12] を参考として、名詞と固有名詞、動詞、接頭語、接尾語、また記号を対象に、誤字・略語を含むあらゆる語を表記の通りに 1453 件抽出した（以後、これらを用語 A1J という）。ただし、下記については例外の語句として処理している。

① 名詞句
2 つ以上の語で構成される名詞句（A2J）は独立した用語 A1J として分解する(表 3)。ただし、用語 A2J が広く普及し、「材質・技法」の用語として用いられている場合もあることから、A2J を別にリスト化した。
例: A2J=“百合の花”→　A1J=“百合”, “花”

② 複合語
複合語は分解せずに表記のまま抽出する。
例: “アクリル加工”, “金属加工” → A1J= “アクリル加工”, “金属加工”

③ 数詞
数詞は抽出せずに、名詞に含まれる数詞は抽出対象とした。
例: “12 分”→ A1J= “分”
例: “925 銀”, “925” →　A1J=“925 銀”, “925”

④ 固有名詞
固有名詞は用語 A1J で抽出後、キーワード（索引語）になり得るかを検証した。
例: “建材屋ライフ・モリヤの備品”→A1J= “建材屋ライフ・モリヤ”, “備品”

日本語表記に対する英語表記 A1E (2215 件)は、用語 A1J が記述される頻度に応じて、異なる表記が確認できたもの全てを抽出した。

2.2.2. 用語の検証

用語 A1J（1453 件）について、文化遺産オンライン[9]と LODAC Museum[19]の 2 つのリソースを利用し、美術館・博物館の収蔵品データベースの「材質・技法」項目のデータと照合することで、A1J が一般的に利用されている語であるか否かを検証した。

「文化遺産オンライン」は、時代・分野横断的な検索システムで用語の使用状況を検証するために利用したが、「材質・技法」の項目に限定した検索が行えず、検索結果の一覧表から目視による確認作業をした。一方、「LODAC Museum」は、国内の美術館・博物館（自然系を除く）の資料メタデータを収集・統合し、Linked Open Data(LOD)で公開するサービスであり、SPARQL Endpoint を用いて「材質・技法」のデータのみを計算して結果を表示できるように(図 1)、効率的な検索ができることを特徴とする。しかし、収集元のデータが要因で起こるデータの変換ミス[21]によりデータの検証が困難な場合もあった。

ここで取得したデータは、「検索件数」と「適合件数」

図 1 文化遺産データベース（上）と LODAC Museum（下）

である。「検索件数」は「材質・技法」に用語が現れた作品の総件数を指し、「適合件数」は「材質・技法」の用語として一致した件数である。検証するデータベースの記述についても、記述の形式（表 2）に従って用語を照合した。

例として、「アクリル」という用語を検索した場合、検索結果では「779 件」と表示されるが、実際に「材質・技法」の項目に用語が記載される「検索件数」は 759 件、「適合件数」は 559 件である(図 2)。なお、不適合語（用語 B1J）は用語 A1J の関連語あるいは下位語になると考え、別にリスト化した。

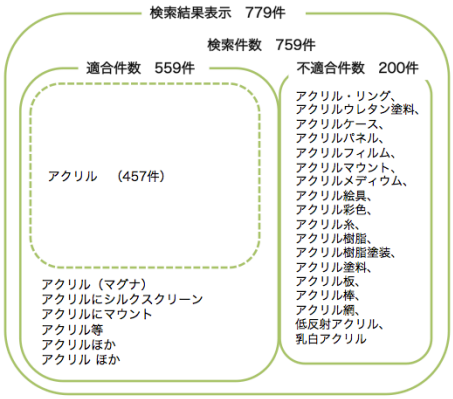


図 1 適合件数と不適合件数（「文化遺産オンライン」調査結果）

2.3. 用語の典拠

用語の意味をシソーラスの「スコープ・ノート」に示すことは、用語の意味および概念を一意に定める。シソーラスにおいては、「スコープ・ノートの充実」[6]が評価に関わる要点として挙げられているが、本研究においても用語の典拠を示すことを重要視し、東京藝術大学の編集出版物を中心に用語解説を調査した。

2.3.1. 東京藝術大学の編集出版物

東京藝術大学の美術学部では、年に数回、技法と素材を研究テーマにした展覧会を開催し、刊行物や出品目録、キャプションに「材質・技法」の名称を記載する。会期後にこれらの情報を参照したい場合は、過去に刊行された展覧会カタログを利用する。また、美術研究科文化財保存修復学専攻および油画技法材料研究室では、技術や技法の継承を目的に用語事典の作成や研究プロジェクトを進めている。今回の用語整理では、展覧会カタログ[15]および『日本画用語事典』[13]、『絵画制作入門』[14]を中心に複数の参考文献を利用した。

2.3.2. 国内のデジタルリソース

デジタルリソースは、利用者が容易に情報へアクセスできる情報源であることから、本研究では調査に要する負担を軽減するために優先的に利用した。一般語や材料名は、大学図書館で利用が多い百科事典や辞書のデータベース「ジャパンナレッジ」[16]、また科学技術振興機構の J-Global や用語のシソーラスを可視化したシソーラス map[11]にて調査した。素材の用語には「電子計算機」分野の語（pc、web サイト、アプリケーション）や「電力技術、電子技術の応用」分野の語（LED ライト）等の科学技術用語が見られた。用語が略語である場合や表記揺れがある場合、J-Global

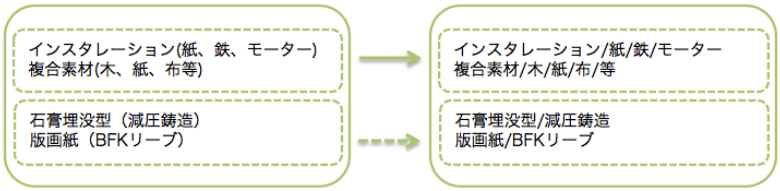


図 2「記述の形式」と分解処理

表 4　表記の揺れと適合件数

優先語	A1J	文化遺産オンライン		LODAC	
		検索件数	適合件数	検索件数	適合件数
	アクリル絵の具	0	0	5	3
優先語	アクリル絵具	122	122	459	338
	色えんぴつ	0	0	0	0
優先語	色鉛筆	346	343	881	765
	カンヴァス	747	743	4137	3991
	カンバス	469	467	818	810
	キャンヴァス	10	10	185	179
優先語	キャンバス	2768	2755	8110	5253
登録件数		113574件		134098件	

優先語	A1J	文化遺産オンライン		LODAC	
		検索件数	適合件数	検索件数	適合件数
優先語	ロウケツ染	4	4	0	0
	ろうけつ染	0	0	0	0
	蝋纈染	0	0	0	0
優先語	樟	4	3	62	62
	楠	9	9	26	23
登録件数		113574件		134098件	

の同義語・異表記が検索できるシステムを利用することで効率的な用語検索ができる。

2.3.3.　海外のデジタルリソース

海外の美術館の保存修復部門では高いレベルの材料・技法用語集を作成している。ボストン美術館の保存・収集管理部門が中心に編集する「CAMEO」材料データベース[17]は、保存・画材に関する百科事典オンラインサービスであり、Wiki プラットフォームで作成されている。2013 年 8 月時点では 1 万 456 タイトルを収録している。また、ヨーロッパのコンソーシアムと連携して文化遺産の保存分野のアプリケーションを開発し、英語以外の外国語の同義語を 9000 以上収録し、国際視野を範疇に入れたデータベースであることが窺える。さらに、米国 Getty 財団の美術・建築分野に関するシソーラス AAT (The Art & Architecture Thesaurus)は、従来の XML 形式のデータ公開に加え、2014 年 2 月には SKOS プロパティを用いた RDF 形式および SPARQL Endpoint による Linked Open Data で公開を始めた。

3.　整理作業上の問題点

3.1.　記述の形式

「材質・技法」の記述は「油彩、キャンバス」「油彩／キャンバス」「キャンバスに油彩」等と「記述の形式」が一貫していない。この事象は、国内の美術館・博物館の収蔵品データベースにも見られ、データを機械処理する上で弊害になることが指摘されている[21]。今回は「材質・技法」のデータを機械的に分解することを避け、記号・助詞の区切り文字を使用した 22 種類の形式別に用語を抽出した（表 3）。しかし、記述の形式には、分解することで本来の意味を損なうと考えられる記述がある。例えば、括弧書きの記述（図 3）には内訳を示す場合と前の語句の注記や説明を示す場合の異なる用途が見られ、一様に分解処理はできないと考える。後述する複合語と同様に、複数の要素から成る語をどのように扱うかは今後の課題である。

3.2.　表記の揺れ

抽出語には「外来語表記」「漢字・仮名表記」「旧字の代替表記」による表記の揺れが 65 組ある。体系的に語を整理するため、表記の揺れから優先語を仮に選択する必要があり、適合件数を基本的な選択基準として使用頻度の高い語を選んだ(表 4)。

A1J	A1E
和紙	japanesepaper
和紙	Japanese paper
和紙	japanese traditional paper
和紙	japanese WASHI paper
和紙	Japanese-paper
和紙	japanese paper
和紙	Japanese Paper
和紙	Japan paper
和紙	Japanesepaper
和紙	paper
和紙	washi

日本語表記(1):英語表記(複数)

A1J	A1E
ワーロンシート	Japanese paper
雁皮紙	Japanese paper
紙	japanese paper
雲肌麻紙	Japanese Paper
雲肌麻紙	Japanese paper
楮	japanese paper
白麻紙	Japanese paper
石州和紙	Japanese paper
典具紙	Japanese paper
麻紙	Japanese paper
麻紙	japanese paper
和紙	Japanese paper
和紙	japanese paper
和紙	Japanese Paper
和紙	japanese paper
麻紙	Japanesepaper
和紙	japanesepaper

日本語表記(複数):の英語表記(1)

A1J	A1E
紙本彩色	coloer on paper
紙本彩色	color on Japanese paper
紙本彩色	color on paper
紙本彩色	Color pigments on paper
紙本彩色	painting in color on paper
紙本彩色	Painting in color on paper
紙本彩色	pigment, Japanese paper
紙本彩色	washi, mineral pigment, dye

日本語表記(1):英語表記(複数)

A1J	A1E
岩絵具	pigment
顔料	pigment
顔料	Pigment
胡粉	pigment
ピクメント	Pigment

日本語表記(複数):の英語表記(1)

図 3　日本語表記と英語表記

表 5 複合語と典拠リスト

A1J	概念1	典拠1	概念2	典拠2	概念3	典拠3
紙本金地著色	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	金地	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-	著色	http://iss.ndl.go.jp/
紙本銀地著色	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	銀地	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000001-	著色	http://iss.ndl.go.jp/
紙本彩色	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	E:著色	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-		
紙本着彩	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	着彩	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-		
紙本着色	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	E:著色	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-		
紙本著色	紙本	http://iss.ndl.go.jp/	著色	http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-		

E:語釈文に記載

3.3.　日本語表記と英語表記の関係

用語の日本語表記に対する全ての英語表記 2215 件を抽出した結果、「1 つの日本語が複数の英語に翻訳されている」「複数の日本語が同一の英語に翻訳されている」という事象が確認された(図 3)。英語表記については、現在調査を進めている AAT と CAMEO で登録語が異なることを確認しており、今後の辞書ツールの開発においては、抽出した英語表記が正確であるかを検証し、次に優先語を選択する[20]作業を検討している。

4.　Linked Open Data の活用

総合芸術アーカイブセンターでは、芸術情報の基盤になるシソーラスや辞書に類するデータ(日本画用語事典等)について、インターネット上のリソースを含めた複数の情報源のデータと関連付けて利用できるように準備を進めている。一般的に、インターネットに公開された複数の情報源のデータを関連付けて Web アプリケーションで扱う場合、アプリケーションの開発者は情報の公開元が用意したデータベースと、データを利用するための API の仕様を理解し、プログラム操作でデータを取得・加工・実装する必要があった。一方、Linked Open Data(LOD)の仕組みを利用する場合、インターネット上に公開された RDF データベースに対して SPARQL Endpoint と呼ばれる専用の API(SPARQL クエリ)を用いてデータを取得する。このとき、SPARQL は仕様が標準化されていることから、従来のように公開元のデータベース単位に API の仕様を理解する必要がなく、SPARQL Endpoint を利用するシステムではクエリを再利用することなど、開発者の手間と負担を軽減できる利点がある。さらに、SPARQL Endpoint がバージョン 1.1 に対応する場合、RDF データ内のリンク構造(リソースに関連する他の RDF データへのリンク)を辿ることで、リンク先の任意の値が利用できる。例えば、次のような利用方法が考えられる。東京藝術大学が RDF および SPARQL Endpoint で公開する日本画用語事典の RDF データ「墨」には日本語の表記と解説文のみがあり、英語表記については Getty Vocabulary[18]の RDF データ「sumi-e」を参照するリンクが記述されているとする。このとき、SPARQL クエリを利用することで日本語表記の「墨」と解説文をテキストデータで取得すると同

時に、RDF データの構造を自動的に解析することでリンク先である Getty Vocabulary の RDF データに記載される英語表記および解説文を取得できる。

さらに、Getty Vocabulary には英語表記に加えて中国語表記と解説文があることから、日本語表記の用語データを Getty 側の用語とマッピングして RDF リンクを記述することで、日本語・英語・中国語の多言語シソーラスが構築できる（図 4）。

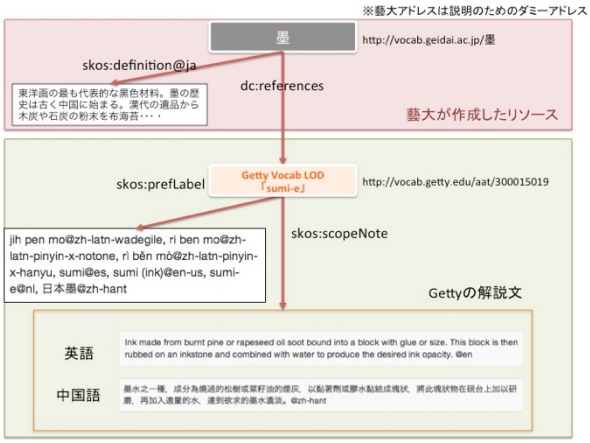


図 4 RDF リンクを利用した情報の関連付け

このように、LOD では、インターネットに公開した RDF データを一意に特定する識別子(IRI:Internationalized Resource Identifier)とデータを操作する SPARQL を用いることで、データ内の値を取りだし、必要があれば値をプログラム処理して結果を返すことができる。さまざまなリソースがインターネットで公開が進む今日では、情報を RDF データにすることが IRI によるデータアクセスの一貫性を維持しつつ、複数の情報源を集約して利用できる最適な方法と考えられている。本研究では、用語を RDF データで利用するために、次の手順でデータを作成する（図 5）。

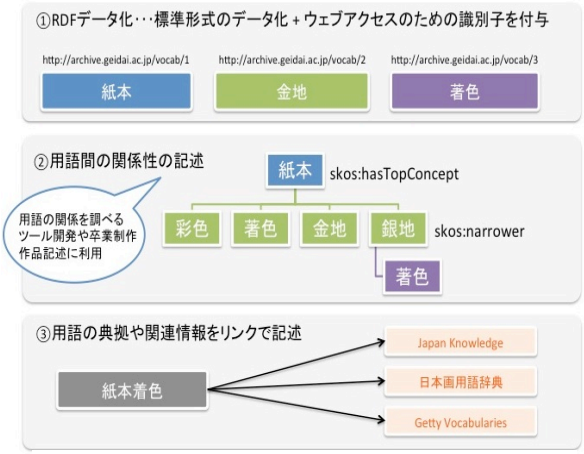


図 5 RDF データ化手順

① RDF データ化
用語に付与される各種情報のメタデータと識別子(IRI)を設定し、これを用語の典拠データとする。

② 関係性の記述
用語と用語の関係性に基づいて RDF データ間の関係を定義する。ここでは基本的にはシソーラス作成のための RDF 語彙 SKOS を利用する。

③ 関連情報の記述と RDF データの統合
用語に関連する情報を収集し、RDF リンクを記述する。

RDF データの統合では、RDF データの取り扱いポリシーの検討が必要である。用語に関連する情報は、情報の追加・削除の可能性があることから、用語自体が記述される典拠データに直接他の情報源を記述するのではなく、関連情報を統合するための専用の RDF データを別途作成することが考えられる。つまり、用語の内容を記述したデータと関連情報を集約したデータを個別に管理する方法である。この方法を用いた場合、典拠データと関連情報のデータを分割して管理するため、情報の記述範囲が明確になる一方で、一つの用語に対して識別子が二つ必要になることから、データの管理に手間を要するという問題がある。RDF データの管理方法や構造化については、今後の課題の一つとして取り組んでいく。

5. おわりに

東京藝術大学卒業・修了制作作品集の制作 3565 点（論文含む）のうち「材質・技法」項目の記述 2910 件から 1453 件の用語を抽出し、「材質・技法」のキーワード（索引語）の利用に向けて検証を試みている。

将来的に、「材質・技法」用語を共有・交換可能なデータとして Linked Open Data で公開するため取り組むべき課題に、①用語の表記上の適正さの検証、②用語の分解・結合に関する知識の取得、③用語の周辺語を含めた検証を行うことを挙げる。日本語表記に多い複合語や略語は、辞書・事典類に収録されない傾向にあり、語の適正を判断するための情報が不足している。また、括弧等の記号には、語句の注記や補足説明をして意味を定義する機能がある一方で、使用方法が個別に異なり、記述の一貫性を保つことが課題となっている。

今回、日本語・英語の上位語・下位語・関連語・表記の揺れを収集し、これら周辺語の意味および定義を URI で示すことで、概念のゆるやかな関係の中に用語を位置づけた。しかし、専門用語としてその特有な意味を示すためには、当該分野・領域に関連する研究報告書や美術品の保存・修復報告書、映像記録を情報源と捉えることを検討し、最終的には制作者の助言を加えて、制作工程と用語間の関係性の検討が必要である

と考えている。
※本稿は、2014 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会の予稿集及び口頭発表に基づいて、加筆・訂正して作成したものである。

参考・引用文献

[1] 村田良二, 東京藝術大学大学美術館収蔵品データベースの構築, アート・ドキュメンテーション研究, アート・ドキュメンテーション学会, No.11, 2004, pp.61-73.
[2] 宮崎 幹子, 文化財情報システムの現状と展望―ネットワーク情報資源の書誌コントロールとの関連から―鹿園雑集, 奈良国立博物館, 第 2・3 号, 2001, pp.39-56.
[3] Andrew W, Museum Data Exchange, 2010.2, http://oclc.org/content/dam/research/publications/library/2010/2010-02.pdf（アクセス:2014.6.26）
[4] 宮崎 幹子, 博物館収蔵品情報の連携とメタデータ：アメリカの動向と日本における可能性, アート・ドキュメンテーション研究, アート・ドキュメンテーション学会, No.19, 2013, pp.16-35.
[5] Art & Architecture Thesaurus Now Available as Linked Open Data (Getty Iris,2014.2.20), http://blogs.getty.edu/iris/art-architecture-thesaurus-now-available-as-linked-open-data/（アクセス:2014.6.26）
[6] 岸田 和明 他, シソーラスの比較評価：「概念体系の提示」の性能を中心に , 情報の科学と技術 , 情報科学技術協会, Vol.38, No.10, 1988, pp.565-572.
[7] 宮崎 幹子, 人文科学分野のシソーラス : Art and Architecture Thesaurus の成立過程とその内容,Journal of library and information science, 愛知淑徳大学図書館情報学会, Vol.10, 1997, pp.15-42.
[8] 國岡 崇生, 田村 友紀, 山崎 文枝, 堀内 美穂, 坂内 悟, JST シソーラス map JST 辞書の可視化による効果的な検索語の発見, 情報管理, 科学技術振興機構, Vol.55, No.9, 2012, pp.662-669.
[9] 文化遺産オンライン, 文化庁, http://bunka.nii.ac.jp/（アクセス:2014.6.26）
[10] J-GLOBAL：科学技術総合リンクセンター, 独立行政法人科学技術振興機構, 2012.9, https://jglobal.jst.go.jp/（アクセス:2014.6.26）
[11] JST シソーラス map, 独立行政法人 科学技術振興機構,http://thesaurus-map.jst.go.jp/jisho/fullIF/ （アクセス:2014.6.26）
[12] 社団法人情報科学技術協会, シソーラスの構成及びその作成方法, JIS 規格, JISX0901, 経済産業省, 1991, https://www.jisc.go.jp/app/JPS/JPSO0020.html（アクセス:2014.6.26）
[13] 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編, 日本画用語事典 : 図解, 東京美術, 2007.
[14] 佐藤一郎, 東京藝術大学油画技法材料研究室編著, 絵画制作入門 : 描く人のための理論と実践, 東京藝術大学出版会, 2014.
[15] 歌田眞介 [ほか], 佐藤一郎[ほか]編, 油画を読む : 高橋由一から黒田清輝の時代へ : 解剖された明治の名品たち : 特別陳列金刀比羅宮の高橋由一作品, 東京藝術大学大学美術館協力会 , 2001, pp.160-165.
[16] ジャパンナレッジ, 株式会社ネットアドバンス, http://japanknowledge.com/ （アクセス:2014.6.26）
[17] CAMEO: Conservation & Art Materials Encyclopedia Online, Museum of Fine Arts Boston, http://cameo.mfa.org/wiki/Main_Page (アクセス:2014.6.26)
[18] The Getty Vocabularies, The J. Paul Getty Trust, http://vocab.getty.edu/ (アクセス:2014.6.26)
[19] LODAC Project, http://lod.ac/（アクセス:2014.6.26）
[20] 竹崎 あかね, 細羽見 喬, 嶋 明子, 農業研究情報の検索を支援する日本農業シソーラスの開発とその活用情報管理, 独立行政法人 科学技術振興機構,情報管理, Vol.52, No.12, 2010, pp.710-717.
[21] 矢代 寿寛,宮澤 彰,Web 上で公開された博物館資料メタデータの評価の試み, 情報処理学会研究報告, 研究報告人文科学とコンピュータ,一般社団法人情報処理学会, CH-90, No.7, 2011, pp.1-8.
[22] 国立国会図書館サーチ, http://iss.ndl.go.jp/ （アクセス:2014.6.26）

6.　平成 26 年度の計画と実績

データ基盤構築(26～27 年度)	
各プロジェクト資料のメタデータ収集とポリシー策定	一部着手(27 年度継続)
Music DB システムの構築	実装済(27 年度継続)
工芸用語辞典システムの構築	実装済(27 年度継続)
日本画用語辞典システムの構築	27 年度計画
音楽研究センター作品データベース	27 年 3 月に開始
藝大卒業・終了制作作品の情報整備	27 年度計画
Web コンテンツ	
2012 年石膏取り映像	完了
講義音声データ(矢内原伊作)と文字画像	完了
歴史的音源、文書画像データ	完了
音楽学校の歩み(PDF データ)	完了
不明外国人写真	中止
CREST : mono project 映像	完了
美術解剖学図撮影データ	完了
デジタルアーカイブ	
保存油画研究室 講義関係記録テープ	完了
芸術情報センター 講義映像テープ	実施(27 年度継続)
解剖掛図撮影	完了
学内外展示・公開	完了
ブログ(内部向け作業日報)	継続
彫刻科講義音声・映像資料	実施(27 年度継続)
油画技法材料研究室(佐藤一郎アーカイブ)	実施(27 年度継続)
保存修復研究室(木島先生)	未着手

平成 27 年度

総合芸術アーカイブセンター5 年計画の最終年度となる 27 年度は、デジタル化した資料がより多くの人々目にとまるよう、積極的な情報公開と発信が求められた。これまでに進めてきた芸術情報の基盤構築もひとつの区切りになるため、外部公開ないしは業務で使用可能なレベルまで構築を行った。東京藝術大学に関するイベントを集約したイベント情報システム、工芸用語集や演奏会情報データベースなどシステムは本プロジェクトの成果物の一つといえる。デジタルデータの利用面では、データを再度アナログの資料として再組織化した冊子「COMPOSITE ARCHIVE BOX」の作成を試みるなど、デジタルからアナログ変換という異色の取組みも行った

デジタルアーカイブの事業を継続する上では欠かせない情報システムの基盤整備に関しては、平成 28 年度以降の活動範囲が大幅に縮小されることから。今後数年間の活動に耐えうるストレージシステムが必要になった。設立時のような予算規模が得られないため、プロジェクト経費を工面してシステムリプレースを実施するなど、将来のアーカイブ活動に必要なシステムは最終年度内にすべて整備を行い、翌年度以降の活動に備えた。

活動の最終年度、3 月 30 日まで開催した学生の提案企画「藝祭 100 年の歴史展」は本プロジェクトの最終活動となった。展示の準備にあたっては、資料収集の呼びかけに職員や卒業生、海外在住の方々から藝大マニアに至るたくさんの方から寄贈や貸出を受けるなど、教職員、学生、卒業生等の境界なくすべての東京藝術大学の関係者が参加するアーカイブ活動を実現できた。結果、学内で初めて芸術祭に関する資料や情報を収集し、歴史を編纂して展示会を開催することで東京藝術大学におけるアーカイブが何であるか、そしてその意義や役割等の課題を参加者と共有できた点は、次につなげる大きな原動力になった。

アーカイブセンターの設立当初に掲げていた 8 つの計画のうち、芸術アーキビストの養成・教育プログラムの策定には至らなかったものの、アーカイブセンターに興味を持ち、活動に関わった学生らが卒業後にアーカイブ活動に関する企業で職を得ることができた点を考慮すると､少なくとも教育･養成では成果が得られたと言える。また、この 5 年間で反省すべき点は、プロジェクト全体を通してアーカイブに対する将来ビジョンやプランニング・ブランディングが想定していた内容に届かなかった点である。本プロジェクトを含め、すべてのプロジェクトメンバーが兼任や非常勤であったことも影響が大きいが、当センターの活動が大学に対しての営業不足であった点は否めない。近い将来、組織の再編があるならば、学内に影響・効果をもたらす具体的な計画と構想競ってした上での対外的な活動を見据えた展開が必要になるだろう。

1. プロジェクトメンバー

現職	氏名	職
芸術情報センター 助教	大谷 智子	
芸術情報センター 芸術情報研究員	嘉村 哲郎	
総合芸術アーカイブセンター 特別研究員	生貝 直人	特別研究員
大学院美術研究科 後期博士課程 絵画専攻(壁画)	大江 晃世	アーカイブアシスタント
プロジェクト協力者		
大学院美術研究科 修士課程 先端芸術表現専攻	村田 冬美	
大学院映像研究科 修士課程 メディア映像専攻	青柳 菜摘	
東京文化財研究所	小林 美貴	

※平成 27 年 9 月時点

2. 活動概要

（1） 情報活用基盤

（ア） 現代アートの作品情報の記述用語に関する研究―「技法・材料」用語集の作成―

（イ） 美術品 3D データの利用に関するガイドライン(案)

（ウ） イベント情報システム

（エ） Music DB

（オ） 工芸用語システム

（カ） アーカイブシステム

（2）展示・イベント
（ア） 2015 年 6 月 17 日　「再構成：東京藝術大学の記録資料から芸術情報資源へ」
（イ） 2015 年 9 月 5 日　「藝術を記録すること、伝えること」
（ウ） 2016 年 3 月 23 日　「藝祭 100 年の歴史展 東京美術学校《美術祭》から《芸術祭》を経て」

（3）資料のデジタル化と公開
（ア） 吉本光蔵撮影 日露戦争写真
（イ） 藝祭 100 年の歴史展の資料収集・編纂

3. 活動報告—情報活用基盤

3.1. 現代アートの作品情報の記述用語に関する研究—「材質・技法」用語集の作成—

報告: 小林 美貴

（1）目的

現代アートの作品情報は、芸術系大学の学生から美術作家、美術館・博物館の学芸員、レジストラー、保存修復家、美術鑑賞者によって作品の展示・管理・修復する現場で利用されているが、情報を記述する用語（以下、記述用語）は多岐にわたっている。本研究は、現代アートを含む芸術品の属性情報である「材質・技法」に関する用語集の基盤づくりを目的とする。

（2）成果

2014 年度までに、冊子体の東京藝術大学『卒業・修了制作作品集』から収集した用語 2884 件（日本語表記(A1J)1453 件、英語表記(A1E)1431 件）を美術館・博物館の収蔵品情報と照合して記述例と事例数を調査した。2015 年度は、既存の辞典及びシソーラスから典拠情報を示すことで用語の適正と統制を評価し、日本語・英語表記の用語集を作成した。なお、本用語集は MediaWiki のプラットフォームで試作運用する予定である。

（3）報告

「Linked Open Data の技術を利用した『技法・材料』用語整理の試み —東京藝術大学卒業・修了制作作品集を中心に」『AMC Journal：芸術情報センター活動報告書』vol.1, 東京藝術大学芸術情報センター, 2015.

（4） 発表

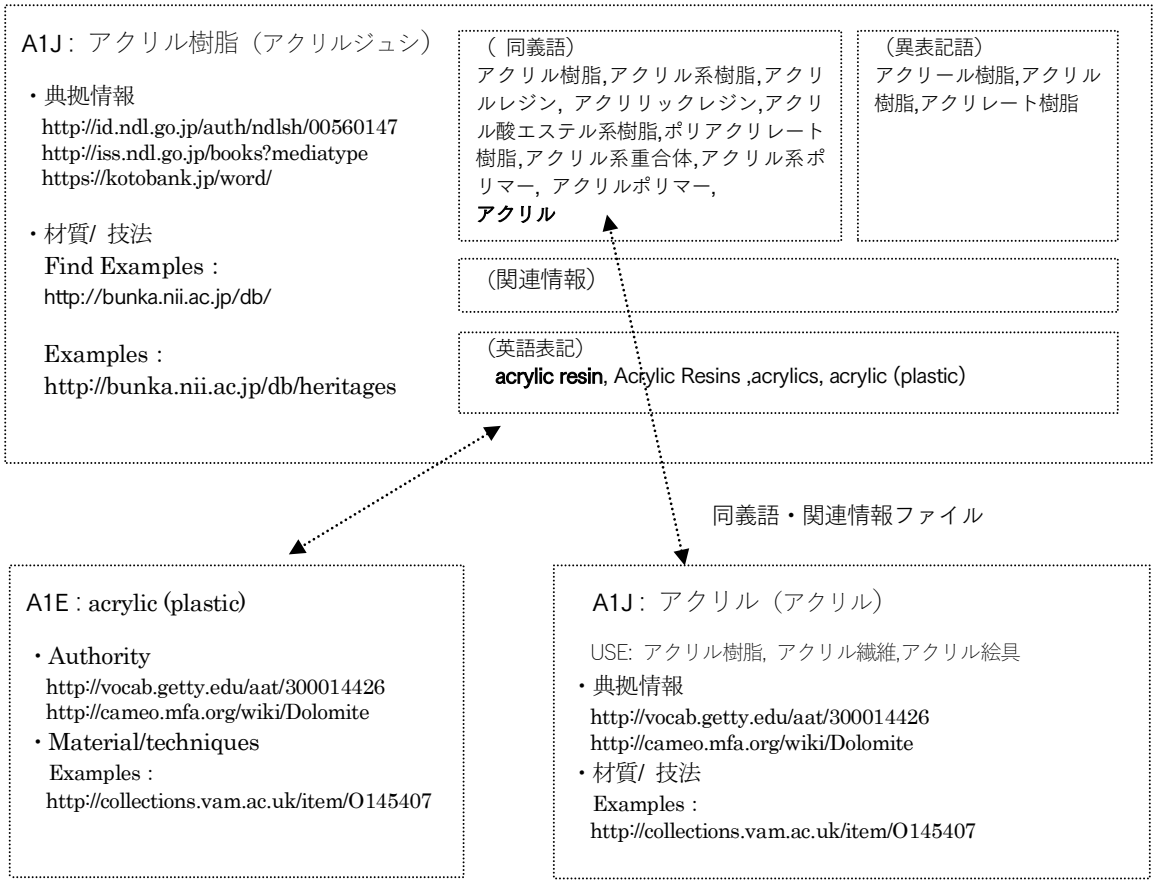
「「Linked Open Data の技術を利用した『材質・技法』用語整理の試み」,2014 年度アート・ドキュメンテーション学会年次大会　公募研究発表会 , 東京藝術大学, 2014.6.8.

1.　「材質・技法」の用語

『卒業・修了制作作品集』から収集した用語は、現代アートを含む芸術品の「材質・技法」に関する名詞及び名詞句である。技法には、古来の伝統的技法や現代の新素材・機器を用いた製作技術、作家が独自開発した技術が含まれ、材質には、一般的な画材から日常雑貨、作家の自作品まであらゆる具象的な素材、コンピュータ用語や感情語である抽象的な実体までが含まれる。それら材質及び技法の理解は、美術領域以外の科学技術領域を含めた幅広い知識体系が必要となる。

2.　用語の選択

『卒業・修了制作作品集』（平成 18 年度～平成 24 年度）の掲載作品 3565 点から「材質・技法」の用語 A1J 1453 件を抽出し、優先語 1253 件と非優先語となる同義語 88 件を見出し語に登録し、異表記語や曖昧語、誤植は見出し語から除外した。優先語の選択は、1. 美術館・博物館の所蔵品目録や収蔵品データベースに記述例がある用語、2. 辞典・事典やシソーラスに見出し語として登録される用語 を判断基準としている。
本用語集の特徴は、英語の頭字語・略語と普通名詞以外の商品名（商標、登録商標）も登録する点である。頭字語・略語を登録する場合には括弧内に略語ではない形を示している。



日本語表記（A1J）と英語表記（A1E）と非優先語（同義語・関連情報ファイル）の関係（※データは一部抜粋）

3.　用語の典拠情報

日本語表記（A1J）について、図書館系（国立国会図書館）・科学技術系（科学技術振興機構）・美術系（東京藝術大学、武蔵野美術大学等）・Wikipedia 等のデジタルリソース及び東京藝術大学編集の参考図書から典拠情報を収集した。なお、用語の典拠情報がこれら情報源から得られない場合、代わりに同義語や異表記語、関連情報のリンクを掲載している。また、文化遺産オンライン及び国立美術館のデータベースから用語の記述例を抽出した。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
1	ID	A1J	ヨミ	同義語	異表記	関連情報	A1E	Web NDL Authorities	NDLサーチ1	NDLサーチ2
2	000139	アルミニウム合金	アルミニウムゴウキン	アルミニウム合金 Al合金 アルミニウム基合金 Al基合金	アルミニウム合金 アルミニューム合金 アルミニュウム合金 アルミニューム基合金		Al alloy Al alloy aluminium alloy	http://id.ndl.go.jp/auth/ndlsh/00560359		http://iss.ndl.g
3	000140	アルミニウム鋳造	アルミニウムチュウゾウ	アルミニウム鋳造 アルミ鋳造		アルミニウム鋳造	aluminum casting		http://iss.ndl.go	http://iss.ndl.go.
4	000141	アルミパイプ	アルミパイプ			アルミニウムパイプ	aluminum pipe		http://iss.ndl.go	http://iss.ndl.go.
5	000142	アルミ箔	アルミハク	アルミ箔 アルミホイル アルミニウム箔 Al箔	アルミはく アルミ箔 アルミフォイル アルミホイル	アルミニウム	aluminum foil			http://iss.ndl.g

作業リスト（一部抜粋）

4.　同義語リスト・異表記語リスト・関連情報リスト

同義語リストには、同義語（同じ概念を異なる語形で表す語）及び類義語（類似の概念を示す語）を、異表記語リストには異表記語（同義語の一種で異なる綴りで表記した語）を掲載する。既存のシソーラスとして、科学技術振興機構（JST）は科学技術用語の同義語・異表記語・英語を長年にわたり蓄積し大規模なシソーラスを構築している。今回は当該シソーラスの同義語などを引用してリストに載せ、美術領域における用語間の関係性とずれが認められる場合には修正を検討している。また未登録語は新たに適宜追加した。美術館・博物館は各館で同

じ材質・技法を異なる用語で表現する場合があるが、それら用語間の等価関係の判断は難しく、本用語集では同義語あるいは類義語として登録している。関連情報リストには、用語が複合語や商品名で典拠情報を得られない場合に一般名や関連語を載せている。

5. 英語表記（A1E）

英語表記（A1E）は、『卒業・修了制作作品集』と科学技術振興機構の J-Global に掲載されている英語と、ゲティ財団”The Getty Vocabularies “の AAT(Art & Architecture Thesaurus) 及びボストン美術館の CAMEO の登録語を照合し、さらに欧米美術館 4 館の収蔵品データベースの記述例を比較検討して、日本語表記 A1J に対応する英語表記 A1E を選択した。ただし、日本の伝統的技法や材料に関する語彙は AAT と CAMEO への登録数が少ない傾向にあるため、収蔵品データベースの記述例を参考にローマ字の併記を採用している。同義語・異表記語については、典拠情報となる AAT 及び CAMEO の各サイトで確認することができるが、科学技術系シソーラスとの差異が認められる。

6. 最後に

本研究では、用語について複数の典拠情報を URI で示すことで、記述用語の適正を確認する作業を行った。典拠情報は美術領域と科学技術領域を含む文献情報を基礎としているが、さらに美術及び保存・修復領域における用語の説明やデータを加え、制作者の助言を得て技法・素材に関する用語の概念を確認することが必要だと思われる。用語集の作成は、作品に関わる制作者や美術館等の管理者、保存修復家の間で情報ネットワークを国際的に構築する上でも不可欠な作業である。

典拠情報一覧

[1] Web NDL Authorities, 国立国会図書館典拠データ検索・提供サービス, 国立国会図書館, http://id.ndl.go.jp/auth/ndla/
[2] 国立国会図書館サーチ, 国立国会図書館, http://iss.ndl.go.jp/
[3] kotobank, 株式会社朝日新聞社, https://kotobank.jp/
[4] Weblio 辞書, ウェブリオ株式会社, http://www.weblio.jp/
[5] J-GLOBAL, 国立研究開発法人科学技術振興機構, https://jglobal.jst.go.jp/
[6] 工芸用語集, 東京芸術大学 総合芸術アーカイブセンター, http://archive.geidai.ac.jp/kogei/
[7] 技法材料データベースβ, 東京芸術大学 総合芸術アーカイブセンター, http://hiden.geidai.ac.jp/
[8] 造形ファイル, 武蔵野美術大学, http://zokeifile.musabi.ac.jp/
[9] Artwords（アートワード）, 大日本印刷株式会社 http://artscape.jp/artword/
[10] ウィキペディア, 非営利団体ウィキメディア財団, https://ja.wikipedia.org/wiki/
[11] The Getty Vocabularies, The J. Paul Getty Trust, http://vocab.getty.edu/
[12] CAMEO: Conservation & Art Materials Encyclopedia Online, Museum of Fine Arts Boston, http://cameo.mfa.org/wiki/Main_Page
[13] Wikipedia, Wikimedia Foundation, Inc., https://en.wikipedia.org/wiki/Main_Page

所蔵品目録

[1] 文化遺産オンライン, 文化庁, http://bunka.nii.ac.jp/
[2] 独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム, 独立行政法人国立美術館, http://search.artmuseums.go.jp/index.php
[3] LODAC Project, http://lod.ac/
[4] V&A's Search the Collections, http://collections.vam.ac.uk/
[5] TATE Search art & artists, Tate, http://www.tate.org.uk/art/search
[6] The Collection, MoMA, http://www.moma.org/collection/works?classifications=
[7] The Collection Online, The Metropolitan Museum of Art, http://www.metmuseum.org/collection/the-collection-online

参考文献

[1] 東京藝術大学大学院文化財保存学日本画研究室編, 日本画用語事典 : 図解, 東京美術, 2007.
[2] 佐藤一郎, 東京藝術大学油画技法材料研究室編著, 絵画制作入門 : 描く人のための理論と実践, 東京藝術大学出版会, 2014.
[3] ダニエル・バーニー・トンプソン 著,佐藤一郎 監訳,中川経子 訳, トンプソン教授のテンペラ画の実技, 三好企画, 2005.
[4] 歌田眞介 [ほか], 佐藤一郎[ほか]編, 油画を読む : 高橋由一から黒田清輝の時代へ : 解剖された明治の名品たち : 特別陳列金刀比羅宮の高橋由一作品, 東京藝術大学大学美術館協力会 , 2001, pp.160-165.
[5] 東京芸術大学美術学部版画研究室, 東京芸術大学大学美術館, 東京新聞 編, Hanga : 東西交流の波, 東京新聞, 2004.
[6] 秋山勝義, 飯野一朗 著, 彫金手づくりジュエリーの技法と知識, 東京堂出版, 2012.
[7] 新潮世界美術辞典, 新潮社, 1985.
[8] 漆工史学会編, 漆工辞典 = Encyclopedia of JAPAN, 角川学芸出版, 2012.
[9] 勝井三雄, 田中一光, 向井周太郎 監修,伊東順二, 柏木博 編集委員, 現代デザイン事典 2014 年版, 平凡社, 2014.

3.2.　美術品 3D データの利用に関するガイドライン(案) ver.2016 年 2 月 26 日

文責：東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター　生貝直人

1. 本ガイドラインの目的と構成

本ガイドラインの目的は、美術品 3D データの利用に関わる法的論点とその一般的な解釈指針を示し、3D データの利用に関わる各種の事業を実施するにあたり、関係者の間で取り決められるべき事項についての理解を共有することにより、美術品 3D データのさらなる利用の促進と、それに基づく文化芸術の発展に資することである。

美術品 3D データの利用に際しては、美術品の作家（著作権者）、美術品の所蔵者、3D データの作成者、販売・利用を行う者、そして純然たる鑑賞者・消費者をはじめとして、多数のステイクホルダーが複雑に関係することになる。美術品 3D データの円滑な利用が進められるためには、それらの関係者の間で、関連する法的権利の性質についての理解、そしてその取り扱いに関しての取り決めのあり方を、広く共有する必要がある。

本ガイドラインでは、それら関係者が有しうる法的権利の性質を確認した後（２）、3D データを利用したプロジェクトを実施するに際して関係者で取り決められるべき事項の要素について述べ（３）、最後に当該取り決めに際して用いられるべき書面の一案を示す（４）。

2.　関係する法的権利の性質

まず、3D データの利用に関わる、著作権をはじめとした、各関係者が有しうる各種の法的権利の性質を確認する。ここで述べる事項はあくまで「法的」権利の性質であり、倫理的・道義的配慮については、当然に各芸術分野の慣行を尊重した対応を行う必要がある。なお、特に明記しない限り、言及する法律の条文は、著作権法の該当条文を指す。

2.1. 美術品の創作者の権利

美術品の創作者には、著作権法が定める各種の権利（財産権・人格権）が帰属する。著作権は、原則として著作者の死後 50 年間保護される。

美術品から 3D データを作成する、あるいは当該データを元に 3D プリンタ等を用いて美術品の物理的複製物を作成することは、著作物の複製に該当する。そのような行為を行おうとする者は、原則として著作権者の許諾を得る必要がある。ただし、第 30 条以下に定められる各種権利制限規定（私的複製、図書館等における複製、引用、授業の過程での複製等）に該当する場合には、著作権者の許諾なく 3D データの作成や利用を行うことができる。

美術品の著作者は、財産権の他、著作者人格権（氏名表示権・同一性保持権・公表権等）を有する。3D データの作成や利用を行おうとする者は、原則として、著作者の氏名を表示しなければならず、また著作者の意に反するような改変を行ってはならない。著作者人格権は著作者に一身専属の権利であるが、著作者の死後も、原則として著作者人格権を侵害するような行為を行ってはならない（第 60 条）ことに留意する必要がある。美術品の著作権は、一般社団法人日本美術家連盟等の著作権等管理事業者に管理が委託されている場合があるが、著作者人格権に関しては、通常、管理委託の対象とはされていない。

美術品の著作権者は、著作権法が定める権利のうち展示権（第 25 条）を有するが、美術の著作物の原作品を所有する者は、一般公衆の見やすい屋外の場所に恒常的に設置する場合を除き、美術品の原作品によりその展示を行うことができる（第 45 条）。

実用品のデザイン等には、応用美術としての性質を備えない限りにおいて、原則として著作権の保護は与えられない。ただし、実用新案権や意匠権、特許権等の登録がなされている可能性があるため、3D データの利用者は留意を行う必要がある。

2.2. 美術品の所蔵者の権利

美術品を所蔵する者は、その創作に対する直接の関与がない限り、著作権を有さない。ただし、所蔵する美術品を 3D データ作成のために貸し出す場合などにおいて、相手方との間で各種の条件についての契約を結ぶことが可能であり、その契約に定められる限りにおいて、3D データの利用用途、ならびに 3D データの利用によって生じた経済的利益の配分等についての取り決めを行なう事が可能となる。

このようにして結ばれた契約は、契約の当事者以外の者、たとえばインターネット上に公開された 3D データを入手した第三者等に対しては、原則として効力を有さないことに留意する必要がある。そのため、特に著作権

保護の対象とならない 3D データをインターネット上に公開する場合に、アクセスする利用者に対して何らかの条件を求めたい場合には、利用者が認識しやすいよう、当該データの利用条件等についての記述を行なう必要がある。なお、当事者の間で適正に結ばれた契約は、原則として、当該美術品自体や 3D データに関わる著作権保護の有無、および権利制限規定への該当性からの影響を受けない。

2.3. 3D データ作成者の権利

美術品の 3D データは、当該美術品の形状を正確に再現している限りにおいて、著作権法による新たな保護は与えられない。そのため、その利用用途や経済的利益の配分に対して主張しうる権利の性質は、美術品の所蔵者の場合と同様、契約による定めに基づく。

一方で、元となる美術品から 3D データを作成するにあたり、創作性のある改変を行なうなどした場合には、新たな著作権が認められる余地があり、その場合 3D データの作成者は、当該 3D データ自体に対する著作権を有することとなる。このことは、全くの無の状態から、創作性を備えた新たな 3D データを作成した場合にも同様である。さらに、現実に存在する美術品の 3D データを元として、仮想空間上に一定の鑑賞的価値のあるビジュアライゼーションを作成したなどの場合には、写真の著作物等と同様、その光量や角度、構図等に発生する創作性により、3D データ作成者の著作権が認められうる場合があることに留意する必要がある。

なお、美術品の形状を改変した 3D データを作成・利用する場合には、元となる美術品の著作者の同一性保持権等に配慮しなければならない。適切な許諾を得た上で作成された二次的著作物としての 3D データを第三者が利用する場合には、元となる美術品の著作権者と、改変を行った 3D データ作成者の、双方から許諾を得る必要がある。

2.4. 販売・利用者の権利

美術品を販売・利用する者は、その創作に対する直接の関与がない限りは、著作権を有さない。その利用用途や経済的利益の配分に対して主張しうる権利の性質は、美術品の所蔵者等の場合と同様、契約による定めに基づく。なお、美術品や 3D データの著作権者は、当該美術品の貸与権（第 26 条の 3）を有するため、3D データ自体の複製物、あるいは 3D データから作成された美術品の物理的複製物を第三者に有償で貸与しようとする場合には、著作権者の許諾を得る必要がある。ただし、貸与を受ける者から料金を徴収しない場合には、この限りではない（第 38 条第 4 項）。

3. 取り決められるべき事項の要素

上記で述べた、各関係者が有する法的権利の性質を念頭に、3D データの利用にあたり関係者の間で取り決められるべき共通の内容には、下記の事項を含むことが望ましい。

3.1. 3D データや物理的複製物の利用目的

当該 3D データや、それを元に作成された物理的複製物を、どのような用途に用いるかを定める必要がある。具体的には、(1)研究・教育利用、(2)文化施設等での展示利用、(3)インターネット公開、(4)物理的複製物の作成、(5)第三者への提供、(6)商業的利用、等のいずれを行なう予定があるのかを、関係者の間で取り決める必要がある。いずれの利用目的を定めるにあたっても、「誰が」、「どの程度の期間」、「どのような費用負担により」それを行うことができるのかを明確化しておく必要がある。特に、公的資金等の外部資金を利用して 3D データの作成を行おうとする場合には、当該資金の性質や支出要件に、取り決めの内容が正確に適合していることを要する。

3.2. 改変の有無

特に著作権保護対象である美術品の 3D データを利用しようとする場合には、著作者人格権の配慮を含めた、改変の有無について定める必要がある。改変の程度について事前に予測を行なうことが困難である場合には、成果物の公表や利用にあたり、事前に創作者への確認を行なう手続きを定めておくことが考えられる。

さらに近年では、美術品の 3D データをインターネット上で公表し、クリエイティブ・コモンズ等の自由利用ライセンスを適用することにより、当該データを用いた新たな創作活動を促進しようとする施策が多く見受けられる。そのような場合には、著作者と公開者をはじめとする関係者の間で、公開・再利用条件についての取り決めを行なう必要がある。

3.3. 経済的利益の配分

3D データの利用目的のひとつに、3D データ自体や、それを元とした複製物の販売等により、経済的利益を得ることが考えられる。その場合には、発生した利益の配分率を、可能な限り明確に、事前に定めておく必要がある。配分率の決定にあたっては、それぞれの関係者による関与の程度や出資の大小、著作権保護の有無等を念頭に置くことが望ましい。

正確な配分率を事前に定めることは困難なことが多いが、その場合には、対価を伴う販売や貸与を行おうとする際には、事前に関係者での協議を行い、その配分率を決定するという条項を設けることが考えられる。少なくとも、いずれの関係者が、経済的利益の配分を受ける権利を有するのかを事前に明確化しておく必要がある。

3.4. 第三者による取り決め内容の順守の確保

3D データを作成し、また利用しようとする関係者は、事前に取り決められた内容を順守する必要があると同時に、関係者の合意の下に当該 3D データや美術品の複製物を第三者に提供しようとする際、そのような取り決めが、当該第三者によっても順守されることを確保する必要がある。

たとえば、事業開始当初は著作者と所蔵機関、3D データ作成者の三者関係のみによって行われていた 3D データの利用について、後に成果物の展開を行うにあたり、営利企業や他の文化施設等の販売・利用者との協業を行うことが考えられる。事前に取り決められた内容が、新たに参加した者にも順守されることを確保すると共に、必要に応じて、関係者の合意の下、取り決め自体の変更を円滑に行うための手続きを定めておくことが望ましい。

ただし、3D データ自体をインターネット上に公表する場合には、特に元となる美術品自体の著作権保護期間が満了している場合には、一切の法的保護が存在しないことが多いため、ダウンロードを行った第三者としての一般利用者に、取り決め内容を遵守させることは実質的には相当程度困難であることに留意する必要がある。一般的には、著作権保護対象とならない 3D データをインターネット上に公表する際には、一般利用者による自由な再利用を認めることを前提とした取り決めを行っておくことが現実的であると考えられる。

4. 関係者で交わされるべき書面の例

【上野博物館に所蔵される北郷悟製作の＜空から＞を東京藝術大学が借り受け、
3D データと物理的複製物を作成し、日本美術館に展示を行う事業についての取り決め】

上野博物館、北郷悟、東京藝術大学、日本美術館の 4 者は、本事業を実施するにあたり、下記で定める事項について合意する。

1．上野博物館は、所蔵する北郷悟氏製作の＜空から＞を東京藝術大学に貸し出し、東京芸術大学は、3D データの作成を行う。作品の運搬費用は上野美術館が負担し、3D データの作成費用は東京藝術大学が負担する。

2．東京藝術大学は、作成した 3D データの複製物を、上野博物館、北郷悟に対して、それぞれ無償で提供する。3D データは、期間の定めなく、上野博物館、北郷悟、東京藝術大学の三者が、それぞれ各自の必要とする非営利の研究教育に必要な利用、ならびに著作権法が定める権利制限規定に該当する利用を行うことができる。研究教育に必要な利用には、施設内での研究教育活動の他、報告書や学術論文への掲載等を含む。

3．東京藝術大学は、＜空から＞の 3D データを用いて、物理的複製物を作成する。当該複製物は、日本美術館において 2020 年 1 月 1 日から同年 3 月 31 日まで開催される展覧会において展示される他、同館における収蔵品として管理され、他の所蔵物と同様の取扱を受ける。日本美術館に展示される複製物は、事前に北郷悟の確認を受ける。日本美術館での展示に必要な複製物の作成や運搬等の費用は、日本美術館が負担する。

4．上野博物館、北郷悟、東京藝術大学は、それぞれが管理するウェブサイト上において、当該 3D データを公表することができる。その際には、＜空から＞の製作者が北郷悟であること、上野博物館が所蔵する作品であること、東京藝術大学が作成した 3D データであることを明示する。公表の際には、技術的に可能な範囲での複製防止措置を施す。

5．当該 3D データ自体、ならびに物理的複製物について、有償での販売や貸出を行おうとする場合には、事前に上野博物館、北郷悟、東京藝術大学の三者が収益の配分を受ける。配分率に関しては、当該三者が事前に協議を行った上で定めるものとする。

6．北郷悟、ならびに上野博物館、東京藝術大学、日本美術館は、上記事業を実施することに必要な、一切の知的財産権の利用を許諾する。

7．上記に定めのない事項については、関係者による誠実な協議により定める。

上野博物館、北郷悟、東京藝術大学、日本美術館
各代表者の印、日付

3.3.　イベント情報システムの構築と運用

概要

総合芸術アーカイブセンターでは、設立の当初からアーカイブという活動の理解を得ることが課題とされてきた。本プロジェクトでは研究室や特定の組織に対して資料の収集とデジタル化、WEB 公開を進めてきたが、積極的な情報活用には至っていない。そこで、東京藝術大学に関わる人々がアーカイブの活動を目の当たりにでき、容易に使える情報が何であるか検討した結果、藝大生や東京藝術大学に関係あるイベント情報を収集し、誰もが情報を利用できるシステムの提供に至った。イベント情報システムの構築と運用に際し、東京藝術大学では毎日学生や教員らによる芸術活動が行われているが、それらに関する情報が全く集約されていない現状も構築理由の一つである。

情報源

本イベント情報システムの特徴は、掲載するイベントの内容が現役の藝大生や教員のほかに卒業生をも対象にしている点にある。イベント情報の情報源は、問合せメールで寄せられる情報の他に学内に掲示されている展覧会や演奏会のチラシがベースになっている。学内に掲示されるチラシは掲示場所の事務担当が許可をすることから、事務室に持ち込まれたチラシの 1 部をアーカイブセンター用に保存し、定期的に回収後、手作業で情報を入力している(現状は上野校地に掲示されているチラシが対象)。

メタデータ

本システムは、イベント情報が再利用できるようにメタデータを公開している。イベント詳細ページに表示されている「メタデータ」を選択するといくつかのデータ形式でメタデータをダウンロードすることが可能である。また、アドレスの部分にメタデータの拡張子をつけることでそのままメタデータを取得することができる。例: http://event.geidai.ac.jp/event/2737.ttl

本システムが利用するイベント情報のメタデータスキーマは横浜アート LOD をベースに独自拡張している(横浜アート LOD: http://yan.yafjp.org/lod)。

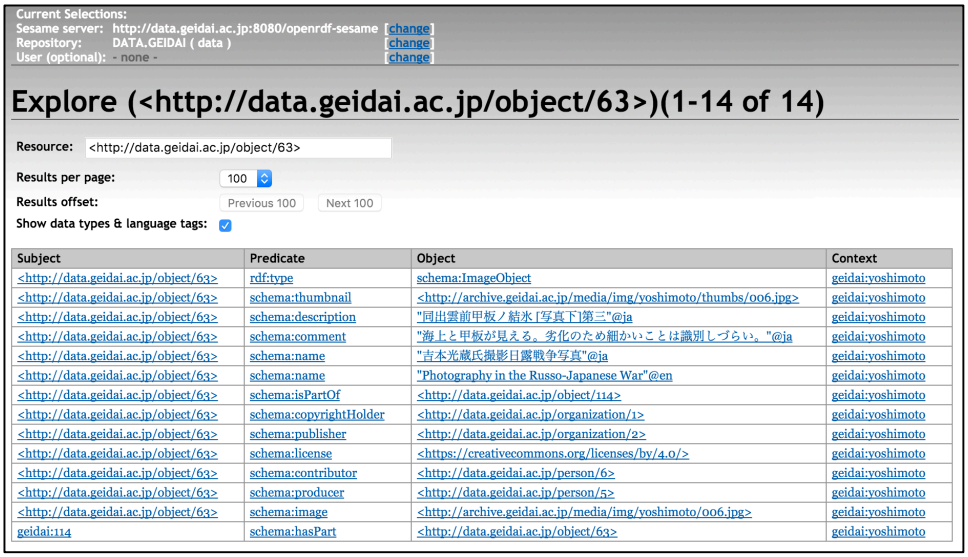
```
@prefix rdf: <http://www.w3.org/1999/02/22-rdf-syntax-ns#> .
@prefix rdfs: <http://www.w3.org/2000/01/rdf-schema#> .
@prefix dcterms: <http://purl.org/dc/terms/> .
@prefix dc: <http://purl.org/dc/elements/1.1/> .
@prefix owl: <http://www.w3.org/2002/07/owl#> .
@prefix schema: <http://schema.org/> .
@prefix xsd: <http://www.w3.org/2001/XMLSchema#> .
@prefix skos: <http://www.w3.org/2004/02/skos/core#> .
@prefix cal: <http://www.w3.org/2002/12/cal/ical#> .
@prefix foaf: <http://xmlns.com/foaf/0.1/> .
@prefix geo: <http://www.w3.org/2003/01/geo/wgs84_pos#> .
@prefix yav: <http://yafjp.org/terms/yav/1.0#> .
@prefix : <http://event.geidai.ac.jp/event/> .

:2737 a yav:Event, cal:Vevent;
    rdfs:label "コントラバスアンサンブル Colors　ファーストコンサート"@ja;
    dc:title "コントラバスアンサンブル Colors　ファーストコンサート"@ja;
    cal:summery "コントラバスアンサンブル Colors　ファーストコンサート"@ja;
    dc:creator [
        a yav:Creator;
        foaf:name "ARCHIVE CENTER"@ja;
        dcterms:identifier "2";
    ];
    yav:programUnit [ a yav:ProgramUnit;
        cal:location "ミューザ川崎市民交流"@ja;
        yav:location "ミューザ川崎市民交流"@ja;
        schema:location [ a yav:Place;
            schema:name "ミューザ川崎市民交流"@ja;
            geo:lat ""^^xsd:float;
            geo:long ""^^xsd:float;
        ];
        schema:contactPoint [ a schema:ContactPoint;
            schema:email "colorsbass@gmail.com";
            schema:url "https://www.facebook.com/events/178884535811700/";
        ];
        schema:price "一般１８００円";
        cal:dtstart "2016-03-11T18:30:00+09:00"^^xsd:dateTime;
        cal:dtstamp "2016-03-04T19:53:56+09:00"^^xsd:dateTime;
        yav:programUnit [ a yav:ProgramUnit;
            yav:work [
                rdfs:label "コントラバスアンサンブル Colors　ファーストコンサート"@ja;
            ];
            yav:player [
                a yav:Player;
                schema:name "本田直也(代表)"@ja;
            ];
            yav:player [
                a yav:Player;
                schema:name "中窪和輝(副代表)"@ja;
            ];
            yav:player [
                a yav:Player;
                schema:name "井上美冬"@ja;
        ];
    ];
.
```

イベント RDF データの例(一部省略)

RDF データベース

2016 年 3 月現在、イベント情報のメタデータは単独のファイルで利用できるが、RDF データベースとの連携が整っていないため SPARQL によるデータ利用ができていない状態である。本システムの RDF データベースとの連携および dereferences 対応は 2016 年 4 月以降に実装予定である。

本プロジェクトが利用している RDF データベースは Ontotext 社の GraphDB(旧 OWLIM)を利用している(http://ontotext.com/products/graphdb/)が、翌年度以降の総合芸術アーカイブセンターの活動により、保守が有償である当ソフトウェアの継続利用が難しい。契約の期限が切れた後は現状のものを継続利用するか、オープンソースの RDF データベースサーバ(Virtuosso)に乗換が考えられる。



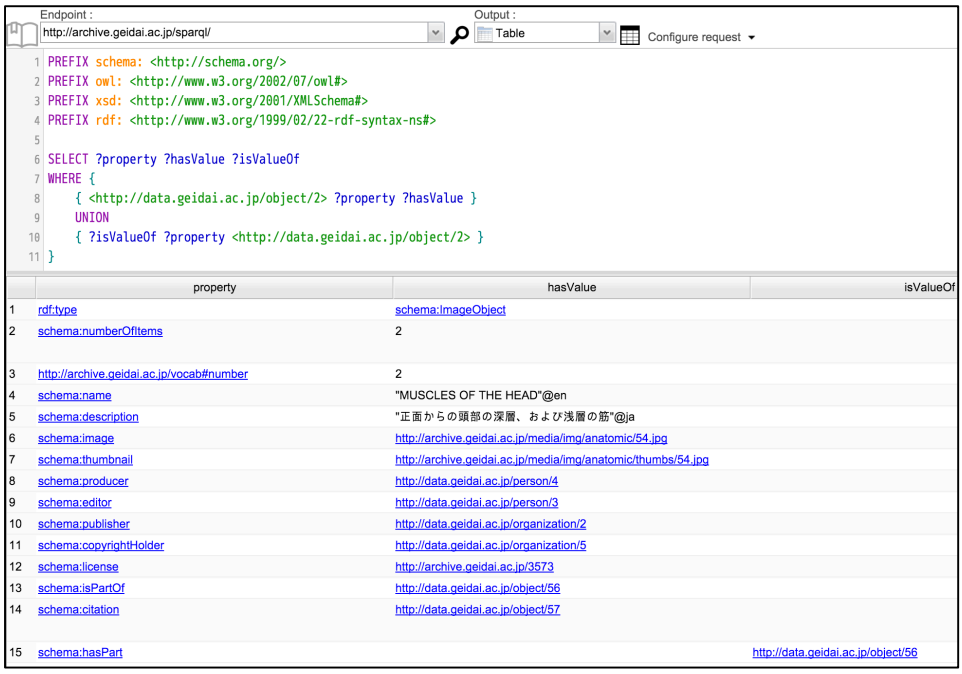
Current Selections:
Sesame server: http://data.geidai.ac.jp:8080/openrdf-sesame [change]
Repository: DATA.GEIDAI (data) [change]
User (optional): - none - [change]

Explore (<http://data.geidai.ac.jp/object/63>)(1-14 of 14)

Resource: <http://data.geidai.ac.jp/object/63>
Results per page: 100
Results offset: Previous 100 Next 100
Show data types & language tags:

Subject	Predicate	Object	Context
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	rdf:type	schema:ImageObject	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:thumbnail	<http://archive.geidai.ac.jp/media/img/yoshimoto/thumbs/006.jpg>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:description	"同出雲前甲板ノ結氷「写真下」第三"@ja	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:comment	"海上と甲板が見える。劣化のため細かいことは識別しづらい。"@ja	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:name	"吉本光蔵氏撮影日露戦争写真"@ja	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:name	"Photography in the Russo-Japanese War"@en	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:isPartOf	<http://data.geidai.ac.jp/object/114>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:copyrightHolder	<http://data.geidai.ac.jp/organization/1>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:publisher	<http://data.geidai.ac.jp/organization/2>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:license	<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:contributor	<http://data.geidai.ac.jp/person/6>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:producer	<http://data.geidai.ac.jp/person/5>	geidai:yoshimoto
<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	schema:image	<http://archive.geidai.ac.jp/media/img/yoshimoto/006.jpg>	geidai:yoshimoto
geidai:114	schema:hasPart	<http://data.geidai.ac.jp/object/63>	geidai:yoshimoto

RDF データベースに格納されたデータ例(データは日露戦争写真)



Endpoint : http://archive.geidai.ac.jp/sparql/
Output : Table
Configure request

```
PREFIX schema: <http://schema.org/>
PREFIX owl: <http://www.w3.org/2002/07/owl#>
PREFIX xsd: <http://www.w3.org/2001/XMLSchema#>
PREFIX rdf: <http://www.w3.org/1999/02/22-rdf-syntax-ns#>

SELECT ?property ?hasValue ?isValueOf
WHERE {
    { <http://data.geidai.ac.jp/object/2> ?property ?hasValue }
    UNION
    { ?isValueOf ?property <http://data.geidai.ac.jp/object/2> }
}
```

	property	hasValue	isValueOf
1	rdf:type	schema:ImageObject	
2	schema:numberOfItems	2	
3	http://archive.geidai.ac.jp/vocab#number	2	
4	schema:name	"MUSCLES OF THE HEAD"@en	
5	schema:description	"正面からの頭部の深層、および浅層の筋"@ja	
6	schema:image	http://archive.geidai.ac.jp/media/img/anatomic/54.jpg	
7	schema:thumbnail	http://archive.geidai.ac.jp/media/img/anatomic/thumbs/54.jpg	
8	schema:producer	http://data.geidai.ac.jp/person/4	
9	schema:editor	http://data.geidai.ac.jp/person/3	
10	schema:publisher	http://data.geidai.ac.jp/organization/2	
11	schema:copyrightHolder	http://data.geidai.ac.jp/organization/5	
12	schema:license	http://archive.geidai.ac.jp/3573	
13	schema:isPartOf	http://data.geidai.ac.jp/object/56	
14	schema:citation	http://data.geidai.ac.jp/object/57	
15	schema:hasPart		http://data.geidai.ac.jp/object/56

SPARQL 検索による結果表示例(データは解剖図)

3.4. Music DB(東京藝術大学演奏会データベース)の構築と運用

概要

MusicDB は東京藝術大学で行われる演奏会情報を記録するデータベースである。演奏会情報は、音楽学部音楽研究センターや演奏企画室、大学史史料室など複数箇所から利用があり、それぞれが持つ情報の整合性を取りつつ情報共有できる仕組みが求められきいた。とくに、演奏者情報と演奏曲目の情報は演奏会とその曲目、演奏者の対応付けや管理が複雑化しエクセルでの管理に限界があった。

楽曲情報の管理項目(57 項目)

年度	型番	日付	曜日	時刻	演奏会種別	公演名 1	公演名 2
個別回数	会場	企画	作曲者	作曲者名（欧文）	所属 ISO 3166	生	没
50 年 解禁	戦時加算＋11 年 (約 10 年 5 か月) 解禁	種別	編曲者	生	没	種別	作詞者
生	没	種別	楽曲名（Main）	楽曲名（Sub）	JASRAC 曲名	J-WID 番号	著作権備考
AC File 名	OCD 数	ECD 数	CD 枚数	CD Tr.	wav	wav:Time	JASRAC 番号取得 (CD 毎)
JASRAC 番号取得 CD（頒布開始日）	DVD 数	DVD 枚数	DVD Chapter	DVD: Total Time	DVD:Time	JASRAC 番号取得 (DVD)	JASRAC 番号取得 DVD（頒布開始日
BD 数	BD 枚数	BD Chapter	BD:Time	mov	分割 mov	mov 容量/時間	vimeo
備考							

演奏会情報の管理項目(36 項目)

日付	曜日	時刻	演奏会種別（プロジェクト名・シリーズ名等）	演奏会種別読み	公演名 1	公演名 2	演奏会回数
種目(タグ)	会場	主催・企画等	曲名（作曲者：曲名）	入場料	出演者名（楽器名/役名：氏名）	出演者以外の関係者	ポスター
チラシ	パンフレット	備考	年度	型番	CD	ECD	PT Data
DVD	BD	DVD time	BD time	Protools data name	チラシデータ	パンフレットデータ	録音
録画	音響 (PA)	備考(音響 P)	備考				

演奏者情報の管理項目(18 項目)

年度	型番	日付	曜日	時刻	演奏会種別	公演名 1	公演名 2	個別回数
会場	主催	楽器名	役名	演奏者	芸名	隣接権	所属	備考

そこで、本プロジェクトでは複雑化した演奏会関係の情報登録・利用に Semantic Media Wiki を採用して管理することにした。Semantic Media Wiki は、一般的な Wiki の機能のほかに情報に意味づけをすることで情報検索の柔軟性やデータの取り出し、入力時の支援などができる Wiki システムである。拡張機能を使用することで、Wiki の記法がわからなくても用意された入力フォームに従って情報を登録できることから、人文系でよく利用されるファイルメーカーのようにデータ登録ができる点が特徴である。

使用した主な拡張機能

・Semantic Forms	セマンティック・データを入力・編集するためのフォーム
・Semantic Forms Inputs	Semantic Forms のための特定形式のデータ入力補助
・Semantic Result Formats	データを様々な形式で表示・出力
・Header Tabs	データを種類別にタブ表示
・ParserFunctions	表示・検索時に使用する関数群

プロパティ

セマンティック・ウェブのための意味付けメタデータを「プロパティ」として定義。Text、Number、Page などのデータ型を持ち、ひとつのプロパティ定義がウィキの 1 ページとなる。曲情報、演奏会、演奏者用に独自のプロパティを作成して使用している。

ウィキ・テンプレート

通常のデータベースのテーブルに相当するデータ項目を、ウィキのテンプレートとして定義。テンプレートの定義において各データ項目とプロパティとを対応づける。

・テンプレートごとにカテゴリーを設定。

カテゴリー一覧：　定期演奏会
作品
人名
会場
演奏会種別

・Header Tabs 拡張機能によりデータをタブ形式で表示できるようにしてある。

20110703-008-チェンバーオーケストラ第17回定期

東京藝大チェンバーオーケストラ　第17回定期演奏会

2011年 7月 3日（日）

演奏会検索

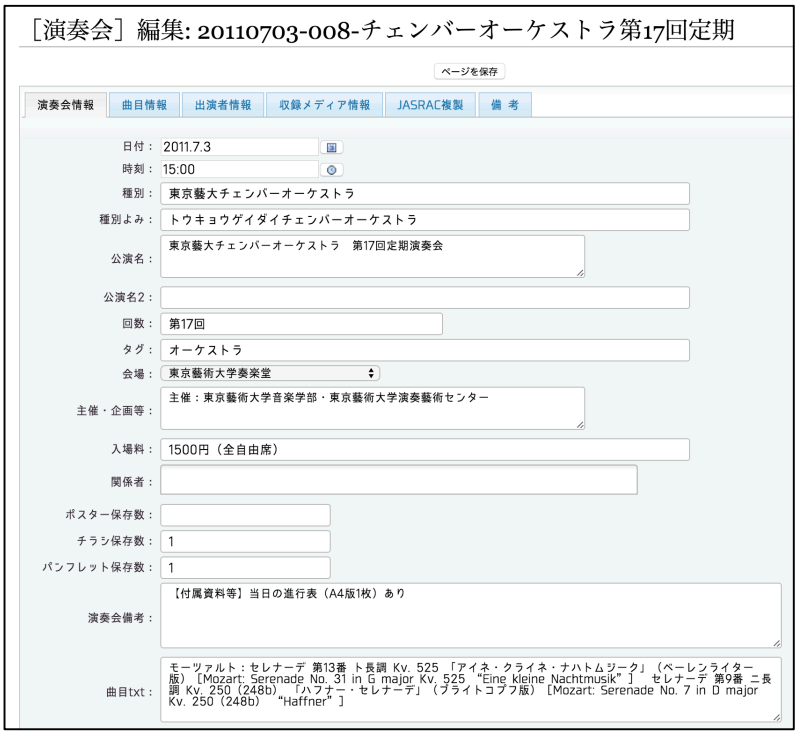
編 集　当年度演奏会一覧　新規演奏会　新規作品　新規人名　その他検索

演奏会情報　曲目情報　収録メディア情報　JASRAC複製　備 考

日付	2011/7/3
時刻	15:00
種別	東京藝大チェンバーオーケストラ
種別よみ	トウキョウゲイダイチェンバーオーケストラ
公演名	東京藝大チェンバーオーケストラ　第17回定期演奏会
公演名2	
回数	第17回
タグ	オーケストラ
会場	東京藝術大学奏楽堂
主催・企画等	主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏藝術センター
入場料	1500円（全自由席）
関係者	
ポスター保存数	
チラシ保存数	1
パンフレット保存数	1
演奏会備考	【付属資料等】当日の進行表（A4版1枚）あり
曲目txt	モーツァルト：セレナーデ 第13番 ト長調 Kv. 525 「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」（ベーレンライター版）［Mozart: Serenade No. 31 in G major Kv. 525 “Eine kleine Nachtmusik”］ セレナーデ 第9番 ニ長調 Kv. 250（248b） 「ハフナー・セレナーデ」（ブライトコプフ版）［Mozart: Serenade No. 7 in D major Kv. 250（248b） “Haffner”］
演奏者txt	指揮（Kv. 525）／コンサートマスター（Kv. 250）：ライナー・ホーネック［Conductor（Kv. 525）& Concertmaster（Kv. 250）: Rainer Honeck］ 演奏：東京藝大チェンバーオーケストラ コンサートマスター（Kv. 525）：景山 昌太郎 ヴァイオリン：伊東 真奈 大村 龍太郎 河野 由里恵 久貝 ひかり 倉富 亮太 小関 郁 小玉 裕美 小玉 育 對馬 哲男 鶴野 紘之 蜷川 紘子 藤原 晶世 森 彩香 森岡 聡 ヴィオラ：飯野 和英 小倉 由衣 北村 聡至 多井 千洋 藤原 歌花 松村 早紀 チェロ：小畠 幸法 林 はるか 山口 徳花 山本 直輝 コントラバス：岡本 潤 方壁 さをり フルート：浅田 結希 若林 里佳 オーボエ：熊澤 杏実 落合 智加 ファゴット：宮地 杏由美 廣幡 敦子 ホルン：溝根 伸吾 梁川 笠男 トランペット：椎葉 翔太

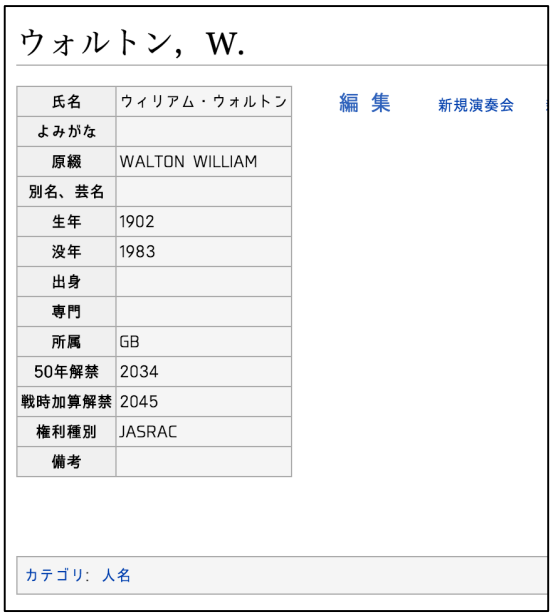
セマンティック・フォームズ（Semantic Forms）

・定義されたテンプレートに対応するデータ入力のためのフォーム。
・日時、時刻は Semantic Forms Inputs 拡張機能を用いプルダウン・メニューから入力。
・同一のデータ項目を複数個入力可能。
・既存のページ名（作品、人名など）をデータとして入力する場合、プルダウン・メニューにより入力が可能。



カテゴリー

テンプレートにカテゴリーを設定したことにより、そのテンプレートを使用するすべてのページが同一のカテゴリーに属す。さらに、カテゴリー単位で一覧表示も可能。定期演奏会と人名カテゴリの内容



ページ間のリンク

・データのリレーション関係はページ間のリンクとして実現。

・Page 型のプロパティで定義したデータ項目へ入力されたデータは他ページへのリンクとなる。

操作

・使用するにはログインを必要とし、ユーザごとに、閲覧のみ、データ入力可能、プログラミング可能などの権限を付与。

・画面左側のサイドバーに、年度一覧、データ一覧、プログラム開発用などのツール類のリンクを配置。

全人名一覧

CSV

全 1531 ページ

ページ名	氏名	原綴	生	没	50	70	R
GRS23	GRS23 ［String orchestra: GEIDAI RICHARD STRAUSS 23］						
Grande Risata	声楽アンサンブル「Grande Risata」						
MALTA	MALTA		1949		51	62	
MANTO VIVO	MANTO VIVO						
〆野 護元	〆野 護元						
いずみ たく	いずみ たく						
アイスラー，H.	アイスラー，H.	Hanns Eisler	1898	1962	51	62	
アイルランド民謡	アイルランド民謡						
アディンセル，R.	リチャード・アディンセル	Richard Addinsell	1904	1977	2028	2048	保護
アメリカ民謡	アメリカ民謡						
アモイヤル，P.	ピエール・アモイヤル	Pierre AMOYAL					
アラン，J.	アラン，J.						
アルチュニアン，A.	アルチュニアン，A.	Alexander Grigorevich Arutiunian	1920	2012	51	62	
アルファーノ，F.	アルファーノ，F.						
アルブレヒツベルガー，J. G.	J. G. アルブレヒツベルガー	ALBRECHTSBERGER JOHANN GEORG					PD
アレンスキー，A.	アレンスキー	Anton Stepanovich Arensky	1861	1906	1957	1977	PD

全演奏会一覧

CSV

全 354 ページ

ページ名	日付	公演名	公演名2	年度	URL
20110507-001-元禄1	2011年5月7日(土)	元禄～その時、世界は？	第1回「江戸の音風景～歌舞伎と文楽」	2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/2008
20110511-002.1-ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて1	2011年5月11日(水)	ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて	1st DAY　第1日	2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/2021
20110512-M001-モーニング第1回	2011年5月12日(木)	モーニング・コンサート 第1回		2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/6405
20110514-002.2-ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて2	2011年5月14日(土)	ライプツィヒ弦楽四重奏団を迎えて	2nd DAY　第2日	2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/2026
20110515-003-元禄2	2011年5月15日(日)	元禄～その時、世界は？	第2回「琳派の美、ロココのこころ」	2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/2030
20110519-M002-モーニング第2回	2011年5月19日(木)	モーニング・コンサート 第2回		2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/6407
20110526-M003-モーニング第3回	2011年5月26日(木)	モーニング・コンサート 第3回		2011	http://arcmusic.geidai.ac.jp/6409

検索

・Semantic MediaWiki のクエリ機能を用いて実現。
・検索項目の設定画面はセマンティック・フォームを用いて定義。
・Semantic Result Formats 拡張機能を用いて、検索結果を CSV 形式ファイルで保存可能。

セマンティック・ウェブの機能

・意味付けのための個々のプロパティ属性を気にすることなく、入力フォームで各項目の編集が行える。
・Semantic Media Wiki の機能を利用して各頁を RDF 形式のデータで表示・出力することが可能。

運用

・現在、2011~2015 年度の大学主催演奏会を中心にデータを入力中。
・総合芸術アーカイブセンター「大学史文書史料研究プロジェクト」が入力した各演奏会の情報に加えて、著作権、著作隣接権などの権利状況を「音響・映像データ研究プロジェクト」が逐次入力中。

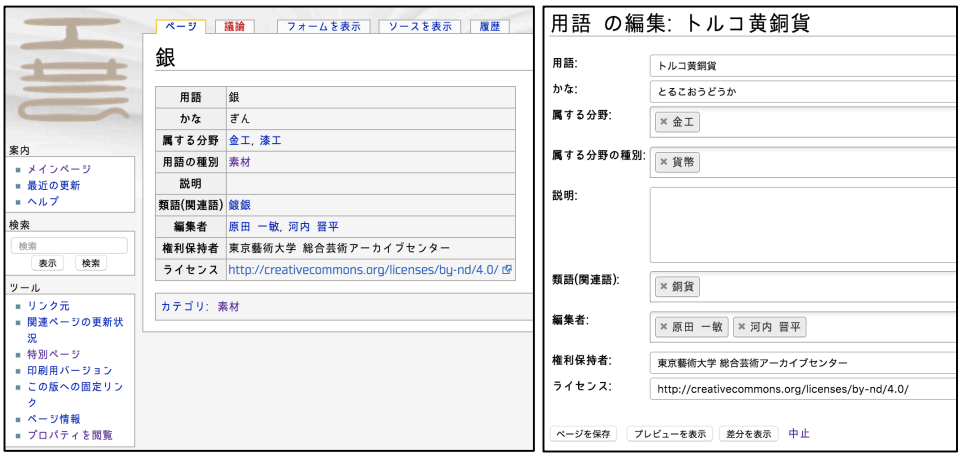
データ件数

カテゴリー別データ件数（2016 年 3 月 7 日現在）

定期演奏会	353 件	2011 年度	73 件
		2012 年度	67 件
		2013 年度	65 件
		2014 年度	78 件
		2015 年度	70 件
作品	1653 件		
人名	1531 件		
会場	8 件		
演奏会種別	3 件		

3.5. 工芸用語集システム(http://archive.geidai.ac.jp/kogei/)

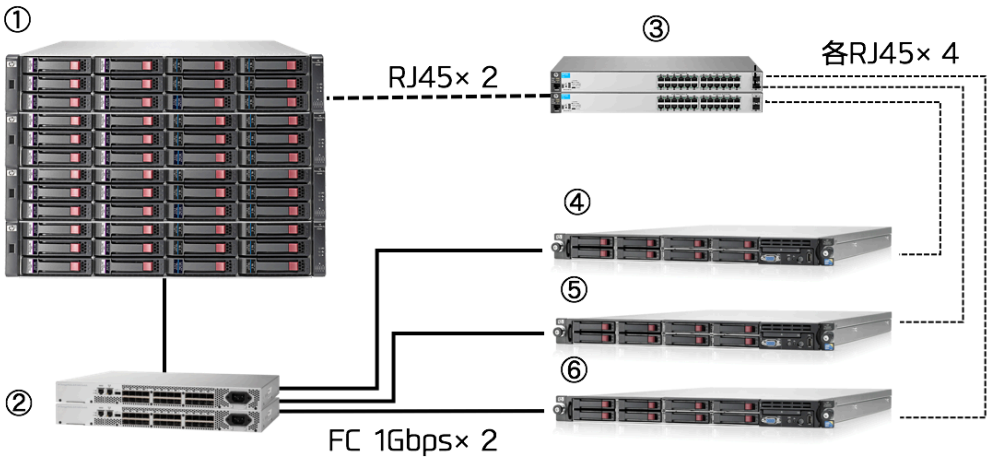
これまでに継続してきた工芸用語事典のデータを公開した。システムは Music DB 同様の Semantic Media Wiki を利用している。データ件数は分野(10 項目)、用語(5,021 項目)、素材(152 項目)、技法(323 項目)、用語種別(2 項目)からなる。



3.6. アーカイブシステムの導入とリプレース

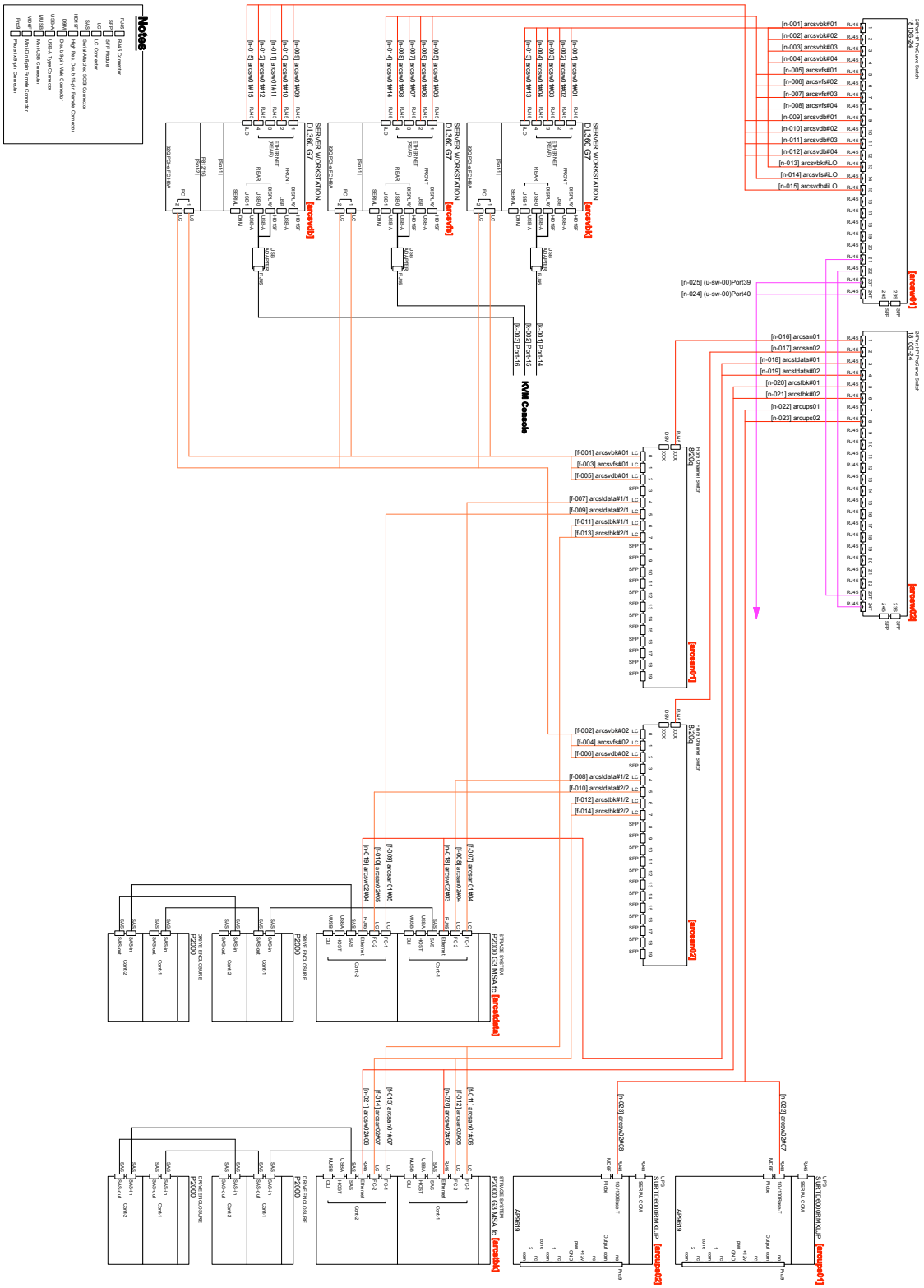
3.6.1. 2011 年バージョン

総合芸術アーカイブセンター設立時 2011 年のアーカイブシステムは下記の通りである。



① 48TB ストレージと同容量のバックアップストレージ。ファイバチャネル接続によるデータ書き込み・読み込みと LAN による管理ポートを持つ。ストレージコントローラは冗長化の構成をとる。
② SAN スイッチ。アーカイブストレージおよびバックアップストレージと各サーバ間を接続する。
③ L2 スイッチ。学内ネットワークに接続するための装置。L2 スイッチと学内ネットワーク間は LAG により帯域速度を 2Gbps にしている。
④ ファイルサーバ。ストレージのファイル共有領域を展開、学内ネットワークでファイル共有ができるように設定されている。Windows Server 上のファイル共有機能を使用している。接続方法は SMB。
⑤ バックアップサーバ。Acronis を使用した定期的なバックアップを実施。世代管理を行うことで万が一の消失時にも対応する。バックアップは、ファイルサーバのエージェント経由で行われる。
⑥ アプリケーションサーバ。VMWARE ESXi を搭載して Web サーバ、DB サーバ等を稼働させる。仮想サーバのストレージは FC 接続で直接ストレージをマウントする仕組みを採用。ただし、この接続方法の場合は仮想サーバのバックアップがない状態である。

ストレージ・サーバ等の接続概要図



3.6.2. 入札仕様書

2011 年開始時のアーカイブセンターストレージシステムは入札による導入となった。本構成で総額は約 900 万円となった。下記に調達時の仕様を示す。

仕様書

調達背景及び目的

東京藝術大学は、その前身である東京美術学校及び東京音楽学校の時代から１２０有余年にわたり、唯一の官立芸術系高等教育機関として、近代日本のみならず、アジアにおける芸術活動の枢要な拠点を担ってきた。その活動の軌跡は、ただに日本の近代芸術史にとってのみならず、海外との双方向的な交流という観点から見れば、世界の芸術の歴史にとっても決して軽視すべからぬ重要性を持っている。また、過去の軌跡だけでなく、本学が現在日常的に生み出しつつある教育研究の成果物は、現在においては社会による検証や評価を受け、やがて未来においては歴史的研究の対象となるべき貴重な文化資源であり、これらを適切に保存・管理し、現在の教育研究に役立てつつ、次世代へ継承することは、本学に課せられた重要な社会的使命である。

本学がこれまで生み出してきた教育研究の成果や、収集・蓄積してきた資料（芸術作品・図面・教材・文書・演奏記録・映像・写真・楽器・用具その他）等の文化資源は、学内の各部署においてそれぞれ保管されてきている。今回の調達は、それら多様な文化資源を電子化し、一元的・横断的な検索・調査を可能ならしめるシステムを構築するための情報格納および発信装置である。

調達方法

買い取りとする。

導入場所

東京藝術大学 芸術情報センター。

技術的要件の概要

A) 本調達物品に関する機能、性能、技術の要求要件は「3.調達物品に備えるべき要件」に示す通りとする。
B) 要求要件(各機器、システム機能・性能等)は本学が必要とする要件を示しており、体制、入札機器及びシステムの性能がこれを満たさないと判定された場合は入札参加資格を得られないものとする。
C) 入札機器及びシステム等の機能・性能・技術が要求要件以上を満たしているか否かの判定は、入札機器に関する技術仕様書を含む入札説明書で求める提出資料を審査して行う。
D) 提案する機器及びソフトウェアは原則、入札時点で製品化されていること。入札時点で製品化されていない機器、ソフトウェアを応札する場合には技術的要件を満たすことの証明及び納入期限までに製品化されて納入できることを保証する資料と確約書を提出すること。

留意事項

A) 提案に関して、提案するシステムが本仕様書の要求要件以上を如何にして満たすか、或いはどのように実現するか資料等を添付し、具体的に説明すること。提案の根拠が不明確や説明が不十分で審査過程において審査内容に支障がある場合は要求要件を満たしていないものとする。
B) 提出資料には照会先を明記すること。
C) 提出された内容等に関して問いあわせ、ヒアリングを行う場合がある。
D) 本調達物品のハードウェア・ソフトウェアならびにこれに係る保守料金を含めるものとする。
E) 本システムの納入期限は平成 23 年 3 月 31 日とする。これに必要なスケジュール調整については本学と協議すること。

調達物品・システム構成内訳

1. データベースサーバ　1 台
2. ファイル共有及び公開サーバ　1 台
3. バックアップサーバ　1 台
4. ストレージ装置(データ格納用装置、バックアップ装置)1 式
5. その他装置　1 式

調達物品に備えるべき要件

データベースサーバ

1. 調達台数…1 台
2. 中央演算処理装置
   - 2.1 中央演算処理装置は 2.66GHz 以上の基本周波数であること。
   - 2.2 12MB キャッシュ機能を備え、メモリコントローラは中央演算処理装置に内蔵すること。
   - 2.3 中央演算処理装置を 2 個搭載すること。
   - 2.4 中央演算処理装置は 1 個に付き物理コアを 6、論理コアを 6 有すること。
   - 2.5 仮想化技術支援機能を有すること。
3. 主記憶装置
   - 3.1 合計 44GB 以上のメモリを搭載していること。
   - 3.2 DDR3 規格に対応していること。
4. 補助記憶装置
   - 4.1 2.5 型シリアル Attached SCSI インターフェースで接続されていること。
   - 4.2 容量 146GB 以上のホットスワップ可能な補助記憶装置を 3 台搭載すること。
   - 4.3 3 台の補助記憶装置のうち 1 台はホットスペアとして機能できること。
   - 4.4 RAID1 機能で構築できること。
5. インターフェース
   - 5.1 Gigabit イーサポートを 4 基以上有すること。
   - 5.2 Gigabit イーサポートは iSCSI をサポートすること。
   - 5.3 8Gb/s 対応のファイバーチャネルポートを 2 基以上有すること。
   - 5.4 補助記憶装置、ネットワークが稼働していることを示す LED を有すること。
   - 5.5 光学媒体を読み取り可能な装置を備えること。
   - 5.6 USB タイプの KVM スイッチアダプタを用いてコンソールへの接続できること。(本学所有の hp 社製 KVM 装置)
6. その他
   - 6.1 中央演算処理装置、主記憶装置、HDD、電圧レギュレータ・モジュールの事前障害検知機能を有すること。
   - 6.2 中央演算処理装置の温度及び電圧を監視できること。
   - 6.3 サーバには障害検知ソフトウェアを有し、これらは GUI で管理ができること。また、管理者がサーバルームにいなくとも遠隔で状況を把握出来ること。
   - 6.4 2U 以内のサイズであること。
   - 6.5 電源ユニットは二重化されており、電源ユニット障害時にもサーバがダウンすることなくホットスワップによる容易に交換可能であること。
   - 6.6 運用管理担当者はサーバの稼動状況を容易に確認するために筐体の前面に電源確認、温度異常、システムエラー等を知らせる LED を搭載されていること。
   - 6.7 サーバルーム内に運用管理者が常駐できない場合に備え、遠隔からの監視・操作を実行できる環境を必要とする観点から、専用のソフトウェア、または Web ブラウザからネットワーク経由でサーバ管理を可能であること。

ファイル共有及び公開サーバ

1. 調達台数…1 台
2. 中央演算処理装置
   - 2.1 中央演算処理装置は 2.66GHz 以上の基本周波数であること。
   - 2.2 12MB のキャッシュ機能を備え、メモリコントローラは中央演算処理装置に内蔵すること。
   - 2.3 中央演算処理装置を 2 個搭載すること。
   - 2.4 中央演算処理装置は 1 個に付き物理コアを 4、論理コアを 4 有すること。
   - 2.5 仮想化技術支援機能を有すること。
3. 主記憶装置
   - 3.1 合計 12GB 以上のメモリを搭載していること。
   - 3.2 DDR3 規格に対応していること。
4. 補助記憶装置
   - 4.1 2.5 型シリアル Attached SCSI インターフェースで接続されていること。
   - 4.2 容量 146GB 以上のホットスワップ可能な補助記憶装置を 3 台搭載すること。
   - 4.3 3 台の補助記憶装置のうち 1 台はホットスペアとして機能できること。
   - 4.4 RAID1 機能で構築できること。
5. インターフェース
   - 5.1 Gigabit イーサポートを 4 基以上有すること。
   - 5.2 Gigabit イーサポートは iSCSI をサポートすること。
   - 5.3 8Gb/s 対応のファイバーチャネルポートを 2 基以上有すること。
   - 5.4 補助記憶装置、ネットワークが稼働していることを示す LED を有すること。
   - 5.5 光学媒体を読み取り可能な装置を備えること。
   - 5.6 USB タイプの KVM スイッチアダプタを用いてコンソールへの接続できること。(本学所有の hp 社製 KVM 装置)
   - 5.7 サーバの利用率によってはチーミング構成にすることで共有フォルダへのアクセス速度を向上できること
6. その他
   - 6.1 1U サイズであること。
   - 6.2 電源ユニットは二重化されており、電源ユニット障害時にもサーバがダウンすることなくホットスワップによる容易に交換可能であること。
   - 6.3 中央演算処理装置、主記憶装置、HDD、電圧レギュレータ・モジュールの事前障害検知機能を有すること。
   - 6.4 中央演算処理装置の温度及び電圧を監視できること。
   - 6.5 サーバには障害検知ソフトウェアを有し、GUI で管理できること。また、管理者がサーバルーム不在時には遠隔で状況を把握出来ること。
   - 6.6 運用管理担当者はサーバの稼動状況を容易に確認するために筐体の前面に電源確認、温度異常、システムエラー等を知らせる LED を搭載されていること。
   - 6.7 サーバルーム内に運用管理者が常駐できない場合に備え、遠隔からの監視・操作を実行できる環境を必要とする観点から、専用のソフトウェア、または Web ブラウザからネットワーク経由でサーバ管理を可能であること。
7. 基本機能
   - 7.1 オペレーティングシステムに Microsoft Windows Server2008R2 SP1 Standard Edition または Windows Server2008R2 Standard Edition を有すること。
   - 7.2 オペレーティングシステム上にはストレージ装置からストレージ領域を割り当て、PC/AT 互換機及び Apple 社製コンピュータから共有領域として利用可能なこと。
   - 7.3 共有領域には特定ユーザ単位のアクセスコントロール制御ができること。

バックアップサーバ

1 調達台数…1 台

2 中央演算処理装置

- 2.1 中央演算処理装置は 2.66GHz 以上の基本周波数であること。

2.2 12MB のキャッシュ機能を備え、メモリコントローラは中央演算処理装置に内蔵すること。
2.3 中央演算処理装置を 2 個搭載すること。
2.4 中央演算処理装置は 1 個に付き物理コアを 4、論理コアを 4 有すること。
2.5 仮想化技術支援機能を有すること。

3 主記憶装置
3.1 合計 12GB 以上のメモリを搭載していること。
3.2 DDR3 規格に対応していること。
4 補助記憶装置
4.1 2.5 型シリアル Attached SCSI インターフェースで接続されていること。
4.2 容量 146GB 以上のホットスワップ可能な補助記憶装置を 3 台搭載すること。
4.3 3 台の補助記憶装置のうち 1 台はホットスペアとして機能できること。
4.4 RAID1 機能で構築できること。
5 インターフェース
5.1 Gigabit イーサポートを 4 基以上有すること。
5.2 Gigabit イーサポートは iSCSI をサポートすること。
5.3 8Gb/s 対応のファイバーチャネルポートを 2 基以上有すること。
5.4 補助記憶装置、ネットワークが稼働していることを示す LED を有すること。
5.5 光学媒体読み取り可能な装置を備えること。
5.6 USB コンソールスイッチアダプタを用いてコンソールへの接続が可能なこと。
6 その他
6.1 中央演算処理装置、主記憶装置、HDD、電圧レギュレータ・モジュールの事前障害検知機能を有すること。
6.2 中央演算処理装置の温度及び電圧を監視できること。
6.3 サーバには障害検知ソフトウェアを有し、これらは GUI で管理ができること。また、管理者がサーバルームにいなくとも遠隔で状況を把握出来ること。
6.4 1U サイズであること。
6.5 電源ユニットは二重化されており、電源ユニット障害時にもサーバがダウンすることなくホットスワップによる容易に交換可能であること。
6.6 運用管理担当者はサーバの稼動状況を容易に確認するために筐体の前面に電源確認、温度異常、システムエラー等を知らせる LED を搭載されていること。
6.7 サーバルーム内に運用管理者が常駐できない場合に備え、遠隔からの監視・操作を実行できる環境を必要とする観点から、専用のソフトウェア、または Web ブラウザからネットワーク経由でサーバ管理を可能であること。
7 基本機能
7.1 オペレーティングシステムは Microsoft Windows Server2008R2 SP1 Standard Edition または Windows Server2008R2 Standard Edition を有すること。
8 バックアップ・復元機能
8.1 バックアップソフトウェアを含めること。
8.2 バックアップソフトウェアはサーバ機のオペレーティングシステム、アプリケーション、各種設定、データを含むディスクやパーティションをイメージデータとしてバックアップできること。
8.3 集中管理コンソールでネットワーク上のサーバをドメインやワークグループに関わることなく一元管理が可能なこと。
8.4 Microsoft Windows ベースのシステムとオープンソース Linux プラットフォームのバックアップ・復元に対応していること。
8.5 稼働中サーバのシステム領域をサーバが停止することなくバックアップが可能なこと。
8.6 ディスクやパーティションのバックアップ機能に加え、ファイルやフォルダ単位でのバックアップが可能なこと。
8.7 バックアップタスクのスケジュールを作成可能な事。

8.8 ネットワークからのディスクレス起動、OS インストール等システムリカバリの実行に必要なファイルおよびサービスを提供できること。
8.9 パックアップデータに対して暗号化できる等、データに対してセキュリティを高める機能を有すること。
8.10 バックアップはストレージ装置のうちデータ格納用装置が有する総容量に対応できること。
8.11 バックアップソフトウェアの管理画面は GUI を有し、逐次ジョブなどバックアップ状況を確認出来ること。
8.12 バックアップソフトウェアは有事の際のアラート通知や実行状況をモニタリングする機能を有すること。

専用ストレージ

1 調達台数…専用ストレージ装置 1 式
2 筐体装置共通仕様
2.1 FCP のアクセスに対応したストレージ製品であること。
2.2 ディスクに SAS、SATA を選択可能なこと
2.3 ディスク格納装置 1 台につき 12 台以上のディスクドライブを格納できること。
2.4 コントローラ部の冗長化ができること。
2.5 コントローラあたり 2 ポートのファイバーチャネルポートを有すること。
2.6 19 インチラックに格納できる筐体であること。
2.7 複数筐体で構成される場合でも単一の GUI 画面から全体管理できること。
2.8 ディスク格納装置とサーバ・システムを接続するネットワーク装置の接続にはファイバチャネルによる接続であること。
2.9 ストレージ装置とサーバを接続するコントローラは二重化されていること。
2.10 SAN スイッチは 8 ポート以上を有し、マルチパス構成できること。
2.11 各装置にはサーバを接続するための機器類、FC ホストバスアダプタ等が含まれていること。
2.12 RAID6 による構築が可能で、二重のディスクドライブ障害からデータ保護が可能であること。
2.13 ディスク格納筐体を追加でき、これらは SAS ケーブルによる接続ができること。
2.14 ディスクドライブで障害が発生した場合、ディスク格納装置の電源を落とすことなく交換が可能で、自動的に障害を回復する機能を有すること。
2.15 ストレージのミラーリング機能を有すること。
2.16 ストレージ管理には専用サーバを必要とせず日本語対応の管理画面を備え、直感的に操作できること。
2.17 ディスク格納装置はスナップショット機能を有すること。
2.18 Logical Unit Number は 512 以上であること。
2.19 自己診断機能を有し、定期的にディスクドライブのリビルドが実行可能であること。
2.20 利用する領域はオンラインで拡張、および設定が可能であること。
2.21 GUI ベースの管理ソフトウェアを備え、遠隔操作により設定の変更や障害発生時対応が可能であること。
2.22 電源は冗長化を図られていること。
3 データ格納用装置
3.1 データ格納装置に搭載される総ディスク容量は 48TB 以上であること。
3.2 データ格納装置は Windows サーバを経由して Windows 端末及び Apple 社製コンピュータからのデータ書き込みが可能なこと。
3.3 データ格納装置はデータベースサーバ(UNIX 系 OS)からボリュームとしてマウントできること。
3.4 データ格納装置は将来的な拡張に備え、ディスクドライブを増設できること。
4 バックアップ装置
4.1 バックアップ装置はデータ格納装置と同容量のディスク容量を備えること。
4.2 バックアップ装置はバックアップサーバを用いてデータ格納装置のデータをバックアップできること。

その他装置

スイッチングハブ

1　調達台数…1 台

2　装置性能

2.1　サーバ装置を接続出来る RJ45 ポートを 16 以上備えること。

2.2　ラックマウントできること。

2.3　ファンレス設計であること。

2.4　1000Base-T/100Base-T/10Base-T 対応であること。

3　その他

3.1　スイッチングハブに接続するためのネットワークケーブル 6 本を含めること。

3.2　ネットワークケーブルはカテゴリ 6 以上であること。

無停電電源装置

1　調達台数…2 台

2　装置性能

2.1　常時インバータ・力率補正を伴うダブルコンバージョン方式であること。

2.2　停電時に各サーバ・機器類を安全にシャットダウンできる機能を有すること。

2.3　室温 25 度環境下で 2.5 年以上の期待寿命のバッテリを搭載していること。

2.4　ネットワーク経由でオペレーティングシステムをシャットダウンできる機能を有すること。

2.5　ネットワークに接続し、リモートによる状態監視ができること。

2.6　必要に応じて拡張バッテリパックを追加できること。

2.7　総バッテリ容量は、サーバ、ネットワーク機器類を含めた総電源容量に耐えうる容量であること。

2.8　障害時には登録されたメールアドレス等に障害発生を通知する機能を有すること。

保守・運用管理体制

機器の調整や保守等に係る費用は本調達案件に含めること。

保守・保証

1　機器・システム導入後の保守体制・計画書を提出すること。

2　本仕様で調達する機器及びシステム、ソフトウェアの一部または全てを他社製品で満たしている場合でも受注者が責任を持ってそれらの保守を担うこと。

3　セキュリティホールが発見された場合は本学と協議の上、対応すること。

4　システムに障害が発生した場合の手順・対応を計画書に含めること。

5　調達する機器類とソフトウェアには 5 年間のメーカー保守・保証を含めること。

6　システム操作等の問い合わせについて、メールまたは電話対応が可能な体制を 5 年間有すること。

7　装置の環境設定や故障時等で環境変更等が生じた場合、本学と協議の上、出張対応が可能な体制であること。

教育・ドキュメント

1　本学の管理者に対して本システムの管理運用に関する研修を合計 2 時間以上実施すること。尚、本研修会のための費用は本調達に含むこと。

2　機器およびソフトウェアに付属する取扱い説明書とは別に本学向けの設定手順等を各システムの運用手順、ならびに想定される障害状況ごとに障害検出・復旧処置・連絡手順などを記載した障害対処のドキュメントを作成して管理者研修までに提出すること。

3　導入機器およびソフトウェアに付属するドキュメントを 1 部以上提出すること。提出するドキュメントには機器およびシステムに関する構成、設定、設定値を含めること。

4　ドキュメントは紙媒体 1 部と電子媒体で提出すること。

5　各種ドキュメントは成果物として提出し、必要と思われるドキュメントについては本学と協議すること。

導入・スケジュール調整

導入

1　本調達における機器類は本学が指定する場所に設置すること。

2　搬入、据え付け、配線、調整およびこれらに付帯する工事は受注者が行い、その諸経費は受注者が負担とすること。

3　納入品の搬入の際は本学施設に損傷を与えないよう注意すること。万一、本学施設に損傷を与えた場合

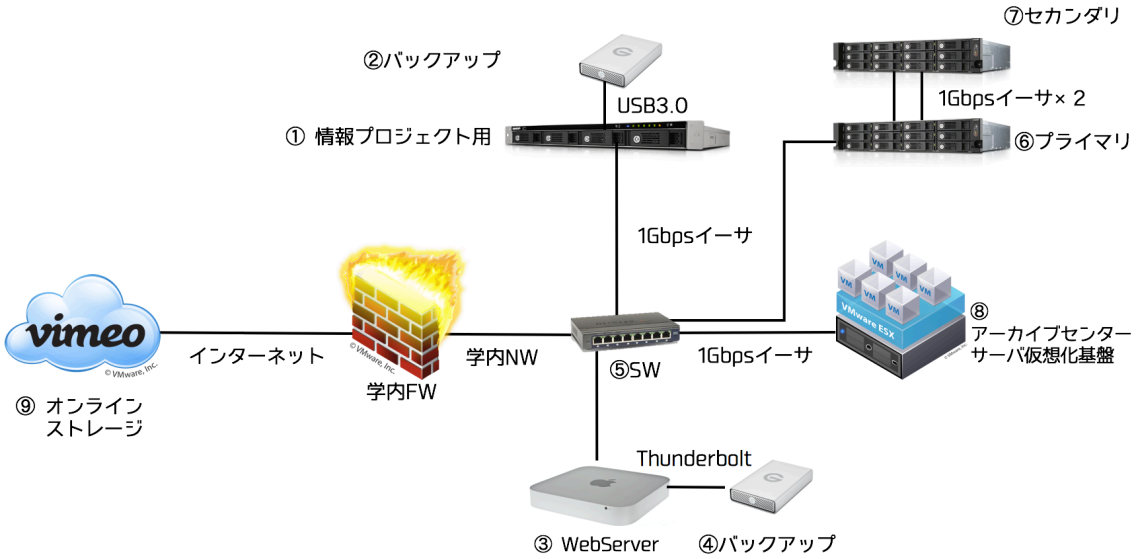
には受注者の責任において修復すること。

スケジュール調整

1　本調達におけるスケジュール管理、進捗管理その他必要とされるマネジメント事項は計画書を作成して、計画書に基づいたプロジェクト管理が実行可能なこと。
2　進捗管理は WBS 要素をガントチャート方式で管理し、実行前に本学に確認をとること。
3　マイルストーンに基づく進捗報告会議を開催し、構築状況や課題点等を報告・協議すること。
4　最終的な報告には EVM 等に基づいた数値ないしは表を含めること。
5　本調達案件構築で発生する問題・課題は随時対応できる体制を設置し、発生した問題・課題一覧と解決手段は成果物に含めること。
6　システム構築完了時には品質管理を行い、品質基準に基づく検査を実施して検査結果を報告すること。
7　品質基準の検査結果は成果物に含めること。

3.6.3.　2015 年バージョン

最終年度となるため、翌年度以降にシステム調達することが困難であったことから、価格を必要最小限に抑えて今後数年間のアーカイブ活動に耐えうるストレージ装置の導入を検討した。ただし、2011 年時のような予算措置ができない事から、総額 200 万円以内で 2011 年時と同等のシステムを用意する必要があった。



①　6TB 情報プロジェクト用 1U ラック NAS、QNAP TS-453U に 2TB ディスク 4 台を搭載し、RAID5 による運用。HDD は WesternDigital WDRed を使用。
②　USB 接続のバックアップ 4TBHDD。QNAP に搭載のバックアップ機能で定期的にバックアップを取得。ただし世代管理はできない。
③　アーカイブセンター本体の Web サーバ。Macmini に Nginx、PHP-FPM を導入して運用するが、物理 NIC の障害が頻発するため、仮想サーバへの移行を予定している。NIC の故障により 4 年間で 2 回 Macmini を交換。現在は USB 接続の RJ45 アダプタで代用。
④　Macmini のバックアップ HDD、TimeMachine によるバックアップ。
⑤　ギガビットスイッチングハブ。学内ネットワークとの接続の役割を担う。Netgear 製。
⑥　各プロジェクト用ストレージ。QNAP TS-1253U-RP を使用。6TB ディスクを 12 台搭載し 72TB を実現。ただし、RAID6+ホットスペア 1 のため、実効容量は約 50TB。HDD は Seagate Enterprise NAS 6TB を使用。
⑦　⑥のバックアップストレージ。1Gbps イーサで接続。ストレージ構成、ディスクは⑥と同じ。

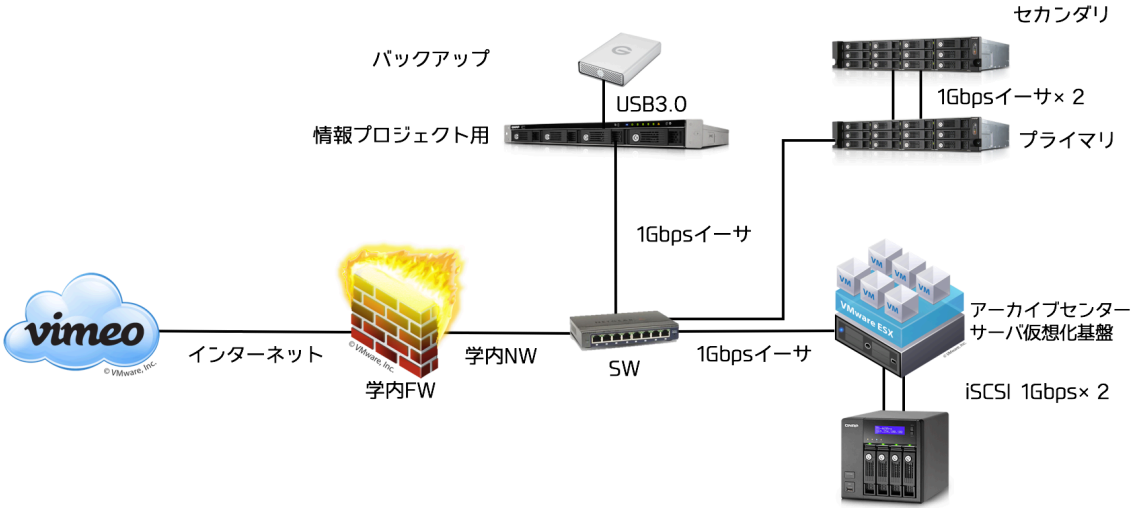
⑧　2011 年の HP サーバの使用を考えたが、やや新しい IBM SystemX がセンター内に転がっていたため、本機に VMware ESXi6 を導入。Xeon E5-2420(6 コア+HT)、32GBRAM、500GB HDD×4(RAID5)。
（ア）　DB サーバ 1:　FreeBSD 9 .1-RELEASE-p22、MySQL5.5。ミュージックアーカイブ用
（イ）　DB サーバ 2:　FreeBSD10.2-RELEASE-p13、MariaDB10.0。アーカイブセンター、Wiki 用
（ウ）　Web サーバ 1: FreeBSD9.3-RELEASE-p33、NGiNX1.6、PHP5.4。ミュージックアーカイブ用
（エ）　Web サーバ 2: FreeBSD10.2-RELEASE-p13、NGiNX1.8、PHP5.6。アーカイブセンターWeb。
（オ）　RDF サーバ:　CentOS6.7、GraphDB5。
⑨　インターネット上の映像ストレージ(vimeo 等)。

ストレージシステム 2015 年バージョンの移行に伴う費用は下記の通りである。

品目	台数	価格
Seagate ST60000VN0001(6TB-HDD)	26	1,086,696 円
QNAP TS-1253U-RP ラックマウントレール付き	2	604,800 円
Western Digital WD20EFRX(2TB-HDD)	4	50,112 円
QNAP TS-453U	1	163,080 円
	合計	1,904,688 円

※システムの導入・構築とデータ移行作業は本プロジェクトで実施したため、外注費用は発生していない。

3.6.4.　2016 年バージョン



2015 年末に NIC 障害が発生したため Macmini サーバを廃止して仮想サーバに移行する。すでに Web サーバは用意されているが、データの移行が済んでいないため 2016 年度に実施する。これに伴い、IBM サーバで保存されている仮想サーバのデータを NAS のストレージ領域に移動する。NAS とサーバ間は直結した 2 本の 1Gbps イーサを用いた iSCSI 接続を行う。サーバのデータを NAS に移動する理由は、IBM サーバ内のストレージに仮想サーバを保存していた場合、バックアップが手作業になり煩雑になることからの措置である。

4. 活動報告—展示・イベント

4.1. 展示「再構成：東京藝術大学の記録資料から芸術情報資源へ」

「再構成: 東京藝術大学の記録資料から芸術情報資源へ」展
Restructured archives: Toward a new generation of art information resources.

概要

総合芸術アーカイブセンターは、「再構成: 東京藝術大学の記録資料から芸術情報資源へ」展を開催いたします。本展は、総合芸術アーカイブセンターの活動成果を公開する展覧会です。

当センターでは東京藝術大学に関する資料の収集や蓄積・管理のほか、資料を再活性化する循環型の情報活用（収集、保存・蓄積、編集・関連付け、公開、共有、教育・研究・創造）を目的に活動をしています。本展では、これまでの活動により得られたデジタルデータを展示形式で再構成することで、より多くの人に東京藝術大学の資料に触れていただくことで「芸術におけるアーカイブとは何か」を問い直し、東京藝術大学を再発見する場になればと考えています。

展示構成としては、明治時代から現在に至るまで使用され続けている講義資料（美術解剖図掛図）、大学と社会の接点を記録した写真及び史料（日露戦争村上艦隊「出雲」記録写真、音楽学部委嘱作曲）などの 100 年以上前の貴重な資料に始まり、学生の芸術活動（卒業・修了展示図録、演奏会記録映像）、教員の講義映像など今も継続しているアーカイブまで、センターの活動を多岐にわたって紹介します。

さらに今回は、手がかりがなかった写真資料「たずね人」を初公開し、ご来場者からの情報提供の場も設けることで資料化の進展に期待をよせています。

あらゆる情報がデジタル化され、検索システムで制御されるデジタル社会において、どこかに情報(記録)があると思い込んでしまいがちですが、東京藝術大学のアーカイブを通して、情報を記録すること、情報が存在すること、そしてそれが使えることの意味を改めて考えて頂ければ幸いです。

総合芸術アーカイブセンター

会場｜東京藝術大学芸術情報センター LAB
会期｜2015 年 6 月 17 日(水) – 6 月 25 日(木)
時間｜12 時 00 分 – 19 時 00 分（平日のみ）

関連プログラム｜TALK「東京藝術大学の記録と再構成」
6 月 24 日(水) 17 時 30 分 – 19 時 00 分（場所：芸術情報センター LAB）
・橋本 久美子（大学史史料室　特任助教）
・木本 諒（3D データ研究プロジェクト 特任助教）
・山田 香（音響・映像データ研究プロジェクト 特任助教）
・嘉村 哲郎（情報発信システム研究プロジェクト 芸術情報研究員）
–
主催｜総合芸術アーカイブセンター
共催｜芸術情報センター
–
企画制作｜嘉村 哲郎（芸術情報センター 芸術情報研究員、総合芸術アーカイブセンター）、
石山 星亜良（総合芸術アーカイブセンター 教育研究助手）

企画ディレクション｜和田 信太郎（芸術情報センター 教育研究助手）
協力｜青柳 菜摘（メディア映像専攻 修士）、松森 裕真（メディア映像専攻 修士）、村田 冬実（先端芸術表現専攻 修士）

藝大ミュージック
アーカイブ201
COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER
TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

無藝大アーカイブ
COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER
TOKYO UNIVERSITY OF THE ARTS

4.2.　シンポジウム「藝術を記録すること、伝えること」

開催日: 2015 年 9 月 5 日（土）藝祭 2 日目 12:20〜16:30
場所: 東京藝術大学 美術学部 絵画棟 1 階 大石膏室
参加費: 無料、事前申し込み不要。当日は藝祭が開催されています。
概要:
東京藝術大学を記録して伝えること—アーカイブは誰に、何のために必要なのか。 計画 5 年目の最終年度を迎える総合芸術アーカイブセンターは、これまでに本学に関する 資料の収集・情報化のほか、資料や情報を再活性化する循環型の活用(収集→{ 保存・蓄積} →{ 編集・関連付け}→公開→共有→{ 教育・研究・創造}) をめざして活動をしてきた。 総合芸術アーカイブセンターの活動成果を踏まえ、東京藝術大学に必要なアーカイブとは何か、そしてそれらが組織にもたらす意義を考えたい。

開催プログラム

オープニング演奏　シュポア :9 重奏 作品 31
挨拶 北郷 悟 (総合芸術アーカイブセンター長、理事・教授)
導入 :「アーカイブ 」中谷 日出 (NHK 解説委員、総合芸術アーカイブセンター特任教授)
総合芸術アーカイブセンター活動報告
・大学史史料室 : 橋本 久美子 (特任助教)
・3D データ研究 : 木本 諒 (特任助教)
・音響・映像データ研究 : 山田 香 (特任助教)
・ 情報発信・システム研究 : 嘉村 哲郎 (芸術情報センター芸術情報研究員)
講演 1 : 植村 幸生 (小泉文夫記念史料室 室長、音楽学部 教授)
講演 2 : 宮本 聖二 (NHK 放送研修センター研修事業部 エグゼクティブ・プロデューサー)
講演 3 : 吉見 俊哉 (東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授)
パネルディスカッション
モデレータ : 中谷 日出
パネリスト : 吉見 俊哉、宮本 聖二、植村 幸生、北郷 悟
閉会の挨拶 : 大角 欣矢 (総合芸術アーカイブセンター副センター長、音楽学部 教授)

4.3.　展示「藝祭 100 年の歴史展 東京美術学校《美術祭》から《芸術祭》を経て」

タイトル: 藝祭 100 年の歴史展　“A 100-year history of GEISAI : Festival of Tokyo University of the Arts”
副題: 1903-2015　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て
キャッチコピー: 藝大生の真剣(マジ)な遊び
会期:　2016 年 3 月 23 日（水）～ 3 月 30 日（水）
休館日:　3 月 28 日(月)
開館時間:　午前 10 時 － 午後 5 時（入館は閉館の 30 分前まで）
会場:　東京藝術大学大学美術館　陳列館 1 階、大浦食堂
観覧料:　無料
主催: 東京藝術大学総合芸術アーカイブセンター
協力: 上野「文化の杜」新構想実行委員会、東京藝術大学 芸術情報センター
―藝祭とは。
　東京藝術大学の伝統的な学園祭であり、本学の前身である東京美術学校が開催した 1903 年の「第一回美術祭」に由来します。今年で 113 年目を迎える藝祭は、美術学部と音楽学部の学生たちが共同で企画・運営を行うイベントです。
期間中は展覧会・映像上映会・演奏会・オペラ・演劇・模擬店などの催しが行われます。とりわけ目を引く「御輿パレード」は明治期の美術祭の「仮装行列」に由来し、藝大生がひと夏をかけて作り上げた「御輿」と「法被」が上野公園や商店街を賑わします。また、パレードの先 頭を切る「藝大サンバ・パーティ」という本学のサンバ・サークルの演奏は 1980 年から始まっており、浅草サンバ・カーニバルのルーツにもなったことがわかりました。
年に一度、藝大生たちが芸術活動を通して真剣(マジ)に遊ぶお祭り―それが「藝祭」です。
―想い出からアーカイブへ。
しかし、藝祭に関する記録は体系的にとられていません。御輿は藝祭の直後に取り壊されるため、写真すら残されていない年があり、パンフレット・チラシも保存されていない年が多くあります。
本展では、総合芸術アーカイブセンターの調査により、それらの欠けている資料を OB・OG への呼びかけを中心に収集し、明らかになった藝祭の歴史の時系列を整理し、藝祭関係者へのインタビュー映像を交えて展示することで、藝大生と上野の歴史、その時々の社会や芸術に関する潮流を総括的に捉え直します。
東京藝術大学の芸術活動の「藝祭」の記憶と記録伝えること。その集積であるアーカイブは未来の藝大生、そして上野の杜の資源であり財産です。本展覧会をご覧いただきアーカイブという活動へのご関心をお寄せいただけると幸いです。
トークイベント「真剣な遊びを語り継ぐこと」
日時：2016 年 3 月 26 日(土)　13:30～15:00　場所：陳列館
パネリスト：
茅野 雅弘(上野観光連盟 事務総長)
中谷 日出(NHK 解説委員、東京藝術大学 特任教授)
中村文美(たいとう歴史都市研究会)
一ノ瀬 健太(杜の会学生委員長、本展覧会スタッフ)
大絵 晃世(本展覧会代表)
座談会
日時：同日　16:00～17:15
場所：大浦食堂（東京芸術大学・美術学部構内）
トークゲスト：
佐藤 一郎(油画科院 47 年　技法材料研究室)
塚本 江里子(声楽科 H23 卒 フジテレビ系『ポンキッキーズ』**うたのおねえさん**)　会場のみなさま
交流会(予約不要)
日時：同日　17:30～20:00
場所：大浦食堂（東京芸術大学・美術学部構内）

5.　資料のデジタル化と公開

5.1.　吉本光蔵撮影 日露戦争写真

前年度に公開予告をしていた吉本光蔵（よしもとこうぞう／みつぞう）撮影日露戦争写真を公開した。
http://archive.geidai.ac.jp/4241

吉本光蔵と日露戦争写真について
吉本光蔵は明治時代に活躍した海軍軍人（1863 年 11 月 16 日[文久 3 年 10 月 6 日]～1907 年[明治 40]6 月 11 日）。明治 11(1878)年 6 月、14 歳で海軍軍楽隊の第 1 回通学生 10 名の一人に採用され、楽生として正式入隊、翌年 3 月よりお雇外国人フランツ・エッケルト（Franz Eckert,1852-1916）にドイツ式の軍楽教育を受ける。海軍は、明治 2(1869)年にイギリス陸軍軍楽隊長であったフェントン（John William Fenton,1831-1890）が薩摩藩士に軍楽指導を開始して以来、フェントンが明治 10(1877)年に離日するまでイギリス式教育を受けたが、吉本は初めからドイツ式で育った第一世代にあたる。専門楽器のクラリネットのほか、ピアノ、作曲、編曲などを学んだ。明治 13(1880)年より海軍楽手、海軍楽師と進み、明治 27(1894)年海軍軍楽師となる。明治 29(1896)年 4 月には東京音楽学校の演奏会で、幸田延のピアノ伴奏によりモーツァルト作曲「クラリネット五重奏曲」K.581 の第 2 楽章を客演した。明治 32(1899)年 5 月 13 日ドイツ留学を命じられ、8 月 20 日ベルリン着。翌年 10 月にベルリン音楽院に入学するもわずか 1 年半後の明治 35(1902)年 3 月帰国命令、6 月帰国。同年士官（少尉）相当の海軍軍楽長となり、日露戦争では第二艦隊旗艦「出雲」に乗り組み従軍した（明治 36 年 12 月 28 日～38 年 3 月 15 日）。従軍中に撮影した 46 枚を一冊にまとめた写真帖が本資料である。吉本自身が写真に説明を書き添え、1 枚目に明治 37 年 3 月 6 日と記されている。
　凱旋後の明治 38(1905)年 8 月より日比谷音楽堂において海軍軍楽隊と陸軍軍楽隊の演奏会が始まり、吉本は明治 40(1907)年 5 月まで横須賀海兵団軍楽隊を 11 回指揮したが、同年 6 月 11 日、45 歳で世を去った。
写真帖は吉本光蔵の親戚にあたる菊池武篤氏より平成 23(2011)年 7 月に大学史史料室に寄贈された。吉本作曲「東京湾大観艦式記念行進曲」、「君が代行進曲」等の出版譜、吹奏楽用に編曲した「征清軍歌」や各国国歌等の手稿譜、ベルリン留学の終わり頃から帰国後にかけて書かれたドイツ語の日記などがあり、日記も公開を予定している。吉本光蔵については、塚原康子・平高典子「海軍軍楽長・吉本光蔵のベルリン留学日記」（『東京藝術大学音楽学部紀要』第 37 集、2012 年 3 月、43-60 頁）、塚原康子「日露戦争時の海軍軍楽隊―海軍軍楽長・吉本光蔵の明治 37･38 年日記から―」（『東京藝術大学音楽学部紀要』第 40 集、2015 年 3 月、71-89 頁）、谷村政次郎『日比谷公園音楽堂のプログラム-―-日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録』（つくばね舎、2010）参照。

仝ロシヤ、グロンボイ僚艦リューリックノ救フベカラザルヲ悟リ北航遁逃セントス[写真下]其五

海上の船を写している様子だが、写真の劣化のためかはっきりと識別できない。

仝蔚山沖海戦ノ後出雲六尹砲ノ発射セシ薬莢ノ一部仝日出雲ニ於ケル発射総弾数二千二百五十発

甲板の薬莢を写している。薬莢の上には三人の乗組員が腰掛けている。

5.2.　藝祭 100 年の歴史展の資料収集・編纂

以下に展示で使用したパネルや写真等のデータを報告する。

ごあいさつ

本日は、「藝祭 100 年の歴史展」にご来場いただき誠にありがとうございます。

「藝祭」とは、東京藝術大学の伝統的な学園祭であり、本学の前身である東京美術学校が開催した 1903 年の「第一回美術祭」に由来します。今年で 113 年目を迎える藝祭は、美術学部と音楽学部の学生たちが共同で企画・運営を行うイベントです。
期間中は展覧会・映像上映会・演奏会・オペラ・演劇・模擬店などの催しが行われます。とりわけ目を引く「御輿パレード」は明治期の美術祭の「仮装行列」に由来し、藝大生がひと夏をかけて作り上げた「御輿」と「法被」が上野公園や商店街を賑わします。また、パレードの先 頭を切る「藝大サンバ・パーティー」という本学のサンバ・サークルの演奏は 1980 年から始まっており、浅草サンバ・カーニバルのルーツにもなったことがわかりました。
年に一度、藝大生たちが芸術活動を通して真剣(マジ)に遊ぶお祭り―それが「藝祭」です。

想い出からアーカイブへ・・・
しかし、藝祭に関する記録は体系的にとられていません。御輿は藝祭の直後に取り壊されるため、写真すら残されていない年があり、パンフレット・チラシも保存されていない年が多くあります。
本展では、総合芸術アーカイブセンターの調査により、それらの欠けている資料を OB・OG への呼びかけを中心に収集し、明らかになった藝祭の歴史の時系列を整理し、藝祭関係者へのインタビュー映像を交えて展示することで、藝大生と上野の歴史、その時々の社会や芸術に関する潮流を総括的に捉え直します。
東京藝術大学の芸術活動の「藝祭」の記憶と記録伝えること。その集積であるアーカイブは未来の藝大生、そして上野の杜の資源であり財産です。本展覧会をご覧いただきアーカイブという活動へのご関心をお寄せいただけると幸いです。

総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト

毎年、暑い夏が終わりに近づいて来ると僕たちはそわそわし始める。街のオヤジである僕たちには気になる事があるのだ。芸大の御神輿がちゃんと出来ているかと言う心配である。「そんなに心配なら見に行ってくればいいじゃないの」と家人に言われ山にそっと見に行くのだが、行くと覆いが掛けられていて覗けない事がほとんどである。すごすご帰って「ちゃんとしてたよ」と言うぐらいだ。上野では商店街が芸祭を応援するというスキームはかなり古くからあり　５月は氏神様のお祭り、９月は芸祭だねと言うのは通り相場になっている。かれこれ１０年程前に僕の友人で町の町会長でもある野村君が「おい、しろちゃん（彼は僕を幼名でこう呼ぶ）芸大の学生が真夏の暑い中を遊びもせず毎日毎日発砲スチロールの塊と涙ぐましい程格闘して立派な神輿を作っているのを公園の中だけの渡御で終わってしまうのはすごく勿体ない。　街に降りてきてもらってもっと多くの人に見てもらおうじゃないか」　と言ったことに始まるのです。　よしわかった一肌脱ごうじゃないかと各官庁と早速掛け合いに行って様々な調整の上で町内渡御が可能となったのです。結果は多くのお客様の仰天するところとなり　人が人を生む効果が出ています。そしてこの御神輿の渡御で街の中にも東京芸術大学との新たなる一体感が生まれた事も感じるのです。

毎年の御神輿の表彰式で一番・二番と決めるのがどれ程大変な事か。又　苦労に思っているかを知って頂きたいのです。なぜなら上下の差なんてそもそも存在しない程みんなよく作られているので表彰台の上で商店街の親父同士がまだどっちにするかで揉めている事もよくあります。さて、その表彰式の挨拶で必ず言うのは　僕たちは何十年たってもずっとここで商売をして暮らしている。農業者と同じ様に地面に足をつけて踏ん張っている。あなた方、学生諸君は世界に羽ばたいていってくれ。そしてベースにはあの夏の暑い日がんばった御神輿づくりと遊び心満載の芸祭が大河の様に、たゆとうている事を忘れないでほしい。
宮田先生の指揮の下、芸祭が益々盛んになります事を心より願っております。

2016/01/24
上野商店街連合会 会長
早津 司朗

2015 年度
情報発信・システム研究プロジェクト

この度、東京藝術大学が誇る《藝祭》の 100 年に渡る歴史を展示することができ心より光栄に存じます。ともすれば開催期間中の祭りにのみ衆人の注目は集まりがちですが、それを記録し、後世に語り継ぐこともまた大切なことです。能のことばにある「序・破・急」ではございませんが、過去を紐解き学ぶことでより自由に、そしてより創造的に遊ぶことができるのではないでしょうか。アーカイブとはまさに温故知新、ときめきの源といえるでしょう。

今では公園内を練り歩く藝祭名物の御輿も、かつては銀座にまで足を伸ばしておりました。一昔前までは谷根千桜を巡回し不忍池を一周する渡御も行われており、住居の二階から手を振り応援してくださった地域住民の方々が懐かしく偲ばれます。上野商店街他の地域のみなさまからも長きにわたりご支援を賜り、東京藝大は今後ますます開かれた存在として地域を取り結ぶ記憶の中心地となる必要を切に感じております。過去を顧み、人が生きた尊厳の証をアーカイブする本展覧会が上野という地域のよりよい文化・芸術の発展に付与するその礎たらんことを切に祈っております。

かつてフランスの哲学者は、「魂とは記憶である」と語りました。明治から戦後にかけて心の駅であり、文化の中心地であり続けてきたここ上野の杜に受け継がれてきた魂、そのスピリッツを体感していただければ幸いです。

2020 年には東京オリンピックがございます。本展覧会にインスピレーションを受けた藝大生たちがきっと世界の《GEISAI》を見せてくれるものと信じております。過去から未来へ、そしてオール藝大からオール上野へ。芽吹いた記憶の種が大樹となり、文化の杜の生態系はますます豊饒なものとなることでしょう。

かくいう私も今の藝大生と変わらず、ずいぶんとやんちゃなことをいたしました。藝大生の真剣な遊びの記憶を遡れば明治の美術学校から平成の現在にいたるまでなんら変わりない学生達の姿を垣間見ることができるはずです。不忍池に咲き誇る泥中の蓮たちのやんちゃの記録をとくとご堪能あれ。

東京藝術大学 学長
宮田 亮平

謝辞

本展に向けての資料調査には、多くの方々にご協力いただきましたことをこの場をお借りして御礼申し上げます。資料提供をいただいた東京藝術大学附属図書館、東京藝術大学学生課には深く御礼申し上げます。美術学部同窓会 杜の会様におきましては、OB・OG に向けての資料調査の折り込みチラシを会報に同封していただき、本展に出展しております多くの資料の収集が実現致しました。また、展覧会準備中に急逝された音楽学部学食キャッスルの福本豊様には資料調査・収集に関して多大なるご指南をいただきましたことをここに付け加えておきます。

〇資料ご提供・調査協力者(順不同)

山川常男様	浅賀正義様	権田典応様
野田達様	織田このみ様	由井かほり様
護国院大黒天様	石黒功様	有上ひとみ様
君塚和香様	田中厚子様	片山沙織里様
安高信一様	岩井有二様	有馬純晴様
宇野吉晴様	森重伸悟様	加藤磨珠枝様
松浦昇様	藤原修様	アラン・ウエスト様
吉田結美様	安藤珠希様	東京藝術大学 美術学部杜の会様
四ツ釜豊様	江野慎一様	東京藝術大学 音楽学部同声会様
佐藤宏三様	川崎鈴彦様	東京藝術大学 大学美術館様
小林史子様	古嵜寛志様	東京藝術大学 附属図書館様
鹿島一生様	安田正信様	東京藝術大学 学生課様
永武晢弥様	村田博美様	石神井寮同窓生の会様
奈良晋裕様	山口美恵様	上野桜木町会様
朝山奈津子様	大石恵美子様	天茶親交会様
玉村一家様	関香代子様	谷中地区町会連合会会長　野池幸三様
井口啓様	春田玲子様	池之端三丁目町会様
染谷聡之様	福本豊様	水月ホテル鴎外荘様
谷村秀様	金田郁実様	公益社団法人 二科会様
小作久美子様	水谷雅之様	上野商店街連合会様
坂本達雄様	櫻庭学様	上野観光連盟様
関稔様	土井つかさ様	
斉藤哲也様	山口裕加奈様	

〇インタビューご協力者

北澤悦雄様	保科豊巳様
四ツ釜豊様	日比野克彦様
荒井竜一様	新井健司様
半田悠人様	深澤孝哉様
安藤悠希様	西山三郎様
中川優子様	水谷雅之様
小林のんき様	木村雄二様
加々見太地様	森重伸悟様
宮田亮平様	茅野雅弘様
渡邊健二様	古橋果林様
北郷悟様	永武哲弥様
松下功様	

〇展覧会協力

東京藝術大学 芸術情報センター

上野「文化の杜」新構想実行委員会様

東京藝術大学 藝祭 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

組織図
Organization

藝祭は藝祭実行委員会を構成する学生と一部の教職員によって運営されます。社会に芸術を還元する教育活動の一環として開催され、企画課を中心に御輿課や演奏課などの各課が連携し、自主的な学生活動のもとに執り行われます。

藝祭開催に至る経緯は、4月の新入生歓迎会などで藝祭委員を募集するところにはじまり、5月に本格的に各課に分かれて企画が練られていきます。藝祭委員全員が集う全体会議や各課の代表が集まる代表会議にて大まかにその年の「テーマ」が決定され、各課と学生課職員によってまとめられた企画書案が、7月の教授会で承認され予算がおりることになります。以降は9月初旬の本番に向け各課企画書の実現に向け邁進していきます。

明治や昭和のはじめ頃は学生のみならず教員も協力して祭を運営していました。かつて学生運動が華やかかりし時代においては、音楽学部の学生自治会である学友会と美術学部の学生自治会が共同して開催していました。運営を担う各課の名称や数は大まかには変わらないものの、その都度変更がなされてきました。

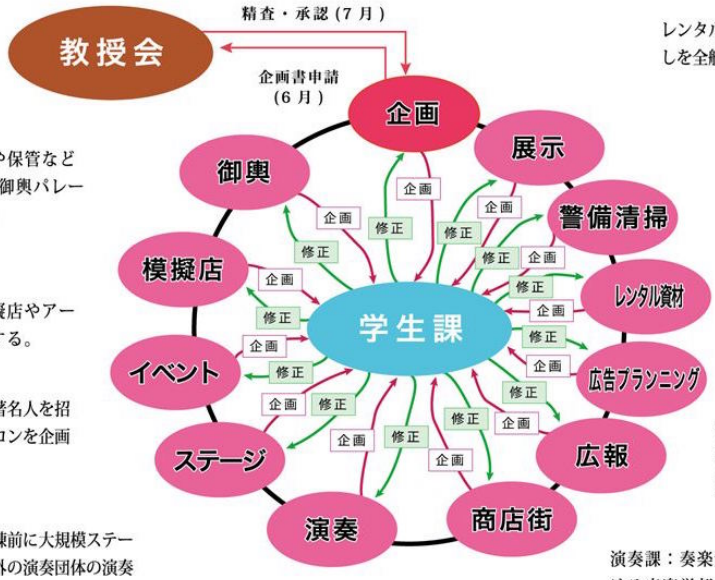
現在では自治組織である学友会、自治会に変わって藝祭実行委員会のみがその運営に当たっています。今では独立した課になっている御輿課や商店街課も過去にはひとつの"神"輿・商店街課に統合されていた時代や、記録課などの存在もあり、さまざまな組織運営が過去になされていたことが本展覧会の調査で分かりました。

各課の主な仕事

企画課：各課の調整を行い藝祭全体を統括する。各課代表会議や藝祭委員全体会議では司会や議長を担い運営・予算の取りまとめなどを行う。企画課委員長が藝祭委員長を務める。

展示課：学生の作品を展示する場所の調整を一括して担う。

警備清掃課：学内の警備やゴミ処理を担当する。この課があってこそ藝祭は滞りなく運営される。



レンタル資材課：藝祭に必要な資材の貸し出しを全般的に担う。

広告プランニング課：藝祭全体のビジュアルイメージのディレクションをしている。最初にポスターのデザインを決め、それをパンフ・グッズ・HP作成へと展開させる。

広報課：学外への告知や地元企業や藝大関係企業に広告を依頼する。

商店街課：御輿の授与や法被コレクションの日程調整・管理運営を上野商店街と連携して行う。

演奏課：奏楽堂や第一ホール、第六ホールにおける音楽学部構内での演奏会全般をとりしきる。

御輿課：御輿の制作や保管などをとりしきる。また、御輿パレードの進行を指揮する。

模擬店課：学内の模擬店やアートマーケットを運営する。

イベント課：学外から著名人を招くシンポジウムやミスコンを企画する。

ステージ課：総合工房棟前に大規模ステージを設営し、学内・学外の演奏団体の演奏をとりしきる。

※2015年度現在

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

御輿の歴史
The history of Mikoshi

「2015 年度藝祭の御輿 (工芸科)」(2015)　出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

サンバと双璧をなす藝祭名物であり、上野公園を練り歩きまちを彩る藝祭きっての花形が御輿です。御輿の制作は学部一年生が中心となり 4 月から 9 月の初旬にかけて 5 ヶ月の時間をかけて制作されます。制作は 7 月末から本格的に始まり、夏の熱さの中で発泡スチロールの粉にまみれながら制作が進められます。ひと夏かけて精魂込めて作り上げられた御輿によって藝祭は盛大に封切られます。圧巻のパフォーマンスを終えた御輿は、各商店会や神田明神などから審査され賞が授与されます。悲喜こもごもが入り乱れる授賞式は、まさに息をのむ場面です。

御輿の歴史は古く 1903(明治 36) 年の「第一回美術祭」で行われた「仮装行列」に遡ることができます。岡本太郎氏の父である岡本一平氏が元祖とされる仮装行列と副次的に制作されたモニュメントは、現在の御輿のルーツともいえます。昭和初期にも仮装行列を行った記述がみられ、戦争本格化の直前まで行われていました。

「第一回美術祭のモニュメント」
(1903) 出典：『美術祭紀念帖』

戦後、団体展の「二科会」が展覧会のオープニングとして始めた銀座へのパレードから影響を受け、当時の「藝術祭」でも同様にパレードを行いました。この様子は当時テレビで放映され、戦後復興の活力となりました。1953(昭和 28) 年モニュメントを燃やすパフォーマンスの際、学生が大火傷を負った事故をきっかけに、1955(昭和 30) 年頃から現在の御輿中心のパレードへと移行し、1970 年代中頃には御輿と御輿がぶつかり合う「喧嘩御輿」がピークを迎えました。しかし、1979(昭和 54) 年に起きたと推定されるピアノ科の学生が手を挟む事故以降は「喧嘩御輿」は廃止され、サンバを交えたパレードやパフォーマンスに見所が移りました。

「事故前の『安珍清姫』仮装の様子」(1953) 衣類に引火して大火傷となった。
出典：石黒功氏寄贈資料

「喧嘩御輿の様子」(1975)　出典：古嵜寛志氏寄贈資料

現在の御輿の材料は主に発泡スチロールが用いられていますが、1990 年前半頃までは竹ヒゴや和紙、針金などを使い各科がそれぞれ思い思いの自由な材料でハリボテの御輿を制作していました。御輿のモチーフは当時の世相を反映する象徴でもあります。「長嶋茂雄」や「アラレちゃん」、「ビートたけし」、「エヴァンゲリオン」などは時代の雰囲気を感じさせます。近年では鳥やキツネ、カエルなどの自然物が御輿のモチーフの大部分を占めています。今年はどのような御輿が出てくるのでしょうか。

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 Gei Sai 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

御輿制作過程
Production process of Mikoshi

藝祭の名物といえば、やっぱり初日のパレードに登場する御輿。
各科の一年生が一夏をかけて作り上げる御輿の制作過程を、2014 年度彫刻科の例を見ながら紹介していきます。

1. 案を出し合い、どんな御輿を作るか検討します。案が決定したら、マケットとよばれる小さな模型を製作します。この段階できっちりと詰めておくことで、本番の制作がスムーズになります。

デザイン画

マケットも本物同様に着色します。

2. 夏休みに入りいよいよ御輿の制作が始まります。まず、芯棒を建て、発泡スチロールをはめ込んでいきます。ボンドで接着し、墨であたりを付けて、電熱線を使い大まかにカットしていきます。

大きい発泡の塊から削り出していきます。

分担しながら作っていきます。

離れて全体を確認。

モデルさんに花魁と同じポーズをしてもらう。

3. 形が完成したら、下地材を塗り、着色していきます。

花魁の顔、着物にも細かな着色をほどこします。

塗料を淡く吹き付けて、重ねていきます。

4. 髪飾りを取り付けて、いよいよ完成！当日は皆で御輿を担ぎながら、上野公園を練り歩きます。

遠くからでも目立つよう、ボリューム感と色味の華やかさを意識しました。

また、狐の毛並みや花魁の髪飾りなど、細部にもかなりこだわりました。

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 Gei Sai 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

法被制作過程
Production process of Happi

藝祭で藝大生が着ている華やかな法被、実はこの法被も毎年１年生が手作りしているのです。
このパネルでは、2014 年度工芸科の例を見ながら、その完成までの道のりに迫ります。

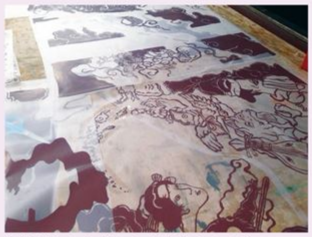
1. 科内で募集したデザイン案を、皆で話し合いながらより良いものにするために試行錯誤します。

同じ図案でも、様々なカラーバリエーションを考えます。

デザイン案

この法被は、当日に御輿を担いで上野公園を皆で練り歩くことをイメージしてデザインされました。

2. デザイン画を実際の大きさに拡大し、パーツや色ごとにシルクスクリーンの版を作って行きます。半透明なフィルムに図案を描いたものを、感光乳剤を塗った版の上に重ね、強い紫外線を照射することで版が出来上がります。



細部を修正しながら、図案を書き写します。

版に感光乳剤を塗る。

紫外線を照射してくれる機械で感光。

紫外線が照射されなかった部分を水洗いで取り除き、乾燥させると版が完成します。

3. パーツごとに裁断した布に、１色ずつ柄を刷っていきます。イメージ通りの色が出来上がるまで試行錯誤しながらインクを作ります。

試し塗りをしながら調色。

特に、刷りの作業はチームワークが大切です。

１色刷るごとに乾燥。

4. すべてのパーツが刷り終わったら、１枚１枚丁寧に縫製して、法被が完成します。
藝祭当日は、学部１年から教員までお揃いの法被を着て練り歩きます。

精度を高めるために、どの作業も丁寧に行うことをみんなで意識しました。

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト
http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展

東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

サンバ
Samba

「藝祭フィナーレの様子」(2012)　出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

御輿と双璧をなす藝祭名物であり、藝祭はサンバにはじまり、サンバに終わると言っても過言ではありません。その歴史は 1979(昭和 55) 年に旧大浦食堂の前でゲリラ的に行われたことにはじまります。民族音楽の大家である小泉文夫氏が講義でサンバを紹介し、その影響を受けた打楽器科の中村功氏はじめ同学科学生 10 数名がサンバの打楽器演奏を旧大浦食堂の前で行いました。

サンバに造詣の深い日本画科学生永武哲弥氏がそれを聞き付け、意気投合しバンドとして発展していきました。翌年の 1980(昭和 56) 年にはまだクラブ活動として正式には承認されていない状態でしたが、ゲリラパレードを各所で行い、この年には藝祭のメインステージにおいて「藝大サンバ・パーティ」でトリをつとめます。当時の最新設備であるレーザービームの照明とのコラボレーションにより、ステージは大いに盛り上がりました。

「上野公園でのサンバの様子」(2010)
出典：東京藝術大学
総務課広報係撮影資料

「歓声をあげる学生たちの様子」(2008)
出典：東京藝術大学
総務課広報係撮影資料

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

サンバの歴史
The history of Samba

「上野公園を練り歩くサンバ隊」(1981)　出典：永武哲弥氏所蔵資料

意外に知られていない事実ですが、浅草サンバカーニバルの源流はこの藝大サンバ・パーティに由来します。

彼らのゲリラパレードが台東区長の目に止まり、同年に早速浅草にてサンバパレードが敢行され、今では藝大サンバ以上に知名度を誇る「浅草サンバカーニバル」に発展しました。

現在では御輿パレードの先頭を飾るサンバ隊ですが、堂々とパレードの先陣を切るようになったのは 1981(昭和 57)年からで、前年まで行われていた喧嘩御輿が廃止となったことから新しい名物としてサンバに注目が集まりました。この年には、東京各大学のラテンアメリカ研究サークルの協力により、総勢 80 名にもおよぶサンバパレード「上野カーナバル」が実現しました。

「藝祭ステージで演奏する様子」(1981)　出典：永武哲弥氏所蔵資料

この大学間連合がのちの学生サンバ連合ウニアン・ドス・アマドーリス、通称「ウニアン」に発展します。以降、藝祭パレードにとってサンバは欠かせぬものとなり、御輿とともに不忍池や公園内を盛大に周回するようになりました。藝大サンバ・パーティーから巣立った卒業生たちは、今も国内外を問わず演奏家として活躍し、また教育の場でサンバを教えている人もいます。

「上野公園噴水広場で盛り上がりを見せる学生たち」(2015)
出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

演奏会 - 1
Music-1

東京音楽学校の時代からベートーヴェンやマーラーの初演を行うなど、本学は西洋音楽を日本に紹介する役割を使命としてきました。

その系譜は東京音楽学校が東京藝術大学に移行した後も変わらず、社会に音楽の喜びを伝える精神は藝祭にも受け継がれ今に至っています。

「超満員の演奏会 根本つね子の独唱」(1946) 出典：小松光義氏提供資料

「仮装オーケストラの様子」(2014) 出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

近年、最も人気を集めているのが仮装オーケストラです。「今年は仮装オーケストラはないのですか？」と問い合わせがあるほどの人気です。面白い仮装や演奏中に見られる親しみやすいパフォーマンスなど、敷居の高そうに見えるクラシック音楽をとても身近なものに感じさせてくれます。

音楽の演奏とともに、お酒やおいしい料理が味わえる模擬店はもはや藝祭名物です。管打楽器科の「Manto Vivo」や声楽科の「LA VOCE」の店舗では、ピロティを会場にたえず演奏が行われています。現在ではありえませんが、ひと昔前のおおらかな時代にはお酒を飲んで舞台演奏を行った強者がいたという噂も耳にします。

「賑わう Manto Vivo の様子」(2012) 出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

演奏会 - 2
Music -2

藝祭は学生が日頃の成果を発表する絶好の機会です。美術の学生は展示を行い、音楽の学生は演奏を通じ日頃の積み重ねを社会に発表します。

演奏会では、本格的なオーケストラ演奏から普段は見ることのできない特殊な編成、また親しみやすい音楽など実に多様な演奏が行われます。

「藝祭でのフルオーケストラの演奏の様子」（2013）東京藝術大学総務課広報係撮影資料

「能楽の様子」（2005）東京藝術大学総務課広報係撮影資料

演奏場所は、基本的に音楽学部構内のホールや奏楽堂です。西洋音楽のみならず雅楽や邦楽、またガムランなど洋の東西を問わない音楽が学内で奏でられます。

「能楽の様子」（2005）東京藝術大学総務課広報係撮影資料

近年では大学に隣接する護国院や上野公園内の噴水横、さらには東京駅丸の内ビルディングなど、演奏場所は学外へと大きく広がってきました。

奏楽堂を貸し切って行われる「E 年オペラ」は、学部 3 年生によって運営され、美術の学生が舞台芸術や照明・衣装を担当します。その意味において、オペラは音楽と美術が融合した藝祭を象徴する総合芸術と言えるでしょう。

「声楽科 3 年オペラ『ドン・ジョバンニ』」（2007）
出典：東京藝術大学総務課広報係撮影資料

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 Geisai 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

地域と藝祭 - 1
Community and Geisai - 1

「上野商店街を盛大に練り歩く御輿パレード」(2010) 出典：東京藝術大学 総務課広報係撮影資料

藝祭が毎年無事に開催される背景にはいつも地域の方々の助けがあります。藝大を取り巻く谷根千、上野桜木などの周辺の方々は今も昔も温かい目で藝祭を見つめてきました。現在では上野公園内を巡るのみとなってしまった御輿パレードも、かつては谷根千から不忍池までを周遊しており、住宅街の２階の窓から手を振り応援をしてくださる方々がたくさんいました。まだドブの臭いがしていた不忍池に飛び込んだ学生を温かく迎えてくれた地元の銭湯の存在も忘れてはならないでしょう。

藝祭に対する深い理解は地域住民の方々だけではありません。上野商店街とのかかわりは 1994 年（平成 6）年の「芸術まつり」において藝祭実行委員会と上野仲通商店街(現:上中(うえちゅん))が商店街にて藝祭の一部を共催したことにはじまります。

それから本格的に各商店街から賞金を兼ねた賞を授与する流れができました。受賞した御輿は、はかまごし広場に展示されると同時に、サンバ隊と共に商店街を練り歩く栄誉をあずかります。今では神田明神や松坂屋も加わり授賞式は年々豪華になってきています。

「根津谷中のスポット紹介」(1976) 出典：『東京芸術大学芸術祭目録』巻号 1976.28～29 頁

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 Geisai 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

地域と藝祭 - 2
Community and Geisai - 2

戦前には秋葉原まで仮装行列が遠征しており、戦後数年の間は銀座や東京駅付近までも足を伸ばしていました。娯楽の少なかった当時、パレードは衣装の面白さに加え、学生のみならず馬に乗った教員も加わるなど、道行く人を楽しませていたようです。当時の朝日新聞の記事では「爆笑をまく行列」と評されました。

「秋葉原を行く仮装行列」(1935)
出典：寿美田与一氏提供資料

「不忍池に投げ込まれる藝大生」(1958) 出典：東京藝術大学学生課所蔵資料

御輿パレードにおいては、交通規制を担う地元警察との連携は欠かせません。しかし酒に酔っての喧嘩、警察の制止を振り切っての不忍池に飛び込み、さらには公園の噴水で体を洗うなど「藝大生らしい」行為が横行し、警察との関係が悪化しました。その結果年々御輿のルートは縮小し、今では噴水前広場から桜並木までの周遊に落ち着いています。

しかし、時代の変化もあり近年地域の方々の藝大生に対する信頼は戻りつつあります。近年では藝大と接する護国院大黒寺の槍舞台を借りた邦楽の演奏や上野駅構内の「Break ステーションギャラリー」でも展示を行うことができるようになりました。さらに、たいとう歴史都市研究会が運営する「カヤバ珈琲」や「上野桜木あたり」とコラボレーションする動きも見られ、上野公園を大きく使ったアートマーケットが催されるなど、地元と共創する藝大生の動きは今後さらに本格化していくでしょう。

「カヤバ珈琲とコラボレーションする藝祭」(2015) 出典：『東京芸術大学芸術祭目録』巻号 2015.23 頁

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

インタビュー 1
Interview - 1

藝祭と関わりの深い方々にインタビューを行い、藝祭での想い出や今後の展望などについてお話をうかがいました。戦後から現役世代まで美術・音楽の垣根を超えてさまざまな角度から藝祭が語られます。商店街の方々のインタビューではこれまでの藝祭との関わり方や、まちの藝大生に対する思いやスタンスをお話いただきました。学生・教職員・地域の方々を通じて語られる藝祭のそれぞれの想いを、ぜひお聞きください。

お手元のリモコンでチャプターをお選びいただき、ヘッドフォンでご視聴下さい。

チャプター 1. 学長

宮田 亮平 先生
みやた りょうへい

オリンピックエンブレムの選考委員長を務め、名実ともに日本の文化芸術の顔でおなじみの宮田学長。そんな彼の、不忍池でやんちゃしたというエピソードには親近感を抱かれるのではないでしょうか。
今後の藝祭への「変わらなくていい」というメッセージは、心に込みます。

チャプター 2. 大浦食堂マスター

北澤 悦雄 さん
きたざわ えつお

様々な情報が流れ着く学食のひとつ大浦食堂。そのマスターは、藝大の生き字引といえます。様々な想い出を語っていただきました。
北澤さんは、藝祭パンフレットの表紙を飾ったこともあります (1988)。

チャプター 3. 元学生課職員

四ツ釜 豊 さん
よつかま ゆたか

1990 年前半に藝祭担当として藝大生を身近に見てきた学生課職員の、藝大に対する愛情とユーモアがにじみ出るエピソードです。
本展の一部に展示されている法被は、藝祭の後にゴミとして捨てられていたものを四ツ釜さんが拾い集め、綺麗に洗濯し保存していたものです。

チャプター 4. 学生課職員

荒井竜一 さん
あらいりゅういち

藝祭実行委員会のすべての課と、企画の調整を行う学生課職員から見える藝祭の全体像を語ります。企画書の調整段階では学生と激しいやりとりが行われますが、祭が終われば学生たちと飲み交わす一幕も。

チャプター 5. 2013 年度藝祭委員

初めて、上野公園に野外ステージを建てた 2013 年度藝祭。学内工事の影響で、音楽学部の主な演奏場所である第6ホールが使えない逆境をどのように克服したのか？
上野公園ステージを実現に導いた感動の軌跡が今ここに！

委員長：建築科 4 年　半田 悠人 (はんだ ゆうと) さん
副委員長：薬理科 4 年　安藤 悠希 (あんどう ゆうき) さん
野外ステージ担当：薬理科 4 年　中川 優子 (なかがわ ゆうこ) さん
展示課代表：芸術学科 4 年　小林 のんき (こばやし のんき) さん

チャプター 6. 2015 年度藝祭委員御輿課課長　彫刻科 2 年生

加々見 太地 さん
かがみ たいち

1 年生のときに彫刻科の御輿隊長を担当し、2 年生では藝祭委員の御輿課課長として活躍しました。
苦労話や、藝祭のリアルタイムな青春模様が語られます。

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/
協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 Geisai 100年の歴史展

東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

インタビュー 2
Interview - 2

チャプター 7. 彫刻科教授

北郷 悟 先生
きたごう さとる

お酒をとにかくたくさん飲んだというお話は、今と変わらぬ藝大スピリッツを感じさせてくださいます。アーカイブセンターのセンター長として、今後の文化芸術の中心地としての上野に対するビジョンも語っていただきました。

チャプター 8. 器楽科 (ピアノ) 教授

渡邊 健二 先生
わたなべ けんじ

やんちゃばかりしていた学生時代を懐かしみつつ、今では藝祭のリスク管理を担う側からの貴重なお話をしていただきました。学生の気持ちがわかる分、葛藤も多くあるとのことです。
ハマグリの模擬店でのエピソードは、お酒好きの藝大生ならではのもの。

チャプター 9. 演奏芸術センター教授

松下 功 先生
まつした いさお

「藝祭といえば、フラれた思い出しかないよ」。そう語り始まったインタビュー。作曲科で代々受け継がれてきている模擬店「メシアン」を立ち上げた事実が判明しました。音楽学部は御輿製作にあまり関われないため思い出は少ないとのことでしたが、心温まる思い出がたくさんありました。

チャプター 10. 先端芸術表現科教授

日比野 克彦 先生
ひ び の かつひこ

学生の頃から藝祭と関わりを持ち続け、卒業後も藝祭には特別ゲストとして定期的に呼ばれています。
デザイン科の模擬店である「ダイアモンド・パパ」はあまりにも有名。

チャプター 11. 美術学部 同窓会「杜の会」役員

戦後初めの藝祭の様子を語る資料は、全く残っていませんでした。情報の空白域を、オーラルヒストリーで埋めてくださった方々のインタビューです。藝祭と密接に関わる藝大の事情も語っていただき、大学そのもののアーカイブの必要性を感じさせてくれるインタビューでした。

彫刻科 1962 年 (昭和 37 年) 卒業　杜の会常任理事：西山 三郎 (にしやま さぶろう) さん (左)
彫刻科 1956 年 (昭和 36 年) 卒業　杜の会会計監査：新井 健司 (あらい けんじ) さん (中央)
油画科 1961 年 (昭和 36 年) 卒業　杜の会常任理事：深澤 孝哉 (ふかざわ たかや) さん (右)

チャプター 12. 絵画科 (油画) 教授「杜の会」会長

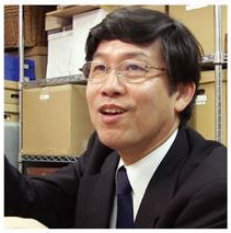
保科 豊巳 先生
ほしな とよみ

咆哮御輿全盛期の思い出を語ります。ベニヤ板で製作された「長嶋茂雄御輿は他課の御輿を圧倒したようです。その様子は巨人 V9 優勝時のスポーツ新聞の表紙を飾ったとのこと。御輿が谷根千地域に飛び出し、不忍池を周遊していた頃の貴重なお話がうかがえます。

チャプター 13. 野中通り商店街振興組合 前理事長

木村 雄二 さん
きむら ゆうじ

商店街の歴史を整理・編纂してきた生き証人。あやふやだった、商店街と藝祭の関わりの経緯を紐解いてくださいました。1994 年、上野仲通商店街にて発せられた「芸術通り宣言」を機に、商店街と藝祭の関わりは始まります。



チャプター 14. 上野中通り商店街振興組合 理事長

水谷 雅之 さん
みずたに まさゆき

新旧の藝大生を知るがゆえに、マンネリ化する藝大生の涜し物に喝を入れてくださいました。「現在の藝祭委員は締め切りも守り組りになる。でも、

チャプター 15. 上野中通り商店会 環境整備担当副会長

森重 伸吾 さん
もりしげ しんご

藝祭大好きお祭り男。粋な江戸っ子の視点から語られる御輿展示のエピソードは必見。藝大生と共に楽しんだ藝祭の思い出が語られます。

チャプター 16. 上野観光連盟 事務総長

茅野 雅弘 さん
かやの まさひろ

上野のまちを文化・経済の観点から活気づける長期的ビジョンに立ち、今後の藝祭と地域のかかわりを俯瞰的に見つめます。

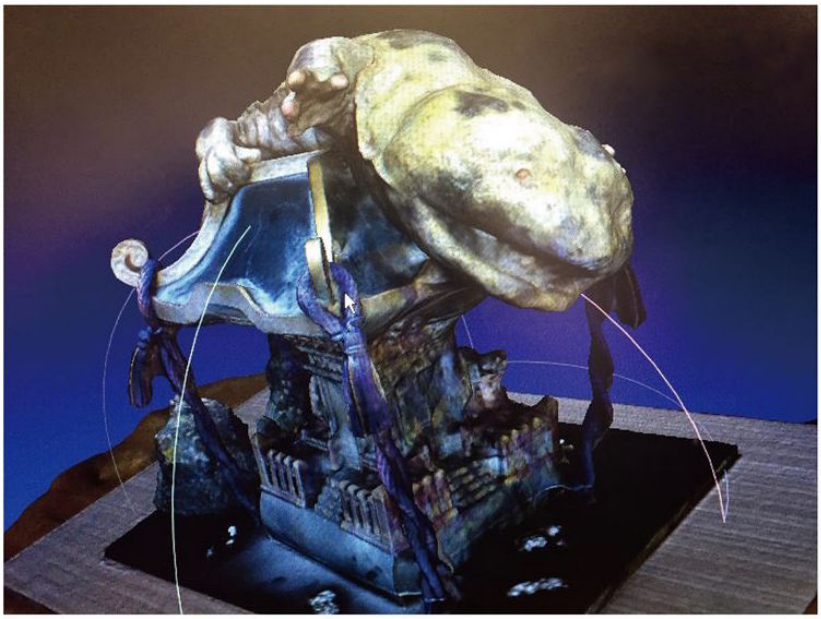
主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

東京藝術大学 藝祭 GEISAI 100年の歴史展　東京美術学校＜美術祭＞から＜藝術祭＞を経て

3D プリント造形
3D printer modeling



御輿マケットに 3D スキャンを使用し、得られたデジタルデータを立体物としてカタチにしました。

最新のスキャニング技術による撮影とプリンティングによる出力は、3D スキャナーならではの、リアリティを表現できます。

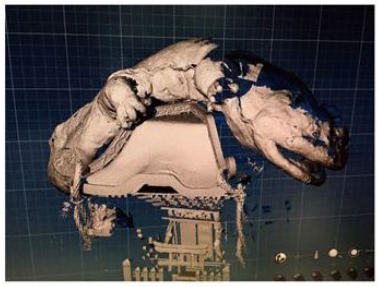
スキャニングをしている際の画面

01 撮影（3D スキャニング）

3D スキャナーを使用した撮影を行います。撮影時間はある程度要しますが今回の場合では 30 分から 1 時間程度、静止した状態にて撮影しました。

02 データ編集

撮影したデータを編集します。1 ショットずつのデータを組上げ、形状や質感などの調整を細部まで行うことで、3D プリンターでの出力を行った際に、よりいっそうリアルなものに仕上がります。



03 出力、修正

3D プリンターを使用して、編集後の 3D データを立体物として出力します。
樹脂素材にて出力された素材を手作業で修正し完成です。
（画像はイメージです。）

主催：東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
情報発信・システム研究プロジェクト　http://archive.geidai.ac.jp/

協力：上野「文化の杜」新構想実行委員会
東京藝術大学 芸術情報センター

COMPOSITE ART ARCHIVE CENTER

「藝祭 100 年の歴史展」年表

藝祭歴史年表		世相	東京美術学校 美術学部歴史	東京音楽学校 音楽学部歴史	藝祭の歴史
明 治 36 年	1903	・藤村操が華厳滝で自殺、 幸徳秋水らが平民社を設立			・第 1 回美術祭が開催される。仮装行列や美術祭式典、喜劇、神代行列などが催され、来場者は 3 万人に及んだ。
明 治 37 年	1904	・日露戦争			・第 1 回美術祭を盛大に行い過ぎたため、以降は企画されるものの労力の観点から継続されず。
明 治 36 年	1905	・ポーツマス条約 ・「我が輩は猫である」夏目漱石			
明 治 36 年	1906	・南満州鉄道設立			
明 治 36 年	1907	・ハーグ密使事件		・定期演奏会において本邦初のチェロ独奏が披露される。	
明 治 41 年	1908	・愛新覚羅溥儀が清の皇帝に即位			
明 治 42 年	1909	・米西戦争			
明 治 43 年	1910	・韓国併合			
明 治 44 年	1911	・大逆事件 ・幸徳秋水ら死刑に			
明 治 45 年 大 正 元年	1912	・明治天皇崩御		・学友会の土曜コンサート始まる	
大 正 2 年	1913	・第一次護憲運動			
大 正 3 年	1914	・第一次世界大戦			
大 正 4 年	1915	・中国に２１か条の要求 「羅生門」芥川龍之介	・臨時写真科設置		
大 正 5 年	1916	・英仏間でサイクス・ピコ協定を密約（オスマン帝国領分割）			
大 正 6 年	1917	・バルフォア宣言、石井 ・ランシング協定		・グノー生誕百年記念演奏会。	
大 正 7 年	1918	・ウィルソンの 14 か条・ 日本がシベリア出兵			・この頃は美術祭というよりは運動会に近く、御輿パレードにつながる仮装行列もこの運動会の演し物として後世へ繋がったと考えられる。
大 正 8 年	1919	・ドイツでヴァイマール憲法が成立			
大 正 9 年	1920	・国連に加盟、常任理事国に ・戦後の経済恐慌	・フェノロサ記念碑建立・法要式典挙行		
大 正 10 年	1921	・原敬暗殺 ・ワシントン軍縮会議			
大 正 11 年	1922	・全国水平社「水平社宣言」 ・日本共産党結成	・ロダン作《青銅時代》石膏像をデルスニスから美校に貸与		
大 正 12 年	1923	・関東大震災			
大 正 13 年	1924	・大一次国共合作			
大 正 14 年	1925	・治安維持法 ・ラジオ放送開始	・関東大震災・美校は一時被災者の避難所となる		
大 正 15 年 昭 和 元年	1926	・蒋介石、北伐開始			
昭 和 2 年	1927	・片岡蔵相、取り付け騒ぎ			
昭 和 3 年	1928	・張作霖爆殺事件 ・普通選挙実施			
昭 和 4 年	1929	・世界恐慌			
昭 和 5 年	1930	・ロンドン軍縮会議			
昭 和 6 年	1931	・満州事変			

昭 和 7 年	1932	・五・一五事件 ・坂田山心中事件		・マーラー交響曲第五番初演。 ・初めて生徒に奨学金支給。	
昭 和 8 年	1933	・日本国連脱退			・運動会開催された記録が残っている。工芸部予科生の「南洋踊り」、油画科２年の仮装など。
昭 和 9 年	1934	・ヒトラー、総統になる ・ソ連が国際連盟加盟		・マーラー交響曲第六番初演。	・運動会が開催された記録が残っている(11/2)。この年も仮装を行なっており、工芸部２年生の「動物園」、油画３年の仮装など。
昭 和 10 年	1935	・ナチスドイツ再軍備宣言 ・ロンドン海軍軍縮会議		・マーラー交響曲第三番初演	【11/4】「本校設置紀念日ナリシモ都合ニヨリ繰下ゲ 11 月 4 日に記念式ヲ行フ」という記述から、この頃本校設置紀念式に合わせて運動会を開催した推測される。
昭 和 11 年	1936	・二・二六事件			
昭 和 12 年	1937	・盧溝橋事件 ・日中戦争	・日中戦争開始により中国人留学生全員が休学・帰国		
昭 和 13 年	1938	・国家総動員法		・傷病軍人慰問演奏および出征軍人家族慰問演奏会を開催。	
昭 和 14 年	1939	・第二次世界大戦勃発		・邦楽科能楽専修に初めて女生徒の入学が許可される。	
昭 和 15 年	1940	・日独伊三国同盟	・正木直彦没、学校葬挙行・澤田源一が校長に就任	・東京音楽学校国民精神総動員実行委員会を設置。	・皇紀 2600 年を紀念して 12 月 2 日に運動会が数年ぶりに開催される。漫画競争などユニークな催しが執り行われる。
昭 和 16 年	1941	・太平洋戦争開戦			
昭 和 17 年	1942	・ミッドウェー海戦	・修業年限短縮/太平洋戦争に兵力、労働力の確保のための措置		【10/5～8】 ・天心祭が開催され、六角紫水氏による講演会や、岡倉天心の遺品展覧会が行われた。
昭 和 18 年	1943	・学徒動員	・美校は校内銅像の回収除外を要請・出陣学徒壮行大会		
昭 和 19 年	1944	・集団疎開始まる	・文部省が東京美術学校改革を断行		
昭 和 20 年	1945	・8/15 ポツダム宣言受諾・「リンゴの唄」	・学校再開		・昭和 16 年～昭和 20 年まで運動会開催中止。
昭 和 21 年	1946	・日本国憲法公布 ・公職類法令	・男女共学制実施・奈良古美術見学旅行復活		・戦後第 1 回の藝術祭が開催される。運動会、野外演奏会、ファイアーストーム、仮装競技及び大行進が行われた。学内展示のみならず東博表慶館でも展示が行われた。
昭 和 22 年	1947	・教育基本法・学校教育法公布 ・日本国憲法施行			【11/7 日～13】 ・第 1 回上野杜藝術祭開催。東京美術学校・東京音楽学校合同 第 1 回藝術祭
昭 和 23 年	1948	・美空ひばりデビュー ・「美術手帖」創刊			【11 月 13 日～】 ・第 2 回藝術祭開催
昭 和 24 年	1949	・湯川秀樹氏ノーベル物理学賞受賞	・東京藝術大学設置・上野直昭氏が学長に就任	・東京藝術大学設置	【美 12/1～7 音不明】・大学に統合されて、東京藝術大学第 1 回藝術祭が開催される。
昭 和 25 年	1950	・朝鮮戦争で特需 ・テレビの定期実験放送			【美 11/3～4 音 11/4、12/10～12】 ・東京藝術大学第 1 回藝術祭(戦後第 5 回目) ・この頃第 1 回藝術祭が何度か仕切り直されている。
昭 和 26 年	1951	・サンフランシスコ講和会議 ・日米安全保障条約調印	・この年から、職員のみ参加する運動会も開催されていた。	・50 回連続演奏予定《メサイア》第 1 回公演。	【美 11/30～12/2、音 11/4、12/10～12】 ・この年の藝術祭にて本学図書館秘蔵の国宝逸品が展示される。
昭 和 27 年	1952	・「鉄腕アトム」 ・黒澤明「羅生門」 ・民放ラジオ開局	・東京美術学校最後の卒業式・東京美術学校廃校	・東京音楽学校最後の卒業式 ・東京音楽学校廃校	【美 11/16、21～23 音 12/1～5】
昭 和 28 年	1953	・日本航空が初の国際線開設 ・奄美諸島が日本に返還			【美 11/8、13～15、音 11/27～29】 ・仮装劇の際に火災事故。俗称「安珍清姫事件」。以降、藝祭での火を使用したパフォーマンスが禁じられる。
昭 和 29 年	1954	・ベビーブーム ・映画「ゴジラ」公開	・学校としての古美術研究旅行復活（昭和 19 年以来）		【11/1、3、4～7】 ・第 1 回合同藝術祭。美術学部・音楽学部が共催になる。・体育祭も同時開催。 ・仮装劇、作品発表演奏会、原水爆禁止展覧会など。

昭 和 30 年	1955	・アジア・アフリカ会議			【10/30～11/3】 ・各科対抗バレーボール大会を多摩美術大学学生を招待して開催。
昭 和 31 年	1956	・「もはや戦後ではない」 （経済白書に記載）			【10/4、31、11/1～4】 ・主催が自治会共催から芸術祭運営委員会となった。 ・講演と討論「現代社会に於ける美術家の役割」にて岡本太郎氏を招く。
昭 和 32 年	1957	・上野公園に日本初モノレール			【10/27、31～11/3】 ・模擬店「VIVO」登場。「MANTOVIVO」の前身か。 ・六角紫水の学徒動員の際の言葉がパンフレットに掲載されている。
昭 和 33 年	1958	・東京タワー完成			【10/26、31～11/3】 ・狩野芳崖回顧展開催・芸術学科主催：映画と講演/スライドを用いた研究発表も催された。
昭 和 34 年	1959	・「週刊少年マガジン」「週刊少年サンデー」創刊			【10/24、31～11/3】 ・パンフレット企画「服装今昔物語その頃の芸大スタイル」にて、卒業生が当時の芸大生の服装について書いている。
昭 和 35 年	1960	・安保改正時、全学連デモ国会乱入・カラーテレビ放送開始			【10/29、11/3～6】 ・仮装カーニバルに音校ブラスバンドが加わった。・野外ステージ設置・野外ダンスパーティーを美術学部食堂前にて行う。
昭 和 36 年	1961	・「地球は青かった」 ガガーリン ・「上を向いて歩こう」 坂本九	・工芸、建築棟竣工 ・小塚新一郎氏が学長に就任		【11/3～6】 ・藝術祭テーマによる講演と討論会開催「芸術家は現代の人間関係をいかにとらえるか」大島渚氏、岡本太郎氏らを招いた。
昭 和 37 年	1962	・東京の人口が 1000 万人突破 ・キューバ危機			【10/30、11/1～4】 ・藝術祭と別日程で上野公園二本杉グラウンドにて運動会、仮装パレードが行われた。(10/16)
昭 和 38 年	1963	・ケネディ大統領暗殺 ・日本初の高速道路開通	・大学院美術研究科修士課程設置	・第 1、第 2 ホール完成 ・大学院音楽研究科修士課程設置	【10/16～20】 ・両学部の教務上の都合から藝術祭開催日程日が大幅に変更される。 ・小泉文夫講演会 ・上野公園二本杉グラウンドにて運動会、仮装パレード
昭 和 39 年	1964	・東京オリンピック ・東海道新幹線開通 ・「ガロ」創刊			【10/1～4】 ・高山登（元先端芸術表現科教授）が芸術祭企画委員長を務める。
昭 和 40 年	1965	・大学生が 100 万人突破 米軍・北ベトナムへの爆撃開始	・学力試験の入試への導入に反対する学生 756 人が授業を放棄		【9/29～10/3】 ・「芸術祭サロン」が開催され、現役生が卒業生や先輩と語った。
昭 和 41 年	1966	・日本の総人口 1 億人超 ・ビートルズ来日 ・文化大革命			【9/29～10/3】 ・2 つのパンフレットが存在。・コカコーラ・仁丹が表紙 ・裏表紙を大胆に装飾されたものと、カッティングされたお洒落なデザインのもの。
昭 和 42 年	1967	・第三次中東戦争			【9/29～10/3】 ・「芸術祭に静けさを取り戻そう」という基本姿勢で運営された。
昭 和 43 年	1968	・川端康成ノーベル文学賞 ・新宿争乱 ・「週刊少年ジャンプ」			【9/27～10/1】 ・150 ページ以上にも及ぶパンフレットを発行 ・「現代音楽祭」と題して、スティーヴ・ライヒ、ジョン・ケージなどの曲を演奏した。
昭 和 44 年	1969	・人類初の月面着陸 ・「男はつらいよ」山田洋次 ・学園紛争			【9/26～9/30】 ・期間中学生運動集団が乱入、陳列館を占拠した。 ・藝術祭の総括テーマ『現代ーこの虚像と実像の中で、我々は何処へいこうとするのかー』
昭 和 45 年	1970	・大阪万博 ・よど号ハイジャック事件 ・しらけ世代			【9/25～9/29】 ・講演会：寺山修司/岡本太郎「私にとっての芸術とは」 ・藝術祭のマンネリ化をパンフレットにて指摘。芸術祭委員の組織改革の提案も。

昭 和 46 年	1971	・公害問題 ・日活ロマンポルノ『団地妻 昼下がりの情事』			【9/23～9/27】 ・パンフレットにアンリ・ルソー風な学内地図が掲載される。
昭 和 47 年	1972	・沖縄本土返還 ・連合赤軍あさま山荘事件	・付属古美術研究施設改築竣工		【9/28～10/1】 ・彫刻科が独自にパンフレットを発行する。
昭 和 48 年	1973	・オイルショック ・海外旅行ブーム			【9/27～9/30】 ・パンフレット企画「芸大雑談集」では芸大にまつわる様々な”雑談”を紹介している。
昭 和 49 年	1974	・戦後初のマイナス成長 ・「超能力」ブーム	・美術学部本館（中央棟）竣工		【9/26～9/29】 ・パンフレットが週刊誌風。特集「有名人に電話しちゃった！！」では、ちばてつや氏、林家三平氏ほかに電話インタビューをしている。
昭 和 50 年	1975	・ベトナム戦争終結 ・暴走族、女子中高生の非行が戦後最大を記録	・デザイン科設置	・言語・音声トレーニングセンターを設置	【9/25～9/28】・喧嘩御輿が全盛期を迎えた。
昭 和 51 年	1976	・戦後生まれが人口の半数超え ・ロッキード事件			【9/23～9/28】 ・パンフレット企画「散歩道」にて、芸大の周辺の谷中、根津、千駄木から御徒町、湯島までを紹介。
昭 和 52 年	1977	・平均寿命が世界一になる		・博士後期課程設置	【9/22～9/25 同じ人間じゃないか】 ・パンフ企画：卒業生エッセイにて福田繁雄氏、池辺晋一郎氏が寄稿 ・マラソン大会 4 連覇の器楽科学生の記事あり。
昭 和 53 年	1978	・日中平和友好条約 ・竹の子族			【9/21～9/24 POWER に充ちた顔をしよう】 ・松岡正剛氏講演会 ・パンフレット企画にて当時学生の千住博が学生対談の司会を担当。
昭 和 54 年	1979	・第二次石油ショック ・東京サミット開催	・デザイン棟、大学会館竣工 山本正男氏が学長に就任		【9/21～9/24 ゆさぶれ君の魂】・ピアノ科学生が喧嘩御輿時に指を挟み負傷。以降喧嘩御輿は事実上廃止に。
昭 和 55 年	1980	・イラン・イラク戦争 ・ジョンレノン射殺	・取手キャンパス構想が新聞に掲載される		【9/21～23 上野杜一揆】 ・「藝大サンバ・パーティー」が初登場。喧嘩御輿に変わる目玉となっていく。 ・御輿が担がれる様子が NHK で生放送される
昭 和 56 年	1981	・スペースシャトル初の打ち上げ			【9/20～9/23 KANDEN HIGH-HEEL】 ・この年の藝術祭テーマソングが作られる ・歩行者天国実施
昭 和 57 年	1982	・初の日韓首脳会談			【9/20～9/23 心だけ桃太郎】 ・御輿パレード初日雨天のため御輿中止に ・この年までマラソン大会が行われていた ・御輿人気投票が行われる。
昭 和 58 年	1983	・東京ディズニーランド開園			【9/20～9/23 テーマなし】 ・山本正男学長：新入生歓迎講演会 ・パンフレットに御輿の制作課程の写真があり、木組みに新聞紙で作られていることが分かる。
昭 和 59 年	1984	・印ガンジー首相暗殺			【9/21～9/24 キョー キ ラン 舞】 ・村上隆氏が宮崎駿氏を呼び講演会を開催 ・この頃にみこしパレードの名称になったとみられる。
昭 和 60 年	1985	・ゴルバチョフ氏がソ連書記長に就任 ・男女雇用機会均等法	・藤本能道氏が学長に就任		【9/20～9/23 やらせて、お願い】 ・法被カラーに合わせた玉入れ合戦が行われる。法被はこの頃から各科で統一された可能性がある。
昭 和 61 年	1986	・チェルノブイリ原発事故			【9/20～9/23 伊達や酔狂】 ・正木記念館に重要文化財を展示 ・パンフレット企画「特集トップアーティストに聞く」岡本太郎氏、池田満寿夫氏ほか
昭 和 62 年	1987	・国鉄民営化		・旧奏楽堂が上野恩賜公園内に復元完成	【9/20～9/23】 ・藝大百周年を迎え、記念としてパンフレットの表紙が真っ赤になる
昭 和 63 年	1988	・ソ連、ゴルバチョフ書記長のもとペレストロイカ開始			【9/20～23】 ・パレードが非常に暴力的なイベントとしてみなされ中断される。「来年のパレードは許可できない」と警察から自粛勧告が出される。

昭 和 64 年 平 成 元年	1989	・昭和天皇崩御			【9/21～24】 ・御輿別綱引き大会 ・御輿の起点を上野公園噴水広場とする。
平 成 2 年	1990	・スーパーファミコン発売 ・東西ドイツ統一 ・バブル崩壊	・先端芸術表現科設置 ・東京芸術大学大学美術館竣工		【9/21～24】 ・パフレット企画「芸大キャンパス今昔」、「学び舎百年史」にて、藝大の歴史を振り返る。
平 成 3 年	1991	・ソビエト連邦崩壊			【9/19～22】 ・御輿パレードが台風により中止される。山口晃氏が藝祭実行委員長を務めた。
平 成 4 年	1992	・学校週５日制度開始			【9/17～20】 ・パンフレット企画「芸大生の選ぶアートの中へ」にて、藝大生が様々なアートを紹介。
平 成 5 年	1993	・平成大不況			【9/16～19】 ・上石神井フィルハーモニー管弦楽団による演奏が催された。
平 成 6 年	1994	・アパルトヘイト撤廃	・芸術資料館取手館竣工式	・邦楽科に雅楽、日本舞踊専攻を設置	【9/15～18】 ・上野商店街連合組合と藝大生が共催した「芸術まつり」開催。この年から商店会との繋がりが強くなる。法被コレクションの源流ができる。
平 成 7 年	1995	・阪神淡路大震災・地下鉄サリン事件・「新世紀エヴァンゲリオン」	・澄川喜一氏が学長に就任	・付属音楽高等学校が上野校地内（旧奏楽堂跡地）に移転	【9/15～18】 ・大浦にてサンバパーティーが行われる。 ・パンフレット企画「内藤こずえインタビュー」「日比野克彦インタビュー」
平 成 8 年	1996	・原爆ドームが世界遺産 ・たまごっち ・ポケットモンスター赤・緑			【9/13～16】 ・パンフレットが新聞風のデザインとなる。「坂本龍一氏インタビュー取れず！」の見出し。
平 成 9 年	1997	・消費税 5%導入 ・神戸児童殺害事件 ・「もののけ姫」			【9/12～15】 ・村上隆氏、林望氏、大岡信氏の公開講義。 ・高畑勲氏のトークイベントを開催。 ・藝大美術館建設現場の囲いにライブペインティング。
平 成 10 年	1998	・長野冬季オリンピック開幕	・大学美術館を設置（芸術資料館の転換）	・旧奏楽堂跡地に新奏楽堂完成	【9/11～13】 ・御輿を上野商店街に展示 ・「芸術上野祭 フラッグコンテスト」 ・石膏室コンサート開催 ・千住 3 兄妹のアートコラボレーション
平 成 11 年	1999	・2000 年問題 ・ヤマンバ ・黒ギャル		・新奏楽堂内にパイプオルガンを設置。	【9/17～19】 ・先端芸術表現科の実験的な御輿がスタートする。 ・パンフレット企画「上野の森」にて上野周辺の名所・名物を紹介
平 成 12 年	2000	・ウラジミール・プーチン、ロシア大統領に就任			【9/15～17 最後の 20 世紀饗宴】 ・「夜楽塾」千住博氏、辻仁成氏、長井龍之介氏、森村泰昌氏を招く。 ・パンフレット企画「大浦突撃インタビュー」掲載。
平 成 13 年	2001	・アメリカ同時多発テロ ・iPod 発売	・平山郁夫氏が学長に就任		【9/14～16 宇宙リゾート】 ・御輿が好評で東京都現代美術館に買上となる(デザイン科・日本画科制作の 2 体) ・藝祭委員記録課発足。
平 成 14 年	2002	・ゆとり教育スタート ・初の日朝首脳会議		・音楽環境創造科設置	【9/13～15】 ・この年にパンフレット表紙での名称が「藝祭」になる。 ・「夜楽塾」千住博氏,華道家元池坊由紀氏、現解剖学研究室教授布施英利氏を招く。
平 成 15 年	2003	イラク自衛隊派遣	・大学院美術研究科に先端芸術表現専攻を設置	・東京芸大チェンバーオーケストラ創設	【9/12～14】 ・上野マルイでも演奏会が催された。
平 成 16 年	2004	・アテネオリンピック ・フェイスブック創業		・音楽学部附属音楽高等学校が創立 50 周年を迎える。	【9/10～12 祭に非ず】 ・楳図かずお氏×今野祐一氏によるトークイベントが開催された。
平 成 17 年	2005	・日本国際博覧会（愛・地球博）開幕 ・youtube 開設	・大学院映像研究科映画専攻を設置。 ・宮田亮平氏が学長に就任		【9/9～11 上野震撼】 ・2005 年以降は藝術祭の正式名称が「藝祭」で統一される。

平 成 18 年	2006	・FIFA W 杯ドイツ大会 ・ニコニコ動画開設		・千住校地を開設し、音楽学部音楽環境創造科を移転	【9/8～10 舞合良酔(まいあいよいよい)】 ・この年から御輿の材料の主流が発砲スチロールになる。 ・藝大に隣接する護国院大黒寺にて雅楽演奏が催される。
平 成 19 年	2007	・twitter 日本語版開設 ・ボーカロイド「初音ミク」	・東京芸術大学創立 120 周年		【9/7～9 藝に遊ぶ】 ・大丸友エリアマネジメント賞が登場し、受賞御輿が丸ビルに展示される。
平 成 20 年	2008	・リーマン・ショック	・大学院映像研究科（修士課程）にアニメーション専攻を設置		【9/5～7 大観藝】 ・藝祭実行委員から記録課が無くなる。
平 成 21 年	2009	・バラク・オバマ 米大統領に就任			【9/4～6 ArtHolic】 ・杜の会主催特別講演会「哲学者宇野邦一の視点から一芸術を語る」
平 成 22 年	2010	・アラブの春			【9/3～5 Planet Art】 ・学長賞が誕生し、芸学・弦楽が初受賞。 ・本年特別のシャガール賞が選ばれる。 ・JIDF 藝大フォーラム。
平 成 23 年	2011	・東日本大震災	・2010 年のデザイン作曲の御輿が浅草神社に奉納された。		【9/2～4 浮世ルネサンス】 ・「復活！夜楽塾」東日本大震災における芸術の可能性についてのシンポジウムを大石膏室で開催。 ・矢野顕子氏「やの屋」
平 成 24 年	2012	・ロンドンオリンピック・パラリンピック			【9/7～9 eat!eat!art!】 ・ステージ企画「アイドル祭る」 ・学生が御輿から転落しそうになり、以降御輿の上に乗る行為が規制された。
平 成 25 年	2013	・2020 年オリンピック/パラリンピック開催が東京に決定			【9/6～8 眩暈するくらい】 ・初めて上野公園に大規模な野外ステージが設置された。 ・アートマーケットが上野公園に進出。
平 成 26 年	2014	・アメリカ、ISIS に空爆 ・『笑っていいとも!』放送終了			【9/5～7 電撃ハイタッチ】 ・中村佑介氏「謎解きはトークのあとで」 ・パンフレットに細田守氏と服部隆之氏のインタビューを掲載。
平 成 27 年	2015	・平和安全法制、閣議決定 ・パリ同時多発テロ			【9/4～6 みるみる魅せる】 ・カヤバコーヒーと藝祭がコラボ。 ・伊勢谷友介氏とのコラボ T シャツ販売。 ・林家喬太郎師匠独演会

年表参考文献

[1] 東京芸術大学百年史編集委員会編「東京芸術大学百年史」音楽之友社 1987-2003 年
[2] 東京藝術大学編「学報」東京芸術大学庶務課 1954-2004 年
[3] 東京美術学校校友会「校友会月報」1902-1933 年
[4] 東京美術学校校友会「美術祭紀念帖」關西寫眞製版印刷 1906 年
[5] 権田竜太郎著「振りかえってみると」1994 年
[6] 柴田卓編「岡倉天心ー芸術教育の歩みー」東京藝術大学岡倉天心展実行委員会 2007 年
[7] NHK ニッポン戦後ダブカルチャー史 年表 http://www.nhk.or.jp/subculture/history/index.html

「藝祭 100 年の歴史展」主要スタッフ

名前	役割	所属
大江 晃世	総合ディレクター	大学院美術研究科 後期博士課程 絵画専攻(壁画)、 アーカイブアシスタント(情報発信・システム研究)
一ノ瀬 健太	イベント企画(トーク、サンバ等)、藝祭美術学部資料調査、インタビュー、資料スキャニング	大学院美術研究科 修士課程 芸術学専攻、 杜の会学生幹事委員長、2011 年藝祭委員
小作 志野	グラフィック・展示デザイン、印刷、 プロジェクトマネジメント	美術学部絵画科油画専攻卒業、同大学院美術研究科 版画専攻 修了、元芸術情報センター非常勤講師
國島 由子	藝祭美術学部資料調査、年表作成、 資料スキャニング、物品調達	美術学部芸術学科
加々見 太地	法被・御輿展示	美術学部彫刻科、2015 年度藝祭実行委員会御輿課課長
西羽田 成美	藝祭音楽学部資料調査、年表作成、 資料スキャニング	音楽学部声楽科
横川 寛人	藝祭・インタビュー映像編集、3D スキャニング	大学院美術研究科 修士課程 彫刻専攻 アーカイブアシスタント(3D データ研究)
木本 涼	3D スキャニング・モデリング、3D プリント	3D データ研究プロジェクト助教
井田 大介	3D スキャニング・モデリング、3D プリント	3D データ研究プロジェクト教育研究助手
青柳 菜摘	藝祭パンフレット・写真スキャニング	大学院映像研究科 修士課程 メディア映像専攻
村田 冬美	藝祭パンフレット・写真スキャニング	大学院美術研究科 修士課程 先端芸術表現専攻
近江 ひかり	藝祭パンフレット・写真スキャニング	大学院美術研究科 修士課程 先端芸術表現専攻
林 玖	展示設営協力	美術学部彫刻科
佐々木 麦帆	展示設営協力	美術学部彫刻科
嘉村 哲郎	事務処理	芸術情報センター/情報発信・システム研究プロジェクト

APPENDIX:デジタルデータの目録リスト

5 年間の活動の中で整理したデジタルデータの情報を記述した目録データ一覧。

NO	ファイル名	対象ディレクトリ
1	アザー.xlsx	/AMC 講義/アザー
2	サウンドデザイン概論.xlsx	/AMC 講義/講義/サウンドデザイン概論/目録
3	デジタル・サウンド演習.xlsx	/AMC 講義/講義/デジタルサウンド演習/目録
4	芸術情報概論.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報概論/目録
5	2010 東京芸術大学芸術情報特論リスト.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録/原本データ
6	amc 講義データ 20114,2,20.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録/原本データ
7	AMC 講義録-DVD.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録/原本データ
8	AMC 特論に関する残りデータリスト.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録/原本データ
9	会計情報.xls	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録/原本データ
10	20150604_芸術情報特論.xlsx	/AMC 講義/講義/芸術情報特論/目録
11	情報プロデュース概論.xlsx	/AMC 講義/講義/情報プロデュース概論/目録
12	電子音楽概論.xlsx	/AMC 講義/講義/電子音楽概論/目録
13	インクジェットプロジェクト.xlsx	/AMC 講義/展示/インクジェットプロジェクト/目録
14	サウンドプロジェクト.xlsx	/AMC 講義/展示/サウンドプロジェクト/目録
15	AMC 展示.xlsx	/AMC 講義/展示/その他展示/目録
16	もうひとつの都市ソラリス展.xlsx	/AMC 講義/展示/もうひとつの都市ソラリス展
17	monoPJ 目録.xlsx	/mono project/目録
18	Web 公開用リスト.xlsx	/mono project/目録
19	20150106_掛図調査票　内容.xlsx	/解剖図撮影
20	インクジェットプロジェクト.xlsx	/技法材料/インクジェットプロジェクト/目録
21	サウンドプロジェクト.xlsx	/技法材料/サウンドプロジェクト/目録
22	crest_eizolist.xls	/技法材料/佐藤一郎 Archive/pre
23	20150217_crest_eizolist.xls	/技法材料/佐藤一郎 Archive
24	gizai_filmlist.xls	/技法材料/資料
25	大西先生アーカイブ.xlsx	/技法材料/大西先生アーカイブ
26	gizai_eizolist.xls	/技法材料/目録/原本データ
27	20150626_技法材料.xls	/技法材料/目録
28	Web 用リスト.xlsx	/技法材料
29	先端芸術表現科DVリスト2007年7月まで.xslx	/先端芸術表現科
30	20150522_20 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/20 年度/20 年度_目録
31	20150522_20 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/20 年度/20 年度_目録
32	20150518_24 年度.xls	/卒業・修了冊子関連/画像/24 年度/24 年度_目録
33	20150518_2013_卒業作品集.xls	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/24 年度/24 年度_目録
34	2015_0513_22 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/22 年度
35	20150513_22 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/22 年度/目録
36	20150513_25 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/25 年度/目録
37	H26 年度_図録データ.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/26 年度
38	20150522_H18-22 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/21 年度/21 年度_目録
39	20150522_H18-22 年度.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/21 年度/21 年度_目録
40	H26 年度_図録データ(論文).xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/26 年度
41	H26 年度_図録データ(論文).xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/26 年度データ
42	H26 年度_図録データ.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/26 年度データ
43	全体データ.xlsx	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/25 年度データ
44	H.24_20121217.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/目録
45	H23 年度.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/目録
46	H18-22 年度.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/目録
47	H18-22 年度 PDF 未掲載分追加.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/目録

48	2012 テキスト_120329 美教より確認.xls	/卒業・修了冊子関連/画像/23 年度/23 年度_目録
49	2012 テキスト_120329 美教より確認.xls	/卒業・修了冊子関連/画像/原本データ/23 年度/23 年度_目録
50	2012 テキスト_120329 美教より確認.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/美術教務よりテストテキスト卒業・修了冊子データ 2012
51	2012 テキスト.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/23 年度/東京藝大 11
52	作品・論文データ記入シート（全データ）.xls	/卒業・修了冊子関連/目録/原本データ/印刷業者仕様テストテキスト卒業・修了冊子 2011/23 年度（2011）
53	卒業者修士その 2 加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/卒業者
54	卒業者修士その 1 加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/卒業者
55	卒業者（別科）加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/卒業者
56	卒業者学部その２加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/卒業者
57	卒業者学部その１加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/卒業者
58	入学者（修士）その 2 加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/入学者
59	入学者（修士）その 1 加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/入学者
60	入学者（別科）加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/入学者
61	入学者学部その２加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/入学者
62	入学者学部その１加工用.xls	/大学史/大学史史 MO データ/統計表/入学者
63	seiyo.xlsx	/彫刻科
64	20150706_彫刻論.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録
65	20150624_彫刻論.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録
66	石膏取り.xlsx	/彫刻科/石膏取り映像/目録
67	20 年度彫刻論前期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
68	25 年度彫刻論後期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
69	26 年度彫刻論後期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
70	26 年度彫刻論前期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
71	彫刻論音声テープ目録.xlsx	/彫刻科/彫刻論/アルベルト・ジャコメッティについての矢内原氏講演/音声データ
72	25 年度彫刻論前期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
73	AA_ota_25.1.10.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻音声テープ（彫刻論）
74	24 年度彫刻論後期予定　.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
75	24 年度彫刻論前期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
76	23 年度彫刻論後期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
77	110719-彫刻科-映像記録リスト_講演会・ギャラリートーク.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ
78	110719-彫刻科-映像記録リスト_彫刻論.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ
79	22 年度彫刻論前期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
80	22 年度彫刻論後期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
81	23 年度彫刻論前期予定.xlsx	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
82	21 年度彫刻論後期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
83	21 年度彫刻論前期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
84	20 年度彫刻論後期予定.xls	/彫刻科/彫刻論/目録/原本データ/彫刻論日程表
85	目録リスト(集計).xlsx	/目録データ/目録データ
86	青い箱.xlsx	/目録データ/目録データ/写真類
87	音響映像 Vimeo ビデオ ID 一覧.xls	/目録データ/目録データ
88	岡田晋輔氏寄贈写真.xlsx	/目録データ/目録データ/写真類
89	20150106_掛図調査票　内容.xlsx	/目録データ/目録データ/写真類/解剖図掛図
90	吉本光蔵氏撮影日露戦争スナップ.xlsx	/目録データ/目録データ/写真類
91	大学史史料室ネガ.xlsx	/目録データ/目録データ/写真類
92	油画アーカイブデータ公開済みリスト.xlsx	/油画アーカイブ/目録
93	油画アーカイブデータ(油画科作成).xlsx	/油画アーカイブ/目録/原本データ
94	藝大 PV.xlsx	/藝大 PV2009
95	藝祭映像目録.xlsx	/藝祭展示/映像資料

APPENDIX: COMPOSITE ARCHIVE BOX 2015.09 第二版 7 冊 Version

APPENDIX: COMPOSITE ARCHIVE 2015.06 初版 13 冊 Version

東京藝術大学
総合芸術アーカイブセンター報告書 [2011-2015]
2016 年 3 月 31 日 発行

編集・発行
東京藝術大学 総合芸術アーカイブセンター
〒110-8714 東京都台東区上野公園 12-8
http://archive.geidai.ac.jp

印刷・製本
株式会社 風雅プランニング

COMPOSITE ART
ARCHIVE CENTER